









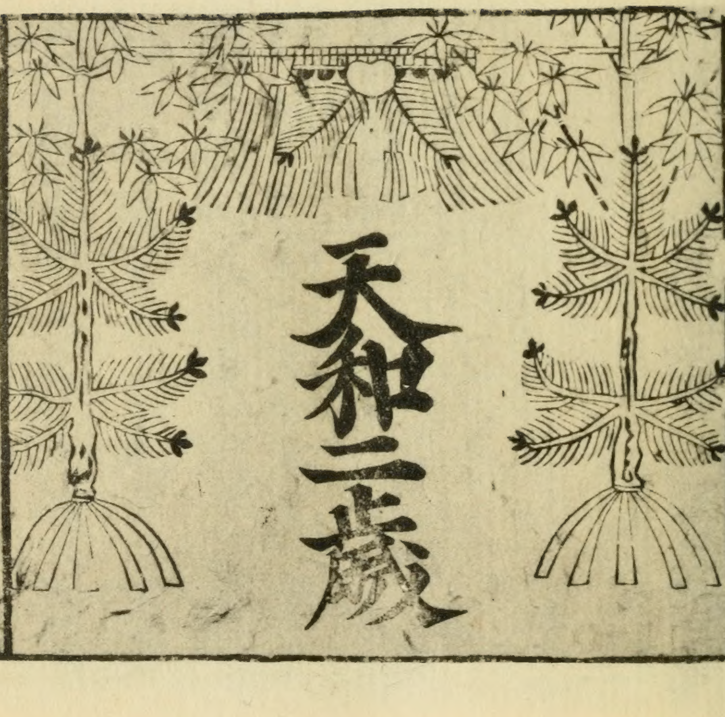


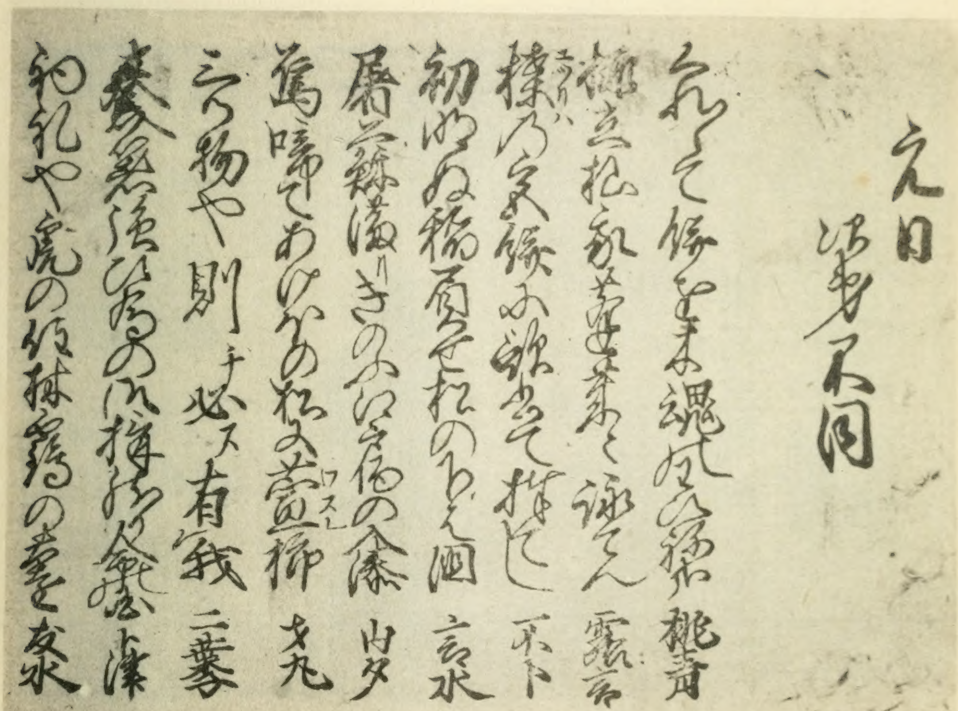
蕉門俳諧前集

装幀　津田青楓

歳旦發句牒

通油町
板木屋
又左衛





大道もまれとてしも春の色　東山氏　秀満

書初や今朝から梅のにほひ　竜然下　山學

御世之春やさまたれて長閑　一同浪花氏　露流

當初つて世中心新小寿朝　日生田氏　探酒

年男めでたくことふ太郎冠者　玉栄氏　牛学

写る若菜一天和合見給ふ　同　詩

極楽門中さら中ら御代の春　全

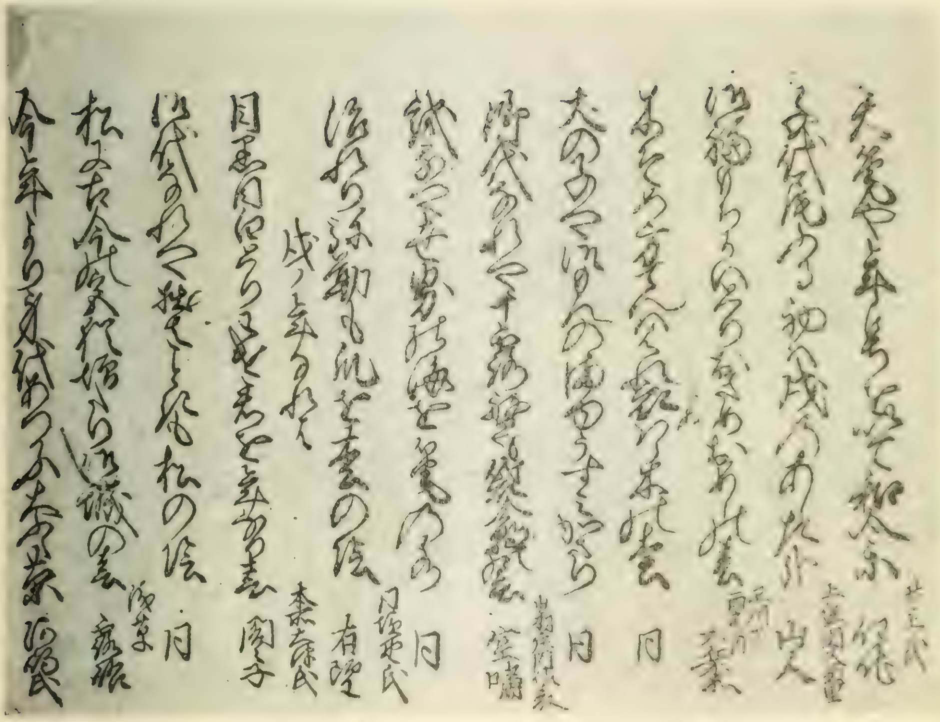
ゆつるて若葉山のはる霞　傳

さえかへてたはる日のまはれ　日

年徳やかはらぬ帯のかはり門　達

春の夜の庭さはかしき　求

長閑なる入相の鐘の年の暮　月



萬物本蒼天自奇
朝来初共禮春可
鳥啼風暖氷浮水
花發江南梅一枝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

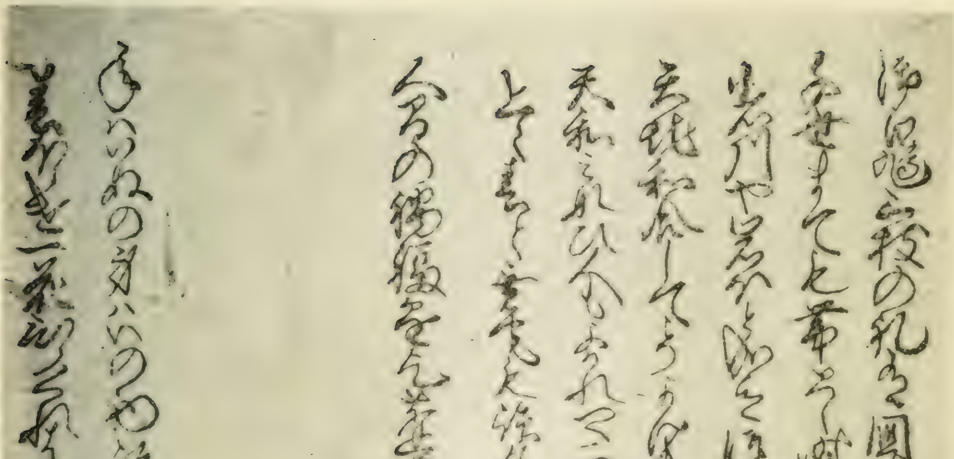
武江野夫 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



解題

歳旦發句牒　天和二年板　横本一帖

俳諧師として世間に附き合つて行くには、としぐ〳〵の歳旦帖を出さねばならない慣例であつた。その歳旦帖は貞徳時代の三つ物から起つたのである。承應元年家綱が年十一で徳川四代の将軍職に就いた元旦

御成人の君に來てあふや千代の春　貞徳
粧り竹にもわたるから鳥　正章
鍬入る苗代小田の土肥て　西武

貞徳師弟の發句・脇・第三を以て其の治世を祝した三つ物俳諧が恒例となつて、終にはそれを板行して、元旦の市中をふれ賣する三つ物賣といふ商賣さへ行はれたのである。此の歳旦發句牒は三つ物は一つもなく全篇發句ばかりで、やゝ異例である。袋とぢの三枚よりない疎末のものながら、表紙に門錺りの繪を刷出して、題簽の配置に工夫を廻らしてあるのが、板元の趣向であつさり凝つたところを見せてゐる。全篇の體裁から見れば卷頭の作者である桃青個人の歳旦帖らしく思はれるが、再考するに江戸の俳諧師を中心に諸國作者の寄せ句を掲げた中に、桃青門下の俊才として當時世間的にその名を知られた其角や嵐雪の作者を一人も載せず、却つて板元みづから卷軸にその句を据ゑてゐるので、表紙に通油町板木屋又兵衛と明記せる如く歳旦の賣ものとして開板したのであらう。それとしても言水や才丸のやう

な大家を凌いで巻頭に擧げられた桃靑は、聲望の漸く高き事が思はれて、天和時代の俳壇的位置を察知す可き一文獻として確に逸し難いものと云へやう。歲旦帖の體裁を傳へるために、特に原本のまゝ模刷して口繪に挿入することにしたが、製本の都合によつて幾分縮少を來したので、或は原本の味が思つたほど現はれなかつたかも知れない。

武藏曲　　天和二年板　中本一冊

撰者千春は大原氏である。通稱を彦四郎といひ、從弟千之と共に貞德派の俳人で、その師は重頼とも季吟ともいはれるが、後には談林の新風を喜び、京都高倉の二條上ル町に蘇鐵林とよぶ庵を構へて居たのである。「武藏曲」は千春が江戸に來つて諸家と風交せる俳諧を撰集としたので、巻頭に芭蕉翁桃靑の敬稱を以てその發句を掲げたやうに、主として芭蕉の周圍の人々の作を收めてある。季吟の序に「逍遙遊のおきな」とあるのは貞德の事である。芭蕉に逍遙遊と題する文章があるので、此の序文から季吟さへ芭蕉を翁とよんだといふ說は甚だしい誤解である。外題は江戸に行はるゝ俳諧の風調の意義で、

流石におかし褄折ル下女の武藏ぶり　　千春

と、撰者の發句が集中にあるので知れやう。

春・夏・秋・冬の四季發句及び歌仙・百韵を錄し、獨吟歌仙一卷を添へてある。芭蕉一門の俳諧が談林調に厭き、次韵の奇警に據らずして純蕉風の句境を拓かうとする第一の步みは、此の『武藏曲』から踏み出されたので、同じく天和二歲の『歲旦發句牒』と對照するならば、其の進展のいちじるしきに驚異せねばならぬ。板本は天和二年三月、京都の書

肆寺田重德に托して上梓したので、千春が歸洛後の開板であらう。文政十年其成の編輯した『芭蕉翁新七部集』（一名七部餘錄）に全文を覆載してあるが、撰者の千春は蕉門の作者といひ難いので、其成がこれを蕉門の遺著として扱つた事には同意されないが、內容から評すれば『虛栗』時代に延長さる可き蕉風的基礎を据ゑてゐると云ひ得る。

虛　栗

天和三年板　　中本二冊

開卷貧交行の擬作に接して、撰者其角の「紛々タル俳句何ゾ數フ須ケン」と喝破せる其の態度の昂然たると、全篇を通じて新舊作者が雜揉こそして居れ、新風開發の先驅者たる意氣と精神とに多大の感動を受けるであらう。『江戶俳諧合』及び『延寶廿歌仙』時代の螺舍其角にはその師芭蕉の俳風と同じく談林臭の附き纏ふをまぬかれないが、此の『虛栗』に至つては全く蟬脫して純粹な蕉門の選集である。蕉門の七部集は『冬の日』以後の諸集から選擇してゐるが、『虛栗』にまで遡らなければ蕉門俳諧の發展を研究し得ない。跋文に「芭蕉洞桃靑鼓舞書」の鼓舞は決して無意義の文字でないのである。春夏の二季を上卷、秋冬の二季を下卷に收錄して、發句並に連句を併せ揭げ、編輯の技巧も變化をつくした處に看取される。卷頭の作者幻吁は建長寺の太巓和尙で其角參禪の師である。集中「重陽三句」として嵐翁・芭蕉・嵐雪の三人の漢句は、連句の一樣式である漢和俳諧の發句で、たとへば

○ 有ニ蘭(ニホヒ)草(グサ)ノ菊(ソヘガミニ)宜(シトイヘ)止　　芭蕉

右の讀み方は「にほひぐさありそへがみによろしといへり」といふので、「止」とあるのは不審ながら、多分「宜」までにて「トメ」の意で附けて置いたのであらう。立圃の『小町躍』などにも此の漢句を發句として載せてある。芭蕉以後には殆んど其の例を見ない。天明七年板の『其角七部集』に覆刻せる本文は誤脫の甚だしいのみか、其角・芭蕉兩

吟の「詩あきんど」の卷の如きは、「飽やことし」の卷に大半竄入して、歌仙の體裁をなして居ない。本集所載本は天和板として採用した後に再刷本である事に氣附いたが、大體に於て初刷本に相違する個所がないものと認めたので、これを底本としたのである。

續虛栗　　貞享四年板　　中本二冊

『虛栗』以後急激な發展を告げた蕉門の俳諧は俊敏な其角を導いて、それより數年にして『續虛栗』甲乙二卷を撰集させた。虛栗時代は精神こそ既に純化したが、形式は佶屈躰を脫し切れないで、中途に彷徨しつゝある姿であつた。『續虛栗』に至つては形式・內容渾一躰となつて、典雅な蕉風調をなして居る。素堂の序に「風月の吟たえずして、しかもゝとの趣向にあらず」と詩歌の時と共に推移す可きを論ぜるは、よく此の傾向を語るものである。四季に類別して發句本位なるが如くして、連句を配置するを忘れず、編集の体裁は『虛栗』をその儘蹈襲して、續集の名に背かざる好著である。卷頭の作者任口は伏見西岸寺の善智識で、江戸殊に其角に接近せる人々の作を收むる事に努めてゐるが、時に貞德一派の作者をも加へてある。談林派では岩城內藤家の風虎・露沾父子を代表者として、しばしば『夜錦集』から採錄してゐる。同集は風虎子の撰である。芭蕉の『野ざらし紀行』の餞別歌仙及び惜別の發句は『句餞別』の草稿から採つたのであらう。澤庵和尙の「何もなし我頭陀袋夏衲」の發句なども見えてゐる。たゞ露荷・キ角の兩吟中に第四句を逸してあるのは疑問である。『其角七部集』には「此間一句不足原本ノマヽ」と欄外に註記してあるから、本集の底本とした西村市郞右衞門板のみでないらしい。西村板は表紙及び刷りの工合から見て再刷本と思はるゝが、『虛

粟』と同じく大体印刷本と異同ないものとして、すべて同書にある通り覆刻したのであるが、判讀し難い個所は『其角七部集』を照合し、勉めて正確を期したけれど猶誤讀あらん事を惧れて居る。

冬の日

貞享元年板　中本一冊

尾張熱田の檑木堂荷兮の撰である。貞享元年冬狂哥師竹齋の風狂に托して、行脚の杖を引いて來た芭蕉を招き、熱田の連中の興行した歌仙五卷と追加の表六句を擧げた小冊子である。許六・風國などが元祿時代に蕉門の第一書に推し、七部集の中で年代の最も古いために古人の註釋書も多い。虚栗時代の余響もあるの外言葉づかひ・言ひ廻しに難解なところが尠くない。古版本は今日存在しないが覆刻本によつて其の俤に接する事が出來る。西馬の『標註七部集』は校訂の行き屆いた點で良書として知られてゐるが、その『冬の日』と古版本の覆刻と對校すると、西馬が字句を改めたらしいので、底本としては覆刻本による方が原意に近いやうに思はれる。題簽の完全な覆刻本には「冬の日 尾張五歌仙 全」とあつて、曲齋の『七部婆心錄』に濫に振り假名を直したものは却つてあたらない處がある。「狂句こがらし」の卷の擧句の花の「居湯(フリユ)」は「するゑ湯」であるといひ、「初雪」の卷の「柿の蔕さびし」を「柿の塔」とせる如き曲齋說はむしろ非として斥けねばならぬ。振り假名の中に特に注意すべきは「童」に「ワラハ」と「ワツハ」の二つに區別をなせる事、「地」に「ツチ」と訓を施せる事などである。卷頭の

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉　芭蕉

たそやとばしるかさの山茶花　野水

此の發句・脇に對して第五の卷の名殘の裏に

水、干を秀句の聖わかやかに　野水

山茶・花匂ふ笠のこがらし　うりつ

を以て照應した用意を看逃してはならない。『冬の日』の貞享本の發見されない限り、本集の覆刻を信じて過誤を來す事はないであらう。

春の日

貞享三年板　　中本一冊

撰者は『冬の日』と同じく荷兮であるが、内容はそれと異つて歌仙三卷及び追加表六句を掲げ、四季發句を附載してある。歌仙の作者は尾張の人ながら、その座に芭蕉の加はらず、從つてその捌きと導きにあづからない卷なので、芭蕉研究者から疎外されてゐる。本書も貞享の古板の所在を知り得ないが、覆刻本は古板をそつくり摸刻したものと思はれるので準據してよろしからう。「餞」に「イエ」長男に「ヲトナ」の振り假名がある位で、『冬の日』よりは解釋に苦しめらるゝ詞句はない。芭蕉の「古池や蛙飛こむ水の音」が擧げてあるので、集の名が高く、題名も冬・春と對句になる爲め、兩書姉妹卷のごとく取扱はれてゐる。『冬の日』に對して連衆に新しい顏が覗いて居り、美濃大垣の如行の發句を載せてあるので、撰集の體裁が賑やかになつてゐる。曲齋の考證によると、七部集の覆刻本は題簽が別々に刷つてあるので、題簽の附いた本はやゝもすれば原板のやうに思はれてゐるが、一枚板に外題を刻つたものが書肆懷玉堂の藏から發見されて、それらは孰れも覆刻本である事が確實になつた。但し『春の日』は再刻の時載文堂に分與

したので外題校から除いてあると稱してゐる。

句餞別　　貞享四年稿　　中本一冊

江戸を立つて伊賀に向ふ芭蕉と別れを惜んで、諸家の餞別を手抄して置いたものを寛保四年に至つて開板したものである。目錄に揭ぐる如く詩・歌・俳諧の三者で、殊に嵐蘭の詩の形式をかりて俳諧の意を述べた一章は、率直な言葉を以て、その至情溢るゝが如き惜別の辭である。知友及び門人の發句は『續虛栗』に採錄されてあるので知れる通り、純然たる蕉風躰である。露沾子邸に於ける歌仙一卷並に四吟半歌仙一卷に添ふるに未滿の十句二卷を以てしてゐる。板元は江戸の書肆川村源左衞門で「續猿みのゝ例にまかせて、草稿のまゝ梓になしぬ」といふ奥書が附いてゐるが、芭蕉自筆の眞蹟は常陸潮來の本間自準亭に傳來し、嘉永元年『夏しぐれ』の題名で再び覆刻されたものが現存する。『句餞別』には祇德の跋に貞德・季吟・芭蕉三人の略傳を附錄してあるので、祇德が書肆に開板を勸めたものゝ如くであるが、『夏しぐれ』に照し合せると、送別の詩三章を逸し、目次も亦相違してゐる。本文の終に追記して置いたのでこゝには繰返さない。『夏しぐれ』の方が遺稿として價値を持つてはゐるが、出板年代の古さと、『句餞別』には虫喰ひの個所が一つもないので、これを底本に採用したのである。前記の如く『句餞別』は芭蕉の草稿であるから活字の飜刻本が早くあつて好い筈で、今日まで閑却され來つたのは研究の不便とするところであつた。本集によつて其の渴を醫するを得ば幸ひである。

千鳥掛　正德二年板　中本二冊

尾張の鳴海には貞享以後、芭蕉の頭陀を卸した緣故があるので、蕉門作者が多く住んでゐた。其のきもいりは酒造家千代倉の本家下鄕知足で、芭蕉のため何かと世話をしたので大に德とせられ、素堂の序に「此所は名護や・あつたにちかく、桑名・大垣へもまた遠からず。千鳥がけに行通ひて、殘生を送んと」といつた芭蕉の言葉を引用してゐる如くである。知足は此の言葉より思ひ附いて、芭蕉と其の一門及び知名の俳諧師の作を手錄し、『千鳥掛』といふ外題で板行しようとして居たが、終に果さず、寶永元年物故したので、其の子蝶羽が遺志を嗣いで健順二卷として開板したのである。開板は正德二年であるが、集中芭蕉の作の散見する部分は、貞享時代のもので『續虛栗』より『曠野』に移る過渡期の俳風を示してゐる。

星崎の闇を見よとや啼千鳥　芭蕉

貞享四年の冬、これを發句として鳴海の連衆の歌仙一卷を起筆に冬・春・夏・秋の順序で、連句を先づ揭げて、當季の發句を添へてあるが、發句の部は蝶羽の補遺せる如く芭蕉以後の作者が其の數に於て多勢である。冬の卷の「たび人と我名よばれむはつしぐれ」の詞は謠の節附を施してあつて、その道の人に聞くと充分謠へるさうである。芭蕉の戲れとして見ればその節附が一段の興趣を覺える。蝶羽の「笈銘」に熱田の桐葉は千代倉家の緣戚なので、芭蕉の旅中肩にした笈摺の桐葉の許にあるを懇望して、歿後筐として送られた由來を記してある。本文は寬政七年板の『續七部集』上卷に覆刻されてゐるが、底本には蝶羽の板行本を用ひたので、覆刻本の誤りは自然のうちに訂正された形になつてゐる。

蛙　　　　合

貞享三年板　　　　中本一冊

舊派の人は運座とよび、新派の者は句會といひ、多人數で課題なり席題なりを詠んで、特定の撰者又は互選制度で高點句を爭ふやうな遊戯は芭蕉時代に絶對になかつた。點取は行はれたが、それは連句の批點の優劣を爭ふのである。發句會と見る可きものは文政以後に起つたのである。芭蕉時代にはその代り發句合せといふ餘興があつて、發句を左右に分け、宗匠の捌きで或は勝負或は持と定めたのであるが、互選で此の句合せを催した事もあつた。『蛙合』は貞享三年三月、深川の芭蕉庵に於て門下の作者が衆議判卽ち互選で、左右廿番の發句合を行ひ、その可否を批評し合つたものを門人仙化が筆錄した書である。芭蕉の「古池や」は第一番の左に配されてゐる。發句その者も純蕉風の寂のある句振りながら、むしろ判詞に主力が灑がれてゐるので、よく注意して讀んで見れば蕉門作者の覘ひどころ、好んで用ひた言葉、藝術批評の後人をして理解せしむるところ尠からず、見方によつては蕉門の俳論は許六・支考の贅辯に存せずして、此の句合の判詞中に發見される事を知るであらう。「蛙」は「蝦」をも「かはづ」と呼び、「蟇」をも蛙の題として取扱つたらしく、第二十番の曾良の發句は疑ひもなく「蟇」を詠じたものである。撰者仙化は靑蟻堂といひ、江戸の人である。

罌　粟　合

元祿五年板　　　　中本一冊

嶋原亂後の責を引いて絶家した松倉藩の嵐蘭が、江戸で浪人生活中『延寶廿歌仙』の作者として知られ、蕉門全盛の時代に此の罌粟合の判者となつたのである。嵐蘭の序に芭蕉が近江の幻住庵に閑居して居たころ、去來はいと懇に

師をもてなして其の致旨をひろめた事が述べてあるから、多分その當時擧業の題にて詠じた諸生の發句を左右十二番の句合として、嵐蘭の許に寄せて其の判詞を求めたのであらう。嵐蘭は「僕蕉門に在事廿年」にして僞すところなく、徒に「月花に瘦て一句の秀なし」と謙遜してゐるが、蕉門屈指の俳人の句合に對して批評を試みた一事で以て、その力量の認められてゐたのを知り得る。同じ句合でも「蛙合」とは趣を異にして左右の作者が互ひに難陳し、その是非の決せざるものを判者嵐蘭が判きを附け、詳しき評言を加へた體裁に出來てゐる。催主は曲水・去來の二人らしく「曲水・去來に乞、若干載の子雲となれ」といふ序言でそれと察しられる。其角の『句兄弟』は蕉門の句合では名高いが、仙化の『蛙合』及び此の『罌粟合』を見れば一般を窺ひ得る上に、同一の人の撰集の多いよりは、別人のものを收めた方が編集の方針を立るのに都合がよいので、右兩者を採つたのである事を附記して置きたい。

曠野　　元祿二年撰　　中本三冊

朗詠集の部立を取つて全篇を八卷として四季の發句を收め、員外に歌仙十卷を附錄してゐる。此の部立の形式的なるを非難する者があるけれど、俳諧の撰集は疎雜なものが多く『曠野』の部立に遠く及ばないから、難ずる者の無理解といはねばならぬ。撰者は『冬の日』・『春の日』と同じく尾張の荷兮である。芭蕉はその一集の「いさゝか實をそこなふものもあればにや」と評して『曠野』に對し、期待するところあるが如き序言を書いてゐる。作者は蕉門ならずとも作品本位に、貞門・談林の徒と雖も採錄してあるので、『猿蓑』や『炭俵』より輕視さるゝ傾向のあるのは撰者に對してやゝ氣の毒である。流布本で見ると第一の卷に「杜宇二十句」とあつて句數は十九よりないので、元祿板

を入手して校訂したい考で、かねて捜して居つたところ、偶然疑ひなき元祿板を求め得て調べて見たが、やはり杜宇は十九句よりないので失望した。再刻本との異同は隨所にあるが、員外の越人・芭蕉の兩吟「雁がねも」の卷「人去ていまだ御坐の匂ひける」が再刻本に「法坐」と刻り損じてゐるのは疎漏も甚だしい。その他の誤脱は一々指摘しないが、本文は元祿板によつて訂正してある。季題の分類は芭蕉時代とその以後と相違するが、『曠野』の部立に注意して見ると、たとへば

月花もなくて酒のむひとり哉　　芭蕉

これは無季の句とされて來つたが、『曠野』には「花三十句」の中に入れてある如きである。全篇八卷の第五までは上卷、第六より第八までは下卷、員外は別冊となつてゐる。作者にも同名異人があるので肩書の地名附を等閑に見過してはならぬ。

曠野後集　　元祿六年板　　中本二冊

荷兮の『曠野』に後集の存在する事は研究者から見逃されて來たが、それは探訪の手の屆かない結果であつて全く散佚に歸したのではない。こゝに覆刻するものが其の忘れられた後集である。荷兮は芭蕉の晩年に勘當された說を流布され、その罪は『橋守集』を著して師を譏つた點にあるといふが、『橋守集』は元祿十年の板行である。芭蕉はその四年前に遷化したのだから勘當される筈はない。今『曠野後集』の內容を見るに幽齋より宗因までの古人の句を擧げ、序言に「たゞいにしへこそこひしたはるれ」と述べ、重賴が『毛吹草』にその句を卷頭に載せたゝめ『氷室守』から雜

じられたところの

うぐひすも哥機嫌なりけふの春　春可

を再び卷頭にかゝげ、貞德時代の俳風を慕ふが如き態度があるので、蕉門の徒から疑惑の眼を投げられ、勘當說ともなつたのであらう。『曠野後集』は部立といひ、作者といひ、『曠野』に對照して格段の相違はない。依然として蕉風躰の俳諧である。全篇八卷、四季發句及び名所旅・釋教・無常・述懷・雜・戀・神祇・祝の部を立て、歌仙五卷並に半歌仙二卷をその中に挿入し、尾張の蕉門を中心として撰集されてゐる。『猿蓑』の句境を探らず、『炭俵』の輕みを求めず、蕉門の流行躰に不關焉として『曠野』の境地を守れるところに、尾張蕉門の地方色を存續してゐるとも見られるのである。後集の元祿板は大橋圖書館の藏本を發見して、板本のまゝ透き寫しに取つて置いたのであつた。震災の結果原本は灰燼となつたので、透き寫し本の字躰不明瞭な點を校合するによしなく、二三疑問の個所があつたが全く止むを得ない。

其袋　元祿三年板　中本二冊

芭蕉をして「門人に其角・嵐雪あり」と世間に誇らせた其・嵐二子の性格に就いて、其角は豪放である、嵐雪は温厚である。さういふのが俳諧史の通說であるが、私的生活を觀察すると嵐雪も、ものに拘泥しない方で、或は其角より放縱であつたかと思ふ。撰集のやうな煩はしい仕事はあまりしない。『其袋』がまづ其の代表作である。外題の意はいろ〳〵の袋をあけて「其袋」は月花のかけ、しぼみたるを收めて「我家の祕藏ぶくろとす」と序文に說明してゐる。

おれにいはしや先御代をこそ千々の春　季吟

輕口にお道化て見せた非流行的の卷頭を据ゑて、四季發句及び歌仙七卷を收載してゐる。芭蕉は北國行脚の句作をなり〳〵消息したと見えて、夏の部に數句掲げた中の詞書に「所の夷もおし入て」と出雲崎渡を夷の國の如く、卑しめてある言葉が何となく際立つて聞える。作者は江戸の人が多いけれど、伊丹の鬼貫や伊勢の園女の發句の割合に散見するのが目に立つ。奇人かしこ坊の作も隨所に見える。四季發句以外に技巧本位の物の名・廻文のやうなものまで載せてゐる。其角の撰集の如き趣味の多方面なる點のない代り、肩の凝るやうな鹿爪らしさもない。何處までも洒々落々たる江戸蕉門の撰集である。『猿蓑』以前の特色を發見し難いのは撰者の人柄によつてゞあらう。享和三年板の『七部拾遺』に收載されてゐるが、その女の肩書に「伊勢一有妻」とあるのを落したりして、感心されない覆刻書である。井筒屋本は手許にないので西村板の再刷本を底本に用ひたが、本文に異同はない筈である。

俳諧勸進牒　　元祿四年刊　　中本二冊

みづから乞食と稱して耻ぢない路通が、觀音大士の夢想に

霜の中に根はからさじなさしも草

此の句を得て、俳諧の勸進を發企して元祿三年十一月廻國の旅に就いたのである。其の勸進に應じた人々の俳諧を翌年春江戸に於て撰集し、京都の井筒屋に托して開板したのが本書である。路通の自序、冬・春・夏・秋の順序にて四季の發句を錄し、旅中羽黑山にて會覺阿闍梨の發企せる句合を判ぜるもの十八番を『月山發句合』と題して上卷に收め、少年龜翁が其角の『花摘』にならひ、一夏百句の吟稿を掲げ、その勸進にちなみある歌仙九卷を採つて下卷とし、狂而堂其角の跋を添へてある。路通の乞食は芭蕉の書翰で見ても其の前身をよべるものゝ如くであるが、勸進始の俳

諧は近江の曲水亭にて其角も一坐して行はれ、江戸に赴いては露沾子から召され、溜池の藩邸にて餞別の會を賑かに興行せられなどして、乞食どころか、たゞの俳諧師では思ひも寄らぬ待遇を受けてゐる。此の勸進牒二卷は路通が蕉門俳人として世間的交渉の廣く、句作の技倆の優に一家をなせる事實を明瞭にするものである。原本はさして稀覯のものでないが、今日まで一回も覆刻された事のないため、路通といへば凉袋の『頭陀物語』に小說化された墮落者である如く誤解されて來たのである。本集に收容して此の書の內容を示すのは、間接に路通に關する寃をすゝぐ結果となる事は疑ひないであらう。

いつを昔

元祿三年板　　中本一冊

一名を「一講番匠」とよぶ事は湖春の跋に其角云として、詞は同じながら一句に巧めば其の姿の變ずるところ「これ番匠たるものゝ器量ならずや」とあるので了解されるが、本外題は

新月やいつを昔の男山　　其角

の句から出たのであらう。去來の「定」は蕉門俳諧の制札といふ可き嚴肅味を持つてゐる處、さすが俳諧奉行として許された去來ならでは書けない。全篇は四季類題によらず、十題百句・交題百句及び三ツ物並に歌仙四卷の配列を取つて、その部立に一趣向を見せてゐる。『續虛栗』より更に渾成された其角の句境を知るばかりでなく、『猿蓑』の俳諧に接近しつゝ蕉門作者の傾向を察する上に浮雲氣のない足掛りでもあり得る。

秋色女の「巾習ひに」とある前書附の三句はその處女作であらう。女らしきつゝましさで卷末に置いてあるので興味を覺える。『其角七部集』には本書を除いてあるので、明治以前覆刻されたものを見ない。

作者はあながち江戸の人と限らず、近江及び京都の蕉門の徒が散見するので、紙數の僅少な割に内容が充實してゐる。其角の著として特色あるものである。

華摘　元祿三年板　中本二冊

其角は母妙務尼と貞享四年四月八日に別れた。年は五十七である。

身にとりて衣かへうき卯月かな

五元集にある哀慕の句である。母方の姓榎本氏を通稱した其角は亡母の俤忘れられず、元祿三年のその月その日、芝上行寺の墓前で、「灌佛や墓にむかへる獨言」と手向け、祇公の日次の發句にならひ、一夏百日の結縁をおもひ立つて、此の華摘の句稿に筆を染めたのである。その百日の起居と日毎の句作を記し、見聞する句々をそれに附け添へた俳諧日記である。上卷は五月廿九日までゝ特殊の記事としては羽黒山本坊で興行した芭蕉一座の歌仙と、洛の去來から文通の折に寄越した俳文「鼠の説」を掲げ、非人三藏から俳諧の點を望まれ「あまさかる非人貴し麻蓬」の句を奥書として與へた事などである。下卷は六月潤日から起つて七月十九日に滿願の筆を擱いてある。伊勢の國で狐の無筆の男に憑いて「仁あれば春も若やぐ木目哉」の發句を詠んだり、父の病になやむ時、ぜひなくも或會に呼ばれ「秋といふ風は身にしむ藥哉」の句によつて本復させたといふやうな俳諧の靈異記めいた記事がある。「たんざく、かゝせらるゝ迷惑さを」といふて

葛の葉の赤い色紙を恨哉

とあるのは古今同一轍の迷惑さであらう。結願の後に歌仙六卷を附錄し、山田筍深の漢文の跋がある。蕪村の『新花

摘』はその眞似に過ぎないが、其角の感化の後世に及ぼした其の一つといつて好い。

ひさご　元祿三年板　中本一冊

撰者珍碩は濱田氏、後に洒堂と號した近江膳所の人である。本文は歌仙五卷を收むるのみであるが、『七部集』の一書として行はれ、それに對する註釋もかず／＼あるので著聞してゐる。天明二年板の「俳諧諸集訂誤」は、歌仙の二の卷に

いろ／＼の名もまぎらはし春の草　珍碩
うたれて蝶の夢覺しぬる　翁

とあるのが初刷本であるが、支考の「二十五ヶ條」に「名もむつかしや」及び「夢はさめぬる」とあるを見て、再刷の時書肆のさかしらにて入れ木をして、後者の如く刻り直したのであるといふ事を考證してゐる。流布本の『七部集』は懷玉堂本及び寛政七年の再刻本の二種であるが、「諸集訂誤」に指摘した再刷本はそれより以前のものらしいので、元祿板を底本として流布本の訂誤をしたく思つたが、見る本も見る本も悉く此の歌仙は流布さるゝ通りなのでぜひなく再刷本によつて覆刻する事とした。「諸集訂誤」にもそれ以後には難じたところがないので、他の四歌仙には異同ない事と思ふ。越人の序を見て「ひさご」の撰者を越人とする說は「江南の珍碩我にひさごを送り」のその序をすら見落した僻說である。

猿蓑　元祿四年板　中本二冊

蕉門の俳諧は『猿蓑』がその頂上であるとの通說は容易に動し難い。幻住庵の山居より湖畔の無名庵にかけて止まる事約一年、芭蕉が風雅の道にその精神を徹した時代、洛の去來・凡兆の二人が、入集する句々に就いて論難をかさねて師の決斷を求め、漸くにして共撰の功を遂げたものである。其角の序に「此道のおもて起すべき時なれや」との豫言はたしかに的中してゐる。その序文の次に第一卷の冬の部を置き、第二卷は夏の部、第三卷は秋の部、第四卷は春の部で、孰れも芭蕉一門に限られた發句を擧げ、第五卷は芭蕉の必らず一坐して捌いた歌仙四卷を載せてある。第六卷は芭蕉の幻住庵記、向井震軒の後記、幻住庵に於ける「几右日記」の發句を抄出してゐる。跋は丈草である。全篇六卷を通じて芭蕉の內閱後、北向雲竹の門人と稱さるゝ書家正竹に筆耕を托して、京都の井筒庄兵衛方から元祿四年出板せられたのである。それと同時に『猿蓑文集』を出す計劃で、去來がその編纂に着手したが、凡兆の文章の芭蕉の意に適せざるものがあつて見合せ、草稿は去來から許六に傳へられ、『本朝文選』の材料となつたのである。許六の門人冶天の『横平樂』に文集稿本の師の歿後讓られた事が見えてゐる。『猿蓑』も亦寛政以後の覆刻本が行はれ、元祿板と推定さるゝものは寥々たるものであるが、本文には甚だしい誤脫がないので、いはゆる七部集本によつて差閊へのある事はない。註釋書としては樨柯の『猿蓑逆志抄』が詳しく、且つ曲齋の『七部婆心錄』のやうな曲解は尠ないやうである。

元祿百人一句

元祿四年板　　中本一冊

百人一句の嚆矢は重以の寛政七年板行した大本の『百人一句』である。同十一年重以は『綸入新百人一句』を出したが、前者に倣つて不角が『百人一句後集』を編集して以來鶯鄉女の『女百人一句』に至るまで、類似の俳書がいろ〳〵

行はれてゐる。此の『元祿百人一句』は近江の流木堂江水の撰で、作者は貞門・淡林・蕉門の諸派に渉つて一人一句づゝ、百人の發句が輯めてあつて序文は大垣の木因が寄稿したのである。

　　また年の睦月もいはへ千代の江戸　　季吟

を卷頭として卷軸には

　　先たのむ椎の木もあり夏木立　　芭蕉

があり、人物とその句の選抄は公平に近い。江水は蕉門の作者に接近してゐたので、他門よりは自然にその數が多いのである。作者目錄には本集に洩れて諸國に聞ゆる人々を京・江戸・大坂・伏見・伊丹・近江・尾張・美濃・伊勢・若狹その他の住所別として人名丈けを擧げてゐる。見方次第では元祿俳壇の鳥瞰圖となるので、句集としての價値よりは考證材料としての便益が多いであらう。跋に「期後集」とあるが、果して出板せられたか否か知り難い。

北の山　　元祿五年板　　中本一冊

加賀金澤の卯辰山のほとりに柳陰軒を構へた俳僧句空の撰である。金澤の蕉門は細道行脚の杖を此の國に廻らして牧童・北枝の兄弟をはじめ、萬子・秋の坊・小春の連衆によつて起されたので、句空もその一人である。外題は白山春細の發句

　　うらやましうき世の北の山櫻　　翁

から取つたので、同じく此の句から附けた可吟の『浮世の北』は元祿七年の板行である。句空は近江に旅して無名菴の扉をたゝき、芭蕉の直指を受け、丈草・去來の高弟に導かれて俳道に精進したのであるが、本集によると江戸へ歸菴

後の木曾塚の舊草を訪ひ「すてゝゆく庵見よとや遲櫻」の句を詠んでゐる。北陸蕉門の撰集では元祿四年板の『卯辰集』があるけれど、『續七部集』に收めてあるので、未覆刻の本書を以てそれに代らせたのである。作者の肩書にある箬の住所附は俳名の下に小書きしてあつて、板下の古雅なる事掬すべき上に句々よく洗錬されたものを選んでゐる。芭蕉の「山櫻」を立句として句空・去來の兩吟半歌仙と、四季の發句を類題別とせずして不用意に記載してある。

己が光　　元祿五年板　　中本一冊

己が火を木々の螢や花の宿

螢の名所勢多・石山へ、大阪から川舟で車庸・之道の二人が吟行して、たま〳〵芭蕉の詠み殘せる發句として宿の者の告げたるを感じて、その夜來合はせた珍碩の「螢見や茶屋の旅籠の泊客」を立句に、同席の膳所の人々と八吟歌仙を行ひ、芭蕉の句より題名を以て本集を板行する事となつたのである。撰者車庸の序と、ありし夜の螢の句々、旅店即興の連句をあげ、郭公の發句及び同じ題の四吟歌仙及び芭蕉の伊賀にて行へる歌仙一卷を錄し、春・夏・秋・冬の順にて諸家の發句をあつめ載せて追加に四吟歌仙を添へてある。大坂には車庸と後諷竹と改めた之道が純粹の蕉門作者であつた位で、芭蕉生前にはその俳風は一向に振はなかつたので、この集の如きも膳所の連衆が主となつて、それに諸國からの寄せ句を輯めた如き體裁をなしてゐる。芭蕉は前年十一月江戸深川の庵に戻つたので、門下の者の訪ひ來るもの多き事が、其角より消息があつて「都出て神も旅寝の日數哉」と詞書に見えてゐる。

俳風弓　　元祿六年板　　中本一冊

題签に「奇なるかな是誹魂」と小さく二行に割註してあるが、奇に過ぎて內容に交渉がない。壺中は七部集の類にその作を見ないが、その別著『こがらし』に芭蕉に師事して、わづかに一年にして別れた悲しみを述べてゐるから晩年の芭蕉門人である。此の「弓」の時代から師事したのであらう。團水との兩吟があり、團水の發句を錄してあるので、はじめは談林系の俳人であつたらしい。本集は四季發句・歌仙三・百韻一・半歌仙一を載せてある。冬の部に壺中・一至の二人、淀船にて京を下り、一の谷の古戰場を懷古し、須磨・明石の浦々をさまよひ、播州へ赴いた吟行がある。一至とは仲のよい吟友のやうである。『猿蓑』以後の集に所載さるゝ句の乏しい凡兆の作を見受けるは珍らしい。集中の作者の蕉門に限らず、無名の人が多いのは、壺中の俳道に入つて日淺き事を語つてゐる。外題の「弓」は自序に「神力の大弓をひいて」とあるが弓に緣ある文字で、その他に因みを求めるやうな記事も發句もない。標題の好奇心をそゝるほど內容に特色のある集ではないと思ふ。

桃の實　　元祿六年板　　中本一冊

備前の人、櫻井兀峰は江戸の藩邸に勤番中、蕉門の俳諧に志を寄せて、芭蕉の捌きで五吟歌仙を行つたりして撰集の意圖を抱いたのである。芭蕉の「草庵に桃櫻あり」とて門人の其・嵐二子をたゝへた言葉に感激して「かゝる翁の句にあへるは人々のほまれならずや」と羨み、二子の桃の發句を卷初にかざり、『桃の實』と題して本集を出板したのである。「夏題十五」と置いて其角・兀峰の句合を判詞のないまゝで載せ、「雜玉」として諸家の發句を四季別にかゝげ、

「第三迄」に兀峰が江戸の俳人と發句・脇・第三の三ツ物俳諧をあげてゐる。俳諧小話ともいふ可きものゝ中に洛の信德の「不二に添ふて三月七日八日かな」の句を感じ、其角・路通・好春の句計に率直な情を敍べ、風の荷兮の逸話を記してあつて趣味ある編集である。嵐雪との兩吟半歌仙二卷と

水鳥よ汝は誰を恐るゝぞ　兀峰
白頭更に芦靜也　翁

の歌仙を最後に添へ、芥舟の跋文を附してある。闌更は安永四年に「其むかし、ひとつの桃の實ありけるが、中頃西王母が袖にかくれて世に知らざる事年ありけり」と本書の再刻を試みて、『七部拾遺』に拾錄してあるが、元祿本と對校すると漢字・假名をみだりに直したところが多く、原本の体裁を忠實に傳へたものでない。

藤の實　元祿七年板　中本一冊

風羅念佛を唱へて廻つた風狂人惟然が素牛と號した時代の撰集である。

藤の實は俳諧にせん花の跡　芭蕉

と、大垣の旅店にて師より授けられた發句を題名にしたので、正秀の序に家一つを三つに仕切つて四疊半に欠け鍋・煤け行燈の貧生活に堪へて、本集を思ひ立つた事を記してある。秋・冬・春・夏の逆順にて蕉門作者の發句と其の季別毎に歌仙一卷づゝを添へ、西川親長の後序を附し、京都の井筒屋から出板したのである。後序によると元祿五年の編集であるが井筒屋の目錄にて出板は同七年なる事が知られる。『猿蓑』以後の蕉門俳諧は『炭俵』にあらずして、本集に存するといつても過言でない。惟然坊の口語本位の俳諧に對しては極端な罵倒を敢てした許六の如きも『藤の實』は

「中々頃日の集に似たる物にもあらず」と感嘆し、「これは師在世したまふ光也」と許してゐる。許六の說では此の集は洒堂の後見で、文章もその俳諧を扶けてゐるらしいとあるが、文章の「仲秋觀月賦說」の文章といひ、洒堂一坐の連句といひ、許六のあたらない事はないが、惟然自身の力でこれ位の集のつくられない害はない。惟然といへば單なる風狂人と見るのは彼を輕視するも甚だしいといはねばならぬ。珍碩後ち洒堂の「ひさご」は除いても『藤の實』を七部集の一書に加ふ可きである。「去來抄」の下卷「修行敎」に芭蕉の敎示を受けた。

妻よぶ雉子の身をほそうする　去來

に、本書「木の本に」の卷にある附句なので、許六の「師の手傳とは見えず」といふ說は誤解であらう。

炭俵　元祿六年板　中本二冊

素龍は序に此集の撰者孤屋・野坡・利牛は常に芭蕉庵に出入し、ある夜

金屛の松の古さよ冬籠

の口吟に感じて、天地の二卷を編集する事となつたと說いてゐる。序は元祿七年五月であるから、芭蕉が上方行脚に立つて後、板行に附されたのであらう。芭蕉・野坡の兩吟及び歌仙二卷と百韻一卷を篇首に置いて、さて四季發句の部となり、更に歌仙四卷を附錄せる部立が、慣例の發句から連句に移るそれと趣向を異にしてゐる。元祿板は京の井筒屋と江戸の本屋藤助との共板で、題簽に乾・坤の二卷としてあるので、再刻本とは明瞭に區別し得る。「七部集」のなかで「輕み」の新流行躰として後人に喜ばれた集なので、覆刻を重ねて幾多の異板を見るが、「炭俵」の卷の第三

番匠が樫の小節を引かねて

といふ孤屋の附句の「椴」が幾様にも書かれてゐる。曲齋は「原書樅を樫と過りしを諸書樫・椴と誤つたり」と註記してゐるが、それこそ曲齋の勝手な獨斷であつて、元祿板には判然「椴」とあり、曲齋の底本としたらしい寛政本も亦「椴」である。訓み方で特異なものは「ざまく」「ぢゝめく」は孰れも濁點を施し、「暑病」は「あつやみ」であり、「産」は「よろこぶ」であつて片假名を振つてある。「門で押るゝ」「門しめて」「門建直す」の「門」は「かど」か「もん」か、その讀み辨を疑はれてゐるが、「門建直す」には音讀の符牒である—を右傍に附して「門」とあるので、「もん」と讀ませた事が判然する。印刷本のあり難さはさうした微少なところまで正確に考證さるゝのである。「炭俵」の輕みとは發句の事でなく、連句の調子とその運びにあるのである。連句に無理解な研究者のおち入り易い點なので一言云ひ添へて置く。

市の庵

元祿七年板　中本一冊

『ひさご』の撰者珍碩は元祿五年九月、近江から江戸へ旅立ち、芭蕉庵の客として吟席に出た折の歌仙をまとめて、『深川集』を板行したが、『七部集』に比肩す可き書といふので、『續猿蓑』を除いてこれを加ふる人もある。其の『深川集』は『續七部集』に編入されてゐるので、珍碩改め酒堂が元祿七年大阪に假の庵を構へて、

難波津や田螺の蓋も冬ごもり　芭蕉

右の發句を師から送られて『市の庵』と題せる本書に收容したのである。諸家の發句と歌仙三卷を載するに過ぎないが、『炭俵』の輕み以後の風調をよく傳へ、蕉門俳諧の推移とその傾向を暗示するところがあるので、『深川集』とは別な意味で推重してよい内容を持つてゐる。殊に閏五月廿二日の「落柿舍亂吟」は芭蕉が血脈を相續させた高弟との六

吟歌仙で、充分の推敲を重ねたものであるから、今後の研究を促して置きたい。大阪の作者が散見する事も、芭蕉生前の諸集には見掛けない點である。

別座鋪　　元祿七年板　　中本一冊

よもや師弟の顔の見納めとならうとは豫感しない江戸の子珊は、旅近き師芭蕉をその別屋に招いて、暫しの別れを惜みつゝ俳諧の進む可き道などを問ひもした。芭蕉は淺い砂川のやうに句の形や付心のさらさらとして輕き躰を好むことを教示したので、

紫陽草や藪の小庭の別座鋪　　芭蕉

の即景を立句に五吟歌仙を行つた。それを餞別の卷として、別に連句四卷を添へ、夏季の發句を取集めて一冊となし『別座鋪』の題名を附けて伊賀に歸つた芭蕉の許に書き送つたのである。此の餞別は子珊・杉風等の深川に寓居せる連衆の催しで、曾良は箱根まで見送り「ふつと出て關より歸る五月雨」の句を詠んでゐる。『炭俵』の序者素龍は一篇の文章を寄せて芭蕉との交情を述べたが、これ亦卷末に載せてある。此の集の覆刻本は寶曆二年京都の橘治から出てゐるが、元祿本とは字句の異同や誤脫があり、桃隣の新宅を賀して芭蕉の描いたといふ牡丹の自畫贊を一枚挿入してある。

其便　　元祿七年板　　中本二冊

長崎の通事である泥足が上方及び江戸の蕉門作者と接して行つた俳諧を一集として、洛の井筒屋から板行しようと

した際、芭蕉のたま〳〵大阪に來れるをその旅寓に訪ひ、特に一卷懇望して此の集に載することを得たので、芭蕉の生前撰集されたものはこれが最後である。其角の序・嵐雪の跋がある。其角は一日その庵中に呼び迎へ泥足の「唐人が風いのる也星まつり」を發句に一歌仙を催し、嵐雪また長崎みやげのめづらしさに「新月の心ばえ也唐煙筒」の句を寄せなどして、歌仙・半歌仙・表の諸形式より成る連句十四卷を收め、四季の發句を上下の二卷に配置してあるので、頗る賑やかなる編集である。加賀の千代女がその夫に別れての閨中吟として、川柳子からは「お千代さん蚊帳が廣けれや這入らうか」と揶揄され、又獨逸のフローレンツ著『落葉』に獨譯された發句が、『其便』にては「物おもふ比」といふ詞書で、

起て見つ寐て見つ蚊帳の廣サ哉　　浮橋

とあつて遊女の吟となつて居る。千代以前の集にかくあるのだから、作者は此の浮橋に違ひない。撰者の泥足は宗因・元順の古躰のみ行はれた長崎にあつて「予が撰集に眼をひらき」と其角の序にいへる如く、蕉門に歸したのは此の集の前後であらうが、

額ぬき合ふ中間の際　　泥足
其時のいはれを隱すうしろ疵　　且水

のやうな元祿の世相・人情を觀察して巧みに題材とした附合も發見されるので、相當の技倆を持つてゐた俳人と思はれる。

續猿蓑　　元祿十一年板　　中本二冊

江戸の能役者沾圃の撰撰したものを芭蕉の刪正し、猶未定稿として伊賀の松尾家に殘つてゐたのである。井筒屋からその開板を頻りに懇請して許諾を得たので「何人の撰といふ事をしらず」と奥書に記してあるが、支考の手の入つてゐる通說も否定はされない。越人は『猪早太』に支考の僞撰と稱してゐる。併し同門許六はこれを信じて「江戸にて保生沾圃をすゝめ、續猿蓑を手傳して伊賀に歸る」とその著『歷代滑稽傳』に明記し「俳諧の風躰は續猿蓑に終る」とさへ斷言してゐる。上卷は芭蕉の捌きに成る沾圃一派の五歌仙及び支考の「今宵賦」を前文とした體裁の一歌仙を以て充て、下卷は春・夏・秋・冬・釋敎・旅・に類別した諸家の發句を錄してある。井筒屋の奥書に「書中或は墨けし、あるひは書入等のおほく侍るは草稿の書なればなり」と注意せるやうに、處々にその訂正の痕を存してある。「門の書つき」の「き」の左傍に「ヽ」と墨消しの符號を附け、右傍に「け」を添へて「門の書つけ」と改めたる例の如きである。「畑」を「畠」「顏に」を「顏の」「蟷螂や」を「蟷螂の」などもさうである。落字は「尾張でつきしもとの名になる」の「と」を脫したので「も。(と)の名に」といふ風に。を入れて、その右に「と」の字を補記してあり、後に加入したものは行間に小さく割込ませてある。正秀の「火の消て胴にまよふか虫の聲」もその例證となる一つである。「いせの斗從に山家をとはれて」の前書は「まつ茸や」の句にあるが、これは竪に二本の筋を引いて抹殺し、それより八句目の「蕎麥はまた」の句に狹く割註になつてゐる。越人は此の添削を以て、逆に支考の瞞着手段であると罵つてゐるがそこまで疑ふのは邪推に過るやうである。

枯尾花　　元祿八年板　　中本二冊

元祿七年九月大阪の旅寓にて病み、門人の介抱を受け、花屋裏に移居して間もなく十月十二日遷化した芭蕉の追善

集である。折よく大阪に來合せた其角が一門に代つて其の埋葬所義仲寺の牌位下にて「芭蕉翁終焉記」を認め、十月十八日義仲寺で興行した追善の百韵、

なきがらを笠に隱すや枯尾花　　其角

を題名に充て、諸家の悼吟、江戸にて營める追善の三歌仙、十一月十二日嵐雪・桃隣の二子が入洛して、丸山量阿彌亭にて行へる一門の百韵を順次筆錄してある。其角の「終焉記」は後人の僞作なる『花屋日記』の骨子となつたもので、『笈日記』の記事と共に芭蕉の傳記資料として最も正確な記錄とされてゐる。『枯尾花』二卷は芭蕉の死に直面して蕉門の諸子が嚴肅な氣分を以て、哀慕の情をそれ〳〵その作に傾注したものであるから、やがて分立對抗す可き諸家の風調の自然に渾一されてゐるので、芭蕉生前の撰集に比して遜色なき內容を有してゐる。明治になつて覆刻された永機の『元祿枯尾花』に、原本の追加全部を省略してゐるのはどういふ理由であらう。

覆刻は、すべてその底本として用ひたものに據つて、假名づかひその他一切本文のまゝである。難解のものは假名には漢字を註し、漢字には平假名を振つて讀み易からしめてある。原本の振り假名は片假名にて施して區別したが、句讀點及び濁點は兩者を區別するによしなく、大方は新に施したものと承知されたい。

（勝峯晋風）

日本俳書大系　第二卷　蕉門俳諧前集　目次

武藏曲

千春撰

あながちにも辭せず。天和二年三月　誹諧の花の時、錦帳のもとに洛下季吟かきぬ。

武藏曲序

今はむかし、逍遥遊のおきなといふものあり。細河のながれに和哥水をくみながら、老のさゞなみ高波をこえて、滑稽のしまにせうえうして、つゐに其じまもりとなりぬ。予ちなみにそのしまぶりをとふに、おきなこたへていはく、此しまは世界のまんなかなれば、其ふりもあまりに上手過るをきらへり。上手過れば初心に歸る。あまりに山のおくに入て、叉さとちかきがごとしと。予此名言をきゝ得て、門人にも子孫にもまことに、其まんなかをとれとのみ下知をなせり。此武藏ぶりをみるに、其下知を得しものもまじはれり。そのほかもをのづと彼まつたゞなかをとり得て、句ごとの意味あまり過ず、にが過ず、諸人に用ひて万病圓なるべし。あだかも蓬萊の不老丸、佛土の阿伽陀藥にもをとらじかし。撰者はたれとかする。蘇鐵林の千春先生、江戸の同志の吟友をあひもよほして、此三惢をあつむめりし。予に序をこへり。予も彼上手過るをきらへる万病圓を、京中日本國にあたへまほしき心ありて、

武藏曲

春

梅柳さぞ若衆哉女かな　桃青

梅咲ツ松は時雨に茶を立ル比　杉風

櫻同じ扇の尻に開ル日　三峰

酒のわび芝蘭分入かりき哉　似春

芝の蜑の白魚咲ぬ磯ざくら　四友

　白魚露命

月と泣夜。生雪魚の朧闇　其角

涅槃像お靈屋の石も泣にけり　仙風

　池上偶成

池はしらず龜甲や汐干ス心　素堂

けふ汐干餌切し舟の刻をとふ　千春

　目黒眺遠

遠浦小船鰹に見たし花涼見　共流

けふ花のかゝしと出ぬちぎれ笠　橤堺

名盛や作鰹五郎花さだめ　其角

櫻狩遠山辛夷うかれ來ぬ　嵐蘭

　山はえむ富士。水に玉川の風流を汲んで

流石におかし櫻折ル下女の武藏ぶり　千春

柴にかへけん蕨蜂が籠の忘レ見　曉雲

夏

草の雄や螻獨いそぐ郭公　藤匂子

夜ル閑の夢ぬ寐覺や郭公　橤堺

時鳥旦夕。里さび燧うつ比　嵐雪

郭公まねくか麥のむら尾花　桃青

草の戶や犬に初音を隱者鳥　其角

鰹迄はめじかもあるを郭公　而已

鳥恨り櫻の敵杉の妻　千春

夕しそに宮城野立ぬ風の露　爲道

長明と車相似たり蝸牛　四友

覆盆子取女棘袖引にひかれきや　嗒山

夕皃の白ク夜ルの後架に帋燭とりて　芭蕉
ひるがほの宿冷食の白くなん咲ける　曉雲
砲碌を蝿とり塚の哀レ哉　峽水
舟あり川の隈ニ夕涼む少年哥うたふ　素堂

秋

うかれ行月網笠の窓ヲ家として　角止
侘テすめ月侘斎がなら茶哥　芭蕉
盞ナ漕ゲ芋を餌にして月ナ釣ン　曉雲

涙の時雨のふたりこぐ
ひとりはぬれぬ二挺立哉

闇の夜は吉原ばかり月夜哉　其角

信濃催馬樂

君こずば寐粉にせん しなのゝ眞そば 初眞そば　嵐雪

秋夜話ニ隱林ー

雨冷に羽織を夜ルの蓑ミノならん　其角

茅舍ノ感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　芭蕉

ひとりねの記泪アメ此夕べ寄ス芭蕉ニ　狐落
梧桐の秋埋レ井の蓼つれなしや　藤匂子
傘を人に帆かくる野分哉　昨雲

詠ス含テ恨ヲ呑ルノ聲ヲ意ヲ

砧キヌタナ呑ノム涙や卑夫の私語ささめごと　千春
螻の吟折節の秋の雨夕べ也　楊水
鰹の時宿は雨夜のとうふ哉　素堂
酒の聲ナキ月は寄テ爐ニ鳴ル栗ノ　才丸
賣ルとうる山ノ路か夜ルの栗折籠カヽヘ　槊塒

冬

九折ル幾店下の百しぐれ　四友
蘇鐵鳴て老母フモトの蚌は霜の笑草　卜尺
茶の鹵居炭の黒人を侘名也　其角
海しらぬ山賤や海鼠やく夕べ　嵐蘭
人消て胡馬雪を鳴ナク山路哉　槊塒
雪の卦や二陰生ズル下駄の跡　皷角
雪辱ヘツカし夜ルかつらぎの鏤姿　曉雲

雲路ふかく水仙刈つ夜の鰒　言水

紀行に富士を嬉しむ

姫の嶽ふせごに雪の衣白し　千春

芭蕉の閑をさふ

扉凝(イテ)付て氷の心かくれ庵　昨雲

深川冬夜ノ感

櫓の聲波ヲうつて腸氷ル夜やなみだ　芭蕉

花摘丈人の身しりぞかれしは、いづれの江のほとりぞや。佛は教し宿に先立て、こたえぬ松と聞えしは、誰をさひし心ぞや。閑人閑をさはまくすれど、きのふはけふをたのみ、けふもまたくれぬ。

行ずして見(ミ)五湖煎蠣(イリガキ)の音を聞　素堂

樽うた

鉢たゝき／＼　曉がたの一聲に
初音きかれて　初がつほ
花はしら魚　紅葉のはぜ
雪にや鰒を　れざむらん
おもしろや此　樽たゝき
れざめ／＼て　つれならぬ
世を驚けば　年のくれ
氣のふるう成　ばかり也
七十古來　まれなりさ
やつこ道心　捨ごろも
酒にかへてん　樽たゝき
あらなまぐさの樽扣(たゝき)やな

凍(コゴエ)死ぬ身の曉や樽たゝき　其角

大根牛房世ヲすゝぐ也年の淀　千春

米つかず餅つかぬ宿は、みづから清貧にほこる。

臼寝て閑(ヒマ)なる年の夕べ哉　似春

三唫哥仙俳諧

生船や櫻雪散ル魚氷室　藤匂子

金涌の郡豐浦の春　千春
新芝居宜してうつしけん　其角
檢ー非ー使の族喧ー嘩預ル　句
何者か輕口巾たる月に　春
芋ぬす人の夕くれしを　角

ウ

鐺疵の茄子に殘る暴風哉　句
日怒雨からすらむ　春
夏犬の身をもゆるげに舌垂レて　角
此娘うかくとやつるゝ　句
夜ルと夜ル鬮もる伯父を恨みけり　春
東路や。智惠習にやる　角
武藏野も恪やならん汚草　句
命ひとつを千々の白露　春
お手かけと扈從と秋の月いづれ　角
戀すから酒宴躍終日　句
散盡スあらし。花淸の根太落て　春
青陽の工國を鋸ギル　角

名

富士山を買てとられし片霞　句
江海西に數寄殿チ設ク　春
上代の傾城玉を眞砂にして　角
親仁のいへらく戀忘レ松　句
朝起を塒の鳥のうき程に　春
曇ル日の嵐鰹見て參レ。　角
隙役者つれぐ獨り閑て　句
舊友やつこ零落ス半バ　春
滴クも否と禁酒宿に袖ぬらしけり　角
袈裟に切さく賤の捨網　句
尺八の名に水馴竿月チ吹ク　春
舞ハ芭蕉まひ薄舞　角
山路分ク菊に羽織を打着セて　句
首とつて偖霜を悲しむ　角
當御臺心から身を凩也　春
地獄現在鐘し覺ずは　句
花鉾チ振て甲を盞に諷ふ　角
齒朶矢にすゝむ羽子板の栢　春

藤句十十二　千ミ十二　其角十二

錦とる都にうらん百つゝじ　麋塒
花ざくら二番山吹　千春
風の愛三線の記を和らげて　卜尺
雨双六に雷を忘るゝ　曉雲
宵うつり盞の陳を退りける　其角
せんじ所の茶に月を汲　芭蕉
霧輕く寒や温やの語ヲ盡ス　素堂
梧桐の夕孺子を抱イて　似春

ウ
孤村遙に悲風夫を恨ムかと　昨雪
媒酒旗に咲を進ムル　言水
別るゝに馬手は山崎小鏡寺　執筆
猶ほれ塚を廻向して過グ　麋塒
袖裲に忘れぬ草の哀折ル　千春
小海老爪白母を慰む　卜尺
悴たる鷺の鬘チ黑やかに　曉雲
捨杭の精かいとり立り　素堂
行脚坊卒都婆を夢の草枕　芭蕉
八聲の月に笠を揮ク　其角
味噌樽にもる露深き夜の戸は　言水
泣ておのゝく荻の小女　昨雲
妻戀る花馴駒の見入タル　似春
柱杖に虵を切ル心春　千春

二
陽炎の形をさして神なしと　麋塒
帋鳶に乘て仙界に飛　曉雲
秦の代は隣の町と戰ひし　其角
ねり物高く五歩に一樓　芭蕉
露淡く瑠璃の眞瓜に錫寒し　素堂
蚊の聲氈に血を含ムらん　言水
夜ヲ離レ蟻の淵より旅立て　卜尺
槐のかくるゝ迄に歸り見しはや　似春
匂落ツ杏に酒を買ところ　芭蕉
強盜春の雨をひそめく　昨雲
嵐更ケ破魔矢つまよる音すごく　千春
鐵の檻に餅荷ひける　麋塒

木の五器頭巾(トキン)に帯て夕月夜　曉雲
猫口ばしる荻のさは〱　素堂
ウ
あさがほに齋(ノツキ)まつりし飀姫　言水
藏守の叟(きな)霜を身に着ル　芭蕉
此所難波の北の濱なれや　似春
紀の舟伊勢の舟尾張船　麋塒
波は白浪さゝ波も又おかし　素堂
傾城に袴着せて見る心　曉雲
今宵年忘。戀の栄を盡スらん　其角
柊が枝に小哥たてまつりける　昨雲
庭稲荷椴(モミ)に隱れて仄(ホノカ)なる　ト尺
いたらぬ役者藝冥加あれ　千春
豐さはぎ院に日待をもよほされ　芭蕉
霞の外の權田樂をなん召ス　素堂
紫の鷁を花に折しきて　言水
しだのみ荒し楪(ユズリハ)の宿　其角
三
去年(ウラ)の月の三十日の月くらし　曉雲
雪ものぐるひ筆を杖つく　ト尺

山鳥の音に羽ぬけ子や尋ぬらん　千春
鶴の箔(ヘク)衣(キヌ)ありし俤　似春
夢に入ル玉落の瀧雲の洞　昨雲
日を額にうつ富士の棟(ムネ)上(ゲ)　芭蕉
松髪の祖(ヂ)父(イ)蔦上下に出立て　麋塒
城主に靈(レイ)の蜜柑獻ズル　嵐蘭
或ト(ウラ)に火あての鰹生かへり　峡水
旅小刀の吼(ホエ)脱(ヌケ)て行　曉雲
世捨木や世捨の松に名を朽て　其角
からすの衣堤にくらし　素堂
橋(キヤウ)上の番太は鐘を恨みたる　嵐蘭
西瓜はしらず潮滿らん　千春
ウ
露くだるしだれ角豆の散柳　曉雲
月は築地の古キにやどる　麋塒
遁世のよ所(そ)に妻子をのぞき見て　芭蕉
つぎ哥耳にのこるよし原　峡水
歩(カチ)別レ馬は待らん榎(エノキ)陰　其角
百姓の家に入て腹切ル　嵐蘭

是此年先祖の榾の火の消ヌ　昨雲
時ならず米に生る菌　千春
雨を聞て放下の村に閑なる　素堂
燕尾小勝が墓に落くる　曉雲
衣裝草繭出る翠紅に　麋塒
雪ふゞき茶や花の端つゞき　其角
御池漕扈従の渡守しばし　峡水
薫ふるふか水引の簑　昨雲

名

張雀鳴子〱におどろきて　麋塒
無情人秋の蟬　嵐蘭
月は問フ山寺殿を離に　其角
石風呂の跡は哀ありける　素堂
箒木の茂きは鍬に夭せられ　千春
今其とかけ金色の王　峡水
袖に入蝸夢を契りけん　芭蕉
涙の玉あり明ケ将レにかはかず　麋塒
我聞ケり鈍士は胸の中黒しと　昨雲
閣思君境町に溺るゝ　其角
肩を踏て短尺とりに立躁グ　曉雲
奥にての御遊隔レ塀ヲ戀　芭蕉
篝火を刀に掛て忍ぶ山　嵐蘭
浪は井積にかくす落人　千春

ウ

物あらふ盥をふせて暮る程に　峡水
藍搗臼のごほ〱し聲　麋塒
市賤の木びらを負る木陰には　曉雲
日傘さす子と嫗と男と　嵐蘭
玄關にて神樂をまふけ給ひけり　昨雲
夜と共てらす袋挑灯　素堂
花の奥盗人狩に泊して　芭蕉
八重〱霞飛行小天狗　其角

麋塒十一　似春五　千春十
昨雲十　卜尺五　言水五
曉雲十　筆一　其角十一
嵐蘭六　芭蕉翁 桃青十一　峡水五
素堂十

武城之春在乎寛永寺之花來
看者突逢推合不啻雷轟湯沸
也顏付否而目遣怪令點不行者
烏論衝乎其間而剪巾着取
鼻吊灑勃込長鞘引掛破衣
者蓋浮世士也歟不下尻揭不
設敷物群居于堂陰打敲
珍露利以撓滑歌信亦無餘
念也夫美而艷者如何名未之妻
耶團褶蛇爇猩緋與七八腰
本歡笑諧々焉窺之者莫不目
迷心慌矣乃賦

蘇鐵林　千春

酒の衛士花木隱れや女守
　柳にほれて硯うる兒
朧笠の袖に初音や盗むらん
　小夜〳〵嵐寐忘れの宿
頭巾ふかく月のあやなき闇着る
　松烟ひとり茶粥すゝつて

乾鮭に足生ありく雨夕
　天井既雷鼠轟く
店護左り大黒右夷
　常盤の夫婦有けらしける
世世トセズ琴によく琵琶にたくみ也
　風詠一首鹿の角にゆふ
萩の染飯蕣の晏に狩昏て
　人油の哀れ烟る野の露
月は瀬ゝ紙漉川に影かゝる
　盥に乘る子淺游せよ
鯨切汀は蛩の呼聲や
　太布衣の朽まさり行袂
床机振り祭侘のあぢきなく
　伽羅吹く翠簾の命凉しき
御廊下に螢の禿に夜過て
　首とりひしぐ西瓜怪物
唐秬の赤熊分る角薄
　砧の皷笛おほせ鳥

桂こぐ更科丸の最中哉
　吉原山にとくさ刈其
麻衣獨り賤屋の浮名哥
　綿摘娘垣間見にけり
豆腐賣ル聲を時雨につたへ來て
　釣にうかるゝ鴨千鳥川
蜊むく蠣の小家のあまた數
　下機音の波を織ルけに
白雲の都をかどはされ出て
　うき身ナ鳴か郭公殿
花と苅ル麥より奥のよし野山
　西行うこ木翠添らむ

天和貳彌生上旬

京二條寺町
寺田重德梓

虚栗（みなしぐり）

上・下

其角撰

嚙古人貧交行之詩吐而戯序ス

翻手作雲覆手雨
紛々俳句何須數
世不見宗鑑貧時交
此道今人棄如土

凩よ世に拾はれぬみなし栗　晋其角敬

虚栗集

改正

禮者敲門しだくらく花明か也　幻吁
賤よ春餅に蔦はふ宿ならん　三峯
初えぼしかざりの床やむら鳥　玉尺
先伴に太山おろしや門の松　殘詞
春柴に負葩木深き宿を山路哉　翠紅
餅焼て富を知る日の轉士哉　嚶坍
句ひねたり今年廿五ノ翁　文排
髭隱るやと蘚にかざす籔柑子　杉風
いでや春地なし小袖のかいとりせる　信德
月は更科もあれ我蓬萊の朝日守　友靜
釋迦迯て彌勒進まず國の春　春澄
山松やうらの籔より今朝の春　千之
六尺袴着て塵見歸らじ松の門　千春

春どに松は食くふて年ふるや　卜尺
春得たり人たり殊に男たり　楊水
春何と凧のごまめ時雨の海老　嵐蘭
餅の室根深を蘭の薫り哉　嵐竹
海老臥龍餅をうがつに玉あらん　北鯤
屠蘇ふらば傘すてん若時雨　楓興
朝明のはつねの關や竈守　李下
餅の島ごまめの白蛇眠りけり　洗口
初禮や富士をかさねて扇狩　枳風
代ナ様々銀池に鴻の觜鈍し　仙化
民の戸や松に餅さく百代　柳興
初なぎやしらけの嶋の空榧　嗒山
花中せ吉野三味線國栖鼓　才丸
　烟の中に年の昏けるを
霞むらん火々出見の世の朝渚　似春
　天和三年
　試筆
鶴さもあれ顏淵生て千々の春　其角

身の正月ナ屈原が醉　嵐雪
花に行秋はさびしき男にて　藤匂
　其二
浦島をあやまるや世の若戎　同
鹽鯛は死ナもつて祝はれ　其角
芹炊ぐ盞は夢の器　嵐雪
　其三
今朝春の奥（孫もあり彦もあり）栂富　同
杖こゝろむる梅のかけはし　藤匂
三線の及第蝶の冠して　其角
とゝはやす女は聲若しなつみ哥　嵐雪
芋室の雪間や寒き下若菜　言離
玉うどのうつくし萓の早苗の薄緑　杉風
情うるや都は雪のはつよめ茶　勝延
　何故溪邊双白鷺
　先憂頭上亦垂糸
髮あらふ鷺芹とかす澤邊哉　其角

小袖着せて俤句へ梅がつま　同
追鳥や梅枝に鳥をたすけたる　千春
うぐひすのよぶかあやしの薢賣　翠紅

鵠日不浴白
烏日不黔黒

川鳥白うを浴せずして白し　楓興
漁消てしらぬひの佃魚白し　全琴
浪ヲ燒かと白魚星の遠津瀉　嚶塒
雪を染て白うを流せ冬菜川　嵐朝
白魚は朧にて海雲を晴ル丶篩哉　翠紅
しら魚の昔汀の鷺の消かへり　心棘
梟朽て釘の角ぐむ芦べ哉　黄吻
芦のあやしく蝸牛を角のかきほ哉　忘水

在原寺ニて

美男村の柳はむかしを泣せけり　鼓角
うぐひすを魂にねむるか嬌柳　芭蕉
假に風女裾かさうか雨柳　杉風
昭君の柳をさんや塼かな　才丸
柳たれてあらしに猫ヲ釣ル夜哉　木因
むらつばめ柳におつる柱かな　四友
川風に夕日やすかすつばめ網　藤匂
柳にはふかでおのれあらしの夕燕　嵐雪
傘にねぐらかさうやぬれ燕　其角
袖つばめ舞たり蓮の小盞　曉雲
聲北におもかげのみか白鷺　羊角
行雁や見のこす麥の花盛　在蒾
友嘶ふ駒の勞やすらん雲雀笛　野笛

女にかはりて

なれも戀猫に伽羅燒てうかれけり　嵐雪
愛あまる猫は傾婦の媚ヲ假　才丸
戀守や猫こさじとは箱根山　東順

不生不滅の心を

海棠の鼾ヲ悟れねはん像　其角
蘂立ヲ折てさとるに早し涅槃粥　言水

寒食

木食も香爐に烟なき口なり　皷角

寒食の日旅人たばこに飢つらん　藤匂
寒食や簷下に猫の日を怪しむ　キ角
俤か貴妃のなやめる朧月　四友

春雨偶興

春の餅かびて嵯峨のゝ秋と誰　共流
烏賊のぼり反て野守の鏡かな　工迪

三陽

醴に桃裏の詩人髭白し　其角
薪ヲ匂ふ山吹の粥　李下
榮泉の蛙小判に身をよせて　柳興

其二

けふぞ背子土圭の舟に花かつら　同
さゝ波うたふ蝶の釣竿　其角
風心扇つばめやくるふらん　李下

其三

俗の謂うどは廬山の桃の時　同
蕨は筆を握つれ〳〵　柳興
春雨を三とせ敵に囚はれて　其角

雛ヲ抱てうたゝね桃に契りけり　其流
宵月の花のかどりや夜遊雛　藤匂
桃園の猫かひさらせひな車　露章
ひなに雛て胡葱のうら亂しな　松濤
雛若は桃壺の腹にやどりてか　學白
龍田姫そめけん雛のから錦　子堂
雛丸が夫婦や桃の露不老园　羊角
汐干潟海鹿の野馬見て行ん　卜尺
汐干くれて螺が裾引なごり哉　嵐雪
漁夫出て三ヶ月ひろふ汐干哉　立志
夕ばえや金をなげて蜆蛋　以貞

憂方知酒聖
貧始覺錢神

花にうき世我酒白く食黒し　芭蕉

眠ヲ盡ス陽炎の痩　一品
鶴啼て青鷺夏を隣るらん　嵐雪
童子礫を手折ル唐梅　其角
月ヲ濁す汀の蓼ヲ芦刈て　嵐蘭
浪のさゞれにたなご釣影　筆
琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし　一品
朝にえぼしをふるふ紙衣　芭蕉
浪人の戀するを詰おぼしめす　嵐雪
やぶの一夜に入ルかひぞなき　嵐蘭
散さくら同じ宗旨ヲ誓ひける　キ角
藤は退之が肝魂ヲ奪　一品
雷鳥のはつねは觜ヲ鳴ルならん　芭蕉
汐てる海に鰹孕る　嵐雪
傾城の鏡を捨し神代ヨリ　一品
羽をりに角をかくす風流雄　其角
化しの人棺ヲ出て草の月　嵐蘭
破蕉誤ヲ詩の上を次ク　嵐雪
朝鮮に西瓜ヲ贈る遙ナリ　芭蕉

つくしらぬひの松浦片撥　一品
めづら見るあげや〳〵の萱庇　嵐雪
蚤は私の盞をのむ　嵐蘭
櫛入レぬ影は六十の荆にて　其角
御所に胡座かく世ヲ夷也　芭蕉
人の恠異穂長の宵の嬰子畢ク　一品
松田くひなき雪の曙　嵐雪
きたなしや陣中に似せ餅かく　キ角
山ン野に飢て餅を食ル　嵐蘭
盗ミ井の月に伯夷が足あらふ　芭蕉
とくさは武士の憤草　キ角
見ぐるしき艶書をやくや柴杝　嵐蘭
笑ひさんやに歸ル魂　一品
曉の寐言を母にさまされて　嵐雪
つゐに發心ならぬ也けり　芭蕉
花に栖廬山の列をはねたらん　其角
柳にすねて瀑布ヲ酒呑　嵐蘭

詠懐

花に今頼政が哥を知身哉　露沾
我杖に秣かふべし花の山　幻吁
身は里に麥待花の日數かな　似春
雨花ヶ咲て枳売の怒心あり　麋塒
伽羅は鈍し浴堂の花に干鬘　露章
花酔鳥故山にねぐら忘けり　云笑
にくしとて惡を後の峰の花　四友
余所に男薄暮に花をみる男　杉風
あみ笠刀うき世つたふか花見猿　嵐蘭
狂といへ花人が合羽日照傘　千春

吉野藏王堂にて

片足は花の塵いとひ給ひけり　千之

雨

廬山の夜上野は花の畫ならん　楊水
山は笑む上野東の美人ならん　才丸
落花雨美人の化粧流し也　一東
花は楚地雨のなごりや腐足袋　洗口

七賢の自畫に

花と世を竹にそげたる翁かな　樵花

軀不花死不休矣

於屍花と流るゝかばね哉　嵐蘭
簑着たる樵子いつの花の虹　露宿

惜花不拂地

我僕落花に朝寐ゆるしけり　其角

代樵

彫笛縫簑花に晴せんうき世哉　其角

小町の像讃

おことこそ風狂亂の姥ざくら　宗因
美をにくむ心のさくら若衆哉　文排
就中女に戀そゝのかすさくら哉　藤匂
いはゞ云べく問人に須磨の櫻賤　露章
匂ふらんけふ去人と山ざくら　枳風
殿は狩姿餅うる櫻茶屋　嵐雪
畫の君うつゝと咲り夢櫻　杉風
橙のときはにくしや山ざくら　利久

遊人去て晝のさくらを舞狐　子堂

目黒松隣堂にて

うき世木をふもとに咲ぬ山櫻　其角
梨花さらに柿のはに蝶すだくらん　嵐蘭
海棠やうき世美人の空ねいり　樵花
たんぽゝよ口おしの花の和物や　九十
たんぽゝや春とはぬ宿の忘れ菊　山店

さんや吟行

詩を加賀にやはらぐ蛙かな　楓興
角田川哀は田にしつむ野かな　文排
麥食に野守菴かせ田にし狩　寸鯨
田にしふむ影生憎ややもめ鳥　拾螢

御局の春興

下仕して夜をおぼろげの豆腐召ス　雪叢
さすかかりきみがきもやらで夕月夜　四友
茶の花の盛や水司が袖のかはく程　柳興
蝶ちりて茶の花や入あひの鐘　翠紅
小雨けり蕗をしとゞのかくれ傘　露章

あさつきよ香を懐しみ妹が里　小寺紫荷
仙家にはわさび摺らんそてつ原　鳳尾

山吹や无言禪師のすて衣　藤句子
腕を薪の飢の早蕨　其角
子路が廟夕べや秋とかすむらん　同
其きさらぎの十六日の文　句子
花鮎の鮨のさかりを惜む哉　同
樽伐なりとひゞく杣川　角
金減す我世の外にうかれてや　仝
緼袍さむく伯母夢にみゆ　句子
ひだるさは高野と聞しかねの聲　同
心鼠は晝の灯をのむ　角
あさましき文字の賊衣魚と成　同
小袖をさらす涼店の風　句子
夕闌て宮女の相撲めし給ふ　同
夭盞七ツ星をちかひし　角

月兮月兮西瓜に劍ヲ曲ケル　同
弓張角豆野に芋ヲ射ル　句子
里がくれおのれ紙子のかゝしニて　同
なじみは離ぬ雪の吉原　角
米の礼暮待文にいはせけり　同
初木がらしを餝ルしだ寺　句子
曉の閼伽の若水おとかへて　仝
巖も餅はかびけりの春　角
獵師をいざなふ女あとふかく　角
なみださがしや首なしの池　句子
ぬれ具足芦刈やつに剝れけん　同
婆靼にわたる島おろし舟　角
鳥葬にけふある明日の身ぞつらき　同
寐ざめ語りをきらふ上﨟　句子
殘る月戶にきぬ〴〵の哥ヲ書　同
蕣の朝粧ひ髮ゆふてやる　角
蜩の虚勞すゞしく成にけり　仝
雨母親の留主を慰む　句子
烟らせて男の立テ茶水くさし　同
入あひ迄を借ル座敷かな　角
蝶居士が花の衾に夢ちりて　同
佛にけがす薹立の露　句子

改夏

ほとゝぎす正月は梅の花咲リ　芭蕉
待わびて古今夏之部みる夜哉　四友
山彥と啼ク子規夢ヲ切ル斧　素堂
ほとゝぎす春朴の葉に隱しや　嵐蘭
忍び音や連歌ぬす人子規　翠紅
ほとゝぎす敷寐や淀の寶舟　千之
半日の下戶。閑居にたえず子規　千春
錦帳の鷄世を草の戶や郭公　嵐雪
誰か謂し南天の花の時郭公　信德
枸杞莚幾日干らんほとゝぎす　藤匂

身は後月郭公忘レ竿　杉風
子規芋まだ青き月夜かな　李下
郭公はるかに蜀の新茶哉　才丸
錦その涙に洗ふべし郭公　才滴
ほとゝぎす瓜くはぬ里に習ひけん　一蜂
曉の釣瓶やすめよほとゝぎす　濁子
冥途には秋や待らん郭公　中村如菴
夏桃や伏見ときけば郭公　東順
郭公羅紗の毛衣かへしけん　松緑
雨ヲ聞夜月化けらんほとゝぎす　勝延
花めでたく柳はと郭公　四友
子規木がくれなりぬうどの杜　調和
鼻毛刈人にきけとや子規　其流
清く聞ン耳に香焼て郭公　芭蕉
點滴ヲ硯に寄也ほとゝぎす　キ角
我句人しらず我ッ啼ヶものは子規　同
姿旦夕て卯花に文ヲよむ女　言水
晝ばかり卯花さかぬかきほ哉　才丸

蟾ヲをふんで夜ル卯の花ヲ憎けり　其角

四月十八日即興

僞レル卯花に樽を蕾きけり　千之
鰹をのぞむ樓の上の月　其角
この比の裸をにくむ秋の風　同
さゝ立波に鹿梁もる露　之
藏庇菊を南に見え晴て　同
葉越はあらぬ蘇鐵一かぶ　角
佗ゝて笠に詩ヲ着ル朝時雨　之
吳の旅衣酒をかたしく　角
水糒西施が影をこぼすらん　之
蘭にふれたる紫の汗　角
寐語の小杉音なく宵過て　之
さみだれ座敷蛙這來ル　角
佳人も志賀の古城やよむかし　之
石山の秋ノ月三井の晩鐘　角
尺八に棹さす露の丸木舟　之

遊子おどりの國ヲ導スル　角
花日ゝに老は娘の手を引て　之
　松ある隣羽かひに行　角
百千鳥轡が仕着せ綺羅やかに　同
　雨なかだちて燕ヲ假ル　之
年咄し今宵廬山の夜に似タリ　角
　毛-吹崑-山に名を晒スラン　之
木がらしに浪士の市の佇　角
　回火消の霜さやぐ松　之
經よはる御魂屋のきりぎりす　角
　夕べは秋の後鳥羽さびしき　之
秬の葉に涙をあまる夷衣　角
　まゝ子鳥の寐に迷ふ月　之
盗人をとがむる鎗の音ふけて　角
　胴の間寒き波の夜嵐　之
年と日と賤のつま薪よみ盡ス　同
　うさきを荷ふ越の山業　角
劍術を虚谷に習ふ時は　之

有下朋自二遠-方一來ルコト上　同
花に粮空嚢に錢をはたくらん　角
　蛤虎-ゝのやまぶきヲ燒　同

麥刈嫗に物いひて

若麥やむぐらのために亂けん　自悦
忘るなよ麥の穗風の初うづら　卜尺
青さしや草餅の穗に出つらん　芭蕉
麥莚なびきていつか賤のつま　藤匂
ゆふかけて青麥白し氷雨祭　嵐朝
麥にかなし薄に月ヲ見んまでの秋　キ角

贈ル二一鐵ニ一

赤や鰹命あらば我も魴　藤匂
頂し雪の河鮠を弔ひけり鰹　雷虫
こひしきや蓼をむぐらの塩鰹　嵐竹
妻鰹の卵の中のめぢか哉　其角

水あり驛にさへば
しのはすが池

菖ナル左我その去年の鰷やらん　一晶
香ヲ折ルの坐頭や牡若あやめ　擧白
誰世にか治郎身投しかきつばた　露沾

重伍　廿五句

菖把に競山中を乘ルならん　擧白
粽をしばる鬼の尸　其角
龍ノよぶ白雨乞ヒの跡荒て　松濤
御歩みかろき雲の山橋　白
錦干ス木の間の月のすて胄　角
葛の茵に猿疵ヲ吸　濤
露をへて鵃舊都に歎きけり　白
漁笛はあれど瑟しらぬ蜑　角
忘れ松娘がうはさ云出て　濤
馴ぬふくさを敷て旅寐し　白
倚ある不破の關屋の小哥哉　角
むかしを江戸にかへす道心　濤
藤柄の鉦木をとても重からぬ　白
破蕉老たる化ものゝ寺　角
蠏ひとり月ヲ穿ッの淋しげに　濤
詩人の餌の鱸魚ヲ憎シ　白
花ヲ啼美女盞を江に投て　角
なびくか否か柳もどかし　濤
世は蝶と遁心思ひ定める　白
骨牌ヲ飛鳥川に流しつ　角
三線ヲ十市の里に聞明ス夜ャ　濤
あらしな裂そ夫尋ね笠　白
祖母はせく樵は流石哀あり　角
徳利ヲ殺す是雪の咎　濤
春ヲ盗ム梅は破戒の其一ッ　罔兩
鈴虫をのぼりに付て寐ぬ夜哉　藤匂
菖刈鶉のうき巣や坐雨　樵花
軒ばふく鶴の床草鎌ふかし　云笑

しら雲や富士の峡より江戸幟　長吁
ちりめんを簑のけしきか菖妻　才紫
世のあやめ見すや菰の髑髏　嵐雪
粽かはん驛(ムマヤ)にとめて鈴のぼり　其角

片田のうらのやすさらし
川岸に臼のならびたるを見て

うき桶や行〳〵て波の晒(サラシ)臼　自悦

おとづれければ
時鳥の二聲三聲

五月雨の端居古き平家シうなりけり　嵐雪
五月雨けりな小田に鯉とるむら童　藤匂
瀟湘の夜(ヨ)や夜鰹の五月雨　柳興
覆盆子折田哥のがさじ五月簔　露章
いちご折娘いつ山吹の香に馴し　言弓

亡母ヲ夢ミル

左月音に我簑虫や母戀し　嵐雪
蚕莚音なしの里にくはれけり　露章
蚊の帳をさゞ波疊む四ッ手哉　洗口

蚊のさし竹枝のやどり晋(シン)の七　子堂
蚊ずまふに番(ツガヒ)の團(うちは)亦おかし　翠紅
夢やつれけり草葉の舎蚊遣馬　藤匂
蚊をやくや褒姒が閨の私語　其角
蚊のふるはいとゞ小雨の夕べ哉　才若
夏の夜ははせはしなき秋の旅ね哉　杉風
葺かへて不破のたびねの紙帳哉　皷角

和ス古詩ニ

瑟ヲ焼て水鶏を煮夜酒淋し　其角
谷木(ウツホ)の鬼なおそれそともし笛　同
うはゞみに舅やかはすともし山　露宿
みな人は螢を火じやと云れけり　春澄
草の戸に我は蓼くふほたる哉　其角
うすものゝ羽織網うつほたる哉　曉雲
岩巻柏を宿あり顔の螢哉　言鏈
あさぢふや地藏の闇を問螢　皷角
女耻けり螢をもゆる毛虫かと　藤匂
眞瓜火や螢にたえて橋涼　李下

たが告し夕蝙蝠に涼み風　子英

うば玉の涼みや髪干女後にて　才丸

酔テ登ル二階ニ

酒ノ瀑布冷麦の九天ヨリ落ルナラン　其角

雪の鰒左勝水無月の鯉　芭蕉

富の御嶽の
あかつきたさめて

禅定や珠数ヲ薪の雪の床　文排

山茱萸のかざしや重きふじ颪　嵐雪

田家納涼

芋の葉に命を包むし水哉　キ角

堀かねはかつをに濁すし水哉　長吁

蛛の巣のうきに濁すな山し水　白悦

棚はしや瓜くゞらせて月清水　露草

むら雨の木陰なりせばところてん　拾螢

椛や花なき蝶の世すて酒　芭蕉

なでしこの翅を蝶の娘かな　一晶

竹婦はなれて抱よけれ共

と人やれたまん
涼しくてひさりれんには

汗に朽ば風すゝぐべし竹襦半　嵐雪

夕風がむすめとよばん添寐籠　杉風

東路や足踏かすなる夕立の雨　松濤

水枯て蟬ヲ不断の瀧の聲　幻吁

木ざらしや蟬のもぬけの薄衣　残詞

夜の蟬葬のさく日向かな　鯨足

一晶の宿坊にて

日蓮よ梢に蟬の鳴時は　其角

我身

乞食かな天地ヲ着たる夏衣　同

扇こそ賤がふせ屋の夏礎　羽白

唐扇はすねたり和扇は艶也澁團　鼓角

扇團いづれを法師俗の風　嵐朝

破屋なれども
傘な用ひず

夕顔の雨もりさせぬ荒屋かな　京順

藏立て夕良は世にあかれけり　一晶

夕良はすゝけぬ富士の枝折哉　藤匂

優婆塞(うばそく)が不動白しや夕良の花　長吁

荷興十唱　素堂

浮葉巻葉此蓮風情過たらん

鳥うたがふ風蓮露を碟けり

そよがさす蓮雨に魚の兒躍

荷たれて母にそふ鴨の枕蚊屋

青蜻(トンボ)花のはちすの胡蝶かな

おのれつぼみ已ニ蕾(エミキ)てはちすらん

花芙蓉美女湯あがりて立リけり

荷ヲうつて霰ちる君みずや村雨

蓮世界翠の不二の沉むらく

或ハ唐茶ニ醉坐して舟ゆく蓮の梶

一むら薄まれ人をまねいて

武さし野を我屋也けり凉み笛　翠紅

切麥さらすさら〳〵の里　才丸

皂莢(サイカシ)に草鞋ヲいたく徑(ミチ)アリて　一晶

つばめをつかむ雨の汚レ子(ヨゴレゴ)　其角

月出て日の牛遅き夕歩み　冏雨

えぼしを餝る御所やうの松　紅

鏡刻時の斧取申ける　丸

八十万箕(ミ)の靈(タマ)とあらぶる　晶

生姜葉をかざしにさせる市女(イチメ)笠　角

關守浮ス三五夜の曲　丸

雁の來んいで楊弓を競(キソ)ふらん　紅

冶郎にくだす盞の論　冏雨

金谷ノ泪ヲかたびらにそゝぐ　晶

荒しや姑蘇(コソ)の風呂臺(ダイ)に入　角

亂往昔(ソノカミ)古首つるべより上る　丸

主人の瑞を告し初鷄　紅

花の比都へ連歌買にやる　角

櫻まだみぬ嶋原につよし　晶

地女(ぢをんな)の袂みじかき染の帶　紅

小六に祈る郎よかれと　丸
御手洗や兩國橋の生れぬ世　晶
垂樹渡紅松九本あり　角
葭焦て番屋は雷に霹らん　丸
もるに書ヲ葺閑窓の夜　罔兩
犬わなにかゝるは醉の翁にて　角
壻等に耻よ名を反す戀　紅
早稻は實は入晩稻は身稻つはり　晶
袖そよ寒しスバル滿ン時　丸
水飲に起て竈下に月をふむ　紅
聞しる聲の踊うき立　晶
早桶の行に哀はとゞめずて　角
我身をてかけ草のいつ迄　紅
花は世に伊達せぬ山の淺黄陰　丸
心は寸ンの劍なき廬　角
灯ー前の夜話酒を好ニス　晶
あらしに歸る四の罔兩

年の輪の半をくゞる名越哉　翠紅

虚栗集

改秋

初秋の風かたへは白し青西瓜　東順
初風に瓜守が庵もあれにけり　濁子

梶の葉に
小うたかくさて

我や來ぬひと夜よし原天川　嵐雪
名とりの衣のおもて見よ葛　其角
顏しらぬ契は草のしのぶにて　同
冶郎打かたぶける夕露　雪
坐月にはぜつる舟の遠恨み　雪
河そひ泪檜木つむ聲　角
寐を獨り乞食うき巣をゆられけん　雪
しきみ一把を戀の捨草　角
人待や人うれふるや赤椿　雪
蝶女うかれて虵目さめけり　角
こち〳〵と聞啄鳥の匂よけに　雪
籬にほれて籠のかひま見　角
いはで思ふ陸の怒と聞えしは　雪
色このむ京に初萩の奏　角
野分とふ朝な〳〵の文くばり　雪
家〻の月見あねに琴借　角
ねたしとて花によせ來る小袖武者　雪
美山の笑ひ茶筅の風流　角
鸚鵡能歸りをほむる辻役　同
叶はぬ戀をいのる清水　雪
山城の吉彌むすびに松もこそ　角
菱川やうの吾妻俤　雪
狂哥堂古き枕をおかれける　角
はだへは酒に凋む水仙　雪
簔を燒てみぞれくむ君哀しれ　角
身は孤舟女房定めぬ　雪
萱金かくしうへけん背に　角
松虫またず住あれの宮　雪

露は袖衣桁に蔦のかゝる迄　角
　菱姫月にふらんとすらん　雪
若衆と私あかしのほとゝぎす　同
　つれなき枕蚊屋越ヲ切ル　角
紅の脚布晳姿むごかりし　雪
　五十の内侍耻しらぬかも　同
花の宴に御密夫の聞えあり　角
　やぶ入ル空の雨を懊ク　同

效フ白氏之隣女ノ題ニ

二星私憾となりの娘年十五　其角
空彦もねよけん糸と竹との諸調　嵐朝
露くだる星の朝寐や角豆原　藤匂
後家耻ぬ嫁星に寐衣かさん事　皷角
世ゝの阿房こよひの空や汚レ川　楊水
妹寐こいかも窓更て銀漢白シ　松濤
夕かも星あひそめぬ色帋妻　雨椿
誰手向して蜻やとる拾つるべ　拾螢

鼠尾艸や稲妻をやく世の手向　藤匂
おくり火や定家の烟十文字　其角
玉祭ル里や榕刈男香爐たく女　松濤
貧せこか初露寒し葛羽織　露章

臨ム素堂秋池ニ

風秋の荷葉二扇をくゝる也　其角

和ス角蓼螢ガ句ニ

あさがほに我は食くふおとこ哉　芭蕉
あさがほの露と身をやく蚓かな　藤匂
朝良の曉花もる犬の聲悩し　樵花
あさがほに傘干ていく程ぞ　曉雲
蕣をなげかん友とうづら好　黄吻
萩の音は變化啗しのとだえ哉　萃角

朝な〳〵に咲かへて、さかり久しきさある
　御哥を感じて

あさがほは仙洞様を命かな　其角

破茅

風妖て薄に夜の雨すごし　李下
猫狩やうらみをかへす眞葛原　東順
芭蕉の女ねたしそてつに釘打　小山玄更
露萩や野中に立る捨美人　其流
萩な刈そ西瓜に枕かす男　其角

身ぢか庭前の朴の木によせて

渠何を人門にうらみ朴ぞ　嵐蘭

三夕

西行

秋は此法師すがたの夕哉　宗因

定家

舟炙るとま屋の秋の夕哉　嵐雪

寂蓮

和歌の骨槙たつ山の夕哉　其角
さびしさは秋向ふから來ん我姿　自悦
人は寐て心ぞ夜ルを秋の昏　嚢持

田ー婦子を負て蚕のうかれ心哉　卜尺
我立り蚕飛野の犬かくれ　杉風
いなごとる〳〵いつ袖の時雨たりけん　子英
猫にくはれしを蛬の妻はすだくらん　其角
三ケ月や朝良の夕べつぼむらん　芭蕉

謫居

象潟の月や流人のたすけ舟　琢菴
月に飢て旅人古郷の尋ヲ腹　鼓角
月ひとり家ー婦が情のちぎり哉　杉風
晝の月ぬるさ尋ん三輪の森　東順
月を語レ越路の小者木曾の舟　其角
たらひ迄日比の月ノ寐衣哉　四友
牛吼て山路が蔪月高し　柳興
何配所こゝも罪なき閨の月　池原玄齋
富士の月我には見せじ遠目鏡　疎言
故寺月なし狼宿をおくりける　北鯤
月に親く天帝の塔に成たしな　才丸

舟中吟

月見女舟や木の間を棹ぬらん　杉風
芋くへば尻にこさふく今宵哉　三峰
さらしなの月は四角にもなかりけり　友吉
芋付て衰鞭月もやせつらん　云笑
やき米を臼ック里の椎かな　挙紅
四ッ手舟はぜ買よらん月見川　藤匂
芋を抱て酒に身なげんけふの淵　桐橋
誰ヵ家の思婦ぞ月に颪ふて粉引は　雪叢

土船ニ颪ル棹ヲ月はすめ身は濁レとや　楓興
浮生ははぜを放す盞　其角
興そげて西瓜に着スル烏角巾　柳興
萩すり團風みだるらん　長吁
蓬生のうづらは蚊屋の中に鳴　角
鼬のたゝく門ほそめ也　楓
ぬす人を矢に待嵐窓ヲ射る　吁
下女が鏡にしらぬ俤　柳
泪とも直衣のつまを切濁　楓
むかし雨夜の文枕とく　角
名をかへて縁が丫鬟長シク　柳
うきを盛の酒中花の時　吁
發句彫櫻は枝を痛むらん　角
かへり見侵む落暁の月　楓
笠輕く鞋に壹分をはきしめて　吁
關もる所佐渡の中山　柳
柴荷ふ妙の僕となりにけり　楓
老母ヲ牛にのせて吟ふ　角
うき雲の犂をたづねて間嵐　柳
乞食の筋をいのる野社　吁
水へだつ傾里は垣のひとへにて　角
心を伽羅に染ぬゆふがほ　楓
つれ〲の螢を髭にすだくらん　吁
羇行のなみだ下官哥よむ　柳
げに杜子美湯治山中一夜ノ雨　楓
肴なき爐に三線ヲ煮ン　角
朽坊に化物がたり申すなり　柳

夫をためす獨野の月　吁
穗に出て業平かくす薄陰　角
夕べを契る蜻蛉の木偶　楓
進めする錦木供養立から　吁
地藏に粧ふ霜の白粉　仰
三七日は亂壞の相を啼ク鳥　角
食腥く出る野のはら　楓
舊惡の都は花の色苦し　柳
毛虫は蜂のねぐら爭ふ　吁
稻磨歌妹乎鷄﨟乃狝ヘ　秋風
多多幾晨奴良牟加毛　
松風の里は籾するしぐれ哉　嵐雪

芭蕉廬ノ夜

墨染を鉦皷に隣る砧かな　其角
亦此里賤が夜寒の火打かな　其流
物數奇の世捨きぬたや荏蓙　黄吻
石菖をいつの薄にうづら籠　永貢 愚心
うづらふんで鉀刈鎌を逃しけん　蘇句
然化してそよ飛ブ鴫の夕べ哉　孤嵜
傳に曰稻負鳥はふくべなり　四友
鍰うち着てますほの胡芋刈男哉　子堂
胡芋干宿の夕顔の夕ささらはあれ　嵐蘭
行くれて山賊すごし案山子影　子英

重陽三ー句句菊

○風ー菊ノ盞ー笠冠　止　嵐朝
○有二蘭ー草ー菊ノ宜　止　芭蕉
○俳ー門ノ有二芳ー菊ノ　止　嵐雪
賀をつぐの春や引らん小菊原　學白
籬ー外の硯菊もあるじや芳しき　翠紅
菊は山路みかんの霜を契りけん　暮角
傾ー蘭のひとりねゆかし床の菊　枳風

千家の騷人
百菊の余情

菊うりや菊に詩人の質を責ル　其角

松の香は花とふく也さくら茸　同
座敷寺松茸見付たるうれし　信徳
小上戸熟柿の林かくれきや　一蜂
こや汐木賤が柚味噌の夕烟　拾螢
落椎か雨かましら荅えよ木葉菴　蒼席
栗柿は塵壺を秋の行衛かな　仙風
燒栗や居蔡月の雨　幻吁
樽虫の身を栗に啼こよひかな　其角
栗のから藻の中のハゼかぞへつべし　卜尺
はぜつるや水村山郭酒旗風　嵐雪
傘合羽はぜつり時雨顏なるや　鼓角
釣人歸あらしをはぜの命哉　露章
はぜの地をいかにおしまん佛の日　露宿
こがれきや澪木の枝折はぜ小舟　蒼席
さび鮎やいつを榮の蓼の花　長柄 寛滿
哀且市たつ鮎の暮のさび　杉風
カジカ此夕べ愁人は猵の聲を鉤　其角
遊心寺ノ高雄ガ廟

哀しる霜に石ヲ粧ふ蔦の裾　才丸
榎ふりて蔦を鱗の龍紅　羊角
緋のふとん綻白し瀑布の水　四友
憶ノ老杜ヲ
髭風ヲ吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ　芭蕉
九月盡
ねぬ夜松風身のうき秋を師走哉　其角

冬　上

僧うかれけり松はひとりに里時雨　杉風
手づから雨のわび笠をはりて
世にふるもさらに宗祇のやどり哉　芭蕉
しぐれするかけ茶を軒の僧都哉　藤匂
夢よりか見はてぬ芝居村時雨　其角
君火燵うき身時雨の小袖かな　枳風
紫の暮山に紅のしぐれ哉　子堂
葉柏や風と時雨し數寄屋道　露章

赴ニ泊-船堂ニ途中感

波道黑し夕日や埋む水小舟　楊水
夕かくすらん虹の假橋つくば山　仝
端山木の風からんかへり葺　其流
冬野見よ刈とはなきに霜の鎌　露章
冬枯の道のしるべや牛の屎　卜尺

十月ノ蟋

きり〳〵す鼠の巣にて鳴終ッヌ　嵐雪
釜枯て寒徑霜をいだく哉　予堂
氷るらん日陰の胡蝶日なた魚　藤匂
落葉見にたが跡せし霜馬峯　擧白
落葉をくだくや納豆打ッ寒夜　才丸
霜白し枯野のそばの花月夜　翠紅
夢ヲ吹て肝埋む夜の木葉哉　烏巾
桔梗おのが實ならで烏瓜　青扇
茶の花や上戸の弟梅の兄　藤匂
笹窓の更り短檠の下に釜睡ル　杉風
貧山の釜霜に啼聲寒し　芭蕉

松風や爐に富士をやく西屋形　其角
眞炭刻ル火-箸を斧の幽か也　同
犬引てとうふ狩得たり里夜興　同
宗干富るならん山里冬のさび鼬す　柳興
世に若く行人うとし桝住ひ　露鶴
斧朽て七世の桝に逢りけり　露章
老尼が箴の緒やすし夜の桝　露宿

雪夜

佛たく夜はさぞあらんそば湯哉　幻吁
夜着は重し呉天に雪を見るあらん　芭蕉
花を心地狸に醉る雪のくれ　嶸游
僕が雪夜犬を枕のはし寐哉　杉風
でんかくに寄ス狂句の法師雪の兒　李下
雪ヲ吐て鏡投けり化粧姫　蕪角

富峰

駒やむに藥もとめん千重の雪　千之
不二に目鼻混沌の玉死シテより　鼓角
大囘リ磁石おさめんふじの雪　狩野　空鬼

富士うつす麥田は雪の早苗かな　其角
ふじは富士木綿が原のけしき哉　鳳尾
世はさぞな香煎雪にそゝぐ也　九十
静たれて雪を有明と寐過にし　擧白
幽戸推て雪を花壇の艶哉　言色
荊折て雪の女の角にせし　紅友
白雪に五位鷺濁るあした哉　蘭山
くだかけや寄寐をいそぐ雪の下女　利久
雪ヲ織てびろうど白し太山姫　峡水
皂莢の實は音さびし雪の窓　露宿
雪の奥炭負こぼすたつぎ哉　才滴
會者定離雁にあられや松の雪　ゆき

旅行

城見えて合羽は重し雪の昏　信徳
松原は飛脚ちいさし雪の昏　一晶
雪の薪牛追物に暮つらむ　文排
雪の犬箒になくや姨捨山　四友

憶二李白一

月ヲ見て東坡は雪に身投けん　才丸
河ー鈍に貴ー妃の俤を戀　子堂
遊の代の小哥を琴に閣思君て　其角
早苗車を喜雨臺に引　丸
カルの子に感あり柿の花盛　堂
鯰すくひが濁す日の陰　角
秋風を名殘か待乳山凉み　丸
騒人出家ヲ露夕べ也　堂
稲妻のぬき刄に夢の身をやどす　角
麗境の月を睨かへして　丸
山彦と碁をうつ風の古寺に　堂
茶僧の首鳥豆ヲ啼　角
顔淵が麥食愛のひとつにて　丸
蓼も藜も露ふかき庭　堂
住ばすむ紙工ばかり清水かな　角
吉原の郡よしはらの里　丸
花に染ム愚は磨賢はほつとりと　堂

菫をさして和哥の撰翠　角
永き日も狹布の上下胸あはず　丸
はなわに埋む儒の尸　堂
今哉角天地を樽とのみ破る　角
斬に駕して睡洞に入　丸
葉嵐や孤離て覺えける　堂
名城松に菜をなす月　角
金堂むかしの夕べさやかにも　丸
伶女すがれて玉虫を舞　堂
とくさ刈なり平山にほれつらん　角
文幣うけよ穗屋の花垣　丸
絶かねて鳩の肩ぬく卜正に　堂
さつ男の奴たをや若衆　角
誠より時雨もちくなぶんぬきそ　丸
吹雪を見する炭負せ馬　堂
花さかば告よ尾上のふごおろし　角
やすらひ跛後の葉ざくら　丸
春惜神すゞしめか氣遣か　堂

俳諧童友くるふ里　角

飩是破戒殺生
飲酒はもさよりの事

妄語

鯲を煮てふぐに賣世の辛き哉　一品

偸盗

賊心や河鈍に迷ひの代ころも　李下

邪淫

妻ならぬふぐな憎みそ小夜衣　其角
ふぐ干や枯なん葱のうらみ良　子英
腰ぬけや三とせに成ぬ釣の鈍　野笛
捨られてふぐを湯婆の恨み哉　全琴
人何ヲカ土肉の無爲ナル貌　楊水
鰤ばかり宴にそばへたる重し　擧白
鴬啼て淺漬氷る丸屋かな　雷虫

夜學ノ惑

鴛氷ル夜ャ蜉蝣灯臺に羽を閉て　其角
酒氷ル寒菊よ我一命　樵花

茅舎買レ水ヲ

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり　芭蕉
蘚にありしまがきの氷柱哉　虎吟
閑ヶ春ルをぬす人くさし雪の梅　其流
軒の柊梅を探るにおほつかなし　嵐雪
馬屎ヨリ水仙の香は已れかな　藤匂
雪に和して水仙の勇耻しき　四友

師走の月を

冬がれは白髪遊女の闇の月　嵐朝
寒苦鳥孤婦がね覺を鳴。音哉　李下
ねさせぬ夜身ヲ鳴鳥の寒苦僧　才丸
貧苦鳥明日餅つこうとぞ鳴ケ。　其角
入相のかねにしだ刈る命かな　瓠落
鷹皮て俄神樂や里の森　云笑
神樂舟澪の灯の御火白くたけ　嵐雪
行年や火燵に髭の白ャをやく　柳興

三十日引芋恨み也雪の駒　角止

一年三百六十日
開レ口笑無レ三日

飽やことし心と臼の蟲と　李下
世は白波に大根こぐ舟　其角
月雪を芋のあみ戸や枯つらん　同
かうろぎは昔ヲよみ明ス聲　下
百ヲふる狐と秋を慰めし　同
傾婦を蘭の肆にうる　角
敵ある泪の色をいはす草　下
然れば天下一番の貞　角
文盲な金持は金ヲ以テ鳴ル　下
にわとり豚はつち養ふ　角
其池を忍はずといふかび屋敷　下
士峯の雲を望む加賀殿　角
梢めして國に千曳の鏡刻　下

名にたつかさし黒木串柿　角
髭あらの花みる男肉ゆかし　下
春ゝ宵昔とはりあひのなき　角
月に鳴生憎のうかれ上戸や　下
薄も白くたぶさ刈る鎌　角
朝顔は道哥の種をうへたらん　同
院の後室のあるかなき宿　下
都近き島原小野をおもひ出る　角
仕組をくだす八重のとぢ文　下
羅漢に女房ふたりを頼む哉　角
ねみだれかもじ虵と成夢　下
笛による骸骨何をその情　角
凪そよ夕べ切籠灯の記　下
酔はらふ冷茶は秋のむかしにて　角
こぬ夜の格子鴫を憐レム　下
名月の前は泪にくもりつゝ　角
金橙徑に粕がみを思ふ　下
葉生姜を世捨ぬやつにたとへけん　同

擂鉢かぶる婢堂の菅　角
寸法師切の衣のみじかきに　芭蕉
昔を力ム卒都婆大小　下
佛の多門を見せよ花の雲　角
凡夫三百人のはる風　同

酒債尋常往處有
人生七十古來稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉　其角
冬湖日暮て駕レ馬ニ鯉　芭蕉
干鈍き夷に關をゆるすらん　同
三線。人の鬼を泣しむ　角
月は袖かうハぎ睡る膝のうへに　同
鴫の羽しばる夜深き也　蕉
耻しらぬ僧を笑ふか草薄　同
しぐれ山崎傘を舞　角
笹竹のどてらを藍に染なして　蕉

狩場の雲に若殿を戀　角
一の姫里の庄家に養はれ　蕉
新名にたつと云題を責けり　角
ほとゝぎす怨の靈と啼かへり　蕉
うき世に泥む寒食の痩　角
沓は花貧重し笠はさん俵　蕉
芭蕉あるじの蝶丁見よ　角
腐たる俳諧犬もくらはずや　蕉
鰥〻として寐ぬ夜ねぬ月　角
聟入の近づくまゝに初砧　同
たゝかひやんで葛うらみなし　蕉
嘲りそ黄金は鑄ル小紫　角
黒鯛くろしおとく女が乳　蕉
枯藻髮栄螺の角を卷折らん　角
魔神を使荒海の崎　蕉
鬢の弓取猛き世に出よ　角
虎懷に姙るあかつき　蕉
山寒く四睡の床をふくあらし　角

うづみ火消て指の灯　蕉
下司后朝をねたみ月を閉　角
西瓜を綾に包ミあやにく　同
哀いかに宮城野のぼた吹凋るらん　蕉
みちのくの夷しらぬ石臼　角
武士の鎧の丸寐まくらかす　蕉
八聲の駒の雪を告つゝ　角
詩あきんど花を貪ル酒債哉　同
春湖日暮て駕ニ興吟　蕉

栗とよぶ一書其味四あり。李杜が心-酒を嘗て、寒山が法-粥を啜る。これに仍而其句見るに遙にして聞に遠し。侘と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也。戀の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄-金は鑄ル小紫。、上陽人の閨の中には、衣-桁に蔦のかゝるまで也。下の品には眉こもり親こひの娘、娶・姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其、如震動虚實をわかたず、寶の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を治ふ。是必他のたからにあらず、汝が寶にして後の盜人、待。

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

續虚栗

甲・乙

其角撰

風月の吟たえずしてしかもゝとの趣向にあらず。たれかいふ、風とるべく影ひらふべくば道に入べしと、此詞いたり過て心わきがたし。ある時人來りて今やうの狂句をかたり出しに、風雲の物のかたちあるがごとく、水月の又のかげをなすにゝたり。あるは上代めきてやすく、すなほなるもあれど、たゞにけしきをのみいひなして情なきをや。古人いへる事あり。景の中に情をふくむと、から歌にていはゞ、穿花蛺蝶深深見　點水蜻蜓欵欵飛　これこてふとかげろふは所を得たれども、老杜は他の國にありてやすからぬ心と也。まことに景の中に情をふくむものかな。やまとうたかくぞ有べき。又きゝし事あり。詩や哥やこゝろの繪なりと、　野渡無人船自横　月落かゝるあはぢ嶋山　などのたぐひ成べし。猶心をゑがくものは、もろこしの地を縮め、よし野をこしのしらねにうつして、方寸を千ゝにくだくものなり。あるはかたちなき美女を笑はしめ、いろなき花をにほはしむ。はなに時の花有。つるの花あり。時の花は一夜妻にたはぶるゝに同じ。終の花は我宿の妻となさむの心ならし。人みな時のはなにはうつりやすく、終の花はなをざりに成やすし。人の師たるものも此心わきまへながら、他のこのむ所にしたがひて、色をよくし、ことをよくするならん。來る人のいへるは、われも又さる翁のかたりける事あり。鳰の浮巣の時にうき時にしづみて、風波にもまれざるがごとく、内にこゝろざしをたつべしとなり。余笑ひてこれをうけがふ。いひつゞくればものさだめに似たれど、屈原楚國をわすれずとかや。われわかゝりしころ狂句をこのみて、今猶折にふれてわすれぬものゆへ、そゞろに辨をつゐやす。君みずや漆園の書、いふものはしらずと、我しらざるによりいふならし。

こゝに其角みなし栗の續をえらびて、序あらんことをもとむ。そもみなしぐりとは、いかにひろひのこせる秋やへぬらんのこゝろばへなりとや。おふのうらなしならば、なりもならずもいひもこそせめといなびつれど、こまの瓜のとなりかくなりと猶いひやまず。よつて右のそゞろごとを、序と成とも何となりと

も名づくべしとあたへければ、うなづきてさりぬ。

江上隱士素堂書

續虛栗集 中

春之部

改正

新年の御慶とは申けり八十年　露任口
誰やらが形に似たりけさの春　芭蕉
めでたさに嫌ひも禁る雜煮哉　自悅
桑さして桒行畑や老の春　杉風
年の花富士はつぼめるすがたかな　粲坍
うばそくが隣なきかん四方拜　文鱗
元日や家にゆづりの太刀帶ン　去來
しら梅にかくす名もなし古男　擧白
先〳〵の餝みて行春日かな　沾蓬
蓬萊に見違かゝる日出たさよ　山店
拜む間は花をまたする朝日哉　魚兒
鶯や雜煮過たる里つゞき　何白

おもしろの春有がたき日和哉　千春
物と我みな去年ながら初日哉　觀水
日の春をさすがに鶴の歩哉　其角
草まくら薺うつ人時とはん　山川
松とりて七種はやすあらし哉　如泥
總角が手に〱手籠や薺つみ　野馬

遊大音寺

梅が香や乞食の家ものぞかるゝ　其角
峰の梅松をけ落す詠かな　文鱗
梅の花義經なりし姿かな　曲水

老圃

蠣よりは海苔をば老の賣もせで　芭蕉
蕗のとうほうけて人の詠かな　嵐雪
古草や新艸まじり土筆　文鱗
よくみれば薺花さく垣ねかな　芭蕉
春ふれて川邊花さく根芹哉　冬市
路〱は束ねてもちる杉菜かな　沾徳
玉ほこの鍬にあれたる杉菜哉　全峯

つゆ〱と燒野にはやき蕨かな　由之

春行

晝の鐘箒木きゆる霞哉　仙化
しら〲と霞はなるゝ山城哉　沾蓬
白鷺の翅に霞む片帆かな　紋水
村の鶴つくばに見知るかすみ哉　巴風
卷付て筧をつたふかすみかな　野馬
寒食の烟まぎれぬかすみかな　青亞

同遊さかしまに詣ける比、海の日の波な離出るに、武藏野の月さいづれかさきにせんといひて

松陰や旭見に行春の海　不卜
海雲よる笘屋に近き朝日哉　峽水
浦おしや鵜の羽に曇る春日影　扇雪

かさりにて

巣のためか繁くはへ行村雀　峽水

板久の一夜

うき名にもあらねば
朧月いたこも捨ぬ情かな　同

中山の塔を見やりて
廣き野の塔みよとてや舞ひばり　不卜
宿からん眞晝をおろす諸ひばり　琴風

旅行　こゝろよきし水に髪を擲て
のどけしや鶴の飛込髪かゞみ　半殘
巣立より笹ふみたゆむ雀かな　拊竹
すゞめ子に肌なつかしき娘哉　三園
雀子やあかり障子の笹の影　其角

結廬在人境
夕日影町半に飛こてふ哉　仝
くりかへし麥のうねぬふ小蝶哉　曾良

世につかはるゝ身の閑ならぬに
肩絹をやすむる蝶のねぶり哉　巴風
青柳にいよ〱睡るこてふ哉　嵐蘭
行すりに目をつまれたる柳哉　衛門
手をあげて兒立習ふ柳かな　魚兒
曲れるをまげてまがらぬ柳哉　其角
柳には鼓もうたず歌もなし　同

おもはずつばくらにつらを蹴られたる猫あり
妻もやと燕見かへる野猫かな　魚兒
哺を分る孤燕のねぐら哉　觀水

春曉
海づらの虹をけしたる燕かな　其角

重三
不産女の雛かしづくぞ哀なる　嵐雪
雛たてぬ家も女は住れけり　孤屋
小式部が其世を雛の小袖かな　紋水
所〱の顏こそかはれ雛の姿　學白
もどかしや雛に對して小盞　其角

いもうとのもとにて
世忘れに我酒かはん姪が雛　其角

草庵
花の雲鐘は上野か淺草か　芭蕉

鶺の巣もみらるゝ花の葉越哉　同

木の間より花のものいふいんご哉　風虎

ふるきをしたふ中に、

りうたつが小うた見出て

獨もゆくふたりも行ゆ花の山　文鱗

いつ〳〵より花には沉む胸の中　擧白

花折レと君が意あらばいかにせん　仙化

さそはれて棊打かけたる花見哉　安重

何事に人走るらん花ざかり　山之

花うへていつ庭の瘦なをすべき　巴風

朶ふむも花の日影はこそばゆし　魚兒

嵯峨の花みけるに

花盛古ルもろこしを尋けり　亡人萩露

詠ニ唯一心一

花に來て人のなきこそ夕なれ　觀水

妻にもと幾人おもふ花見哉　破笠

我年の花にはこりぬ小袖かな　蚊足

花を得て人に懷るゝ產子哉　卜千

御靈屋はさぞ入あひの花盛　風笛

あらおぞや爪あかりなる花の山　嵐雪

花にあかぬ憂世男の憎き哉　去來妹千子

花見にと母につれだつめくら兒　其角

日々醉如レ泥

花持て市の礫にあづからん　同

春興

川盡て鱸流るゝさくら哉　露沾

黃精ある峽の日の影。　其角

春を問童衣一冠をしらずして　沾德

壁なき間屋に殘る白雪　露荷

月冴て砧の槌のつめたしや　嵐雪

人は風ひくね覺ならまし　虛谷

ウ

傾城の淋しがる顏あはれ也　角

初秋半戀はてぬ身を　沾

莖齒落て小哥ふるへけり　荷

樓おりかぬる曉の雁　德

皷うつ田中の月夜悲しくて　谷
佗てはすがる僧の振袖　雪
思ひ得ず揚弓くるゝ園深し　沾
三たび浴て夏を忘〃、　角
我鞍に蟬のとゞまる道すがら　徳
砂吹上る垣の松風　荷
燭とりて花すかしみる須磨の浦　雪
小の彌生の光みじかき　谷
ナ
濃墨(コキ)に蝶もはかなき羽を染て　角
氷を涌(ワカ)す蓬生の窓　沾
うれしさよ若衆に紙子きせたれは　荷
東に來てもまた戀の奥　徳
常陸なる板久にあそぶ友衛　谷
笑に櫂(カイ)て沉む江の鯖　雪
松並ぶ石の鳥居の陰くらし　沾
凩夜〳〵に寒ッ笛を吹　角
葺かけて月見の磯屋荒にけり　徳
御廟か衛士か袂露けし　荷

角切一に吉野に放す鹿の聲　雪
鉢に食たく篁の陰　谷
ウ
山おろし笈を並べてふせぐ覽　角
閑に驚く毒の大音　沾
笛買によする瀬は人なくて　荷
雪の正月を休む塩焼　徳
萬葉によまれし花の名所よ　荷
霞こめなと又若栽山　雪

日當レ午

風なくてかけろひ落る櫻哉　蚊足
朝滴(シタヾリ)襟につめたきさくら哉　湖風
口ざかりやおとなしく見ゆ山櫻　文鱗
雨はれて地息ふむらんさくら狩　由之
一すじに芝ふみからすさくら哉　全峰
炭うりもひとへ櫻のあるじかな　野水

二荒の山ぶみして

あれよ〳〵といふものひとり山櫻　枳風
ちるは〳〵醉のさめたる夕ざくら　自悦
ふたりしてさくら尋る春邊哉　旦藁
筏士の笠うつくしき櫻かな　嵐水
禁札の名ばかり寺のさくらかな　おし
石竈(クド)にさくら散しく夕哉　松江
賓誠人にもまるゝさくらかな　孤屋
さま〴〵の人にもあかぬ櫻かな　野馬
抱付て梢をのぞくさくら哉　魚兒

剃髪

西行の水にめしたくさくら哉　荷兮

勢田春望

やまざくら身を泣哥の捨子哉　其角

仁和寺

竈のやどり木なりしさくらかな　仝

田舍わたらひして名もなき
寺〳〵の花見けるに

誰卒都婆たれたる藤の垂からん　枳風

釣臺

舟牽ん渊濱の藤の夕日哉　沾蓬
山吹の鯰(なまず)に餌(ゑさ)まく端居哉　冬市
山吹をいさむる蝶のその羽哉　濁子
岩つゝじ手さし出せよ舟早シ　羽笠
やはらかに女松生そふつゝじ哉　荷白
あと先に身を木がくれやつゝじ寳　沾荷
築山を翫すのみぞ岩つゝじ　宇齊
咲までは待人もたぬつゝじ哉　破笠
木蓮華始め終りや嵐のはた　文鱗
戀よらんひじき干たる蜑の門　三園
春もはや山吹しろく苣苦し　素堂

春朝

蔀あけてくゝたち買ン朝まだき　嵐雪

春晝

午の時おぼつかなしや茶摘歌　蚊足

春夜

たそがれの端居はじむるつゝじ哉　其角

卯庵を訪ける比

永き日も囀たらぬひばり哉　　芭蕉
原中や物にもつかず鳴雲雀　　同

さ聞えけるに
次で申侍る

啼〳〵も風に流るゝひばり哉　　孤屋
烏帽子を直す櫻一むら　　野馬
山を焼有明寒く御簾巻て　　其角
光けうとく網に入魚　　屋
水鳥や碇のうけの安からぬ　　馬
梢活(イキ)たるゆふだちの松　　角
ウ
禪僧の赤裸なる涼みして　　屋
李白に募(ツノ)る盞の數　　馬
俳諧の誠かたらん草まくら　　角
雪の力に竹折ル音　　屋
櫻原や猪(イノシヽ)渡る道まけて　　馬
男に見えぬ女かなしき　　角
きぬ〳〵を盜入(ぬすびと)ルと立さはぎ　　屋
今はたぶさにかゝる髻(モトヾリ)　　馬
血の涙石の灯籠の朱をさして　　角
奥の枝折を植る槙苗　　屋
降〳〵も花にあられの音ス也　　馬
月夜の雉子のほろ〳〵と鳴　　角
名
せきだにて鎌倉ありく彌生山　　屋
昨は遠きよしはらの空　　角
物くはぬ藥にもなれわすれ艸　　馬
手習そまず角入てより　　屋
親は鬼子は口おしき簑虫よ　　角
折かけはらん月の文月　　馬
店租の起さぬ家に吹なびき　　屋
四手漕入ル水門の中　　角
うち殘す波の浮洲の雪白し　　馬
葉すくなに成際(サカヒ)目の松　　屋
珠數引のあたり淋しく寺見えて　　角
あき乘物のたて所かる　　馬
ウ
被(カツキ)敷その夜を犬のとがむらん　　屋

うきふしさはる藪の切そぎ　角
五月雨塗さす藏に笘きせて　馬
海の夕も大津さびしき　屋
思ふほど物笑はまし花の隅　角
つくし摘なる麥食の友　馬

續虚栗

夏之部

伏見西岸寺の地藏にまうで侍りて

夜錦集
木傘に油かけたかほとゝぎす　意朔
蜀魂星に背をする高根哉　暮角
郭公なき〱飛ぞ闇はし　芭蕉
淀舟や犬もこがるゝほとゝぎす　其角
杜鵑鳩は腹立聲やらん　枳風

妻を供して旅だちける人に

馬の間妹よびかへせほとゝぎす　其角
時鳥一聲まじる鵆の聲　杉風

待乳山　三句

舟場迄うつゝ來ぬるよほとゝぎす　如泥
夜こそきけ穢多が太鼓子規　其角
ほとゝぎす麥搗臼に腰かけて　蚊足

蚊足にすゝめられて

郭公麥つく臼にこしかけて
たそがれ渡る青鷺の空　キ角
川風や衣干揖にそよぐらん　角
樽をつくして皆童なり　蚊足
初秋の潤はわきて月なれや　同
扇の日記を捨る闘の戸　角

ウ 萩のねに所の土を包み行　足
　脩と唱して杳靜なる　角
瓦工おりよといそぐ入相に　足
　神鳴つべき雲を詠て　角
折ふしの狂惑つらき命哉　足
　嶋原近き菩草の庵　角
忍啼ふるきふとんに跡さして　足
　前髪惜む月もこよひぞ　角
江は露に亭の蠟燭白くなり　足
　馬に信する瀬田の秋風　角
花盛梟ならべたる首を見て　足
　勇士の土産北梅を折　角
ナ 美女の酌日長けれとも暮安し　同
　契めでたき奥の繪を書　足
或はしらゝ住吉須磨に遣され　角
　乞食に馴て安き世を知　足
町ぐたり二聲賣らぬ茶筅賣　角
　夜は飛田の狐也けり　足

高灯籠杉の梢にありあけて　角
　晩稲花さく湖の隈　足
蜻蛉の一かたまりに流るなり　角
　隣ならべて機の糊ひく　足
通りなき冬の驛の夕あらし　角
　降かゝりたる雪の玉味噌　足
ウ 釜かりに松の扉をたゝかれて　角
　反故そろゆる閑な偷ぞ　足
顏あまた都の女のなつかしく　同
　豆くふ數も人に笑はれ　角
世中の花に駝のよろほひて　同
　寺より寺にあそぶ春の日　足

妾在閨　十八句

眉帚の露うつ罌子の匂哉　巴風
　螢消よと帳の裾とく　仙化
相とのる二ツの棊筒に枕して　キ角

袖口寒く爐に炭を次　風
旅人の錢よむ音も夕月夜　化
かすかを生ん石鉢の水　角
隠家や杉垣はさむ秋深し　風
傘持しばし君が名を問　化
瀧見して亂るゝ鬢のあでやかに　角
山鳥うつすおろく盞　風
花の跡獨行身ぞいかめしき　化
熨斗目上下きならしの春　角
殊更に薄雪かゝる門かざり　風
いざよ出口のせんじ茶の音　化
道心にかく志ざす戀もしれ　角
泪別るゝ小佛の關　風
一鞭に數行半の月の影　化
薄とりまく遠山の腰　角

四月八日母のみまかりけるに

身にとりて衣がへうき卯月哉　其角

初七ノ夜いねかねたりしに

夢に來る母をかへすか郭公　同

五七の日追善會

卯花も母なき宿ぞ冷じき　芭蕉
香消のこるみじか夜の夢　キ角
色〳〵の雲を見にけり月澄て　嵐雪

各悼

卯花に目の腫耻ぬ日數かな　露沾
蚊のあとをみれば悲しき別哉　枳風
眉ひらく爲に手向よかきつばた　沾德
物あればもの淋しゝや夏木立　擧白
啼入て音もなしそれは時鳥　嵐雪
夏草に活たるものはなみた哉　蚊足
蚊遣にはなさで香たく悔み哉　去來

生顔や夏草そよぎ風の音　野馬

芥子の花ともにうつむく泪かな　全峯

ひとへものしぼるにやすき袂哉　魚兒

たのみなき夢のみ見けるに

うたゝねのゆめにみへたる鰹かな　其角

その夢に戯ル

下部等に鰹くはする日や佛　嵐雪

端午三七日にあへりければ

我歎かぶとうらやむわらべかな　其角

何古郷こゝも菖のやどりかな　紋水

急ぎ起て菖かぞふる日向哉　魚兒

姦しや菖さす日の風の音　枳風

織みぬ妹がり寒き外面かな　彫棠

馬にのる侍清し花菖　仙化

白芥子に引もどさるゝ夕かな　魚兒

花芥子や蕀二重の垣の中　沾蓬

禾村

筍よ竹より奥に犬あらん　其角

笋やかり寢の床の隅よりも　嵐雪

自詠

髮はえて容顔蒼し五月雨　芭蕉

たま〳〵に三日月拜む五月哉　去來

さみだれや隣にわかる水の徑　沾德

さみだれに我から曇る目鏡哉　嚴翁

點滴を闇のつぼみか白丁花　巴風

菅笠に姉を見せたる田植かな　吼雲

合羽着て友となるべき田植かな　其角

母の影ふみて田植の女かな　野馬

夕景や椡に着する早苗笠　冬市

雨の日の早苗に休む燈かな　由之

暑き日のやどりを乞て

入相に田哥のひゞく里とはん　觀水

ものすごく男ばかりの田植哉　不卜

都見ん小桶に鮒はなかつみ　高政

夜をのこす水鷄は老を敲けり　濁子

續松もむすほゝれ行鶉縄かな　玖也
月は入我等は出る鶉舟哉　風虎
甲斐山中
山賤のおとがい閉るむぐらかな　芭蕉
古寺や倫なまめかす椶櫚の花　三園
むらきみのもとにて
世をとへば安く茂れる榎かな　自準
田家
むれ〳〵て螢うるさし夏の月　枳風
つかまれてまた放さるゝほたる哉　魚兒
かやり火に焼けて迯るほたる哉　溪石
消かねて芦にうたるゝ螢かな　野馬
君起よ人しづまりて螢みん　孤屋
曉の衣に殘る蚊遣哉　觀水
山里の蚊は晝中に喰ひけり　去來
木津へまかりて
かやり來て雨の道とふ夕かな　黄吻
おちの人添寐ぞゆかし枕蚊屋　千春妻 綾戸
旅寐して香わろき草の蚊遣哉　去來
夜あらしや吹おとしたる蟬の聲　卜千
唖蟬の鳴ぬ梢もあはれ也　杉風
洗濯の袖に蟬鳴夕日かな　杜國
土さへさけてる日にも
蠅追に妹忘れめや瓜作り　其角
かく成ぬ我山里の瓜の味　翠紅
瓜喰に松陰せはき日なた哉　李下
夏の日の入あひつらき雀かな　欺心
なつの日に袂まづほす汐場哉　好柳
誦二錢神論一
一文の錢いたゞけや夏の水　蚊足
踏越えて亦たちもどる清水哉　嵐水
合歡木の睡りてぬるき清水哉　仙化
さゞれ蟹足はひのぼる清水哉　芭蕉
くらまの竹きりにまかりて、
山林のやどりもさめけるに、
市原寺にて

陰になけ小野の小町も蟬の空(カラ)　千春

虫はなし朽木の小町ほされけり　其角

九折のぼりける時

山鳥もけうとき闇の木立かな　千春

侘しらに貝ふく僧よかんこ鳥　其角

隣家に樹をすく人有
その四時先後を愛
する事をしらず。

何かいはん六月桐を植る人　同

心法其精(ノコト)耳粗(ナリ)

蠅を打てともに生死を輕くせん　幻吁

納涼

時分はよし土用初の舟遊山

たが爲ぞ朝起晝寐夕涼　其角

落(二)得閑(一ヲ)

世をみれば辻に法きく涼み哉　文鱗

人の子をほめて端(ハシ)借るすゞみ哉　李下

橋くゞる櫓音にすゞむ夕かな　冬市

寄(二)尊院(一)

涼む夜や愛宕にともす火の行衛　觀水

更る夜を隣に效(ナラ)ふすゞみかな　去來

涼しさや雷遠き夕間昏　冬柏

鹽竈やおのが扉のうら涼み　山之

暮またで祭の留守を涼かな　虛谷

奥州黒塚にて

夜錦集　つかの間や鬼こもるとも夕すゞみ　維舟

源義經平家追討の時
上洛に鐙にさはりける石さて
その所を鐙摺の石さ申さかや。

あぶずりの石もふんばれ夕すゞみ　同

逐涼　二句

涼しさや先武藏野のよばひ星　其角

闇の夜やすゞむ園の音ばかり　文鱗

雨後

つゝまれて水ものびたる蓮かな　野馬

蓮うけて師の閼伽包(ム)淸水哉　卜千

見がくれに麻刈笠のくろみかな　全峯
晝顔にとたる蟻の日陰哉　且只
ひるがほの花しぼみたるあつさ哉　破笠
ひるがほや猫の糸目になるおもひ　其角
山吹やおしむ胡ャ瓜の花の露　濁子

江州にまかりて回郷

干瓢を太刀の緒にして都へは　自悦
つばくらや日陰にすがる角豆垣　釣雪
一花にふたつ筋あるさゝげ哉　虚谷

草庵の急雨

夕立に家流したる乞食哉　巴風
夕立や鉢巻したるわたし守　仙化
夕立に鶯あつく鳴音かな　其角
夕立や箕ミに干ス粮のしはしたに　僧宗派
夕立に座敷見らるゝ主哉　沾蓬

午熱

病ム人をおもひやらるゝ土用哉　蚊足
鎧着てつかれためさん土用干　去來
うたゝねや揚屋に似たる土用干　其角

或人所持のたんざくに

何もなし我頭陀袋夏秋　澤庵

續虛栗 乙

秋之部

口もくれぬはや舟にのれ男七夕　風虎
天川あらしも蚊屋も明にけり　自悦
星合や瞽女も願ひの糸とらん　嵐雪
槿を星にわがぬるわがれかな　槿花
懸針や船引とめん天の川　女 綾戸
大内のかざり拜まん星まつり　女 千子
星合や折にふれつゝ鍋かさん　壽閑

旅思

七夕にかされぬ旅のね卷哉　山之
星合や女の手にて哥は見ん　其角

附二槿花堂一

蕣に曲ん念ひの一ッかな　露沾
蕣や壁の日影の今すこし　紋足
蕣は二人ながめてあしき哉　杉風

驚二夜雷一

ことに晴て蕣雷に潔し　其角

寄二李下一

いなつまを手にとる闇の紙燭哉　芭蕉
いなづまや案山子のあゆむ川向ヒ　岩泉
いなづまやおり〳〵藪のひまうれし　湖風
いなづまに目をとられたる闇路哉　魚兒

遊女さきに身まかりけるを
いたみて、久しくあひしれり
ける人に申侍る。

露烟此世の外の身うけ哉　去來
父母の影灯籠ふまぬ光哉　山之
なき人の數を苧からに折レけり　全峯
たが魂の家に粟くふ鼠かな　文桃

觀音堂にて
びんづるに衣
着するを見て

女餓鬼すら盆會に逢や法の道　文鱗

盆迄は秋なき門の灯籠哉　嵐雪

貧

魂(タマ)やこん祭らぬ宿ぞ恥しき　蚊足

對愁

きのふ見し人や隣の玉祭　其角

たまゝつり門の乞食の親とはん　同

送り火の山はきのふのともし哉　觀水

鯛つらん浦嶋が子の生身玉　苔翠

志賀の花園にて

はなぞのは中〳〵踊に顯れたり　白悦

躍子よあすは畠の艸ぬかん　去來

盲目も舷(フナバタ)たゝく玉(花)火かな　春雷

吹よせて江の一隅や水と霧　苔翠

はぜ釣て千尋もとめぬ小舟哉　春雷

禪師にまみゆ

おきわかれとむるものなし女郎花　文鱗

遊女の酒もりけるに

いざや禿待乳のかたの萩からん　同

女郎花戀より後の花なるか　景道

下闇もまばゆき比の一葉かな　冬柏

常陸へまかりて

牽舟のあとに起たる穗芦哉　全峰

花の秋草にくひあく野馬哉　曾子(良カ)

萩原や一夜はやどせ山の犬　芭蕉

旅宿

木槿垣花見ながらに飛入けり　觀水

入湯の比

夕萩のつゆに見かへる湯顏哉　紋水

木賀山中

秋よ猶すくなき家を蔵ヶ雨　學白

鵙(トキ)啼て雲に露ある山路哉　同

山めぐる鰹に秋のしぐれ哉　紋水

兄去來に供して
伊勢へ詣ける道すがら
初旅のこゝろを

伊勢迄のよき道づれよ今朝の雁　女 千子

柴草の露もちかぬるそだち哉　同
かげろふの雨をよこ切羽風哉　沾荷

聽聞

簑虫の音を聞に來よ艸の庵　芭蕉

聞にゆきて

何も音もなし稲うちくふて螽哉　嵐雪
むしのねよ手にとる草の一つかね　沾蓬

聖護院の宮覺寛法親王
みね入ありしを
拜み侍りて

峯入は宮もわらぢの旅路哉　宗四
かけ出の貝にもてなす新酒哉　其角
早稲酒やほこらにかけし竹の筒　虚谷
さびしさは鳩吹習ふたとり哉　野水
暮の山遠きを鹿のすがた哉　其角
笠とりて富士見る岨のかざし哉　紋水
秋の野や見かへる小鳥行〃小鳥　虚谷
世中やわたりくらべて四十から　風虎

草庵の月見

名月や池をめぐつて夜もすがら　芭蕉
雲折〳〵人を休むる月見哉　同

鹿島に詣ける比宿根本寺

寺にねて誠がほなる月見哉　同
名月よ戸明て又も寐ん名殘　根風
月見して蚊の聲よはるはじめ哉　李下
舟人に成ても見たしけふの月　觀水

月下獨酌

月見ばや紫式部妻にして　蚊足
月露の萩切ほどく今宵哉　巴風
たれ〳〵も東むくらん月の昏　去來
我人とあらそひなくて月見哉　野馬
月見船雲に乘込橋のした　孤屋
橋の人月見る是や木曾の猿　破笠

宗鑑が彌三郎のさき
貞室が彦左エ門のむかし
影に對して三人の曲

古袴月に舞ッ我を今宵哉　文鱗

嵯峨に小屋作りて
折ふしの休息
仕けなれば

月のこよひ我里人の藁うたん　去來

日比より富士はちいさし今日の月　冬市

月滿て欄干うごく今宵哉　由之

盲より啞のかはゆき月見哉　去來

名月や御堂の鼓かねて聞ノ　其角

良夜雨意

いざよひも心づくしや十四日　同

尋常の三日月見えよ今日の雨　彫棠

月擬人といふ題な

關守をうけたまはらん風破の月　虛谷

我顏の黑くなるまで月はみん　魚兒

商人も見るものとてや舟の月　文鱗

名月や鶴のびあがる土手の陰　且只

名月を寐るなと鳥の亂けり　濁子

物かげをこよひの月の曇り哉　蚊足

中に出て月一筋や宵の雲　似兮

名月は汐にながるゝ小舟哉　吼雲

釣のうけにながるゝ月見哉　一林

名月やわが名月はいつあらん　如泥

終夜玉しゐつかれける比

秋の夜はなく夢ばかり寐覺哉　幻吁

一しきりねられぬ夜の長さ哉　李下

旅なれてまどろむほどになる宵な
おもひねさこそ人もしりけれ
といふ心によりて

秋の夜に寢ならぶ旅のやどり哉　女 千子

長き夜も旅くたびれにねられけり　去來

寐かゝりて遠く成行砧哉　破笠

旅人に村とをはるきぬた哉　仝峯

山里や礎にかはる夫婦して　枳風

子の泣てしばし音やむ砧哉　山川

ふるさとの火燵をおもふ礎かな　蚊足

よしの丶奥に
夜あかして

砧うちてわれに聞せよや坊が妻　芭蕉

獨床

ひとり寐て砧を笑ふ鼠かな　酉比

秋興　廿四句

面白く物うきものは砧かな　露荷
灯遠き穧(イトワカ)の雨　キ角
榧を簸(ヒ)嵐の窓の月澄て　同
(原本第四句を缺く)
ちら〳〵と霙ふりこむ襟(エリ)寒し　同
かしらを包ム鷹居(スエ)て行　角
山寺の鼎(カナヘ)をならす朝もよひ　荷
松に笠ぬぐ暮露の起臥　角
新敷鳴子をならす瓜作リ　荷
車あけたる淀の落水　角
夕闇の道しる馬は支離(カタヘ)にて　荷

兵やとふ三石の粟　角
先獨リ花ぬす人をかゝらめ置キ　荷
酒買に行草庵の春　角
水ゆるく橋の上より網打て　同
游(マナヤ)習ひにあそぶ鴨の子　荷
夕月に急クる所作をくりうめん　角
たゝぬ戸立る電の窓　荷
夜寒さに妹が夜着きてあたゝまる　角
召シの車に粧ひする程　荷
御ノ盞初め手のなき初櫻　角
四方の連歌は春の大和路　荷
さすがなると傘に諷はん朧月　角
牛あらふべき暁がなはしろ　荷

重九

三十九

若き名のなごりを祝へ菊の丈　蚊足

四十

年既に菊おもしろく成にけり　同
菊の情春にあかるゝ秋ちがな　露沾
御薗生に男なぶらん菊あはせ　巴風
年〳〵の花の香くやし夜の菊　衛門
籠鳥のゆるすにうとし薗の菊　其角
菊植て我と水くむ朝かな　岩翁
いかで我七百（ナヽウ）の師走菊に經ん　其角

草庵雨

起あがる菊ほのか也水のあと　芭蕉
痩ながらわりなき菊のつぼみ哉　同
雨重し地に這（ハウ）菊を先折ん　其角
雨數日市はかくあれ菊の花　文鱗

旅行

落栗のいがありとても祝かな　觀水
落栗に萱ふきかゆる嵐かな　透雲
むら雨に甲斐ある陰や椎の音　岩泉
ふみながらとらぬや椎の九折　三翁

茸分る夕日ふもとの花表哉　觀水
童さへ捨し徑（タ）のいくち哉　同
柞落て松茸みえぬ匂かな　魚兒
松茸や松より奥の鷹の聲　孤屋
松茸や一日〳〵の雨の露　三翁

京出る日

片腕はみやこに殘す紅葉哉　キ角
かつちりて御簾に掃るゝ艶哉　同
谷ひとつ里餉にくもる紅葉哉　冬市

旅行

藥書や楢のこりて松の蔦　巴風
我袖の蔦や浮世の村時雨　遊女薄雲
峯の松鱅（カジカ）あらしの夕哉　冬市

秋山二句

甲斐がねも見直す秋の夕哉　露沾
秋山や駒もゆるがぬ鞍の上　其角

閉レ門覓レ句

秋。寒く口土圭くもる扉かな　三園

おのれさく菊鶏頭よ垣の中　舟竹

秋盡

僧の入ル繩のすだれよ秋の暮　不炊

こまりけりうらのとまやの秋のくれ　一鐵

六容　歌仙

（追懷）乞食にもかうはなられぬかゞし哉　破笠

をのれを責る虫に蟷螂　其角

よもぎふの砧に惱む音を打て　仝

月にはゆるせうき柴の數　笠

此方も年とりかぬる暮の雪　同

心たふれぬ歌のみなし子　角

（戀）人しれず戀する戀の上手さよ　角

別れば見よと床に金おく　笠

名はうき名鎧をかざり馬たてゝ　同

しうとめつらく妹に逢ぬか　角

鍋わりて筑摩の市にうらむらん　同

色酒の世にはふれ嫋（ナマ）めく　笠

（旅）川舟に火燵して行波まくら　同

聞捨がたき鳥羽の稲磨　角

秋風や笠に宿かる天が下　同

松を産所にたそがれし月　笠

米買に明は起べき花の雲　同

雪消を出る甲斐の馬工郎　角

（無常）夢の春かるかや堂もよそに見し　同

死出の鳥の蠟燭を喰　笠

哀しれ闇の拾子の啼ねいり　同

我もとゞりはきらぬ髪結　角

葬は躍みるらんはかなしと　同

露よりきゆるかげぼしの影　笠

（釋教）月澄て僧と隣に咄す聲　笠

紼木どりて曉をまつ　角

定めなき美濃の谷組打納め　同

鐘鑄にあはん猶はつせ山　笠

癡（モノウシ）のものうき富の世を悟り　同

柴の戸深く維摩聞らん　角

乞聟に度會(ワタラヱ)ゆづる家の風　同

名乗うれしき幣(ヘイ)閣をとる　笠

さ月待加茂の祭の馬からん　同

椎落よと榊いたゞき　角

かつ色を軍の神に花折て　同

春をさかへん大宮司が畑　笠

曾久美那之九梨

ふゆの部

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん初霽(しぐれ)　芭蕉

亦さゞん花を宿〳〵にして　由之

鶚鴿(カマクキ)の心ほど世のたのしきに　其角

粮を分たる山陰の鶴　枳風

かけあり〳〵芝生の露の淺緑　文鱗

新(シ)舞臺月にまはゞや　仙化

中の秋畫工(エカキ)一つれかへるなり　魚兒

鱸てうじておくる漢(カラ)舟　觀水

神垣や次第にひくき波のひま　仝峰

齢とをしれ若が若松　嵐雪

酒のみにさをとめ達の並居て　執筆

卯月の雪を握るつくばね　翁

鱒(ヤマメ)つる袖つくばかり早瀬川　由之

蘿(ツタ)一面にのこる橋杭　其角

道しらぬ里に砧をかりに行　枳風

月にや啼ん泊(ハツ)瀬の籠(コモリ)人(ト)　文鱗

葛籠(ツヾラ)とく匂ひも都なつかしく　仙化

おもはぬ事を諷ふ傀儡　仝峰

途中(ミチ)にたてる車の簾(ス)を卷て　翁

沖こぐ舟にめされしは誰(タ)　由之

花ゆへに名の付(ク)波ぞめづらしき　嵐雪

別るゝ雁をかへす琴の手　擧白

順の峯しばしうき世の外に入　觀水。

萱のぬけめの雪を燒家　仙化

老の身の繩なふ程にほそりける　山之
君流されし跡の關守　翁
明暮は干潟の松をかぞへつゝ　學白
命をおもへ船に這蟹　其角
起出て手水つかはん海のはた　嵐雪
しらぬ御寺を頼む有明　觀水
蕣や石ふむ坂の日にしほれ　全峰
小畑さかしき桑山子作らん　枳風
草の戸の馬を酒債におさへられ　翁
つねみる星を味におしゆる　學白
薫のしめり面白き夕涼み　仙化
幟かざして氏の天王　其角
御牧野の笛吹習ふ童聲　全峯
脩くるはしく腰にさす杖　枳風
見ぐるしと文字の子昂嘲て　其角
堺の錦蜀をあらへる　嵐雪
隱家や寄虫の友に交りなん　觀水
筏に出て海苔すくふ比　翁

谷深き日うらは花の木目のみ　學白
聲したれたる春の山鳥　由之

芭蕉庵十三同郷

時ぞ冬芳野をこめし旅のつと　露沾

烏巾を送る

もろこしのよしのゝ奥の頭巾哉　素堂
留守の中猶痩ぬべし冬の菊　不卜
木がらしの吹行うしろすがた哉　嵐雪
鳴千鳥富士を見かへれ鹽見坂　杉風
比しもや大井の嵐佐夜の霜　蚊足
橋までは供してふまん今朝の霜　仙化
旅衣さぞ紙小二ッはなからまし　枳風
朝毎の紙小やおもき霜の松　李下

葉下のすきものなの〳〵句あり

ぬきん出て送り申さん時雨哉　文鱗
時雨〳〵に鎰かり置ん帥の庵　學白

箱根山しぐれなき日を願ひけり　由之
蒲團借ス女もあらじ旅の宿　露荷
萩枯ぬむつの紙絹みやこまで　沾蓬
宿はづれ霜消る間は朝茶めせ　如泥
冬の日を猶したはるゝほまれ哉　溪石
冬がれを君が首途や花の雲　其角

詩歌文章はもらし侍る

しぐれづく雲にわれたる入日哉　杉風
眠り來る駕籠にもてなす時雨哉　沾蓬
雲よりも先にこぼるゝしぐれ哉　去來
よくきけば北にかぎらぬ時雨哉　蚊足
蛛のゐの破れにとまる朽葉哉　冬市
蟬のからつれて舞行木葉哉　爲睦
さまざまの木葉集る山路哉　枳風
牛䑺に跡をかへす木葉かな　好柳

深川夜泊

木がらしや夜の木魚に吹やみぬ　李下

枳に木がらしいたき心かな　巴風
冬枯の人目にあまる瓢かな　同
松苗も枯野に目だつ嵐哉　枳風
萱屋の便なげなり冬木立　琴風
心しる僧とかたらんふゆ木立　卜千

甲斐山中にさまよひける夜、宿かりぬべきかたもなくて

刀さげてあやしき霜の地藏哉　破笠
はつ霜や衾にこもる鐘の聲　野馬
霜下りてせきたに寒きね覺哉　永中
古寺の霜にいたまぬ檍かな　吼雲
芭蕉いづれ根笹に霜の花盛　素堂

對客

我店の霜迄見たし月の色　好柳

和ニ好柳子一

人をみん冬のはしるも夕凉み　其角

をのが酒債をのこす鈍賣　好柳
塩風に羽かく鳶の松たれて　由之

夜座一句

何となく冬夜隣をきかれけり　其角
うづみ火に芋やく人は薫モノス　同
後朝のうづみ火おこす泪かな　紋水
門さして世間は寒しむつかしゝ　蚊足
炭はさむ音さへ氷る寐耳哉　嵐蘭
灯の影に顔すゝびたる火燵哉　魚兒
爐を繞る命つれなし榾の蟻　似分
炭籠としらで經よむ法師哉　不炊
茶の花に炭やく家を見によらん　巴風

寒蠅

憎まれてながらふる人冬の蠅　其角

法華を聞侍りて
深着世樂無有慧心
つとめよと親もあたらぬ火燵哉　嵐雪
髮おきや門通る子もみられけり　景道

宿二僧房一

あられなし閼伽の折敷に冬菜かな　其角
駒形に往來うれしや寒念佛　三園
川風やわたし船待寒念佛　湖水
曉のつくばにたつや寒念佛　其角
星ひとつ五位一聲のさむさ哉　湖春
敷浪に浮桶かぶる千鳥哉　冬柏
水鳥の朝日蹴たつるうねり哉　由之
あの男筏に寐るか夕ちどり　由夕
鈴ふるふ鷹に晴見る尾上哉　冬市

十二月九日はつ雪降のよろこび

初雪や幸菴に罷有ん　芭蕉

對二友人一

君火をたけよきもの見せむ雪まるげ　同

山莊の夕雪

雪に猶こゝろの雪の小松原　露沾
猿引や市に叫ばん雪のくれ　沾荷

窓明て閒半雪降ル夕かな　魚兒
黄昏も過るか雪のたまる音　孤屋

友靜亭にて物くふて

比良の雪赤鰯より詠めけり　自悅
をの〳〵は小野へもゆかで雪を見る　文鱗
行烏寢所見たし雪の昏　濁子
うす雪の破風より出る煙かな　白桒
初雪に目をはじかるゝ篭竹哉　由之

露沾公に　初雪

はつ雪は盃にもるべき詠哉　其角

その朝雪見に出て

日比きく皺も雪のあした哉　露沾
漸ふたつみつ爐にほこる炭　露荷
繪絹張ル籬の竹を心にて　其角

狹レ居

一すじとけさはまたがん道の雪　沾德

ぐれ〳〵とむなしき雪の浮木哉　安重
辛崎に好過し雪の詠かな　觀水
はかなしや汐の干瀉の石の雪　蚊足
闇の夜や顔先ツ雪をしり初る　魚兒
慶運が髑髏や寒き雪の声　紋水
夜あらしや衣桁を拂ふ窓の雪　孤舟
初雪の風呂によばるゝ夕かな　仙化
白川や闕に闕ある雪のくれ　東順

草庵

門の雪樒ありやと訪れけり　其角
雪の日や柴が日比の道近し　全峯
汲のうへに雪あり蜆とる人か　枳風
門の外傘たゝくみぞれ哉　斧鉞
雪深し科頭匂ふそのゝ梅　釣雪
梅を折に笠もどかしや雪霙　コ齋
鎌倉の僧ことゝはん冬の梅　露沾

漫成五倫

君臣有レ義

其角

家の子等けふを忘るなとしわすれ

父子有レ親

鈍汁や惜きよめには猶くれじ

夫婦有レ別

鉢たゝきめおと出ぬも哀也

長幼有レ序

袴着は娘の子にもはかまかな

朋友有レ信

君と我爐に手を返えしかなかり

我家のとし忘れせんさびえぼし　沾荷

節分

豆とりて我も心の鬼うたん　野馬

市に入てしばし心を師走哉　素堂

よき夢を風にさまされしはす哉　魚兒

碓（からうす）に影ふむ月のしはすかな　紋水

室の津に足袋さす女師走哉　如泥

子を祝す

羽子板にはま矢を願ふ師走哉　露沾

歌をよむ身のたうときよ年のくれ　文鱗

淋しさは船にあかとるとしの暮　根風

行舟やいづれの海に年とらん　孤屋

年の夜や人に手足の十ばかり　去來

心よき年

恙なく大晦日の寐酒かな　蚊足

むしりあふ市の笑やとしのくれ　擧白

おもへばや泣れ笑はれとしのくれ　嵐雪

年の市線香買に出ばやな　芭蕉

閑

年の一夜王子の狐見にゆかん　素堂

晦日〳〵や御念の入て大晦日　蚊足

月雪とのさばりけらしとしの昏　芭蕉

年々の悔

子をもたばいくつなるべきとしのくれ　其角

貞享丁卯歳霜月仲三日

京堀川通錦小路上ル町
皇都書林　西村市郎右衛門藏版

冬の日

荷兮撰

笠は長途の雨にほころび、帋衣はとまり〳〵のあらしにもめたり。侘つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂哥の才士、此國にたどりし事を不圖おもひ出て申侍る。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉　芭蕉
　たそやとばしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
　かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜國
　日のちり〳〵に野に米を苅　正平
わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
　髮はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
　きえぬそとばにすご〳〵となく　荷兮
影法のあかつきさむく火を燒て　芭蕉
　あるじはひんにたえし虚家　杜國
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
　霧にふね引人はちんばか　野水
たそがれを横にながむる月ほそし　杜國
　となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衞の花のさかりきく　野水
　蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顏おぼろなる　重五
　いまぞ恨の矢をはなつ聲　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
　しばし宗祇の名を付し水　杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
　冬がれわけてひとり唐苣　野水
しら〳〵と碎けしは人の骨か何　杜國
　烏賊はゑびすの國のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけし郭公　野水
　秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五

巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗(こうしろ)の魚をいたゞき　杜國
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯(フリユ)に志賀の花漉て　杜國
廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども
壯年いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる　野水
霜にまた見る蕣の食　杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮
廊呂が月袖に鞨(かつ)鼓(こ)をならすらん　重五
桃花をたをる貞德の富　正平
雨こゆる淺香の田螺ほりうへて　杜國
奥のきさらぎを只なきになく　野水
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
緣さまたげの恨みのこりし　はせを
口おしと瘤(ツスヘ)をちぎるちからなき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遲かれ牡丹ぬす人　杜國
縄あみのかゝりはやぶれ壁落て　重五
こつ〱とのみ地藏切町　荷兮
初はなの世とや嫁(よめり)のいかめしく　杜國
かぶろいくらの春ぞかはゆき　野水
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなる　かけい
うぐひす起よ帋燭とぼして　芭蕉
篠ふかく梢は柹の蔕(へた)さびし　野水
三絃からん不破のせき人　重五
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
ねざめ〱のさても七十　杜國
奉加めす御堂に金(こがね)うちになひ　重五

ひとつの傘の下擧りさす　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮　杜國
まどに手づから薄樣をすき　野水
月にたてる唐輪の髪の赤枯て　荷兮
戀せぬきぬた臨濟をまつ　はせを
秋蟬の虚に聲きくしづかさは　野水
藤の實つたふ雫ほつちり　重五
袂より硯をひらき山かげに　芭蕉
ひとりは典侍の局か内侍か　杜國
三ケの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ　重五
しらかみいさむ越の獨活刈　荷兮

つえをひく事僅に
十歩

つゝみかねて月とり落す霽かな　杜國
こほりふみ行水のいなづま　重五
歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平
らうたげに物よむ娘かしづきて　重五
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜國
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麥さへ靑し滋賀樂の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜國
紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五
まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
佛喰たる魚解きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰がれて　重五
五形菫の畠六反　とこく
うれしげに囀る雲雀ちり〳〵と　芭蕉
眞晝の馬のねぶたがほ也　野水
おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜國
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮

捨し子は柴刈長にのびつらん　野水
　晦日をさむく刀賣る年　重五
雪の狂呉の國の笠めづらしき　荷兮
　襟に高雄が片袖をとく　はせを
あた人と樽を枕に呑ほさん　重五
　芥子のひとへに名をこぼす禪　杜國
三ヶ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
　烌湖かすかに琴かへす者　野水
烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜國
　聲よき念佛藪をへだつる　荷兮
かげうすき行燈けしに起侘て　野水
　おもひかねつも夜るの帶引　重五
こがれ飛たましゐ花のかげに入　荷兮
　その望の日を我もおなじく　はせを

なに波津にあし火焼家はすゝけたれど

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
　人の粧ひを鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜國
　鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
　荻織るかさを市に振する　羽笠
賀茂川や胡麿千代祭り黴近み　荷兮
　いはくらの聟なつかしのころ　重五
おもふこと布搗哥にわらはれて　野水
　うきははたちを越る三平　杜國
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
　火をかぬ火燵なき人を見む　芭蕉
門守の翁に帋子かりて寢る　重五
　血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜國
　ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣櫻の黴とすてにける　芭蕉
　僧ものいはず欵冬を呑　羽笠

白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
　宣旨かしこく釵を鑄る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
　なかだちそむる七夕のつま　杜國
西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
　蘭のあぶらに卜木うつ音　芭蕉
賤の家に賢なる女見てかへる　重五
　釣瓶に粟をあらふ日のくれ　荷兮
はやり來て撫子かざる正月に　杜國
　つゞみ手向る辨慶の宮　野水
寅の日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
　雲かうばしき南京の地　羽笠
いがきして誰ともしらぬ人の像　荷兮
　泥にこゝろのきよき芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　やすい
　狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなく／＼簾おしやりて　羽笠
　ねられぬ夢を責るむら雨　杜國

田家眺望

霜月や鸛の彳々ならびゐて　荷兮
　冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
　ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜國
音もなき具足に月のうす／＼と　羽笠
　酌とる童蘭切にいで　埜水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
　漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜國
　茶に糸遊をそむる風の香　重五
雉追に烏帽子の女五三十　野水
　庭に木曾作るこひの薄衣　羽笠
なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮
　麻かりといふ哥の集あむ　芭蕉
江を近く獨樂菴と世を捨て　重五

我月出よ身はおぼろなる　杜國
たび衣笛に落花を打拂　羽笠
籠輿ゆるす木瓜の山あい　野水
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
乞食の蓑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜國
御幸に進む水のみくすり　重五
ことにてる年の小角豆の花もろし　野水
萱屋まばらに炭團つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮の實　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
露をくきつね風やかなしき　杜國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　かける
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜國
春のしらすの雪はきをよぶ　重五
水干を秀句の聖わかやかに　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　うりつ

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠
樽火にあぶるかれはらの松　荷兮
とくさ苅下着に髪をちやせんして　重五
檜笠に宮をやつす朝露　杜國
銀に蛤かはん月は海　芭蕉
ひだりに橋をすかす岐阜山　野水

貞享甲子歳

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

春の日

荷兮撰

曙見んと人々の戸扣きあひて、熱田のかたにゆきぬ。渡し船さはがしくなりゆく比、並松のかたも見えわたりて、いとのどかなり。重五か枝折をける竹墻ほどちかきにたちより、けさのけしきをおもひ出侍る。

二月十八日

春めくや人さま／＼の伊勢まいり　荷兮
　櫻ちる中馬ながく連　重五
山かすむ月一時に館（イエ）立て　雨桐
　鎧ながらの火にあたる也　李風
しほ風によく／＼聞ば鴎なく　昌圭
　くもりに沖の岩黒く見え　執筆
須（ウ）磨寺に汗の帷子脱かへむ　重五
　をの／＼なみだ笛を戴く　荷兮
文王のはやしにけふも土ほりて　李風
　雨の雫の角のなき草　雨桐
肌寒ミ一度は骨をほどく世に　荷兮
　傾城乳（たい）をかくす晨明　昌圭
霧はらふ鏡に人の影移り　雨桐
　わや／＼とのみ神輿（ミコシ）かく里　重五
鳥居より半道奥の砂行て　昌圭
　花に長男（アトナ）の帋鳶（タコ）あぐる比　李風
柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや　重五
　入かゝる日に蝶いそぐなり　荷兮

二

うつかりと麥なぐる家に連待て　李風
　かほ懐に梓（アヅサ）きゝゐる　雨桐
黒髪をたばぬるほどに切殘し　荷兮
　いともかしこき五位の針立　昌圭
松の木に宮司が門はうつぶきて　雨桐
　はだしの跡も見えぬ時雨ぞ　重五
朝朗（ぼらけ）豆腐を鳶にとられける　昌圭
　念佛さぶげに秋あはれ也　李風
穂蓼生ふ藏を住るに侘なして　重五

我名を橋の名によばる月　荷兮
傘の内近付になる雨の昏に　李風
朝熊おるゝ出家ほく／＼　雨桐

ウ
ほとゝぎす西行ならば哥よまん　荷兮
釣瓶ひとつを二人してわけ　昌圭
世にあはぬ局涙に年とりて　雨桐
記念にもらふ嵯峨の苣畑　重五
いく春を花と竹とにいそがしく　昌圭
弟も兄も鳥とりにゆく　李風

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら　旦藁
おもしろふかすむかた／＼の鐘　野水
春の旅節供なるらん袴着て　荷兮
口すゝぐべき清水ながるゝ　越人
松風にたをれぬ程の酒の醉　羽笠
賣のこしたる虫はなつ月　執筆

ウ
笠白き太秦祭過にけり　野水
有ある垣によい子見てをく　旦藁
表町ゆづりて二人髮剃ん　越人
曉いかに車ゆくすじ　荷兮
鱈負ふて大津の濱に入にけり　旦藁
何やら聞ん我園の葉　越人
旅衣あたまばかりを蚊やかりて　羽笠
袂ふみたをす方日のはら　野水
里人に薦を施す怀の雨　越人
月なき浪に重石をく橋　羽笠
ころびたる木の根に花の鮎とらん　野水
諷盡せる春の湯の山　旦藁

二
のどけしや筑紫の袂伊勢の帶　越人
内侍のえらぶ代々の眉の圖　荷兮
物おもふ軍の中は片わきに　羽笠
名もかち栗とぢゝ申上ヶ　野水
大年は念佛となふる惠美須棚　旦藁
ものごと無我によき隣也　越人

朝夕の若葉のために枸杞うへて　荷兮
宮古に廿日はやき麥の粉　羽笠
一夜かる宿は馬かふ寺なれや　野水
こは魂まつるきさらぎの月　旦藁
陽炎のもえ殘りたる夫婦にて　越人
春雨袖に御哥いたゞく　荷兮
田を持て花みる里に生けり　羽笠
力の筋をつぎし中の子　野水
漣や三井の末寺の跡とりに　旦藁
高びくのみぞ雪の山々　越人
見つけたり廿九日の月さむき　荷兮
君のつとめに氷ふみわけ　羽笠

三月十六日旦藁が田家にとまりて

蛙のみきゝてゆゝしき寢覺かな　野水
額にあたるはる雨のもり　旦藁

蕨煮る岩木の臭き宿かりて　越人
まじまじ人をみたる馬の子　荷兮
立てのる渡しの舟の月影に　冬文
芦の穗を摺る傘の端　執筆
磯ぎはに施餓鬼の僧の集りて　旦藁
岩のあひより藏みゆる里　野水
雨の日も瓶燒やらん煙たつ　荷兮
ひだるき事も旅の一つに　越人
尋よる坊主は住まず錠おりて　野水
解てやなかん枝むすぶ松　冬文

今宵は更たりとてやみぬ

同十九日荷兮室にて

唉わけの菊にはおしき白露ぞ　越人
秋の和名にかゝる順　旦藁
初雁の聲にみづから火を打ぬ　冬文
別の月になみだあらはせ　荷兮
跡ぞ花四の宮よりは唐輪にて　旦藁
春ゆく道の笠もむつかし　野水

二

永き日や今朝を昨日に忘るらん　荷兮

簑の子茸生ふる五月雨の中　越人

紹鴎が瓢はありて米はなく　野水

連哥のもとにあたるいそがし　冬文

蘿蔔に柴押まげて音とめん　越人

岩苔とりの籠にさげられ　旦藁

むさぼりに帛着てありく世の中は　冬文

筵二枚もひろき我菴　越人

朝毎の露あはれさに麥作ル　旦藁

碁うちを送るきぬ〴〵の月　野水

風のなき秋の日舟に網入よ　荷兮

鳥羽の湊のおどり笑ひに　冬文

あらましのざこね筑摩も見て過ぬ　野水

つら〳〵一期聟の名もなし　荷兮

我春の若水汲に晝起て　越人

餅を食つゝいはふ君が代　旦藁

山は花所のこらず遊ぶ日に　冬文

くもらずてらず雲雀鳴也　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあぶなき岨のくづれ哉　越人

蝶水のみにおるゝ岩はし　舟泉

きさらぎや餅晒すべき雪ありて　聽雪

行幸のたびに洗ふ土器　螽髭

晦日を鷹ゝの鍛冶のいそがしく　荷兮

月なき空の門はやくあけ　執筆

春

昌陸の松とは盡ぬ御代の春　利重

元日の木の間の競馬足ゆるし　重五

初春の遠里牛のなき日哉　昌圭

けさの春海はほどあり麥の原　雨桐

門は松芍藥園の雪さむし　舟泉

鯉の音水ほの闇く梅白し　羽笠

舟〳〵の小松に雪の殘けり　旦藁

曙の人顔牡丹霞にひらきけり　杜國

腰てらす元日里の睡りかな　犀夕
星はら〱かすまぬ先の四方(よも)の色　呑霞
けふとても小松負ふらん牛の夢　聴雪
朝日二分柳の動く匂ひかな　荷兮
先明て野の末ひくき霞哉　同
芳摘とてこけて酒なき瓢哉　旦藁

のがれたる人の許へ行きて

見かへれば白壁いやし夕がすみ　越人
古池や蛙飛こむ水のをと　芭蕉
傘張の睡り胡蝶のやどり哉　重五
山や花墻根〱の酒ばやし　亀洞
花にうづもれて夢より直に死んかな　越人

春野吟

足跡に櫻を曲る菴二つ　杜國
麓寺かくれぬものはさくらかな　李風
棖木まで櫻の遅きながめかな　荷兮

餞別

藤の花たゞうつぶいて別哉　越人
山畑の茶つみをかざす夕日かな　重五
蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春のくれ　同

夏

ほとゝぎすその山鳥の尾は長し　九白
郭公さゆのみ焼てぬる夜哉　李風
かつこ鳥板屋の背戸の一里塚　越人
うれしさは葉がくれ梅の一つ哉　杜國
若竹のうらふみたるゝ雀かな　亀洞
傘をたゝまで螢みる夜哉　舟泉

武藏坊をとぶらふ

すゞかけやしてゆく空の衣川　商露

逢坂の夜は、笠みゆるほどに明て

馬かへておくれたりけり夏の月　聴雪

老聃(たん)曰知足之足常足

夕がほに雑炊あつき藁屋哉　越人
箒木の微雨(こさめ)こぼれて鳴蚊哉　柳雨
はゝき木はながむる中に昏(くれ)けり　塵交

萱草は隨分暑き花の色　荷兮
蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　仝
曉の夏陰茶屋の遲きかな　呂圭
夏川の音に宿かる木曾路哉　重五

譬喩品ノ三界無安猶如火宅といへる心を

六月の汗ぬぐひ居る臺(うてな)かな　越人

秋

蒼戸の畑なすび黄ばみてきりぎりす　旦藁

貧家の玉祭

玉まつり柱にむかふ夕かな　越人
雁きゝてまた一寐入する夜かな　雨桐
雲折々人をやすむる月見哉　芭蕉
山寺に米つくほどの月夜哉　越人
瓦ふく家も面白や秋の月　野水

八嶋をかける屏風の繪をみて

具足着た顔のみ多し月見舟　仝

待戀

來ぬ殿を唐黍たかし見おろさん　荷兮

閨房増戀

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな　荷兮
朝皃はすゑ一りんに成にけり　舟泉

冬

馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ　杜國

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申　大垣住 如行
雪のはら蕣の子の薄かな　呂碧
馬をさへながむる雪のあした哉　芭蕉

芭蕉翁をおくりてかへる時

行燈の煤けぞ寒き雪のくれ　越人

隱士にかりなる室をもうけて

この比の氷ふみわる名殘かな　杜國
あたらしき茶袋ひとつ冬籠　荷兮

貞享三丙丑年仲秋下浣

句餞別

芭蕉翁撰

句餞別 目錄

芭蕉老人有レ故、赴二鄕國一。老人嘗謂他鄕即吾鄕、今猶莫作戲斯語。吾何不レ信二斯語一乎。因綴二卑語三絶一以投二頭陀一。

初冬念一　素堂山子

其一

君去蕉庵莫止鄕　故人多處即成鄕
風飡露宿豈勞意　胸次素無何有鄕

其二

弱笠痩節寄一身　離筵回首惱吟身
河邊楊柳無由折　早動翠條迎老身

其三

陰月稱陽又小春　小春又那似陽春
擧盃皮裏陽春在　爲唱陽關一曲春

奉レ送三芭蕉翁赴二于故鄕一

小春念五　桐山正堅

東西兩地學參商　獨向北風伴雁行
汲汲浮生如一夢　皈鄕來日報平康

餞別二四六八十言韻詞不章故旁點

友松政宜稿

霜散道晶秋直等影　笠曲穀晴
君往伊州別業　我留江府金城冬
夜長雲長満夢破　適興俳諧琴棋佳
句成　鼓筆何宜聴處處寒山寺
日和謹輕得天倫樂情

昔貞享四丁卯歳十月廿五日
翁い故郷に歸給ふた送りたてまつ
る

我ちから裳しほらん雪の道　嵐蘭

なたたらす唐うたの古風なかりて
俳諧ないぶ

丁卯初冬日 仝人拜稿

送君小橋側　分袂隔西東
動風岸上柳　散霜林下楓
遙想多病軀　長路豈無抑

瓢然一嚢子　旬夫任天工
頷笠萬里雪　破笠孤村霰
箱根山嶮嶮　大井川洪洪
登嶮強莫歩　臨水亦乗船
無事到故國　先傳平安裏
佳景幽勝地　只恐久認蹤
從今花與月　獨吟望蒼穹

餞別　遊窗

くさまくらねざめ〳〵のつもり一二や
　伊勢までとなく雪にたどらん

同　安適

たちかへる浪をこゝろにわするなよ
　世を海しらぬ國にゆくとも

離別　同

ゆく道の駒もすゝまじむさしあぶみ
　さすが年へしそらの名残に

芭蕉庵主しばらく故園にかへりなんとす。とめる人はたからを送り、才ある人はことばを送るべきに、我此二ッにあづからず。むかしもろこしのさかひにかよひけるころ、一ッの烏巾を得たり。これをあたへて、たからと才にかふるものならし。

素堂山子

もろこしのよしのゝ奥の頭巾かな　不卜

留守のうち猶やせぬべし冬の菊　杉風

鴨千鳥富士を見かへれ汐見坂　仙化

橋まではともしてふまん霜路哉　北鯤

簑虫もるすを鳴らん霜の庵

而已

三ッまたや衛は残る波の聲　ちり

来月は猶雪ふらん一しぐれ　狭風

霜遠くちいさき笠のあさ日哉　李下

朝〳〵の紙小やおもき松の霜　枳風

旅寐さぞ紙小一ツはなからまし

葉下はすきものなり〳〵句ありし。なにかしの昔は、かゝしのなこゝて思ひをのべ、あるは人なしてこれをおる。あさな〳〵の紙小の霜、かさねていはんもおこがましけれど

ぬきんいでゝおくり巾さんしぐれ哉　文鱗

溪石
冬の日を猶したはるゝほまれかな

京來紫氣
曾良
俳諧説て關路を通るしぐれかな

宗波
我夢を嘘（ナキ）ん霜の草枕

泥芹
初雪や古郷にまたん梅の花

苔翠
山や猶し見てもつめたき門の霜

夕菊
誰が家に沓を留めん雪の梢（ホズエ）

風泉
はつ雪や矢立の墨もかたからん

水萍
霜踏んで月をおひ行草枕

翠桃
うたひゆく時雨の笠か雪の笠

野馬
朝霜や師の脛おもふゆきのくれ

山之
はこね山しくれなき日を願ひ哉

孤屋
十德に綿をいれたき霜路哉

如泥
宿ヶはづれ霜消るまは朝茶めせ

露荷
蒲團
夜着をかす女もおなじ旅の宿

卜千
旅毎に誠したへるしぐれかな

蚊足
ころしもや大井の嵐佐夜の霜

沾（セン）蓬
萩かれぬ陸（ミチ）奥（ノク）の紙布みやこまで

已上

風の吹行うしろすがた哉　嵐雪
冬がれを君が首途や花の雲　其角

俳諧哥仙
旅泊に年を越てよしのゝ花にこゝろせん事を申す。

時は秋吉野をこめし旅のつと　露沾
鴈をともねに雲風の月　芭蕉
山陰に刈田の顔のにぎあひて　沾蓬
武者追つめし早川の水　キ角
くれかゝる空につめたき横あられ　露荷
をろさぬ窓に枝覗く松　沾荷
傘の繪をかくかしらかたぶけて　翁
祭むかへし神山の氏　沾
暑日の汗をかなしむ猿の聲　荷セン
捨し戸のよみがへりたる　蓬
行盡す五天むかしの法もなく　角
髪ある僧に鐘つかせ聞　ロカ
鬘を断ッ鎌倉山の奥ふかし　沾
しほるたもとを匂ふ風蘭　翁
月清く夕立洗ふみすの蝶　蓬
客をつかふて鯉てうじける　角
花咲て人〳〵参草の庵　ロカ
額板ひろふ山吹の橋　センカ

二

信濃路やたゝらの峡の春さえて　沾
聲うつかたに鳥歸る道　沾徳
楢の葉に我文集を書終り　翁
弟にゆるす妻のさかつき　ロカ
物かけは忍び安きに月晴て　センカ
琴を聞する夜のあさがほ　蓬
馬を下りて野服をかいとる秋の露　ロカ
九輪指さす尾上はるけき　沾
風の音ならぶ蘇鐵のいかめしく　蓬
大口着たる庭の雪掃　翁

うへもなく鳩の群立千木さびて　沾

　濁流を編くふす妻　センカ

ウ
一輪の形見の連歌膝に置　ロカ

　名を薙ぬべき越のたゝかひ　沾

面かけて鏡にむかふ男つき　蓬

　みはしをのぼるから獅子の聲　センカ

棚織、花の錦のおき打て　翁

　柳の水のすみかへる春　執筆

十八句　濁子

江戸櫻心かよはんいくしぐれ

　薩陲の霜にかへりみる月　芭蕉

貝ひろひ〳〵ゆく磯驅て　嵐雪

　醉ては人の肩にとりつく　其角

けふの賀のいでおもしろや祖父が舞　翁

　根松苗杉蟬の鳴聲　子

ウ
池の橋渡し始ぬ垣結て　角

みなと入帆のみゆるやね越シ　雪

世の中を諧にのがれたる茶の烟　子

　妹がかしらのからわやさしき　翁

かたみてふ袋の切のはつ〳〵に　雪

　夢を占きゝ闇の鶉風　子

津の國のなには〳〵と物うりて　翁

　二夜とまりのつくし侍　雪

一巻の連哥をとゞむ此寺に　子

　苗代もえる雨こまか也　雪

鷲の巣のいくつか花に見えすきて　翁

　禰宜下りかはる春の夕月　子

十句　松江

しろかねに蛤をめせ霜夜の鐘

　一羽別るゝ千どり一群　翁

枯草にいよ〳〵松のみどりして　曾良

　田中の道のとをりくれ行　依々

月ほそくをりが家しるはなれ馬　泥芹

　秋風上る門のはしとみ　水萍

ウ
露の糸錦をとをす梭(ヲサ)の音　風泉
　雨には見せじ蘭のきせ綿　夕菊
旅枕女あるじの情得て　苔翠
　傾城かげをかくす明ほの　執筆

十句　擧白

時雨〳〵に鎰(かぎ)かり置ん草の庵
　火燵の柴に侘(ワビ)を次人　翁
松風にそれたる鴫を見のがして　溪石
　朝氣はくらき湯の山の月　コ齋
鐘一ッ三江(ミサト)にかよふ秋の聲　キ角
　葛の縄面(ナハメ)をゆるされし文　ト千
ウ
繼子をもいたはるよめの名をとげて　嵐雪
　餅二かさねえにしそふ帯　白
吉原の土手に子日の松ひかん　翁
　誰がぬし有て錺する宮　石
艸庵のおるすきよむる落葉哉　仙化僕 吼雲

跋

白在庵祇徳記

八雲御抄にいはく、誹諧歌是はいかなるをいふにかあらん。またさしき様しる人なし。公任卿なども不レ知レ之而通俊なにと心えたるにかありけん。後拾遺、また千載集にも入て世に其歌ありて、その様知事なし。末代人非レ可レ定といへるより、今に誹諧をこのめる罕稀也。しかるに此名世にひろくもてあそぶ事は、そのかみ連誹のわいだめなく、連歌のしめやかなる後宴に、されば（守武）みたる誹諧躰に作意して、笑ひをなさる（宗鑑）とのみなりしに、この躰世にみさかりにして、國ゆするほどにはやりもてゆく事、貞徳道をつたへ、芭蕉句をとゝのひ、千載不朽の一器となりて、詩歌連誹の四家とは名づくるなり。されや、三傳の名家を世中に三代宗匠といへり。

三代宗匠之系

俳祖 貞徳――松永氏　長頭麿　延陀丸　逍遊軒
父永種七歳にして東福寺の喝食となる多能にして智恵あれば世に文殊喝食と申せし也
心を歌林に寄、思を風騒に罩す。老後目シイたりし也。常に木蓮の談柄をもてり。妙法院御門主より、大佛の脇にて、地屋敷を拝領して芦丸屋を建て、吟花廊といふ。回廊には木短册を

爾がはに打たり。又桃園・柿園・櫻戸等あり。承應二年十一月十五日九十四歲而卒。一說百二十 洛外下鳥羽實相寺に葬る。寬保四まで九十二年ニ至ル。

季吟

北村氏　法眼　拾穗軒　再昌院法印
寶永二乙酉六月十五日卒　齡八十二　東都池ノ端タ正覺寺ニ葬ル

近江の產にして幼稚より洛に登り、醫術を學び盧庵といふ。はじめ正章事貞室 につゐて誹道をたしみ、そのゝち紅梅千句のころ貞德門ンに入たり。歌學に長じ、古書さしては普く抄をなさゞるものなし。東都より秩を賜ふ。嫡子湖春元祿十丁丑正月十五日卒。貞德・季吟父子同日に卒す。

○西山宗因といふ隱士貞德を看侮して、一派を建立して談林風さいふ。

芭蕉

中興開祖　句餞別ノ撰者

松尾氏　桃青　風羅坊　泊船堂
元祿七戊十月十二日病疾を病て旅に死す。寬保四年まで五十一年にいたる。

伊州人仕ニ府主君ニ而有ニ忠勤一。學才秀發懷ニ出塵志一故解レ紐斷レ髮永成ニ隱士一。性好ニ風雅一師ニ北季吟一幾ニ乎得ニ其一體一也。

はじめ談林に長じ、後に看破して躬恒・貫之の本情を探りて、正風の一躰を建立す。天下擧て誹諧中興の開祖さあふぐと、佛家八家の祖師のごとし。門人三千に及べりさいふ。

此小冊子もとより翁の撰にして、見る所みな貞室の餞留也。續猿みのゝ例にまかせて、草稿のまゝ梓になしぬ。

寬保四年甲子春正月　　書林　川村源左衛門

常陸の杏闇家に藏する「句餞別」稿本により自準亭六世義者が「夏しぐれ」と題した、嘉永元年板行本には素堂の詩の前に左記の序及び歐詩を載せてある。該袖板行の「句餞別」にはこれを脫して居る。

丁卯孟冬下五日

芭蕉餞別

詩歌俳　四拾人

詩　九首　七人
和歌　三首　二人
俳諧發句　卅五　卅五人

芭蕉庵主桃青餞別詩歌并俳諧發句
昔貞享四丁卯歲十月廿五日旅行

奉送芭蕉洮先生驛　昭覽　慈竹

江上閑人宗草

拂衣何處云　懷鄉泥雲中
生涯漁樵樂　懷住詩酒濃
桃青源水浪　松綠貫頭風
徑雪向寒驛　離情萬事空

釋　南州

送桃青隱士歸故鄉

霜染楓林夕　友人歸故鄉
江山無盡錦　松青落葉黃

悟峰正喆拜艸

奉送芭蕉翁赴于故鄉　小春念五

這箇道人無所住　暫辭東海故鄉園
籬邊霜葉有殘菊　僮僕歡迎可待門

俳諧

千鳥掛（ちどりがけ）

健・順

知足稿

千鳥掛集序

鳴海のなにがし知足（ちそく）亭に、亡友ばせをの翁やどりけるころ、翁おもへらく、此所は名護や・あつた（熱田）にちかく、桑名・大垣へもまた遠からず。千鳥がけに行通ひて、殘生を送らんと、星崎の千鳥の吟も此折のことになん。あるじの知足、此ことばを耳にとゞめて、其程の風月をしるし集め、千鳥がけと名付て、他の世上にも見せなはしてんとのあらましにて、程なく泉下の人となりぬ。其子蝶羽（こてふ）、父のいひけんことをわすれずながら、世はたる（渡）事しげきにまぎれて、早とゝせに近く星霜をふりゆけば、世の風体もをのがさまぐ\にかはり侍れど、父の志をむなしくなしはてんも、ほいなきことにおもひとりて、ことし夏も半（なかは）に過行ころ、洛陽に至り漸あづさにちりばむる事になりぬ。やつがれの折節在京のころにて、此趣をきゝ折ならぬ千鳥のねをそへて、集のはしに筆をそゝぐのみ。我聞、川風寒み千鳥なく也の詠は、六月吟じ出てもそゞろ寒きよし。此千鳥がけも時今炎天に及べり。其たぐひにや沙汰し侍らん。又聞、東山殿鴨川の千鳥を聞に出たまふに、千本の道貞といへるもの、袖にらんじやたい（蘭奢待）をたきて出けるを聞召て、其香炉を御とりかはしありて、今の世に大千鳥・小千鳥とて賞せられけると也。此後かほど至れる千鳥をきかず。よし今香はたかず共、星崎の千鳥にひとりもゆき、あるは友ないてもゆきてきかまほし。又其あたりの哥枕、松風の里に旅人の夢をやぶり、ねざめの里に老のむかしをおもひ、夜寒の里の砧をきゝ、なるみ潟しほみつる時は上野の道を傳ひ、雨・雪には笠寺をたのみ、月のなき夜も星崎の光をあふぎて、猶風雅の友をよびつぎの濱千鳥、これかれ佳興すくなしとせず。むべなるかな。はせをが此所に心をとゞめしこと。

武陽散人　素　堂　書

正徳壬辰年林鐘下浣　印　印

俳諧千鳥掛集 上巻

星崎の闇を見よとや啼千鳥　芭蕉
船調ふる蚕の埋火　安信
築山のなだれに梅を植かけて　自笑
あそぶ子猫の春に逢つゝ　知足
鷽の聲夜を待月のほのか也　業言
岡のこなたの野邊青き風　如風
ウ
一里の雲母ながるゝ川上に　重辰
祠さだめて門ぞはびこる　言
市に出てしばし心を師走かな　足
牛にれかみて寒さわするゝ　信
籾臼の音聞ながら我いびき　風
月をほしたる蝶の酒　蕉
高紐に甲をかけて秋の風　笑
渡り初する宇治の橋守　風
庵造る西行谷のあはれとへ　足
啄木鳥たゝく杉の古枝　信
咲花に晝食の時を忘れけり　辰
山も霞むとまではつゞけし　足
名
辛螺からの油ながるゝ薄氷　風
角ある眉に化粧する霜　蕉
待宵の文を喰さく帳の内　言
寝られぬ夢に枕あつかひ　風
罪なくて配所にうたひ慰まん　信
庶子にゆづりし家のつり物　足
式日の日はかたぶきてこゝろせく　風
あさくさ米の出る川口　辰
欄干に頤ならぶ夕涼　蕉
笠持テあふつ螢火の影　笑
初月に外里の姉の新通ひ　足
薄はまねく荆袖引　蕉
ウ
朝霧につらきは鴻の觜ならす　辰
あかがねかはらなめらかにして　笑
氏人の庄蘭多キ花ざかり　言

駕籠幾むれの春とゞまらず　風
田を返すあたりに山の名を問て　信
かすみの外に鐘をかぞふる　執筆

めづらしや落葉のころの翁草　如風
衛士の薪と手折冬梅　芭蕉
御車の暫とまる雪かきて　安信
錢を袂にうつす夕月　重辰
矢巾の聲ほそながき萩の風　自笑
かしこの薄こゝの案庭　知足

哥仙有略之

京まではまだなかぞらや雪の雲　芭蕉
千鳥しばらく此海の月　業言
小蛤ふめどたまらず袖ひぢて　知足
酒氣さむればうらなしの風　如風
引捨し琵琶の嚢を打はらひ　安信
僕はおくれて牛いそぐ也　自笑
ふたつみつ反哺の鴉鳴つるゝ　重辰
明日の命の飯けぶりたつ　信
わたり舟夜も明がたに山みえて　笑
鐘いくところにしかひがしか　蕉
共すがた別の後も一わらひ　足
なみだをそへて鄙の腰折　言
髮けづる熊の油の名もつらく　蕉
身に疵出て秋は寢苦し　風
釣簾の外にたばこをたゝむ月の前　信
楊枝すまふのちからあらそひ　足
小袖して花の風をもいとふべし　辰
こがるゝ猫の子を捨て行　信
名
うき年を取てはたちも漸過ぬ　足
父のいくさを起ふしの夢　蕉
松陰にすこし草ある波の聲　笑
翅をふるふ鳰ひとつがひ　言

しづかなる龜は朝日を戴きて　信
　三度ほしたる勅のかはらけ　笑
山守が車にけづる木をになひ　蕉
　燧(ひうち)ならして岩をうちかく　足
瀧津瀨に行ふ法の朝嵐　風
　狐かくるゝ蔦のくさむら　笑
殿やれて月はむかしの影ながら　言
　老かむうばがころも打音　蕉

ウ

ふすぶりし榾(ほだ)の煙のしらけたる　辰
　陣のかり屋に碁を作る程　信
山更によこおりふせる雨の脚　風
　氣をたすけなんほとゝぎす鳴ヶ　足
花盛文をあつむる窓閉て　言
　御燈かゝぐる神垣の梅　執筆

芭蕉翁、もさ見し人を訪ひ、三河國に越へ、序おもしろければ、伊良古崎見んと、白浪よする渚をつたひ、からうじて歸給ひし旅の哀を聞て　知足

燒飯や伊良古の雪にくづれけん
　砂さむかりし我あしの跡　芭蕉
松をぬく力に君が子日して　越人
　いつか烏帽子の脱(ぬげ)る春風　足
眠るやら馬のあるかぬ暖さ　蕉
　曇をかくす朧夜の月　人

寂照庵知足子の許へ、はせを翁を尋來て

幾落葉それほど袖もほころびず　荷兮
　旅寢の霜を見するあかゞり　芭蕉
今朝の月替る小荷駄に鞭當て　知足
　里の踊に野菊折ける　野水

寂照庵に旅寢して

置炭や更に旅ともおもはれず　越人
雪をもてなす夜すがらの松　知足
海士の子が鯨を告る貝吹て　芭蕉
背戸より直に踏こはす垣　人
歌よせん此名月をたゞにやは　足
蕎麥のみつぎを通す關守　蕉

鳴海出羽守氏雲宅にて

面白し雪にやならん冬の雨　芭蕉
氷をたゝく田井の大鷺　自笑
船繋ぐ岸の三股荻かれて　知足

蝸盧の高樓にいざなはれ、指さすかたのひさッ〳〵におごろかれて、猶昏をおしむ。

かきたてゝ見する夕日や松衛　轍士
障子開れば寒き川風　知足
袴着ぬ人を上座に茶を入て　蝶羽
きのふ迯いた馬貰ひけり　龜世
不自由をこらゆればこそ月の市　安信
新酒といふにそれこゝろ見よ　洗古

哥仙有略之

寢覺松風の里も此近邊(ちかき)り成べし。

火燵から友呼續(よびつぎ)の濱近し　團友
窓つきあぐる時雨一息　知足
朝鳥市の立日をわめくらん　露川
入かゝりたる月のまひ〳〵　如瓶
笹葺は笹と思ひて取殘し　足
足駄で山をおりる秋風　友

哥仙略

初雪や寢言にいひし夢合　知足
皆うち並ぶ柵の賑ひ　團友
あら壁の匂ひ靜に風止て　安信
さらばと今日は禮口が明ッ　露川
夕月の剃月代にしらみたり　業言
どこらへ行て宿る雁金　如瓶

哥仙略

露川亭にて

打まじる今日や木の葉の魚になる　知足
小春の空のとけあふた雲　露川
その里へ戻らるゝ駕こしらへて　獨ト
時宜する内に冷る煎茶　素覽
材木を取ちらしたる暮の月　吏明
吹も習はぬ濱の秋風　執筆

蝸盧亭にて

深閑と星崎寒し草まくら　舍羅
何をふれ行すゞ鴨の聲　知足
絹を裁(たつ)日は殊更にめでたくて　安信
次をのぞけば匂ふ杉の戸　蝶羽
盃に花柚を飛ばす片の上　鷗世
あしたの事はしらぬ望月　執筆

哥仙略

から風や吹ほど吹て霜白し　知足
すくんだやうな冬の鑊鷺　路通
生魚のすくなひ折は客の來て　仝
小ぐらい月を無機嫌でみる　足
新綿を蒲團にいるゝ下リ前　仝
礁をもッと遠う聞たき　通
ウ
色艶もつけぬ浮世の樂をする　仝
山の中でもはやる念佛　足

しら雲の下に芳し花樗(あふち)　全
　きめよき顏に薄化粧する　通
哀さをためて書たる文の來る　全
　あくたもくたのせまる物前　足
何所となうとりひろげたる中屋鋪　全
　土をつくねて獸を燒　通
冬の月坊主は耳の根がさむい　全
　京への駕籠のをらぬ栗栖野　足
見た事は咄にもなる華の宿　通
　夏をこなたに布施紅の咲　全
名 陽炎の金原つゞき土肥て　足
　口をたゝけば日はしたになる　全
大やうな御寺の世話も引請る　通
　福々したる在のとし並　全
後の月見てから後の十七夜　足
　芦穗の中をのぼる新三　全
ひとしきりしづめて渡る鴛の聲　通
　身肉を分し子に緣をくむ　全
人しれず白髮天窓に神いじり　足
　夢見たやうな情わすれぬ　全
四條より結句紅(たすき)のゆふ涼　通
　もんどりうつて郭公啼　全
ウ あの雲をひよつと落たる地雷　足
　おさまつてよむ理趣經の頭　全
天井は生てはたらく古法眼　通
　翠簾のうちから猫の穿鑿　全
花盛ぎつしとつまる大芝居　足
　旅をせば日の永(ながき)頂上　執筆

冬之部發句

千鳥

聞あかでもどる汀や千鳥足　貞德
淡路潟通ふや須磨の千鳥がけ　德元
唐までも行か千鳥の浦めぐり　姬 杉風
浦ふれて千鳥も鳴や船大工　宇古

打も寝ぬ鍛冶が火青し小夜衛　新足
品川や塵をはなれて啼千どり　百丸
せはしなや羽もやすめず岩衛　伊丹 人角
目の驕收る雪の千鳥かな　長父
鋤鍬の身はいらぬぎに千鳥かな　德七
櫂柄に頭巾を干や磯ちどり　麥秀
明方の輕き衾や磯ちどり　金風
引汐に千鳥の聲は何國まで　有馬 和幟
千鳥ともねるか夜寒の里の妹　難波 昨非
靜かなる中のうごきは千どり哉　甘泉
淋しさの裏啼かへす千どり哉　之白
更る夜は千鳥にをるゝ膠かな　月尋
方圓の影や心の小夜ちどり　柳水
いかになるみは爰じやもの此千鳥　全晦
不二うつる浪の寝入て千鳥かな　龍風
起はせず枕はなるゝ朝ちどり　光彦
ほし崎や波の笠着る磯千鳥　喪我
飛音や鳴ぬちどりの程拍子　泥隱

待ずしも凪の夕のちどり寄　鷹山
浦山し千鳥にあかん綱代守　幸来
友ちどり火燒ぬ寺に明にけり　嘉葉
四ッ二ッ明石のね覺陸奥千鳥　文廸
傘海月相舍りとや濱ちどり　寸松
天てるや女筆の行衛千鳥形　法竹
浦風の殊の外なる千どりかな　伊賀 夕市
曉の欠がなくか友ちどり　伊勢 笑々翁
呼續や枕とかへる小夜衛　陸奥 雲之
濱千どり緞子の夜着に聞夜哉　三河 白雪
爐の炭を啼はそめたる千鳥哉　桃先
とまり得ぬ波や崩れて鳴千鳥　周東
鳴といふ鳴海の四季や啼千どり　尹之
此海に節の筋引ちどりかな　尾城 如行
鷄のあとに矢橋の千鳥哉　夕道
狂ひけり波の兎と小夜千鳥　熱田 東藤
不斷さへしぐるゝ耳を小夜千どり　熱田 祖月
月雪の跡の闇鳴ちどりかな　寺本 暮岫

老ほれが友たるものや友ちどり　苔巖
濱まつの音やおほへて啼千鳥　獨笑
海士の住里や都と啼ちどり　（大高）酒聖
此浦の功かちどりの噞がはり　舟鷺
浦は町やむかしの鳴海啼ちどり　（ナルミ）業言
鳥さへ鳴つぶしたる千鳥かな　安信
海を田に埋て鳴なるちどり哉　重辰
立波にねられぬと鳴や小夜衛　雨亭
此里の松にきけとや鳴千どり　自笑
往もせず來もせぬ浦の千鳥かな　牛歩
猫も我におされて鳴な小夜衛　一邑
磯ちどり鳴よ今夜は幾日汐　洗古
ひとり行浦やすゝとき小夜衛　扇河
汐風に尾頭ならぶちどりかな　蟬木
呼續の浦に關なし啼千鳥　（八幡）秋蒲
海士の火にそなへ崩すや村千鳥　嬉斗
打て來る波を枕や啼千鳥　鷺汀
和田殿の九十三騎や浦千どり　鯉走

幾つかは産て名に呼友千鳥　和子
旅ならぬ耳に問ばや小夜ちどり　一海
磯ちどり共ふみあとや文字づくし　一溫
汐滿や麥の二葉を友ちどり　泥燕
小夜ちどり枕焦すやたばこ盆　龜世
けふまでは人の噂や啼千鳥　知足
晝の内鷗に眠りちどりには　素堂

鳴海知足子は芭蕉翁の古き因にて、旅寢の津の見所と定めて、月に雪にやすらはれし其心ざし、今もむなしからざれば、予も又たづねよりて、むかしに成行事ども物がたり聞へしに、日數とゞまりて、古翁の月忌にさへ當り侍ればたゞにあらぬやはさ、道好める人々を招き、追善を催されぬ。たゞなつかしき世の胸にうかびて、句つゞるべきおもひなけれど、しきりにさあればやます。

千鳥鳴爰やむかしの杖やすめ　路通
此浦のちどりに殘る記念かな　蝶羽
俤のしぐれもこれや片便宜　白笑
俤は繪にもかゝれぬ紙子かな　龜世
落葉焼けふの手向や七茶釜　知足

時雨

干網に入日染つゝしぐれつゝ　來山
そよ時雨筧の水の生て行　知足
秋の哀すゝぎあげたり初しぐれ　ナゴヤ木雞
さゞめ言物にもならぬしぐれかな　肥後宗信
來ぬ人をしかるところにしぐれけり　筑前野吟
ヽーーーヽーーーーニヽ
下同はやこなたへさいふ露の
ヘルニーーーニヽ下ヽーヽーー
むぐらの宿はうれたく
ーヽレーテヽー
さもヤヲハ補なかたし
ーーフヽーヽー
きて御さまりあ
ヽーテーニ
れやたび人
たび人と我名よばれむはつしぐれ　はせを
かつぎした男見せけり一しぐれ　一邑

傘借せと背戸たゝく也夕しぐれ　雨伯

水仙花

置霜の敵を味方に水仙花　乙州
水仙の組合はなし獨武者　蝶羽

茶の花　上野ゝ道にて

茶の花や須磨の上野は松ばかり　素堂
茶の花や徑わけたる星月夜　龜世
茶の花のあるじや庭に唯居らず　園友

雪

雪降や若衆の門を掃に行　才麿
降雪になをおほきかろふじの山　尼智月
松は雪ふくべをいづる炭の音　勢八菊
あけぼのゝ雪を耕す蹄かな　蝶羽
蠅追ふた尾に雪拂ふ隙の駒　出雲風水

氷

紅鹿子結ふや氷の下もみぢ　津島氷下
我孝はうすきに厚き氷かな　龜世
池の魚あらしにあてぬ氷かな　知足

雑冬

一すねも二すねもすねて冬の梅　扶揺亭
花の木に花の寝言の小春かな　光彦
せめて十夜何少将は九十九夜　蝶羽
大酒や三日足たゝず恵美須講　（名古屋）昨丁
木枯に出現したるお寺かな　（津島）一口
木がらしもかしましからぬ柳哉　業言
荷もなうて柳やかろき冬の雨　亀世
角つゝむ越路の牛の寒かな　和子
十ヲの指口へそろへる寒かな　（伊勢）紀之
こはいかに鍬は切れて大根引　幸巴
篦（へら）つかふ冬田の鷺や世中は　柴友
丸合羽はしり過たる霰かな　知足
わが宿は跡さいて寝る湯婆（たんぽ）哉　（小豆嶋）寸伽
火加減の甘壚を喰火燵かな　白雪
寒菊はちかよる梅の名残哉　杉風
しら糸に霜かく杖や橋の不二　その女
富士ひとつこゝろがゝりよ河豚汁　如泉

歳暮

代々の賢き人々も古郷はわすれがたきものにおもほへ侍るよし。我今ははじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひかたぶきて侍るも、見捨がたくて、初冬の空のうちしぐるゝ比より、雪を重ね霜を經て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、おもふ事のみあまたありて

古郷や臍の緒に泣としのくれ　芭蕉
賑はし煠とる宿の朝げしき　知足
年わすれしかし太鼓はたゝかれじ　如柳
としの夜もかさゝぎ渡すとや成ぬ　蝶羽
行としや伊勢の御燈の粘細工　琴風

春之部發句

立春

代々富り壺中の茄子氷様　露霑
弓馬の初音うつくし兒手茶屋　冠里
賀に榮り齒朶から花の綾錦　闇幽
そも／＼は曙の色山のはる　露江
湖のほとりの玉やかゞみもち　才麿
初鷄のあした／＼や無盡藏　舍羅
蓬萊の隱家にせん榧(かや)の殼　如風
異國へは跡かつがする初日かな　雨亭
わが春に實植の柑子粧りけり　知足
靈夢から裸もあるに着衣始　園友
初なづな鰹のたゝき納豆まで　素堂

梅

梅が香に醉べきほどの雀かな　知足
梅が香に妻うたがふや夜三更　ナルミ 柳水
ね覺たる顏吹なぐれ梅の風　和子
竹の戸に釣瓶の魚や梅の花　長父
麹屋にとまり客あり梅の花　美濃 淵泉
釋迦はやり梅は導ク鼻ばしら　周東
かた／＼は寂しがられて梅の花　豐後 紫貞
梅が香やこぼしがからもなるみ潟　出羽 柳舟
八月にまけは致さず梅の花　加賀 汀芦
遺梅の殘る影なき月夜かな　野坡

聖廟奉納　三句

松梅の庭や文武の右ひだり　知足
紅梅や万燈ともす松の中　龜世
此春を含(ふくむ)か神の松のはな　蝶羽

鶯

譽らるゝ鶯の身ぞむつかしき　越後 卷耳
うぐひすを命や軒の干大根　下野 寸馬
うぐひすや千疊敷のあるじ顏　扇河
鶯やむかしは寺に哥のあり　蝶羽
金持を鶯撰らぬ軒端かな　霑之

閑なる事を好で、山ふかく入ば又
里あるがごとし。府中に山林あり。
足ゝこゝなしろや此館の主人。

その日には覗とゞかぬ木の芽かな　露川

凍解

凍解や去年の紅葉の行筧　一海
鐘の音も解て八十瀬の徑かな　ナゴヤ　寅三

柳

柳垂てあらしに猫を釣夜かな　木因
軒にさらり砂にもさらり柳かな　僧　魯九
そよめくやあつらへの風梅柳　知足
雨風をり〻の柳かな　ちそく娘　つね
鳥どもの脊にのする樣かな　豐後　りん女
降雨のこまかにしのぶ柳かな　檗貞
光陰をたらりと庭の柳かな　道甫
朝柳平等院の本尊かな　沾洲

胡蝶

夢に化す蝶や浮名の靑表紙　雷之
照れても爵金しらまぬ胡蝶哉　木因

蛙

蛙啼一夜〱に夜着重し　蝶羽
陸にても飛鳥を得るや蛙武者　嬉斗
野ゝ宮の高麗狗になる蛙かな　洛　素流

すみれ　たんぽゝ

明ぼのやすみれかたぶく土龍　洛　凡兆
一昨日の鐵砲くさきすみれかな　東潮
戀せじな貞かたぶけてはな菫　蝶羽
たんぽゝの土手やむかしに鳴海潟　釋　東推
たんぽゝや白壁見やる足の下　知足

田螺　田打

牛部の空明渡る田螺かな　下野　斟斗
寒歸る木曾のむかしや田螺とり　一邑
しとやかなこと習はふか田打鶴　惟然

猫戀　つばめ

鞘それて妻乞猫の行衛なし　沾竹
壁の穴覗ッ鳴ッねこの戀　氷下

乘かけを坂に越たるつばめ哉　雨亭
つばくらや子をおもふ身の隙もなし　舍羅

陽炎

布袋書たる繪に
袋よりたつ陽炎にかいだるし　杉風
燒ぬ日も陽炎もゆる塩屋哉　嬉斗
陽炎の中に骨あり田うち蟹　東藤

朧月

里がよひかいどり前やおぼろ月　蝶羽妻
晩鐘に朧のにほふ垣根かな　蝶羽

蝸廬亭にのぼりて
星崎の朧や低し亭の上　越人

出替　養父入

出かはりの寢言に物をこそおもへ　圍友
出かはりや水遠近の井戸車　蝶羽
養父入やうなづきあひて行違ふ　カイ柳雌

紙鳶　雲雀

鷹そらす顏や切行いかのぼり　獨笑
若草にとんと消たる雲雀かな　酔素
汐みちて上野ゝ方や舞雲雀　露川

上巳

万葉の姿ゆかしや帋雛　ナゴヤ機石
そらねして御門通るや鷄合　農石
三日月の光や浮てもゝのはな　加賀句空
沖の石日にあたゝまる節句かな　鯉走
鯉もけふ伏見の桃にのぼるかは　龜世
桃咲て釣しかへたる干葉かな　治由

花

それは和靖
これは知足翁の花の宿なれ
初花やかさね〴〵に鹿の角　高翔

知足亭の初花を詠めやりて
見直すやかゝる男も花の陰　祖月

おなじく
御壽命の外十年や花の山　コロモ一貫

老の山踏

歸るさは

鳥雲にうん〳〵とてぞ花の䌷　（スカ川）藤躬
いつくれて花にはさかる三日の月　（豐後）紫白
足もとのあかるい華のもどりかな　（イセ女）辰閨
懐に寝て歸る子も花見かな　（ミノ）千川
年喰へばいよ〳〵出たき花見かな　（新城）かめ女
さゞ浪や志賀からおとす花いかだ　蝶羽
花に呑て年も小半合暮にけり　龜世

櫻

鎖おろすたからの奥の櫻哉　才麿
咲やいかに鹿追獵師山ざくら　（下野）里杜
糸櫻吹や堅田の網さばき　猶然
山ざくら世を宇治山の行脚哉　（豐後）馬貞
さくらにも談義にも寝る親仁哉　（岡さ）胡叟
明ぼのゝ鐘に咲たか此さくら　（ナゴヤ）申桃
晝からは茶屋が素湯賣櫻かな　業言
山ざくら𢌞具してみるかすみかな　知足

やまざくらひかへて外は町屋哉　東推

山高うして海ちかきさいへるをおもひ合せて

大勢の目に呑れたるさくらかな　（釋）白支
川裾や散はおほえて山ざくら　柳舟

歌仙

奉納

笠寺やもらぬ岩も春の雨　芭蕉桃青
旅寝を起すはなの鐘撞　知足
月の弓消ゆくかたに雉子啼て　如風
秀句ならひに高瀬さしけり　重辰
茶を出す時雨に急ぐ笹の蓑　安信
賣殘したる庭の錦木　自笑
ゐのころのかさなり伏て四ツ五ツ　業言
むら〳〵土の焦し市原　執筆

旗竿に藪はほられて風の音　足
　下部の祖父と女すむ家　風
きぬ〴〵のまた振袖に烏帽子着て　笑
　うらみを笛に吹殘しける　信
曇るやと夷に見せたる秋の月　辰
　露さぶけなり義經の像　言
白絹に萩としのぶを織こめて　風
　院の曹子に薫を乞　足
廓を双六うちにしのびより　信
　火を消顏の憎き唇　辰
名
盞をあらそひ戻てかり枕　言
　一二の船を汐にまかする　笑
乘捨し眞砂の馬の哀なり　辰
　刀をぬきてたぶさおし切　風
大年の夜のともし火影薄く　足
　居眠りながらくける綿入　信
菊の戸に乳を呑ほどの子を守て　笑
　もぎつくしたる午時の花　言
山路來て何やら床し郭公　風
　笈おもげなる宮の休らひ　辰
姉妹窓の細めに月を見て　信
　名を待宵と付し白菊　足
ウ
おもひ草水無瀨の水に投入ん　辰
　秋くれぬとて扇引さく　笑
初雪のかゝる簾をうち拂ひ　足
　鳥居を覗く八重の松ばら　風
花盛尾張の國に札うちて　言
　暖になるすぐの間ほの　信

誹諧知登利懸下卷

杜若われに發句のおもひあり　芭蕉
麥穗なみよるうるほひの末　知足
二ツして笠する烏夕ぐれて　桐葉
かへさに袖をもれし名所記　叩端
住馴て月待ほどのうら傳ひ　業言
それとばかりの秋の風音　自笑
ウ
捨かねて妻呼鹿に耳ふさぎ　如風
念力岩をはこぶしたゝり　安信
道野邊の松に一喝しめし置　重辰
長者の輿に脊を投込ム　蕉
から櫓を荷ふ下部のうつゝなや　足
岸にかぞふる八百の鷺　葉
森透に燈籠三ツ四ツ幽なる　端
子をおもふ親の月さがしけり　辰
それの秋すなる手打の悔しくも　足
猫ならば猫霧晴てから　風
烏邊野に葛とる女花わけて　葉
ねためる筋を春惜まるゝ　言
名
燕に短冊つけて放チやり　端
龜盞を背負さゞなみ　蕉
天氣さへ勅に應じて雲なびく　信
五日の風の宮雨のみや　風
菓子賣も木がくれてのみ住はつる　笑
長屋の外面たつ名はぢらひ　足

芭蕉行脚のころ

夏草よあづま路まとへ五三日　知足
笠もてはやす宿の卯の雪　桃青

あるさし予がたらちね、洛にのぼりて眞珠庵のぬしにたいめせし

比、兩吟すべきさて第三まで出來ぬ。歸國の後、尾城の露川を加えて三吟となし、十三驛路幾度か往來して
かく迄になりぬ

知足

川床や片尻かけて旅まくら　如泉
囀す間殘せ鐘のみじか夜　如泉
鵲（かさゝぎ）の松を南に飛ぬけて　如泉
家のうは手に落さうな岩　露川
冬待て雪車の釘打暮の月　仝
稻を仕廻へばしげき觸事　足

ウ
いつやらの野分に堤皆に成　仝
相撲を貢てありく男等　泉
一年も添たる妻のひとり啼　仝
火燵をおもふ夢の曉　仝
とう〳〵と船の厠（かはや）の波の音　川
分別良に出たる兼房　仝
精進に名代立る花の宴　仝
暮行春は金に買れし　足
居替りに女ひでりや江戸い町　仝
運ぶ茶臺にうつる前髮　仝
海廣くこゝが國での月見寺　泉
袖かた敷て蘭に吹れん　仝
鹿聞に來るはやさしき人心　泉
きのふも今日も菜は燒塩　川

名
雪のあるうちは軍を止て居ル　仝
おくり迎ひを船の通ひ路　仝
しれぬ名の立や網干の出來分限　足
小鼓打の小歌きへよき　仝
夕月に晝の暑さを忘れけり　仝
せめて隱居に京や願はん　泉
花の陰豆腐に須磨の鯛ふるし　仝
被（かつぎ）の伽羅に蝶のまつはれ　仝
衣〳〵を御影供參りにまぎらかす　川
あまりに晴れし空もしまらぬ　仝

夏之部發句

衣更

ころも更壁に詩をかく御浪人　才麿
かたびらや袖に初香の神の庭　山扉
衣がへいまだひなたを人が行　幸來
袷きてまづ立出て峯の雲　之白
あわせ出せ花さへ芥子の一重なる　來山

新樹

若葉ふく風から出して卯月哉　呂千
若葉より出山拜しやれ木かな　獨卜
雀たつ若葉が底に一二輪　洛 春人
白雨に青葉が上の若葉かな　大垣 荆口
葉ざくらや鳩の産家のうそくらき　蝶羽
葉櫻やたらつき足らぬ鳩の聲　米澤 竹友

郭公

ほとゝぎす宗祇の質のながれかな　伊丹 青人
郭公茶なし酒なしさりながら　之白
曉のまくらも圓しほとゝぎす　百丸
雨による物でもあらじほとゝぎす　長サキ 古道
雲となる聲のはづれやほとゝぎす　イセ 芦本
子規あとのまつりに雨が降る　出羽 重行
杜鵑鳴たる跡の九輪かな　淵泉
ほとゝぎす口濡す間はなかりけり　左布里 夏流
一聲は青葉に包めほとゝぎす　知足
山法師三ッがひとつはほとゝぎす　蝶羽
耳ふさぐ猿は尊し郭公　龜世
此上の淺茅が原よほとゝぎす　下野 夕丕

さし掉書たる扇に

鳥さしも竿や捨けんほとゝぎす　芭蕉
ほとゝぎす濡てかたびらひとつ也　來山
雨になけ宿は洩ともほとゝぎす　昨木
民種の口遣もいつかほとゝぎす　露霑

牡丹

ほしさうに笑ふてかゝる牡丹哉　路通
茶に醉た振してくれぬ牡丹かな　知足

はたけとは志賀の都の牡丹かな　園友

杜若　八はしにて

二度手打澤ほとゝぎすかきつばた　三千風
馬に市かきつばたには人もなし　素堂
ゝゝつばた行てほとびぬ道明寺　不角
駒下駄にはる〳〵來けりかきつばた　養民
秋津洲は色にほれけりかきつばた　全暇
立傘の佛殘れかきつばた　島田 如舟
今ならば迦葉微笑らん杜若　雲歩
隱れ家の深川ふかし貝よばな　知足

筍

竹の子の裸になるは誰ゆへぞ　斟斗
竹の子や名聞の世に謟はず　津嶋 万山
竹の子の一よ折とも音なたてそ　湖十
竹の子を竹になれとて竹の垣　來山

端午

事觸ものぼりの鈴も遠乘も　沾竹
誓てし粽結ふかはいはた帶　下野 翠戸

しだり尾の長屋〳〵もあやめかな　斟斗
鎗直切顏やあやめのわたぼうし　已千
子はたらぬ物か幟に子持筋　不穐
岩橋や軒のあやめを下にのみ　平之允
曙の色をわけたるのぼりかな　昨非

五月雨

五月雨や三番三をふむまはり椽　泉流
五月雨や魚とる鷺のながれ足　和子
五月雨や山もかくれてなごの海　蝶羽

水草花

花咲て猶うき草のうきに浮ク　知足
泥龜や花うき草の誘ふ水　蝶羽
鯉飛んで萍のはな失にけり　つね女

百合草

雨雲のひつくりかへる百合草の晝　百里
姫百合草や小町がむかし後ロ紐　律哥
姫ゆりにゆらるゝ露ぞうらやまし　龜世
あざら井に蛙游ぐやゆりのはな　イタミ 金風

水鶏

氏雲にまけじと扣く水鶏かな　荷兮

明がたの山もくづれて水鶏かな　豊前 其香

蚊柱

蚊柱や角なきとてもそひぐるし　好永

蚊柱もころぶ時あり夕あらし　魯九

蚊柱に行あたりけり鼻の先　廣嶋 莵好

蚊柱は夕がほ棚のひかへかな　釣壺

初茄子

初なすや腮(あぎと)の汐のいそがしく　武江 松荷

玉の緒や足も齢の初なすび　泥燕

蓮

あの蓮の動く所や魚の淵　如風

水品の山なだれてやはすの露　魯九

立鷺の羽風に蓮の折葉かな　自笑

題狂言

すむ水の芙蓉に耻よ鬼の㒵　山扉

蟬

山蟬や小紋涼しきうす衣　獨ト

山蟬や權の太夫のからころも　蝶羽

雨雲のちぎれて蟬の聲高し　嬉斗

暑

暑をも問はで知れたり羅漢の身　和子

もゝ尻と人のいふべきあつさかな　鯉走

麻につるゝ蓬につるゝあつさかな　難波 東行

鬼蜘蛛の圍にかゝらばや此あつさ　下野 羽矩

岩ひばの握つめたるあつさ哉　鎌倉僧 暮船

納涼

子を寢せて涼しくも有か片庇　龍風

涼しさを舞て見せたり水車　本因

涼しさをみよとやはしる帆掛船　知足

極樂の風やお寺の夕すゞみ　醉素

名所之夏　星崎 寢覺里 夜寒里 上野

涼まうか星崎とやら扨何所じや　惟然

星崎の青田によるや波のはな　湖十

星崎のすがた亂るゝ螢かな　暮船

かたびらも夜寒の里の旅寝かな　釣壺
涼風や夜寒の里の吹あまり　蝶羽
短夜は寝覺の里も朝寝かな　名古屋 千鶴
一鼾ねざめの里やほとゝぎす　釣壺
夕皃や上野を通ふ油筒　需之

行脚のころ

橋の小嶋が崎も青田かな　知足
勢田の手をうちちらされし螢哉　仝
淀鳥羽の牛に帆かくるあつさかな　仝

知足亭にて

麓ともおほしき庭の覆盆子哉　支考
夏氣色返す〴〵もなるみ瀉　乙州

俳諧穐之部

鳴海眺望

はつ穐や海も青田の一みどり　芭蕉
　乘行馬の口とむる月　重辰
藁庇霧ほのくらき茶を酌て　知足
　やせたる藪の竹まばら也　如風
蛤のからふみわくる高砂子　安信
　笠ふりあけて船まねく聲　白笑

哥仙有略

賀新宅

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　芭蕉
　蒜にみゆる野菊苅萱　知足
投渡す皿の編橋霧こめて　安信
　風呂燒に行月の明ほの　芭蕉
杉垣のあなたにすごき鳩の聲　知足
　はつ霜下りて紙子捫つゝ　安信

穐之部發句

初穐

笹竹の雀穐しる動きかな　杉風

是は扨あの松風の秋そうな　祇園 梶女
初秋や筆を呼るゝ草の雨　難波 三惟

七夕

土器や書の字さやかに天川　露霑
はしり穂の一筋ぬきや星祭　木因
織女の娵入やよめり宵月夜　金士
ちよつとした雲のさはりや星迎　哥十
物かげに女の聲やほし迎　越中 東白
ほし合の蒲團を敷か宵の雲　紀之
薬盤出せ星さゝふたり逢夜なる　イセ 村女
取亂すわかれの雲や天川　八菊
河風や梭の音吹ほし迎　龜世
七夕や糸いろ／＼の竹の花　一溫
三ツ股や江戸の硯の洗ひ隈　沾竹

一葉

角文字は桐の落たる二葉かな　廿泉
くる秋のきりきはみする一葉哉　かいはら すて女
桐の葉やいたゞく桶の水のうけ　芙雀
桐いまだ風折ふしの合點から　ヒメヂ 千山

生身魂 木曾にて

かけ橋や生聖靈の袖の露　一鉄
死／＼て生て露けし萩薄　天垂
蓮の葉も浮世の鯖にしみにけり　木因

玉祭

蓮池や折らで其まゝ玉まつり　芭蕉
涓氣のなひ魂棚や御寺方　卜誰
玉祭つゝしむ事の自然なり　龜世
かゝげても燈火暗し盆の月　蝶羽
おとこ女隔ぬ客や玉まつり　知足
親をおもふ衣の山の月の色　才麿

栗

風に名の有べきものよ栗の上　帷然

青瓢　初秋中一此所に遊て

夕がほや秋はいろ／＼のふくべ哉　芭蕉
ねすがたや起たところも青瓢　加賀 季邑

ふくべにて茅屋おさゆるあらし哉　龜世

朝皃

木槿

朝皃や白髪も見えず花ざかり　月尋
せんぐりに咲て久しき木槿かな　知足
一ひなり朝皃と中つぼみなり　國友
朝皃の花や網戸のうらおもて　伯兎

花野

女郎花

憎からぬ風は花野ゝさはぎかな　泥燕
これ〳〵や風に見らるゝ花薄　一海
秋風のこそぐりてゆく花野哉　鍋崎 卜志
いたづらの色をさりけり女郎花　龜世
角もじと姤くも寢しか女郎花　一海
松風の里に汐くめ女郎花　茨口

露

静さや繪に書て甞ム露の色　白支

寶永おほ宮造りの時
露置やましろのひがし八大名　風水
きのふには似て似ぬものか草の露　之白

虫

虫よ〳〵啼て因果がつきるなら　乙州
ぬけがらの蟬哀なり虫えらみ　木雞
蓑虫の啼て枯木の風情かな　淵泉

鹿

兀山の松を見せけり鹿の聲　知足
をのが音の樹神(こだま)追ゆる男鹿哉　鴎白
延あがる臑より細し鹿の聲　魯九
棹鹿の聲うるみけり夕あらし　蝶羽
宵闇や筧にもれて鹿の聲　麥秀
冬ちかし終り初もの志賀の鹿　大津 我笑

野分

草や皆野分に今朝のていたらく　柴友
西瓜ひとり野分を知らぬあした哉　素堂
庭の面も見へずおもしろき野分かな　之白

吹出すや野分のあした又おかし　成之

間引菜

間引菜の露提てくる目籠かな　知足
間引菜や後にぞおちふまゝ子立　一邑

菌

狩めぐり菌ひとつを鬼の首　夕丕
宵の雨松と契りて木の子かな　亀世
かけ出や菌などを數珠つなぎ　卜誰

礒

うたゝ寝の闇打返す礒かな　蝶羽
手だすけのわらはれに出る礒哉　辰閭
礒聞程こそよけれ奥座敷　團友

鶏頭花

鶏頭や紅錦繡の裏住居　林凰
鶏頭や唐のかしらの夕日陰　亀世
夕暮に何をちらさん鶏頭花　安信

月

裏銘は不知かつら男の大かゞみ　不變

行船や笘洩月に袖の紋　加賀 北枝
いろ〳〵の枕やあらん秋の月　洛 伯流
寝ておかし覺てもおかし旅の月　鉄蝉
蘇鐵にも月はやどれど薄かな　素堂

名月

名にいはゞ今宵の月や三五郎　立圃
名月やいまだ增賀の裸ごろ　言水
秋ぞ最中心の須磨の四絃　光彦
名月に我はへちまの袋やら　秋色
名月の湯にや水にも自在竹　柳舟
名月や照も曇もはなれもの　芦本
今日の月いでや小町が袋には　有馬 嘯水
明月の鐘鳴わたる名残かな　サヌキ 正次
白妙にひたと座しけり今日の月　筑前 無天
名月や今宵一夜の秋の晴　カゞ僧 露因
肴屋の日記に乗らん月見かな　柳水
名月や約束勝で内に居る　泉流
名月やつるでに明る日を拝まん　知足

名月の窓やわづかに梅の花　才麿

八幡にて

名月の麓の松やおとこやま　蝶羽

十三夜

月やちる袖は木の葉の十三夜　重春

草も木もこの國ぶりよまたの月　全暇

酒盡て臂の寒さや後の月　長父

菊

白菊や黄菊の中の一ねぶり　由平亭 白入

清香をめぐらせけふの菊の風　之白

白菊や菊におろかはなけれども　蝶羽

中椀に千代を瀬どるや菊の酒　十律

松がねに千代をあやかる野菊哉　知足母 永参

白菊の咲や浮世の秡入手　知足

白菊に黛つくれうすぐもり　知足孫 しゆん女

大人に德あり菊の酒ばやし　龜世

濡色は山路の菊の白然かな　醉素

門あけて見らるゝ菊のよろこびか　ナゴヤ僧 大椿

壁際や蔦に手をかす菊の花　文來

老菊

白髮にはならず此はな小むらさき　山屏

深川草堂より文の中に

十六夜の月と見はやせ殘る菊　芭蕉

新綿

新綿や治れる代の弓の音　晩山

新わたや弓より散て綾はとり　泥燕

新綿にこもる鶉や雪の聲　林凰

秋暮

夕暮はいつもあれども秋の海　團友

馬牛の脊もさかされし秋の暮　松荷

何うへた跡とも見えず秋の風　初候

櫻楓の葉や草摺たゝむ秋の風　八菊

辭とても扇なき秋の扇かな　横船

長夜

長夜や蚓の聲も長恨哥　古 蝶々子

宵闇や霧の氣色に鳴海潟　其角

はせを老人此所に杖を休め給ひ、俳談のあまり、付句并にほくども書残し置れけるを、反古の中よりさがし出し、なつかしさのまゝ、こゝに記し侍りぬ。

琴引ならふ窓によらばや

打提る道にて菊の名を忘れ　はせを

酒に興ある友を集る

ぬけ初るちゝの一歯のかなしくて　同

それ〳〵に年取用意いそがしく

猿の小袖を染る猿引　露荷

櫻はなみ木梅は山里

行尊の笈に入たる哥枕　其角

おほく咲たる菊の

うき秋をはゝの書する物がたり　同

棊に染て涼敷夏をくらしけり

馬しゝてより出す桑の戸

時は秋よし野をこめん旅のつと　露沾

冬梢も君が首途や花の雲　其角

木枯の吹行後姿かな　嵐雪

鳴千鳥富士を見かへれ塩見坂　杉風

送二帋布一

萩かれぬ陸の紙布都まで　寶生 露蓬

我夢を鼻ひゝ霜の草まくら　桑門 宗波

來月は猶雪降ンはつしぐれ　ちり

橋までは供して行かン今朝の霜　仙化

幾時雨心そひ行江戸ざくら　中川氏濁子

朝毎のかみこや重き霜の松　李下

稜でゝ迯り申さん時雨哉　文鱗

時雨〳〵に鎌借置ン草の庵　挙白

笈銘

蝶羽

蕉翁の世を俳諧にかくれ、ひとつの笈を友とし、身の動く所を驛とし、足のとゞまる所を宿とす。其廣き武藏野も秋過、古郷の空に通る時雨の侘しければとて、あが軒端に立寄、笈さしおろし、かうがけの紐打ときて、そこ爰の物語に日を忘れけるが、土丹生の寢覺がちなる夜の、星崎のかたに千鳥の鳴を聞て、ほくしけるを亡父なにがし感に餘り、其道このみ給ふ人〻の句をも、呼續のはし〳〵つぎわたして、一冊にせんと心がけしに、とゝせ過にし夏、其心ざしもむなしく、鳴海のひろふかひなき身まかりにけり。予其事のすたりぬるを歎き、又我友ちどりの聲をも打添給にしをつぎ、ふたつの卷になしぬ。まことに翁の餘情もなつかしけれ。其比翁あが許よりして熱田の桐葉がかたに往しが、また難波の春におもむかんとて、いかにおもひしや、自具し箱物を殘し、猶行先の霞とも消なん後のながめにもせよと、いひ置て出行しが、終に其浦風にさそはれ、世をみじかき芦の下浪とは成りぬ。此卷もと翁の句より興りしなれば、せめて其俤に此笈の見まくほしく、桐葉の花も紫のゆかりなれば、かくおもふよしをいひやりてこひけれど、はせをの露のかた見、いかにし侍らんや。我もし一葉の秋にもあはゞ、それまた我が名殘りにもみせんなどいひしが、去年の五月雨に秋をも待たぬ花と散りて、哀添つゝ迯おこせたり。いかに世は露の玉手筥ふたりの記念となりて、あが許に所持しにけり。其形はさながら婦女の玉櫛笥に似て、おほいさもさる物なれ。高麗人の工みと見えしが、くろう塗りこめたるに、金泥の繪のこまやかなるもはげうせて、見るかげのあるかなきかにけしきして物ふりたり。左右に蕨手をつけしは、負ふにたよりとやせし。むべ獨りありきの用には、たりぬべかりける物とこそおほゆれ。此道の好どち打寄りてとり

出し、ふたゝび翁の文臺につらなる心地し、其風情をしたふ。されば其心ざしをのべて銘し侍りぬ。

笈言古板　板本書箱
衲物不壊　事約用詳
獨歩白屐　客路友倡
坐懸肱嘘　臥枕顱康
滑稽之頓　詞華餘光
屑吐之審　言實得薌
四時佳景　身心洋ゝ
一世消息　風月彷徨
其人已逝　爾笈委昌
屐篋終腐　秀唫無亡

寺町二條上ル
井筒屋庄兵衛板

蛙合

仙化撰

可般圖

第一番

左

古池や蛙飛こむ水のおと　芭蕉

右

いたいけに蝦つくばふ浮葉哉　仙化

此ふたかはづを何となく設たるに、四となり六と成て一巻にみちぬ。かみにたち下におくの品、おの／＼あらそふ事なかるべし。

第二番

左勝

雨の蛙聲高になるも哀也　素堂

右

泥龜と門をならぶる蛙哉　文鱗

小田の蛙の夕ぐれの聲とよみけるに、雨のかはづも聲高也。右淤泥の中に身をよごして、不才の才を楽しみ侍る龜の隣のかはづならん。門を並ぶると云たる、尤手きゝのしはざなれども、左の蛙の聲高には慙れ侍る。

第三番

左勝

きろ／＼と我頬守る蝦哉　嵐蘭

右

人あしを聞しり顔の蛙哉　孤屋

左、中の七文字の強きを以て、五文字置得て妙なり。かなと留りたる句ゝ多き中にも、此句にかぎりて哉といはずして、いづれの文字をかおかん、誠にきびしく云下したる、鬼拉一躰、これらの句にや侍らん。右、足音をとがめて、しばし鳴やみたる、面白く侍りけれ共、左の方勝れて聞侍り。

第四番

左持

木のもとの氈に敷るゝ蛙哉　翠紅

右

妻負て艸にかくるゝ蛙哉　濁子

飛かふ蛙、芝生の露を頼むだにはかなく、花みる人の心なきさま得てしれるとにや。つまおふかはづ艸がくれして、いか成人にかさがされつらんとおかし、持。

第五番

左

簑うりが去年より見たる蛙哉　李下

右勝

一畦はしばし鳴やむ蛙哉　去來

左の句、去年より見たる水鷄かなと申さまほし。早苗の比の雨をたのみて、簑うりの風情猶たくみにや侍るべき。右、田畦をへだつる作意濃也。閣々蛙聲などいふ句もたよりあるにや。長是群蛙苦相混、有レ時也作二不平鳴一といふ句を得て以て力とし、勝。

第六番

左持

鈴たえてかはづに休む驛哉　友五

右

足ありと牛にふまれぬ蛙哉　琪樹

春の夜のみじかき程、鈴のたへまの蛙心にこりて物うきねざめならんと感太し。右、かたつぶり角ありとても身をたのみそとよめるを、やさしく云叶へられたり。野徑のかはづ眼前也、可レ為レ持。

第七番

左

僧いづく入相のかはづ亦淋し　朱絃

右勝

ほそ道やいづれの艸に入蛙　紅林

雨の後の入相を聞て僧寺にかへるけしき、さながらに寂しく聞え侍れども、何れの艸に入かはづ、と心とめたる玉鉾の右を以て、左の方には心よせがたし。

第八番

左

夕影や筑ばに雲をよぶ蛙　芳重

右勝

曙の念佛はじむるかはづ哉　扇雪

左、田どのかはづ、つくば山にかけて雨を乞ふ夕べ、句がら大きに氣色さもあるべし。右、思ひたへたる曉を、せめて念佛はじむる草菴の中、尤殊勝にこそ。

第九番

左持

夕月夜畦に身を干す蝦哉　琴風

右

飛かはづ猫や追行小野ゝ奥　水友

身をほす蛙、夕月夜よく叶ひ侍り。右のかはづは、當時付句などに云ふれたるにや。小のゝおく取合侍れど、是また求め過たる名所とや申さん。閑寥の地をさしていひ出すは、一句だよりなかるべきか。たゞに工案の强弱をとらば、左かちぬべし。

第十番

左

あまだれの音も煩らふ蛙哉　徒南

右勝

哀にも蚪のつたふ筧かな　枳風

半檐疎雨作ニ愁媒一、鳴蛙似ニ與レ幽人語ル一などゝも聞得たらましかば、よき荷擔なるべけれども、一句ふところせばく、言葉かなはず思はれ侍り。かへる子五文字よりの云流し、慈鎮・西行の口質にならへるか。躰かしこければ右爲レ勝。

第十一番

左

飛かはづ鷺をうらやむ心哉　全峰

右勝

藻がくれに浮世を覗く蛙哉　流水

鷺來つて幽池にたてり。蛙問て曰、一足獨擧、靜にして寒葦に睡る、公、樂しい哉。鷺答へて曰、予人に向つて潔白にほこる事を要せず。只魚をうらやむ心有、と。此爭ひや、身閑に意くるしむ人を云か。藻がくれの蛙は志高遠にはせていはずこたへずといへども、見解おさ／＼まさり侍べし。

第十二番

左 持

よしなしやさでの芥とゆく蛙　嵐雪

右

竹の奥蛙やしなふよしありや　破笠

左右よしありや、

よしなしや。

第十三番

左 持

ゆら／＼と蛙ゆらるゝ柳哉　北鯤

右

手をかけて柳にのぼる蛙哉　コ齋

二木の柳なびきあひて、綠の色もわきがたきに、花一木の蛙は、花の枝末に手をかけて、とよめる歌のこと葉をわづかにとりて、遙なる木末にのぞみ、既のぼらんとしていまだのぼらざるけしき、しほらしく哀なるに、左の蛙は樹上にのぼり得て、ゆら／＼と風にうごきて落ぬべきおもひ、玉篠の霰・萩のうへの露ともいはむ。左右しゐてわかたんには、數奇により好むに隨ひて、けぢめあるまじきにもあらず侍れども、一巻のかざり、古今の姿、只そのまゝに筆をさしをきて、後みん人の心／＼にわかち侍れかし。

第十四番

左 持

手をひろげ水に浮ねの蛙哉　ちり

右

露もなき晝の蓬に鳴かはづ　山居

うき寐の蛙、流に枕して孫楚が辨のあやまりを正すか。よもぎがもとのかはづの心、句も又むねせばく侍り。左右ともに勝負ことはかりがたし。

第十五番

左

簔捨し雫にやどる蛙哉　橘襄

右勝

若芦にかはづ折ふす流哉　蕉雫

左、事可レ然躰にきこゆ。雫ほすみのに宿かると侍らば、ゆゝしき姿なるべきにや。捨るといふ字心弱くや侍らん。右、流れに添てすだく蛙、言葉たをやか也、可レ爲レ勝か。

第十六番

左

這出て艸に背をする蛙哉　挙白

右勝

萍に我子とあそぶ蛙哉　卜し

艸に背をする蛙、そのけしきなきにはあらざれども、我子とあそぶ父母のかはづ、魚にあらずして其樂をしるか。雛鳧は母にそふて睡り、乳燕哺烏その樂しみをみる所なり。風流の外に見る處實あり、尤勝たるべし。

第十七番

左持

ちる花をかつぎ上たる蛙哉　宗派

右

朝草や馬につけたる蛙哉　嵐竹

飛花を追ふ池上のかはづ、閑人の見るに叶へるもの歟。朝草に刈こめられて行衞しられぬ蛙、幾行の鳴をかよすらん、又捨がたし。

第十八番

左持

山井や墨のたもとに汲蛙　杉風

右

尾は落てまだ鳴あへぬ蛙哉　蚊足

山の井の蛙、盥のたもとにくまれたる心とば、幽玄にして哀ふかし。水汲僧のすがた・山井のありさま・岩などのたゝずまひも冷じからず。花もなき藤のちいさきが、松にかゝりて清水のうへにさしおほひたらんなどゝ、さながら見る心地せらるゝぞ、詞の外に心あふれたる所ならん。右、日影あたゝかに、小田の水ぬるく、芹・なづなやうの草も立のびて、蝶なんど飛かふあたり、かへる子のやゝ大きになりたるけしき、時に叶ひたらん風俗を以爲レ持。

第十九番

左 勝

堀を出て人待くらす蛙哉　卜宅

右

釣得てもおもしろからぬ蛙哉　峽水

此番は判者執筆ともに渥口を倦で、我を忘るゝにひとし。仍而以判詞不レ審、左かちぬべし。

第廿番

左

うき時は蟇の遠音も雨夜哉　そら

右

こゝかしこ蛙鳴ク江の星の數　キ角

うき時はと云出して、蟇の遠ねをわづらふ艸の菴の夜の雨に、涙を添て哀ふかし。わづかの文字をつんでかぎりなき情を盡す、此道の妙也。右は、まだきさらぎの廿日餘り、月なき江の邊り風いまだ寒く、星の影ひかく\として、聲ゝに蛙の鳴出たる、艶なるやうにて物すごし。靑艸池塘處々蛙約あつてきたらず、半夜を過と云ける夜の氣色も共儘にて、看ル所おもふ所、九重の塔の上に亦一雙加へたるならんかし。

追加

鹿島詣侍る比

眞間(マ)の繼はしにて

繼橋の案内顔也飛蛙　不卜

頃日會ニ深川芭蕉菴一而群蛙鳴句以ニ衆議判一

而馳ニ禿筆一青蛙堂仙化子撰焉乎　［印］［印］

貞享三丙寅歳閏三月　日

新革屋町　西村梅風軒　刻彫

罌粟合

嵐蘭撰

物の評をなすものは、博く見て約かにとて、深きを探り淺きをわたり、粗により精に入らずば、何によつてか評をよくせむ。よくせずば豈其ものに益あらむや。僕、蕉門に在事二十年、いまだ蘭室に入らず、辨理に昧くして、半解の悟なく、月花に痩て一句の秀なし。然らば此判詞何によらむ。唯風雅の精且は仁を輔くるの道によれり。往歳我が翁行脚のついで、さゞなみやをものゝ崎に草鞋を解て、曲水・珍碩・正秀などいふをのこ、此時に遇て師とし尊び、勤め勵まして、向上の一路を攀、猶茶を興して其旨を諭さしむ。洛の去來も爰に來往し、或時は嵯峨の落柿舍に迎へ、學でいとはず、つとめて倦ず、互にすゝんで眞諦の處を探らんと要す。翁、是に鞭うてば活潑して雲外に馳せ、怒んで鼓うてば須臾に萬卒を研で、翁、諸生のよく遊ぶ事をよろこび、嚢を國分山に敗り、笠を木曾塚にわすれ、是を切、是を磨り、つゐに諸生をして自然に悟入せしむ。猶其香ひをとゞめて、今此編をなす。予が妄言、聊、他の眼目に備るにあらず。世の塵口をいとはず、爰に至て當時風雅の賊徒、市に杭柑を售者あり。愚にして馬蟻をいやしむものあり。獨、其けやけき者は、人を誣・愚瞽を惑はしむ。何ぞ其情をたすくるにたらむ。俳諧よく性をやしなひ、よくその性をそこなふ。若、人有て我が言を過當なりとせば、曲水・去來に乞、君千載の子雲となれ。

干時元祿壬申の秋　武江の嵐蘭漫書

罌粟合

一番

左　持

けし殘れ菊の太夫が庵の跡　素□

右

青雲や馬鍬やすむる晝の罌粟　丈草

右の方申云、長明がけしありや。

左方陳曰、有無にはたより侍らまじき事か。

左人難ず、五文字すさまじからん。

右方申、卯月の空ならずや。

左、花の半落に長明がむかしをしたふ、嵐ぞ寒き相坂の關、とよめること思ひあはせられて感慨多し。若、長明がけしあらば、此句第二等に落む。有無にはたより侍るまじき事也。

右、田家のおもむきを詠ず。晝と云、馬鍬と云、皆飄逸を以て言を立つ。靑雲のみを難ずべからず。長明がけしありとせば、此句又淵明がけしか。是も有無にはたより侍るまじき事也。

仍勝負いづれと分がたく侍り。

二番

左　勝

鹽かりて來る隣有けしの花　正秀

右

白罌粟の花や朝の雲ちぎれ　之道

右方曰、左の句殊に申むねなし。

左申、右の句手ぬるく侍らんか。

左右、瓊瑤を動かし鵝鶴を飛しむ。箇の裏閑味のところを嘗れば、鹽の辛きにあり。

三番

左　勝

落髮の日のゆかしさよけしの花　木節

右

醤油のかんばんひくし門の罌粟　探志

右申、左の句不レ珍。

左方曰、右の句おそらくは平懐ならん。物を見て喜憂を興し、境に隨つて隱顯をおもふは、人情の然らしむる所、我が道是を以て辱しとす。化なるけしの花びらに、落髪の日を思ひ出られたる鬼を哭しめつべし。作者若おもふところあるか。右の句看板とゝもにひくし。

四番

左 持

いはらちの貌もをもたしけしの花　車庸

右

なぐられてこぼるゝ罌粟や日のうつり　智月

右難ズ、いはらちこそおもたく侍れ。

左申、なぐられて詮なかるべし。

白々紅々相交ッて千疊萬疊の花、是君を思ふか君をうらむるか、愁眉啼粧よく妖態をなす者也。右、又はら／＼とこぼれかゝりたる罌粟に、よき日はな／＼とさし出たるけしき、是もよく清麗をなす者なり。五文字實用にあり。求めたるに似て全く初より心なし。天才豪逸卒然としてなす者を見つべし。左右の骨分ちがたきを以て持とす。

五番

左 勝

住ば又雛ころすけしばたけ　野童

右

罌粟咲や庄屋の弟新世帶　臥高

右難て、住ば又ねたし。

左難ズ、庄屋きゝふりたり。

左、先珍重。句の面切字も見えず侍り。彼兼好法師、おもひしまゝの山里もがな、とよめる歌、五文字の間にありて切たる事必せり。此歌を力として此句を聞べきや。右は、あたらしみに專ら心をよせて、一句の躰をそこなはしむとや申さん。

六番

左
年貢地やろくにそだゝぬけしの花　游刀
右　勝
蝶追へば罌粟のあかるき畠かな　楚江
右より申、左のや字、かゝと云べきか。
陳曰、やの字子細なし。
左申、右の句不庶幾か。
左はくらく、右明ヵ也、十萬戸。

七番
左　持
日出の鐘なりけるかけしの花　乙州
右
花罌粟や星の林の薄あかり　昌房
右、申むねなし。
左、おなじ。
共に閑地をト得たりといへども、させるむねなし。猶星の林のうすあかり、心・すがた(姿)ふるくこそ侍れ、仍以て持とす。

八番
左　持
罌粟咲や雛の小袖の虫はらひ　可南
右
けし咲や楠の輪入の太平記　曲水
右の人申、左、難なかるべし。
左曰、太平記こと／＼しく侍らんか。
右陳曰、尋常の儀也、はゞかるまじ。
けしの花に思ひよせたる雛の小袖、其様あへかなる所も有て打捨がたし。雛の事は、其昔長頭翁に定らる。尤、ふるき物語に四節をかざるが故也とかや。三月三日にかぎるべからずとは云ながら、虫掃たしかに水無月・土用をかぎりとす。けしの時節相違の所、愚案辨がたし。總て歌合のうたなむど、慥成(たしかなる)を本意とするとかや、僻耳に聞置侍る。楠の輪入の太平記、あれたるやうにて少今めき侍り。両句難ㇾ有を以て勝負をわかたず。

九番

左 持

縄すだれ間半四方の罌粟の花　木枝

右

干鰯つゝ軒の匂ひやけしの花　松月

右人曰、發句きれたるや。

左、きれたるよしを申。

左難曰、ほしかにつくとはいかゞ。

陳曰、臼にて舂事の侍べる。

縄簾の間半四方、何者の住家にかあらむ。干鰯つく軒の匂ひも猶いやしからず。干鰯いかにも臼にてつくことの侍るよし、杉風が付句に、杵提てほしか俵の口を解　と侍り。予も此時慥成事を尋てきゝ侍りき。又、切字の事は、當時の俳諧をみるに、平句に切字を入れて發句にしたる有り。切字さへ入れば、發句と思ふ成べし。切字不レ入して發句あるべし。切字いれて平句あらん。この境何者かしらん。切字のさたを閣、左右持とす。

十番

左

京出て泊に早し罌粟の花　里東

右 持

舟ナ乗リの一濱留守ぞけしの花　去來

右申、京出てこゝろゆかず。

左難曰、舟乗の住家をこそ申せ、濱とはきゝなれず。

右陳申、吹上・岩城の濱等日前也。

草枕の露を悲しび、浦邊の寂しさをうそぶき、共に吾をして腸をたゝしむ。中にも右の句をぞ猶秀逸とし侍らむ。舟乗といひ一濱といへる所、けやけきやうにおもひくださむともがらは、口をしくも滯に至らむとて、箱根を越えざるものゝたぐひならん。須磨の海士の一里といへる心を過て、俳諧をつよく好めるが故に、舟乗の一濱とはおかれたる成べし。見

ん人詳に是を察せよ。

十一番

左 持

罌粟ちるや靜に誰か咳拂　野徑

右

棹竹の雫落けりけしの花　素牛

右、左々難じ申さず。

左人申、右の句餘情なし。

左右、付句等にも度々出て、其樣珍しからず。

十二番

左

夜這する人のかざしか罌粟の花　荒雀

右 勝

けし垣の內や硯の小町形　萬里

右方申、かざしとはいはれざらんか。

左陣曰、前栽にしのび居る、何條謂れざらん。

左人曰、右の句尤難なし。

世のそしり親のいさめをもいとはず。麥畑にさまよひ、けしの陰にかくるゝ有樣、作り得てやさしきに、五文字ふつゝか(不束)に聞え侍る。右の句、たゞにふつゝかといふのみにあらず。右の句、みし玉だれの內や、といへるやの字にかよひてをかし。蒔繪に見ゆる松のむら立、とよめる心も有や。けしの籬(まがき)の形容寫し得たり。すがたは古代めき侍れども、小町形の硯珍しき物をおもひよせ侍る。左、五文字に難レ有を以て右の勝とす。

十三番

左

門番の持佛も淺しけしの花　珍碩

右

花罌粟や千葉梶原が屋敷やぶ　史邦

左右、難を申さず。

門番といへる五文字、大かたに聞過すべからず。都て關を守らしめ、小家に閑を預くる事

其人にあらずして其職をゆるさず。其器を擇ぶに利口をとらず。頴悟を用ひず。系をたづね質を擧ぐ。又、有徳狂狷の人、跡をかくすたぐひもまゝ聞え侍り。持佛も淺しといへるより、打かへして其安身自得のところを見よ。うらやむべし、此人此道に好く遊ぶ事を。右、鎌倉の荒廢を見るに、山河有て草木ふかし。銀杏に涙をそゝぎ、老鳩に心をおどろかす。屋敷跡といふべきを、何となく藪の字を吟じ出されたる事、一句の粉骨たるべし。左右の優劣、辨ぜんとすれば更に言を忘る。

此二句はるか後に加入せしむる者也。評に不レ及。

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

跋

罌粟畠花散ル跡ノ須彌幾ツ　其角

贈ニ杜國子一

白けしに羽もぐ蝶のかた見哉　芭蕉翁

海士の顔先見らるゝやけしの花　仝

曠野（あらの）

上・下・員外

荷兮撰

尾陽蓬左、橿木堂主人荷兮子、集を編て、名をあらのといふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひとゝせ此郷に旅寢せし、おり／＼の云捨、あつめて冬の日といふ。其日かげ相續て春の日また世にかゝやかす。げにや衣更着・やよひの空のけしき、柳・櫻の錦を爭ひ、てふ鳥のをのがさま／＼なる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや。いとゆふのいとかすかなる、心のはしの有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにゝもつかず。雲雀の大空にはなれて、無景のきはまりなき、道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべらし。

元祿二年彌生

芭蕉桃靑

荒野集目錄

曠野集　卷之一

花三十句

よしのにて

これは〱とばかり花の芳野山　貞室

我まゝをいはする花のあるじ哉　路通

薄曇りけだかくはなの林かな　信徳

はなのやまどことらまへて哥よまむ　晨風

暮淋し花の後の鬼瓦　友五

山里に喰ものしゐる花見かな　尚白

何事ぞ花みる人の長刀　去來

みねの雲すこしは花もまじるべし　野水

はなのなか下戸引て來るかいな哉　亀洞

下ゞの下の客といはれん花の宿　越人

はなの山常折くぶる枝もなし　一井

見あげしがふもとに成ぬ花の瀧　津嶋 俊似

兄弟のいろはあげゝり花のとき　鼠彈

ちるはなは酒ぬす人よ〱　舟泉

冷汁に散てもよしや花の陰　胡及

はつ花に誰が傘ぞいまいまし　長虹

柴舟の花咲にけり宵の雨　津嶋 卜枝

おるときになりて迯けり花の枝　岐阜 鴎歩

連だつや従弟はおうし花の時　荷兮

疱瘡の跡まだ見ゆるはな見哉　傘下

あらけなや風車賣花のとき　薄芝

花にきてうつくしく成心哉　たつ

山あひのはなを夕日に見出したり　心苗

おもしろや理窟はなしに花の雲　越人

なりあひやはつ花よりの物わすれ　野水

獨來て友選びけり花のやま　冬松

花鳥とこけら葺る尾上かな　冬文

首出して岡の花見よ蚫とり　荷兮

酒のみ居たる人の繪に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

ある人の山家にいたりて

橿の木のはなにかまはぬすがた哉　同

杜宇二十句

ほとゝぎすを飼なくものに、求得て放やるときに

鳥籠の憂目見つらん郭公　季吟

目には青葉山ほとゝぎす初がつほ　素堂

いそがしきなかに聞けり蜀魄　釣雪

蠟燭のひかりにくしやほとゝぎす　越人

おひし子の口まねするや時鳥　津嶋 松下

跡や先氣のつく野邊の郭公　重五

ほとゝぎすどれからきかむ野の廣き　柳風

ある人のもとにて發句せよ、と有ければ

ほとゝぎすはゞかりもなき鳥かな　鼠彈

晴ちぎる空鳴行やほとゝぎす　落梧

蚊屋臭き寢覺うつゝや時鳥　一髪

三聲ほど跡のおかしや郭公　同

淀にて

ほとゝぎす十日もはやき夜舟哉　風泉

嬉しさや寢入らぬ先のほとゝぎす　岐阜 杏雨

あぶなしや今起て聞郭公　傘下

くらがりや力がましきほとゝぎす　同

馬と馬よばりあひけり郭公　鈍可

たゞありあけの月ぞのこれる、と吟じられしに

哥かるたにくき人かなほとゝぎす　大津 智月

うつかりとうつぶきゐたり時鳥　李桃

うつかりと春の心ぞほとゝぎす　市山

月二十句

かる〲と笹のうへゆく月夜哉　十二歳 梅舌

それがしも月見る中の獨かな　湍水

月ひとつばひとりがちの今宵哉　一雪

雨の月どこともなしの薄あかり　越人

けうとさに少（すこし）脇むく月夜哉　昌碧

屋わたりの宵はさびしや月の影　津嶋 市柳

おかしげにほめて詠る月夜哉　一髪
どこまでも見とをす月の野中哉　長虹
峠迄硯抱(かゝへ)て月見かな　任他
一ツ屋やいかいと見るけふのつき　龜洞
名月は夜明るきはもなかりけり　越人
名月やとしに十二は有ながら　文鱗
名月やかい(櫂)つきたてゝつなぐ舟　昌碧
めいげつやはだしでありく草の中　傘下
名月や皷の聲と犬のこゑ　二水
見るものと覺えて人の月見哉　野水

夕月　心いそぎに

むつかしと月を見る日は火も燒(た)かじ　荷兮
いつの月もあとを忘れて哀也　同
名月や海もおもはず山も見ず　去來
めいげつや下戸と下戸とのむつまじき　胡及
めいげつはありきもたらぬ林かな　釣雪
宵に見し橋はさびしや月の影　一髪

十三夜

影ふた夜たらぬ程見る月夜哉　杉風

朔日

暮いかに月の氣もなし海の果　荷兮

二日

見る人もたしなき月の夕かな　仝

三日

何事の見たてにも似ず三かの月　芭蕉

四日

夕月夜あんどん(行灯)けしてしばしみむ　卜枝

五日

何日とも見さだめがたや宵の月　伊豫　一泉

六日

銀川(あまのがは)見習ふ比や月のそら　岡崎　聲

七日

能(よき)ほどにはなして歸る月夜哉　岐阜　一髪

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭どのゝ顔の色　其角

いざゆかむ雪見にころぶ所まで　芭蕉

竹の雪落て夜るなく雀かな　塵交

かさなるや雪のある山只の山　京 加生

車道雪なき冬のあしたかな　加賀 小春

はつ雪を見てから顔を洗けり　越人

はつ雪に戸明ぬ留主の菴かな　是幸

ものかげのふらぬも雪の一つ哉　松芳

くらき夜に物陰見たり雪の隈　二水

雪降て馬屋にはいる雀かな　鳧仙

夜の雪おとさぬやうに枝折らん　岐阜 除風

ゆきの日や川筋ばかりほそ〴〵と　鷺汀

初雪やおしにぎる手の奇麗也　傘下

雪の江の大舟よりは小舟かな　芳川

雪の朝から鮭わくる聲高し　冬文

雪の暮猶さやけしや鷹の聲　桂夕

ちら〳〵や泡雪かゝる酒強飯　荷兮

はつ雪や先草履にて隣まで　路通

はかられじ雪の見所有り所　野水

舟かけていくかふれども海の雪　芳川

曠野集　巻之二

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉
たれ人の手からもからじ花の春　釋 古梵
わか水や凡千年のつるべ縄　風鈴軒
松かざり伊勢が家買人は誰　其角
うたか否連歌にあらずにし(螺)肴　文鱗
月雪のためにもしたし門の松　去來
かざり木にならで年ふる柏哉　一晶
元朝や何となけれど遲ざくら　路通
元日は明すましたるかすみ哉　加賀 一笑
歯固に梅の花かむにほひかな　大垣 如行
ふたつ社老にはたらねとしの春　岐阜 落梧
若水をうちかけて見よ雪の梅　龜洞
伊勢浦や御木引休む今朝の春　同
とぶきの名をつけて見む宿の梅　昌碧
去年の春ちいさかりしが芋頭　元廣
小柑子栗やひろはむまつのかど　舟泉
とし男千秋樂をならひけり　同
山柴にうら白まじる竈かな　重五
松高し引馬つるゝ年おとこ　釣雪
月花の初は琵琶の木とり哉　同
連てきて子にまはせけり万歳樂　一井
うら白もはみちる神の馬屋哉　胡及
見おぼえむこや新玉の年の海　長虹
今朝と起て縄ふしほどく柳哉　鼠彈
さほ姫やふかい(深井)の面いかならむ　同
蓬莱や舟の匠のかんなくず　湍水
佛より神ぞたうとき今朝の春　京 とめ
のゝ(野)宮やとしの旦はいかならん　朴什
かざりにとたが思ひだすたはら物　冬文
正月の魚のかしらや炭だはら　傘下
けさの春寂しからざる閑かな　冬松
あいあいに松なき門もおもしろや　柳風
大服は去年の青葉の句哉　防川

鶯の聲聞まいれ年おとこ　犬山 昌勝
傘に歯朶かゝりけりえ方だな　夕道
袖すりて松の葉契る今朝の春　梅舌
たてゝ見む霞やうつる大かゞみ　野水
曙は春の初やだうぶくら　同
はつ春のめでたき名なり堅魚ゝく　越人
初夢や濱名の橋の今のさま　同
しづやしづ御階にけふの麥厚し　荷兮
萬歳のやどを隣に明にけり　同
已のとしやむかしの春のおぼつかな　同
我は春目かどに立るまつ毛哉　僧 般齊
我等式が宿にも來るや今朝の春　貞室

初春

若菜つむ跡は木を割畑哉　越人
精出して摘とも見えぬ若菜哉　野水
七草をたゝきたがりて泣子かな　津嶋 俊似
女出て鶴たつあとの若菜哉　加賀 小春
側濡て袂のおもき礒菜かな　藤羅
吾うらも殘してをかぬ若菜哉　岐阜 素秋
石釣てつぼみたる梅折しけり　玄察
鷹居て折にもどかし梅の花　鴎歩
むめの花もの氣にいらぬけしき哉　越人
藪見しれもどりに折らん梅の花　落梧
梅折てあたり見廻す野中かな　一髪
華もなきむめのずはいぞ賴母しき　冬松
みのむしとしれつる梅のさかり哉　蕉笠

網代民部の息に逢て

梅の木になをやどり木や梅の花　芭蕉
うぐひすの鳴そこなへる嵐かな　長良 若風
鶯の鳴や餌ひろふ片手にも　去來
あけぼのや鶯とまるはね釣瓶　伊賀 一桐
鶯にちいさき藪も捨られじ　津嶋 一笑
うぐひすの聲に脱だる頭巾哉　同 市柳
鶯になじみもなきや新屋敷　同 夢々
うぐひすに水汲こぼすあした哉　梅舌

さとかすむ夕をまつの盛かな　野水
行〱て程のかはらぬ霞哉　塵交
行人の簑をはなれぬ霞かな　冬文
かれ芝やまだかげろふの一二寸　芭蕉
かげろふや馬の眼のとろ〱と　傘下
水仙の見る間を春に得たりけり　路通
蝶鳥を待るけしきやものゝ枝　荷兮

當座題　さし木

つきたかと兒のぬき見るさし木哉　舟泉

接木

つまの下かくしかねたる繼穗かな　傘下

椿

曉の釣瓶にあがるつばきかな　荷兮

同

藪深く蝶氣のつかぬつばき哉　卜枝

春雨

はる雨はいせの望一がこより哉　湍水

同

春の雨弟どもを呼てこよ　鼠彈

白尾鷹

はやぶさの尻つまげたる白尾哉　野水
蛛の井に春雨かゝる雫かな　奇生
立臼に若草見たる明屋哉　十一歳 龜助
すご〱と親子摘けりつく〲し　舟泉
すご〱と摘やつまずや土筆　其角
すご〱と案山子のけけり土筆　蕉笠
土橋やよこにはへたるつく〲し　塩車
川舟や手をのべてつむ土筆　冬文
つく〲し頭巾にたまるひとつより　青江

閑亭の主人池に鷺を愛せられしは筆意有故也。

池に鷺なし假名書習ふ柳陰　素堂
風の吹方を後のやなぎ哉　野水
何事もなしと過行柳哉　越人

さし柳たゞ直(すぐ)なるもおもしろし　一笑
尺ばかりはやたはみぬる柳哉　小春
すがれ〳〵柳は風にとりつかむ　一笑
とりつきて筏をとむる柳哉　昌碧
さはれども髪のゆがまぬ柳哉　杏雨
みじかくて垣にのがるゝ柳哉　此橋
ふくかぜに牛のわきむく柳哉　杏雨
吹風に鷹かたよするやなぎ哉　松芳
かぜふかぬ日はわがなり(形)の柳哉　校遊
いそがしき野鍛治(ぢ)をしらぬ柳哉　荷兮
蝙蝠(かはほり)にみだるゝ月の柳哉　仝
青柳にもたれて通す車哉　素秋
引(ひく)いきに後へころぶ柳かな　鷗歩
菊の名は忘れたれども植にけり　生林

仲春

麥の葉に菜のはなかゝる嵐哉　不悔
菜の花や杉菜の土手のあい〳〵に　長虹
なの花の座敷にうつる日影哉　傘下
菜の花の畦うち殘すながめ哉　清洞
うごくとも見えで畑うつ麓かな　去來
万歳を仕舞ふてうてる春田哉　昌碧
つばきまで折そへらるゝさくらかな　越人
廣庭に一本植しさくら哉　笑艸
とき〳〵は蓑干さくら咲にけり　除風
手のとゞくほどはおらるゝ櫻哉　一橋
うしろより見られぬ岨(そば)の櫻哉　冬松
すご〳〵と山やくれけむ遅ざくら　一髪
はる風にちからくらぶる雲雀哉　野水
あふのきに寐てみむ野邊の雲雀哉　除風
高聲につら(頬)をあかむる雉子かな　一雪
行かゝり輪縄(わなは)解(とき)てやる雉子哉　塩車
手をついて哥申あぐる蛙かな　(山崎)宗鑑
鳴立ていりあひ聞ぬかはづかな　落梧
あかつきをむづかしさうに鳴蛙　越人
いくすべり骨おる岸のかはづ哉　去來

飛入てしばし水ゆく蛙かな　落梧
不圖とびて後に居なをる蛙哉　津嶋 松下
ゆふやみの唐網にいる蛙かな　一井
はつ蝶を兒の見出す笑ひ哉　柳風
椶櫚の葉にとまらで過る胡蝶哉　梅餌
かやはらの中を出かぬるこてふかな　炊玉
かれ芝や若葉たづねて行胡蝶　百歳

暮春

何の氣もつかぬに土手の菫哉　忠知
ねぶたしと馬には乘らぬ菫草　荷兮
ほうろくの土とる跡は菫かな　野水
晝ばかり日のさす洞の菫哉　舟泉
草刈て菫選出す童かな　鷗歩
行蝶のとまり殘さぬあさみ哉　燭遊
麥畑の人見るはるの塘かな　杜國
はげ山や朧の月のすみ所　大坂 式之
ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉

松明にやま吹うすし夜のいろ　野水
山吹とてふのまぎれぬあらし哉　卜枝
一重かと山吹のぞくゆふべかな　岐阜 襟雪
とりつきてやまぶきのぞくいはね哉　同 蓬雨
あそぶともゆくともしらぬ燕かな　去來
去年の巣の土ぬり直す燕かな　俊似
いまきたといはぬばかりの燕かな　長之
燕の巣を覗行すゞめかな　長虹
黃昏にたてだされたる燕哉　鼠彈
友減て鳴音かいなや夜の鴈　旦藁
角落てやすくも見ゆる小鹿哉　蕉笠
なら漬に親よぶ浦の塩干哉　越人
おやも子も同じ飲手や桃の酒　傘下
人霞む舟と陸との汐干かな　三輪 友重
山まゆに花咲かぬる躑躅かな　荷兮
朧夜やながくてしろき藤の花　釆正
篝火に藤のすゝけぬ鵜舟かな　龜洞
永き日や鐘突跡もくれぬ也　卜枝

永き日や油しめ木のよはる音　野水

行春のあみ塩からを殘しけり　同

曠野集　卷之三

初夏

ころもがへや白きは物に手のつかず　路通

更衣襟もおらずやだゞくさに　傘下

ころもがへ刀もさして見たき哉　鼠彈

肯柏老人のもちたまひしあらし山といふ香を馬のはなむけに、文鱗がくれけるさて、雪の朝越人が持きたるを忘れがたく、明るわか葉の比、文鱗に申つかはしける。

髭に燒香もあるべしころもがへ　荷兮

山路にて

なつ來てもたゞひとつ葉の一つ哉　芭蕉

いちはつはをとこなるらんかきつばた　一井

柿の木のいたり過たる若葉哉　越人

切かぶのわか葉を見れば櫻哉　不交

若葉からすぐにながめの冬木哉　藤蘿

わけもなくその木〱の若葉哉　龜洞
ひら〱とわか葉にとまる胡蝶哉　竹洞
ゆあびして若葉見に行夕かな　鈍可
はげ山や下行水の澤卯木　夢々
上ゞ土にいつの種とて麥一穗　玄寮
枯色は麥ばかり見る夏の哉　生林
麥かりて桑の木ばかり殘りけり　作者不知
むぎからにしかるゝ里の葵かな　鈍可
しら芥子にはかなや蝶の鼠いろ　嵐蘭
鳥飛てあぶなきけしの一重哉　落梧
けし散て直に實を見る夕哉　岐阜 李桃
大粒な雨にこたえじ芥子の花　東順
散たびに兒ぞ拾ひぬ芥子の花　吉次

深川の庵にて

菴の夜もみじかくなりぬすこしづゝ　嵐雪
さびしさの色はおぼえずかつこ鳥　野水

仲夏

宵の間は簷にみだるゝ螢かな　櫻井 元輔
刈草の馬屋に光るほたるかな　一髪
窓くらき障子をのぼる螢哉　不交
闇きよりくらき人呼螢かな　凰笛
道細く追はれぬ澤の螢かな　青江
あめの夜は下ばかり行螢かな　含咕
くさかりの袖より出るほたる哉　卜枝
水波て濡たる袖のほたるかな　鷗歩

はじめて、菴室をさぶらはれける比

こゝらかとのぞくあやめの軒端哉　秋芳
蚊のむれて梯の一本の曇けり　小春
かやり火に寐所せまくなりにけり　杏雨
雨のくれ傘のぐるりに鳴蚊かな　二水
蚊の瘦て鎧のうへにとまりけり　一笑
藻の花をかつげる蜑の髻かな　胡及
汐引て藻の花しぼむ暑さかな　兒竹
足伸べて姫百合艸折らす晝ね哉　此橋
竹の子に行燈さげてまはりけり　長虹

笋の時よりしるし弓の竹　去來
聞おればたゝくでもなき水鷄哉　野水
五月雨に柳きはまる汀かな　大津 一龍
この比は小粒になりぬ五月雨　尚白
五月雨は傘に音なきを雨間哉　龜洞

岐阜にて
おもしろうさらしさはくる鵜縄哉　貞室

おなじ所にて
おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉　芭蕉

おなじく
鵜のつらに篝こぼれて憐也　荷兮

同
聲あらば鮎も鳴らん鵜飼舟　越人
先ふねの親もかまはぬ鵜舟哉　大津 淳兒
曲江に篝の見えぬうぶねかな　梅餌
鴨の巣の見えたりあるはかくれたり　路通
松笠の緑を見たる夏野哉　卜枝
虹の根をかくす野中の樗哉　鈍可

蘭の花や泥によごるゝ宵の雨　同
撫子や蒔繪書人をうらむらん　越人
冷しや灯のこる夏のあさ　藤蘿
夏の夜やたき火に簾見ゆる里　旦藁

庵の留主に
すびつさへすごきに夏の炭俵　其角
夕がほや秋はいろ〳〵の瓢かな　芭蕉
ゆふがほのしぼむは人のしらぬ也　野水
夕皃は蚊の鳴ほどのくらさ哉　俗雪
山路來て夕がほみたるのなか哉　津嶋 市柳
名はへちまゆふがほに似て哀也　長虹

暮夏

楠も動くやう也蝉の聲　昌碧
雲の峯腰かけ所たくむなり　野水
夕立に干傘ぬるゝ垣穂かな　傘下
凉しさに榎もやらね木陰哉　玄旨法印
凉しさよ白雨ながら入日影　去來

簾して涼しや宿のはいりぐち　荷兮
はき庭の砂あつからぬ曇哉　同
おもはずの人に逢けり夕涼み　鳴海 如風
飛石の石龍（とかげ）や草の下涼み　津嶋 俊似
涼しさや樓の下ゆく水の音　仝
挑燈のどこやらゆかし涼み舟　卜枝
すゞしさをわすれてもどる川邊哉　未學
吹ちりて水のうへゆく蓮かな　岐阜 秀正
蓮みむ日にさかやき（月代）はわるゝとも　松坂 晨風
笠を着てみな〱蓮に暮にけり　古梵
河骨に水のわれ行ながれ哉　芙水
はら〱と清水に松の古葉哉　長虹
すみきりて塩干の沖の清水哉　俊似
蓮あまた待せて結ぶし水哉　文瀾
引立て馬にのまするし水かな　涼月
かたびらは淺黄着て行清水哉　尙白
直垂をぬがずに結ぶしみづかな　一髪
虫ほしや蓆をふるえばさくら花　卜枝

麻の露皆こぼれけり馬の路　岐阜 李晨
釣鐘草後に付たる名なるべし　越人
綿の花たま〱蘭に似るかな　素堂

曠野集　巻之四

初秋

ちからなや麻刈あとの秋の風　越人

梧の葉やひとつかぶらん炑の風　圓解

松島雲居の寺にて

一葉散音かしましきばかり也　仙化

かたらひのちゞむや秋の夕げしき　津 方生

男くさき羽織を星の手向哉　杏雨

朝良は酒盛しらぬさかりかな　芭蕉

蕣や垣ほのまゝのじだらくさ　文鱗

あさがほの白きは露も見えぬ也　荷兮

子を守るものに、いひし詞の句になりて

朝顔をその子にやるなくらふもの　荷兮

隣なるあさがほ竹にうつしけり　鷗歩

あさがほやひくみの水に残る月　胡及

葉より葉にものいふやうや露の音　鼠彈

秋風やしら木の弓に弦はらん　去來

涼しさは座敷より釣鱸かな　昌長

畦道に乗物すゆるいなばかな　鷺汀

まつむしは通る跡より鳴にけり　一髪

きり／＼す燈臺消て鳴にけり　素秋

あの雲は稲妻を待たより哉　芭蕉

いなづまやきのふは東けふは西　其角

ふまれてもなほうつくしや萩の花　舟泉

ひよろ／＼と猶露けしや女郎花　芭蕉

棚作〻はじめさびしき蒲萄哉　作者不知

草ぼう／＼からぬも荷ふ花野哉　伏見 任口

もえきれて紙燭をなぐる薄哉　荷兮

行人や堀にはまらんむら薄　胡及

宗祇法師のことばによりて

名もしらぬ小草花咲野菊哉　素堂

とし／＼のふる根に高き薄哉　俊似

仲秋

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉
つく〳〵と繪を見る秋の扇哉　加賀 小春
谷川や茶袋そゝぐ秋のくれ　津嶋 益音
石切の音も聞けり秋の暮　釆下
斧のねや蝙蝠出るあきのくれ　卜枝
鹿の音に人の貞みる夕ア哉　一髪
田と畑を獨にたのむ案山子哉　伊豫 一泉
山賤が鹿驚作りて笑けり　重五
紅葉にはたがをしへける酒の間　其角
しらぬ人と物いひて見る紅葉哉　東順
藪の中に紅葉みじかき立枝哉　林斧
どことなく地をはふ蔦の哀也　越人
わが宿はどこやら秋の草葉哉　宗和

わが草庵にたゞねられし比

恥もせず我なり秋とおごりけり　加賀 北枝

其堂へまかりて

はすの實のぬけつくしたる蓮のみか　越人
一本の芦の穂痩しるせき哉　防川

松の木に吹あてられな秋の蝶　舟泉
はつとして羅られぬ蚊屋のわかれ哉　胡及
心にもかゝらぬ市のきぬたかな　曉鷗

關の素牛にあひて

さぞ砧孫六やしき志津屋敷　其角

よしのにて

きぬたうちて我にきかせよ坊がつま　芭蕉
いそがしや野分の空の夜這星　加賀 一笑

暮秋

なにとなく植しが菊の白き哉　巴丈
しら菊のちらぬぞ少口おしき　昌碧
山路のきく野菊とも又ちがひけり　越人
一色や作らぬ菊のはなざかり　曉鷗

荷兮が室に旅ねする夜、草臥なせさて、箔つけたる土器出されれば

かはらけの手ぎは見せばや菊の花　其角
菊のつゆ凋る人や鬢帽子　同

けふになりて菊作ふとおもひけり　二水
かなぐりて蔦さへ霜の汐木哉　伊勢 千閣
淋しさは樫の實落るね覺哉　濃州 芦夕
殘る葉ものこらずちれや梅もどき　加生
蘆の穂やまねく哀れよりちるあはれ　路通

曠野集　巻之五

初冬

あめつちのはなしとだゆる時雨哉　湖春
京なる人に申遣しける
一夜きて三井寺うたへ初しぐれ　尚白
はつしぐれ何おもひ出すこの夕　湍水
萬句興行に
見しり逢ふ人のやどりの時雨哉　荷兮
人を待うくる日に
今朝は猶そらばかり見るしぐれ哉　落梧
釣がねの下降のこすしぐれかな　炊玉
渡し守ばかり簑着るしぐれ哉　傘下
こがらしに二日の月のふきちるか　荷兮
一葉づゝ柿の葉みなに成にけり　一髪
このはたく跡は淋しき園爐裏哉　同
枇杷の花人のわするゝ木陰かな　同
茶の花はものゝつゐでに見たる哉　李晨

梨の花しぐれにぬれて猶淋し　野水
雙虫のいつから見るや歸花　昌碧
麥まきて奇麗に成し庵哉　仝
のどけしや麥まく比の衣がへ　一井
縫ものをたゝみてあたる火燵哉　落梧
石臼の破(われ)ておかしやつは(石蕗)の花　胡及
靑くともとくさは冬の見物哉　文鱗
あたらしき釣瓶にかゝる葱(ねぶか)かな　卜枝
冬枯に風の休みもなき野哉　洞雪
蓮池のかたちは見ゆる枯葉哉　一髪
鷹居(すゑ)て石けつまづくかれの哉　松芳
こがらしに吹とられけり鷹の巾(きれ)　杏雨
鷹狩の路にひきたる蕪哉　蕉笠

寒月

爐を出て度〳〵月ぞ面白き　野水
あさ漬の大根あらふ月夜哉　俊似

仲冬

おろしをく鐘しづかなる霰哉　津嶋 勝吉
しら浪とつれてたばしる霰哉　津嶋 重治
掻よする馬糞にまじるあられ哉　林斧
柴の戸をほどく間にやむ霰哉　杏雨
いたゞける柴をおろせば霰かな　宗之
霜の朝せんだん(梅檀)の實のこぼれけり　杜國
水棚の菜の葉に見たる氷かな　勝吉
深き池氷のときに覗きけり　俊似
つきはりてまつ葉掻けり薄氷　除風
打おりて何ぞにしたき氷柱哉　夜舟

兼題　雪舟

峠より雪舟乘をろす(下)塩木哉　鼠彈
ぬつくりと雪舟に乘たるにくさ哉　荷兮
夜をこめて雪舟に乘たるよめり哉　長虹
馬屋より雪舟引出す朝かな　一井
雪舟引や休むも直に立てゐる　龜洞
つけかへておくるゝ雪舟のはや緒哉　含呫
靑海や羽白黑鴨赤がしら　白坂 忠知

舟にたく火に蟹たつる衛哉　龜洞

朝鮮を見たもあるらん友千鳥　村俊

井を掘る者は六月寒く、米つくおさこは冬裸かなり。

汗出して谷に突こむ氷室哉　冬松

海鼠腸の壺埋めたき氷室哉　利重

炭竈の穴ふさぐやら薄けぶり　龜洞

膝節をつゝめど出るさむさ哉　塩車

火とぼして幾日になりぬ冬椿　加賀一笑

いつこけし庇起せば冬つばき　龜洞

冬籠りまたよりそはん此はしら　芭蕉

歳暮

餅つきや内にもおらず酒くらひ　李下

吾書てよめぬもの有り年の暮　尙白

もち花の後はすゝけてちりぬべし　野水

はる近く榾つみかへる茶畑哉　龜洞

楪はらひ梅にさげたる瓢かな　一髪

木曾の月みてくる人のみやげにさて、杼の實ひさつおくらる。年の暮までうしなはず、かざりにやせむさて

としのくれ杼の實一つころ〳〵と　荷兮

門松をうりて蛤一荷ひ　內習

田作に鼠追ふよの寒さ哉　龜洞

曠野集　卷之六

雜

年中行事　十二句　　　　荷兮

供二屠蘇白散一

いはけなやとそなめ初る人次第

春日祭

としどに鳥居の藤のつぼみかな

石淸水臨時祭

沓(くつ)音もしづかにかざすさくら哉

灌佛

けふの日やついでに洗ふ佛達

端午

おも瘦て葵付たる髮薄し

施米

うち明てほどこす米ぞ虫臭き

乞巧奠

わか菜より七夕草ぞ覺えよき

駒迎

爪髮も旅のすがたやこまむかへ

撰虫

草の葉や足のおれたるきりぎりす

十月更衣

玉しきの衣かへよとかへり花

五節

舞姫に幾たび指を折にけり

追儺

おはれてや脇にはづるゝ鬼の面

詩題　十六句　　　　野水

今日不レ知誰計會　春風春水一時來

氷ゐし添水(そうづ)またなる春の風

白片落梅浮二澗水一

水鳥のはしに付たる梅白し

春來無レ伴閑遊少

花賣に留主たのまるゝ隣哉

花下忘レ歸因二美景一

寐入なばもの引きせよ花の下

留レ春春不レ住　春歸人寂寞

行春もこゝろへがほの野守かな

微風吹二袷衣一　不レ寒復不レ熱

綿脱は松かぜ聞に行ころか

池畔蓮方謝

蓮の香も行水したる氣色哉

暑月貧家何處有　客來唯贈北窓風

涼めとて切ぬきにけり北のまど

大抵四時心總苦　就レ中腸斷是秋天

雪の旅それらではなし秋の空

夜來秋雨後　秋氣颯然新

秋の雨はれて瓜よぶ人もなし

遲遲鐘鼓初長夜　耿耿星河欲レ曙天

ひとしきりひだるうなりて夜ぞ長き

殘燈影閃レ墻　斜月光穿レ牖

獨り寐や泣たる皃にまどの月

萬物秋霜能壞レ色

白菊や素顏で見むを秋の霜

十月江南天氣好　可レ憐冬景似二春華一

こがらしもしばし息つく小春哉

寂寞深村夜　殘雁雪中聞

鉢たたき出もこぬむらや雪のかり

白頭夜禮佛名經

佛名の禮に腰懷く白髮哉

禪閤の撰びのこし給ひしも、さすがにおかしくて

鋸鎌日立　舟泉

かけろふの夕日にいたきつぶり哉

付木突

五月闇水鷄ではなし人の家

釣瓶縄打

かへるさや酒のみによる秋の里

糊賣

あさ露のぎばう（玉簪草）折けむつくもがみ

馬糞掻

こがらしの松の葉かきとつれ立て

李夫人　越人

魂在二何許一　香煙引到二焚レ香處一

陽炎

かげろふの抱つけばわがころも哉

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覺、花冠不レ整下レ堂來

はる風に帯ゆるみたる寐貞哉

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳 青黛點レ眉々細長

外人不レ見々應レ笑

もの數奇やむかしの春の儘ならん

西施

宮中拾二得娥眉斧一不レ獻二吾君一是愛レ君

花ながら植かへらるゝ牡丹かな

王昭君

玉貌風沙勝二畫圖一

よの木にもまぎれぬ冬の柳哉

一日留守なする事侍りて

卯

寐やの蚊や御佛供焼火に出て行　釣雪

辰

杜若生ん繪書の來る日哉

巳

講釋の眠りにつかふ扇哉

午

水あびよ欄干上を踏ずとも

未

蟬の音に武家の夕食過にけり

申

五月雨や鷄とまるはね作り

山家

所にありて生なたい事是非なし

野鳥

鹿笛の上手を盡すあはれさよ　樹水

鴫突の行影長き日あし哉　兒竹

里虫

枝ながら虫うりに行蜀漆かな　含咕

海魚

おもしろと鰯引けり盆の月　仝

川魚

秋の昏鵜川〳〵の火ぶり哉　含咕

牛馬四足是謂レ天　落ニ馬首ー穿ニ牛鼻ー
是謂レ人

一方は梅さく桃の繼木かな　越人

藏ニ舟於壑ー藏ニ山於澤ー　謂ニ之固ー矣
然而夜半有ニ々レ力者ー負レ之而走

からながら師走の市にうるさゞい

絕レ聖棄レ知大盜乃止

七夕よ物かすこともなきむかし

鋭者夭

散はてゝ跡なきものは花火哉　桂夕

鈍者壽

鷄頭の雫になる迄紅(あかね)かな　市山

藤房

ほとゝぎす鳴やむ時をしりにけり　一井

師直

うつくしく人に見らるゝ荊(いばら)哉　長虹

一休

いろ〳〵のかたちおかしや月の雲　湍水

法然

鳴聲のつくろひもなきうづら哉　鼠彈

山岩

おくやまは霞に減るか岩の角　湍水

海岩

苔(のり)とりし跡には土もなかりけり　仝

曠野集　卷之七

名所

八重がすみ奥迄見たる龍田哉　杜国

しら魚の骨や式部(しきぶ)が大江山　荷兮

から崎の松は花より朧にて　芭蕉

藥一把かりて花見る阿波手哉　湍水

嵯峨までは見事あゆみぬ花盛　荷兮

琵琶橋眺望

雪殘る鬼嶽さむき彌生かな　含咕

美濃國關といふ所の山寺に、藤の咲たるを見て、吟じ玉ふとや。

關こえて爰も藤しろみさか哉　宗祇法師

芳野出て布子賣おし更衣　杜国

麥うつや内外もなき志賀のさと　重五

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖の水まさりけり五月雨　去来

牛もなし鳥羽のあたりの五月雨　一髪

角田川にて

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥　貞室

みよしのはいかに秋立貝の音　破笠

いざよひもまたさらしなの郡哉　芭蕉

夕月や杖に水なぶる角田川　越人

九月十三夜

唐土(もろこし)に富士あらばけふの月もみよ　素堂

鴫突の馬やり過す鳥羽田哉　胡及

鴫突は萱津のあまのむまご哉　淵支

武藏野やいく所にも見る時雨　舟泉

湖をやねから見せん村しぐれ　尙白

唐崎やとまりあはせて初しぐれ　伊豫 随友

むさしのとおもへど冬の日あし哉　洗悪

めづらしと生海鼠(なまこ)を焼や小のゝ奥　俊似

冬ざれの獨轆轤(ひとりろくろ)やをのゝおく　津嶋 一笑

雪の富士藁屋一つにかくれけり　湍水

よし野山も唯大雪の夕哉　野水

星崎のやみを見よとや鳴千鳥　芭蕉

夜るの日や不破の小家の煤はらひ　如行

旅

雲雀より上にやすろふ峠かな　芭蕉

大和國草尾村にて

花の陰謡に似たる旅ねかな　仝

櫻咲里を眠りて通りけり　夕楓

日の入や舟に見て行桃の花　一髪

のどけしや湊(みなと)の晝の生ざかな　荷兮

ひとつ脱で後におひぬ衣がへ　芭蕉

ある人の餞別に

ほとゝぎすなみだおさへて笑けり　除風

寐いらぬに食(めし)焼(たく)宿ぞ明やすき　冬松

蚊をころすうちに夜明る旅ね哉　昌碧

五月雨や柱目(芽)を出す市の家　松芳

夕立にどの大名か一しほり　傘下

芭蕉七を送る

稲妻にはしりつきたる別かな　釣雪

なき〱て袂にすがる秋の蟬　一井

あき風に申かねたるわかれ哉　野水

物いはじたゞさへ秋のかなしさよ　舟泉

霧はれよすがたを松に見えぬ迄　鼠彈

さらしなに行、人々にむかひて

更級の月は二人に見られけり　荷兮

越人旅立けるよし聞て、京より申つかはす。

月に行脇差つめよ馬のうへ　野水

おくられつおくりつはては木曾の秋　芭蕉

蜘の巣の是も散行秋のいほ　路通

狩野桶といふ物、其角のはなむけにおくるとて

狩野桶に鹿をなづけよ秋の山　荷兮

とまり〱稲すり哥も替けり　京 ちね

入月に今しばし行とまり哉　玄寮

能(よく)きけば親舟に打碪かな　一井

品川にて人にわかるゝとて

澤庵の墓をわかれの秋の暮　文鱗

草枕犬もしぐるゝか夜るの聲　芭蕉

旅なれぬ刀うたてや村しぐれ　常秀

鳴海にて芭蕉子に逢ふて

いく落葉それほど袖もほころびず　荷兮

夢に見し羽織は綿の入にけり　野水

其角にわかるゝとき

あゝたつたひとりたつたる冬の宿　荷兮

天龍でたゝかれたまへ雪の暮　越人

から尻の馬にみてゆく千鳥哉　傘下

里人のわたりゆかはしの霜　宗因

越人と吉田の驛にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき　芭蕉

旅寐して見しや浮世の煤拂　同

述懐

草庵を捨て出る時

きゆる時は氷もきえてはしる也　路通

子を獨守りて田を打孀かな　快宣

余所の田の蛙入ぬも浮世かな　落梧

高野にて

散花にたぶさ恥けり奥の院　杜國

櫻見て行あたりたる乞食哉　梅舌

高野にて

父母のしきりに戀し雉子の聲　芭蕉

あやめさす軒さへよそのついで哉　荷兮

さうぶ入湯をもらひけり一盤　同

一本のなすびもあまる住ゐかな　杏雨

肩衣は緞子にてゆるせ老の夏　杉風

似はしや白髪にかづく麻木賣　龜洞

九月十日素堂の亭にて

かくれ家やよめ菜の中に残る菊　嵐雪

かり家を貪るきくの垣穂かな　曉颱

人のいほりをたづねて

さればこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

舊里の人に云つかはす

こがらしの落葉にやぶる小ゆび哉　杜國

鎌倉建長寺にまふでゝ

落ばかく身はつぶね共ならばやな　越人

ある人のもとより見よやとて、落葉を一籠おくられて

あはれなる落葉に燒や嶋さより　荷兮

古鄕の事思ひ出る曉に

たらちめの暖甫や冷ん鐘の聲　旦彈

榾の火に親子足さす侘ね哉　去來

日や遲う耳やちかよるとしのくれ　酉武

ふるさとや臍の緒に泣年の暮　芭蕉

さまゞの過しをおもふ年のくれ　除風

老をまたずして鬢先におとろふ

行年や親にしらがをかくしけり　越人

戀

春の野に心ある人の素貞哉　伊勢 一有妻

きぬゞや余のことよりも時鳥　除風

蚊屋出て寐がほまたみる別かな　長虹

むし干の目に立枕ふたつかな　文瀾

虫干に小袖着て見る女かな　冬文

さゝげめし妹が垣根は荒にけり　心棘

六宮粉黛無顏色

宵闇の稻妻消すや月の顏　長虹

一めぐり人待かぬるをどりかな　尙白

さびしき折に

つまなしと家主やくれし女郎花　荷兮

しりながら薄に明るつまどかな　小春

妻の名のあらばけし給へ神送り　越人

松の中時雨ゝ旅のよめり哉　俊似

物おもひ火燒を明ていかならむ　舟泉

うたゝ寐に火燒消たる別れ哉　嵐蓑

山畑にもの思はゞや蕪引　松芳

きぬゞを霰見よとて戻りけり　冬松

おそろしやきぬゞの比鉢敲き　昌碧

無常

末期に

散る花を南無阿彌陀佛と夕哉　守武

無常迅速

咲つ散つひまなきけしの畠哉　傘下

末期に

南無や空たゞ有明のほとゝぎす　堺 元順

松坂の浮瓢といふ人の、身まかりたるにいひやりける。」

橘のかほり顏見ぬばかり也　荷兮

いもうとの追善に

手のうへにかなしく消る螢かな　京 去來

ある人子うしなはれける時申遣す。

あだ花の小瓜とみゆるちぎりかな　荷兮

世をはやく妻の身まかりける比

水無月の桐の一葉と思ふべし　野水

辭世

あはれ也灯籠一つに主ヽ齋

子におくれける比

似た顏のあらば出てみん一踊り　落梧

一原野にて

おく露や小町がほねの見事さよ　釣雪

妻の追善に

をみなへししでの里人それたのむ　自悦

李下が妻のみまかりしをいたみて

ねられずやかたへひえゆく北おろし　去來

ヽ齋身まかりし後

その人の鼾さへなし秋のくれ　其角

母におくれける子の哀れを

おさな子やひとり食くふ秋の暮　尙白

ある人の追善に

埋火もきゆやなみだの烹る音　芭蕉

旅にてみまかりける人を

あは雪のとゞかぬうちに消にけり　鼠彈

鳥邊野ゝかたや念佛の冬の月　加賀 小春

曠野集　巻之八

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

負て來る母おろしけりおはんぞう　鼠彈

西行上人五百歳忌に

はつきりと有明殘る櫻かな　荷兮

おなじ遠忌に

連翹や其望口としほれけり　胡及

うで首に蜂の巣かくる二王哉　松芳

木履はく僧も有けり雨の花　杜國

つりがねを扇で敲く花の寺　冬松

花に酒僧とも侘ん塩ざかな　其角

貞享つちのへ辰の歳彌生一日、東照宮の別當僧正の御房に、慈惠大師迁座執事法華七講の侍るよし、尊き事なれば聽聞にまかりて、序品のこゝろを

散る花の間はむかしばなし哉　越人

女房の聽聞所と覺て、御簾たれおく暗き所あり。龍女成佛の所に至りて、しのびあへず、鼻かむ聲のしければ

ほろ〳〵と落るなみだやへびの玉　同

觀音の尾上のさくら咲にけり　俊似

古寺やつるさぬかねの菫草　一井

八島にて

海士の家聖よびこむやよひ哉　伊豫　千閭

咲にけりふべんな寺の紅牡丹　一井

夏山や木陰〳〵の江湖部屋　蕪葉

奈良にて

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉　芭蕉

灌佛の其比淸ししろかさね　尙白

高野にて

腰のあふぎ禮義ばかりの御山哉　一雪

齋に來て菴一日の淸水哉　加賀　一笑

十如是

おもふ事ながれて通るしみづ哉　荷兮

即身成佛

夏陰の晝寢はほんの佛哉　愚益

ほころびや僧の縫おる夏衣　鼠彈

おどろくや門もてありく施餓鬼棚　荷兮

折かけの火をとるむしのかなしさよ　探丸

石籠に施餓鬼の棚のくづれ哉　文里

魂祭舟より酒を手向けり　廻洞

たままつり道ふみあくる野菊哉　卜枝

攝待のはしら見たてん松の陰　釣雪

平等施一切

攝待にたゞ行人をとゞめけり　俊似

稻妻に大佛おがむ野中哉　荷兮

垣越に引導覗くはせを哉　卜枝

ある人四時の景物なりとて、水雞さ鶉さを不食、不圖其心を感じて、我も雁をくらはず。

雁くはぬ心佛にならはぬぞ　荷兮

ある寺の興行に

燕も御寺の鼓かへりうて　其角

進み出て坊主おかしや月の舟　一井

鉢の子に木綿をうくる法師哉　卜枝

人のもとにありて、たち出むとしけるに、またしぐれければ

衣着て又はなしけり一時雨　鼠彈

鎌倉の安國論寺にて

たうとさの涙や直に氷るらん　越人

古寺の雪

曙や伽藍〲の雪見廻ひ　荷兮

同

雪折やかゝる二王の片腕　俊似

つくり置てこはされもせじ雪佛　一井

朝寐する人のさはりや鉢鼓　文瀾

千觀が馬もかせはし年のくれ　其角

藥王品七句

如寒者得火

まつ白にむめの咲たつみなみ哉　胡及

如裸者得衣

雪の日や酒樽拾ふあまの家

如二商人得一レ主

双六のあひてよびこむついり哉

如二子得一レ母

竹たてゝおけば取つくさゝげかな

如二渡得一レ船

月の比隣の榎木きりにけり

如二病得一レ醫

かはくとき清水見付る山邊哉

如二暗得一レ燈

秋のよやおびゆるときに起さるゝ

神祇

古宮や雪しるかかる獅子頭　釣雪

二月廿五日奉納に

きさらぎや廿四日の月の梅　荷兮

しん〳〵と梅散かゝる庭火哉　同

鶯も水あびてこよ神の梅　龜洞

上下のさはらぬやうに神の梅　昌碧

灯のかすかなりけり梅の中　釣雪

何とやらおがめば寒し梅の花　越人

覺えなくあたまぞさがる神の梅　舟泉

月代もしみるほど也梅の露　雨桐

門あかで梅の瑞籬おがみけり　重五

繪馬見る人の後のさくら哉　玄察

花に來て齒朶かざり見る社哉　鈍可

宮の後川渡り見るさくら哉　李桃

御手洗の木の葉の中の蛙哉　好葉

ほとゝぎす神樂の中を通りけり　玄察

宮守の灯をわくる火串かな　龜洞

破扇一度にながす御祓かな　未學

川原迄瘧まぎれに御祓哉　荷兮

こがらしや里の子覗く神輿部屋　尚白

此月の恵比須はこちにゐます哉　松芳

冬されや禰宜のさげたる油筒　落梧

若宮奉納

きゝしらぬ哥も妙也神々樂　利重
跡の方と寐なをす夜の神樂哉　野水
鈴鹿川夜明の旅の神樂哉　昌碧
かつらきの神にはふとき庭火哉　村俊
橋杭や御祓かゝる煤はらひ　卜枝

祝

眉付はいくよになりぬ長閑也　冬文

荷兮が四十の春に

幾春も竹其儘に見ゆる哉　重五
君が代やみがくことなき玉つばき　越人
青苔(あをのり)は何ほどもとれ沖の石　傘下
いきみたま疊の上に杖つかん　龜洞
千代の秋にほひにしるしことし米　同

しばしかくれゐける人に申遣す

先祝へ梅を心の冬籠り　芭蕉

曠野集員外

誰か華を思はざらむ。たれか市中にありて朝のけしきを見む。我、東四明の麓に有て、花のこゝろはこれを心さす。よつて佐川田喜六の、よしの山あさな〳〵さいへる哥を實にかんず。又

麥喰し雁と思へどわかれ哉

此句尾陽の野水子の作さて、芭蕉翁の傳へしを、なをざりに聞しに、さいつ比、田野へ居をうつして、實に此句を感ず。むかしあまた有ける人の中に、虎の物語せしに、さらに追ほれたる人ありて、獨(ひとり)色を變じたるよし。誠のおほふべからざる事左のごさし。猿を聞て實に下る三聲のなみださいへるも、實の字、老杜のこゝろなるをや。猶

雁の句をしたひて

麥をわすれ華におぼれぬ雁ならし　素堂

この文、人の事づかりて、さゝげら
れしを三人開き、幾度も吟じて

手をさしかざす峰のかげろふ　野水
橇の路もしどろに春の來て　荷兮
ものしづかなるおこし米うり　越人
門の石月待闇のやすらひに　水
風の目利を初秋の雲　兮
武士の鷹うつ山もほど近し　人
しをりについて瀧の鳴る音　水
袋より經とり出す草のうへ　兮
づぶと降られて過るむら雨　人
立かへり松明直ぎる道の端　水
千句いとなむ北山のてら　兮
姥ざくら一重櫻も咲残り　人
あてどもなき夕月夜かな　水
露の身は泥のやうなる物思ひ　兮
秋をなほなく盗人の妻　人
明るやら西も東も鐘の聲　水
さぶうなりたる利根の川舟　兮
冬の日のてか〳〵としてかき曇　人
豕子に行と羽織うち着て　水
ふら〳〵ときのふの市の塩いなだ　兮
狐つきとや人の見るらむ　人
柏木の脚氣の比のつく〳〵と　水
さゝやくことのみな聞えつる　兮
月の影より合にけり辻相撲　人
秋になるより里の酒桶　水
露しぐれ歩鵜に出る暮かけて　兮
うれしとしのぶ不破の萬作　人
かしこまる諫に涙こぼすらし　水
火箸のはねて手のあつき也　兮
かくすもの見せよと人の立かゝり　人
水せきとめて池のかへとり　水
花ざかり都もいまだ定らず　兮

捨て春ふる奉加帳なり　人
畢ぞめは正月ごにわすれつゝ　水
大根きざみて干にいそがし　兮

遠淺や浪にしめさす蜊とり　亀洞
はるの舟間に酒のなき里　荷兮
のどけしや早き泊に荷を解て　昌碧
百足の懼る藥たきけり　野水
夕月の雲の白さをうち詠　舟泉
夜寒の簑を裾に引きせ　釣雪
荻の聲どこともしれぬ所ぞや　筆
一駄過して是も古綿　亀洞
道の邊に立暮したる宜禰が麻　荷兮
樂する比とおもふ年榮　昌碧
いくつともなくてめつたに藏造　釣雪
湯殿まいりのもめむたつ也　舟泉
凉しやと莚もてくる川の端　野水
たらかされしや彳る月　荷兮
秋風に女車の髭おとこ　亀洞
袖ぞ露けき嵯峨の法輪　釣雪
時〳〵にものさへくはぬ花の春　昌碧
八重山吹ははたちなるべし　野水
日のいでやけふは何せん暖に　舟泉
心やすげに土もらふなり　亀洞
向まで突やるほどの小ぶねにて　荷兮
垢離かく人の着ものゝ番　昌碧
配所にて干魚の加減覺えつゝ　釣雪
哥うたふたる聲のほそ〳〵　舟泉
むく起に物いひつけて亦睡り　野水
門を過行茄子よびこむ　荷兮
いりこみて足輕町の藪深し　亀洞
おもひ逢たりどれも高田派　釣雪
盃もわするばかりの下戸の月　昌碧
やゝはつ秋のやみあがりなる　野水
つばくらもおほかた歸る寮の窓　舟泉

水しほはゆき安房の小湊　龜洞
夏の日や見る間に泥の照付て　荷兮
　桶のかづを入しまひけり　昌碧
人なみに脇差さして花に行　釣雪
　ついたづくりに落る精進　野水

美しき鮬うきけり春の水　舟泉
　柳のうらのかまきりの卵　松芳
夕霞染物とりてかへるらん　冬文
　けぶたきやうに見ゆる月影　荷兮
秋草のとてもなき程咲みだれ　松芳
　弓ひきたくる勝相撲とて　舟泉
けふも亦もの拾はむとたち出る　荷兮
　たまたま砂の中の木のはし　冬文
火鼠の皮の衣を尋きて　舟泉
　涙見せじとうち笑ひつゝ　松芳
高みより踏はづしてぞ落にける　冬文
　酒の半に膳もちてたつ　荷兮
幾年を順禮もせず口おしき　松芳
　よまで双帋の繪を先にみる　舟泉
なに事もうちしめりたる花の貌　荷兮
　月のおぼろや飛鳥井の君　冬文
灯に手をおほひつゝ春の風　舟泉
　數珠くりかけて脇息のうへ　松芳
隆辰も入歯に聲のしはがるゝ　冬文
　十日のきくのおしき事也　荷兮
山里の秋めづらしと生鰯　松芳
　長持かふてかへるやゝさむ　舟泉
ざぶざぶとながれを渡る月の影　荷兮
　馬のとほれば馬のいなゝく　冬文
さびしさは垂井の宿の冬の雨　舟泉
　莚ふまへて蕎麥あふつみゆ　松芳
つくづくと錦着る身のうとましく　冬文
　暁ふかく提婆品よむ　荷兮
けしの花とりなをす間に散にけり　松芳

味噌するをとの隣さはがし　舟泉
黄昏の門さまたけに薪分　荷兮
次第〳〵にあたゝかになる　冬文
春の朝赤貝はきてありく兒　舟泉
顏見にもどる花の旅だち　松芳
きさらぎや瀑布(さらし)をかひに夜をこめて　冬文
そら面白き山口の家　荷兮
ほとゝぎす待ぬ心の折もあり　荷兮
雨のわか葉にたてる戸の口　野水
引捨し車は琵琶のかたぎにて　同
あらさがなくも人のからかひ　荷兮
月の秋旅のしたさに出る也　同
一荷(いつか)になひし露のきくらげ　野水
初あらしはつせの寮の坊主共　水
茶畑ふむなとよばりかけたり　兮
土肥(つちこえ)を夕〳〵にかきよせて　仝

印判おとす袖ぞ物うき　水
通路のつい(突)は(張)りこけて逃かへり　仝
六位にありし戀のうはきさ　兮
代まいりたゞやす〳〵と請おひて　仝
錢一貫に鰹一節　水
月の朝鶯つけにいそぐらむ　仝
花咲けりと心まめなり　兮
天仙蓼(またたび)に冷食あさし春の暮　仝
かけがねかけよ看經の中　水
たゞ人となりて着物うちはをり　仝
夕せはしき酒ついでやる　兮
駒のやど昨日は信濃けふは甲斐　水
秋のあらしに昔淨瑠璃　兮
めでたくもよばれにけらし生身魂　水
八日の月のすきといるまで　兮
山の端に松と樅(もみ)とのかすかなる　水
きつきたばこにくら〳〵とする　兮
暑き日や腹がけばかり引結び　仝

太鼓たゝきに階子のぼるか　水
ころ／＼と寢たる木賃の艸枕　兮
氣だてのよきと聟にほしがる　水
忍ぶともしらぬ顏にて一二年　仝
庇をつけて住居かはりぬ　兮
三方の數むつかしと火にくぶる　仝
供奉の艸鞋を谷へはきこみ　水
段／＼や小塩大原嵯峨の花　仝
人おひに行はるの川岸　筆

月さしのぼる氣色は、晝の暑さもなくなるおもしろさに、柄をさしたらばよき團（うちは）、と宗鑑法師の句をずむじ出すに、夏の夜の疵といふ、なほ其跡もやまずつゞきぬ。

月に柄をさしたらばよき團哉
蚊のおるばかり夏の夜の疵　越人

とつくりを誰が置かへてころぶらん　傘下
おもひがけなきかぜふきのそら　同
眞木柱つかへおさへてよりかゝり　人
使の者に返事またする　同
あれこれと猫の子を選るさま／＼に　筆
としたくるまであはう也けり　下
どこでやら手の筋見せて物思ひ　同
まみおもたげに泣はらすかほ　人
大勢の人に法華をこなされて　同
月の夕に釣瓶縄うつ　下
喰ふ柹も又くふかきも皆澁し　同
秋のけしきの畑みる客　人
わがまゝにいつか此世を背くべき　同
寢ながら書か文字のゆがむ戸　下
花に賀にこらへかねたる涙落つ　同
着ものゝ糊のこはき春かぜ　人
うち群て浦の苫屋（とま）の塩干見よ　同
内へはいりてなをほゆる犬　下

醉ざめの水の飲たき比なれや　同
たゞしづかなる雨の降出し　人
歌あはせ獨古鎌首まいらるゝ　同
また獻立のみなちがひけり　下
灯臺の油こぼして押かくし　同
臼をおこせばきり／＼す飛　人
ふく風にゐのころぐさのふら／＼と　同
牛はこはす筑やまの秋　下
むつ／＼と月みる顏の親に似て　同
人の請にはたつこともなし　人
にぎはしく瓜や茄やを荷ひ込　下
干せる疊のころぶ町中　人
おろ／＼と小諸の宿の晝時分　下
皆同音に申念佛　人
百万もくるひ所よ花の春　下
田楽きれてさくら淋しき　人

深川の夜

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮窟にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢簞の大きさ五石ばかり也　仝
風に吹かれて歸る市人　芭蕉
なに事も長安は是名利の地　仝
醫のおほきこそ目ぐるほしけれ　越人
いそがしと師走の空に立出て　芭蕉
ひとり世話やく寺の跡とり　越人
此里に古き玄蕃の名をつたへ　芭蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ／＼やあまりかぼそくあでやかに　芭蕉
かぜひきたまふ聲のうつくし　越人
手もつかず晝の御膳もすべりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路なりけり　越人
月と花比良の高ねを北にして　芭蕉

雲雀さえづるころの肌ぬき　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝
　みせはさびしき麦のひきはり　蕉
家なくて服裟につゝむ十寸鏡　人
　ものおもひゐる神子のものいひ　蕉
人去ていまだ御坐の匂ひける　人
　初瀬に籠る堂の片隅　蕉
ほとゝぎす鼠のあるゝ最中に　人
　垣穂のさゝげ露はこぼれて　蕉
あやにくに煩ふ妹が夕ながめ　人
　あの雲はたがなみだつゝむぞ　蕉
行月のうはの空にて消さうに　人
　砧も遠く鞍にいねぶり　蕉
秋の田をからせぬ公事の長びきて　人
　さい〱ながら文字問に來る　蕉
いかめしく瓦庇の木薬屋　人
　馳走する子の痩てかひなき　蕉
花の頃談義參もうらやまし　人
　田にしをくふて腥きくち　蕉

翁に伴なはれて來る人のめづらしきに

落着に荷兮の文や天津雁　其角
　三夜さの月見雲なかりけり　越人
菊萩の庭に畳を引づりて　仝
　飲でわするゝ茶は水になる　角
誰か來て褌にかけたる夏衣　仝
　歯ぎしりにさへあかつきのかね　人
恨たる泪まぶたにとゞまりて　仝
　静御前に舞をすゝむる　角
空蟬の離魂の煩のおそろしき　仝
　あとなかりける金二万兩　人
いとをしき子を他人とも名付たり　仝
　やけどなをして見しつらきかな　角
酒熱き耳につきたるさゝめごと　仝

魚をもつらぬ月の江の舟　　人
そめいろの富士は淺黄に秋のくれ　　仝
花とさしたる草の一瓶　　角
饅頭をうれしき袖に包みける　　仝
うき世につけて死ぬ人は損　　人
西王母東方朔も目には見ず　　仝
よしや鸚鵡の舌のみじかき　　角
あぢきなや戸にはさまるゝ衣の妻　　仝
戀の親とも逢ふ夜たのまん　　人
やゝおもひ寐もしねられずうち臥て　　仝
米つく音は師走なりけり　　角
夕鴉宿の長さに腹のたつ　　仝
いくつの笠を荷ふ強力　　人
穴いちに塵うちはらひ草枕　　仝
ひいなかざりて伊勢の八朔　　角
滿月に不斷櫻をながめばや　　仝
念者法師は秋のあきかぜ　　人
夕まぐれまたうらめしき帋子夜着　　仝

弓すゝびたる突あけのまど　　角
道ばたに乞食の鎭守垣ゆひて　　仝
ものきゝわかぬ馬士の鬮とり　　人
花の香にあさつき膾みどり也　　仝
むしろ敷べき喚續の春　　仝

我もらじ新酒は人の醒やすき　　嵐雪
秋うそ寒しいつも湯嫌　　越人
月の宿書を引ちらす中にねて　　仝
外面藥の草わけに行　　雪
はねあひて牧にまじらぬ里の馬　　仝
川越くれば城下のみち　　人
疱瘡貞の透とをるほど歯のしろき　　人
唱哥はしらず聲ほそりやる　　雪
なみだみるはなれ〳〵のうき雲に　　同
後ぞひよべといふがはりなき　　越
今朝よりも油あげする玉だすき　　人

行燈はりてかへる浪人　雪
着物を礁にうてと一つ脱　雪
明日は髪そる宵の月影　越
しら露の群て泣ゐる女客　人
つれなの醫者の後姿や　雪
ちる花に日はくれるとも長咄　越
よぶこ鳥とは何をいふらん　人

・

初雪やことしのびたる桐の木に　野水
日のみじかきと冬の朝起　落梧
山川や鵜の喰ものをさがすらん　仝
賤を遠から見るべかりけり　野水
おもふさま押合月に草臥つ　同
あらこと〱し長櫃の萩　落梧
川越の歩にさゝれ行稚の雨　水
ねぶと痛がる顔のきたなき　梧
わがせこをわりなくかくす縁の下　水
すがゝき習ふ比のうきこひ　梧
更る夜の湯はむづかしと水飲て　水
こそぐり起す相住の僧　梧
峰の松あぢなあたりを見出たり　水
旅するうちの心奇麗さ　梧
煮た玉子なまのたまごも一文に　水
下戸は皆いく月のおぼろげ　梧
耳や歯やようても花の数ならず　水
具足めさせにけふの初午　梧
いつやらも鶯聞ぬ此おくに　同
山伏住て人しかるなり　水
くはら〱とくさびぬけたる米車　梧
挑灯過て跡闇きくれ　水
何事を泣けむ髪を振おほひ　梧
しか〲物もいはぬつれなき　水
はづかしといやがる馬にかきのせて　梧
かゝる府中を飴ねぶり行　水
雨やみて雲のちぎるゝ面白や　梧

柳ちるかと例の莚道　水
軒ながく月こそさはれ五十間　同
寂しき秋を女夫居りけり　梧
占を上手にめさるうらやまし　水
黍もてはやすいにしへの酒　同
朝ごとの干魚備るみづ垣に　梧
誰より花を先へ見てとる　同
春雨のくらがり峠こえすまし　水
ねぶりころべと雲雀鳴也　梧

一里の炭賣はいつ冬籠り　一井
かけひの先の瓶氷る朝　鼠彈
さきくさや正木を引に誘ふらん　胡及
肩ぎぬはづれ酒によふ人　長虹
夕月の入ぎは早き塘ぎは　鼠彈
たはらに鯽をつかみこむ秋　一井
里深く踊教に二三日　長虹
宮司が妻にほれられて憂　胡及
問はれても涙に物の云にくき　一井
葛籠とゞきて切ほどく文　鼠彈
うと／＼と寐起ながらに湯をわかす　胡及
寒ゆく夜半の越の雪鍋　長虹
なに事かよばりあひてはうち笑ひ　鼠彈
蛤とりはみな女中也　一井
浦風に脛吹まくる月凉し　長虹
みるもかしこき紀伊の御魂屋　胡及
若者のさし矢射ておる花の陰　一井
蒜くらふ香に遠ざかりけり　鼠彈
はるのくれありき／＼も睡るらん　胡及
帋子の綿の裾に落つく　長虹
はなしする内もさい／＼手を洗　鼠彈
座敷ほどある蚊屋を釣けり　一井
木ばさみにあかるうなりし松の枝　長虹
秤にかゝる人／＼の輿　胡及
此年になりて灸の跡もなき　一井

まくらもせずについ寐入月　鼠彈
暮過て障子の陰のうそ寒き　胡及
　こきたるやうにしほむ萩のは　長虹
御有様入道の宮のはかなげに　鼠彈
　衣引かぶる人の足音　一井
毒なりと瓜一きれも喰ぬ也　長虹
　片風たちて過る白雨　胡及
板へぎて踏所なき庭の内　一井
　はねのぬけたる黒き唐丸　鼠彈
ぬく／＼と日足のしれぬ花曇　長虹
見わたすほどは皆つゝじ也　胡及

京寺町通二條上ル町井筒屋
筒井庄兵衛板

曠野後集（あらのこうしふ）

上・下　荷兮撰

曠野後集　巻第一

細川幽齋
よしやふれ麥はあしくと花の雨
東野州八世常友
わざくれは心の花のあらしかな
荒木田守武
飛梅やかろ〳〵しくも神の庭
山崎宗鑑
借錢もきのふの淵ぞけふの春
五條の翁
ありたつたひともとわたることし哉
本勝寺日能
涼しさに膝を組たる網代哉
親重
月花の三句めを今しる世哉
維舟
山鳥のをれらが春も幾九十
貞室
われら式がやどにもくるやけさの春
一三
さてはあの月がないたか杜宇
忠知
鬼灯は草の錦のふくろ哉
宗因
ながむとて花にもいたし首のほね

今はむかし、是等の人々の句を思ひはかるに、唯みると聞とにいちじるく、詞はいひ出るまゝをはじめの姿になして、あやどるさま見えず。をのづから景と情とそなはりて、又外に渟を得たり。中にも玄旨老師よしやふれとの給ひしは、凡の狂句げにもあらず。はなを侍る心ふかく、ことばは世話の上に盡て、餘情限あらじかし。東常友の心の花のあらしも、麗にまことをそへてまためでたし。飛むめやかろ〳〵しくも千ゝの句のはじめに、囀り出して百鳥の跡絶えず。月に花に心をとゞむる媒とはなりけら

し。中比は犬筑波(いぬつくは)の陰しげく、はなさきの翁の門よりして、このもかのもと云もてきたれるより、さま〴〵うつりゆく姿となりて、をの〳〵一かたならず哀深し。しかはあれど、やゝこの比にいたりて、ちり〳〵草の雫をだに味ふる人なきにや。一ふしあるもじも聞ずなりゆくぞつたなし。たゞいにしへをこそこひしたはるれ。于時元祿癸酉霜月上澣自序。

尾之蓬左　荷兮子

元日

毛吹　うぐひすも哥様なりけふの春　　春可
蓬莱や人丸赤人榧(かや)かちぐり　　信徳
とひたしな穏好きみにけさの春　　皆酔
文時が帘のそりやはなのはる　　野水
田作は手にもとられておかしけれ　　龜洞
御らんぜむことさら民の庭竈　　越人
花の春おもしろひ世に生たり　　釣雪
君が代をかざれ橙二万籠　　舟泉
あら玉や薹のみめには似ぬ鳥　　羽笠
蓬莱やむかしのまゝの組合　　長虹
けふの梅勝たり右も玉椿　　胡及
今朝の春山葵(わさび)をろしの出もせず　　傘下
ぶり〳〵やあほうも共に春の空　　成菌
馬も人もおほきなるよし太郎月　　薄芝
え方にもさはらで高き柳かな　　杉峯
その中にゑり出されたる穂長哉　　鳥巣
家〳〵の懐ふかし松かざり　　舟泉

國栖人のたばこをしらぬ昔哉　荷兮

さればこそ櫻なくても花の春　同

芋がしら其子の親か親の子か　同

正月六日の暮に約束して或人の許に、誰かれさいざなひ行けるが、つれにかはりてこゝろやすからず、路地の開て園に入たり。酒などならべてのち、いろ〳〵の硯の蓋に短尺すへていだしぬ、それは梅の題にてぞ侍りける。あるじ茶たてる間に立て句を案じぬ。これよりも短尺こひて、題書付てつかはしけるに、あるじ句出來たりけむ、鉦ならしもさの座にいるゝ。

白梅や膚たゆまずまじろかず　醉竹

しら鞘や木賊もかけず梅の花　越人

朔日はわすれて居たり梅の花　羽笠

紅梅やあめにもあはずはなざかり　旦藁

咲梅やなにとやらいふ花も有　杉峯

又みるや一重のゝちのむめの花　荷兮

若菜　十二種

わか菜

鷹狩の道さまたげや摘若菜　同

薺

上下にみ知られている薺哉

はこべら

万代をたのむ岩根のはこべ哉

莖

野馬のたちまふ莖の古葉哉

蕨

むらさきの鎰見出したる蕨哉

芹

よきにほひ芹と付たる名なるべし

葵

松苗の二葉引かふあふひかな

菊の葉のしらけて匂ふ蓬哉　[illegible] まつ

おもだかの角にやぶるゝ氷かな　水蓼

水蓼やとんぼうに成虫の種　芝 水雲

鶯や竹の古葉を踏落し　荷兮

日の暮やうぐひすのなく方戀し　旦藁

山中の木の芽いでけり百千鳥　同

篭あけて鶯竹にうつらせむ　松坂 晨風

若草に口ばしぬぐふ鳥かな　凡兆

さりながら梅にはじまる月夜哉　野水

梅咲て枝に位のつきにけり　旦藁

あたらしき木綿布子や梅の花　大野 正勝

白梅は虻にすはれぬ一木かな　杉峯

紅梅やひらきおほせて薄からず　岡崎 睡闇

むめ散て椿の中にやどりけり　同 薇艇

つぼみよりなぶりおほせし椿哉　同

鶏のつゝいて見たる木の芽哉　関 芦蚊

にほひよりにがみとらばや蕗の塔　不睡

白魚と律(りち)義(ぎ)に人の中けり　雪語

力出す時の太鼓やはるの雨　新城 雪丸

人の手にとられてのちや櫻海苔　杉峯

仲春

おくれたり源氏にもれしたはこ苗　野水

若草の夜を見よとや薪能(たきぎのう)　鳥巣

連翹はめでたし手間のいらぬ花　荷兮

鳴雉子微雨(こさめ)に麥の莖立ぬ　岡崎 鷺雪

つくろはぬ毛色はいかに雉の妻　同 素文

天津雁かへる心や來るこゝろ　文長

のどけしやほうろく賣て干鰯(ほしか)馬　洗古

苗代や夕日こがるゝ水の底　鳥巣

草〳〵の塒尋ぬる胡蝶哉　ゆん

さえかへるけしきしづむる霞哉　旦藁

早蕨や幸龜のきれぬ時　岡崎 素白

朧月竹に雀のかけものか　成菌

宵の間にきえさうなりや朧月　尹之

夕霞くれて朧と申けり　良彈

野馬や水つかふたる手の雫　傘下

かげろふやとりつきかねし雪の上　荷兮

陽炎のやどる所や餅のかひ　只松

味噌玉や春のものとも定らず　美濃 可因

曠野後集第二

毎月七日、十六日・廿四日、連中三會に分て、滿歌仙一座、歳旦開の懷紙と同柱にかけて有けるをはづしおろして

二月十六日

風次第わたくしのなき柳かな　漁船

けふばかり欲なかりけり山櫻　野皐

卯花や青狩衣にたてゑぼし　成菌

さみだれや蓮の立葉の共まゝに　鵜支

鬼百合やたゞ手摑につかむさま　一葦

氣さんじや稲葉〳〵の雨あがり　長虹

とし〳〵の所いひ出す月見哉　薛竹

蘭の香や通りかゝれるはさみ虫　旦藁

から鮭に不圖落かゝる木葉哉　呂松

炭竈や所にぎはふ斧の聲　文長

年忘れ笑ひのこしのわらひ哉　卓志

二月廿五日　　　　　　　亭主　越人
　天滿宮御忌

梅一里觀音寺にはかねの聲　　荷兮

誹諧百韻過て、奉納の發句ありけるを書とめて

神垣や造おほせしむめの花　　龜洞
神躰の梅はどの木を申らん　　昌碧
さく梅を一躰と拜み申なり　　重五
埃はきて手向にせばや梅の下　　羽笠
しづかさやみかきの梅の大樣　　雨桐
むめが香に内外淸淨と成にけり　　旦藁
花鳥の文選をよむ御前かな　　舟泉
浪風もしづかなりけり舟の宮　　釣雪
みな人の三寸やそなへん梅の色　　昌圭

宗阿彌筆
御影束帶綱敷毫繪
兩脇　山崎宗鑑手蹟語曰
　梅是訪無罪遠流之愁歎
　松示顯本望歸洛之實躰

さし梅や千里一時はるのかぜ　　傘下
老松の花をもてなす霞かな　　長江

元祿四　三月三日　　　　亭主　旦藁

旦藁の風顚漢は、市中に牛を牽て耳洗ふをなにくまず。雪の夜舟を浮て、王子猷が客を待ず。造化の奇物にいそがしうして、名と利に隙を得たり。ことし上巳の日これ〳〵の人をまねきて、鷄のひる鳴窓にあれど、水淡き此四橋に逍遥して宴をもうく。

　献立
なます　冷汁
煮しめ　食
酒
肴
　くはし
茶

ゆく〳〵土筆やしの野菜をいごみ評ひさりて、炮烙を柳にむすび、み

ざはの芦を焼、長堤を枕して平家の聲聲をうたへば、あるじ俗をひらきて比巴をかきならす。長生を昔の桃源に習ひ、地を城北に卜する類にもよらず。今日一樽の醉漢に後の工をしらず。左相が万錢を費ずして、醉酒に飽は今の世の泰平、いにしへにこえて、知章が馬をくして汀にのぞめば、眼花落水底眠、或は月夜鳥はいつもなく。小六ついたる竹の杖ぞさしをり出すはあれど、この比のとをおぼへたるはなし。夕陽水にながるゝ比、をの〳〵懐紙にかきつく。

曲水におよぎならはゞ瓢かな　旦藁
曲水やつかみそこなふ小盃　丁々
ためらへる顏や盃ながす時　杉峯
曲水や羽織をし(敷)ひて砂の上　成菌
土筆つむやさかづき持ながら　傘下
いたゞかむ盃はやしながしこせ　冬文
盃は浪もいらずにながれけり　桃里
さかづきや人の跡からおよぎ込　長虹
さかづきを流す片手にたばこ哉　榎柢
盃やながすも飲も摸陵の手　文長

三月十八日
人丸講式

脇息もあたゝまりけむ遲櫻　利重
道遠し松壽千年はるの色　荷兮
あまざかる碑の銘のぞく霞哉　羽笠
八藤のあやおりみるや春の水　醉竹

花

そならよし花にしていざ峯の雲　皆醉
ゆる〳〵と芳野の里や花曇　旦藁
咲花やそれもよし散か其もよし　同
鶯や咽鳴そふるはなの中　龜洞

ちる花の世や蕎麥切を喰ふよふ　越人
酒うけてちらば今なり花の下　長虹
うつけたる人はかしこし花の陰　羽笠
久〱のはや道作るはな見哉　岡崎 秋冬
ちるはなをいはゞ涙の茶抄哉　鳥巣
花にきて吹もどされつ風の蝶　ゆん
はなの山のぼりすませば上廣し　新城 淡水
山は花干鱈一枚笠ふくろ　鷺雪
白衣にてはしり寄たる花見哉　上有知 梅夕
見事なる人の獨りや花の下　傘下
この花にまた人來ぬか鳥の糞　文長
はな前に稽古して見るたばこ哉　桃里
靑雲を後にはなの續けり　荷兮
宗祇のみのこれるはなの夕哉　旦藁

櫻

いざ折て人中見せん山ざくら　一鉄
江戸櫻志賀の都は荒にけり　信徳
やまよ山何さくらともこのまれず　杉峯
上氣するかほの氣色やかば櫻　旦藁
しほ鱈や塩うれしがる山櫻　鼠彈
奥山や櫻に米を一せをね　傘下
ほしきものみな調るさくら哉　龜洞
櫻狩酒のあひても揃けり　岡崎 川鳥
兒二人見えかくれけり糸櫻　丁々
庭掃も痩てゐるなり糸櫻　霞艇
大勢の茶屋の過行さくら哉　桃里
馬とめて手綱かいくる櫻かな　岡崎 秋月
とりつきにまづ山吹の麓哉　ミノ 謙之
藤たれて光あひけり砂の色　霞艇
鷄のぬき合せたる蹴爪かな　ミノ 夕森

三月盡

ながき日や宗門帳の人の數　ミノ 唯行
行春や佐理の書よき筆片シ　旦藁
ゆく春や寐まきながらにたばこのむ　鈍可
ゆく春を犬に躾れし菫かな　淡水
行春や鐘つきしまふ杉の中　荷兮

曠野後集　第三

首夏

うれしさや先綿ぬきて三ツになる　一井
更衣や心かろげなありきやう　岡崎 鶴聲
卯花の青みうしなふ月夜かな　同
陽氣さはすこしもみえじ若楓　漁船
おれかゝる枝にも出る若葉かな　舟泉
若葉なる桜はつゝくり普請哉　旦藁
何鳥に帷子染んわかかへで　岡崎 千州
たばこより先に目覺る若葉哉　玉屑
ふり出すやしばらく雨をもつ若ば　成田 明重
まがり木の姿は見えじ夏木立　素文
尾長鳥隣ありきや夏木立　旦藁
壁ぎはやはへたるまゝの桐のはな　醉竹
桐のはなや鋸屑とかきよする　丁々
かたくなに覺て扣く水鶏哉　岡崎 沾參
それよりして月夜烏や郭公　其角
鶯はひまに聞けりほとゝぎす　白支
しら濱や何を木陰にほとゝぎす　曾良
牡宇垣根荒けり榎茸　旦藁
ほとゝぎすこらへ袋の緒をきらせ　傘下
おひし子の口まねするや時鳥　岐阜 松下
舟着の灯籠幽なり郭公　薄芝
友のある音ぞ口おしくかんこ鳥　舟泉
うつくしき果報もゆゝし杜若　旦藁
おほきくてかろく咲たる牡丹哉　岡崎 湖舟
蝶の氣に入た顔なりしやかの花　旦藁

仲夏

若竹やくひのこされて豆腐串　釣雪
竹の子は花とも實とも定らず　扇河
わか竹に聞ばや聲のよき小哥　鼠彈
水や空そらや星とも飛ほたる　舟泉
ころ〳〵と小石ながるゝ螢かな　羽笠
火のきえて帷子ひかる螢哉　斧芥

くらき夜の植込すごき螢哉　ゆん
懐（ふところ）にいるゝ人なきほたるかな　加賀 句空
麥穂の中も涼しきほたる哉　秋月

端午のこゝぶさな

やさしくもつかまつゝたる粽かな　荷兮
晝寐する蟲あたらし五月雨　旦藁
いくつにてくるみの花よ智惠のつく　同
鹿の子やまだなに心なき時分　牧人
青梅のはなの腐か籔むしろ　舟泉
夕がほや釣瓶繩うつ人の聲　千州
脊戸見せに連てありくや茄畑　重五

有明

夏の朝つとめて快き月か　荷兮

下弦

片われの月はいよ〳〵明やすし　越中 枝雪
れき〳〵に酒をまいるよ夏の月　卓志
短夜やいらへをしても寐る男　傘下
みじか夜や先押よせて置道具　同

みじか夜や茶をほうじ置角折敷　胡及
短夜や朝の機嫌のあしきかほ　二松
みじか夜の寐起やすね（脛）をかきながら　朝水
しづかさや枕して聞蚊屋の音　尹之
蚊屋に蚊をのこして出る裸かな　不琢
餌かひして戻る篭（かゞり）や鵜の勢ひ　曾良
鵜つかひの心よはうてかなふまじ　戈郎
蟬の聲夜の耳にも殘けり　丁々
柿の木はよきやどりなり蟬の聲　越中 枝雪
藻の花や水吸物の香なき　荷兮
大事げにかけて哀な浮巣（うきす）哉　旦藁

暮夏

蛛のい（圍）や蓮の卷葉のひらき時　長虹
かたちより心のひねし蓮哉　荷兮
夏草の中に石きるにほひ哉　嘉竹
夏草や刈手あぶなきねぶたがは　尹之
氣のつまる相手には先扇哉　鼠彈

もの陰に児の引さく扇かな　芦蚊

下手の張る圍も終に破けり　成菌

河邊眺望

此あたり目に見ゆる物はみなすゞし　芭蕉

牀のはしに

この松にかへす風あり夕涼み　共角

この人數舟なればこそ涼みかな　同

詩經に夏は散居と作る。深川の舊菴より川づらを見れば、舟にてふさぎ申けり。

軒合に猫よく寐たり下すゞみ　共角

暮涼し今蛛のいの柱だて　尹之

涼風や髪うちこみて一休み　短蓑

すゞむ月明日の仕事は垣根哉　傘下

端涼み寐ている内にさす日哉　桃里

居り所定(きめ)ぬ宵の涼みかな　岡崎 歌的

暑き日やげにはすくなき人通　昌碧

目の覺て隣を起す暑さ哉　不琢

暑日や材木かつぐ後つき　一非

影ほしのあたまふまゆる暑さ哉　鼠彈

いくたびの袂やおもき汗拭　三州西郡 蘭風

あたゝめて藥もてこい簟(たかむしろ)　晴虹

盃のをきどころなしたかむしろ　鵜支

すみきりていさご動す志(清)水哉　池鯉鮒 猶水

手を入てかきまはせども清水哉　傘下

夏陰やはや蓼の穗の志し　荷兮

うつかりとすぐべかりけり夏の果　烏巢

曠野後集　第四

初穐

はつ秋やたゝみながらの蚊屋の夜着　芭蕉
秋立や後(うしろ)手(で)組て朝のうち　三州千久保 千釣
あき立やたてかけてある竹箒　荷兮
桐の葉は落けり穐のたしかなる　雲綻
七夕やものかゝぬ人の物おぼへ　傘下
穐風や蓮をちからにはな一ッ　岡崎 鶴聲
小男も手につかまれぬ相撲哉　岡崎 未出
にぎやかな中にしづけし盆の月　秋冬
散とばかり咲とはいはぬ花火哉　新城 杏下
杁の戸をおろすや早稲の花盛　秋冬
青柿や壁土こねて休み居る　旦藁

仲穐

日のいりてはじめて秋の夕かな　羽笠
此とをり人もだまさじ穐の色　鳥巢

日を明てながなる穐の睡哉　角呂
ふるくともはなし切すな秋の暮　秋冬
是ほどゝ心づかずやあきの色　丁々
つむ木の木口(こぐち)ぞ青き秋の暮　旦藁
なみ松の間〳〵やあきのいろ　荷兮
山一ッ越てもやまやあきの色　白支
穐あくや竹ハ〳〵と呼る聲　釣雪
萩の花咲そろふ日や鶴のこゑ　鼠彈
澤水の干あがる花も花野哉　長虹
捨てあるものや色〳〵露の玉　傘下
あさがほにたらされたりや今年迄　重五
あさがほの果報は人の見やう哉　鳥巢
葬に馬そろへたる山路かな　雨洞
朝露のはれなる白き芙蓉哉　旦藁
ひとなれるかぎり盡てはせを哉　洞和
蜀黍はなとはゝまする稲の殿　越人
稲妻や壁に書たる大坊主　羽笠
なにごともなきいなづまのおそろしき　ゆん

いなづまに又くりかへす嘶哉　鶴聲
たゝえしや礒に落る夜這星　薄芝
いく夜〳〵つすさゝくれとなる礒　丁々
やゝ寒く帷子のいろわすれたり　沾參
蚊屋しまふ夜や銀屛のさびのよき　醉竹
なく鹿をつまこふるとは是非もなし　文長
いざ起て酒のみ給へ鹿の聲　羽笠
かじかなく闇に米かす誰やらん　同
もろともに肝つぶしてや立鶉　旦藁

月

名月やとに虫鳥萩すゝき　羽笠
我を客我をあるじやけふの月　如行
盃はきのふ出來たりけふの月　越人
名月や小兵なれども見てかへる　鶴聲
名月や去年のけふも見たる人　三州 万水
月は山けふや近江のあめの魚　荷兮
名月や青物店を明ながら　同
いざよひの月や蒔繪のしづみたる　越人
はれきるや光に曇る月の影　旦藁
宵まとひ無理に釣出す月見哉　大垣 竹戸
大雨やみな寐る比にはるゝ月　旦藁
献立の一に定る月見かな　大垣 前川

十三夜

私はあとにふせらん後の月　龜洞
のちの月又なりなをす茶杓哉　醉竹
ものごとにゆき過る人や後の月　鼠彈
晴きるやのちの月夜の初時雨　昌碧
三弦をとりをく比や後の月　杉峯
舟で出る相談やむやのちの月　文長

旦藁が田家にて

つゝなるやもの陰くらき後の月　荷兮
白菊のあまりくまなき月夜哉　玉屑
駒牽の尻撫てやる名殘哉　越人
爪髮も旅のすがたや駒むかひ　荷兮
うら枯やそれでなうても行嵐　越中 楚調
うらがれやまだかたつらは艸の色　杉峯

うら枯やたねい心をうち捨る　丁々

いひ捨紛り題とりの發句

名木散

葉の落る秋もめでたしやま櫻　旦藁

長夜

ながき夜やいつはかゝれと足の爪　羽笠

梅嫌（もどき）

しづかにて淋しげもなし梅もどき　長虹

撰虫

かまきりよ御前で勝負仕れ　鳥巣

菊

暮がたや次第〱にしろき菊　薄芝

露時雨

うそつきにうそつかせばや露時雨　杉峯

蘿

蔦の葉は殘らず風の動哉　荷兮

蕎麥華

そばかるやまだしら花の有ながら　曾良

紅葉の庭はく音や塀一重　旦藁

蔦の葉はそれなりけりの梔かな　傘下

はさかふて旅にとまる紅葉かな　槙柢

いろみたる柚の香や花の名も朽ず　岡崎 端當

さま〱のちからばなしのうちに、力もいれずして、目のまへにけしきをうつすぞ。

松引て蔦庭になす力かな　荷兮

重陽

おとなしや其良もせずけふの菊　荷兮

折〱の物まね古し菊の宴　文長

後宴

殘菊風もひかずに匂ひけり　牧人

菊

むらさきもあるを散菊白き菊　醉竹

てら〱と菊の光りやはま庇　荷兮

垣ごしや菊より出て長咄し　旦藁

夏菊やおくれて終に秋のきく　愚益

心なく菊ほめ過す慮外なり　成菌

うち連て一かたまりの野菊哉　上川邊 風鶴

雑

竹木さく音も更行夜寒哉　傘下
淺茅の穂や子猫の見えかくれ　荷兮
一さうに散てものけぬ柳かな　侶半
日の覺てまた生綿ひく隣哉　榎柢
木かれの堀に折ふす穂蓼かな　素白

松茸になくて

葉のかけにされども殘る松露哉　同
茸狩は陽氣にみゆる出立哉　一得
虫の音のよはるや霜のほうし花　旦藁
ころ〳〵と土の鈴なる虫の聲　荷兮
蜀黍の陰のわたるや露時雨　同

九月盡

秋くれて寂しき炭の匂ひ哉　昌碧
ゆくあきやさて〳〵人を泣せたり　越人

曠野後集第五

初冬

落る葉の枯木みよとや啼鳥　亀洞
かれ〳〵てなにをかゞしに吹嵐　傘下
枯柳腹の見えけりむら雀　旦藁
冬枯の跡なを寒し柿の蔕　釣雪
もの數寄もさらに枯野の鶉哉　鈍可
吹風の落つきもなき枯野かな　成菌
凩や空堀の底おそろしき　千釣
こがらしや野中の家の造りかけ　謙之
一枝はみてゐるうちの落葉哉　上有知 一笑
そろ〳〵と戸を明るにも落葉哉　尹之
かれ野かな人のみぬもの見出すべし　桃里
なにとなく枯野ゝ噂中たし　嘉竹
出來したり凩に咲梅の花　千釣
春よりは冬といふべし糸櫻　蒲支
薦尾の葉はみなぬれにけり初しぐれ　鼠彈

しぐるゝやくはぬ轆轤を打扣く　醉竹
排〱の片腹おかし横時雨　傘下
手がみかくうちにはれゆく時雨哉　岡崎 兆民
寒菊やよほど莟もはつ時雨　同 柏里
しぐれけむしみ〱となる四方の空　荷兮
腹のなるをとも更行しぐれかな　旦藁
追ついて霰の跡のしぐれ哉　同
歸る帆のふくらにたまる霰かな　一井
曉のかね鑄る内や降あられ　白支
から〱と味噌に摺こむ霰かな　傘下
山茶花や茶の花よりは後の花　素文
枇杷の葉やよごれ〱て冬の空　傘下
火燵にて見るや普請の指圖板　晴虹
茶をすゝる音なを寒し臺所　一井
夜着一ッかさぬる鴨の羽音哉　霰艇
編笠の氣色なきかな冬の空　釣雪
人の氣も少しづまる小春哉　杉峯
うら〱と日和さびしき小春かな　旦藁

初霜やかしこまりたる親の前　桑名 意計
寒かれと天を祈や火桶うり　章甫

雪

杼の木はいよ〱雪の朝かな　越人
あたゝかにみゆるもの哉松の雪　烏巣

旅日の會に

ためつけて雪見にまかる紙子哉　芭蕉
雪の夜は何の響に鍋のつる　傘下
初雪や松明ふりて行山路　成菌
ふる雪や馬つなぎをく門柱　桃里
しら雪やうちつくる戸の閑さよ　白扇
はつ雪や風のなき夜の明はなれ　美濃 塊人
きのふよりいひあてにけり雪の空　不琢
見くらべてたまる雪より空の雪　荷兮
雪の夜は餅氷らせに裸かな　林水
ゆきの暮明日の食米出したり　鶴聲
雪の朝日の闌けむと起あがり　文長
雪の日は朝食まへのこゝろ哉　醉竹

はつ雪の降出す比や晝時分　傘下
初雪やさても大な足のあと　一井
鶴に降はつ雪見よや和田の原　白支
みぞれ降裏町淋し餅の店　美濃 可因

霜月十七日月次の會に

寒月に洗あげたる根深哉　冬文
あり〳〵と柿の一葉や冬の月　文長
藪陰に渡しまつ間や冬の月　白支
寒月や豆腐のまめをかきまはし　朝水

歳暮

年なみは所詮早物がたりかな　旦藁
みぬ所見たるうれしや煤拂　同
おほとしや手づから鰤のせんはつり　舟泉
有とをいふもしらずや節季候　不琢
春ちかくけふ頃日や鬼に瘤　傘下
どれみても作木はなし小松うり　岡崎 奥猿
はし帋の名も書なをせすゝはらひ　今尾 風和
むつまじきものや餅つく町つゞき　羽笠

曠野後集　第六

名所　旅

はつ夢や濱名の橋の今のさま　越人
けふの春瀬戸の一かま明にけり　冬文
さほ姫の若狭と云し國の名か　釣雪
蕗の塔や一夜どまりの留主の垣　榎柢
鳴雲雀國のちがひもなかりけり　龜洞
夕ぐれや雲雀ゆうなる市の跡　呂圭
出ふねや磯見ゆる迄鳴雲雀　長虹

廻國の折ふし

里までは一里もあらん雉の聲　鶴聲
草鞋ながらまづ淸水の花見哉　新城 白雪
松ばやしさても奥ある雉の聲　擧母 松菊
旅したふおもふ榎の若葉かな　旦藁
面櫂やあかしの泊り郭公　荷兮

廻國せし人に

おぼえしや所〳〵の早苗哥　同

たびや今朝粽もしらず常の食　　長虹

へ身は甍に似て十歩を過ず。ゆき／＼て三河の市の家にやどる。

かゝる時蚤にも痩よ艸莚　　荷兮

鳴海に一夜とまりて、主の庭の曙を見る。

夏山や樗に續くいはし雲　　同

うち敷て旅の園や石のあと　　如行

餞別

たつ時にわすれやすきは扇かな　　霰艇

舊里を辭て

つたへ聞小哥にちかふ志水かな　　荷兮

繪にかける扇見にけり須磨の寺　　如水

越人にあふて

おとこぶり水のむ顔や秋の月　　凡兆

秋の日のかりそめながらみだれけり　　去來

武府へいひやるとて

鳴海より何町月ぞや月の宿　　旦藁

荷兮が許に衆臥せし友立したひて

靑柳の苔かぞへしはたれ／＼ぞ　　其角

初茸にいかい顔かな大江山　　泉擇

衣うつ所へ旅のもどりかな　　旦藁

先祖の屋敷に住居せし人に云やりける。

德利のかけも有べし菊畑　　荷兮

よこ雲やはなれ／＼のそば畑　　其角

雪中夜泊

股引をとらで踏こむ燒火哉　　岡崎 橋月

熱田の雪見んとて、舟に乘じて出るに、雪の句はなくて

ひよこ／＼と浪にまかする小鴨哉　　旦藁

同じくめしつかふ者の申ける。

初雪は何に降てもおもしろや

降雪や熱田の沖の一の澪

莽菴しつらひける時來かゝりて

片屋根や雪うち散て穗屋のまね　　曾良

曉の鴨ややばせの海の端　　白支

馬のはなむけに

雪の暮どの馬士(まご)がいだくらん　素白

三州より牛を送りさゞけられける
人に云つりける。

寒き日や牛風引す羅着　旦藁

釋教

あら玉の角ひしもなき心もて　鼠彈

あめあられ雪や蜷川新右衛門　旦藁

涅槃像

うぐひすは鳴聲でなし涅槃像　鼠彈

彼岸

山里はたゞはる斗(ばかり)ひがん哉　芦蚊

壬生念佛

笑はずにこらへすますや壬生念佛　秋冬

御身拭

われらまで御爪のはしか御身拭　洗古

灌佛

灌佛の日をかぞへたる貧地哉　芦蚊

當麻法事

觀音の面着たがる供養哉　鶴聲

最勝會

女房のみのり覗や五月雨　鼠彈

施米

口あてゝ袷ひろぐる施米哉　烏巣

盆

玉祭食のひえ(冷)行ばかりなり　蘭秀

三井寺女詣

ひとりある子も女なり三井詣　巴文

舍利會

輝や二千餘廻の後の月　文長

日蓮忌

あらさむの佛さまかな十三日　傘下

空也忌

よび入てふしならひけり鉢敲　洗古

酒のみて勢ひ過たりはちたゝき　旦霞

維摩會

松寒し藤のゆかりの御簾のふさ　一井

東福寺開山諱

村しぐれ一二の橋の竹笠屋　荷兮

本願寺開山講

あたらしき頭巾のさまや御霜月　芦蚊

寒念佛

一ツには聲の爲なり寒念佛　大坂 何處

更るまで待や上手の寒念佛　柏里

黑米のつれも有べし寒念佛　洗古

佛名

曉や口のすうなる御名の數　文長

佛名や首たて衣吹あらし　荷兮

寺

梅の花見にこそきつれ扈從衆　同

生の海苔寺に上けり佛の口　鼠彈

建中寺の花にまかりて

智者達の念にもあかぬ花見哉　荷兮

山寺や裏も表も柿のはな　ミノ 氣風

常〳〵も寺に遊ぶや春の雨　川烏

初秋や初瀨の寺の朝のさま　荷兮

あさがほやへつらひがまし寺の垣　藝州 里洞

寺〳〵の鐘聞月の戻りかな　川烏

禁酒之石碑

山茶花に科かうむらん酒一ツ　釣雪

僧

玄賓の心もしらぬかはづかな　野水

澤菴の跡洛ほいなし杜宇　胡及

頭陀袋おろして休む志水哉　傘下

尾ばな咲宿や夫婦の正信偈　醉竹

無常

杜國が夢に見て

散梅や死んだとは見ぬ夢の内　旦藁

杜國がいらこにしばらく住ひして
ほどなく身まかりけるに

蛛のいのはかなや春の細簾　荷兮

父の墓所にて

土もなき岩の上なるつゝじ哉　霰艇

送二落梧追善一

雨水の青にやどるほたる哉　荷兮

月忌

青梅や落てうもるゝ苔の下　旦藁

世をはやう身まかりける人に申つかはす。

遍昭がもとの雫の夏野かな　荷兮

同じ人に

たちゆくやあな頼みがた蟬の宿　秋冬

同じ人に

曉に行かゝりたるほたるかな　霰艇

逆生碑

石の上飛はしる鮎の仰みん　川烏

追善

力なく持やかなめのなきあふぎ　湖舟

朋友の葬送りて

さぞあらん仕殘とや露の數　旦藁

父の忌思ひ出る日

箸添て手向となせる初穗哉　白支

或人の父の月忌に草花を送るとて

小車のはやく一月まはるなり　荷兮

いさやさしき童の身まかりけるを、
親の元へいひやるとて

ちる菊や手の筋のよき證もなし　旦藁

母の日に日を明たる蕣菜哉　加州 春幾

述懷

寂然が山居の秋を思ひ出る春

かざらばや峯のさゝ栗はら〳〵と　一莘

たうとき法の師の、藁と竹とにうちまかせ給ひて、自號二撫贅庵一に

さゝ垣に腹のふくるゝ椿かな　荷兮

寄二隱士竹畫一讃

竹の葉や春の氣色をうらやまず　同

はるをおしむにつけても、たゞなつかしきなんと、伊良胡の杜國にいひやるとて

住すてし家見に行や花の時　同

いつもさむきあひだはかしらをおろさず。春のあらしもいさひ給ふ人に

冬春を經てや若葉にそるあたま　一井

京に居て京なつかしや郭公　芭蕉

蚊屋のとき苦になる中の杜哉　荊支

舉母へかへる人おくりて、舉母へ行心になりぬ。熱田より人なかへたて、燒食なんど入つき袋をたがいにもちかつぎ、ひなびたるさまして道興じける。

穐の野や住すは似まひ里人に　旦藁

益もなき身は澁柿のみのり哉　同

椋の實喰ふ鵯を我身かな　同

人の賀にもきられけらし門の菊　荷兮

つゞくるや着て寐る衾敷ふすま　塊人

我が師走稗くふ鳥のやすけ也　荷兮

菴を造て移る年

ものうりの聲聞絶る師走哉　同

平蛛感

南山人王守乙、杖をもちて蛛のいをやぶる。言は身をはたらかずして、工に食をもうくればなり。凡生るものゝ數を見るに、形をの〳〵にて、こゝろも又異なり。鳥は雲に飛、魚は水にひそまる。蠅をとる蛛は家なくして壁に走る。又土の中に俤をつくりてやどりとなすは、地を這ふ物をとるにや。三隅あるところに居をかまへ、空より落る物を待にや。吉備のおとゞに詩をよませ、貨狄に船をおしへ、我がせこがくべき宵なり、との給ひしもその人のこゝろにして、その蛛にこゝろなし。しかし長安の楼に網を覆へば、あさな〳〵竹箒にかけられ、豆のごとくに身をなし、しばらく人の眼を奪といへども燕雀の患まぬかれず。また其類にして閑を得るものあり、平蛛と云。五板といたとの間にありて、上下つかゆることあらじ。五月雨やあらしの秋の夜も、住所ふかければしのぐにやすし。たま〳〵食をもとむれども、すこしにて滿り。彼杖のおもひなければ、睡にいとまあり。あふげば月、うつぶけば雪、此間に性を賦て、平なるかたちを得たり。何ぞ

守乙、天然をしらざる事つたなし。我又此蛛を見て、我が性のひとしきことをしりて、ものうりの聲たえたり。

雜

海

海遠く山から見たるしほ干哉　小牧 尺山
うみとをき都や里の茄子やき　鳥紅
月の船盃海へしたみけり　桃里
入まではは見つくしがたや海の月　榎柢
漕出して船頭ぬるし海の月　氣風

嶋

鳥追も田簑の嶋のかくれずや　鈍可
見送らん夷(エゾ)まで行か歸る雁　釣雪
舟よせてしらぬ嶋見ん桃の花　加賀 春幾

磯

いその屋につくね置けり雨の海苔　龜洞
出船や磯見ゆるまで鳴雲雀　長虹

川

大川や漸〳〵越てとまる謙　蝶之
夕立や旅人いそぐ前の川　岡崎 谷水
籠ながら間引菜洗ふ川邊哉　杏下

池

籾ひたす池や極る志摩二郡　荷兮
物とりをく氣色や池の刈眞菰　旦藁
何〳〵の聲聞えしや池の鴨　謙之

船

舟待よ浪に櫻の散るあいだ　湖舟
乘合や近付かへす朧旦　旦霞
名月や隣の舟は鱸(すゞき)つる　千州
名月の磯につり出す小舟哉　川鳥
水鳥や金目につもる走舟　如春

水

朝がほのしぼみ落けり水の中　白扇
秋の日やちら〳〵動く水の上　荷兮
かじかなく釣瓶に水の殘けり　醉竹

山

山〳〵の花のさかりや辻の人　川鳥
名を誘出るややまがたな　傘下
山汁の跡から氷るじのぶ哉　（岡崎）哥的

道

人待たん道筋おほし土筆　長虹
道せばしをのれ廣しと咲菫　朝水
道行の足下をみる時雨哉　鈍可

里

里ちかふなるやら雯に八重櫻　秋冬
山里や新茶の時の石秤　傘下

雲

雲のみね苗うつしつゝ打詠め　秋冬
鳶のゝぼる限りなき哉雲峯　榎柢
雲高き野ゝ分の後の入日哉　空能
ほころぶやはづれ〳〵を雲の月　斧芥

風

風なりに聲なきからす雲雀哉　（岩崎）壽棟
秋風や手のはなされぬ窓の蓋　（京十二歳）景桃
かぜ吹てころぶや菊のあしきとし　川水

松

吹散て松葉や氷る石の中　荷兮

竹

晝前になく成にけり竹の雪　朝水
かたはしに寐て哀也竹の雪　（上有知）虚舟
水棚のみだれをとづるこほりかな　（谷水）妻
くれ竹の雀鼻つく霰かな　壽棟

鷹

とや鷹の風もゆるがぬ蓑毛哉　卓志
はし鷹のふり殘されて睡けり　傘下
秋風の夜鷹やつかむ鳥の聲　旦藁
はな紙はみな奇麗なり鷹野かな　越人

酒

さみだれやあたりの酒の氣にいらず　胡及
夜明るや酒のきをひの一踊　長虹
衣擣音や酒屋に酒うらす　越人
酒しほに鼂やすますする夕哉　長虹

曠野後集第七 下

初戀

初戀や筆試るすみのいろ　烏紅
はなの顔おもひやるともちがひけり　荷兮

寄レ花戀

花の春や若宮を抱く女房達　支流
馬の上花よめ睡る夕日哉　杜國

小町に思ひこす

關寺の月や小町にほたん犬　旦藁

清少納言にかはりて

譽やすしそはで果べき冬籠　同

疑戀

あら玉やさらりとしたる文の中　同
いつはりとおもひつけるか袖の露　同

後朝

身は是ぞ文につゝみてやる螢　同
深き雪切にかよふと仰かな　同

悔戀

さみだれはつらし若衆の馬合羽　同
あとくやむ身は草むらのほたる哉　同

忍戀

初花やかたる友なき老の戀　同
夏痩とこたへて忍ぶ泪哉　同
六月の空もかなしき戀路哉　同
うごくたび蚊の音立る思ひ哉　謙之
似た人もあらば泣たし夕時雨　越ヤ投雪

待戀

ほとゝぎす我や鼠にひかれけむ　其角
來る人に夕がほみよと出ぬけけり　白支
こぬ人を三十日の月と思ひけり　丁々
水風呂の客は待夜のさはり哉　旦藁
待宵のしきゐにたまる木葉哉　文長
又今宵こぬに炭つぐ火燵かな　兆民
わがせこが食櫃入る火燵かな　白雪
そば湯して妻や待らん鉢敲　同

別戀

君やりて跡なを強し五月雨　尹之
わかれゆく折に顔見る月夜哉　岡崎 露斗
更る月送りたき身は女なり　且藁
きぬ〴〵ににくゝや霞のあらけなき　洗古
かよひ路の素足にふむや雪の上　譲之

祈戀

にくまむとそれもかなはぬ御祓(みそぎ)かな　越人
かねごとの其日を祈る御祓かな　岡崎 谷水
この後は心よはらん神無月　川鳥

誓戀

夕立や誓文(せいもん)たてゝかへる人　傘下
絶じとの誓にたてむ二ッ星　且藁

夢

起てゐて夢見たりけり夏の月　白雪
涼しさや半天をゆく夢の内　且藁
うき名たつ夢に汗かく衾哉　同

媒

古きみよ仲人のもつ汗拭　舟泉
媒のちかひや眼皮仙翁花　鼠彈

聟入

はなむこの心はいかに物いはず　長虹
門近し上下を着る薄陰　淡水

衣賦

最屓(ひいき)する心おかしや衣くばり　梗柢
畳たゝく門はしりけり衣賦(きぬくばり)　ミノ 一蘭

さゝやき

夏の夜のさゝやき足らぬ睡哉　傘下
さゝやきの邪魔に成たる時雨哉　酔竹

女

女房のちからつたなし煤はらひ　龜洞
すゝはきや長刀ぬいて見る女　冬文

寄花絶戀

待人をもたぬ晝寐や花の下　鶴聲

月前契戀

見すまして今宵の月に嫁(よめり)哉　兆民

逢戀

うちつけのまことや菊の小さかづき　秋冬

忍不レ逢戀

こふ人の聲や凉める人の中　川鳥

欲レ絶恨戀

死なでやは落殘る鮎の思ひ川　白支

絶後不レ逢戀

春風や瀧口どのゝ懸念佛　旦藁

絶戀

そしらるゝ中となりけり朧月　旦藁
春の夕を獨寢の夜服（よぎ）　荷兮
風車つくりためたる永日（ながき）に　鳥巣
かつこ〳〵と鳥のなくなり　越人
おくれしや杣（そま）のかけぢを具足櫃　野水
男によりて髭の似合ず　旦藁
よし野鉢大根鱠（なます）けづりこむ　荷兮
みやけの禮に人の來るなり　鳥巣
夕まで降つけられてあがる雨　越人
果報についてまはる世の中　野水
ものいふに唾（つばき）のかゝる鹿相者　旦藁
腰かけて居ても上へあがらず　荷兮
蕎麥は花菜は撮（つま）む比野邊の色　鳥巣
鶉となりて聲からさばや　越人
更る月しひ（痺）りなをしに次の間へ　野水
此あたま見よすつぺりとはげ元　旦藁
君が代や毎日花のめづらしき　荷兮
拍子ぬけたる桃のしづかさ　鳥巣
ゆく春やまたつら〳〵と藥のむ　越人
御心やすく臺所より　野水
ごみのまゝ提て出たる油壺　旦藁
來かゝる人をやとふ身の程　荷兮
鼠おる桶に俗をひつかぶせ　鳥巣
なか〳〵胸のをどるなりけり　越人
僞（いつはり）を恨もせずにうち笑ひ　野水

世をうきものに顔のそばかす(雀斑)　旦藁
たびたびの蠟燭の眞(しん)切に立　荷兮
　太刀の緒ときて明わたる月　烏巣
出るほどの者を相手に穐の酒　越人
　風ひやゝかに辻でわかるゝ　野水
御影なり粉川壺坂浮御堂　旦藁
　大事のものは腰にくるくる　荷兮
其後はひた甲(かぶと)にて五百餘騎　烏巣
　甘さ辛さは咽過る中　越人
散花に八重の一重の論(さん)義(ぎ)なし　野水
　脚さへあれば四方山の春　筆

若芝や中々なにも目にたゝず　胡及
　水ひたひたと青柳の下　一井
朝霞鳥追まはす棹鷹に　長虹
　しみ渡りけり透(すき)腹(はら)の酒　鼠彈
たゞものゝいひともなきに更る月　一井
　わた(綿)きせかゆるいろいろの菊　胡及
はなやかに秋を粧や立川姫　鼠彈
　かゝるおん代のくらひ盜人　長虹
こりもなく例のまとひに取かゝり　胡及
　李(すもゝ)のやうに泣はらしぬる　一井
えもあらじむま(旨)きものには水の味　長虹
　横坐に出る政常の末　鼠彈
いさみたる祭や馬に四手懸て　胡及
　月あけわたる竹の子の露　一井
おかしくもなきを笑ふ女客　鼠彈
　晝の內かふ室(むろ)の友(いう)君(くん)　長虹
ありありとうつろふ花の雨そゝぎ　一井
　春は寺かる如來拜みに　鼠彈
永日の道慰みに坊主持　筆
　謎かけられてすりこぎと解く　荷兮
出る月腰懸て居て飛あがる　胡及
　秋の鵜舟のひかる山窓　一井
やゝ寒み松節つくる斧の聲　荷兮

疱瘡いやがりて逃すます宿　長虹
赤味噌のしぶきに庭の夏木立　鼠彈
茶箸とめて戻す御祓　胡及
はづかしきのみにて母の片陰に　長虹
日のさしそひて匂ひくはゝる　荷兮
鼻紙に菓子戴て下におく　一井
氣のつまれども足袋のぬがれず　鼠彈
かしましと駕籠替たがる奴茶屋　胡及
齒のいとひなく繩をかみ切　長虹
むかしたれ世話の種まく花の山　荷兮
一重櫻の二色もなし　一井
魚は鯛杜は檜木春の空　鼠彈
不圖來かゝりてもてなしにあふ　荷兮

麥つくや一日蟬を聞ながら　傘下
衢〳〵のこすこんほの花　朝水
松明に荷をあらためて替らん　冬文
ものゝはいりて目をかゝへゐる　傘下
暮たりと中もあへずのぼる月　朝水
葉生姜そへて甘味噌の壺　傘下
淋しさは風なかりけり糸薄　同
障子仕付る生壁の家　朝水
食つきに酒買にやる人やとひ　冬文
夏大根のさても辛さよ　傘下
しら〳〵とたゞすけもなや更衣　朝水
のたまふやうになれるさけ尼　冬文
小刀の蛤刄にやあひもせで　傘下
きれぬ〳〵と名は立にけり　朝水
捨て見る命あとよりおしく成　冬文
はやもそ〳〵と杉菜虎杖　傘下
月花に鍋の鑄かけやめぐるらん　朝水
かくれすませる世中の春　冬文
かむこりを蕎麥売編で雪圍　傘下
鶴の群ぞめでたかりける　朝水
どなたにもつら見しられておりまする　冬文

はなし上手の側の聞下手　傘下
うそ寒く鼠の糞の落る音　朝水
月の入るさをうち忘れけり　冬文
行穐や幽斎どのゝ吉右衛門　傘下
曲物一つまちてゐる間に　朝水
尻のあと終にぬけたる犬の革　冬文
手作二畝に軍法をくる　傘下
いはすればにくや口から出るまゝ　朝水
子をかはゆがる人の天然　冬文
菜種ほどおはしませしか立ならぶ　傘下
なみだはからば一斗有らん　朝水
星の照る霜に寐明す土の上　冬文
いつ花の咲かほもなきなり　同
撃しやきる春鴨の水はみに　朝水
猿が馬場の陰ものどけき　傘下
心こそ奇麗なる穐の朝なれ　酔竹

菜を蒔ほどにうちしめる露　漁船
三日月のまがりなりにも入果て　野鳧
鰧ひとつに釣れぬるかな　長虹
この里の役にあたれる鳥の羽　漁船
はちまきとけば風寒き空　酔竹
人々に笹の才蔵ともいはれ　長虹
錢百出してつゝくはぜはや　筆
待宵の油なうなりて打まろび　酔竹
戀しゆかしと手習にまで　漁船
冬の來て猫も通らぬ暮の月　野鳧
青葉落つく桃のこがらし　長虹
借もせず家かひ置て越もせず　漁船
道を遊山と申す町汁　酔竹
晝からも飽果るほど永日に　野鳧
いま散はなの一日千本　長虹
蒔繪かく霞のかぎり小松原　酔竹
三ぼうごしの中の高さよ　漁船
もう一度子共の時にかへれかし　長虹

何の名もなく喰ふてはこして　野梟
藁敷やかゝる所の秋なりけり　漁船
月は袂の太刀の芝すり　醉竹
おもひ立うつぶし染の朝露に　野梟
宮の渡しの帳に付られ　長虹
郭公鳴そこなひかめん鳥か　醉竹
門ふみならす五月雨のひま　漁船
立ながらたむしの藥おしへやる　長虹
齋米あげてかへす小袋　野梟
犬の鳴藤の枝折の竹の奥　漁船
幾春前の池をあづかる　醉竹
のどかさは大腹者のお大將　野梟
はなかひくけにさて與四郎袴　漁船
うきおもひ何それほどもなき事を　長虹
ふつと立たるあと薫る也　醉竹
竹緣の青きに水を汲ながし　漁船
掃やる跡に蟻の穴あく　野梟

昔の名ある人〳〵の手跡をみること如レ神、何の勘左衞門とやらんは、衣類はさらにもいはず、居宅格子まで、嶋に物數寄たるは餘嶋過たらんとおもへど、哀も深きたゝりもおほければにや。芳野ゝ櫻の枯たるを植かへけるとぞ。さらば其花を右にし、ふり行秋の月を左に、さしまぜぬれば嶋と成ぬ。糊しろこくして糸きれがち也。むすひつかんもむづかしければ、半にしてたちきる。

月は秋其人の手も古筆哉　戍菌
花ちる後の百日あまり　父長
菽葉飼ふ牧の月毛の口解て　杉峯
鎚も櫻のころもうつ里　菌
ほり〳〵と海月鱠の嬉しさに　長
嵐もしろき花かつほ散　峯
ウ
待兼て正月の物うちはをる　菌

花奢な詞のまねにくき也　長
涼む月水かけてやる垣間見に　峯
さゝやきくらす櫻麻かな　菌
琵琶の月欠てのけたるつたなさよ　長
身を茄助と河豚の丸燒　峯
月代の形を世上に狂する　菌
花色柄に太刀の鮎鮫　長
尻目やる月の都の市女笠　峯
花摘の日とちぎりけらしも　菌
一月の法華と名乘郭公　長
時花かざれて終に行みち　執筆

御前には人すくなゝり夕時雨　越人
さし出す顔に木枯の風　荷兮
入る船の櫂とり直し名乘らん
目のはせかへるまた夜深きに
有明や赤裸にもすめる月

身にしむ秋やむすぶすねあて
すご〳〵と狐川よりひきかへし
酒のまじとて又かためする
譽られて世を何事に生て居る
たゞゆつくりと寐る心もち
きのふけふげに十月の空の色
ものたのみなく杉のあからむ
つか〳〵とけづりへらせる鰹節
針二三本ひねりこむ肉
きたなしと疊にさはる手を洗ふ
何といふともはるの夜の月
散花や此勢に坂こへん
われにとりつけつゝじ山吹

曠野後集 第八

神祇

江戸寧府にて

守る梅の遊仕ごとや野老賣　其角

熱田にもうでゝ

さばへなす蚊やうたれん神の注連　江戸 専吟

巫の老もめでたし花しづめ　荷兮

東照權現御祭

四月十七日神輿三社出御若宮御旅十六日奏於神前伶人舞樂

五常樂

十天樂

鉾振

重衣たる機婦を妬や散卯木　荷兮

太平樂 大食調子

大勢の人やしづまる夏木立　卓志

柏鉾 高麗音取

みことさも松なし菖蒲や杜若　長虹

陵王 亂序音取

常盤葉の落散袖の光り哉　傘下

納蘇利 高麗音取

つばくらの巣を別れたる氣色哉　鷺雪

長慶子 宴樂

吹そふや麥の秋風松の聲　文長

足揃みる人も其きをひ哉　成菌

景清屋敷を過て、太宮司の門に車待侍る内に、宗因拍子をやる。

景清が門もえいやとひく車　斧芥

ちら〳〵と曇うれしき祭哉　荷兮

津嶋祭

火をたくや御葭とゞまる海の端　洗古

鈴木宜樂と云人、夏の半過て秋に及ぶまで、瘧患術盡てせんかたなきおりふし、心に三神を誓、發句しければ、瘧もなく落たりけるとぞ。

穐風に瘧を落す一葉哉

白髭開帳

さゞなみや小舟に芋の煮しめして　洗古

放生會

逃殘る鳥やけふよりつかはしめ　同

住吉市

升うりも赤ら顔なり今日の市　旦霞

神送りの日天神にもうでゝ

よい時の梅のすがたや神の留主　霞艇

御神樂や龜(ヒビ)みせありく乙女達　杉峯

御神樂やふとしく立るうたひ聲　一雪

庭火たくやあめ鞘巻のいきり者　卓志

庭火燒陰や手につく杉の脂(やに)　傘下

には火たく嶋や大きな石の上　冬文

祝

ある人の屋わたりに

のどけしや太き柱の中に住　斧芥

家督得られし人に

一すじの竹の若根ぞ頼もしき　鷺雪

年も月もやつがれと同じ春に生れける人の、かしこきつとめごとありて武府に下り給ひき。ひさしくかしらなくらべたるなじみとて、短尺とりかはしけるとき

もろかへり五百の年は千年かな　荷兮

けふの用意に、きのふははぜ釣にまいりたるに、そのほりには、鯰もうなぎも、かゝりけると申されたり。

浦嶋ははなしになるや生身玉　洗古

にぎはふや舟よりあがる今年米　一井

春ゝかきやごゝあるじの、子にはん孫たち見んとて、ある人のむすめなむかへられけるにことぶきて

八千代みむ菊のあとゝる玉椿　荷兮

行年や永樂くさる瓶の中　冬文

目出たしや暮行年を鼻もひず　傘下

曠野後集 終

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

其袋

春夏秋冬 七歌仙

嵐雪撰

なにくれとして天の袋あり。あらゆる是が入物なり。人におふくろといふ、母の稱也。茶とらす物見すとて、父に追れておそろしきこらしぶくろのからきめみしも、いつにわすれて、底なし袋にもむすばすぞ、なりすたれにたる空言袋、淸輔の名立るにはあらず。我うつきありきぬ。士に番袋、有職に火袋有リ。くびにかけたるふくろには、いかなるものを入たるぞ。詩の袋、春山暮月李賀がふくろにおもし。哥の袋、光廣のひきずり袋、それもおもかりけん。爲憲がふくろをかぶらんとすれば、息くるしくもりてむつかし。其袋や花のしぼみたる、月のかけたる、かつかつひろひえて、括て我家の祕藏ぶくろとす。蘭にもきせず、猫もかぶらず、元ッろく三年、かのへむまみな月吉辰

嵐雪白序。

其袋 春之部

改正

おれにいはしゃ先御代をこそ千々の春　　季吟

都ちかき所にさしなさりて

薦を着て誰人います花のはる　　芭蕉

月花のかます作らん餅むしろ　　擧白

餅のうへにけふしちぎりぬかゝみ草　　山夕

元日や晴てすゞめのものがたり　　嵐雪

うかれきて薺はやせや神樂打　　舟竹

一年のこゝろ拍子はなづなかな　　無倫

睦月はじめのめおさいさかひなと、

人〳〵に笑はれ侍りて

よろこぶを見よやはつねの玉はゝ木　　嵐雪

若菜

若菜摘跡は木を割ルはたけ哉　　越人

莖だちや五條あたりは妾もの　　百里

つちくれに花の咲たつ菜屑かな　冬文
野にいでゝ小鍋やほしき鶯菜　東流

鶯

鶯や手ならひの窓おもしろき　十一歲 調武子
うぐひすの宿とこそみれ小摺鉢　嵐雪
梅壺や鶯毎に御消息　山川
鶯の音やつゝまるゝ雪の錦　桐雨
鰯燒鄰にくしやまどのうめ　秀和
梅の花沉や麝香はもたねども　才麿
梅さきて編笠やよき煤び比　仙化
築垣の梅にうれしき崩れ哉　りと
梅が香はいかに工ぞ庭作り　沾荷

霞

破鐘をまきらかしたるかすみ哉　子英
浦〱の家に帆かくるかすみ哉　風洗
雲跡を埋といふ事を
我宿もよそより見れば霞かな　月下
夕霞暮ておぼろと申けり　鼠彈

柳

ゆく水のやまずながるゝ柳哉　山川
柳の芽毛のはへたるも美し　氷花
詠るに目のくたびれぬ柳哉　月下
春水滿四澤
こほり解て欸泡吹澤邊哉　素竹
春水春風一時來
氷消て風におくれそ水車　伊勢一有妻 その

接

見たいもの花もみおより繼穗哉　嵐雪
哀さや接の花の咲おくれ　蘅門

涅槃會

天人も泣顏わろしねはん像　己百

燕　愛宕岩にて

かはらけも下行雲のつばめ哉　桐雨
舟綱にゆらるゝ沖のつばめ哉　吉田氏 巴山
燕休岸
土車引手も休むつばめかな　舟竹

花　上野にて

花の雪しつかい伏見常盤哉　立志
女中方尼前は花の先達歟　嵐雪
花もしやよそへ出るにも玉くしげ　才麿
友猿のともゑらびすれ花衣　其角
待花におり〳〵うごく缸かな　調柳

清水にて

めくら石いたくも花に行あたれ　青女
花の跡なれや鳥はいつもなく　鋤立
花にめさば竹馬にても参べし　ほと
花にまた都を二つ見初けり　沾蓬
花に来てあはせばをりの盛哉　曉雲

膳所にて

花や波軒の下まで鳰の海　桐雨
退ば雨よれば花踏木陰かな　好柳
はなちらばまて懺悔せん罪一ツ　風子

都ちかく遊びて

花の雪大津雪踏にそべりけり　月下

鳥追んために鳴子付クルヲ

花鳥やちらば鳴子の獨ぼし　菊峯
管笠や男若弱たる花の山　百里

思ニ夜櫻一

夜あらしや大閤様の櫻狩　その
下戸めらやかくれ所のやまざくら　孤屋
蘂ばかりちりのこりても櫻哉　沾荷

あふみにて

雲櫻あふみのふじやみかみ山　桐雨
波かへる小鰷おもたき櫻かな　ほと
とく散て見る人歸せ山櫻　一有
武藏野に人ゆきあたる櫻哉　立吟
我影のさくらにのぼる夕日哉　琴藏

輪門様甍御をおそれいたみ奉りて

物いはず心になかんやまざくら　不角

櫻川はほそくながれて、青柳の
里一かまへ、うちかすめり。

膝木よる長女いやしやいと櫻　嵐雪

人のものを是程おしき櫻哉　專跡

帋鳶

夕ぐれのものうき雲やいかのぼり　才麿

蚊足が隣かへたりけるに申つかはしける。

此夕軒端隔ちぬいかのぼり　嵐雪

いかのぼり雨の足みる霞かな　はし

漁部

蜑の子や竹に付たるいかのぼり　風流

游絲

かげろふにさし矢の沉む野中哉　山川

いとゆふにうごくや去年の古薄　亂絲

糸ゆふや口を明たる糀(かうぢ)むろ　冰花

病中

つくづくと糸ゆふや氣のむすぼゝれ　才麿

糸ゆふや左へめぐる酒の間(カン)　鋤立

かげろふの跡をおさへし小猫哉　舟雪

陽炎にうきしづみ行帆かけ哉　湖舟

いとゆふやけぶりてかはく屋ねの上　立志

陽炎の薹は炉中の寒さ哉　達暑

若鮎 附白魚鱠

若銀口魚(アユ)は鵜の一箸(はし)にたらぬ也　才麿

しぶうるか持とも見へぬ小鱠哉　濁子

白魚も朶すかたぞ淺ましき　東雲

春の水に秋の木の葉を柳鮠　嵐雪

雉

一聲も三聲もなかぬ雉子哉　衛門

うつくしき顏かく雉子の距(ケヅメ)かな　其角

一しほの聲さぞあらん南部雉　嵐雪

海苔

ゆく水や何にとゞまる苔(のり)の味　其角

海老喰て海苔の味しる蜆子哉　左袵

和田の海所さだめぬ海雲(もづく)哉　菊鈴

しほ染(シミ)て心もかろし海雲賣　笠凸

寒食

寒食や揚屋より火を燒初る　皐白

寒食やその日にあたる佛達　立吟
胸の火も寒食の日に腹たてそ　氷花
寒食や旅人の雪の跡きへず　月下
寒食は霞一里のこふしかな　言穐
寒食やいはけなき子にすねらるゝ　琴風

鞦韆

鞦韆のたはふれはやせ猿廻シ　ドし

青精飯

桐柳民濃に栄飯かな　嵐雪

猫戀

猫の戀鼠もとらずあはれなり　琴風
老猫の尾もなし戀の立すがた　百里
から猫の三毛にもかはる契り哉　枳風
猫の五器あはびの貝や片おもひ　秀和

猫ぬすまれて

猫の妻いかなる君のうばい行　嵐雪妻

雲雀

杉の木を定規にのぼる雲雀哉　氷花
黒きものひとつは空の雲雀哉　近江 李由
羽にうけて幾重の雲に鳴雲雀　渭橋

上巳

綿とりてねびまさりけり雛の皃　其角
雛闘も彌生の海の道千筋　露沾
鄰〱雛見廻るゝ小家かな　嵐雪
嬉しいなけふは物いへはだか雛　專跡
うごかぬを物おもひなりけふの雛　霜白

犬あり、一條の院の御甑に習て犬丸と名付し、まことや清少納言のおもひいためるけふをしのびて

犬丸に鬘せさせよ桃の宴　ドし
山崎の樽買てこよ雛遊び　仝

妻におくれて悲しみの内、娘の雛たゞ愛しゝ

夫婦雛娘のとはゞいかゞせん　達暑
眉ふりて虫喰雛の悪女哉　一口
雛の座を追出されたる弟哉　東雲

四日

朝寐して櫻にとまれ四日の雛　曉雲

彌生にも中よき鷄のあそび哉　笠下

辛夷

夕ぐれの鳥に曇るこぶし哉　梅車

蝶

蝶かろし比はきるもの一つ哉　湖春

鴟尾蚰やはかなき蝶の鼠色　嵐蘭

上の山より歸り侍るとて

酒くさき人にからまるこてふ哉　嵐雪

沖の蝶汐さすまでをねぶり哉　才麿

苗代

なはしろにいそがぬ水のすがた哉　子英

迷ふらんなはしろ比の田の鼠　冰花

うらゝさや田の中けぶる溜水　伊勢一有

耕牛無レ宿食鼠有二餘糧一

たがやすも鼠のためか牛つかひ　笠凸

うごくとも見へで畑打男哉　去來

蛙

玄賓のこゝろしらすや鳴かはづ　野水

淺草の觀音堂にて

聞わけん蛙に交る鷺の聲　冰花

三十三間にて

乞食にも物くれて聞蛙かな　富士大宮六花

二階にて蛙きく夜をまろ寐哉　滑橋

蜂呑て已となやむかはづ哉　和賤

蝦蟆瘟さかやいへるもの久しくやみて、顔は蟇のやうにたゞはれにはれ、なやみぬれば、此度のゑらびにもれ侍らんと本意なく覺え侍て、病中のくるしさなやう／＼に申侍る。

くるしさは鏡にむかふ蛙かな　銀鉤

春雨

春雨やかぞゆるばかりしづごゝろ　紅雪

歸雁

何事を田螺にいひて歸る鴈　子英

歸るかり富士の裾田の砂ふるへ　長雅

藤

風なくてしづか過たり藤の花　杉風

とても世を藤に染たし墨衣　（釋）宗派

山藤やまき上らるゝつむじ風　月下

藤かえやいばらなけれどむづかしき　風瀑

小奴吉齋に花をみせて

小坊主よ足なげかけん松に藤　嵐雪

春艸

いろ／＼の草鞋で見るやけ野哉　紅雪

木瓜あざみ旅して見たく野は成ぬ　山店

おもたげに松の葉かつぐ菫かな　夜帝

女郎花くねらぬさきよさいた妻　舟竹

烏芋堀男だすきよあら／＼し　杜央

たんぽゝの物いみの日ぞ佛の座　衛門

椿見にまかりけるにちりければ

もぎどうにとてもちるなら椿哉　（伊勢）柳玉

觀水

物ゆるし魚の兒見る春の水　沾徳

野游　人あまた伴ひ侍りて

一筆や矢立におふるつく／＼し　沾荷

三月盡

連胤が筆の歩や春の暮　立吟

ゆく春やおしさうにつく鐘の聲　山川

猶句ども有るをひろひかされて、數の外の部
たみだりに並べ侍る

神祇

うす井權現にて

稲妻にけしからぬ神子が目ざしやな　嵐雪

迁宮や西行よりは五百年　立吟

豐國や烏の巣を守古づゝみ　楞雲

舍殿の梅清淨し神の靈

八句　科戸の風の吹放つことのごとく

見るうちの罪もとまらぬ競馬哉　孤屋

萱垣葉も神勅を聞ク　嵐雪

丈人に八尋の門を守らせて　同

屋根に鉦矢打珍重の聲　孤屋

なます盛三角柏の大鼎　同

荒振鼠鶏に和メン　嵐雪

置座に文ひろげたる初月夜　同

稲も子を持天の益人　孤屋

齋宮繪馬

繪馬かけて明日の年みん稲の神　とし

住吉奉納千句卷軸

ふるかれや神樂拍子に神樂聲　路通

霜朝の禰宜のしはぶき神さびぬ　百里

社頭時鳥

手を打て神靈覺しぬ子規　凉葉

おがむ間に蛙飛出る小祠哉　景道

燒鎌の斂鎌も穗家の助ヶ哉　月下

一道は麥蒔殘すいなり哉　山川

宮人の額見て歸る枯野哉　斧鉞

僞處在靈

竹の子をぬけば音あり神慮　舟竹

雪の下の旅籠ル宿は若宮の社人なりければ

鎌とくら萩屓かへる社人哉　桐雨

芳野へ行人にことづてして

祝子も花の名申せ神の場　とし

花柄大神奉納

こぼれ梅かたじけなさのなみだ哉　嵐雪

釋教　附哀傷

ちりかゝる花より撰ン六の塵　東陸

六十萬人決定往生

胝やあはれ遊行の旅衣　氷花

我等今日聞佛音教歡喜踊躍さ讃誦したてまつりて

嬉しいか念佛おどりの柄杪ぶり　嵐雪

受持佛語作禮而已

もらひ來る實ばへ嬉しや法の花　山川

塵點本のこゝろを

うどの香やさしも芥の底ながら　同

摩訶止觀 一目之羅不能得鳥得鳥之羅唯是一目　此文のこゝろを

鳥雲に餌さし獨の行衞哉　其角

座禪堂つら〳〵椿咲にけり　雷笠

ふか艸にて

鮨作りつみ深草よ石ほとけ　月下

讀二維摩一

蝶とまる芥子は維摩の座敷哉　翠紅

けしの實の大ク見ゆる座禪哉　鋤立

應無所住而生己心

鶏の巣や行もとまるも水のまゝ　ふと

木食の蕎麥喰けるに

新蕎麥の新の字に着心かな　百里

盂蘭盆やふだらく走り老の波　桐雨

如薪盡火滅

身の後や灰汁にもならぬ秋の暮　素行

寒念佛弟子に傳る法はなし　草加 水山

殺生戒

いかほどの虫の命をわた作り　ふと

邪婬戒

狐よぶ妻猫にくしやのらごゝろ

偸盗戒

ひろはじなぬしなき風も椎のから

妄語戒

なりはひのからき世をしれ夷講

飲酒戒

竹の葉のみだれやすしや雪の暮

曉觀レ佛

醉覺ぬ腹も立やむ胸の月　百里

夕聞レ經

唐音の施餓鬼身にしむ夕哉

夜尋レ僧

稻妻の紙燭消けり影法師

三句 追善

うたてやな櫻をみれば咲にけり　鬼貫

月のおぼろは物たらぬいろ　才麿

酒盛の跡も春なきゆふべにて　來山

母を夢みて

蓮の實をふくむに夢の乳房哉　風洗

讀九相詩

櫛紅粉や寺の湯殿は蔦もみぢ　年弓

十歳に成ける童の身まかりけるに

駒どりのもとの雫や末の露　嵐雪

戀

藤やたゞ君にふれたるむすぼゝれ　その

約束は淸水にてのやなぎかな　百花

枕草紙に思ふ人を待あかして、あかつきがたいさゝか寐いりたるに、からすのいとちかく鳴に見あげたれば、晝になりたる、いとあさまし。

みじか夜や烏のこうと待ほうけ　山川

逢恨戀

我戀や口もすはれぬ青鬼灯　嵐雪

子規おほよそ鳥と夜つれよ　菊鈴

不去リテ鵓鴿に愛あり戀の友　不障

戀艸の罪懺悔せよふかみぐさ　紅雪

後朝

はやかなしよし原いでゝ麥畠　冰花

あらぬ事にかこつけても、わすれがたさよ。

柚の釜のせめてもこひし姫くるみ　笠扇

山ふかみそれにうき名よ姫くるみ　その

うき人を又くどきみん秋のくれ　去來

こひ死なばちぎりたがへじまんじゆさけ　寸木

若衆を待

献立に鴨とかく筆物ぞおもふ　百里

君が手よ末摘花のいたいけさ　巴洗

四睡

海棠に女郎と猫とかぶろ哉　卜宅

戀せずば双六しらじ秋の暮　不障
腮摺やたがひにつらきひゞとひげ　琴風

もろこしまでもゆくものは、あきのねざめのこゝろなり。

秋の夜や定めぬ妻の物案じ　山川
昔今の戀に手傳ふ葱かな　同
戀衣紙子似合しよし野哉　鋤立
ながき夜を我は戀して覺けり　同
よすがなき戀にしねとや神無月　杜格
我戀は餽もくはれぬ命かな　嵐夕
岡見すと妹つくろひぬこへの門　嵐雪

述懐

万句興行に

肩衣は戻子にてゆるせ老の夏　杉風
捨人やあたゝかさうに冬野ゆく　其角
炭やきも黒まぬ老の白髪哉　渭橋
百年の後なき人や冬の蠅　肅山

此伽羅におもひ出しけり古紙小　普船
年の市とぼしき業や白朮賣　卜尤

慰二女房一

三盆子ことたらはすや年の暮　嵐雪

撲二嵐雪一

年の暮かねさぐらせて歸りけり　月下

游冰花

年の市蕎麥うたぬこそ本意なけれ　同

其袋　夏之部

更衣

名聞をはなれずもあり更衣　露沾
帶ふるしいまだ旅なるころもがへ　伊勢 一有
ころもがへかたびらきたるをんな哉　鋤立
ほころびもあやなきものよ袷縫　三紵
老も來(コ)でつまさがりたるあはせ哉　舟竹
帶ふときかとり乙女やころもがへ　卜宅
衣がへまた傾城のそよ寒し　月下
初風やおかしあはせのかたひづみ　當歌

青簾

五位六位色こきまぜよ青簾　嵐雪
けふ更に青きはなきか簾賣　月下
空燒にすゝけやそめん青簾　紅葉
水の日の稻妻見せよあを簾　才治

江上新樹

柴船の濇こそのこせ夏木だち　才麿
一葉づゝ蜘蛛のいになる若葉哉　沾荷

閑鳥

銃(テツポウ)や稽古のあとのかんこどり　氷花
我須磨の關守ならんかんこどり　調卿
植捨る山田は青しかんこどり　舟竹
晝良にばけ〳〵しさよかんこどり　稻花
かんこどり煙草荒つゞく畠かな　樹下

鰹

小聲にはよばれぬものか鰹うり　風吟

庖丁がうしはいかに解(トキ)けん

窮屈に鰹をたゝむあるじ哉　百里

子規

ほとゝぎす新茶より濃(コキ)聲の色　才麿
時鳥何を古井の水のいろ　露沾

待乳山の社頭に雨を凌て

空は墨に畫龍覗きぬほとゝぎす　嵐雪
淀舟や喧嘩にまじるほとゝぎす　立志

夏痩は夜を寐ぬゆへぞ子規　秀和

杜鵑まだ鄰でははつねかな　美濃 梅川

島原にて

君たちの日がさにぬれよ蜀魂　桐雨

主將之法務擥ニ英雄之心一

歌人には歌よませけりほとゝぎす　卜宅

松に休む雁がねいづちほとゝぎす　立霞

新枕ものいふしほやほとゝぎす　冰花

二四八は誰が魂の數黄鸝　衛門

淀舟の鯉とる鷹かほとゝぎす　翠紅

ほとゝぎす鐘撞かたへ鳴音哉　湖水

おさなひに灸すゆるとて

いたくなけなかばきこうぞ子規　夕口

吃(ドモリ)てはほとゝぎすとも申されず　百里

ほとゝぎす待にぞ見ける夏暦　杜英

灌佛

見る事の新茶にすゝぐまよひ哉　青女

灌佛やはや入相の大佛　百里

灌佛や餓鬼に增賀の衣とらせ　じし

短夜　はせを庵にて

庵の夜もみじかく成ぬすこしづゝ　嵐雪

蟬

あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲　嵐雪

手にとりてふりいだされしせみのこゑ　當歌

かいすくみ鳴ねば見えぬ小蟬哉　不一

蚊到明

蚊の聲のしらむに寂し軒の雨　沾德

魚の骨火鉢にくさき蚊やり哉　風洗

うちなげく事侍りて

あはれとより外には見えぬ蚊やり哉　嵐雪

鐵(クロガネ)のうしにとりつく藪蚊かな　孤屋

蚊の聲もまだ力なし衣一重　兆風

蚤の子の蚊をよび歩く川邊哉　大柳

蚊やり火に姫いでゝゆく軒端哉　笑種

寐はれたる顔いたいけや枕がや　青女

なきものゝ蚊帳ふるひて

化夜(アダシ)の蚊にむせかへるなみだ哉　桐雨

城外吟

朝〳〵の蚊に髣髴(サモニタリ)市の聲　友五

寐ぬ夜更(サン)蚊屋に入タル鼠かな　富士大宮 白盆

螢

草もなくこがるゝ石のほたる哉　渭橋

ほたる火や晝のあつさの息つかひ　月下

[illegible](バヒ)あふてふみころしたるほたる哉　みの 己百

漁父

簑干て朝〳〵ふるふ螢かな　嵐雪

腐艸螢となる

枯草の又もえ出るほたるかな　卜宅

はやき瀬を何としづかに飛螢　立志

とぶまゝのこゝろを幣にほたる哉　冬蟬

杜若

咲中に紫ばかりかきつばた　來山

里沼のくさゝ忘れつかきつばた　加賀 一泉

しのゝめをよびかへせとやかきつばた　一德

鵜 附川獵

かゞり火に見ゆや鵜匠の貝ばかり　麥風

鵜づかひは夢にも鵜をやつかふらん　冰花

かづき上星のむ闇の鵜川哉　潮舟

檉(カハヤナギ)鮴(ゴリ)よぶかたへながれけり　舟竹

照射

弓杖に哥よみ顔のともし哉　嵐雪

端午

蘭の香にあふや湯殿の古へちま　立志

傘ばかり葺のこしたる菖かな　青女

左右(サユウ)左(サ)に横雲渡るのぼり哉　百里

人立やかゝしをすくに菖葺(フキ)　潮水

銅の樋(ヒ)に色ますあやめかな　笠下

伏見艸さて世にもてなさるゝ御粽

よ

蒋(マコモ)草めせ淀のゝ草も持てさう　とし

印地

おもふ人にあたれ印地のそら礫(つぶて)　嵐雪

なでしこの嵐は印地かはらかな　立志

競馬

毛の色や馬の競に見さだめず　冰花

人の世もかう暮しけり競馬　山川

瓜

水飯にかはかぬ瓜のしづく哉　其角

初瓜と妹にいはせん親ひとり　巴風

五月雨 付 五月闇

さみだれの最中（モナカ）や鐘の濁りやう　立吟

さみだれや浮木にすがる蛇のかず　冰花

たれこめて蝿うつのみぞ五月雨　渭橋

さみだれや晝鷄の聲くらし　調柳

五月雨に壁落のこす隹かな　山川

書（フミ）見れば身の垢かゆし五月雨　卜千

五月闇桃の虫をもたうべけり　楸下

溽暑

妻も有り子もある家の暑さ哉　冰花

日の晝は水のまけたる暑さ哉　京 信德

寐ぐるしう枕をかへす暑さ哉　細石

水無月や朝日夕日もうるし搔（キ）　雪江

夏の日に爛（モノツ）き飴のもやし哉　嵐雪

水無月や暑さを探る猫の鼻　富士大宮 銀雨

納涼

しばしとて石あたゝむるすゞみ哉　立志

魚折ゝ光すゞしや水の色　夕口

玉川にうぶめきゝ出す涼哉　紅雪

枕双紙 さくさゝいふものは、風にふかれたらん音こそいかならん、さおもひやられておかし。

友ずれに木賊（とくさ）すゞしや風の音　山川

誓願寺にて

四條へのぬけ道すゞし梅の風　大つ 尙白

帷子のせなかふくるゝすゞみ哉　衛門

豚（ブタ）なでゝすゞむおかしや屋敷守り　笠凸

浴

湯をかけて涼しく成ぬ壁の草　立志

ねぶたけのつくまで涼むいほり哉　調柳

垣越の唱ししみけり夕すゞみ　總翁
犬に逆犬を追夜のすゞみ哉　嵐雪

角田川を下りに

音曲は一重羽織の歸帆哉　其水

清水付心太

かたびらは淺黄着て行清水哉　大津 尙白
あはや清水おもひもよらぬ後より　舟竹
長嘯のしみづにひやせこゝろふと　ほし

水の車のしづくをうけて

すゞしさや心てへとる水のいろ　嵐雪

扇付團扇

みちのくの三絃きけばあふぎ哉　鋤立
綸もなくて心あやなし素扇　一詞
さる人の紋見付たるあふぎ哉　尙白
小夜更て肌のつめたきあふぎ哉　衛門
かつぎより男見るまのうちに哉　立吟

蠅

うつくしき纎子の顏の蠅うたん　紅雪

投レ劍逐レ蠅

蠅はおき怒る心よ手束弓　嵐雪

祇園會

屋根洗ふものどさめきや祇園ノ會　百里
七日 鉾に乘る人のきほひも都哉　其角
十四日 山は行松はしらずや祇園の會　紀州 一三

雲峯

雲の峰空に心のもやつきぬ　桐雨

佃にて

雲のみねうねり上せよ土用波　百里

夕立

ゆふだちに呼いださるゝ拍哉　その
夕だちや坂行駕籠の片簾　山川
夕だちのまたやいづくに下駄はかん　鬼貫
夕だちに追れて來るかむら鳥　随友
夕だちや池のすがたのあたらしき　衛門

むさしのにて

夕だちやうしの下腹我やどり　甲府 梅庚

蓮

はづかしや蓮に見られて居ル心　湖春

白鷺不レ禁塵土洗

白鷺やにごれる池のはちす陰　菊離

素堂の蓮見にまかりて

田畠の辛苦(ホネオリ)もなきはちす哉　己百

麻

櫻麻さくら夕もおもひ出つ　桐雨

いかにして紡錘(ツム)によるらん櫻麻　杜格

物得たり麻刈ル跡のあさ地酒　月下

蝸牛

かたつぶり石に落たる音ぞうき　冰花

姸(ミメ)かたち女の鬼かかたつぶり　百里

かたつぶりてりからさるゝ靑葉哉　月下

夏衣

帷子の重ね着は何のたすけぞや　冰花

はせをの別に

夏衣妹笠ぬふてまいらせよ　大津 尙白

夏草

やまぶきの實に成ルころのいちご哉　虛洞

怠らで咲て上りしあふひ哉　才麿

やさしさや龍卷(たつまき)のこす花あやめ　尾花澤 清風

厩守共艸をかれ馬齒莧(セヘリヒユ)　笠扇

善光寺にて、みろ喰尼に

見る(海松)房(フサ)やかゝれとてしも寺の尼　嵐雪

晝顏の花や昨日の今時分　鋤立

夕顏よふくべの名さへなつかしき　とし

道づれの女見かくす麥野かな　素親

さかさまに撫子すがる高根かな　爲睦

光廣もしろしめせばぞ蓼摺木　年弓

一房(フサ)を手にあまりたる牡丹哉　湖水

咲ときの牡丹にせまし園の色　遠水

東叡山の若葉の下に、晝寐亭なかまへ侍りて

雪見草花のふる夜は寐覺しか　絲絲

池上にて

山水に濁り散さじ香薷散　舟竹

男だんな打まじりて、すゞみ歩ァみて

夏痩を戀スル人と見らればや　凡子

その白ャ塩に染しか茄子漬　魚兒

若竹の一まつ高し月の隈　若翠

聲たてぬおもひよ鹿の袋角　卜し

足音の間をたゝく水鶏かな　李下

水札鳴て日影ちろつく流哉　加賀一泉

富士を見一身をもたへけり羽抜鳥　菊句

みな月になきもの見せん富士の雪　凉葉

しらすかの宿をさをりたれば、中鯵さよばひ賣けり。此魚ゝりのその中をさりけるもおかしくて、其うをゝ呼て見たれば、げにも大小の中にはんべるをさかなにして

よの中をしらすかしこし小鯵賣　其角

夏は又冬がましじやといはれけり　鬼貫

婁麗詣

行程二里余の旅すがたこさ〴〵しう、足袋はゞきして、卯の花月夜閃やらぬほどに出ぬ。

首途

荆の花裾きらしや旅ごろも　嵐雪

日本橋右に御本丸見ゆる。市谷山は跡に雲かゝりて見えず。雨いふたつみの顔に落くるなきつかはしきに、先達の坊いへるは、かさはなうて常にあることぞとて、旅行猶しづかなり。

雨雲やばら〳〵あふぎ旅の笠　當歌

神明にて夜明ぬ。

鷄のこしやむ聲か夏木だち　仝

増上寺をおがむに、まことや此塔に風雲のかゝるを、一尺ほうさかやいふ。けふは空晴て雲なし。

よき馬に乗あたりけり麥嵐　青女

東海寺の慈雲菴へ先導行て、万年石を見る。

萬代やとくさのしげり石の苔　仝

瑞聖寺

わくらはに土くさきなりうしろ堂　當歌

めぐろの瀧も人のまふでゝ日

底清水心の塵もしづみつく　嵐雪

句の序よくて、くだんの袋の底の旅の句たならぶ。

桐雨ぬし京うち参りさていでぬ。行かたの覺束なく、しる人はそこ〳〵に道のほどはかう〳〵といひふくめ出したてつ。卯の花の雪消五月雨のくもらぬほどに歸り來べきなれと、いさ名殘たしくて

梅にさむる朝けわするな辛もの　嵐雪

駕籠かきの、旦那〳〵といふに閙あき侍りて

駕士に貧きはなし雪の宿　其角

馬はみん闇のつゝじのうつの山　子英

海川に錢なをしみそ花の波　鋤立

木の形よ樗ににくき馬士が顔　調柳

春三月團子ぬくらんうつの山　路通

秋の空富士を色〳〵に擦けり　卜尺

月の照いづくに富士のかげぼうし　冰花

富士の煙雪やむかしの消殘り　松子

によつぽりと秋の空なるふじの山　鬼貫

雪の日は物見の松もよられけり　秀和

池鯉鮒なるみ晝も淋しき礁哉　風瀑

首途

よくさきて人に見られよ宿の菊　巴風

くさまくらものゝ聞たき案山子哉　舟竹

木の葉かきて礎見せよ不破の關　李下

辻堂や寒さもしらぬ樂あみだ　笠凸

春雨や粟津が原に二ところ　難波作自

短夜の聲なま長し馬やらふ　衛門

くさまくら飯にものこるあつさ哉　青女

旅人の足跡よぎる淸水かな　仙化

大かたの秋の別やすゞのもり　百里

瀬戸染飯

寒食の里佗しらに染飯かな　桐雨

宇津谷ノ十團子

その露を柳にかけよ十團子　仝

草津姥ガ餅

姫が餅姥はさくらの名なりけり　仝

大切見にまかでさぶらふさて、つばくらにしばしあづかろやどり哉さいへるに、我も猫に別おしみて

ちぎり置つばめとあそべ庭の猫　伊勢園女

宮川のわたりまだ夜ふかう

色あひもわづかに春の夜明哉

明野

咲ぬまも物にまぎれぬ菫かな

同じ野中より、駕籠にかきのせられて

手を延て折行春の草木哉

伊奈木川

手ぐり船風は柳にふかせけり

伊賀越

山松の間〳〵やはなの雲

駒どりの聲ころびけり岩の上

花の前に顔はづかしやたび衣

朝ふかくやどりたつさて

ねぶたがる人にな見えそ朝櫻

同じ曙

おもしろや水の春とはひたの音

なつみを行過て

まねくやと跡になつみの川柳

卯月朔日當麻にまふでゝ、まんだらをおがみ侍りて

衣更みづから織らぬつみふかし

おなじ日香久山にまかりて

あら美し卯の花は誰が衣更

さゝ澤にて

水若葉かつぎ着て來し人の影

そでかけておらさじ鹿の袋角

法隆寺

二王にもよりそふ蔦のしげり哉

北國何トヤラいふ崎にとまりて、所の夷もおし入て、句なのぞみけるに

文月や六日も常の夜には似ず　　はせを

その夜北の海原にむかひて

あらうみや佐渡に横ふ天川

夕月は敦賀　有て

名月や北國日和さだめなき

氣比の宮へは遊行上人の白砂を敷ける古例ありて、この比もさる事有しといへば

月清し遊行のもてる砂の露

淺水のはしを渡る時、俗あさうづといふ。清少納言の橋はと有、一條あさむつのとかける所也。

あさむつや月見の旅の明ばなれ

瀬田にて

我駒の沓あらためん橋の雪　　湖春

其袋　秋之部

初秋

今朝よりは編笠はるゝ一葉哉　幽山
初秋の風のよはさやいとすゝき　三翁
盆前は大あらましや秌の風　帆雪

七夕

浮草のうかれありくや女七夕　才麿
星合やいかに痩地の瓜つくり　其角
ほし合に我妹かさん待女郎　嵐雪

桐

落かゝる桐の葉かろしひとへ物　山川

葬

朝顔に置とは露のつよみかな　大坂 來山
朝がほに二度泣今朝の別哉　秀和
朝顔や片庇なる玄關まへ　百里
朝がほは繪に寫す間にしほれけり　破笠
褌(テレ)着て葬にその恥はなし　杜拾
朝顔や誰か文にもうらみられ　几下

魂祭

たま棚は露も泪もあぶら哉　嵐雪
魂まつり味なき山のこのみ哉　湖水
魂棚は面白おかしきにほひ哉　百里

盆の十五日ぞ。さかな物せよさ、いますが母のこさぶき給ふも　いさ有難きに

このうをゝ親に上(あげ)たやたまゝつり　氷花
魂まつる宿や入相つねならず　調柳
施餓鬼棚我影ほしも哀也　甲斐 一映
盂蘭盆や生るをつなぐ雀賣　渭橋

月 附駒迎

北殿よ月にとふべき渡世なし　沾德
江の月やふかみ淺みの蜊(あさり)から　鋤立
名月や歌人に髭のなきがごと　嵐雪
二所に月見る人のとがいかに　學白
舷(フナバタ)をきざまん月の落所　衛門

菅笠やことに目に立駒迎　秀風

菊花 九唱　嵐雪

其一　九日

菊もまだつゆ〱つぼむ九日哉

其二　素堂亭にて人〴〵十日のきく見られけるに

かくれ家やよめ菜の中に交（まじ）ル菊

其三　百菊を揃けるに

黄（キ）菊白（シラ）菊其外の名はなくも哉

其四　名所の菊

白菊の鎌倉やすまば扇が谷（ヤツ）

其五　舊のたけのみやびやかなるは歌のすがた也けらし。菊をみて句をまふく。

鶴の聲菊七尺のながめかな

其六　琴

琴は語る菊はうなづく籬（まがき）かな

其七　棊

其八　書

菊買（カフ）は又棊にまけし人やらん

其九　畫

書を捻（ひね）ル芭蕉にねぶれ菊の兒

菊さけり蝶來て遊べ繪の具皿

鹿

田家

ねらはれて道なき鹿の眞向哉　不障

鹿よりや哀鹿追ッ翁聲　桐雨

己巳九月十三夜游園中 十三唱

其一　ことしや中秋の月は心よからず。此夕はきりのさはりもなく、遠き山もうしろの園に動き出ルやうにて、さきの月のうらみもはれぬ。

富士筑波二夜の月を一夜哉

其二　寄菊

たのしさや二夜の月に菊そへて

其三　寄茶

江を汲て唐茶に月の湧（ワク）夜哉

其四

旨（ムマ）すぎぬこゝろや月の十三夜

其五　寄蕎麥

月に蕎麥を占こと、ふるき文に見えたり。我そばゝうらなふによしなし。

月九分あれの〻蕎麥よ花一つ

其六

畠中二霜を待瓜あり。誠に筆をたつ〻

冬瓜におもふ事かく月み哉

其七

同聲相求といふ心を

むくの木のむく鳥ならし月と我

其八　寄薄

蘇鐵にはやどらぬ月の薄かな

其九　寄蘿

遠とも月に這か〻れ野邊の蘿

松にあはぬも時ならんかし

其十

一水一月千水千月といふ古ごとにすがりて、我身ひとつの月を問。

袖につまに露分衣月幾クつ

其十一　答

月一ツ柳ちり殘る木の間より

其十二　寄芭蕉翁

こぞのこよひは、筱庵に月をめてあそびて、こしの人あり、つくしの僧あり。あるじもさらしなの月より歸て、木曾の襷もまだたゝまぬに、など詠じけらし。ことしも又月のためとて庵を出ぬ。松しまきさがたをはじめ、さるべき月の所々をつくして、隱のおもひ出にせんと成べし。

此たびは月に肥てやかへりなん

其十三

園より歸ル。

われをつれて我影歸る月夜かな

砧

衣卷や粘すりおけり鳥沐し　菊鈴

砧打人も裸でうまれけり　鋤立

芦の屋の灯ゆりこむきぬた哉　立志

槌音も隣はづかし破れぎぬ　山川

有つべきものは砧の小哥哉　冰花

我馬に拍子しらするきぬた哉　巴風

鼓やら砧やらたゞあめの音　仙化

野分

小はらめや野分にむかふか〻へ帶　その

湯けぶりの土を這行のわき哉　東睡
手にたらぬちり／＼草の暴風哉　立志
いそがしや野分の跡のよばひ星　加賀 一笑

紅葉 附 蘿

小男にかたじけなしや下もみぢ　秀和
水底の紅葉見て來るかつき哉　八木
片枝は霧こめ／＼のもみぢ哉　百花

嵯峨の跡に

おもたさに紅葉はなげつ二月橋　遠水
蘿の手にやがてにぎれる小石哉　嵐惠

薄

はづれ／＼粟にも似ざる薄哉　その
蘭の香としらで風見る薄かな　大坂 件自

伊勢の國に修行しける比、關の地藏さかやにさまりたるに、宿に橘のさかりなりければ　宗長法師

橘のかにせゝられて寐ぬよかな

これらも猶俳諧のまくらにはあらずかしさ、小野を過ける比

角もじやいせの野飼の花薄　其角

おなじく、いせの國出るさて

はまぐりの二見へわかれゆく秋ぞ　芭蕉

虫

秋の部に入てなかばや裸むし　琴風
かまきりや芦火にうごく灰の中　舟竹
はたをりよ何を業に鳴はせで　山川
露明ぬ蜉蝣とまる水のうへ　冰花
纖しきはひつぢにそだついなご哉　紅雪
穭田にあかし成たるいなごかな　風子

稲すり哥の聞ふるびたるは、そなた百迄さぞうたふ。

百年に一疋たらぬいなごかな　衛門

一日二日よそいきして、宿心つきて、親里のかたを詠ていへりけらし。

日ぐらしの聲ぞなみだの親の里　少年 彌五郎

夕照

蜻蛉の壁を抱ゆる西日かな　沾荷
潮落かゝる芦の穂のうへ　芭蕉
霧の外の鐘を隔つる松こみて　露沾
脊にはさまる石原の露　沾荷
入月の薄粧たる武者ひとり　芭蕉
柴の筧に笙をあやとる　露沾
山寺は晝も狐のさまかへて　沾荷
花とひ來やと酒造るらし　芭蕉
夕霞日ゝに重なる鞠の音　露沾
白き胡蝶の垣を飛越す　沾荷
絹ばりを欄の柱にすがかひて　芭蕉
亂れし髪をなをすかんざし　露沾
調なき形見の鼓音も出ず　沾荷
何も焼火に皆盡しけり　芭蕉
棒の月一の窓に僧痩て　露沾
澁つき染し裏の藪かげ　沾荷
みゝづくの己が砧や鳴ぬらん　芭蕉

四十雀こそ風も身にしめ　嵐雪

稲妻

古すだれ稲妻とまる綻かな　立吟
いなづまは稲に契りの間あるか　鋤立
稲妻の徒に音ある狐かな　伴叔

相撲

すまひとり傾城の名にまされけり　冰花
兄弟も勝ことおもふすまひ哉　花蝶
投られて禮して這入すまひ哉　立吟

病後

すまふとる心になりぬ秋のくれ　尙白

踊　祇園にて

舞子更て踊鳥の聲白し　京　千之
稲妻に踊くづれて泣子哉　月下

案山子

かゞしみて乗馬きるゝ徑かな　調柳
まじ／＼と日にてらさるゝかゞし哉　京　原水

見わたせば出來不出來あるかゞし哉　呂洞
みのむしは千種の花のかゞし哉　鋤立

秋暮

癖に成て淋しや秋の今時分　京 千春
立いでゝうしろ歩や秋のくれ　嵐雪
秋のくれ女房のほくろ見付けり　冰花
生て居ル人見て秋のあはれ哉　鋤立
七夕の獨あそびや秋のくれ　鼠尾
𣴎のくれくつ〳〵おかし羅漢堂　月下

九月十日菊のかへりとて、集のふくろからげて、立よられけるに

𣴎のくれ井手の蛙のからをみん　舟竹

といひて、土産ねだられけるに、人丸の柿ノ實・山ノ邊の栗のから今日の得ものゝあまりなりと、笑ひ興じて

榧のからよしのゝ山の木の實見よ　嵐雪

蕎麥　讀甲陽軍鑑

あらそばのしなのゝ武士はまぶし哉　京 去來

茴香

實のおぼろ葉の朝露やくれのおも　桐雨

閑　敦忠のかねの題は、今もうち付におもひ出られ侍る。

我宿は何をしのぶの摺火うち　卜宅
ありの實よ人の問こば山の奥　草加 水山
梨ばかり夕日に醉ぬ山路かな　臥葛

山家に遊ぶ事侍しに

いざともに糧くさぎらん秋の庵　湖水

猶さそひよひて

里の子と鼻たらし居ル木わた哉　同
蕎麥はたく男にもろし女郎花　東雲

貧　郁

手繰縄のくるしや賤が芋のから　百里

けふも俳諧、明日も月次さて

四鄰をかぞへ歩や庭たゝき　百花
落鮎の水にあかるゝうき世哉　勇招
川音につれて鳴出すかじか哉　園友
鳴網は風の足見るゆふべかな　湖舟
そよぐたびとりならびけりすまふ艸　三翁

其袋　冬の部

老しらぬ今朝しもなどか桐火桶　露言

讃大黒

神の留守能女房を守べし　嵐雪

おもげなるどの何袋やかみな月　山川

淺ましやまだ十月の暦うり　（大坂）来山

時雨

鵯松はわざ〳〵ぬるゝ時雨かな　立志

草履とりしかり〳〵ぞゆく時雨　薬水

茶を煎て時雨あまたに聞なさん　嵐雪

京へまかりて

時雨ふり黒木になるは何〳〵ぞ　才麿

桑名には笘干宮のしぐれかな　山川

江口にて

からかさのゐぐちにかさぬ時雨哉　（京）千之

爐

爐の友や額にかけたる翁面　月下

いつとなく我座さだまる火燵哉　李先

中よしやごとくの足の冬籠り　衛門

埋火やきゝ耳たつる鼠鼷　百里

小野といふ名にめされけり炭俵　和賤

足袋

足袋はきて寢る夜隔る女房共　嵐雪

革足袋やあらたなる程いちぎなる　鼠尾

木枯

こがらしに吹倒されし座頭哉　疎木

一すじに凩や世のこゝろばせ　（伊勢）一有

こがらしに腹立鴇のひかり哉　桐雨

木枯に咎おほせたる木の名哉　土鮮

日あたりもこゝろに寒き枯野哉　湖風

うたふてもまふても冬の山路哉　（京）原水

十月雁

こがらしの高くもなるか雁の聲　百里

十月の風いろ〳〵にきく夜哉　言瀧

落葉

藪川の水に落葉の色ぞなき　三翁

枳に落葉つらぬく山路かな　東石

落葉朽葉皆拾はるゝ銀杏哉　北鯤

炭屑にいやしからざる木のは哉　其角

落りて風もすくなき木葉哉　吟水

落葉たく色〳〵の木の煙かな　釋宗派

狼の吹からしたか冬のやま　冰花

支離馬すてしかれのゝ哀哉　風洗

塚一つ枯殘りたる野中哉　和賤

たうとしやいためぬ梨の冬木立　山川

歸花

物すごやあらおもしろのかへり花　鬼貫

松風はうしろの山よかへりばな　舟竹

やどり木の欲よ若しかへり花　橒雲

深草の櫻は白しかへり花　秀和

雪

初雪や皆やごとなき沓のあと　山川

門の雪臼とたらいのすがた哉　嵐雪

常〳〵はしらぬ榎よ今朝の雪　調柳

たゞくさに木立もれたる雪の形　衛門

旦夕も過るか雪のたまる音　孤屋

白雪は溝の端のも喰れけり　月下

つめたさを雪にまぎれてあるきけり　湖水

一嵐鐘の音落せ竹の雪　兆風

初雪の白きにこりぬ目病哉　峽水

初雪も別にあまみはなかりけり　止行

霜踐堅冰

初雪は鹿の角にもたまれかし　紅雪

色ごとに香こそ有けれ柚子の雪　宇門

病中

初雪の半蔀ゆるせ風の神　竹井

霰

あられにはおもひ忘よはちかつぎ　舉白

霜

霜の夜や蛾の音きく古柱　風子

日の朝や待て霜田の堀鰌　　迻曙

さし毎の初茄子は、駿州江尻の莊より奉る。

霜枯に一花咲るなすび哉　　呂洞

凍

田にそひて益なきほどを氷哉　　沾德

五器一つ氷の上のあはれかな　　伊丹住 青人

風歸ス氷は水のいかりかな　　立吟

玉章に薄墨がちのこほり哉　　作者不知

水の隈いろ〳〵なれや初こほり　　花蝶

古池の波たつるなよ薄氷　　衛門

濁江も凍ば白し水の花　　一口

はり〳〵と氷のり越小船かな　　衛門

海鼠

むくつけき海鼠ぞうごく朝渚　　露沾

海鼠喰はきたないものかお僧達　　嵐雪

蠣たま得て返事に

給は石花にかしこしひねり文　　同

鰒

河豚ほど鰒によう似た物はなし　　伊丹住 鬼貫

米にかへたる鯛にはあらで

舟君のさうしや落る雪の鰒　　山川

今更につられて鳴か鰒の聲　　冰花

半醉半醒辭

祐成鰒を喰時は
ときむねはくはざりけり　　曲水

喫鰒のひろはれにゆく霰哉　　立吟

鮫鱇やめなみ男波の水ぶくれ　　菊句

衛

鳴門なる渦にまかれそ浦ちどり　　冰花

雪の千鳥寒うて鳴か嬉しいか　　桐雨

息つけよ足高山に飛ちどり　　菊句

はら〳〵や風の吹きる村ちどり　　幽亭

水鳥

水鳥のあゆみ短かき山田かな　　湖風

たはぶれや呑あふ鶯の水鏡　　山川

鷺の來て物淸なる小池哉　大津 尙白

麥を蒔人にはおゝし赤がしら　秀泉

水月

晴過て物皆黑し冬の月　楞雲

つれもなく野に捨られし冬の月　露尺

鷹 附追鳥

覗れてものうき鷹の夜居哉　子英

珍しき鷹わたらぬか對馬船　其角

魚賣を蹴て行鷹やみさご腹　桐雨

追鳥の一羽迯行入日かな　一蜂

夜興

ほめられて夜行の犬のきほひ哉　冰花

葱

ひともしや一字の題の忘れ草　百花

臘八

猿は飢牛は胡麻喰霜夜哉　紅雪

冬の日客をもてなす。

君見よや我手いるゝぞ莖の桶　嵐雪

煤掃

武藏野や煤はきなれと富士の山　東順

すゝはきはあたゝかなるを家例哉　調柳

すゝ竹の世々を戸ざゝぬ町家哉　菊峯

煤はきて何やらたらず家の内　月下

鉢扣

身を捨よ下駄はく雨の鉢たゝき　冰花

鉢たゝき君子の閨を遠ざけよ　衞門

節季候

せきぞろやまづ天王寺御墓山　にし

衣配

衣くばり四町へ色をわかちけり　同

歲暮

年の急ちいさき足袋ぞ心せく　月下

米虫の石臼めぐる歲暮哉　楸下

古曆ほしき人には參らせん　嵐雪

世話

二月十七日神路山を出るとて

德

はだかにはまだ衣更着のあらし哉　芭蕉

龍樹菩薩の禪陀伽王に對して貪欲なしめし給ふに、たとへば、有瘡人近猛焰炬雖悅後增苦の文のこゝろを

欲

雁瘡のいゆる時得し御法哉　其角

逍遥鵬鷃之間出入是非之境

彼是

はなの夢此身をゐるすに置けるか　嵐雪

りつき

彼岬にから名はなきか茗荷賣　百花

ものぐさ

寒苦鳥明なば紙小繕はん　舟竹

むひつ

書そめや柄杪の底の十文字　衞門

だんき

おそ櫻禪のならひに切くべん　琴風

うそつき

枯蓮のからかさかろし辻談義　笠凸

せはし

蜆くふ朝飯もはてぬ春のくれ　幽亭

そさう

花の木やかならず走る下り坂　菊峯

きれぬずき

硯墨蠅の喰ものなかりけり　百里

いぶり

いもむしは何にいぶりの名にはたつ　月下

ひがみ

十月や余所へもゆかず人も來ず　尙白

みちへた

寺〳〵の談儀過たかほとゝぎす　桐雨

よひまさひ

よひ〳〵は小坊主たゝく水鷄哉　當歌

あさね

雪かゝで御格子まいれ四つ日ざし　山川

せち

蚤ひろふ手わざもにくし猿の智惠　青女

しんく

一升はからき海よりしゞみかな　其角

ふきよう

相槌の笑て明るきぬたかな　山川

物名

槐　卯木　松　桐　椎　桃　梨

月うつぎまつとちぎり(契)し妹もなし　卜宅

賀茂　鳥羽　紀　八瀬　水野　淀

鴨飛(トビ)でたゞ巣に瘦し水のよど　立吟

蜑　津　岸　瀬　溝　湊　帆　洲

井　筥　波

雨つきし蟬ぞ身を干スいとまなみ　琴風

鵜　鶴　鸞　鵯　鶉　鴛　鳶　鴫

雁

うつるらん時日(ときひ)は借と鹿尾草(ヒジキ)刈　菊峯

敦盛

頬當(ホウアテ)にえくぼあるかな花軍　舟竹

潘安仁

盃に礫をとむる花柚かな　同

檜垣女

水かゞみ脊(セナ)中に雪をおひにけり　同

七福神

寄辨才天鎰

家子ともに引出物せん藏開キ　琴風

寄惠比壽鯛

櫻鯛笑はゞたゞにくれつべし　同

寄大黒鼠

亭(テイ)の顔のどかに黒し白ねずみ　同

寄壽老人鹿

角落て犬と見ましや庭の鹿　同

寄福祿壽杖

ふるびやうかの遍照が卯杖哉　同

寄布袋蝶

いざや蝶おもき身すらも舞の袖　同

寄毘沙門鉾

糸あそび甲(カブト)の星か鉾の影　同

七小町

山本

あは雪は女のなやむけはひ哉　にし

草紙洗

うき草や枯て見しもの黑(墨)ながし　同

通

おもひある心おもげや雪の笠　同

卒都婆

霜けぶりそとはに寄ルはくるしいか　同

關寺

七かへし小まちをかへせ神樂舞　同

鸚鵡

行としや肌にとまる梨の皺　同

清水

年籠リ小町が若世尋けり　同

少將のつらき夜ごろをかぞへて、まづかちよりかよひけんあはれさよ。

足の血や木瓜(ぼけ)に裂(サケ)けん木幡(こはた)越　山川

月の夜

さし足も月に目あらば恥かしや　同

闇

年の夜の細工わりなし榻(しぢ)の割(キザ)　同

雨の夜

簔に燒(タク)香なとがめそ櫻守　同

風の夜

凩もあはれとはふけ顏の胝　同

時雨

足すます帶刀(たてはき)もなし小夜時雨　同

雪のくれ

つとめての雪の足跡君も見よ　同

廻文

松の木の雪やはや消ユ軒の妻　卜宅

ながしつゝ浪しろしみなつゝじ哉　冰花
立志

味酒に苦き物あり松と花　嵐雪
山桝の芽を探るおぼろげ　鋤立
風通ふ氷室の外はあたゝかに　立志
床よりはこぶ猪のひとつ子　嵐雪
照月は雪の柏木篠の霜　鋤立
檜笈ばかりうらおもてなき　立志
逢ぬ戀練の袷の袖のゆき　嵐雪
黒おとことわらはるゝ色　鋤立
汐の日を風呂やの猿の名にたてそ　立志
又乙雪をちぎる別路　嵐雪
外に寐て尤ぬ犬をまたぎ越　鋤立
かまのはらひの獅子鳴し來ル　立志
振舞に齋の急ぎのまがひけり　嵐雪
疊寄進もなくて秋ふる　鋤立
軒の窓天上したる龍の跡　立志
夜はしづまる溫泉の底の月　嵐雪
なるときく向の後家の涼みゐて　鋤立
弖円の聲も我おもひから　立志

二

撈瘀の藥窺ふ障子越　嵐雪
おこゝろしりの是の十人　鋤立
紺かきか染そこなひし衣佗て　立志
足利殿の公事未細也　嵐雪
長明とうき世噺ん山の奥　鋤立
松風の音地震又ゆる　立志
闇きより心の底凝定の内　嵐雪
めぼしの花のいづこ三芳野　鋤立
春の月已は盗はなるまひか　立志
雁歸ルまで妾番せよ　嵐雪
千束なる切紙かみも繼佗ぬ　鋤立
ひたものけふは眉ねかゆくて　立志
よしなしの煙草をたてば何とやら　嵐雪
とりしまらざる氣は廿年頃　鋤立
そこ〳〵に代脉はあな賴がた　立志

見ても汗こきたみ笠の跡　立志
袖にして櫻橋沉麝香　嵐雪
　文ひろげいつ水無月の月　鋤寸

笠うち越せば恨の瀧を柳哉　擧白
　大薬の茶摘小薬もけべく　嵐雪
くるへ蝶翅を己が聲にして　李下
　ねり干す絹は風の一染　冰花
釣瓶井のくらかくと月の秋　嵐雪
　人の刈比青き我稲　擧白
蒲の穂のほくそもつかず有佗て　冰花
　狢ふるまふ心ぐるしき　李下
年をしてうつたる舞はゆるさしめ　擧白
　寄衆も勇者城もしれもの　嵐雪
百谷の雪くづれ來筑摩川　李下
　芽もたちあへず大割の材　冰花
華に來て牛も涎を流也　嵐雪
　その日に成て悔る入定　擧白
星に積錢を編にふるふとも　冰花
　養ひ合せ人も知緣　李下
糸屑に思ひを拾ふ組屋敷　擧白
　月もきこゆる水戸の下町　嵐雪

二

大魚の網引踊舟競ひ　李下
　上にしたがふ荒ずまふども　冰花
つり替に女はしづむ金秤　嵐雪
　情にとてはよめぬ石摺　擧白
胸を割かしらをうつも酒の罪　冰花
　狂言作る夜の蚊の責　李下
おとゝひも昨日も人の涼みにて　擧白
　からかさかした君も問來ず　嵐雪
うきふしを又ゆり起し渡し舟　李下
　日なたくさゝもふり醒す袖　冰花
石菖に油煙すへしのけふの月　嵐雪
　螇蚸も羽をおさむ戸袋　擧白
秋風に眞弓とる手も肩着て　冰花

三世のむすびに立ル擇待　李下
さからはで車も通せ腐橋　擧白
星霜照か諸社の贈官　嵐雪
花笠はかゞの番匠筑波萱　李下
藤やまきの國風を讀　氷花

瓜むきや男堅割輪は女　立吟
雪のすゞめと扇もてなす　嵐雪
かうはしき硯明れば筆取て　同
あるじの心植木なき庭　立吟
鎗鞘共道みがく秋の月　同
年貢はからぬ己が除地　嵐雪
藤原の十枝の裔もみだして　同
頭數なる鎌倉の穢多　立吟
仙臺の米つゞけくる恒の産　嵐雪
近き雲居は禪の魂　立吟
盜なりと鼠をいたく逆剝に　嵐雪
仕合なをす暮の貧乏　立吟
けはひ見て子持が母もさら也　嵐雪
また寐朝寒御油の馬士　立吟
さゝ〳〵のきぬ〳〵かたれ軒の月　嵐雪
露拾はする玄宗の馬鹿　立吟
花にいづ貝摺錢をつなぐらん　嵐雪
春面白き酒の呑じに　立吟
盜も頭の家はかざりして　同
いづくの僧ぞ札くばり行　嵐雪
渡しさす舟守どもにうち返し　立吟
すまふの意趣をとぐる一村　嵐雪
小薪發意勢は秋葉の二三尺　立吟
椽ふるしぐれ竹笠を打　嵐雪
塩車月夜のよさに引佗て　立吟
市の座につく召の昆布賣　嵐雪
懸聲も不肖〳〵の鼓うち　立吟
翠簾を尻目の心しりきや　嵐雪
蚰蜒は誰ガ黒髪をなめに行　立吟

明日の精進や戀のさまたげ　嵐雪
はりあひもなき傾城の氣ぬけ哉　立吟
　頼義殿といひさうな顏　同
狐矢に荒木の弓を素引して　嵐雪
　七日〳〵の戸見に行　同
外科の子の手水し習ふ花の水　立吟
　梅山吹の光わきざし　嵐雪

名によりて蚊遣になれよ伏見艸　百花
　あふぎのつまし蘆取に折　菊峯
切箔にちらせばかろき金にて　笠凸
　園のうづらに口を耽かす　嵐雪
鼠槍鼬矢倒藪の月　菊峯
　田庵さびしき風の連枷　百花
機嫌よく熊野のお寮入おはせ　嵐雪
　帶の祝も明日の雜餉　笠凸
夏の夜を背き〳〵の寐ぞつらき　百花
　瓜嫌ひなる中の移り香　菊峯
病ぬきてみれば涼しき草の上　笠凸
　とはゞや所化の衣すます宿　嵐雪
物盜人の心の掛子箱　菊峯
　客に扈從のみやびやかさは　百花
新風呂を入和げよ花の肌　嵐雪
　柳の窓を上ル尺はち　笠凸
桂男もうごくやうなる春の月　百花
　舟責下かすりおもしろ　菊峯
捨石に胡座かく僧佛なり　笠凸
　狐つかれの晝寐しに來る　嵐雪
ほれたとや白粉の花紅の花　菊峯
　うき名の露よ番匠の妻　百花
月はみん足に疵もつよそあるき　嵐雪
　稻喰色はしるゝ木食　笠凸
蠶きてうつふし染の捨衣　百花
　灸こらゆる顏わらはゞや　菊峯
さて懲よ妬さ憎さの妍敵　笠凸

乞も情かお姫様金　嵐雪
旦那寺垣の後にぬかづきて　百花
鳥叫三度肝に入聲　笠凸
芹の香に雪の兎の澤渡り　嵐雪
機布ちゞむ越の海西　菊峯
水むしに妹が手の裏あれにけり　百花
桃の葉しほる湯肌うつくし　笠凸
花の種けふや祇園のお目さまし　菊峯
葛の鉾に螢火をきる　嵐雪

菊の香や瓶より餘る水に迄　其角
蔦も便をかこふ小座敷　百里
幾重にも月さゝせんと向をみて　嵐雪
中酒にえめる雪の朝飯　其角
疊なく肌の痺も冷渡り　百里
拭ふ上さへ猶ぬくひ板　嵐雪
四幅對四の常盤に詠ける　キ角

小田の原なる宗雲の寺　百里
漱透の頂香ゝにたき　嵐雪
下帯洗ふ夏閑にけり　キ角
人きらぬ大小さゝす夕月夜　百里
やり水淺く蓼紫蘇のとう　嵐雪
鯒とは是が鳴らん生洲町　キ角
餞うたふ戀の首尾あれ　百里
女文字史の筆のふとりやう　嵐雪
腸黑き弓取の國　キ角
裝束の百馬揃ゆる花の山　百里
さかふる藤の門の客人　嵐雪

二
感じては鬼が詩を次春の雨　キ角
緣の返事はふつとならぬか　百里
座を打て母のたけりも我泪　嵐雪
しばられて居ぬすびとの顏　キ角
大年や戸明音のあぢきなし　百里
塩よと呼て一舛の雪　嵐雪
うなひ等がとさかを拾ふ磯遊　キ角

沖の子日に海松を引　百里
玉つくり難波は霞む古都　嵐雪
蟻のちからも廻す輪藏　キ角
老僧の若紫つれたる春の月　百里
櫛買ふ店に袖ひかれたる　嵐雪
船に醉鞍に睡る世のうつゝ　キ角
骨の供して御國迄行　百里
迁宮にあはぬ泪もかゝる哉　嵐雪
芳野の暦月日わりなき　キ角
餅花もやゝと煤てけふの春　嵐雪
羽箒にうつ雉子なく也　百里
炭がしらけぶたき妹が泪哉　秀和
たくみに雪の積る門立　舟竹
臘月の梅花は齅ず中〳〵に　嵐雪
夜行の砂履にいそがし　秀和
しら〳〵と嫦娥や醉を盗らん　舟竹

今朝も薄の手品してみる　嵐雪
桔梗なるあふみの笠は形がよし　秀和
親しらずとて旅に泣める　舟竹
人の垢よる〳〵かはる一夜妻　嵐雪
目疣をさすれ君の鬢櫛　秀和
灌佛を手に提て來る卯の花に　舟竹
蓬がもとのこゝろ朝起　嵐雪
硯石窪しと人にみられては　秀和
髻の鶴を長生の德　舟竹
三ケ國我流にかなで治けり　嵐雪
薯蕷麪すゆる月夜雪の夜　秀和
花の哥醒が井餅に書黑め　舟竹
けふぞ唐人天穿の晴　嵐雪

二

衣更着や肉陣風に立つらね　秀和
賭双六は宿にぞ打ツ　舟竹
腰支を星に借ス夜か後向　嵐雪
このてかしはの人みしりして　秀和
形尾の驕のとはへや水かゞみ　舟和

軾せばむさかづきのくれ　嵐雪
壹參伍も弓は流れたり　秀和
跡なる男先の小男　舟竹
いづかたへはかなく醫者の急らん　嵐雪
ゐ串さす夜は雪の黒鬼　秀和
節季候の頭の艸の生るまで　舟竹
臍扣居て老を囀哉　嵐雪
銀のはなし目貫を佩ながら　秀和
ならはし哥を人の世中　舟竹
猫好のこゝろ程身の有安し　嵐雪
水没時は數珠耳にかけ　秀和
神無月十三日を花盛　嵐雪
空冷しの冬の澁柹　舟竹

來陽堂
月下

煤はきて何やらさがす家の内
師走の門の子賣子買　嵐雪
冬籠御厠人が鄰居て　桐雨
雪竿はかる旦夕の月　月下
賞翫は鱠の雲腸打おかす　嵐雪
杉のからさもうすき盃　桐雨
本陣は結構あれど草枕　月下
添髮削ル匂ひ暑くれ　嵐雪
帷子の首筋よれて胸あはず　桐雨
麥粉くふには言の葉もなし　月下
おもしろふ順禮うたふ芝の上　嵐雪
曇りさだめぬ諏訪の湯煙　桐雨
稲妻に人よびあるく神かくし　月下
さゝらへ男うつゝ孕ふだ　嵐雪
落にきとうき名山田の鮎の魚　桐雨
何にあんにやの家にふれけん　月下
花の床曉笑ひ晝ねぶり　嵐雪
子かはゆがりの雉子もほろ／＼　桐雨
鶯も譬喩品とこそ說にけれ　月下
佛頂顔よあられふる空　嵐雪
塗垂の戸たてに行か島守　桐雨

我一代を盡す書本　月下
白川のそこらともなき住所　嵐雪
黒谷よりは鄰なるらん　桐雨
松杉の曇りもはてず日でり雨　月下
小うたで歸ル五月早女房　嵐雪
こいよ君待ぞよとのに薦(コモ)しゐて　桐雨
裾ぬひくるむ死跡の恥　月下
十六夜の光に寺の米無盡　嵐雪
竹の子どしを秋風ぞ吹　桐雨
城下の田町や霧に望らん　月下
浴(ユアミ)歸りと見ゆる足輕(アシガル)　嵐雪
怨(ヒトモン)に首つながるゝ龜かはん　桐雨
夢の錦は花の鴛どり　月下
春の夜を娵氏の官に酌とらせ　嵐雪
恨うれしき衣更着の衣　桐雨

皇都書林　京堀川通錦小路上ル町　西村市郎右衛門藏版

俳諧勸進牒（はいかいくわんじんてふ）

上・下

路通撰

附　月山發句合

俳諧勸進牒

奉加乞食路通敬白

元祿三年霜月十七日の夜、觀音大士の靈夢を蒙る。あまねく俳諧の勸進をひろめ、風雅を起すべしと、金玉ひとつらね奉加につかせ給ふ。

霜の中に根はからさじなさしも艸

覺て後、感涙しきりなるあまり千日の行を企畢。廣く續て一言半句の信助を乞。大願の起かくのごとし。昔南山無言上人、たふとき告ふたゝびまで侍しかば、夢の憂橋のあやうきを渡かねたる世のなげき、こりつむ末も今薪盡なむ時至りぬ。只一念の樂み、一念の間なり。偏に勸善捨惡の勸懈るべからずと、のたまひしこそ辱じけなけれ。ひとへに古人息をはづみ、臍をかたうして此筋を嗜むといへども、愚かなる身のならひ、こゝろざしのみだれがちなるはかなさよ。そも〳〵天のめぐみ地にしみ、公の政すなほにて時に逢、風雅の勸を沙彌とよばれむ事、大慈大悲の誓におほはれたるなるべし。哀〳〵人々の力をそへて、こゝろざしをそなへ給はゞ、などか蓮臺の源化むつびとならざるべき。誠におゝむあはれみとけて、ゑぞがちしまのつらき心をもやはらげ、薩摩鬼界のかくれたる情もあらはれなむ。百日の終〳〵撰集めし、巻々を梓にかけ、國々をひろめ、猶千日の大望はたしとげば十の軸となし、神の榊にむすびかけ、佛の巻柱に篭んとなり。頭陀乞食の間、神明佛陀同じく冥慮をたれたまへ。穴賢。

俳諧勸進帳

修行始霜月十八日

一むかしになりぬらん。みよしの(吉野)ゝ冬枯見まほしく分入し比、流涙の僧に逢。雪空の着肌我よりうすく、心猶うるはしきさま懷かしく、都迄さうちさそひけるを、露うごくけしき見えたまはず。

寒さにはこまりながらも芳野哉　　觀活坊

旅　行

はつ雪や聖(ひじり)小僧の笈の色　　風羅坊

寒夜增信

庚申や山茶花(さんくわ)すでに開る夜　　露沾子

寐ごゝろや火燵蒲團のさめぬうち　　其角

箇々圓成

松の葉やあられひとつのすはりやう　　曲水

霜解や都に出し下駄の跡　　沾德

一筋の砂川深し鴨のあし　　遠水

市中暫不閑

家〳〵の佛やつねに冬籠り　　枳風

ふるき世をしのびて

霜の後撫子さける火桶哉　　風羅坊

影向松一夜千句卷頭

初雪やこよひ祝言あるところ　　岩翁

金馬のさし仲の冬中の七日、三四友をかたらひて、こゝろざしを申侍る。

人やしる冬至(とうじ)の前のとし忘れ　　素堂

ねられぬや寒至る夜の炭の音　　揚水

つもるかと雪を覗きし戸のひづみ　　里東

鵜をやめて罪なき冬の寐覺哉　　前川

いたつきのなくてまめなる衛かな　　此筋

名所雪

笠縫をいづるや雪の降さがり　　殘香

貧　家

雪の夜や布子かぶれば足の先　　千川

老の寐覺のかぎりなきに

雪やけや夜毎に孫が手をふかせ　智月
はつあつてかぎりしられぬみ雪哉　由之
もろどりの立ゐあらはや冬木立　丕峰
木守や待人とはで冬の柿　山川
初雪やふところ子にも見する母　杉風

寄二其角一
おもはしき木立にかゝる雪吹哉　肅山

寄二路通一
寐がへりや左右(さう)にあまらぬ衾哉　肅山
はつ雪やすなをにためぬ貝のやね　花明
やま寺は弟子も師匠も頭巾哉　釋行舟

勸進おもひ立ける一筋を
あはれしれ俊乘坊の藥喰　路通

大津よりきこえける中に
小女郎にも走りまけたり夕時雨　乙州
擂(すり)鉢(ばち)の居所よきこほりかな　汀鴉

出羽國さかた(酒田)、おなじつる(鶴)が岡の便に
初雪に熊の出たる海邊哉　不玉

聞て行かれのゝ人のはなし哉　重之

前川亭にて興行
こがらしをわづかにまねく庭木哉　嵐雪
うぐひすやはねをかためぬ雪の內　文鱗

日養生にそこらあるきて
冬がまへ藪に椿のおほきむら　珍碩
初雪やものゝ葉に置水の上　駒角子
いつとなく我座定まる火燵哉　孚先

冬の夜湖上幻住菴にて
木がらしや夜半過たる茶の出ばな　里東
世の中や雪もあられもまつしぐれ　木吟

鉢扣(たゝき)きかんとおもふ夜、寐忘て
うす氷あやうくもなきかもめ哉　松青
鉢たゝきあはれ跡なき夜明かな　野徑
寒念佛晝は浮世に歸けり　琴風
水仙の葉に勢あるこほりかな　松翁

深川雪夜
酒のめばいとゞ寐られね夜の雪　風羅坊

汐なれし磯の夜鳴や友衛　乗豐
影法師のちよこ〳〵はやし冬の月　立志
はつ霜を何とおよるぞ船の中　キ角
人の足ふみていたゞく火燵かな　蕭山
段々に降たはみけりもみの雪　杉風
大雪や矢さまを鳥のやどりかな　白羽
曉や猫かきよせてぬくめどり　百里
道端や雪間ひしけし笠の骨　（越中）宇白
そろ〳〵と足ふみ出す火燵哉　今水
月の夜も川浪くらしかいつぶり（鳰）　姑川
寒菊もかじけ果たる師走哉　殘香
底冷やいつ大雪の朝ぼらけ　此筋
人顏もくるゝか雪の足遲し　全峰
病人は霜に味つく冬菜哉　春魚
寐るまゝに霜置小田のかどし哉　朝四

淨土にこゝろざしてより、おほかたの雜行（ざふぎやう）をやめ侍らんとおもひ取たる身ながら、大悲方便有難く結緣をなしぬ。

大慈悲の海やひとつに霜あられ　直善
雪の爐に心をはこぶ松葉哉　草進
此木戶や鎖のさゝれて冬の月　其角
足のものさはり心や桐火桶　曲水

六地藏村の雪の日に

くれ竹や雪にさがれは牛の糞　花明
氷閉てをしむや蓮の莖をさへ　素堂
半俗のをのが姿よ雪の竹　乙州

つくしのかたにまかりし比、頭陀に入し五器一具、難波津の旅亭に捨し侍破らず。七とせの後、湖上の粟津迄送りければ、是なさへ過しかたをおもひ出して哀なりしまゝに、翁へ此事物語し侍りければ

これや世の煤にそまらぬ古合子　風羅坊

夜神樂

から崎やみの着て夜の神樂哥　靈椿

深川即興

かや船も一夜の霜の入江かな　路通

臘の朔日の朝から

節季候の來れば風雅も師走哉　風羅坊

元日を起すやうなり節季候　キ角

兩句に對して、我も

節季候よせはしき口の覆物　路通

おなじ二日に

ひとひ二日更に師走は春ちかし　仝

雲葉の會に、其角・里東その外うちむれて參りしに、空のけしき曇りがちに侍れば、雪待さて興にいりし。

草臥て鳥行なり雪ぐもり　仝

橘町にしる人ありて、さし忘れたまかりぬ。過行かたの事どもさりいだして

笑ふより泣を過すなとしわすれ　仝

まづしきあたりをきけば

死たしと師走のうそや望月夜　路通

友とてや猫もかじけて冬籠り　昌房

獺をたしかに見たり冬ごもり　珍碩

松本にて

初雪や四五里へだてゝ比良の嶽　去來

これは、ふるき文どもの中に見出し侍りて、なつかしさに、初雪ならびへだゝりぬれど、又こゝにさゞめ侍りぬ。

心有身のたのもしきかなと侍るをおもひよりて

やせ馬も淺草拜め暮の市　路通

歲暮

やりくれて亦や寒しろとしのくれ　キ角

しれたとしこそぐられけりとしの暮　野徑

大としやあふ人毎にかたりさし　三箇

大晦日靜にめぐる茶臼哉　枳風

旅情

としのくれうばが餅くふ命かな　花明

歳旦

屠蘇うけて笑顔うつす始かな　眠鶴子
元朝や髪筋ゆるし櫛の音　三翁
新ない松よりうくるとしの春　八橋

手握レ闕口含ニ鷄舌一

ゆづり葉や口にふくみて筆始　其角
誰が身も方の恩の太郎月　枳風
千歳の一葉出らめ蓂莢　揚水
國栖人のたばこをしらぬむかし哉　荷兮
花の春面白い世に生れたり　釣雪
つく〴〵と身はならはしの雜煮哉　野水
元日の里は牛曳こゝろかな　花江
蓬來や天地に山の名を耻ず　京　千春
廊に蓬萊重きあゆみ哉　友靜
世ゝの名よ年魚におもふ岐阜よしの　遠水
わか水やよべより井桁越せる音　孚先
門の松我も師走を出にけり　文鱗

春色新來一捧頭

九億劫以前も同じけふの春　禪師　佛頂

春

池水にけづるや千筋柳髮　淡水子

是は此道に心を罷て、三とせの程さらぬ所なもさりし、おもはぬ日にもあひてむなごあはれみたまひ、我にあたへ給ふなりけり。風にまかする柳の糸、千筋もみだれなく、まことの法にいたれかしさ、おもひさりて、花月の始に、たて侍るものならし。

正月廿九日月次興行通題梅

むめ咲て人の怒の悔もあり　露沾
朝戸出や咲より前の梅の勢　岩翁
溟きに梅のうつるか車井戸　岩泉
岸の梅手に水すくふ朝かな　旦水
むめの花しばし置けり卓の上　き翁
梅覗く人に科なし垣の間　岩松
かじけても今朝咲ときぞ藪の梅　横几

軒ならぶ梅に覺えし屑屋かな　探泉
もろこしの繪にかく梅の馨哉　沾荷
村の梅馬より下て酒買ん　コ谷
折て後貰ふ聲あり垣の梅　沾徳

饗應に侍る由、その日はとに長閑にて、蘭中に芳艸をふみ、入口面白かりけるよし。うらやましさに、追て加り侍る。

梅の木やこのひと筋をふきのとう　其角

花

木がくれに花のものいふ呼子かな　風鈴軒

夜錦・櫻川集は此御家にて撰ばせたまひしぞかし。巻の中只昔の人さ成給ふのみ也。今御形見に花の詠艸を、予が勸進に乞うけぬ。

花ざかりいはゞ都の酒屋かな　守武
はなどりもうづらとならん願ひかな　き角
花鳥にならふ柏のふる葉哉　ろつう
鶯や辨の吃をきかせけり　曲水
入口は柳にのぼるよしのかな　前川
學べども柳にたらぬこゝろ哉　正秀
白魚をとる手もあぶる篝かな　岩泉

岩淵の里に馬をやすめて

ふじ川や見る間に霞む他の船　山川
出かはりのあいだやあそぶ花のとき　浮萍
水面は風吹かたの柳かな　遠水
物見より櫻にけこむ遊山幕　き翁
丸袖は餘寒をふせぐ餘殘かな　尺艸

あたら櫻のさかにぞ有ける

花ものをいはぬ顔でや人あつめ　任口

庭も漸けしき立て

尼のいふ彼岸櫻も咲にけり　露沾
長き日や腹のふくれてあそぶ鶴　落荷
あつき日や猿若鬚をはづしけり　曲水
ぬるむ名をぬすむ手水の氷かな　思風

杖を曳て木幡を出る。

宇治の月山も朧もなかれけり　溪石

六阿彌道者のうちむれたる中に

いくたびの彼岸にあふや珠數のつや　浮萍

上野ゝ花に

こかしふるさまにひとへの櫻かな　普船

鬼瓦雀の玉子かみわるな　柴雫

家々のならひとて

藪入に通り名付る女かな　岩翁

芭蕉の舊庵を尋て

むかし誰が小鍋あらひし菫艸　曲水

青柳や瓦葺なる軒のつま　コ谷

海邊の春

引あげし小舟や海苔の干所　遠水

金王坂を通り過て

常よりは糸もみじかし反古だこ　柴雫

山居

蛇くふときけば恐ろし雉の聲　風羅坊

旅行

草枕虻を押へて寐覺けり　路通

草庵

わがものとおもへばせはし春の廬　仝

からざけのあたまばかりや春の雨　越人

埒をとく橋の往來や初ざくら　仙化

哥念佛申さぬ嵯峨の櫻狩　不角

氣ひとつをいづれ妹許櫻がり　扇角

新敷いほにもけふの涅槃哉　望鳥

訪閑居

一つかみあれば四五日わか菜哉　荊口

直宿

花のやま日比は常のところなり　仝

寒うても眠のくるや春の僻　仝

茅屋に住て樹を商ふ。

むさしのにのび行松や若みどり　丈松

手ぐり船笘さへかけず川柳　春曙

むつかしき根を見にゆかむ藤の花　素イ

船中即興

うらゝさや川より海に離れ際　百里

やま吹の雨の勢(きほひ)や庭の面　野径

烏飛兎走

雀子や獨飛して佛生會　浮筏

現覺猫も憂世のねたみ哉　白岩忠知子 沾木

丈にのびたけにたれたる柳哉　兎扶

やま吹は黄玉青玉露ぞうき　キ角

款冬の色にはあらぬなじみ哉　いく

佛の日たれにわかれの雪の肌　智月

此ふしは猿の持べき柳哉　ト宅

卽席通題　餘寒

きさらぎに酒の慾しるふすま哉　露沾

青柳に芽の出ぬかたの寒さ哉　沾荷

此雨はあたゝかならん日次(ひなみ)かな　キ角

寐かす子にまだ肌寒し春の風　岩翁

彼岸前寒さも一夜ふた夜哉　路通

接木する手さへつめたき春日哉　旦水

はる風に脱もさだめぬ羽織哉　キ翁

春の夜も更て寒けり小挑灯　乙州

今日もまたふさぎかねたる火燵哉　コ谷

庵の春に紙子借けり都人　沾德

寒長は肌着ぬがれぬ春日かな　横几

青柳の枝もかもじの都かな　童次

此一句は、こゝろざしふかき老人の、奉加の事ねがはれしまゝに書さしめぬ。

三月三日　勸進當日之句

なげく事なくて果けり雛の世話　路通

手とゞかぬ琴にもてなす雛哉　沾德

上座ほど雛のすがたの新なり　其角

いそがしやひなの二の膳三の膳　枳風

もの陰にかざるは姉の雛かな　揚水

むくかたや雛の所帶のいく所　岩翁

雛の日や子よりもうばの高笑　浮萍

桃さかば翁に似たる人や來ん　乙州

ふるきものがたりに

百敷の花をかざるや内裏(だいり)雛　高嶋 玄札

掛聲もいかにくるしき烏合　擧白

人も蟹もそよめく沖の汐干哉　仙化

土船のつちも干わるゝ汐干かな　巴山

汐干見ぬ田螺も貝のひとつなり　調和

曾良餞別

汐干つゞけ今日品川をこゆる人　素堂

野行

刈跡や地に喰付て咲つゝじ　木司

病中吟

かけろふにたが起ふしや耳の鳴　乙州

其角參會のとき

目をしやれよ花しほれたる庭なと　季吟

一日曲水を訪ひ、やくにたゝぬ事共云あかりて、心細く成行しに、膳所の文さてもてきたり。さりくゝ開き見るに、

いれくゝさ人にいはれても、猶喰あらす旅のやどり、どこやら寒き居心を侘て

住つかぬ旅のこゝろや置火

まだ埋火の消やらず、臘月末京都を退出(まかり)、乙州が新宅に春を待て

人に家をかはせて我はとし忘れ

三日口を閉て題正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛

金平が分別のごとく、ことしは休に致ル而、歳旦おもひよらずルへば如此御座ル。

正月五日　はせを

曲水樣

夏

散敷や琉球百合のはなむしろ　大乘院 秀長

老い後に

ほとゝぎす寐られぬはいとゞ息とをし　貞德

奈須のゝはらにて

野を横に馬引(ヒキ)むけよほとゝぎす　風羅坊

春秋の面をこすやほとゝぎす　キ角

白晝や初音めづらし時鳥　辻 紹二

天蓼(またゝび)にからみのつくやほとゝぎす　路通

花散て青きあくびの木末哉　羽白

わすれ艸もしわすれなばゆりの花　素堂
蠲るかた星にならふやほとゝぎす　旦水
時鳥あのともし火や消次第　沾蓬
さばかりの雨にうごかぬ牡丹かな　天艸
やまぶきの雫にみのるいちごかな　斜嶺
起〳〵の心うごかじかきつばた　仙化
爭に追ぬかれたる榎かな　探志
雨に折れて穗麥にせばき徑哉　尺艸

田家

家々に入所なし麥ばたけ　き翁
青麥の奥ぞひるなる鳥の聲　沾徳
二通りあるや堤の麥ばたけ　松翁
朝露に寐るあと見えつ麥畑　花江

船中即興

やかた船陸は鰹を呼にけり　仝
江戸にゐて夏のやどりや角田河　沾徳
漕船や是も見晴す青すだれ　キ翁

旅行

國の事ひよつとおもひやふかみ艸　李春
夏菊や根のある竹のはねつるべ　コ谷
夏菊は柄杓の露をいのちかな　紫塵
ゆられけり苗代水に鳥のはね　桃里

六本木にて

下闇や地虫ながらの蟬の聲　嵐雪

端午

けふよりはまことに恥よ古疊　沾徳
つゆながらあやめさしよき萱屋哉　遠水

碗久

死しなも螢をつかむ川瀨かな　曲水

祭

祭見にまかれりければあほうほこ　波柱
子ども等にいざ京見せう祇園の會　紫塵母
たゝきつけて人をねさせぬ水鷄哉　玖也
洗足の貞ひつはるや夕凉み　寸步
佇も水札も夜ると鳴なる水鷄哉　重賴

わが壇那餠などこのみてくはれければ

しらせばや蓼喰虫に鮓の味　是吉

老後

竹の子や草木につかぬはなれ物　其角父 東順

世の中のあはれやかつて時鳥　居文

日燒田や折〳〵つらく鳴蛙　乙州

秋

あけて悔る弓張月や櫚はつれ　季吟

高山氏の短冊に

都にもいまや衣を馬の沓　遊行上人

いづもざきにて

荒海や佐渡によこたふ天の川　風羅坊

道頓堀にて

あたゝむる夜は徳利の情かな　休甫

さびしさや市にこけても青ふくべ　前川

星祭あねの世話やくふくさ哉　里鶴

麻引にそのあさ結ぶたすき哉　木司

西瓜獨野分をしらぬ朝かな　素堂

息がはづむ荻の上風萩の露　風吾

名月

あかつきに寢覺て月見哉　露言

すか島の石の際有けふの月　百里

照やせむ御名やとなへむ今日の月　小虫

白川の關にて

名月や衣の袖をひらつかす　路通

奈須野にて

躬らるなよ奈須のゝ鶉十ばかり　仝

伊勢の國又玄が宅へとゞめられ侍る比、その妻男の心にひとしく、もの毎にまめやかに見えければ、旅のこゝろをやすくし侍りぬ。彼日向守の妻、髮を切て席をまうけられし心ばせ、今更申出て

月さびよ明智が妻の咄しせん　風羅坊

田家

早稻の食はや燒たつる夕烟　乙州

わせ藁の沓うつ馬や秋の里　耕月

聞て行枯野の人のはなし哉　重之

此秋も鳴そこなふて屁こきむし　乙州

三か月の糸ほど晴よいぶきやま　文鳥

九月三日

どの色をわけて折なむけふのきく　そめ

露けさや今朝とる菊の狹・俵　コ谷

片腕は都にのこす紅葉かな　キ角

月山發句合　序

をの〳〵動きはたらける中に、とがれる角なく、せは〳〵しきもなきものは、志の馨幽かに、情のはしをたどりてこそ、ながらふる便とはなせりける。もとより紫倫を整、榮輝をおもふに叶はぬ身なれば、瘦藤を攀、風席によこひて、折々散亂をしづむるまふけとす。ひそかに能因が笠を盗み、みだりに宗祇が笈をけがして、もぢずりの石に横お敷、十府の薦に雨をしのぎなむど、數〳〵の哀をうちつもる程に、林鐘の初め、月の山の御室をやどりとす。此所慈救の阿闍梨、予が泉石のやまひを悲しむで、憐みを加へたまふ事斷ず。亦圖司氏呂丸、機をくつし心を隔てず、横口するに日有り。續て、まのあたり心ざしをかよはす人〳〵は、蓮の實のぬけ出るがごとく、芦の末のみだれあふごとくにぞ侍りける。景を求め莚をひろげて、相かたらふごとに、飲事盡ぬれば白氏が膝を枕とし、云事哀なれば杜陵が臍をあらはす。いとま靜なれば、寢蓮が背に寄かゝり、思急なれば、頼政が箙を敲。是みなわが放廣の悰み、止

謎の友也。その止り其行毎に、雲に賦し水に比し、たびのあと捨がたく、石を敲、かつらを結むで、しば〱是を見るに、世の俳連をぬきむでゝ幽かなる物、糸をはへたるがごとし。口をとぢ手をおさめて思ふに、無盡藏の間を出て四彊の外に流たり。這筋の絶なむもはかなく、後逸をまねく便にもと、露丸集て、題をそろへ句を結ぶ。われもかつやまず。句の位をわかち、こゝろの匂ひを論ず。ひとつ〱かぞへ行程に、歌仙半の句合となれりける。往昔圓位の二卷にもあらず、ちかき比ちくさいの狂詠にもあらず。人をしてわらはしめ、我をして笑ふ。しかれども、いまだ晋の三笑にはたらざる事を恥るのみ。

俳諧勸進乞食漫書

一番　四季峰の櫻

大嶽や夏に入ひとの初ざくら　會覺
ふもとのさくら

まつばらやたま〱有が山櫻　枳風

人の初櫻とつゞけたるくさり、ふるめけるやうに侍れど、こゝろざし猶此所に餘れり。昔、行尊僧正の哀とおもへ、と詠じたまひけむは、芳野の奧の峰のやどり、是は出羽の月のやま、夏に入人の見とがめけむ、初櫻なつかしき姿なり。たま〱有る山櫻と侍るもめづらしからぬ躰にかまへたれども、匂ひ、此筋にふかし。牡丹花老人の手をひかれし台嶺の吟行も見るやうなり。初の句は心ざしふかく、後の句はにほひをわづかに殘す。をの〱わが道の力とする所なるべし。夫、むかしの句合は、あげて論をたてならべて勝負をなす。是みなものゝ私に落やすきをかなしむで、辨をつくし道をかざりて、人〱をすゝめしむならん。かならず、興あらんとのみたゝかはしむる業にあるべからず。されば此卷の判に勝劣の間をとらず。句は龍虎のごくならべども、曾てあらそひをなす事なし。偏に風雅に契ふかゝら

むために、情ある句どもを番、あるは古き人、しらぬ人のことばも、ひとつふたつひろひそへ、志と馨と力と佛と寄と見入と響と移とのさかひを撰びわけむとす。さのみ句の姿かはるにもあらで、たしなむ道かすかなるものを、無下にをのれがこゝろのごとく味ひたらんは、本意なかるべし。兼て芭蕉庵の翁、此事をなげき申されければ、したがつてうけたまはり置しを便とし、こゝろ有人、徳長たる方にはぬかづきよりて、うかゞひし事なむどおもひはかつて、漸たどるに侍る。われをあながちにあやしめ給ふ事なかれ。

二番　いばらかき

鄙びたる香ばし惡むな茨垣　つるが岡 宵花

けしのはな

散ときのこゝろ安さよ芥子の花　尾陽 越人

折々は野渡の船叟、あしまの徑を過、孤村のしほり酒をも侘得たる風情、寄の作意といふべきか。纔に見ゆるけしの花は、紅白の色をもて興とせず、かろくうち散たるをうらやみたり。見いれ有所猶殊勝。

三番　名所櫻

象潟の畑にきらぬ櫻かな　袖浦 不玉

閑居蕣

あさがほや垣ほのまゝいじだらくさ　江戸 文鱗

きさがたの櫻は浪にうづもれてなど、讀し氣色をかへて、畑にきらぬなどいへるは、作者の見所なるべし。塩越の里はなれ、すごすごとして畑をうなる人の姿、見るやうなり。閑居のあさがほもさすがにおかし。此あるじは家に箒をもちひず、顔に鬚を剃る事あるまじくや。彼是愚かなる風情をもとゝしたる姿、響おほし。

四番　もがみの泊

稲舟に休みかねてや飛螢　曾良

會津のやま

はる風や行ほど奥のうるしばら　花洛 釣雪

夕ぐれはほたるよりげにもゆれどもなど、つらきおもひにたとへしなれば、いな船にやすみかねたるもことはり也。一句のとなへめづらしからず聞え侍れど、最上川のほたるは、瀬田などのさかりなる比は、瀬ひとつふたつ飛通ふ盛とても、さのみおほからず。漲る瀬など落す折に、船ばたを飛はなるゝさま、見所あるべし。工みをのがれて氣色はかり云置けむ。しかなり。

くれなゐのなのが身に似ぬうるしの木
ぬるさしぐれになにかはるらん

爲家卿の哥は色づく所を見とがめ、今の句は會津の道すがら、さびしきこゝろを申かなへられし。境に對して見入あるかな。

五番　草のかはづ

うき艸にあがくかはづの涼しさよ　露茄

荷葉の蟻

はちす葉になにを持よる羽蟻哉　松哥

宗鑑法師の、手をついて哥申上るかはづかなと侍るを、今もその心のあたらしきを感じ侍るに、萍にうかれたる蛙のあがきやう、次に荷葉の羽蟻なに事をなすとてか、いそがしきたれ〳〵も浮世のたゝずまひをおもひあはせ侍るべければ、ともに志といふべきか。

六番　述懷

今の世の人もはづかしかきつばた　杜若 仙景

哀傷

なき人のすがたなりけり五月雨　直行

紫の朱をうばふとかや聞なれしもさる事ならん。手をもてさぐり、口をもてうかゞひがたき人の、心のはづかしさを、きつゝなれにしとよみけん、花の色にかこつもいとけだかし。並にいへる、なき人のすがたを五月雨によせたる、誠に面くらくぞ侍る。はるかにてらせ山の端の月とかや云けんも、折からあはれ也。

ときにとつて寄といふべし。

七番　男

こひ草や我を忘れて夏の蝶　梨水

女

電よ絶なば堪ね門すゞみ　作者不知

さいつ比、奈良にて頓阿の色紙見侍りし中に、男といふ一字を題に書て、俊成卿の、戀せずはの哥侍り。夏の蝶の句は、心の切なる所を能題にあはせられたり。並に門涼みの句、かゝる俤侍り。數言、只堪ねといふ一字に移りぬ。

八番　半樂半愁

蚊の聲やあつたら夢をなかばほど　隱士　了源

全體作用

大海に氷らぬ夜の碇かな　禪師　愚堂

ひとりは洛陽かくれなき高隱、獨は直指草傳の國師、風雅にあらずんばいかで愚眼にあたらんや。誠其響遠しといへども感なきにあらず。

九番　秋の暮

鳩ふきて腹すく秋の夕かな　玉文

冬の夕

湯をわかすばかりぞ冬の夕間暮　貞貫

はゞからず腹すく秋の夕と、こなしたる所淋しきさま籠り、餘情もあまり侍る。又、冬の夕に湯のわく音をたのしむ句、こゝろばへ有。句のかゝり、ひとかたは馨、ひとかたは俤とも申つべし。

十番　丑に乘る法師の綸に

世をうしと花なる身をや捨坊主　立甫

住所もさめぬ身

定宿に亦とまりけりとしのくれ　蝶ゝ子

俤有、響有、古き代のすがたいさゝか優にして、よるかたも侍り。立甫ははやくむかしの人となり、蝶ゝ子はいまだ世に佗殘りけんも、風雅の命なるべし。

十一番　うへのゝ花に

大佛うしろに花のさかりかな　路通

住吉奉納に

ふるかれや神樂拍子にかぐら聲　仝

ふるかれや、神樂、大佛、いづれも予が有のまゝを云出し侍れば、聲もすくなく、ひどくかたも力もなく侍れど、此道に心を置し契にと、ふたつ迄ならべ侍りぬ。

十二番　古坊

冥加あらせたまへ古坊の柿の花　羽黒 呂丸

八橋

行水のやつはしわたる燕かな　仝

過し比の秋、丹波にまかりしついで、山ふかく入侍りしに、木の實を賣て一とせのよすがとする艸庵侍り。此爲に般若心經を讀て常に祈禱すと、住持の語申されし事おもひあはせて、此句の力を見付侍りぬ。八橋わたるつばめもやさしく、さのみはなやかならんとせざるは、作者の心ざしなるべし。

十三番　春の曙に

うぐひすの岩に飛つく聲細し　不徹

あきの夜に

秋の夜に更るめくらのいびき哉　風嵐

春曙・秋夜兩句の様、あはれにも物すごくも聞え侍りぬ。寄のもやう秀たる姿なるべし。

十四番　歐陽

かつ柳ちるにぞ有ける立出て　重行

東坡

大雪のこゝにも食のけぶりかな　不玉

綏々たる心〳〵の背姿、見るやうにこそ侍れ。俤も力もそなはりたる作意珍重。

十五番　茅屋月

傾きし軒端の月をつかみけり　松溪

秋野行

見るうちにすげなう也し薄哉　里水

窮居不相辨終夜伴吟哦と侍れば、傾ける軒端に月をつかみたる閑遊の輕さ、さも有なむ。

是は寄といふにかなふべし。

秋風に心みだるゝ旅寐かな

結さめられぬかや枕して

仲正の旅館もおもひ出ぬ。見るうちにすげなふ也しも秋風のけしき、旁（かたぐ）、能響てしほらしくぞ侍る。

十六番　俳

涼しさを人にかたらぬ乞食哉　王嘯

曲

きつね火の月嫌ふこそおかしけれ　玉文

それ／＼のしつ、能云かなへられたり。かほど移り侍る上には、猶みだりに辨をいれず。

十七番　玉造たよむ

あかつきの霜に哀や鶏頭花　貞貫

歸去來を味ふ

風流の身持かたぎや秋の色　東籬ゞ下白

いく人か上手のやはらかなるにあこがれ、栄啓のうるはしきをしのびいらん。小町が達の果、鷄頭のあかつきの霜にいためるにたとへけなき、さながら哀なり。淵明が籬をまうけて錐頭邊にやすらひし樣は、風流の身持かたぎとも云つべし。其言品ゝ力有。

十八番　和

わするなよ藪の中なるむめの花　漁父

情

何をがな妻と闇に喰すべき　重行

和と情とはやまとの源にして、俳諧の道にもかくべからず。あるは品すくなく、あるはまぎらはしくのみ侍は、なべてその工のおろかな（愚）ればなるべし。しかるを、やすらかにかく聞えけることそめでたけれ。花に色をあらそはず、月にものごのみをやめて、雲に眠り松に覺たふ人心のかほり・すがたをかいたい、古書の心なるべきか。そも／＼月のやまの櫻しほりそめしより、祭主ておけに寛きて、ふたつがはしく品なき事共、判どつどは侍る、上若十八

番、名を月のやまの發句合といふ。此發起阿闍梨會覺、勸むる人釣雪法師、撰者呂丸、判者路通が手に落たり。たとへ跡さきのあやまりはおほく侍るとも、四人の心とけて佛をうやまひ、神をあふぎ、うれしさ悲しさの上をいひならべたるは、いかで圓かなる道にもかなはざるべき。作者のかず廿七人、ともにながき世を契ものならん。

はぐろ呂丸よろこべることば

西行・兼載、戀のやま・月の山をわけのぼりたまひしは、云つたへたるのみにして、しるせるものはいまだ見ず。ちかき比、志賀入道不白採薪の哥を此所にたづね、續て寛永寺の學頭胤海山主として、月を奥のやまでら(山寺)とおがめまし〱き。不破の關屋は跡しなけれど、難波のあしのほのかに殘りて、風雅の道に行通ふ人いゝさかはかりしるべからず。されば路通が布衲能(よく)風雲にまかせ、元祿三つとせ釋

の會覺にちなむで、山院に水無月をしのぐ。さりしとし、蕉菴主の[illegible]をしたふて、重て景曲の交をむすぶものならし。下官(やつがれ)も其幸にふかう同志の心ばせをならべ、德風一字の判を乞、判成て梓にくべからず。芳非の候なきにしもあらず。久かたのあめ、めぐみましゝて、あらかねの土にうづまざらめかし。

俳諧勸進牒　下

龜翁が才の美をしれば、父(ちゝ)佛見に心ざしふかく、母三遷の愛にあまりて、視聽言動をのづから一解百句に滿ぬ。予ことし花摘集おもひ立て、人〱の句結緣となしぬ。眞非眞是今猶耻、ことさらにキ翁が才を耻て序て伏而。

元祿三年十二月廿五日　　其角

花摘集追加　　十四歲　龜翁

神無月おほかた北は曇りけり

口切に人數ふゆることしかな

獨身は火鉢とはなす庵かな

夜念佛の鉦もまぎれぬ十夜哉

風つよく破れもいとふ紙子哉

矢をとかむ狩の御觸の宵の雲

冬がまへ湯婆(たんぽ)の鈷をいまの悔

傘買て捨所なしむら時雨

さるかたに數寄の稽古して

茶の湯とてつめたき日にも稽古哉

材木に釣する家の夷かな

火燵には外に有けるふとん哉

六本木能見物

冬の日に輪藏(りんざう)西に暮にけり

時の興秤(はかり)にかけしあられかな

一檀那定めて行か鉢たゝき

すうたひ(素謠)や火燵のふちを拍子取

なにくふてうかぶ間もなき鳰(かいつぶり)

蠣(かき)をむく桶にもはやし薄氷

岡持にうごくもしれぬ海鼠(なまこ)哉

霜月朔日森田勘彌座

かほ見せの人には醉ぬ役者かな

手の龜(ひゞ)や下女にやさしき柚の香

水仙を根からみならば鉢に見む

ふく風に小家淋しき懸菜哉

はつ雪や一口くはむ老の興
御火燒の暮を待ぬる童哉
親の恩火燵にかくる下着哉
冬がれは日の障なきせうじ哉
簔着ても少はぬるゝ雪吹哉

舟中吟

干て置網にかゝるな濱ちどり
霜解て土つく芝の徑かな
いつの雨敷居にはやし薄ごほり
前髪もとる年並や暦賣
やはらかに老や養ふかはらぶみ
柊さへおほきなさすか玄關前
朝〱や冬菜を洗ふ角田川

惜レ年

さかやきの形直しけり年の暮

初春の賀に

神〱は八隅にふかし内餝
献立や有にまかせて謠ぞめ

人數やそろへばしまる松ばやし
寶引や更るにつけて人のかず
やり羽子に長ばかりの日暮哉
白魚やすゝぐに清き鷺の足
藏開女房の腰に鎰いくつ
初午や幾町〱の人群集

更衣

ことぶきて友も褒けり衣がへ
花けしをやさしく待や賤の家
簗打て水をあやぶむ川邊哉
里の子はのぶるもしらぬ早苗かな

初秋のこゝろを

秋涼し寐間を繕ふ紙の窓
踊ぶりむまれつくなり京女
秋風にまだ聲殘る藪蚊かな
子のちから見むともたする西瓜哉

一夏花摘之句五十餘章寄二路通坊
之勸進一

一解百句は此道にこゝろものゝひろげてまき、又攤(ひろ)げ侍る。纔（わづか）がとしは十四、予がとしのなかばにたらず。春秋の情にかち侍るも、たれか教ぬるか。才拙(さいつたなく)して道に先じ侍れば、何をこたふべくもなし。一解といひ、百句といひ、共に父の志を同じくつとめ、同じくたのしみ侍りぬるは、こゝろざしの孝の類なるべし。猶遠山鳥のしだり尾のながき齡もて、櫻にあそび紅葉にあそぶ契をまつこゝに跋す。

合歡堂沾德書

俳諧連歌勸進始曲水亭

あはれしれ俊乘坊の薬喰　路通
紙子のつぎに國〳〵の衣　曲水
借す事の面白きより金持て　共角
日剃はげたるさかやきの色　里東
關守に狂言見する月の影　芹花
雨かとおもふ露はばらつく　路通
むしの音やわり木積たる軒の下　曲水
洗ふた足袋をぬすまれにけり　共角
山伏の水をひとつともらひよる　里東
よむ顏したる文のかけもの　芹花
戀しりの猶ものよはくとしたけて　路通
羽織出しては又いれて置　曲水
大橋をこさぬ中なれやかた船　共角
茶でもとまらずのど(咽)かはく月　里東
ながき夜にをりはうつ客取込て　芹花
いくらもむしの覗くあぶら火　路通
散花をさつとかけたるゆふだすき　曲水
たこ(凧)よくあげて子に渡すらん　キ角
ぴしよ〳〵と雪間はゆるき日陰にて　里東
隱居屋ひとつすまふ藪醫師　芹花
鼻かめといふさへきかぬ下女が形(なり)　路通
かいつくばふて手のくぼのめし　曲水
つきはづす鼠を見れば無念也　キ角

寐着は曲に腰をうたする　里東
聟にはものいふ事のむづかしき　芹花
御感の時は釣簾まきあげ　路通
くつさめにうちかけしたる朝の月　里東
馬子の千話する身の上の秋　其角
やゝ寒み大肌ぬぎてけはう也　曲水
居風呂桶はうつぶけに干ス　芹花
かたまりて何やら拾ふ雀の子　路通
御輿べやより蛇のつら出す　里東
折花になかば言をかまへたり　其角
息災過て風雅まけぬる　曲水
さしなれていまにはなさぬ長刀　芹花
わらはぬ顔や人くはぬ鬼　筆

路通餞別

花に行何鏡重し頭陀嚢　露沾
虵も胡蝶もすゝむはるの日　路通

暮の月朧に水の皺立て　沾荷
障子細目に亭のともし火　コ谷
讀事は書事よりも面白く　路通
雫にほこる石菖の瓶　露沾
夏陰に磨し刀のさむる間　虚谷
しろきほまれをしいる素麪　沾荷
波の音ねこだに枕そばだてゝ　露沾
蜑の子ながら嶋の巫　路通
女房の手織見せばや書の市　沾可
馬にかざりて名にたてる萩　コ谷
隱遁をおもひ究る宵の露　路通
數よむ閣恭の月のまばゆき　露沾
わさ酒に老たる親を慰めし　コ谷
實植の柿に折つくるころ　沾荷
朝霜につきがねすめる入江寺　露沾
うくも沈むもかろき水鳥　路通
あまた有乳房に寐覺せゝられて　沾荷
なを薄かれと荷をうつ音　コ谷

一方に拜み入たる神心　路通
浴(ゆあみ)に淸き黑髮のしな　露沾
戀佗て凉みながらに庭を見る　コ谷
雨のたもとに拾ふほたる火　沾荷
かはく間を浪にかけほす網の綱　露沾
畑の廣きも瘦てくるしき　路通
たよりなき道は地藏をちからにて　沾荷
まだ野心のうせぬあらうま(荒馬)　コ谷
いく秋か習し事も手に入らず　路通
見捨(し)かたは長崎の月　露沾
頭目は常の隙なき鱸(すずき)釣　コ谷
着なれぬ簑に肌通す雨　沾可
天が下勸進牒に名を遂て　露沾
野も芳しき觀音の慈悲　コ谷
ふくまゝに壓もあくたも花の時　路通
はるにつくらふ鶴の毛衣　沾荷

乙州が江戸へ起(赴)くとき

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁　風羅坊
笠あたらしき春のあけぼの　乙州
雲雀鳴小田の土持ころなれや　珍碩
しとぎ(粢)いはふて下されにけり　素男
片隅に虫齒かゝえて暮の月　乙州
二階の客のたゝれたるあき　風羅坊
はなちやる鶉の跡は見えもせず　素男
苗の葉延のちからなき風　珍碩
發心の初にこゆる鈴鹿やま　風羅坊
内藏頭(くらのかみ)かとよぶ聲はたれ　乙州
卯の刻の箕(き)の手に並ぶ小西方　珍碩
すみきる松のしづかなりけり　素男
荻の札すゝきのふだによみなして　乙州
雀かたよる百舌鳥(もづ)の一こゑ　智月
懷に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　乙州
鑓(やり)の柄に立すがりたるはなのくれ　去來

灰まきちらすからしなのあと　凡兆
はるの日に仕舞てかへる經机　正秀
店屋もの喰供の手がはり　去來
肩重きさがり衣のうすよごれ　探志
戀の作繪つかふまつらせ　其角
しづかなる杉を拜めば三輪の神　路通
出し入やすきはやみちの錢　曲水
まぎれずに返す芝居のたばこ盆　其角
聟の面つる家が淋しき　乙州
樂々とやはら致へて五人口　曲水
よめかぬれども日連（蓮）御書　路通
行月の牛につけたる塩俵　里東
松にすゝきを二方荒神　芹花
畑もの一口なすびもぎとりて　キ角
かりなる物は嶋原の坪　素葉
あそこ爰ぬひなをしたる戀衣　寒水
二番煎じは茶のはながなき　落荷
散花にさそふて見れど誰もこず　路通

しきりに雉子のほろゝうつ朝　荒陰

即席

いかゞ見む麻布の櫻みやこ人　露沾
客に雲雀の鳴あがる庭　乙州
糸遊を池のあまりに水道て　擧白
なかば絶しをつぎし欄干　沾荷
一葉散ほどは柳もすごからず　路通
月出てのちの西のあかるき　筆
いもむしにさはりし足も其儘に　乙州
拂子によらぬ心はかなさ　露沾
わが焼て無理に振舞ふ粥の味　沾荷
此不二山下風京をこゆるか　擧白
垢つかぬまでもうるさき旅衣　路通
津子王丸もなくばかりなり　乙州
窓侘て机つたなき文の數　露沾
かひすくみたる秋の梟　沾荷

あるほどはさがし遊ばむ月の奥〔マヽ〕　學白
是さへ形をかゆる稲むら　路通
哥もなく市へも行ず花盛　沾荷
御地走申女房かひなき　學白
うらまねど幾秋袖のしほからき　乙州
そげたる曲を琴の爪音　露沾
もやうなく只植込の廣き庭　路通
右左には羽織上下　沾荷
懐に艸履かくろひはづかしき　學白
大びやうしなる夕立の空　乙州
鬼百合の落かゝりたる二ッ三ッ　露沾
白髪もすけばこゝろよき雍屋　路通
姫君の躍ならひをかくしけり　沾荷
小野は露けきはるの在郷　學白
かけがねのをのれと落る暮の月　乙州
拍手しきる御ともしの影　露沾
當のなき行脚の事をこしらへて　路通
戀のわらひをこひになき出す　沾荷

前髪の名残も仇にけふが今日　學白
繪草紙賣の歸る道筋　乙州
かたげたる花におほせよ酒やもひ　學白
つばなすみれとおごりたる野邊　路通
星覩りはやきは鵯の羽音かな　肅山
網代の小屋を起す顆　其角
肌あつき夜ながら雨は止ぬらん　路通
松のうすらぐ佐保姫の眉　彫棠
七種にうち出て見よ暮の月　キ角
菓子をくゝりて送る音信　肅山
弓ふせて眉まづいるゝ山おろし　彫棠
なまぐさき香をいとふあま御前　路通
菊かれて佛に寄る姉一門　肅山
似たりといふはくるし柿の名　キ角
いくたりも子ども集て月の影　路通
覗よさうな竹拊子なり　彫棠

宿札に假名付したるとはれ良　キ角
　戀にかゝりて主とらぬほど　肅山
夕間ぐれ又結なをす髮の曲　彫棠
　船路せはしき伊よの湯の山　路通
彌生には堂より西の花ざかり　肅山
　はるとも見えず鐘撞の俗　其角
朝寐する人も雲雀にさそはれて　路通
　着心のよき羽織うれしき　彫棠
炉路笠をさはらぬ様に片ひかき　キ角
　置わすれしをよぶ笛の主　肅山
行燈のふすぼりぬればたど〳〵し　彫棠
　宗祇も老て旅ぞものうき　路通
薄綿も重ければとて更衣　肅山
　牡丹のかずは凡大名　キ角
唐様は氣を盡す程よめ衆し　路通
　盗出したる德利こそあれ　彫棠
木枕の中にものなる夜半の月　キ角
　もどかしやとて砧敎ゆる　肅山
背を腹にいらへて逆し萩薄　彫棠
　口を押へて鳴出さぬこひ　路通
醉ごゝろ亦も女房に恥かしく　肅山
　玉子とるには鳥も寐てゐる　キ角
下枝は見られぬ花の懸作　路通
　やうじ落たる水の山吹　彫棠

壁隣にむかへられ古風を起す

花に香のしたしみふかし藥ひとへ　居文
　藏のならびに巣立すゞめ子　枳風
はる風は湊の市を知行して　扇角
　さもなき橋にふるき名を聞　路通
秋の月原のあそびをふけらかす　文鱗
　見世の座敷のあひの菊畑　キ角
朝夕に青柚色そふ酒の中　枳風
　なれざる妻の心さけすむ　扇角
跡先のちがふは夢も笑しくて　路通

つながぬ船のかゝる生涯　居文
息災で貧しき者にあやからん　キ角
一家の中へ出る椀飯　枳風
しほらしく舞にも作る百衙　扇角
繪もむせぶほど霞みたる紙　路通
住吉の岸の姫松橋ぞよき　キ角
わづかの烟たつる雜魚鍋　文鱗
月の夜に寢かぬる鳥飛もせて　路通
たがわすれ艸うちまきし露　居文
秋霧は西施を見たる人の情　キ角
わかるゝ迄に盡す物數寄　文鱗
はなむけの無垢に色かせ鏡山　扇角
野續き廣き松のはへ際　路通
肱枕あくびよりまづ吹嵐　居文
幾日つなぎて米うれぬふね　枳風
蠣むきのからはをのれが家のまへ　文鱗
月にこゝろをあらふさかづき　扇角
ながき夜をわかき夫婦の中よかれ　枳風
新機時をつくろはぬ形　文鱗
欽明のむかしは金の湧けるや　居文
經書の訓をくちうつしする　キ角
竹するゝ響を朝の氣色にて　路通
佛に我か飯わくる僧　扇角
よぶときは必ず出る蟹の穴　文鱗
小き國に二度の大功　居文
花見して人のうき世をわかやかせ　キ角
春を淨めて常きかぬ香　枳風

行脚急なるよし聞て、暇乞のこゝろにとりあへず

淸うして和する日ざしや旅心　由之
蛙涼しきぎぼうしの花　路通
峯の松船をちいさく見おろして　枳風
茶碗にかぎるむらなみの酒　仝峯
三ヶ月も明日はかはらぬ宿の緣　湖心

露に撫たるとつなぎの馬　由之
蝸牛這ふたる跡の秋淋し　路通
石に坐してもいつかさとらん　湖心
あはれさはむかしの妻の影法師　枳風
ふるき枕のかろき茶のから　路通
煤はかぬ隣は火燵にぎはひて　仝峯
干菓子まじりの雪の喰かけ　由之
とゞまらば都のやまに落つらん　湖心
日をわすれずに名月をしれ　枳風
一畝ほどまきたる畑も秋の來て　路通
土産につゝまぬ墓の草の實　由之
あやかれよ先祖の花の香をとめて　湖心
筋にしるき長官が門　仝峰
女連春はいとまぞみの尾張　枳風
たれが情にみだす芥子銀　路通
ふり袖も墨の衣は色うすき　仝峰
奥にめさるゝけふの術なさ　枳風
鼻紙をくはゆるチンを追かくる　由之
月にわすれてあらす石竹　湖心
雨降れど三里ばかりは灸をして　路通
うたをそろへし油屋の臼　仝峯
鼬出て鼠は見えず朝朗　枳風
足をくふとてなかすわらんぢ　湖心
きたなくばいづれそだゝぬ痩姿　由之
むねのおもひを口すゝぐ鶴　仝躰
かくす事砂に書ては打消し　路通
波の立るのいく年季もの　由之
咲花に納所の坊は垣結て　仝峰
ふみてもひろへ此ふきのとう　枳風
野邊霞む御幸の跡を拜けり　湖心
初音まぎれぬけふの諸鳥　筆

燭　寸

此土手の筋や柳の片折戸、　岩泉
くゞまりゐるは田にしとる賤　岩翁

遲き日のあかきに鶴の首のべて　手竿
氣まゝにやれば旅もなぐさみ　路通
商の有國〱はすなをなり　横几
皷の師さへもとはさぶらひ　沾徳
十六夜の月まで酒の坐をかへず　遠水
早稲米のせて置も孝行　尺中
秋雨に居風呂立て僧を待　岩翁
掃し疊に猫のあしあと　岩泉
うか〱と後の朝にうちふして　路通
妹が碁石の袖につめたき　手竿
燭とりて又ひとしきり牡丹見む　沾徳
魚類をたちてためす夏の中　横几
末の子に有し家督は讓けり　尺中
人のこゝろをうかすいとたけ　遠水
夕月に見れば友寐の翠簾すきて　岩泉
生身魂まで結ぶかけ帶　岩翁
新米をかすより下女の手はあれし　手竿
つれをもとめぬ山科の隅　路通

花あれば參もおほし寺の庭　横几
若鮎までは札たてぬ川　沾徳
春風にまとひ寄たる橋のごみ　遠水
社さびぬる國替のあと　尺中
半分は作をしても暮す醫師　岩翁
寺領の中に鳥の運上　手竿
片言もつたへにのこす三の戸　路通
岩手のやまを横に見る海　岩泉
生延てとし〱問る雪の沙汰　沾徳
穉れなきとて用ふ鈴羊　横几
牢人はよめぬ書物を持せたる　尺中
村の庄屋としる開き門　遠水
名木の根はすき殘す畠中　手竿
ふえたる鮒に水の益池　岩翁
急雨の月に晴たる砂の跡　岩泉
柴胡の花を子共ばひあふ　筆
躬落せる雁に夷と身を耻て　沾徳
御所つッくらん大工なき浦　路通

笘敷て臥すに寐にくき船の底　横几
　愛のありても子はつれぬ旅　尺中
武藏には聞つたえたる六阿みだ　遠水
　地金づしき鎌倉の鍛冶　手竿
世を遁て煤拂日も忘れけり　岩翁
　片器にや書ん大小の額　岩泉
いたづらに寐ては暮らさず觀世捻　路通
　月見と親も酒進む慈悲　沾德
東堂と成てぞ秋もゆたかなる　尺中
　燕かへれと巣をば崩さじ　横几
花紅葉小荷駄にさせる下座敷　遠水
　いくとせつよき垣にそふまつ　筆

旅立ける日も吟身やむごさなふして

いでや空うの花ほどはくもる共　路通
　句の上おもへはる〴〵の旅　其角
似合鋪親の帷子身に懸て　普船
　油桶には荷ふ夕月　仙化
午町の車休むる秋の風　溪石
　下らぬうちと鯷つけこむ　路通
手の寐はいやしく喰をうらやみて　キ角
　あら湯にはまづ他をゐらする　普船
看經に中かゝれる夜の雨　仙化
　碇靜かに船ゆする灘　溪石
髮結ぬ女は無下に見下され　路通
　御旅の店を前渡りする　キ角
扇折り月にせはしき槌の音　普船
　小鯵に水をかゆる堀井戸　仙化
朝時にははづるゝとても場を踏　溪石
　老ても鉢の目斗はたのまず　路通
花盛猫は身持になりにけり　キ角
　春はいつもの借座敷する　普船
年頭にさゝれて下る知行寺　仙化
　力をくれて落す前髮　溪石
うつり香も黑き衣裳はめにたゝぬ　路通

綱手をかへる遊人のかず　キ角
飛石も樹も庵に影を置　普船
借藏たつる老のたのしみ　仙化
湖は不斷たしなむ鮒の鮓　溪石
母にはうとき三井の小法師　路通
禁中の御能を見るは夜をこめて　キ角
藥施す霍亂のため　普船
夕月に戶渡りて行押送り　仙化
淡路見かけて須磨およぐ鹿　溪石
雨降は塩屋にはこぶ薙のから　路通
敷物とりに歸るかごかき　キ角
抱キついつ袖をひかれつ市の中　普船
湯帽子かぶる顏の黑さよ　仙化
花に醉て餌も喰はず朽木盆　溪石
十日過ても笑ふ山科　普船

誹諧の面目何と〱さとらん。なにと〱悟らん。はいかいの面目はまがりなりにやつてをけ。一句勸進の功德は、むねのうちの煩惱を舌の先にはらつて、卽心卽佛としるべし。句作のよしあしはまがりなりにやつてをけ。げにもさうよ。やよげにもさうよの。

元祿四年の春　狂而堂

勸進牒初卷於武江撰

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

いつを昔（むかし）

誹番匠

其角撰

いつを昔

定

一俳諧に力なき輩、此集のうちへ、かたく入べからざるもの也。

月　日　去來校

十題百句

後京極殿慈鎭和尚諸番匠このかたの反故どもさらえこみだりに書ス

一天象

春も來ぬ南の譽レ星の道　露沾

風に二日の月の吹ちるか　荷兮

旅行

あか〳〵と日は難面（つれなく）も秋の風　翁

風聲は天地の語なりさあるを

天地の咄とぎるゝ時雨かな　湖春

春の雪雨がちに見ゆる哀也　加州一笑

十月やいづく〳〵雲のくろみゆく　幽也

武士の聞なぐさまんあられ哉　伏見好春

宵闇や霧のけしきに鳴海潟　其角

殘れども薫リ分たるあらし哉　由之

あの雲は稻妻を待たより哉　翁

二地儀

殘ル雪比良の谷〳〵おぼえけり　膳所 正秀
肌のよき石にねむらん花の山　僧 路通
面白く汐干の舟を捨にけり　八橋
朝櫻よし野深しや夕ざくら　京 去來

かまくらにあそびて

松原やたま〳〵あるが山ざくら　枳風

美濃に入て

水札鳴て遠近くるゝ流哉　景道
山陰や身を養はん瓜畠　翁

初下向

富士の山師走ともなきすがた哉　湖春
馬人や川瀬にあふの櫻麻　仝峯

加務にて

わせの香や分入ル右はありそうみ　翁

三居所

朝ざくら御門ほのかに明る音　伊勢 柴雫
松かざり伊勢が家買人はたれ　其角
殿つくり慰みにうつ砧哉　加賀 一笑
垣根破るその若竹をかきね哉　素堂
朝るする障子のひまや秋の風　巴風
鷄のめおと寒しや雪のくれ　文鱗
十月や草まだ見ゆる庭の隅　尙白
名月を驛にみばや酒ばやし　仝峯
一木づゝとはれぬ馬場の櫻哉　春雷

牧方の宿にして

馬士に貧しきはなしゆきの昏　其角

四 草部

つく〳〵しけふ此比の日なた哉　裸虫

楊子に題す

いつの時人に落けん白牡丹　平田 李由
けしちりてさゞらけのなき句哉　千那
川船の笘にはふかぬ菖かな　溪石
おもだかや弓矢たてたる水の花　素堂
河骨や終にひらはぬ花盛　仝

嵐雪が忌がきしに、さんのぞみければ

蕣は下手のかくさへ哀也　翁

元服して
前髪も後の花なし年の菊　山川
いらごには戎こそすめ水仙花　友五
枯芦に氷をのこす夜汐哉　苔翠

五　木部
就中やしほのもゆる木芽哉　露沾
梅に來て各んめの匂かな　路通

旅思
うつの山折かけてある櫻哉　美ノ芦夕
其枝かこれかといへばちる椿　李下
水音の野中さびしき柳哉　珍夕
詠行名主いくたり村樗　大津正義
柚の花のその中の其匂哉　普船
やどり木や秋にもかれず瓦葺　東順

芭蕉翁の舊艸
しばらくもやさし枯木の夕附日　其角

遊三園城寺一
からびたる三井の二王や冬木立　仝

六　鳥部
子の顔に燕泥む餌はみ哉　山川
菅笠や吹上らるゝ諸日雲雀ばり　擧白

重三
囀やことに桃花の鶏の聲　其角
若鳥やあやなきねにもホトヽギス　仝
龜の背に漂ふ鳰の浮巣哉　肅山
おもだかに鷺の來ぬ日ぞなかりけり　櫻塚西吟

けうがる我が旅すがた
木兎の獨わらひや秋の昏　其角
腹のたつ人にみせばや池の鴛　野水
子と臥て尾をかられたる雉子哉　山川
冬の日にほしてはぬらす鵜羽哉　友五

七　獸部
獅子舞を見て感あり
蝶しるや獅子はけものゝ君也と　其角
猫の戀鼠もとらずあはれ也　琴風
春雨や庭に鼬の子をはこぶ　友五

山里の砧やさむく啼狐　是吉

夕立やはなれて牛の門ちがへ　李下

爪髮も旅の姿や駒迎　荷兮

艸庵

人うとし雉をとがむる犬の聲　其角

山ざくら猿を放して梢がな　仝

山家へ申つかはし侍る

常住をふるまひ給へ鹿の聲　彫棠

居をうつして

鼠にもやがてなじまん冬籠　其角

八　虫部

蝌子も命を游ぐ二三月　京　觀水

我戀は花ちるあとの毛虫哉　う齋

頼みてや竹に生るゝかたつぶり　キ角

烏ゆく蚊はいづくより昏の聲　仝

艸の葉を落るより飛螢哉　翁

須臾は淋しからまじ蟬の聲　松風

蟷螂の尋常に死ヌ枯野哉　其角

百とせの後なき人や冬の蝿　伊勢　肅山

力なき蝶にかさなる落葉哉　巴風

うづみ火の南をきけや蛬　其角

九　神祇

二見の圖を拜み侍りて

うたがふな潮の花も浦の春　翁

女子の疱瘡しけるきげんさりて

餅の粉や花雪うつる神の咲　其角

暑日の影もいとはぬ祭哉　龜翁

老つゝも早乙女狂ふ御田哉　景道

涼しさや海すこしある戎堂　肅山

野社をつみかくしたる刈穗哉　山川

十月もいなぬや是の山の神　德元

水札鳴て神杉すごき流哉　尙白

元日は法師目なれぬ神代哉　溪石

遷宮の良材ども拜みて
大工達の久しき顔や神の秋　其角

十釋教

明星悟心
我日には師走八日の空寒し　杉風
尼の子の尼に成たるねはん（涅槃）哉　彫棠
疊迄古寺やさし軒のんめ　巴風
灌佛によめのくれたる袷かな　景道
禪門の田哥諷はぬ山田哉　千那
同じ年の人も有けり玉祭　雲口

寄二幻吁長老一
老僧の笋をかむなみだかな　其角

寒山の讃
寐る恩に門の雪はく乞食哉　仝

遊二清水寺一
人の世やのどかなる日の寺林　仝

布袋の讃
大虚涼し禪師の指のゆく所　仝

交題百句

一感心　次郎といふをつれてつまの夜咄に行
我子なら供にはやらじ夜の雪　加生つま　とめ
うりたさにつかふて見する團哉　其角奴　是吉
扇とつて九郎が暮の仕舞哉　幽也

寺前の輿もさりあへず
小僧ども庭に出けり罌粟（ケシ）坊主　少年　角上
山陰や清水たる音あはれ也　柴栗奴　二七

尼になりて太秦（うづまさ）にすみけるころ
花をやるさくらや夢のうき世者　かいはらの　捨

松島行脚の餞別
月花を雨の袂の色香哉　露沾
蛙のからに身を入る聲　翁

辭世
もえやすく又消やすき螢哉　去來妹　千子

秋の暮肥たるおとこ通りけり　尚白奴 與三
艸臥のやまん二日ぞ花のはる　仙化奴 吼雲

二 魚部

鮒の子や何をふくれて流レ行　八橋
行水やそのあとつかむ柳鮠　遠水

湖舟はなんけにさけたうべて

貫之の鮎のすしくふ別レ哉　其角
水むすぶ影飛こゆるうぐゐ哉　普船
花の雨鯛に塩するゆふべ哉　仙化
ひく汐につれておかしき海鼠哉　莫陵
若竹の葉にあたらしき鱸哉　百里
入相の船の殘るやはぜ鱠　友五
鰹賣いかなる人を醉すらん　翁
左迁に鯖備へける文月哉　肅山

三 旅　越人を供して木曾の月見し比

俤や姨ひとり泣月の友　翁
いざよひもまだ更科の郡哉　同

夜過レ山　沖津にて

鈴虫や松明さきへ荷はせて　其角
高燈籠消て迷はん泊舟　柴雫
日にやけて古き袷も似合けり　湖水
夏艸の我長かくす晴かな　路通

さらしなには翁の句のみ、吟がたくて

霧はれて棧は目も塞がれず　尾陽 越人
馬の陰おりても寒き野原哉　珍夕
行ぬけて家珍しやさくら麻　加賀 一笑

伏見西蓮寺興行

はつゆきに人ものぼるかふしみ船　其角

四 戀

朝ざくら寐髮にかゝる匂かな　山川
朝ざくらうつくし過てすさまじや　雨等
青柳に妻もたぬ人のてぶり哉　卜女

かつしかの眞間にて

早乙女に足あらはするうれしさよ　其角
扇折子に恥しきけはひかな　倘白
かくせとの文があやしや扇折　枳風
旅人に早乙女くるふ尻目かな　う齊
一まはり待人おそき躍かな　倘白
星合や殿の御入の鈴の音　氷花
すゝ拂の夜は猶白しよめの顏　釋行舟

五 述懐

翁に供して高野にまふでけるころ

散花にたぶさ耻けり奥の院　杜國
二星や獨法師は寢もあかず　路通
此月に無藝を耻ん友もがな　露沾
あそぶ事三十迄ぞ夜半の秋　八橋
古足袋の四十に足をふみ込ぬ　嵐雪

とにかくにもてあつかふはこゝろなりけりと　光俊

山陵(カラ)の壹歩をまはす師走哉　其角
つぎはぎて彌(いや)寒し厚衾　倘白

あつぶすま夏の酒債(サカテ)と諷ひけり　千那
火桶抱てをとがい臍(ホソ)をかくしける　路通

番匠の中に七字なかれこれさして

かた炭の崩れ哉身のなる行衛　湖春

六 寒暑

梅探る手は霜やけも薫(かんば)しゝ　山川
凩やめお(女夫)としてつる窓の菰　比竹
雪は來でから風きほふ空凄(スゴ)し　曾良
かぶり着てあたまもしれじあつ衾　野水
親心子のふすかたやあつぶすま　坂本露意
暑き日も樅(モミ)の木間の夕日かな　素堂
水飯にかはかぬ瓜のしづ(雫)く哉　其角
なぐさみも扇くらぶる斗(ばかり)也　杉風
扇折いかに持たる汗ぬぐひ　千那
年はまだ晩田の稻のあつさ哉　溪石

七 賞心　東坡文集

春の夜の人家に誇るしはす哉　美濃荊口

大福は年と友なるあそび哉　枳風
彌生三日枕負子のすがた哉　尙白
居並びて土に書をなす凉哉　三翁
船かけて水茶たてたる夕べかな　巴風
欄(おばしま)の琵琶に撥なし蟬の聲　薫風
名月や山も思はず海も見ず　去來
はぜ釣を笑はぬものは鷗かな　由之
初雪や人よりさきに物云ん　淀 三ヶ

山中子供とあそびてと有
雪の中に兎の皮の髭作れ　翁

八 酒

いざ汲ん年の酒屋のうはだまり　其角
その花にあるきながらや小盞　仝
花に風かろくきてふけ酒の泡　嵐雪
酒うけて枝ゆすらするさくら哉　八橋

淸賓の地をしめて
觀瀾亭と名付らる
忘れては獵師に酒を涼み哉　彫棠

草庵薄酒の興、
友五に對す
かたつぶり酒の肴に這せけり　其角
名月や居酒のまんと頰かぶり　仝

荷兮が奴、何となく
たんざくほしがれば
艶(えち)にはたが敎へける酒のかん　仝
酒やよき雪ふみたてし門の前　苔翠
大年やあすのむ樽の口あけん　峽水

九 十月廿日 嵯峨遊吟
さが山やみやこは酒の夷講　其角
池(ひろさは)のつら雲の氷るやあたご山　去來
木(の丶みや)がらしに入相の鐘をすゞしめよ　加生
淸瀧や澁柿さはす我ー意　角
臨川寺
風の地迄落さぬしぐれかな　來
草は皆女いじけぬさがの町　生

野の宮のやぶ陰に
わびしき槌の音しけるを
鍬鍛冶に隱士尋ねん畑の霜　其角

大に里　冬枯の木間のぞかん賣屋敷　去來

うつりに　みやこ路や初夜に過たる艳狩　加生

同　縫かゝる紙子にいはん嵯峨の冬　角

加生のつまのぬはれけるなり

湖上吟　十月二日膳所水樓にて

帆かけぶねあれやかた田の冬げしき　仝

此月の時雨を見せよにほの海　曲水

晝中やしぐれ似合ぬ鳰のうみ　素葉

千那に供して父の古郷、堅田の寺へさぶらひけるとて

婆に逢にかゝる命や勢田の霜　其角

湖を屋根から見せんむらしぐれ　尙白

よき日和に月のけしきや村千鳥　角

蜑のかるかぶ菜おかしやみるめなき　同

霜月下の七日
尙白亭　醉文枕

闇にとて雪待得たる小舟哉　尙白

橋下寒きともし火の筋　加生

茶師の藏梢〳〵にかさなりて　其角

次

ゆきの日や船頭どのゝ顏の色　仝

高根のあらし魦かたまる　白

さゞれふむ石に踵の洗はれて　生

亦

ひとつ松この所より浦の雪　生

鴨こす峰を入かたの月　角

鈴の聲片原町に馬次で　白

續みなしぐりの撰びにもれ侍りしに、首尾年ありて、此集の人足にくはゝり侍る。

鴨啼や弓矢を捨て十餘年　去來

及ばほそらぬ霜の小刀　嵐雪

はら〳〵と栗やく柴の圓居して　其角

影くるはする龍骨車の月　來

きり〳〵す盃も游ぐ山水に　雪

盞付ヶて鶴はなちやる　角

うれしくも顔見あはする雁の聞　來
　また手枕を入かへて寝る
旅衣またども馬の出がたき
　留守おほかりし里の麥刈
誰が子ぞ織立置雨の中
　平家の陣を笑ふ浦人
船かけてとまり〳〵の玉祭　角
　島の中にすめる月影　雪
いきて世に取後れたる老相撲　角
　元(モト)よし原のなさけ語らん　雪
花鳥に夫婦出たつ花ざかり　角
　若餅つくと家子(けし)に告こす　雪
荒神(くわうじん)に繪馬かけたる年の棚　同
　うつばり(梁)かくす關札の數　角
よめ娘見分る戀のいちはやき　雪
　小原黒木ぞ身をふすべける　角
味噌さます草のさむしろ敷忍び　雪
　雪あそびてん寺の入あひ　角

八景の月と雁とを見盡して　來
　越のきぬたのいとあはれ也
狩倉にもよほされたる怀の空
　贈(ヲクリ)りものには酒ぞたうとき
今こんと云しばかりに床とりて　雪
　火燵を蹴(ケ)出す思ひあまりか　角
手形かく戀の限ッと成にけり　同
　にくまれつゝも宮仕へする　來
顔なをし賑(ニギ)はふ方のめでたきに　同
　長(タケ)をくらべてむすぶ水引　雪
花のもとに各當座つかまつり　角
　柳にうかむ絃管の舟　雪

去來十四句　嵐雪十一句
其角十一句

兩吟おもひたちける人の、いさゝまなくてやみにければ、心ざしゆるしがたくて、獨酌の興になしぬ。

下臥(したぶし)につかみ分ばや糸櫻　巴風

犬もこてふも一口の友　共角
橋造る小屋のかまへの長閑にて　仝
藪のこなたへ廻る駕籠かき　風
菊は黄に只しめりたる月の色　仝
鼻かうだ手を亦秋の水　角
小坊主に名を案ずればきりぎりす
火打あつめて紙子うれしく
いざ嵯峨へざうり一足もらひける
何を目あてに此比の禪
なぐさみに喧嘩をするか渡し守
杜秤にかゝりて重き身をしる
衰へも關寺ゆるす年なれや
安養界を斯ふるしむ
板疊階子の下のすゞしきに
蚊やり火たてゝ姑いぶせき
泣程にからき花さくたうがらし
月の露なる白黑の胡麻
吹からに一遍どをり秋の風
物すさまじき峯入の供
漸と米とゝのゆるくれの鐘
又たべ醉て寐忙たる顔
ほとゝぎす點せがまるゝ片心
鑓もたせたる今のまろうど
粧はすに娘が常をみせにけり
うつり香せむる袖の蛇
悪心佛法の力を頼む哉
道なる屍ありがたやそも
こえこしの越の白山山いくつ
物あきなふも水からの聲

或お寺にねう比丘さて、こしのぬけたるおはしけり。住持の深くいさをしみ申されしに、五の德なかんず。

能睡　あたゝかな所嗅出す眠哉
能忘　おもへ春七年養た夜の雨
能捕　鶏かと鼠の味を問てまし

能狂　かげろふと頬にくるふ心哉

能耽　髭のあるめをと珍し花心

舍利講拜み侍りしに、十如是の心をおもひよせて、この心に叶ふべきを拾ひ出侍る。

相　稻妻や思ふもいふもまぎるゝも　其角

性　朝櫻つとめぬとても佛哉　由之

体　鬼灯のからをみつゝや蟬のから　其角

力　すべらずに筏さす見よ雪の水　仝

作　秋の田やはかり盡して稗二俵　尙白

因　弓になる笋は別のそだち哉　去來

緣　山臥の鳩ふく方に入にけり　肅山

果　二子山二子ひろはん栗のから　其角

報　去年の蔓に朝顏かゝるかきね哉　素堂

本末究竟等

うたゝねにはかなき炭のくづれ哉　戰竹

內秘菩薩行

夕立にふみなかへしそ渡舟　千那

同講の心を　心の月をあらはして鷲の御山の跡を尋ん

新月やいつを昔の男山　其角

鉢たゝき聞にさて、翁のやどり申されしに、はちたゝきまいらざりければ

箒こせまねてもみせん鉢扣　去來

明けてまいりたれば

長嘯の墓もめぐるかはち敲　翁

そのふるき瓢箪みせよ鉢たゝき　去來

世中はこれより寒しはちたゝき　尙白

こと〳〵くね覺はやらじ鉢扣　其角

艸庵の蕉子をうへ分たれば、秋風を得たるに

星合の影やばせをの先戰ぎ　普船

節〳〵紋に御簾のはつ月　其角

十二三あらそふ雁の數見えて　李下

起ては倒れ下戶をうつ雪　船

川沖や舟に出ぬ日の風の音　角
　こゝらは魚の油とる家　下
蛇のおそろしげなき八重葎　船
　いつしか野らに我猫の墓　角
中〳〵に幼事せむ春の雨　下
　花もかすみもシテ柱より　船
影向の松のひまなき若緑　角
　かなしけれども子を捨る哥　下
殊更にけはひ出たる薄被　船
　狐だまして物おもふ躰　角
駒とめていつもの酒屋面白し　下
　山〳〵晴よ比良の浮雲　船
鎧着て月みたる袖の朝朗　角
　胸の秋すむ其身僧正　下
露霜やげにあかゞねの大佛　船
　穴井の渦を覗く葉藁　角
とかくして女を肩に負て行　下
　贄にかはれてのこし置文　船

一筋に東とたのむ日の光　角
　船輪にみえて輕くひたつ　下
浦風にくろむ柏槇の夏木立　船
　坐禪の影をうつすから絹　角
假枕南無と狂ふてかろき世に　下
　足を空なる淺草の市　船
宜しきは唯秋ノ月暮ノ雪　角
　あるじも君にかなふ献立　下
注連の内比丘山伏もゆるす也　船
　物がたりしてゆめを圓する　角
家の紋縁の調度に耻しく　下
　さも思ひしよ憎き鄙ぶり　船
年寄はなぐさめやすき花の陰　角
　片枝は棚にもるゝ白藤　下

雨吟すゝめられて

角なうて男也けり鹿の友　溪石

さくらあきなふ岡のト垣　其角
白つゝじはづれぬ雪の散消て　仝
しばし帆おろせ島の岩組　石
水や空取はなれたる月の影　同
四の鈴ふく檐の秋風　角
蔦紅葉魔所にも遊ぶ我意　同
木葉こぼれて何たきし釜　石
犀川の渡りもよほす莚張ッ　同
上戸は得たる酒の盛やう　角
髪は兒法師と老て見ぐるしき　仝
ゆめにもかよふ物の怪の汗　石
帳も簾も只假葺の耻かくし　同
鏡の田鶴か和哥の夕月　角
雲霧の八百町坂にさしかゝり　仝
とぼしき鉢のあら籾を噛　石
能馬を花に引せて口惜き　角
何山吹に地下の歌よみ　仝
汲よせていと冴かへる六の水　石
美人なれども寐顔まふえず　同
三世たのむ信者といはれ名に立て　角
かいらぎさした年も悔らん　仝
糸花や心も染ぬ水あふひ　石
すかせば笑ふ枕敷屋とれ　同
生身玉かたい座敷にかしこまり　角
感狀わたす月のかゞやき　仝
村薄鴻の瀨ぶみにうち入て　石
漕行舟を安房の檀方　同
あれ／＼と龍の尾まとふ雲早み　角
幟の音のいさむ増綱　石
郭公五壇長屋の幾茂り　石
合羽そろひて足かろき雨　角
ありがたき太太打てかへる也　仝
あさけは過ぬ鯛の燒物　石
花主もお酌に立て花を折　同
こてふに似たり眠るくせもの　角

溪石十八句　其角十八句

申習ひに

蜆とり早苗にならぶ女哉　女 秋色

初露に風さへしめる扇哉　同

ひとり居やしがみ火鉢も夜半の伽　同

其角撰集して誹番匠と名づく。是に予が跋を乞。予おもふにその名たること誠に故有。史記の滑稽は誹諧也と註せしを基にて、貫之の古今集に誹の字となせり。是を造作の初として、世々此道の好士、匠をめぐらしてより、既、教誡の規矩備はれり。近くは山崎の宗鑑・いせの守武・飛彈・竹田の高名をふるひしに、又花崎の翁といふ人有けり。誹諧に妙なる人にて、かの宗鑑が犬つくばに根次して、淀河・油糟と名付、世に道をたてひろげて、哥林に材を求め、詩海に桴うかめし程に、心詞削るに新しく、磨くに光あり。すべて今、我やまとの國に、道の工と名を得たるものあまたあるは、皆その弟子、孫弟子、かつは彦弟子にて、其かね正しく直なりけらし。さるを中比、守武が千句のあら削なる風にならつて、一句木に竹をつぎて、物數奇とするたぐひありけるを、今めかしきに目うつりて、悦ぶ人多くものせしかば、此道かたへは破損に及びしなり。是大匠の斧をとれば、必足きるもの丶たぐひ成べし。しかはあれど今の代の人、もとより安くして、以テたのしむ人の心をたねとし侍れば、終に作り出せる詞も正しく成

て、亦正風躰の骨髓あらはれて侍るならしなど、筆にまかせてかく所に、其角云、今、予が俳番匠は、其道といひ風體といふ沙汰にあらず。一句は詞を以て作りたつるに、其同じ詞のあらぬ姿にかはる所、これ番匠たるものゝ器量のいたす所にあらずや。よりて五字を宗(ウツベリ)とし、七字を桷(タルキ)として、人々にあらんに、これが上を作り添、下をつぎ合せ、中を切くはせなど、その〳〵其はたらき有て一句となす手ぎは、彼薄櫨(ハクロ)侏儒(シュ)その宜きを得て、宮室なると似たり。されば此集にをのがさま〴〵の細工を顯はし、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて撰しといへば、予曰、善哉。古人の心に通ず。基俊明臣、哥をよまんと思はゞ此道を深くすべし。詮ずる所詞によりて其心を作るべし。いはゞよき詞もなく、わろき詞もなし、只つゞけがらにて、善惡は有べきなりとの給へり。爲家卿は、歌の姿のこと、詞たしかに云下しきよげなるは、姿のよき也、同風情なれど、わろくつゞけつれば、あはれよかりぬべき材木を、あたら事とありしとかや。是歌はんさうならずや、匠氏の功に比して俳諧を道びくこと、韓氏が學をすゝめ、管子が道をとぐ、まことにためしなきにあらずといひて止ぬ。

俳諧堂淵春書

元祿三歲南星和日

京寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

華摘

上・下

其角撰

花つみ　上卷

一燈禮　其角　述

元祿三年の事にや。母の寺に詣まかりしに、四年過つる春秋も、悲しびをもよほすかた多かりければ、思ひを是によせて、心ざしを手向侍りしより、彼、祇公の一とせの日次を、發句つかうまつれりし海山の情、雲水のあはれをも、轉法輪讃佛乘の道に入とのみおもひなし給ひけん。いざ我心、朝夕の人のすくなき折〳〵、聊ものにかきつく、一夏百句にみちたれば、花摘と名付侍る也。その日・其夜の見聞の句〻、結緣として予が句の下にこれをとりなしつ〻、見ん人〻のにぎはひと成ぬ。高位高德・師弟親疎をわかつ事なきは日記なれば也。

八日　上行寺

灌佛や墓にむかへる獨言

歸寺さぶらひける
三吟に

身にとらばあな卯花や母の寺　彫棠

九日

むら雨や驪山を名にしふかみ艸　角

偕釣雪がかたりけるに

此里に后ますべし桐の花　羽黒 露丸

十日　宗竹のもとへ、博多はかたより文まいりたり。途りものやさしかりければ、ぬしにかはりて申侍る。

生の松いかに忘れん汗拭　角

十一日　明がたに啼すてし
一聲を聞て

郭公中入までの芭蕉哉　同

三月十一日より万日の念佛えかうすゝめけるに、くんしゅ一向のこゝろを

さりて

山吹の色より外の廻向哉　清水寺 行舟

非情を悟る春の松風　僧 幽水

十二日 東叡山院

ゆくも來も二ツにかぎる蝶見えて

僧正の青きひとへや若楓　角

十三日

けしの花朝精進の凋れかな　同

十四日 淺草川逍遊

富士行や網代に火なき夜の小屋　角

十五日 雨

紙合羽かろしやうき世夏念佛　同

十六日 丹羽左京のかうのとの

ゆゝしかりける參勤を

黒牡丹ねるやねりその大鳥毛　同

十七日 ある人の愛子に

ねだり申されて

郭公織そめよとすゝめけり　同

つゝじの名を

底白に紅粉はきのこすつゝじ哉　女 秋色

山櫻實をもてはやす鳥もなし　彫棠

十八日 雨

白露を石菖に持ッ價かな　角

十九日 自愧

夜あるきを母寐ざりけるくゐな哉　同

自棄

下帶や蚊屋取出ス朝より　土田 玄素

辭世

夢なれや花は昨日けふの風　由良 正春

廿日

身にからむ單羽織もうき世哉　角

廿一日 射者中突者勝

蝿打よ何れにあたる點心　同

廣庭にゆたかにひらく牡丹哉　尼 智月

妻戀は人やとがめん寺の猫　同

葬や盛久しき種おろし　女 さの

廿二日 佛骨表

しばらくは蠅を打けりかんたいし（韓退之） 角

廿三日 中の日さて蚊屋まいりたり

夜早ねん帋帳に風を入る音 同

伊勢より

もたれたるみやげに

かゝれたり。

我妻の汗に成たるもめんかな 久居 柴雫

物かける扇は見たし渡舟 揚水

縄さばく心も常かうがひ（鵜飼）ぶね 仝峯

閑居

うちつけにおもひやいづとふるさ

との忍ぶ草にてすれる也けり

敦忠のうたにや。

我やどは何をしのぶの摺燧（ヒウチ） 卜宅

山焼て峯の松見る曇哉 伊賀 魚口

心よくあられやくゞる冬木立 同

桃の花折でやはなす犬の聲 同 野狐

曇る日を詠る梅の盛哉 同 知津

廿四日 宗長の句をさりて

橘の一ッ二ッは蚊もせゝれ 角

花すきける人の一ふさを、うつは

に入て送られしに

牡丹芳水につゝめる句哉 僧 蓮芰

廿五日 奉納

から衣御（ミ）影やかけて杜若 角

一時も今この卯月價なし 由水

卯庵晝臥

蚊屋は此庵のうちの蓬かな 琴風

庖丁が牛何さゝく

きうくつに鰹をたゝむ主かな 百里

傾城や傾城を見る夕涼 同

廿六日 會盟

交のさめて亦よし夏料理 角

廿七日

短夜や朝日待間の納屋（ナヤ）の聲 同

膳所（ゼゼ）へゆく人に

獺（カハウソ）の祭見て來よ瀬田のおく 翁

廿八日 ある人の別墅にて

内川や鴫のうき巣に鳴蛙　　角

此日閑に飽て翁行脚の折ふし、羽黒山於本坊興行の哥仙をひらく。
元祿二年六月にや。

有難や雪をめぐらす風の音　　翁
　住ほど人のむすぶ夏草　　露丸
川舟の綱に螢を引立て　　曾良
　鵜の飛あとに見ゆる三日月　　釣雪
澄水に天をうかべる棟の塔　　殊妙
　北も南もきぬた打けり　　梨水
眠ては晝の陰に笠ぬぎて　　釣雪
　百里の旅を木曾の牛追　　翁
山つくす心に城の記を書ん　　露丸
　斧持すくむ神木の森　　曾良
哥よみの跡したひ行家なくて　　釣雪
　豆うたぬ夜は何と啼鬼　　露丸

古御所を寺になしたる檜はた葺　　翁
　糸に立枝にさまざまの萩　　梨水
月見よと引起されて耻しき　　曾良
　髮あふがする羅の露　　翁
まつはるゝ犬のかざしに花折て　　露丸
　的場の末に咲る山吹　　釣雪
春を經し七ツの年の力石　　翁
　汲でいたゞく醒が井の水　　露丸
足引のこしかた迄もひねり蓑　　圓入
　敵の門に二夜ねにけり　　そら
かき消る夢は野中の地藏にて　　露丸
　妻こひするか山犬の聲　　翁
うす雪は橡の枯葉の上寒く　　梨水
　湯の香にくもる旭淋しき　　露丸
鼯の音を狩宿に矢をはぎて　　釣雪
　篠かけしほる夜すがらの法　　圓入
月山の嵐の風ぞ骨にしむ　　曾良
　鍛冶が火のこす電の影　　梨水

ちるかひの梧に見付しこゝろふと　露丸
鳴子おどろく片藪の窓　釣雪
盗につれそふ妹が身を泣て　翁
祈も盡ぬ關〳〵の神　曾良
盃の肴に流す花の波　會覧
幕うちあぐる燕の舞　梨水

湯殿

語られぬゆどのにぬるゝ袂哉　翁

月山

雲の峯いくつ崩れて月の山　同

同じ山行

鶯の聲賤しさよ夏の雪　覺修坊 釣雪

廿九日

うすものゝ風情日に張團哉　角

五月朔日

壬二集
さみだれささ月きぬれば
名だかへていかに
ひまなき雨さゝへば

さみだれの名も心せよ節句前　角
鶯よ獨ばみなるほとゝぎす　彫棠
松原に勢の揃はぬ螢かな　溪石

うつくしさかほかく雉の
け爪かな。と申たれば

蛇くふときけばおそろし雉の聲　翁
雞のおかしがるらん雉のひな　去來
雉の尾もやさしくさはる菫哉　女 秋色

鼠說　卯月十八日の文の中に聞ゆ

洛下 落柿舍去來稿

鼠〳〵暮ニ出テ朝カクル。家ニ居テ人ヲ恐ル、ハ、足ノウラニ疵持ケラシ。山椒ノ眼・小豆ノ鼻、齒ハ糸ヲ付テ小袖ヲ縫ベク、耳ハ木葉ノ芽ニ似タリ。地黃ヲ喰ヘバ毛白ク、大棗ヲ嚙バ口毒アリ。尾ヲ切テ錐ノ鞘ト爲バナシテン。背腹ノ色ニ日出テ、薄モ濃クモ染出セリ。被カブリタル姿ノ若ナルハ、娶入ノ繪虚言ナラン。筆

ノ用ニ髭ヲ拔ル、ハ、老テノ後ノ悔カ。顏ノ烏魯ツキタルハ、晝鼠ナレバ成ベシ。

つく〴〵御身が徒を思へば、油を呑事世の酒にひとしけれ共、終に醉ふりを見せず。粟を盡し器を破るは、殊更にくるしからじ。貧僧の笄につくご猶憐なる。耻かしき文を散して、おとこ・女の中をも妨げ、あやしき巣を作りて、源平の亂と成ぬ。何を諂ひてか佞人の例に引れ、いかに諫てか、書を燒世の宰相となしけん。神佛の貴も屎かゝり、糞に汚れ給ふ。地獄おとしの苦み嘗て知らざるにや。月日の鼠と聞ゆるぞ、わやくものゝかしらならん。

ツク〴〵御身ガ貴ヲ思ヘバ、牛ハ形フトク、虎ハ心猛ケレド下坐ニ立リ。百敷ノ賢キモ甲子ヲ迎ヘテ、年ノ號ヲ改玉フ。春立カヘル遊ニ子日ノ御賀アリ。子祭ト申ス、イツノ時ヨリハヤリケン。漢ノ倭ノ歌ニモ洩レズ。海原ヤ藻塩ノ陰ニ住ム海鼠、嫁風の尾花が末に鳴うづ・ら、我朝ノ人は野鼠トツタエ侍ル。麝香鼠ハシラヌヒノ筑紫ヨリ外ニユカズ。天井鼠ハ雷ヲ鳴リ、トコノ乙若ヲ七郎トハ申シ新左衛門ト名乘ハ、月代剃ラノ事ナルベシ。大子等・子ミ等・廿日鼠、月ミ十二ノ子ナ産。黒ミザノ扇骨バカリ、誰ガ家ニ取盡シ得ン。モシ白鼠參テ、福ノ神ノ使センモシレズ。

つく〴〵御身が危を思へば、嶮しき城を賴て籠るとも、鼬をふせぐ謀なからん。鳶を見て痩、小鳥にくれんとて中空にうちあげられ、いとあさましき姿ぞや。番木を舐、吹矢に當ルとも、いたはる者はあらじかし。吹鼠・ぬれ鼠、黐にまつはり、或は鈴を頸にかけ、辛うじてふるさとにかへるとも、父母にさへ見捨られん。西寺の老ねづみ、おんもつんずすそつんづ、法師に申さん、師に申せ、友達迄にはやされて、つらよごし成べし。空死して仕合と、東坡が袋逃たれど、生捕れてなまじいに張湯が文を聞、我さへ悲しきを、狐狸の命とらんとて燒鼠と成たる、いと淺ましき姿ぞや。桁走障子のぼりて早業得たりとも思はず。升にかゝりて長き別れと成ぬ。その妻といひ子といひ、いかばかりの思ひをかすらん。御身ガ隱レ里何レノホトリゾ。武藏ニ鼠穴、大比叡の

禿倉(ホコラ)ナルカ、ナドカ歸ラザル。賴毫(豪)ガ勢モ本意トゲガタシ。猫ヲハムノ譬モ不善ナラバ成得(エ)ジ。彼ヲソロシキ睡士(スイシ)ト世ニ相住センハ、面白カラヌ浮世ゾ。

面扶(ツラ)持をへづるか栗の鼠共

いつなむかしのねうびく、つく〴〵承りて、法師ばらに申つたへたれば、相(ミル)鼠おしえありがたく侍るほどに、一夏百句のけちゑんにさて、此集にかき次侍るなり。

二日　かぶと取出すをみて

ものゝふの職甲や庫(クラ)の內　角

三日　信濃へまいらるゝ人、
暇乞ぜらる餞に

梁(ウツバリ)の蠅を送らん馬の上　同

四日　午の年、午の月、むまの日、
午の時うけに入。

競(くらべ)馬(うま)埒(ラチ)に入身のいさみ哉　同

同じく

有(う)卦(け)に入笑の皺ぞ酒による　百里

雨ふりて人の
來たりける日書次

元日や珍重すべき梅の花　素見

小蝦(エビ)喰(クヒ)て正月するかかいつぶり　近江 角上

春風やげに迁宮の明る朝　枳風

名のつかぬ所かはゆし山ざくら　湖春

羽にうけて幾重の雲を啼ひばり　盲人 渭橋

花に來て袷羽織のさかりかな　曉雲

松風にうれしき花の高み哉　巴風

木下に汁も膾も櫻かな　翁

東叡山行

大佛うしろに花の盛哉　僧 路通

一昨(ヲトヽヒ)はあの山越ッ花盛リ　去來

みどり子や此比歩む夏衣　大津 尙白

心喪

鳴ずゆけ親なき門ぞほとゝぎす　幽也

草の戸に念佛の內もかやりかな　三翁

雇人(ヤトヒト)のあいさつうたふ田うへ哉　加賀 一笑

初瓜と妹にいはせん親獨　巴風
御調より我子に一ツまくは瓜　文鱗
烋風に卷葉折るゝ芭蕉哉　加生
供御の瀬を流レ渡りの螢哉　珍夕
蹈もなき向ひ近江の苗(マヽ)かな　尚白
畑打音やあらしのさくら麻　翁
たが笛ぞ竹にはじまる秋の聲　由之
八尾御門主
六條は蘚遲き所かな　風喬
うなひ等が鬼灯ふくや猿の貞　沾荷

甲陽軍鑑をよむ
あらそばの信濃の武士はまぶしかな　去來

いせの國中村
といふ所にて
烋の風伊勢の墓原猶すごし　翁
あそこ爰心ならずや宿の月　枳風

九月朔日發足
菊の日と月見いづくの泊せん　同
ぬしは誰木綿なだるゝ秋の雨　尚白

雨後
芋ひけやあとに月すむたまり水　山川
たうときに皆をしあひぬ御迁宮　翁

ならにて
雪かなしいつ大佛の瓦葺　同
水鳥のくゞるやいづこ浮所　揚水
物くさき身に耻かしや庭の霜　全峯
いざさらば雪見にころぶ所迄　翁
雪の夜やとりわけ佐野の薪買ん　僧 宗派

去來にて
鉢たゝきたゝきおさめの夜を聞ん　僧 踏通
雪の今朝柚子見付たる梢かな　几鴎

十三日と心得て
名ばかりは旦那也けり年の昏　桃園
師走さへ一條殿の衣配　野径
何に此師走の市にゆくからす　翁

右四十句翁評番匠之墨縄也、
仍駈二入競馬之埒一畢。

五日

花あやめ幟もかほるあらしかな　角

栲佩てわざとめかしや芝肴　嵐雪

年古き人の咄や印地打　渓石

梳る中の髭の齢かな　紫雫

六日　止波浦にて

地引すと蜑のまに〳〵暮の潮　角

杜若足もとにあり馬笭　渓石

左右左に横雲わたるのぼり哉　百里

五月雨に降参するか紙幟　是吉

けふはげに淀にも見へず眞菰舟　山川

七日　醉て忘る

宵の蚊も枕をわたる八聲かな　角

土のけて古葉を染る竹若し　巴山

折を得て古着ぬぐらん蟬のふり　同

蚊屋釣て寐肌や見する蚊のおもひ　同

八日　得二正觀音像一

手に蓮膠にしまぬ匂ひ哉　角

名は佛只身のための夏花哉　重則

枝柿や佛ふるし初いちご　同

九日　雨

燕もかはく色なし五月雨　角

てり曇る空はつれなき餉哉　沾荷

蕣におもてうらなき隣かな　同

好物

入齒して心安しや瓜畑　三翁

喝二青屋一

うつり香や虫干もせじ單物　とし

山菅のゆひめおかしや粽籠　同

茂る木の中にかはゆし桐の花　同

ぬすみてもころばして行西瓜かな　少年 龜翁

雛立てその名しらるゝ女哉　同

いさむ氣や童につるゝ里神樂　同

十日

三藏さいひけるかたいのもの、つゞれたる袋より俳諧の哥仙取出して、點願はしきよしを申てしざり

ぬ。其巻の前書に、こゝにいやしき土の車の林の陰に、身をかなしめる有と書り。いかなるものゝなれるはてにか有けん、かの巻の奥書に申つかはしける。

あまざかる非人貴し麻蓬　角

梅か香や乞食の家もさ聞えつる、にほひ有けるにや。かゝる功徳なうけ給て

名木を乞食に習ふ櫻かな　山川
炭燒は中〳〵耻ぬ都かな　崔雨
旅人に鮓ほめらるゝ艗屋哉　横几
その實とる爲も忘れぬけしの花　春魚
一しきり庇ばかりのあられ哉　松翁
ねころべは咄スに遠き火燵哉　同

十一日　絕景ヲ

五月雨や富士の煙の其後ハ　角
しべばかり散殘ても櫻かな　沾荷
あの蟬やもぬけと成て落所　沾荷

おそろしき角になつきし鹿子哉　妓童 桐雪

同郷の比おもひ立て、
大和めぐりせしに

春日　和らぐや杉の林も日の光　とし
在原寺　青御ゟ我眉過ぬ水鏡
大五輪寺　墨染に獨をたる茶摘哉
多武峯　朝清く花におこたるひじりかな
芽出しより龍田は外の楓哉

十二日

さみだれにやがて吉野を出ぬべし　角

十三日　岩翁亭題途ゝ蟹

みじか夜や隣へはこぶ蟹の足　同
御座摺て吹風かろし蚊屋の足　岩泉
野草には長のすぐるゝ葵哉　同
ならびても先だつ船や初鰹　同
目覺るは笋ぬすむ木玉かな　遠水

十四日

枇杷の葉やとれば角なき蝸牛　角
形よりすげなき枇杷の廣葉哉　岩翁

女さへひとへ肩ぬぐ春野かな　同
言種も小籠の内ぞ初茄子　妓童松嵐

十五日
紅粉買や朝見し花を夕日影　角
軒の菖二十若くば飛つかん　淀三ヶ

仁和寺にて
門迄はあとずさり也花もどり　同

十六日　しなびたる法師の、
梅干けるをみて
梅いくつ閼伽の折敷に玉霰　角

十五日芦屋が餞
螢なら夜道敎ん我思　とし

同じく住家
かたづくるとて
蚊の聲も今朝よはるべし明長屋　同

十七日
いらこの杜國例ならで、うせける
よしを越人より申きこへける。翁
にもむつまじくて、鷹ひとつ見つ
けてうれしさ迄に、たづね逢ける
昔をおもひあはれみて
羽ぬけ鳥鳴音ばかりぞいらこ崎　角

十八日　少年を舟に供して、
不死の命をさゝのへたる
此舟に老たるはなし夕涼　同

十九日　日待酔しらけて、みな
逃ちりたるあとに、ひとり
灯をかゝげたる
有がたさよ。
いつの間にお行ひとりぞ夏の月　同

廿日　あはれ成哉や、
親の子をおもふ。
涼しい歟寐て髣剃ル夢心　角

廿一日　市の假屋のいぶせきに
沓作り藁打宵の蚊遣哉　同
旅人や曉がたの蚊の行衛　沾荷
蚊遣火や結分たる縄簾　百里
みじか夜や憎さもにくし鼠狩　氷花
おしげなく雪の庭ふむ座頭哉　妓童梨水

廿二日　夜讀書

蚊を打や枕にしたる本の重　　角

廿三日　露沾のきみ能興行

日にやけて酒呑けるぞ清水鬼　　同

廿四日　旅立人をあはれみて

舞坂や闇のさ月のめくら馬　　同

廿五日　茂叔讃

傘に蝶蓮の立葉に蛙かな　　同

廿六日　山田昌悦亭にて

汗濃さよ衣の背ぬひのゆがみなり　　同

夜舟興

笘すゞし橋より覗く茶の匂ひ　　巴山

父の寐ぐろしきを

夏衣いつかほそらん老の腹　　同

廿七日　入湯の人

木賀なかたりしに

蟬の聲ましらもあつき梢哉　　角

木曾川の杣に待得たり五月雨　　山川

廿八日　井にかみあらふ

賤の女は、おもひもかけぬつゝや也けり。

額あげよ清水を流す髮の長　　角

廿九日　舟興

更る程四手のいなの光哉　　同

一夏半盡

夏に摘て片枝葉のなき樒かな　　山川

華摘　下巻

一灯禮　其角述

六月朔日

白雪に黒き若衆や富士詣　角

有がたや家に冷水氷餅　溪石

遊ニ濟海寺一

あるものか鴨といふ舟の人の汗　沾徳

二日所見

藏か家か星か川邊の凉哉　角

奪あふて踏ころされし螢哉　己百

中間の手に握らるゝ螢かな　曲水

藻や魂ながす川すゞみ　柴雫

夏ひとへ冬は恨んゆかた哉　萬四

三日巴風亭

水うてや蟬も雀もぬるゝ程　角

打水や蚊の聲わかる竹の隈　巴風

三か月に凉みたらざる端居哉　溪石

うす／＼と底に丸みや三日の月　己百

此秋の行脚は、いづくにかと問れしに

白川の風にふかれにゆく螢　同

四日遊女小むらさきなかゝせて、讃このまれしに

藻の花や繪に書わけてさそふ水　角

凉しくも海を染たる入日哉　金鳳

髪ほすに草のゆるがぬ凉哉　鐵蕉

白雨は天狗笑の梢かな　鐵蕉

西行も月は二ッなりふじの雪　幽也

五日祇公日次の題をさりあはせて

河簀垣德利もひたす流哉　角

夏山や菴を見かけて二曲り　曲水

おもふ事だまつて居るか蟇　同

石山にて

男なら一夜寝て見ん春の山　近江女とよ

六日 祇園ごのゝかり屋
しつらふを

杉の葉も青水無月のお旅哉　角

七日 京なつかしく、
祇園會かたり出て

鉾にのる人のきほひも都哉　同

風暑し茶の殻くさき縫枕　卜宅

鵰もかはゆき鳥屋の暑サ哉　紫雫

八日

母の日や又泣出すまくは瓜　角

花つみの中へ

その母に逆縁ながら蟬の聲　僧 己百

憶子

梨の花しばるも己が實の爲ぞ　妓童 梨水

二月やまだ柿の木はその通り　越人

九日 翁方の文に、都の涼み過て、又
ごち風になりともまかせて
なごゝ、聞へゝるをこゞめて

丈山の渡らぬあとを涼み哉　角

日の陰や葉にかゝる瓜の二面　巴山

我ものとよき鳴聲たり木平賣　同

妻もあり子もある家の暑サ哉　氷花

夕涼み似合ぬ僧の丸はだか　竹井

毛を替て青葉ともなし池の鷺　卜し

十日 曲水の旅宿に訪て、
湖水をおもひ出しに

漣やあふみ表をたかむしろ　角

ぜゞ草菴を
人々とひけるに

あられせば網代の氷魚を煮て出さん　翁

法華本門の心を

雨露は有漏の惠ぞもとの花の雨　車輪下 非人

麻よもきといふ句を結縁に申つかはしたれば、我母の追善さて此句を送りける也。翁當歳旦に　こもを着て誰人います花の春　さ聞えしも未來記なるべし。

十一日

水の粉に風の垣なる扇かな　角

十二日

夕薬師すゞしき風の誓かな　同

十三日　拜天王之御旅所

里の子の宿宮(ヨミヤ)にいさむ皷哉　同

十四日

蒲の穂や擲を雇(ヤトヒ)て折もせん　同

引汐に動かぬ舟の暑サかな　百里

堀かねの名は晝顏の雫哉　妙延寺 道可

十五日

娶(よめ)入りせし時の枕か土用干　角

十六日　怖夢(ヲソロシキ)を見て

切ラレたる夢は誠か蚤の跡　同

衣食住の三ッは、何れか、かろんじ侍らん。然共草衣茅舍は、安レ身ヲのみ、食誤ッて天命を斷さいへるにや。

酸　殘る歯も梅賣る老が泪かな　山川

苦　籔根堀ルうき世の味や蕗の薹(トウ)

甘　井の底の蛇を忘るべし蔓(ツル)いちご

辛　百(もゝ)草に蓼の實(ミ)ばへは著(イチジルシ)

鹹　散リかひて櫻まじるや須磨の塩

十七日

灸すへて夕立雲のあゆみ哉　角

嬛寡

蠹(しみ)の巣や干ス〳〵ぬるゝ妹が文　達曙

ぬれ石に猫の晝寐の暑サ哉　寒蟬

十八日

抱(ダキ)籠や妾(メカケ)かゝえてきのふけふ　角

京にいなか

次の夜は結句不拍子の躍かな　三井 笑種

犬蓼の柳原こそ五條なれ　舟竹

蠅をうつその手枕の眠かな　己百

伊勢の國にて、狐の人につきて云出ける句

仁あれば春も若やぐ木目(このめ)哉

此狐つき日比の田夫にぞ有ける、狐いに

て後は無筆なりしと也。其筆跡正しう孤にて侍れば、哥にあやしく、たえなるためしにもと書付侍る。
元祿元年七月の事にや。

十九日

月出て座頭かたぶく涼ミ哉　角

紗(しや)の切レに螢つゝまん鳥部山　筍深

何云て聲のかれたるすゞみ舟　枳風

廿日

夕皃や白き鷄垣根より　角

路通、つるがへおもひ立ける
餞別に

剃(ソリ)立のつむり哀や秋の風　曲水

難波江にて

床(ゆか)しさはいくつ角出ス濱の芦　路通

廿一日　市中の光陰は、ことさらにいそがはしきを

秋鳴スさゝら太鼓や夏神樂　角

佛めきて心おかるゝ蓮かな　秋色女

廿二日　憫(アハレム)レ農(ヲ)

燒鎌(ヤキガマ)を背(せなか)に署し田艸取　角

廿三日　煙雨村

夕立や洗ひ分ケたる土の色　角

ゆふ立や炊ぐ煙をつれて行　百里

魚の降白雨すゞし町屋川　遠水

廿四日

廿五日

廿六日　誰どのゝ後室にや
寺まふでの有さまを

紅に團(うちは)のふさのにほひかな　角

不レ奪ニ百姓膏腴(ノ)ヲ一とは
文選のことば也。

木戸番を
あはれむ

百姓のしぼる油や一夜酒　角

蟬をきけ一日啼て夜の露　同

蚊の聲を惡(ニクム)も時の信哉　由之

炭釜に蚊の聲こもる夕かな　童次
つまねども勸て通る榼哉　賤水
常袴とらせられけり夏の亭　仙化

廿七日　豐年

ぬか味噌に年を語らん瓜茄子　角
白雨の客さへ晴る黄菊哉　友五

廿八日　雨吟中

夕立に獨沽の葉廣き句哉　角

廿九日　かまくらの濱出を

海松ふさや貝とる出及を蜑にかる　同

晦日

夏祓御師の宿札たづねけり　同
物〳〵よ花火おそれぬ涼み舟　三井 笑種
木の下の莚ものうし夏の月　莫陵
七夕の重ねてめすやかり衣　松風

心非心是

よしあしをいはで譽よき若葉哉　定良

可然、松原にて

のる人も其駕籠かきも涼哉　鋤立
水音も暮に淋しや崩れ簗　防風

七月朔日

父の煩はしきを、心もとなくまもりゐたるに、いなみがたき會によびたてられて、此句を申出たれば、一折過る程に心よしといふを告たり。如感のあまりに、其一順をあらはし侍る。

秋といふ風は身にしむ藥哉　角
替てよく澄內井戶の月　定良
燕の巣を立口より稻刈て　幽也
相撲習ひにくるゝ岡越　松風
顏つきのよきはまれなる渡守　溪石
右左ある磯の足跡　角

二日　艸庵に水つきて、住わびける僧を問て

手拭の筺(かたみ)よりもる一葉哉　角

烋来ても色きのふ也桶の百合　龜翁

寐かゝるも心拍子のおどり哉　遠水

そのかぎり夕日を挑(イド)むつゝじ哉　旦水

兀山もことさらぞよき岩つゝじ　全峰

卯花に乳母なつかしき垣根哉　長崎 白藤軒

三日 市隅

西側に灯籠ながれやみかの月　角

離婁(ガ)之明

はつあらし兎の毛並ほそりけり　筍深

不レ蘄(ネガハ)レ畜(ヤシナハレンコトヲ)ニ樊(ハン)中一ニ

庭籠よりきゞす追出ス心哉　同

讀ニ大智度論一

深サしれ水のよどみの白蓮花　同

一念

艸の露こぼれぬうちぞ千ゝの月　同

四日

五日

六日 もろこしにも、ひがこさせしためし侍れば

星あひや物たばひける胸の中　角

七日 秋風樂を所望して

七夕や暮露(ぼろ)よび入て笛をきく　同

時ならぬ水かけ草や星の聟　素見

名のたゝぬ夫婦世に有天の川　仙化

蝙蝠の虱おとすなほし祭　曲水

星あひや露は一ッの葱畑　里東

ゆふかつら星合の濱にかけて有　青女

星合や人のかしたる衣幾ッ　溪石

當年も予が竈ふすべける身の、ねがはしかるべき事やあるとせめたれば、言下に

何〳〵を七色あげん星祭　是吉

八日 三遷のおしへに慣ひて、七ッになりける姪を寺へのぼせたれば、一月ありて七夕に哥奉りけるを、いさなしみて

文月や産るゝ文字も母の恩　角

題張氏隱居

金銀花氣をしる夜の伶子哉　少年 匏瓜

夕顔や半開し八ッの鐘　同

ふじ垢離や女の上の物笑　訓女

石山幻住菴は、芭蕉翁かりに徜徉せし所也。ひゞ日佛餉をまいらすごて

いつたきて蕗の葉盛の御佛餉ども　里東

幻住菴山上

木啄の柱をつゝく住居かな　曲水

山下にて

物種よ小松にまじるけしの花　曲水

蟬の音に爭ふ雨やザンザ降　全峰

鵜もつかれ鵜飼も眠る夜明哉　氷花

舞の手の扇にあまる暑サ哉　石鼓

自畫讃

いざ書て暑サ忘れんふじの雪　龜足

若木より淸水に馴るゝ柳哉　千破

九日

生靈酒のさがらぬ祖父かな　角

人の子にいよ〳〵親し秋の昏　水戸山口 半夢

十日　海邊曉雲

稲妻や朝暾したる空に又　角

十一日　花はかたみに入、葉に枴に荷ひ分て、その勞にかはらんといふ。誠切なるあらそひを

親も子も淸き心や蓮賣　同

星合の夕べ淋しや比丘尼御所　揚水

朝皃や命とらるゝ土龍　童次

十二日

美女美男灯籠にてらす迷哉　角

負ぬるを咄にはせぬ相撲かな　遠水

十三日　南部の其調たづね來りて、野田の玉川には、西行上人の堀井ありさ語しに

濁る井を名になかたりそ秋の雨　角

熊蜂の花の露吸ふ情かな　栅雪

落葉はく賤は色なき手業哉　同

出羽の國山寺といふ所にて

山寺や人這かゝる蔦かつら　仙化

十四日　分郊原

みそ萩や分限に見ゆる髑髏(サレカウベ)　角

草村に飯吹とるや杯の風　琴風

秋風や肉さへつかぬ髑髏　溪石

北露の虫のそれ〴〵の穴　角

玉川を我聖靈の手向哉　童次

玉まつりかたよせて釣る帋帳哉　琴風

門並や箱挑灯は盆の中　溪石

秋風に佛見えぬ玉まつり　裴淵

十五日　たんざく、かゝせらるゝ　迷惑さな

葛の葉の赤い色紙を恨哉　角

荀子其辭富而麗

白妙に夜の牡丹の風輕し　揚水

孟子之文直而顯

白雲やちら〳〵と山櫻　同

楊子之語簡而奥

木がらしに軒の瓦も哀也　同

十六日　陀羅尼品

銀(しろかね)を罪の秤や墓參　角

三十三年の回愁

其時は盆おさへし墓の前　仙化

亡親之日

孝養施餓鬼

地獄　落鮎や火振暇(ヒマ)なき水の色　百里

餓鬼　子を捨る長者の門や高灯籠

畜生　馬士(うまかた)も倒れ臥野ゝ末の露

修羅　辻〳〵に切ちらしたる西瓜哉

人道　受がたき身を悦べや生身魂

天道　稲妻のわづかに笑ふ契かな

聲聞　秋風や栴はなれぬ蝉の空

緣覺　蓮の實や風にものらずとどまらず

菩薩　躍子は母のかざれる菩薩哉

佛

十七日　髭がちなる男の推つみたるは、にげなかるべし。

西瓜くふ奴の髭の流れけり　角
輪ふえて菊にみじかしませの竹　探泉
筭木餅を文字にかきぬる灯籠哉　東順
晝寝して夜をあてごとの鵜飼かな　同

十八日

つほみとも見えず露あり庭の萩　角
頼朝もせはしき回り燈籠かな　里東
すまひとて力くらぶる童哉　小倉 文松
牢人の肩とがりけり秋の暮　近江 そめ
老僧をまてば涼しや辻せがき　戰竹
いろはをもかゝぬは我と猿ばかり　東順
夏の日や濁りし水も時の味　龜翁
はま鵆友くるはしや犬のつら　半夢
寺〳〵の掃除はひとり柳哉　同
誰ためぞ臺立ふとる明屋敷　野徑
散花の錢箱守る雀かな　同

賤が身も名乘を耻ぬ相撲哉　岩翁

番組

三番三　さもこそは頤ゆるめ華の酒　肅山
高砂　松の葉やはかで日出度門の雪
頼政　いさぎよく末摘れたる茶木哉
東北　東屋の母屋に經よむ時雨かな
紅葉狩　切込て太刀に火を見ん岩の霜
三輪　泊瀬女が夜な〳〵送る蚊遣哉
三井寺　くるふ程狂ふて後夜の月み哉
老松　松梅や夫婦通夜する神の庭

十九日　滿百

有明の月に成けり母の影　角
我も又もらひ泣けん秋の蟬　筍深
蟬の聲諸虫手向の千部哉　東順

追加　四日五日のおこたりにつきて申侍る、

七月廿一日コ齋三回忌なれば、智

海師をさもなひて、墓誌、淺草菩
願寺念佛堂

三人の聲に苔よ秋の聲　角

同じく

三とせはや灯籠一ツもなかりけり　枳風

市中閑居

蕣やよし見む人は竹格子　角

閑與六哥仙

ゆく水や何にとゞまる海苔の味　其角

籾の芽立の堀江棚橋　溪石

人遠しをのらが國の長閑にて　琴風

撿校成の此比の良　角

さす月も輝く四間の青疊　石

蜆をすつる扇露けき　風

數珠や獨鈷念じ居たるに秋の雨　角

長女使の御返事待　石

かくし題おもふ方にも讀まさん　風

借錢乞は酒にやはらぐ　角

たゞ世に　龍田の禰宜のしぐれ降　石

又その枝に冬の甘柿　風

狐着哀に狂ふ月の影　角

頓寫の琵琶の折からの秋　石

駕の番におかるゝ霧の中　風

其血したふ一筋の芝　角

我は來て金拾ひたる花の陰　石

二日の夜に成し雛町　風

髭鶏の田舍相撲をもよほして　角

土器添る檜破子の數　石

御墓への道こしらへて悲しまれ　風

妹そねむあねや貧しき　角

垢離場より導者告くる人の緣　石

風に吹れてかるい疱瘡　風

老樂の本卦かへりを祝ふらん　角

いで其比とうたふ勝修羅　石

礒の月何觀進に來る船ぞ　風
秋の渦まく上﨟の衣　角
よむ内に泣るゝ文は天津鴈　石
まづは心にゆるす勘當　風
老功をあざむく程に軍して　角
霜の八霜にいたむ尻窕　石
冬の偈の灯の花しら〳〵と　風
せばき莚をうつす熨斗餅　角
すり針や近江の海を見おろして　石
着やぶる迄は木曾の麻衣　風

四月晦日

石山幻住菴を
かたり出て

郭公背中見てやる麓かな　曲水
躰なき山をつゝむ夏草　共角
狩人のさぐりにかけて飛聲に　同

急にから味をしぼる冷食　水
月よしと隔をとりし相借屋　同
年は此秌大嘗會也　角
鴨まじる鳥羽田に鴈のはみ入て　水
子の臼とりに母の餅つく　角
鐺持の草臥たるぞ哀なる　水
七ツ撞出す菩提所のかね　角
おもふ事二ツのけたる其跡は　水
花の都も田舎也けり　角
町汁につれだちゆくや櫻鯛　水
舅の紋と見ゆるきさらぎ　角
春風の馬より下る番代り　水
いかなる用にいそぐ燕　角
まれ人に酒買ふりをかくしける　水
さてよい月とほめて居る也　角
長き夜に藝しぶりたる咳ばらひ　同
藥をはこぶ簾中の秋　水
此戀は兄が合點を待斗　角

立る額のはえぬ氣の毒　水
居士號に衣は染て袖の色　角
六浦の邊の曙の空　水
くめやくめ海より樽をひろひ上　角
其日の祭具足かす也　水
何者のひりさらしたる道の屎　角
のぼり〳〵て富士の白雪　水
月影も鼻の先にや成ぬらん　角
弦の別れに落る朧　水
振袖の羽織捨たる露の上　水
ほれた子細を聞の明神　角
景清が道の早さは夢もしれ　同
前巾着に小判へし折　水
分別にわたるか花の八重一重　同
扇をもたば蝶の心よ　角

翁に供して辛崎へ
まいりけるに、千那亭に
休らひける即興

艸取のはれに染なす柿苧哉　珍夕

蓋顔の憎き樣なる旅の日數ぞいさくるし。別後を問ばいまだ必しも、秋香一夜におさへへずさ、我翁のいづれか今朝に殘る菊さにあらん。かはかりならず、忘れがたき事のみぞ多かる。

筆をさす御笠やかろき下涼　其角
蟬にまかする聲の乏しさ　嵩山
いたく醉ほど只顔に月を見て　彫棠
重なる霧に苫を着て臥　角
行末は鍛冶がきぬたにいぶかしく　山
まだ袂ながら榎直をする　同
盗人と吾名よばれん里の馬　棠
聞うる甲斐もあらぬ法談　同
傘やなどあらそふ程に村時雨　角

紋見知たる君が提灯　同
水もらふ姿を跡に思ひ出し　山
早歌よまぬ心きたなさ　同
死ざまは人なつかしき泪にて　棠
くま〴〵さがす尼の針箱　同
袖に來て物語せよ雀の子　角
肴手折て瓶にさす花　同
万歳に身は下る共春の月　山
若殿原に小弓まいらん　同
ナ
二人してかたみがはりの頬かぶり　棠
梶とる足の憎き河舟　同
金箱に包まれながら霜寒し　角
東寺の塔も成就して猶　同
双六の石と簺との三十餘り　山
孝ある嫁にたのむ古鄉　同
横川まで文の音する菜の物　棠
出家になして珍しく寐ん　同
うき目やむ洗藥もなみだ也　角
つゝみ分たる椿早梅　同
山里の春を過さぬ京の禮　山
母てふ筋をまねく初蝶　同
乗物をつらせながらや花の雲　棠
遠侍に問ん艸の名　同
はし鷹の口すゝぐなる溜水　角
氷によどむ蝮のから　山
今切とことはる道に行暮て　角
空おそろしや白き食米　棠

呈餞

安房の海奉りけり汗拭　彫棠

首途

名月の海見て思へ西の海　肅山
疊帋におしむ夜こそみじか夜　棠

六月十一日

笑ふなよ水の粉くれて車僧　ト宅
夕立けぶる風の勢ひ　キ角
野路の月走りこぐらに息切て　柴雫
袺袋せばき平茸　宅
茅薄牛見へぬ程引ずらせ　角
何うろたえし雪の闘守　雫
遠余所に窓つき上るひとよぎり　宅
爪十分にひたす盞　角
貧ゆへに祐乗が猿はさけぶらん　雫
變化とりに參る窂人　宅
夜の雨燒食二ツにぎらせて　角
泣てしまふたあとはねられず　雫
下紐の結び目高き忘草　宅
小便赤き秋のあら海　角
朝霧に千鳥釣らんとさばぐ也　雫
名月日よし酒むかへ人　宅
かぐや姫かへせと空に花ふりて　角
桃にあやしくこぼれたる堂　雫
蜂の巣はうるさきものゝ工也　ナ宅
一ッ時責の御馬出さる　角
醉顔をまぎらかしたる作り髭　雫
ぬるでかざしに折漆班　宅
宮川にすべるやうなる月の影　角
稲妻よりもきいた剃刀　雫
四ツ五ツ若う成たる玉手箱　宅
人に買せてあそぶ傾城　角
色外に命あらそふ古郡　雫
柄うちたゝく扇そよ風　宅
齋の料ゆゝしき門にさし入て　角
人くひ犬か吼ぬこの犬　雫
灯をよせて夫をさらす頬の皮　宅
うき戀語る所〳〵の高札　角
又けふもきのふの群の花盛　雫
遠巣嶋巣に小鮎くはせて　宅
甲斐歌やさやかにうたふ春の月　角

神さびかすむ總(ソウ)一の宮　雫

七月十三日

橋上吟

をのがきほひ夜更てうすし花火船　旦水
しめる羽織を裾にまく露　浮萍
夕月に湯手のへちまの漂ひて　龜翁

七月十九日　半時

投られて坊主也けり辻相撲　其角
秋を涼しう疊臺敷　遠水
湯次(ツヤ)にて廻(ス)新酒も物佗て　岩翁
下手に燒火は曇る月影　角
艸の戸を氷柱に閉て帳(キン)る音　水
市を圍ふて錢うらぬ町　翁
我方に古き佛を守(モリ)申　角

家子仕はぬもたのもしき妻　水
白き手に流す背(ナカ)をかこつらん　翁
盲(メクラ)哀に見ゆる前髪　角
こよひ又月にはもやふ船の數　水
水施餓鬼ある松の片濱　翁
鰹切る小礒にむれて秋の風　角
賃おしからず三里乘る馬　水
我年にあはねど娘ぬすみ出し　翁
戀にかならず戀の友達　角
王城に付てまはれる八重の花　水
稻荷の茶屋もあかぬ春の日　翁
うなひより乳母が慰む毬(テマリ)にて　角
風には高く飛ぬ初蝶　水
暖(のう)簾(れん)を卷上ながら座敷掃　翁
きかぬ藥をのむおもひ草　角
目くばせに亦こまらする菊の酒　水
月に美僧のもとの名を問　翁
此度は長崎迄の浦傳ひ　角

綱も鱸も汐分る瀬戸　水
精進の椀は禁ずる村の賤　翁
一藝得たる人を感應　角
をのづから氣の寐入ぬる雪の聲　水
麥の種さへもらふ安キ世　翁
あばら屋の狸の穴をふさがせて　角
殘らず變せ十の鳥の子　水
雨氣づく日には團炭もかたまらじ　翁
物うりゆるす寺の門前　角
花の時汲あふ井戸は坂の下　翁
尺しめて盞くやどり木の虫　水

偶興

秋風や我と板戸の閉ル音　岩翁
迯火に經しらぬ身は念佛哉　龜翁
蘚はぬすむ間もなき盛哉　遠水

宗祇の夜寒おもひやりて

亦一重菰敷までの夜寒かな　仙化
月はあれより鹿の來る筋　キ角
しもと結ふ手近き梨を所望して　百里
武士に成たる旅のふるまひ　化
秤さへ關の東とかはる也　角
いくらの豕冬にたつ市　里
むざ〳〵とくるしき齋をくらひける　化
たしなむ墨を惜む史　角
うちつけにくどく男を耻しめて　里
青屋が泪爪に藍しむ　化
いつとけて井の輪の氷柱つらかりし　角
鶯しばし足履ふんぬぐ　里
十分の盛を見せん花の朝　化
燒筆あてゝ霞む山〳〵　角
釘かくし建立したる人も有リ　里

能の太夫に昵(ナジミ)かさなる　化
旅すがた直に揚屋の月を見て　角
肌(はだへ)〳〵をさする秋風　里
新しい鰹なりしかうす紅葉　化
水は潮にわかる駒形　角
村肝(キモ)の喧嘩は時のはやりにて　里
黒いわつぱ(童)のくし〳〵と泣　化
あふよしも割た茶碗をつぐがごと　角
片手落なる戀のあつかひ　里
つく〴〵と我おもふ事を屯(タマリ)者　化
夜の火桶に髭こがしたり　角
月雪も丸太の切(レ)を枕にて　里
針立習ふ末のいとなみ　化
片かなに聖の文字を紲(シバリ)つけ　角
年輩(ネイ)よくて奉行かうむる　里
地祭の竹の嵐も常ならず　化
鞠をわたして沓しづか也　角
十坊のさしたる門は鈴(レイ)の聲　里

松の林を鶏の床　化
樂(らく)せんとおもひし旅の花散て　角
笑ふにこそや山はさながら　里

花摘集

山田筍深跋

孝者徳之基也。儒家有孝經。佛氏有恩重矣。母子之有親也。懐老牛舐犢之愛。況斷猿叫子之恩。猶羔有跪乳。烏有反哺。況亦於人乎。干茲武陵晋其角。元祿萬年之三。四月佛生日。遇母公之諱日。偶詣石廟。嘆成頻起泣血横斜。捻香摘英。挑一灯。咏一唫。以供聖靈之追福。積日渉月。向冥換百葉也。今幸慣摩耶報恩之結縁。集一夏百吟。名曰花摘也。記其傍者皆是助餘者也。嗚呼角子寄思風月。游心滑稽。花中轉鸝舌。楓林敲鹿膓。遠追祇公之嚢業。近汲芭蕉翁之支流矣。闔國許之成世之棟梁。噫夫叔有墮涙之碑。其角有花摘之集。和漢雖易地。其機亦一也。予閲其集。感其情。而採毫於東武之旅寓。

元祿庚午歳上秋下旬

寶井其角

書林　西村載文堂

ひさご

膳所 珍碩撰

江南の珍碩、我にひさごを送り。これは是水漿をもり、酒をたしなむ器にもあらず。或は大樽に造りて、江湖をわたれと、いへるふくべにも異なり。吾また後の惠子にして、用ることをしらず。つらつらそのほとりに睡り、あやまりて此うちに陥る。醒てみるに、日月陽秋きらゝかにして、雪のあけぼの、闇の郭公もかけたることなく、なを吾知人とも見えきたりて、皆風雅の藻思をいへり。しらず、是はいづれのところにして、乾坤の外なることを。出てそのこと云て、毎日此内にをどり入。

元禄三　六月

越智越人

花見

木のもとに汁も鱠も櫻かな　翁
西日のどかによき天氣なり　珍碩
旅人の虱かき行春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘　翁
月待て假の内裏の司召　碩
籾臼つくる杣がはやわざ　水
鞍置る三歳駒に秋の來て　翁
名はさまざまに降替る雨　碩
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水
中にもせいの高き山伏　翁
いふ事を唯一方え落しけり　碩
ほそき筋より戀つのりつゝ　水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁
月見る顔の袖おもき露　碩
秋風の船をこはがる波の音　水
雁ゆくかたや白子若松　翁
千部讀花の盛の一身田　碩

順禮死ぬる道のかげろふ　水
何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁
文書ほどの力さへなき　硯
羅に日をいとはるゝ御かたち　水
熊野見たきと泣給ひけり　翁
手束弓紀の關守が頑に　硯
酒ではげたるあたま成覽　水
双六の目をのぞくまで暮かゝり　翁
假の持佛にむかふ念佛　硯
中〳〵に土間に居れば蚤もなし　水
我名は里のなぶりもの也　翁
憎れていらぬ躍の肝を煎　硯
月夜〳〵に明渡る月　水
花薄あまりまねけばうら枯て　翁
唯四方なる草庵の露　硯
一貫の錢むづかしと返しけり　水
醫者のくすりは飲ぬ分別　翁
花咲けば芳野あたりを欠廻　水
蛇にさゝるゝ春の山中　硯

翁十二　珍碩十二　曲水十二

いろ〳〵の名もむづかしや春の草　珍碩
うたれて蝶の夢はさめぬる　翁
蝙蝠ののどかにつらをさし出て　路通
駕籠のとをらぬ峠越たり　仝
紫蘇の實をかますに入るゝ夕ま暮　硯
親子ならびて月に物くふ　仝
秋の色宮ものぞかせ給ひけり　通
こそぐられてはわらふ俤　仝
うつり香の羽織を首にひきまきて　硯
小六うたひし市のかへるさ　仝
鯰釣のちひさく見ゆる川の端　通
念佛申ておがむみづがき　仝
こしらえし薬もうれず年の暮　硯
庄野ゝ里の犬におどされ　仝

旅姿稚き人の嫗つれて　通
花はあかいよ月は朧夜　仝
しほのさす榜の下迄和日なり　碩
生鯛あかる浦の春哉　仝
此村の廣さに醫者のなかりけり　荷兮
そろばんをけばものしりといふ　越人
かはらざる世を退屈もせずに過　兮
また泣出す酒のさめぎは　人
ながめやる秋の夕ぞだゝびろき　兮
蕎麥眞白に山の胴中　人
うどんうつ里のはづれの月の影　兮
すもゝもつ子のみな裸むし　人
めづらしやまゆ烹也と立とまり　兮
文珠の智恵も桀特が愚癡　人
なれ加減又とは出來ジひしほ味噌　兮
何ともせぬに落る釣棚　人
しのぶ夜のおかしうなりて笑出ス　兮
逢ふより顔を見ぬ別して　仝
汗の香をかゝえて衣をとり殘し　人
しきりに雨はうちあげてふる　仝
花ざかり又百人の膳立に　兮
春は旅ともおもはざる旅　仝

珍碩九　翁一　路通八
荷兮十　越人八

城下　野徑

鉄炮の遠音に曇る卯月哉　野徑
砂の小麥の痩てはら〱　里東
西風にますほの小貝拾はせて　泥土
なまぬる一つ餬ひかねたり　乙州
碁いさかひ二人しらける有明に　怒誰
秋の夜番の物もうの聲　珍碩
女郎花心細氣におそはれて　筆
日の中おもく見遣がちなる　野徑
けふも又川原咄しをよく覺へ　里東
顔のおかしき生つき也　泥土

馬に召神主殿をうらやみて　乙州
一里こぞり山の下刈　怒誰
見知られて岩屋に足も留られず　泥土
それ世は泪雨としぐれと　里東
雪舟に乗越の遊女の寒さうに　野徑
壹歩につなぐ丁百の錢　乙州
月花に庄屋をよつて高ぶらせ　珍碩
煮しめの塩のからき早蕨　怒誰
くる春に付ても都わすられず　里東
半氣違の坊主泣出す　珍碩
のみに行居酒の荒の一騒　乙州
古きばくちののこる鎌倉　野徑
時〳〵は百姓までも烏帽子にて　怒誰
配所を見廻ふ供御の蛤　泥土
たそがれは船幽靈の泣やらん　珍碩
連も力も皆座頭なり　里東
から風の大岡寺縄手吹透し　野徑
蟲のこはるに用叶へたき　乙州

糊剛き夜着にちいさき御座敷て　泥土
夕邊の月に菜食嗅出す　怒誰
看經の嗽にまぎるゝ咳氣聲　里東
四十は老のうつくしき際　珍碩
髪くせに枕の跡を寐直して　乙州
醉を細めにあけて吹るゝ　野徑
杉村の花は若葉に雨氣つき　怒誰
田の片隅に苗のとりさし　泥土

野徑六　里東六　泥土六
乙州六　怒誰六　珍碩五
筆一

雜

龜の甲烹らるゝ時は鳴もせず　乙州
唯牛に糞に風のふく音　珍碩
百姓の木綿仕まへば冬のきて　里東
小哥そろゆるからうすの縄　探志
獨寐て奥の間ひろき旅の月　昌房

蟷螂落てきゆる行燈　正秀
　秋萩の御前にちかき坊主衆　及肩
風呂の加減のしづか也けり　野徑
　鶯の寒き聲にて鳴出し　二嘯
雪のやうなるかますこの塵　乙州
　初花に雛の巻樽居ならべ　珍碩
心のそこに戀ぞありける　里東
　御簾の香に吹そこなひし笛の役　探志
寐ごとに起て聞ば鳥啼　昌房
　錢入の巾着下て月に行　正秀
また上京も見ゆるやゝさむ　及肩
　蓋に盛る鳥羽の町屋の今年米　野徑
雀を荷ふ籠のぢゝめき　二嘯
　うす曇る日はどんみりと霜おれて　乙州
鉢いひならふ聲の出かぬる　珍碩
　染て憂木綿袷のねずみ色　里東
撰あまされて寒きあけぼの　探志
　暗がりに薬鑵の下をもやし付　昌房
轉馬を呼る我まゝわり口　正秀
　いきりたる鑓一筋に狹箱　及肩
水汲かゆる鯉棚の秋　野徑
　さは〳〵と切籠の紙手に風吹て　二嘯
奉加の序にもほのか成月　乙州
　喰物に味のつくこそ嬉しけれ　珍碩
煤掃うちは次に居替る　里東
　目をぬらす禿のうそにとりあげて　探志
こひにはかたき最上侍　昌房
　手みじかに手拭ねぢて腰にさげ　正秀
縄を集る寺の上茨　及肩
　花の比晝の日待に節ご着て　野徑
さゝらに狂ふ獅子の春風　二嘯

乙州四　珍碩仝　里東仝
探志仝　昌房仝　正秀仝
及肩仝　野徑仝　二嘯仝

田野

囀道や苗代時の角大師　　正秀
　明れば霞む野鼠の顔　　珍碩
觜ふとのわやくに鳴し春の空　　仝
　かまへおかしき門口の文字　　秀
月影に利休の家を鼻に懸　　仝
　度々芋をもらはるゝなり　　硯
虫は皆つゞれ〳〵と鳴やらむ　　秀
　片足〳〵の木履たづぬる　　硯
誓文を百もたてたる別路に　　秀
　なみだぐみけり供の侍　　硯
須磨はまた物不自由な臺所　　秀
　狐の恐る弓かりにやる　　硯
月氷る師走の空の銀河　　秀
　無理に居たる膳も進まず　　硯
いらぬとて大脇指も打くれて　　秀
　獨ある子も矮雞に替ける　　硯
江戸酒を花咲度に戀しがり　　秀
　あいの山彈て春の入逢　　仝
雲雀囀里は厩糞かき散し　　硯
　火を吹て居る禅門の祖父　　秀
本堂はまだ荒壁のはしら組　　硯
　羅綾の袂しぼり給ひぬ　　秀
歯を痛人の姿を繪に書て　　硯
　薄雪たはむすゝき痩たり　　秀
藤垣の窓に紙燭を挟をき　　硯
　口上果ぬいにざまの時宜　　秀
たふとげに小判かぞふる革袴　　硯
　秋入初る肥後の隈本　　秀
幾日路も苫で月見る役者船　　硯
　寸布子一つ夜寒也けり　　秀
澤山に兀め〳〵と叱られて　　硯
　呼ありけども猫は歸らず　　秀
子規御小人町の雨あがり　　硯
　やしほの楓木の芽萌立　　秀
散花に雪踏挽づる音ありて　　硯

北野ゝ馬場にもゆるかげろふ　秀

正秀十九　珍碩十七

寺町二條

井筒屋庄兵衛板

東門よ

猿蓑（さるみの）

上・下

去來
凡兆 撰

晋其角序

誹諧の集つくる事、古今にわたりて、此道のおもて起べき時なれや。幻術の第一としてその句に魂の入ざれば、ゆめにゆめみるに似たるべし。久しく世にとゞまり長く人に移りて、不變の變をしらしむ。五徳はいふに及ばず、心をこらすべきたしなみなり。彼西行上人の、骨にて人を作りたてゝ、聲はわれたる笛を吹やうになん侍ると、申されける。人には成て侍れども、五の聲のわかれざるは、反魂の法のおろそかに侍にや。さればたましゐの入たらば、アイウエオよくひゞきて、いかならん吟聲も出ぬべし。只誹諧に魂の入たらむにこそとて、我翁、行脚のころ伊賀越しける山中にて、猿に小蓑を着せて、誹諧の神を入たまひければ、たちまち斷腸のおもひを叫びけむ。あたに懼るべき幻術なり。これを元として、此集をつくりたて、猿みのとは名付申されける。是が序もその心をとり魂を合せて去來・凡兆のほしげなるにまかせて書。

猿蓑集　巻之一

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲　其角

時雨きや並びかねたる魦ぶね　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧丈艸

鑓持の猶振たつるしぐれ哉　膳所正秀

廣澤やひとり時雨るゝ沼太郎　史邦

舟人にぬかれて乘し時雨かな　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曾良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆

馬かりて竹田の里や行しぐれ　大津乙刕

だまされし星の光や小夜時雨　羽紅

新田に稗殻煙るしぐれ哉　膳所昌房

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　去來

はつ霜に行や北斗の星の前　伊賀 百歳
一いろも動く物なき霜夜かな　野水
淀にて
はつしもに何とおよるぞ船の中　其角
餝り花それにもし(歟)かん莚切レ　同
禪寺の松の落葉や神無月　凡兆
百舌鳥のゐる野中の杭よ十月(かみなづき)　嵐蘭
こがらしや頰腫(ほゝばれ)痛む人の顏　芭蕉
砂よけや蜑のかたへの冬木立　凡兆
ならにて
棹鹿のかさなり臥る枯野かな　伊賀 土芳
澁柿をながめて通る十夜哉　膳所 禎道
ちやのはなやほるゝ人なき靈聖女(りやうしやうぢよ)　越人
みのむしの茶の花ゆへに折(をら)れける　伊賀 猿雖
古寺の簀子も青し冬がまゐ(構)　凡兆
翁の堅田に閑居を聞て
雜炊(ざふすゐ)のなどころならば冬ごもり　其角
この寒さ牡丹のはなのまつ裸　伊賀 車來

草津
晦日(つごもり)も過行うば(姥)がゐのこ(亥子)かな　尙白
神迎水口(みなくち)だちか馬の鈴　珍碩
霜月朔日
臘まはり外に物なし赤柏　加賀 良品
水無月の水を種にや水仙花　羽州坂田 不玉
今は世をたのむけしきや冬の峰　尾張 旦藁
尾頭(をかしら)のこゝろもとなき海鼠(なまこ)哉　去來
一夜〳〵さむき姿や釣干菜　伊賀 探丸
みちばたに多賀(たが)の鳥井の寒さ哉　尙白
茶湯とてつめたき日にも稽古哉　江戸 龜翁
炭竈に手負の猪の倒れけり　凡兆
住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉
寢ごころや火燵蒲團のさめぬ内　其角
門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆
木兎やおもひ切たる晝の面ヲ　尾張 芥境
みゝづくは眠る處をさゝれけり　伊賀 半殘

貧交

まじはりは紙子の切を讓りけり　丈艸
浦風や巴をくづすむら鵆　曾良
あら磯やはしり馴たる友鵆　去來
狼のあと踏消すや濱千鳥　史邦
背門口の入江にのぼる千鳥かな　丈艸
いつ迄か雪にまぶれて鳴千鳥　千那
矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥　凡兆
筏士の見かへる跡や鴛の中　木節
水底を見て來た皃の小鴨哉　丈艸
鳥共も寢入て居るか余吾の海　路通
死まで操成らん鷹のかほ　旦藁
襟巻に首引入て冬の月　杉風
この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角
からじりの蒲團ばかりや冬の旅　長崎 暮年
見やるさへ旅人さむし石部山　大津尼 智月

翁行脚のふるき衾をあたへらる記
あり。略之

首出してはつ雪見ばや此衾　美濃 竹戸

題二竹戸之衾一

疊めは我が手のあとぞ紙衾　曾良
魚のかげ鵜のやるせなき氷哉　探丸
しづかさを數珠もおもはず網代守　丈艸

御白砂に候す

膝つきにかしこまり居る霰かな　史邦
椶櫚の葉の霰に狂ふあらし哉　野童
鵲の橋よりこぼす霰かな　伊賀 示蜂
呼かへす鮒賣見えぬあられ哉　凡兆
みぞれ降る音や朝飯の出來る迄　膳所 畫好
はつ雪や内に居さうな人は誰　其角
初雪に鷹部屋のぞく朝朗　史邦
霜やけの手を吹て遣る雪まろげ　羽紅
わきも子が爪紅粉のこす雪まろげ　探丸
下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆
ながながと川一筋や雪の原　同

信濃路を過るに
雪ちるや穗屋の薄の刈殘し　芭蕉
草庵の留守をとひて
衰老は簾もあげず菴の雪　其角
雪の日は竹の子笠ぞまさりける　尾張 野笠
誰とても健ならば雪のたび　長崎 卯七
ひつかけて行や雪吹のてしまござ　去來
嵩亞追悼
乳のみ子に世を渡したる師走哉　尙白
から鮭も空也の瘦も寒の内　芭蕉
鉢たゝき憐は顏に似ぬものか　乙州
一月は我に米かせはちたたき　丈艸
住吉奉納
夜神樂や鼻息白し面ンの內　其角
節季候に又のぞむべき事もなし　伊賀 嗵琢
家〳〵やかたちいやしきすゝ拂　同 蔭甫
乙州が新宅にて
人に家をかはせて我は年忘　芭蕉
弱法師我門ゆるせ餠の札　其角
歲の夜や曾祖父を聞けは小手枕　長和
うす壁の一重は何かとしの宿　去來
くれて行年のまうけや伊勢くまの　同
大としや手のおかれたる人ごゝろ　羽紅
やりくれて又やさむしろ歲の暮　其角
いね〳〵と人にいはれつ年の暮　路通
年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

猿蓑集　卷之二

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角
夏がすみ曇り行衛や時鳥　木節
野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉
時鳥けふにかぎりて誰もなし　尚白
ほとゝぎす何もなき野ゝ門ッ構　凡兆
ひる迄はさのみいそがず時鳥　智月
蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦
入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅
ほとゝぎす瀧よりかみのわたりかな　丈艸
心なき代官殿やほとゝぎす　去來
こひ死ば我塚でなけほとゝぎす　遊女奥州

松島一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣　とよめりければ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良
うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

旅館庭せまく、庭草を見ず。

若楓茶いろに成も一さかり　膳所 曲水

卯月八日詣慈母墓

花水にうつしかへたる茂り哉　其角
葉がくれぬ花を牡丹の姿哉　江戸 全峰

別僧

ちるときの心やすさよ米嚢花　越人
智恵の有る人には見せじけしの花　珍碩

斎に供せられて、すま・あかしにわたりて

似合しきけしの一重や須磨の里　亡、杜國
青くさき匂もゆかしけしの花　嵐蘭
井のすゑに淺〳〵清し杜若　半殘

起出て物にまぎれぬ朝の間の

起〳〵の心うごかすかきつばた　仙化

題去來之嵯峨落柿舍二句

豆植る畑も木部屋も名處哉　凡兆

破垣やわざと鹿子のかよひ道　曾良

南部旅店

誰のぞくならの都の閨の桐　千那

洗濯やきぬにもみ込柿の花　尾張 薄芝

豐國にて

竹の子の力を誰にたとふべき　凡兆

たけの子や畠隣に悪太郎　去來

たけのこや稚き時の繪のすさび　芭蕉

猪に吹かへさるゝともしかな　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉

君が代や筑摩祭も鍋一ッ　越人

五月三日、

わたましせる家にて

屋ね葺と並でふける菖蒲哉　共角

粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉

隈笹の廣葉うるはし餅粽　江戸 岩翁

さびしさに客人やとふまつり哉　尙白

五月六日、大阪うち死の遠忌を弔ひて

大阪や見ぬよの夏の五十年　伊賀 蟬吟

奥州高館にて

夏草や兵共がゆめの跡　芭蕉

這出よかひ屋が下の蟾の聲　同

此境はひわたるほどゝいへるも、こゝの事にや。

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　同

五月雨に家ふり捨てなめくじり　凡兆

ひね麥の味なき空や五月雨　木節

馬士の謂次第なりさつき雨　史邦

奥州名取の郡に入て、中將實方の塚はいづくにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左りの方、笠島といふ處に有とをしゆ。ふりつゞきたる五月雨、いとわりなく打過るに

笠島やいづこ五月のぬかり道　芭蕉

大和・紀伊のさかひ、はてなし坂にて、往來の順禮をとゞめて、奉加すゝめければ、料足つゝみたる紙のはしに書つけ侍る。

つゝくりもはてなし坂や五月雨　去來

髪剃や一夜に金情て五月雨　凡兆

日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉

縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅

七十余の老醫みまかりけるに、弟子共こぞりてなくなく、予にいたみの句乞ける。その老醫いまそかりし時も、さらに見しれる人にあらざりければ、哀にもおもひよらずして、古來まれなる年にこそさいへど、とかくゆるさゞりければ、

六尺も力おとしや五月あめ　其角

百姓も麥に取つく茶摘哥　去來

信楽
しがらきや茶山しに行夫婦つれ　正秀

つかみ合子共のたけや麥畠　膳所 游刀

孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙　智月

麥出來て鰹迄喰ふ山家哉　江戸 花紅

しら川の關こえて

風流のはじめや奥の田植うた　芭蕉

出羽の最上を過て

眉掃を面影にして紅粉の花　同

法隆寺開帳、南無佛の太子を拜す。

御袴のはづれなつかし紅粉の花　千那

田の畝の豆つたひ行螢かな　伊賀 万乎

膳所、曲水之樓にて

螢火や吹とばされて鳰のやみ　去來

勢田の螢見二句

闇の夜や子共泣出す螢ぶね　凡兆

ほたる見や船頭醉ておぼつかな　芭蕉

三熊野へ詣ける時

螢見やこゝおそろしき八鬼尾谷　長崎 田上尼

あながちに鵜とせりあはぬかもめ哉　尚白

草むらや百合は中〳〵はなの貞　　半殘

病後

空つりやかしらふらつく百合の花　　大坂 何處

すゞ風や我より先に百合の花　　乙州

楮蚊幮を作りて

子や泣ん其子の母も蚊の喰ン　　嵐蘭

餞別

立さまや蚊屋もはづさぬ旅の宿　　膳所 里東

うごく成人につれて
参宮する従者にはなむけして

みじか夜を吉次が冠者に名殘哉　　其角

隙明や蚤の出て行耳の穴　　丈艸

下闇や地虫ながらの蟬の聲　　嵐雪

客ぶりや居處かゆる蟬の聲　　膳所 探志

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　　芭蕉

哀さや盲麻刈る露のたま　　伊賀 槐市

渡り懸て藻の花のぞく流哉　　凡兆

舟引の妻の唱哥か合歡の花　　千那

白雨や鐘きゝはづす日の夕　　史邦

某堂之蓮池

白雨や蓮一枚の捨あたま　　嵐蘭

日燒田や時〳〵つらく鳴く蛙　　乙州

日の暑さ盥の底の蠛かな　　凡兆

水無月も鼻つきあはす數寄屋哉　　同

日の岡やこがれて暑き牛の舌　　正秀

たゞ暑し籬によれば髮の落　　木節

しねんこの藪ふく風ぞあつかりし　　野童

夕がほによばれてつらき暑さ哉　　羽紅

青草は湯入ながめんあつさかな　　江戸 巴山

千子の身まかりけるをきゝて、みのゝ國より去來がもとへ、申つかはし侍ける。

無き人の小袖も今や土用干　　芭蕉

水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　　嵐蘭

じだらくにねれば涼しき夕べかな　　宗次

すゞしさや淺草門ッに荷ひ込　　凡兆

唇に墨つく兒のすゞみかな　　千那

月鉾や兒の額の薄粧　曾良

夕ぐれや屼並びたる雲のみね　去來

はじめて洛に入て

雲のみね今のは比叡に似た物か　大坂 之道

猿蓑集　巻之三

秋

秋風や蓮をちからに花一つ　不知讀人

此句東武よりきこゆ、もし素堂か。

がつくりとぬけ初る歯や秋の風　杉風

芭蕉葉は何になれとや秌の風　路通

人に似て猿も手を組秋のかぜ　珍碩

加賀の全昌寺に宿す

終夜秋風きくや裏の山　曾良

芦原や鷺の寝ぬ夜を秌の風　江戸 山川

あさ露や鬱金畠の秋の風　凡兆

はつ露や猪の臥芝の起あがり　去來

大比叡やはこぶ野菜の露しげし　野童

三葉ちりて跡はかれ木や桐の苗　凡兆

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

合歡の木の葉ごしもいとへ星のかげ　同

七夕や餘りいそがばころぶべし　伊賀少年 杜若
みやこにも住まじりけり相撲取　去來
朝がほは鶴眠る間のさかりかな　伊賀 風麥
蕣やぬかごの蔓のほどかれず　膳所 及肩
笑にも泣にもにざる木槿かな　嵐蘭
手をおら(折)で過行木槿哉　杉風
高燈籠ひる(晝)は物うき柱かな　千那
はてもなく瀬のなる音や秋黴雨(しめり)　史邦
そよ〳〵や藪の内より初あらし　旦藁
秋風やとても薄はうごくはす(筈)　三川 子尹
迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八瀬、おはらに遊吟して、柴うりの文書ける序手に

まねき〳〵枴(あふご)の先の薄かな　凡兆

つくしよりかへりけるに、ひみさいふ山にて、卯七に別て

君がてもまじる成べしはな薄　去來
草刈よそれが思ひか萩の露　平田 李由

元祿二年翁に供せられて、みちのくより三越路にかゝり行脚しけるに、かゞの國にて、いたはり侍りて、いせまで先達けるとて

いづくにかたふれ臥とも萩の原　曾良
桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉
百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆
初雁に行燈とるなまくら(枕)もと　亡人 落梧

堅田にて

病雁の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉
海士の家は小海老にまじるいとゞ哉　同

加賀の小松と云處、多田の神社の寶物として實盛が菊から草のかぶと、同じく錦のきれ有。遠き事ながら、まのあたり憐におぼえて

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉
茶畠や二葉の中の虫の聲　尚白
はたおりや壁に來て鳴夜は月よ　風麥

いせにまうでける時

葉月や矢橋に渡る人とめん　亡人 千子

三ケ月に蕪(フカ)のあたまをかくしけり　之道

栗稗と目出度なりぬはつ月よ(夜)　半殘

月見せん伏見の城の捨郭(くるわ)　去來

翁を茅舍に宿して

おもしろう松笠もえよ(燃)薄月夜　伊賀 土芳

賀茂に詣、しでに涙のかゝる哉、さかの上人のたなこのやしろの神垣に、取つきてよみしさや。

月影や拍手(かしはで)もるゝ膝の上　史邦

友達の六條にかみそり(剃刀)いたゞくとて、まかりけるに

影ぼうしたぶさ見送る朝月夜　伊賀 卓袋

ばせを葉や打かへし行月の影　乙州

京筑紫去年の月とふ僧中間　丈艸

吹風の相手や空に月一ツ　凡兆

ふりかねてこよひになりぬ月の雨　尚白

向(むき)の能き宿も月見る契かな　曾良

元祿二年つるがの湊に月を見て、氣比の明神に詣、遊行上人の古例をきく。

月清し遊行(ゆぎやう)のもてる砂の上　芭蕉

仲秋の望、猶子を送葬して

かゝる夜の月も見にけり野邊送　去來

明月や處は寺の茶の木はら　膳所 昌房

月見れは人の砧にいそがはし　羽紅

僧正のいもとの小屋のきぬたかな　尚白

初潮や鳴門(なると)の浪の飛脚舟　凡兆

一戸(いちのへ)や衣もやぶるゝこま(駒)むかへ　去來

稗の穗の馬迯したる氣色哉　越人

澁糟やからすも喰はず荒畠　正秀

あやまりてぎゞうおさへる蜻(かゞか)哉　嵐蘭

一鳥不レ鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆

むつかしき拍子も見えず里神樂　曾良

旅枕鹿のつき合軒の下　江戸 千里

鳩ふくや澁柿原の蕎麥畠　珍碩

上行と下來る雲や秋の天(そら)　凡兆

鮬(セイコ)釣比(ころ)も有らし鱸つり　半殘
ゐなか間のうすべり寒し菊の宿　尚白
菊を切る跡まばらにもなかりけり　其角
高土手に鶸の鳴日や雲ちぎれ　珍碩
この比のおもはるゝ哉稲の秋　土芳
稲かつぐ母に出迎ふうなひ哉　凡兆

自題落柿舍
柿ぬしや梢はちかきあらし山　去來
しら浪やゆらつく橋の下紅葉　壓生
肌さむし竹切山のうす紅葉　凡兆

神田祭
さればこそひなの拍子のあなる哉
拍子さへあづまなりさや。
神田祭の皷うつ音　蚊足

花すゝき大名衆をまつり哉　嵐雪
行秋の四五日弱るすゝき哉　丈艸
立出る秋の夕や風ほろし(瘋)　凡兆
世の中は鶺鴒の尾のひまもなし　同
塩魚の歯にはさかふ(挾)や秋の暮　荷兮

猿蓑集　巻之四

春

梅咲て人の怒の悔(くい)もあり　露沾

上﨟の山荘にましましけるに候じ奉りて
梅が香や山路獵入ル犬のまね　去來
梅が香や分入里は牛の角　(加賀)句空

庭興
梅が香や砂利しき流す谷の奥　土芳
はつ蝶や骨なき身にも梅の花　半殘
梅が香や酒のかよひのあたらしき　(膳所)蟬鼠
むめの木や此一筋を蕗のたう　其角

子良館の後に梅有といへば
御子良子の一もと床し梅の花　芭蕉
痩藪や作りたふれの軒の梅　千那
灰捨て白梅うるむ垣ねかな　凡兆

日當りの梅咲ころや屑牛房(蒡)　膳所 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅になり込ひゞきかな　風麥

武江におもむく旅亭の殘夢

寢ぐるしき窓の細目や闇の梅　乙州

辛未のとし彌生のはじめつかた、よしのゝ山に日くれて梅のにほひしきりなりければ、舊友嵐窓が、見ぬかたの花や匂ひの案内者　といふ句を、日ごろはふるき事のやうにおもひ侍れども、折にふれて感動身にしみわたり、涙もおさすばかりなれば、その夜の夢に正しくまみえて、悦るけしき有。亡人いまだ風雅を忘れざる也。

夢さつて又一匂ひ宵の梅　嵐蘭

百八のかねて迷ひや闇のむめ　其角

ひとり寢もよき宿とらん初子日　去來

野畠や雁追のけて摘若菜　史邦

はつ市や雪に漕來る若菜舟　嵐蘭

宵の月西になづな(薺)のきこゆ也　如行

憶ニ翁之客中ー

裾折て菜をつみしらん草枕　嵐雪

つみすてゝ踏付がたき若な哉　路通

七種や跡にうかるゝ朝がらす　其角

我事と鯲のにげし根芹哉　丈艸

うすらひやわづかに咲る芹の花　其角

朧とは松のくろさに月夜かな　同

鉢たゝきこぬよとなれば朧なり　去來

鶯の雪踏落す垣穗かな　伊賀 一桐

鶯やはや一聲のしたりがほ　江戸 渓石

うぐひすや遠路ながら禮がへし　其角

鶯や下駄の齒につく小田の土　凡兆

鶯や窓に灸をすえながら　伊賀 魚日

やぶの雪柳ばかりはすがた哉　探丸

此瘤はさるの持べき柳かな　江戸 卜宅

垣ごしにとらへてはなす柳哉　同 遠水

よこた川植處なき柳かな　尙白
青柳のしだれや鯉の住所　伊賀　一唊
雪汁や蛤いかす場のすみ　同　木白
待中の正月もはやくだり月　揚水

田家に在て

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻　芭蕉
うらやましおもひ切時猫の戀　越人
うき友にかまれてねこの空ながめ　去來

露沾公にて餘寒の當座

春風にぬぎも定めぬ羽織哉　龜翁
野の梅のちりしほ寒き二月哉　尙白
出かはりや櫃にあまれるこざのたけ　龜翁
出替や幼ごゝろに物あはれ　嵐雪
骨柴の刈られながらも木の芽かな　凡兆
白魚や海苔は下部のかい合せ　其角
人の手にとられて後や櫻海苔　尾張　杉峰
春雨にたゝき出したりつゝ〳〵し　元志
陽炎や取つきかぬる雪の上　荷兮

かげろふや土もこなさぬあらおこし　百歲
陽炎やほろ〳〵落る岸の砂　土芳
いとゆふのいとあそぶ也虛木立　氷固
野馬に子共あそばす狐哉　凡兆
かげろふや柴胡の糸の薄曇　芭蕉
いとゆふに負引のばせ作り獨活　伊賀　配力
狗背の塵にえらるゝわらびかな　嵐雪
彼岸まへさむさも一夜二夜哉　路通
みのむしや常のなりにて涅槃像　野水
藏並ぶ裏は燕のかよひ道　凡兆
立さはぐ今や紀の雁いせの雁　伊賀　澤雉
春雨や屋ねの小草に花咲ぬ　嵐虎

高山に臥て

春雨や山より出る雲の門　猿雖
不性さやかき起されし春の雨　芭蕉
春雨や田簑のしまの鮓賣　史邦
はるさめのあがるや軒になく雀　羽紅
泥龜や苗代水の畦づたひ　史邦

蜂とまる木舞の竹や虫の糞　　昌房

振舞や下座になをる去年の雛　　去來

春風にこかすな雛の駕籠の衆　　伊賀 荻子

桃柳くばりありくやをんなの子　　羽紅

もゝの花境しまらぬかきね哉　　三川 烏巣

里人の臍落したる田螺かな　　嵐推

蝶の來て一夜寢にけり葱のぎぼ　　半殘

帋鳶切て白根が嶽を行衞哉　　加賀山中 桃妖

いかのぼりこゝにもすむや潦　　伊賀 園風

日の影やごもくの上の親すゞめ　　珍碩

荷鞍ふむ春のすゞめや椽の先　　土芳

闇の夜や巣をまどはしてなく鵆　　芭蕉

越より飛彈へ行とて、籠のわたりのあやうきところ〳〵、道もなき山路にさまよひて

鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　　凡兆

かすみより見えくる雲のかしら哉　　伊賀 石口

子や待ん餘り雲雀の高あがり　　杉風

ひばりなく中の拍子や雉子の聲　　芭蕉

芭蕉菴のふるきを訪

菫草小鍋洗しあとやこれ　　曲水

木瓜莇旅して見たく野はなりぬ　　江戸 山店

畫讚

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時　　芭蕉

白玉の露にきはつく椿かな　　車來

わがみかよはく、やまひがちなりければ、髮けづらんも物むづかしと此春さまをかへて

笄もくしも昔やちり椿　　羽紅

蝸牛打かぶせたるつばき哉　　津國山本 坂上氏

うぐひすの笠おとしたる椿哉　　芭蕉

はつざくらまた追ゝにさけばこそ　　伊賀 利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　　其角

一枝はをらぬもわろし山ざくら　　尚白

雉の聲もきこゆるやま櫻　　凡兆

眞先に見し枝ならんちる櫻　　丈艸

有明のはつ〳〵に咲く遲ざくら　史邦

常燈にはづれてけふは花の鳥　千那

葛城のふもとを過る

猶見たし花に明行神の顏　芭蕉

いがの國花垣の庄は、そのかみ南良の八重櫻の料に附られけると、云傳へはんべれば

一里はみな花守の子孫かや　同

亡父の墓東武谷中に有しに、三歲にて別れ、廿年の後かの地にくだりぬ。墓の前に櫻植置侍るよし、かね〴〵母の物がたりつたへて、その櫻をたづね侘けるに、他の墓、猶さくら咲みだれ侍れば

まがはしや花吸ふ蜂の往還り　園風

知人にあはじ〳〵と花見かな　去來

ある僧の嫌ひし花の都かな　凡兆

浪人のやどにて

艮共春の夜あれそ花靫　半殘

睡きはな最中のゆふべ哉　伊賀 長閏

花に有しころ、よしのに深く吟じ入て

大峰やよしのゝ奥の花の果　曾良

清瀧川にのぼる

清瀧や花はその代を嵐哉　嵐蘭

源氏の繪を見て

欄干に夜ちる花の立すがた　羽紅

庚午の歲、家を燒て

燒にけりされども花はちりすまし　加賀 北枝

はなちるや伽藍の樞おとし行　凡兆

海棠のはなは滿たり夜の月　江戶 普船

大和行脚の時

草臥て宿かるころや藤の花　芭蕉

山鳥や躑躅よけ行尾のひねり　探丸

山つゝじ海に見よとや夕日影　智月

とかくして卯の花つぼむ彌生哉　山川

鶯の聲聞初てより山路哉　伊賀 式之

木曾塚

共春の石ともならず木曾の馬　乙州
春の夜は誰か初瀨の堂籠り　曾良

望二湖水一惜レ春

行春を近江の人とをしみける　芭蕉

猿蓑集　卷之五

鳶の羽も刷（カイツクロヒ）ぬはつしぐれ　去來
一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをゝ（威）どす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　芭蕉
人にもくれず名物の梨　去來
かきなぐる墨繪おかしく秋暮て　史邦
はきごゝろよきめりやすの足袋　凡兆
何事も無言の内はしづかなり　去來
里見え初て午の貝ふく　芭蕉
ほつれたる去年のねござ（寢茣蓙）のしたゝるく　凡兆
芙蓉のはなのはら〳〵とちる　史邦
吸物は先出來（でか）されしすいぜんじ（水前寺）　芭蕉
三里あまりの道かゝえける　去來
この春も盧同（ろどう）が男居なりにて　史邦

さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直し今朝の腹だち　來
名
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げにさむき嶋の北風　邦
火ともしに暮れば登る峰の寺　來
ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉
いまや別の刀さし出す　來
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　來
湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆
押合て寝ては又立かりまくら　蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　來
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷の古葉に木芽もえたつ　邦

去來九　芭蕉九　凡兆九　史邦九

市中は物のにほひや夏の月　凡兆
あつし〱と門〱の聲　芭蕉
二番草取も果さず穂に出て　去來
灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇指　來
ウ
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりは花のつぼむ時　來
能登の七尾の冬は住うき　兆
魚の骨しわぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　來

立かゝり屛風を倒す女子共　兆
湯殿は竹の簀子侘しき　蕉
茴香の實を吹落す夕嵐　來
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を經る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　來
名　五六本生木つけたる潴　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　來
でつちの荷ふ水こぼしたり　兆
戸障子もむしろがこひの賣屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　來
こそ／＼と草鞋を作る月夜ざし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのまゝにころび落たる升落　來
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵にしばらく居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　來
ウ　さま／＼に品かはりたる戀をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　來
御留守となれば廣き板敷　兆
手のひらに虱這する花のかげ　蕉
かすみうごかぬ晝のねぶたき　來

凡兆十二　芭蕉十二　去來十二

灰汁桶の雫やみけりきり／＼す　凡兆
あぶらかすりて宵寢する秋　芭蕉
新疊敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去來
千代經べき物を様／＼子日して　蕉
鶯の音にたびら雪降る　兆
ウ　乘出して肱に餘る春の駒　來
摩耶が高根に雲のかゝれる　水
ゆふめしにかますご喰へば風薫　兆

蛭の口處をかきて氣味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　來
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵〳〵の月　兆
町內の秋も更行明やしき　來
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曾の酢莖に春もくれつゝ　兆

名

かへるやら山陰傳ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　來
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しをく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　來
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれじあかそふの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　來
堤より田の靑やぎていさぎよき　兆
加茂のやしろはよき社なり　蕉
物うりの尻聲高く名乘すて　來
雨のやどりの無常迅速　水
昼ねぶる靑鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろ〳〵水に藺のそよぐらん　兆
糸櫻腹いつぱいに咲にけり　來
春は三月曙のそら　水

凡兆九　芭蕉九　野水九　去來九

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土持比なれや　珍碩
しとぎ祝ふて下されにけり　素男
片隅に虫齒かゝえて暮の月　乙州

二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
　稻の葉延のちからなきかぜ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
　内藏頭かと呼聲はたれ　刕
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　碩
　すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきの札によみなして　刕
　雀かたよる百舌鳥の一聲　智月
懷に手をあたゝむる秋の月　凡兆
　汐さだまらぬ外の海づら　刕
鑓の柄に立すがりたる花のくれ　去來
　灰まきちらすからしなの跡　兆

名

春の日に仕舞てかへる經机　正秀
　店屋物くふ供の手がはり　來
汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸　半殘
　わかれせはしき雞の下　土芳
大膽におもひくづれぬ戀をして　殘
　身はぬれ紙の取所なき　芳
小刀の蛤刃なる細工ばこ　殘
　棚に火ともす大年の夜　園風
こゝもとはおもふ便も須磨の浦　猿雖
　むね打合せ着たるかたぎぬ　殘
此夏もかなめをくゝる破扇　風
　醤油ねさせてしばし月見る　雖

ウ

咳聲の隣はちかき縁づたひ　芳
　添へばそふほどこくめんな顔　風
形なき繪を習ひたる會津盃　嵐蘭
　うす雪かゝる竹の割下駄　史邦
花に又ことしのつれも定らず　野水
　雛の袂を染るはるかぜ　羽紅

芭蕉三　乙刕五　珍碩三
素男三　智月一　凡兆二
去來二　正秀一　半殘四
土芳三　園風三　猿雖二
嵐蘭一　史邦一　野水一
羽紅一

猿蓑集　巻之六

幻住庵記

芭蕉翁

石山の奥、岩間のうしろに山有。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事、三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を兩部光を和げ、利益の塵を同じうしたまふも又貴し。日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ・根笹、軒をかこみ、屋根もり壁落て、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年斗むかしに成て、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年斗にして、五十年やゝちかき身は蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽・象潟の暑き日に面をこがし、高すなご、あゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂。鳰の浮巣の流とゞまるべき、芦の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそめぬ。さすがに春の名殘も遠からず。つゝじ咲殘り、山藤松に懸て、時鳥しばしば過る程、宿かし鳥の便さえ有を、木つゝきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて魂、呉楚東南にはしり、身は瀟湘・洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山・比良の高根より辛崎の松は霞こめて、城有。橋有。釣たるゝ舟有。笠とりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる哥、螢飛かふ夕闇の空に水雞の扣音、美景物としてたらすと云事なし。中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武藏野の古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝふが嶽・千丈が峰・袴腰といふ山有。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守ルにぞとよみけん萬葉集の姿なりけり。猶、眺望くまなからむと、後の峰に這のぼり、松の棚作、藁の圓座を敷て、猿の腰掛と名付。彼の海棠に巣をいとなび、主簿峰に庵を結べる王翁・徐佺が徒にはあらず。唯、睡癖山民と成て、孱顔

に足をなげ出し、空山に虱を捫て座す。たまく心まめなる時は、谷の清水を汲て自炊て、とくくの雫を侘て、一爐の備へいとかろし。はた昔住けん人の誠に心高く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物おさむべき處などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが厳子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞。いとやすくと筆を染て、幻住庵の三字を贈らる。頓て草菴の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寝と云、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠・越の菅蓑斗、枕の上の柱に懸たり。晝は稀くとぶらふ人ゝに心を動し、あるは宮守の翁・里のをのこ共入來りて、いのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ては影を伴ひ、燈を取ては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり。倩、年月の移こし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして、此一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は痩たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやとおもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

題芭蕉翁國分山幻住庵記之後　震軒具艸

何世無隱士以心隱爲賢也。何處無山川風景因人美也。間讀芭蕉翁幻住庵記。乃識其賢且知山川得其人而益美矣。可謂人與山川共相得焉。迺作鄙章一篇歌之曰。

琵湖南兮國分嶺　古松鬱兮綠陰清
茅屋竹椽纔數間　內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川　風景依稀入誹城
此地自古富勝覽　今日因君倚益榮

元祿庚午仲秌日

凡右日記

時鳥背中見てやる麓かな　曲水
くつさめの跡しづか也なつの山　野水
鶏もはら〳〵時か水鶏なく　去來
海山に五月雨そふや一くらみ　凡兆
軒ちかき岩梨おるな猿のあし　千那
細脛のやすめ處や夏のやま　珍碩

贈ニ紙帳一

おもふ事紙帳にかけと贈りけり　野徑
いつたきて蕗の葉にもるおぶくごも　里東
螢飛疊の上もこけの露　乙州
顏や葎の中の花うつぎ　膳所 怒誰
たと〳〵し峰に下駄はく五月闇　探志
五羽六羽菴とりまはすかんこ鳥　元志
木つゝきにわたして明る水鶏哉　膳所 泥土
笠あふつ柱すゞしや風の色　史邦
月待や海を尻目に夕すゞみ　正秀

しづかさは栗の葉沈む清水哉　亡人 仰陰
涼しさやともに米かむ椎が本　如行

訪に留守なり

椎の木をだかへて啼や蟬の聲　膳所 朴水
日の下や手洗ふ程に海涼し　美濃垂井 市隱

文に云こす

膳所米や早苗のたけに夕涼　半殘

麥の粉を土產す

一袋これや鳥羽田のことし麥　之道

書音

一夏入る山さばかりや旅ねずき　長崎 魯町
夕立や檜木の臭の一しきり　及肩

昇ニ猿腰掛一

秋風や川上山のくぼみより　尚白

贈レ蓑

しら露もまだあらみのゝ行衛哉　北枝
木履ぬぐ傍に生けり蓼の花　木節

色紙に書

縫にこす薬袋や萩の露　膳所 扇

稲の花これを佛の土産哉　智月

石山や行かで果せし秋の風　羽紅

桶の輪やきれて鳴やむきり〴〵す　呂房

里はいま夕めしどきのあつさ哉　何處

鳴やいとゞ（竈馬）塩にほこりのたまる迄　越人

越人と同じく訪て

蓮の實の共に飛入菴かな　等哉

明年彌生尋ニ舊庵一

春雨やあらしも果ず戸のひづみ　嵐蘭

同　夏

涼しさや此庵をさへ住捨し　曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也。非比彼山寺偸衣朝市頂笄笑。只任心感物寫興而已矣。洛下逸人凡兆去來隨翁遊學。棋餘竹窓躡等凌節斯有歳。屬撰此集玩弄無已。自謂絶超孤腋白裘者也。於是四方唫友憧々往來。或千里寄書々中皆有佳句。日蘊月隆各程文章。然有毘仲騷士不集錄者。素居貧栖爲難通信。且有旋倪婦人不琢磨者。麁言細語爲喜。同志雖無至其域何棄其人乎哉。果分四序作六卷。故不遑廣捜他家文林也。維時元祿四稔辛未仲夏。余掛錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席。見需記此事題書尾。卒援毫不揣拙。庶幾一蓑高張有補干詞海漁人云。

風狂野衲　丈艸漢書

正竹書之

京寺町二條上丁

井筒屋庄兵衛板

元禄 百人一句

江水撰

百人一句世に行れん事を願ふは、にほてる東の江水子、道をさゞ浪の海に弘め、あまさかるあづまの果、松浦の果しまで、風月の人を筆に招て、ことし元祿かのとの未春三月、此一部なれり。われに此そをこふ。男人の集めにちなみて、まんなに書んもさえありげにたど〳〵し。いでや心をうごかす四節の始は、早春の霞に鳥の聲こぼれしより、彌生・卯月の里の蠶の幾筵養れけんも、いづれの山荘のあとを忍ばれん。所はいぶきの山かづら、葉守の神の花しづめに、榊をりもてる女文字をかりて、再許のとぶきをいふ。

白櫻下木因子

江戸 季吟
またの年の睦月もいはへ千代の江戸

京 言水
蓮池に生れてもとの蛙かな

大坂 西鵬
枯野哉葽の時の女楠

美濃 木因
星祭嬉しや桃の苦からず

江戸 路通
七草や何をちなみに佛の座

京 和及
都出てもはやかなしき碪かな

江戸 駒角
名月を捨ぬ言葉や花疊

同 皋白
根はたゞに藥よりうへをぼたんかな

京 舟露
碓は年の暮程音高し

京　如泉

つけてゆけ草花賣がかへるかた

同　信徳

名月はとうふ賣夜のはじめかな

膳所　珍碩

いろ〳〵の名もまぎらはし春の草

尾州　越人

二月やまた柿の木は共通り

京　瀾外

闘見する人に欠はなかりけり

江戸　不卜

筏士の裸をやすき相撲かな

京　我黑

日半は明日のためなり山櫻

伊勢女　その

山ふかみそれにうき名よ姫くるみ

伊丹　鬼貫

蜘の巣はあつきものなり夏木立

京　加生

すゝはきや餅の次手になでゝ置

同　定宗

呂の調啞の口にもそなわれり

同　觀水

山里や頭巾とるべき人もなし

京　團水

鑓持はかたげて走る花野哉

同　良佺

豐國やはるの櫟の落る音

出雲　風水

草の實の飛に動かぬ胡蝶哉

江戸　一晶

雪月や我人ともに氣にいらず

伊丹　宗旦

常の雨を誰聞分て夕しぐれ

高　高政

よるの花蝶の壁吸うつゝかな

江戸 其角
ゆく水や何にとゞまる海苔の味

京 貞木
野の様(シ)野芹ほこえて今朝にあり

備前 晩翠
うつくしき人猶結ぶ清水哉

京 好春
道場は薺(なづな)たゝくかたゝかぬか

京 丈草
嗣熊の先覗らん春の艶

同 常春
いはねども色に吉書の花櫻

京 似船
遊ぶ日に薬(ヤク)いそがしき句ひかな

同 定之
腹赤より先に九条の水菜かな

大坂 山平
晦日の暮にもしろき蓮かな

同 來山
何の木ととふ迄もなし歸り花

伊勢 又玄
若菜摘けふはづかしき手の太り

京 花扇
西の岡鰤(ぶり)ことづかる坊主かな

京 常牧
日ざかりの岩よりしほる清水哉

同 松笛
佐保姫の鞆たつらむけさの春

江戸 露沾
卯の花や里の見えすく朝朗

加賀 一笑
杜若石菖ひくゝ見えてよし

江戸 去來
夕顔や名を落したる花の形

京 如琴
立るより倒てすごきかゞし哉

江戸 嵐雪
草庵と捨しも秋や花の庵

京 隨流
ゆがみ木の髐の裔や老の春

尾張 横船
長閑さや眠らぬ迄も日の細さ

京 只丸
春近し寐て見る雪をはしる人

同 琢石
成ぬらむ鮎の行衞とほとゝぎす

同 竹翁
世話もなし朧〱と年のくれ

京 晩山
元朝を伊勢や熊野の冬の人

同 重德
辨慶は花見る迄も具足かな

讃岐 芳水
梅が枝に誰絹張し年の暮

櫻塚 西吟
我軒に長柄の菖蒲ふきにけり

京 定武
夏冬と元日やよき有所

同 鳥玉
夫見舞たる瀨は遲き茶摘哉

大坂 才麿
冬木立いかめしや山のたゝずまゐ

京 重榮
蓬萊や霞をながすしだの鴫

大坂 素龍
みやえ（惠）方氷飛ぬく鯉のいを

大津 尙白
ぬしは誰木綿なだるゝ秋の雨

江戸 立志
芦の屋の灯ゆりこむきぬたかな

大坂 燈外
中に此蕗の花咲八重むぐら

京 女扇
煤掃の寐起に拜む竈(かまど)かな

美濃 落梧
能因の車おりけむ門の松

伊丹 鷺助
澁柿のとりのこされし冬木哉

京 幸佐
日は西に我ふとりけん篁(たかむしろ)

同 鞭石
四方拜内裏拜みにいざゆかむ

同 都水
星佛賣聲さむし盡にけり

京 方山
てれば桃ふれば柳の節句かな

伏見 問随
起初て今年は和哥のうらを見ん

京 助叟
棹添て置ぬ船なり杜若

大坂 盤水
行先も覺束なしや蝸牛

備前 定直
梅が香に袖ふり直す師走かな

京 貞衾
山万歳よぶことぶきや御代の春

尾張 荷兮
寒月や居合をしへの葭かこひ

京 梅盛
君は千代ぞといふ春におさまりける

同 遊園
物の文(アヤ)今松齒朶と明にけり

同 友靜
躍見に踏(フム)らん夜るの花野哉

大坂 瓢界
水鳥やかたまりかぬる山颪

京 水雲
年の暮おなじ歩や米車

江戸　調和
暁鐘の姿を見する柳かな

伊勢　園友
うらゝなる物こそ見ゆれ海の底

若狭　去留
雪吹たつ我に笠なし山ざくら

大坂　万海
みやま路や何とらまへて呼子鳥

同　虚風
飛かたや旭をそむくぬくめ鳥

美濃　如行
傘かしに出ばや今宵月の雨

大坂　六翁
夏中の身持やよろづ御祓川

尾張　露川
歯固(はがため)や伊勢の太夫の鰹ぶし

京　秋風
白雨の隠しる蟻のいそぎかな

同　風子
年くれてせかする物よ琴の音

同　淵瀬
付そひて妻は出ぬか鉢たゝき

越前　洞哉
虫ひとつある甲斐もなき今宵哉

江戸　素堂
朏(みかづき)にかならず近き星ひとつ

出羽　清風
時鳥筧はふとき寐覚かな

伊勢　一有
帶古しいまだ旅なる衣更(コロモガヘ)

京　春澄
御忌よりも多し涅槃の樒賣

江戸　湖春
梅一重達磨に恥ぬ匂ひ哉

あふみ　江水
次の夜は唯ひとりゆくすゞみ哉

芭蕉

先たのむ椎の木もあり夏木立

誹諧作者目錄　次第不同

京

貞恕　林鴻　千之　千春　周也
凉風　如雲　正由　松春　未達
衆豐　尹具　柳水　浮草　信房
鐵硯　令富　眞嶺　示右　蟻想
通容　丁常　朋水　竹亭　由卜
鳥水　如帆　爲文　正業　貞道
芝蘭　原水　天龍　水仙　鷺風
流滴　鑫海　兒水　一至　立吟
吟睡　芝峯　空礫　仙溪　元清
貞隆　如翠　隨友　貞眞　荷翠
軒柳　底元　二休　其諺　流水
柳子　私言

江戸

三翁　勤立　八橋　仙化　百里
風瀑　文鱗　李下　山川　枳風
舟竹　虛洞　溪石　沾蓬　氷花
楊水　蕭山　桐雨　銀釣　龜翁
破笠　コ齋　嵐雪妻　杉風　彫棠
紫雫　とし　松濤　勇招　岩翁
蚊足　全峰　琴蔵

大坂

一時軒　作非　文丸　川柳　春堂
文道　椿子　定明　釣水　遠舟
豐流　一禮　文十　堺元順

伏見

扇計　秋澄　民也　可笑　露吹

伊丹

貞喜　蟻道　三紀　青人　人角
鐵面　月扇　鐵卯　守山百丸

近江

（膳所）淡水　蘭妃　曲水　正秀　野徑
（大津）千那　乙州　李曲　（竹生嶋）常之　（長濱）利國
（彥）如桃　笑山　不障　袁弓　三珍
（日ノ）白賁　彩霞　（八幡）資清　貞治　（多和田）東柳
（長濱）笑與　松路　（柏原）林卜　可卜　宜仲
（柏原）如誰　櫻三　暮山　（大口）寸庵　愚醉

尾張

（名古屋）東鷲　野水　龜洞　冬松　傘下
鼠彈　胡及

美濃

（岐阜）湖翁　草々　李雨　（府中）一歩　（櫻井）木鴈
（大垣）小蝶　芦本　斑牛　耕雪　木麟
（牧田）葉船　春船　（タラ）如枯　（室原）仙木

伊勢

（桑名）司桂　一件　風子　可則　（山田）近正
（白子）義重　（富永）好永

若狹

（小濱）參後　可心　味雨　一鷲　初及

（岡山）茂門　雲鹿　兀峰　（八宮）硯雲　（備中西阿賀）重賢
（倉シキ）芦竿　（安藝宮嶋）一之　（イツヽ嶋）仲品　（讃岐丸亀）鐵丸　幽吟
（肥前平戸）寛茂　（長崎）つま丸　（丹波宮津）正信　（切畑）近水　（但馬生野）如風
（竹田）樂醉　（伊賀住）幸吟　重葉　（志摩戸村）蝉嘶　雪堂
（伊豫松浦）隨友　（古川）睬草　（播磨姫路）彌生　風芦　（大和郡山）一露
（兵庫）正廣　（美作津山）茨木軒　笑草　（加賀）一水　北枝
（越後新潟）一醉　（柏崎）都翁　（越前ツルガ）嘯雲　（府中）一顯　卜琴
（常陸）鶤仙　（出羽）風仙　（松浦）浮水　（山形）思晴　（紀伊若山）闌水
（丹波篠山）隨思　（亀山）更以　（佐治）丈昌　（阿波）律友　（三州岡崎）薇綖
（苅谷）如嬰　（周防岩國）常之　（備後鞆）鉄聲　（福山）一友　（三原）草也
（信濃松本）一歩　（佐渡相川）顚水　常之　（肥後熊本）水翁　（ヒゴ熊本）水孤
（河内八尾）風喬　（甲府）一映　（能登七尾）勒文　（越中）獨幽　（富山）椎雪
（和泉住）三水　（豊前西小倉）松鋁　（豊後）西國　（陸奥）三千風

此外しらぬひ（不知火）のつくし人、雪にふられ、ほとゝぎすにまよひ、櫻を好む八重ひとへ、毎ゝ九重の都まいり迄、德をかくし名をつゝむ好士、いか程かあらむ。猶期二後集一也。時

ゝ恐惶謹言

流木堂江水

寺町通二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

北の山

句空撰

おもひたつ加陽の黒梅染、あさくもうすくも、世をのがれて卯辰山の片ほとりに侍るいとま、折〳〵きこえし句、あるは行脚のころの口ずさみなど、心にうかべるをまゝにとりあつめて、元祿壬申水鶏なく夜の雨に筆をぬらしすて侍り。

桑門句空

うらやましうき世の北の山櫻　翁
　雪消えしまふ細ね大根　句空
人足のあたまかぞゆる春風に　去來
　門ノたつる近膳もすはらず　仝
空はまだ十方くれの月の影　空
　行クをちゞめてなく雁の聲　仝
篠懸のやゝ引かゝるしの薄　來
　下帯洗ふ瀧壺の端　仝
増水も思ひのまゝにさめすまし　空
　うきげじ〳〵の這廻りぬる　仝
手枕に道行キよめはそゝりあげ　來
　禁中様をほめたつる也　仝
ふみつけて俵に入る餅の粟　空
　町すみわたる眞夜中の月　來
秋風やひたと博奕にうちつのり　空
　片鼻やとふ長持の供　來
唐紙の透間をのぞく花盛り　空
　鶯籠の並ぶなりけり　來

大はらや蝶のでゝ舞ふ朧月　丈草（京）

みのむしのさがりはじめつ藤の花　去來（仝）

句空法師、卯辰山の藤ある松陰にかりなる草庵(いほり)をむすびはじめられける。その夜まかりて

つよかれとつくらぬ花のいほりかな　北枝

閨怨

娶せし時の枕か土用ほし　其角（江戸）

秋風の吹ほうけたり綿畠　四睡

佛塚つくろひ出來させ給ひ、李東方へ送り奉るとて

佛屋(賓)檜笠の下や苅田道　秋の坊

夕だちや晴たる池の魚の口　牧童

菜の花や小屋より出るわたし守　史邦（京）

木曾塚のほとりに、むすびすてられたる翁の庵にしばらく侍りて

すてゝゆく庵見よとや遲櫻　句空

こがらしや百八ながら鐘の色　乙州（大津）

旅行

長旅や蟬きかぬ日は波の音　元之

佛の原にて

おもと原よりそふものもすゝき哉　柳羊（八任）

さつぱりと何もなき野や霜の朝　春紅

何事も寐入る迄也紙衾　小春

朝食のすゝまぬ時や雉子のこゑ　魚素

獨活原や喰殘されて夏木立　遲櫻

廣野よりふかれて庭のこてふ哉　南甫

葬禮のあとは櫻の枝折哉　玉斧

かたはしに芝うつ中やすみれかな　古庭

てりくとやしはにのこる暑さ哉　孤舟

秋の田のかりつめられしうづらかな　夕櫻

名月や畠のうへに松のかげ　其角（江戸）

名月や竹をさだむる村雀

紀州一見のころ

藤代の鈴木屋敷や桐の花　ノ松

やく拂ひをのれもつるにとしのくれ　三十六

菅家の祭をこなはれける所、祝部(はふり)の役にまかりて

わすれけり秋の日あしにぬさ袋　英之

五月雨や壁をちからにたつしびり（痺）　夕市（小松）
凉しさやものもいはずに佛達　斧卜（同所）
朝月に人もなげ也雉子の聲　桃妖（山中ノ少人）
嵓入や鹿の落來る林（叢）下寺　春幾
水せき入、はし（橋）つくりたる庭を
香をもつか梅ちる下の波がしら　北枝
深更
鉢扣くみからしたる茶なれ共　流志（亡人）
村紅葉はだこほしたるつゞき哉　牧童
よし野川の邊にわりご（割籠）たうべて
やまぶきに萵梹洗ふ岸根かな　句空
西行のあとをたづねて、梁山叟にあふ。猶山ふかく入て
西行の庵のなくば此蕨
秋のすへ北野にて、長谷川が書し繪馬を見て
土佐坊がうしろいぶせき野分哉　春紅
戀塚や薄の風の吹キあまり　蘇守
蛇に逢ふ夢やさましてなく蛙　北枝
西風はほどなき雨の薄かな
思案する間もなくかよふつばめ哉　探吟（能州七尾）
山ふかく入て
さるかけの木の芽の遅き山路哉　自笑（山中）
山人の晝寐をしばれ蔦かつら　桃妖（おなじ所の少人）
雪の日やいとゞひらたき牛のつら　其糟
田うへ哥今はたひろ（拾）ふ落穂かな　朝ウ
わらばへの只とりまはすすみれ哉　陰支
撫子に秋やかよひて白ミがち　牧童
鷺の首たゝきこまるゝ霰かな　賴元
草庵のわびしさを
こがらしやつゞいてひゞく窓の破レ　雨帆
あしたにむまれ、夕に死するあり。
虫ほしに又血脈のふくろかな　句空
くるす野や冬の入日の藪煙　野童（京）
馬の子のかけ違けりはまの月　去來（仝）
旅宿
夜着かさね宿も礎をうつ夜哉　寸子（宮腰）

海原は鯨にはづむ霰かな　巴琴（なたね所）

三輪にて

神垣や杉菜もつまず草かず（刈）らず　冬水（僧）

夕顔にくらべてみばや向腫（こぶ）　和列

五月雨やうつふけてをく糂粏（じんだ）瓶　友琴

ほすゝきや廣き屋敷の角の家　花積

白山の麓、瓦添の温泉に入て歸るさ

猿の子にわかるゝ時の榎の實哉　魚素

ころもがへつゐでにそらす（剃）あたま哉　三岡

珍しき日よりにとをる（通）枯野哉　一笑（亡人）

あひしりける僧の旅立に

紙子やる弟子とてもなき別哉　孤舟

武藏野に先（まづ）みて涼し富士筑波　幽子

冬瓜の寐ながらふとる野末かな　似川（江戸）

空蟬も衣干たらぬ日脚哉　白ウ（仝）

きた國や月はもたねど初しぐれ　閏之（宮の腰）

秋風や星吹すかす夜あけ比（ごろ）　萑棠（同所）

水仙や葉のまがりゆくさよ嵐　春山（同所）

八朔（はっさく）や澁柿原も人のをと　蘭仙（同所）

十斗（ばかり）はやめてしまふ礎かな　李東

大どしや寐ざまにおがむ持佛堂　林陰

朝がほや尼が簀子の角盥（タライ）　宇踏

知慧出して僞あり

死たきといふ人喰ぬ河豚（ふぐと）かな　守水（宮のこし）

汐こしの松を目あてやなく千鳥　南甫

旅心水札（けり）鳴澤を力かな　一洞

山里や聟入の夜のほとゝぎす　睡鷺

雨邑身まかりて後、何くれとなく
書なこせたるせうそこ（消息）の、あまた
有けるか見て

死さふな事こそかゝね袖の露　春幾

三井の鐘聞てほとけや冬の空　智月（大津ノ尼）

むら雲や火桶おさへて冬の月　秋風

砂川や砂にゆらるゝおぼろ月　七里

虻の音や菜種にかれて春の暮　不于

名月や橋なき里は物たらず　遠里

足（たる）こそやすきといへるを

さゝげめし汁もきのふのあまり哉　英之
龍骨車やをしわけてさくかきつばた　櫻十
涼風や橋にそい寐の伊勢參　巴十

くさの品さだむる事ありて

ふら〳〵と品も形もふくべかな　木女
夕だちに猶にほひあるうばらかな　不中女
蜻蛉や日は入ながら鳰のうみ　素牛
白梅やちるさへ青き苺のうへ　北枝

山家にて

うぐひすや山家に來ての袖香炉　句空

春のくれがた

蘆塚やさくらの中の蝶のから
山蟬や背中にくらいつかぬ迄　一風
口洗ふ馬の跡のむ淸水かな　梅露
松の木や雪降ながら村堺　芬芳

立山に詣けゐ比、あし倉より大岩
山へ疇道をつさふ。遠近の田面を

にぎはしや稗も田づらのいなすゞめ　買文

不レ許三葷酒入二山門一

しからるゝ所迄ゆけ花の庭　素洗
わたし舟をしわかれたりかへる鳫　盛旅

旅のさびしさ

道のべの此田にもなくかはづ哉　草籬
鴻の背やにぶきにたまる雪の色　遙里
水うつや猫にかゝれば百合草の露　哥鴬
盲女座頭一ふねわたす祭かな　共糟
大根を引たる穴やうそ〳〵と　宗壽
野ざらしやものいひさふに秋の風　春耕
山眉もくだくるほどのしぐれかな　玉斧
早梅や懸燈臺のうすあかり　史邦（京）
初雪や紙燭指出す忍ぶくさ　猿雖（伊賀）

片手打落したるいり鳥鍋を、幸の
ものかなとて

忠度と灰さがされし火桶かな　其角（江戸）
幾人か給すゝぎし宇治の川　春紅
つり竿に蓮切そへし夕べかな　遠里

暮春

行春をまたゝびの葉や待まうけ　珍夕 ぜゝ

山際の水のあをはの露のたう　南甫

つぼみより櫻みる日のたかりけり　ノ松

花見にまかりて

うちぬいで笠にためけりさくら花　貞林 あま

小川野水遠忌に墓所にまふで

人も我も榮螺喰しや花ざかり　句空

世の事心に思ふふしありて

うき事のこともかけぬにちる櫻　三十六

初秋や底のぬけたる桶の中　魚素

いかさまに蟷螂は鳴ヶ姿かな　字路

嫉妬　きゝほめられしに心づきて

それ程に稲もあらさぬ螽かな　牧童

棒の手のおなじさまなるかゝし哉　丈草 京

いほりにて

小夜時雨身は何ゆへにあたゝまる　秋の坊

島もさを過る山陰にふるき石燈籠の侍るを、小町なりといふ說いぶかしけれど

櫻ちる小野の小町も茶の木原　句空

ものにも似ぬ手桶いみもちて、春のながれの田にしをさり、わづかのあたひをもとむる者のすけるこさゝて、酒のみかへる比のたのしび、いかならむとおぼへて

かろき身のわざやうき世の田にし賣　小春

田にしを

同じ世を人にうらるゝ田にし哉

乘合がちなるも、猶春のゆくゑのおもしろさに

雲雀鳴ク比や桑名のわたし舟

人の許よりなどや絶て音づれもなきと、いひこしける返事に

わすれめや顔たゝかれし藤の花　春紅

八重もあれ山櫻戸のかろき事　沾徳 江戸

乘物にずゝ摺ル音や御秡川　林陰

てどり川の淵のわたり、地藏の鼻のかけたるに、何なか手向む

佛めく石を見立る枯野かな　北枝

旅にさまよひて

綿ざねの猶すいがらや旅乞食　句空

行脚、としなかされ、東武にかへりて

ともかくもならでや雪のかれ尾花　翁

炭焼のひとりぞあらむ釜の際　共角

から鮭を引切ル年のいそぎかな　四睡

寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

己（おの）が光（ひかり）

車庸撰

漕ゆく船のあと見ゆるまでといへるは、花多(おほく)して實すくなしとや。されば誹諧もとは粧ふのみにて、其ひとすじ(一筋)にいづる事かたしとは、蕉翁の云へるなり。このことば鐵肝石心にこたへて、日々にこれをおもふ折から、勢多・石山の螢さかりなりけると、魚荷に告しをうれしくも、卯の花のさらに咲ころ、槐之道(くわいしだう)をさそひ、夜ふねのつなもあ(明)けやす(易)ふ宇治越にかゝりて、彼里の茶屋のわびしきにやどり、さゞ波やけふも火ともすくれまちてと、そこらのけしきをうち興じけるに、膳所の吟友たれかれを先としてきたり、互に人をおどろかさんと、方寸をくるしめしに、此宿にも翁の吟行残されしとて持いづるを、おの／＼肩をならべ、かしらをつき付て味ひ侍るに、實も深長なることをつゝはふ。さるから此句を上に置て、その夜のたはぶれをならべ、己が光とは名付侍りぬ。

元祿五壬申夏日

車庸

己が火を木々の螢や花の宿　翁
よひ月や螢かたつく小松原　曲水
螢見や田樂さめぬ七ッ鉢　正秀
螢行闇の爪田の番所　臥高
螢見やまじかの鮓の馴かげん　昌房
降出してはら／＼雨や螢谷　乙州
ほねをりやくらき五月を行螢　里東

勢多の橋の下を漕せて

螢見や鯉も胴うつ五間の間　車庸
あからむや大麦の葉にちる螢　楚江
水草の暮るゝと見へて飛螢　探志
川風や行水ながら見るほたる　木枝
雲のまの更て露けき螢かな　游刀
我ながら童部らしさよ飛螢　尼智月
ゆく川の心うごかすほたるかな　木節
螢見や勢多の茶時の天道干　之道

即興

螢見や茶屋の旅籠の泊客　珍碩
　湯殿の下駄に散る卯の花　車庸
そよ〳〵と風にはちくの皮干て　正秀
　笠一繩手先へゆく鑓　昌房
百舌鳥ひくやおこしかけたる皿の月　曲水
　露のよどみにむつはねてとぶ　探志
椀家具も人の跡かる船の秋　之道
　乳いはるたびに泪ぐみつゝ　執筆
初雷のしるしにのこる鬢鏡　庸
　それてお鷹の野におよる殿　碩
一腰の太刀をうばひに袴垂　游刀
　ふみやぶりたるせゝり學問　秀
まれ〳〵に松茸そうの朝ヶ月　房
　秋は仕着の紙衣待かね　水
西風に吹れてわたる柄長鳥　志
　馬士の訴訟に坂をりてやる　刀
小利根にかゝるた結びの花心　道

筆嚼顔に恨ある春　庸
鶯や守人もなき鳥羽の御所　碩
　土うきあがる雨の明ぼの　乙州
薬代に切紙そへてこめ一駄　楚江
　こゝろ奇麗にすます請公事　木枝
くろ雲の内へとび込ほとゝぎす　秀
　晝は自在の鑵子淋しき　房
緣とりを客の數ほど敷ならい　水
　見わたす蕎麥の出來の粉八合　志
三ヶ月の落かゝりたる山の間　刀
　坊主あたまを撫るやゝ寒　道
さら〳〵と墨繪書遣るふくさ紙　庸
　目利は戀の入ほがになる　秀
押なべて三百づゝのかり枕　碩
　爲朝ゆりの精出して咲　房
あま乞の太皷やかまし飢饉年　枝
　札にて國を送る行脚坊　江
氣色立花に脊かけ樫原　州

我まゝに鳴雉子の一物　水

京への文にきこえ侍る

それよりして夜明の馬や蜀魂　其角
ほとゝぎす鳴や榎も梅さくら　丈艸
京にても京なつかしきほとゝぎす　翁
郭公すがひ拍子や闇の友　史邦
子規すがるか聲の木の間なる　野童
石菖の朝露かろしほとゝぎす　素牛
ほとゝぎす藤に來そめて桐の花　梧朝
鮫ふむ雨の川原や郭公　之道
杜宇鳴や白子のなみがしら　荒雀
塩かなの夜は聲ちかしほとゝぎす　可南
帆柱の木やりと月のほとゝぎす　爐竹
あけぼのゝ松にはじめて郭公　鳳伋
空もまた辰巳あがりや郭公　車庸

燭寸

郭公なくや雲雀と十文字　去來
晝飯ふるまふ麥の手つだひ　之道
杖つきの御判を急度表具して　史邦
おき臥やすし元服の後　車庸
名月にはづして戻る橋の板　道
稲葉に虫の飛ありきぬる　來
行水もけふこのごろの良寒　庸
かたすみさがる大黑の棚　邦
約束のよひの寐所替りけり　來
坊主落めに虚言も云まけ　道
九州の舟の内より契そめ　邦
憂たひしむる紺染の帶　庸
うはぬりも合せた土の有合に　道
金目貫のひらく最中　來
百足をふみかゝりたる月のくれ　庸
法師等ならぶ薄べりの露　邦
花盛首をふれば如意が嶽　來

日よりあがりの小鳥囀る　道
先ぐりに旅籠すへ出す朝霞　邦
御物の供とふり立て行　庸
つめひらきさらりとすみへ忍草　道
青竹ぶちの柴垣の月　來
濱邊までとりちらしたる蕎麥のから　庸
まだ遠國に駒むかへする　邦
帷子も二つなければならぬ也　來
ところのさたに先ハ醫師分　道
うれしさや飛脚だよりの伊勢鯨　邦
雪氣の雲の折〱に出る　庸
からびたる柿木原の夕あらし　道
はたけしまふてかへるなりけり　來
精進を落よ〱とすゝめられ　庸
たゞ兩眼になみだ一ぱひ　邦
憂わかれ笠着る内もふらつきて　來
すそのゝ蝶のいづる曙　道
花散や床と持佛をふり分に　邦
鏡の裏の梅ながめ入　庸

午ノ年伊賀の山中

春興

種芋や花のさかりに賣ありく　翁
こたつふさげば風かはる也　半殘
酒好のかしらも結ず春暮て　土芳
ぬぎかへがたき革の衣手　良品
有明の七ッ起なる藥院に　半殘
ひさごの札を付わたしけり　翁
秋風に槇の戸こぢる膝入れて　品
小僧のくせに口ごたへする　芳
やす〱と矢州の河原のかち渉り　翁
多賀の杪子もいつのことぶき　殘
手枕のおとこも持たで三つ輪組　芳
人にとりつく憂名くちおし　品
萱草の色もかはらぬ戀をして　殘

秋たつ蟬の啼しにゝけり　翁
月暮て石屋根まくる風の音　品
こぼれて青き藍瓶の露　芳
蕣（あさがほ）の花の手際に咲そめて　翁
細や鳴來る水のかはりめ　殘
猫の目の六つ柿核に四ッ圓く　芳
あすはもよひの繊蘿蔔きる　品
からうすも病人あればかさぬ也　殘
たゞさゝやいて出る髪ゆひ　翁
とり〴〵に紺屋の形を取散し　品
冬至の縁に物おもひます　芳
けはへどもよそへども君かへりみず　翁
まだ元服のあどなかりける　殘
朝夕にきらひの多き膳まはり　芳
いとあはれなる野ゝ宮の衆　品
田鼠の稲はみあらす月澄て　殘
風ひえそむる牛の子の旅　翁
露しぐれ越のさきおり袖もなし　品
しなすは人の何に成べき　芳
神風や吹起されてかい覺ぬ　翁
筆をおとせば追書出す　殘
しら〳〵とひとへの花に指（さし）むかひ　芳
長閑き晝の太鼓うちけり　品

春部

人も見ぬ春や鏡のうらの梅　翁
月影に梅くづをるゝ光かな　露沾
梅が香も散か納蘇利（ナソリ）の舞の袖　之道
むめが香や紙衣の綿の出次第　野徑
紅梅の九尺ばかりや釣簾（コス）の前　史邦
起あがる枕硯やたびの梅　車庸
初午や畠のむめのちり殘り　素牛
赤味噌の口を明けりむめの花　游刀
廣庭や鳩の物くふ梅の花　昌房
ねち上戸けふは柳にやらしませ　智月

鳴尾の眺望

莚帆のひるみや灘の一霞　車庸
胡妍茶も船ごゝろ也朝霞　之道
猫の戀やむとき閨の朧月　翁
おろ／＼し妻に呼るゝ猫の顔　車庸
寂蓮の詠哥ちぎるか猫の妻　露沾
衰や齒に喰あてし海苔の砂　翁
山吹もちるか祭の鯲なます　珍碩
一いきに晝の雲雀や雲かくれ　車庸
白藤や雫に鯉の浮世がほ　史邦
鰻にもならずや去年の山の芋　盤子
春雨に嘶をくふや堅田鮒　楚江
いとゆふの殘りて水はながれ川　之道
かげろふや巣立雀の具足羽　車庸
歸るとてあつまる鳫よ海の端　去來
若菜摘手や袖縁の紅の色　盤子
菜の花や小屋より出る渡守　史邦
人が人を戀るこゝろや花に鳥　其角

咲そめて盛もなしに椿哉　之道
新道の畳土かはくすみれ哉　里東
ふせ芝に馴親見せしや菫草　之道
起よ／＼我友にせんぬる胡蝶　翁
我年の積るもしらで孫の春　長崎 田上尼

題古例

そり椀の蕗煮うるはし花甕　車庸
早蕨や笠取山の杜より　正秀
うつくしき顔かく雉子のけづめ哉　其角

木曾の彌生の雪も消て

桟の下上ながらさくらかな　車庸
櫻咲寺に貴し善の綱　探志

盤子、白川へ行脚を聞て

鉢の子に請よ櫻はちりぬとも　智月
とらまえん道なき嶽の藤の花　車庸

餞別

春の夜に寐道具かすか芳の山　珍碩
なげいれて晝寐忘るゝ櫻哉　正秀

花に行我襟垢の青布子　臥高
このあめにうごかれぬとや花盛　何處
山吹や翠雀の囀る境日垣　車庸
山吹や茴梲あらふさとの川　句空
白桃や雫もおちず水の色　桃隣
花さそふ桃や歌舞伎のワキ躍　其角

追悼

散花やあとは阿彌陀の爪はじき　楚江

追芭蕉翁

西上人の其きさらぎに法けいきたれば、我願にあらず。ねがはくば花の陰より、松の陰壽はいつの春にても、我さゝもなはむ時

松嶋の松陰にふたり春死む　素堂
順禮と打まじり行歸鴈哉　嵐雪
散花や脊を隔に足の裏　其角
花鳥や雛の硯のうす蒔繪　車庸
行春の何の句ひぞ小くらがり　之道

鶯のころに出たつ砥ほり哉　正秀

夏部

曲水子にいざなはれて、勢田の螢見にまかりけるに、夕のほどながれにつゞきて下りぬるさ、かたればゞ、猶おもさゝ下して

螢見や黒津の梢兒か嶋　去來

夫のさしの大水に、吾艸の戸も浮ばかりなりけるな

高水や荒たる中の郭公　珍碩

江府より發にいせへ參りて

あひの山誰追かけてほとゝぎす　乙州
市馬の尿の臭きあつさ哉　昌房
卯の花や蚯蚓がら山の道の隅　其角

三上眺望

雲雀鳴あと物すごし夏の山　臥高

逢坂やいづれの杉を鳴蟬ぞ　之道
蟬鳴て替駕籠もなきあつさ哉　探志
手さぐりに夜も見らるゝ牡丹哉　丈艸
衣更そこつに帯をときにけり　嵐蘭

美濃ゝ國にて辰のさし

またゝぐひ長良の川の鮎鱠　翁
道端を眞虫のをよぐ五月雨　車庸

人々點願はしきよし申ければ

獨立足の力やほとゝぎす　桃隣
哥何首詩何首老の杜宇　艶子
竹子や境めもしらず二番生　智月
鹽鯛や余花の膳部の一はづみ　車庸
虻蜂のとまりそこなふけしの花　正秀

南都の行

此水に米類ばらんかきつばた　素牛
はね釣瓶池の行衛や杜若　丈艸
夏草の青も見ずや姥が池　芹花
夏木立どちら木つたふ猿の聲　安枝

雨戸なる二階坐敷や桐の花　車庸
青草や俎板に置く夏茗荷　臥高

つまもたぬ游刀がうらやまれて

妻なしや見かけも涼し寺住居　探志
蚊の鳴に目に見ぬ鳥も聲そふか　之道
蚊やくらふ足かなながら高鼾　長崎 卯七
わりなくも尻を吹する涼み哉　亡人 一笑
水無月や朝起したる大書院　素牛
三味線や芳野ゝ山を五月雨　曲水

四條の川原すゞみとて、名月の夜のころより有明過る比まで、川中に床をならべて、夜すがらさけのみ、ものくひあそぶ。をんなは帯のむすびめいかめしく、おとこは羽織ながう着なして、法師・老人どもに交、桶やかぢやのでしこまで、いさまえがほにうたひのゝしる。さすがに都のけしきなるべし。

川かぜや薄がききたる夕すゞみ　翁

夕すゞみ石がけひとつふみかきぬ　珍碩
菻の過て蚊の口かくぞ鬧しな　及肩
蚊の聲にのがれすまして蚊屋ひとへ　曲水
蚊柱に夢の浮橋かゝるなり　其角
大筆やうち立ほさぬ五月あめ　巴流
五月雨や壁を力に立しびれ　夕市
夏の日や疊の上のあぶら足　車庸
白雨や川追あくるはだか馬　正秀
夕立に面もふらず神輿ぶね　之道
すゞしさや出嶋の石の上すべり　楚江
芥子咲て見るや近江の船の足　智月
猪の牙にもげたる茄子哉　嵯峨田夫 爲有
麥の粉にむせて腹立大わらひ　之道

人のもさへ遣しける笠の裏に書付て

あつき日の風になれかし管の笠　車庸
蓴菜や魚とり迯す鷺のかげ　巴山
麻頭巾吹落しけり青嵐　巴流
此中に巾着切や夕すゞみ　里東
二ノ丸の門出はなれよ夕すゞみ　盤子
蕗の葉に鳴出る蚊や微雨晴　珍碩
このすじのあつさや麻の荒島　車庸

秋部

蕣や桃の下葉のちり初る　之道
蜻蛉の往來隙なき薄哉　車庸
花すゝきとらへ力やむら雀　野童

百里、順禮せしさて音信けるに

順禮を猿の繪に見ん萩の風　珍碩
夜寒さや蒲團一つにまかれけり　百里

木曾塚、無名庵に一夜あかして

木曾殿と背を合す夜寒哉　伊勢 又玄
あさ露や木曾義仲の力瘤　之道

同じく庵にして

工たる庭とも見へじ萩の露　車庸
栗稗を夜永に燒ん秋三月　野徑

追善

のがれぬ野をいひつめて袖の露　北枝
煙にも腹ふくらかせ若たばこ　乙州
取口よりかけて詠るたばこ哉　其角

世の中はくふて糞して寐て起てさてそのゝちは死ぬるばかりよさ口にまかされし、此實骨髓にさなり肝にめいじて

あさ顔の勝にむかふや初嵐　珍碩
蝙蝠のしのぶ撫るや塀の屋根　之道
淺茅生やまくり手おろす虫の聲　去來
立ながら獨しほむや曼珠沙花　正秀
柴人の晝寐をからむ蔦かつら　加賀山中 桃夭

ある智識ののたまはく、なま禪大疵のもとひさかや、いとありがたく覺て

稻妻にさとらぬ人の貴さよ　翁
蚕竹の瓦や普請まへ　車庸
露の置鍋もありけりきり〴〵す　ぜゝ 補道

古筆の箱に殘れりきり〴〵す　之道
小割する竈の前やきり〴〵す　里東
夕皃に殘るあつさや油賣　臥高
胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉　翁
色鳥の顏のまことや楠の秋　車庸
鳥指の素戻りをする野分哉　正秀
燒立し竈も閑けしけふの月　支幽
野分立雲の急ぎや乾こみ　探志
無花菓や垣は野分に打たふれ　史邦
藁風にも落す葉もなしたくら柿　車庸
辻堂に集立込月夜かな　丈艸
行せや蛾を見かへる芳田の月　魚樂
名月や野土灘の晴すかし　三 啓町
名月や疊の上に松の影　其角
名月や宵寐まとひも人まじり　之道
打たゝく駒の頭や銀川　去來
粟の穗の上に見越すやあまの川　臥高
七夕や鐵砲的のすたる畑　游刀

盆に死ぬ佛の中の佛かな　智月

鳴弦に鳴もかゝらず秋のくれ　車庸

胡麻からの寐たり起たり秋の雨　野徑

車庸子の庭興

横わたす柄杓の露や錦草　素牛

鼠尾草やしほれて殘る棚の隅　巴流

しばしとやうとん過ての梅もどき　之道

一方は色づきにけりむめもどき　裾道

玉虫の羽いたひけや唐がらし　探志

袴着てはぜ釣男非番哉　巴山

湖も廣しくるなの秋の聲　路通

いさなみにはあらで獵をすける人の許に一夜はなしけるに、隣になく音しきりなれば、いかなることにやととふ。あるじ答て、このごろ夫にわかれ、寐覺〳〵に斯侍るさかたる。哀、身にしられて、次手に獵をやめよといさめて

薄壁の隣も鹿のはなれ妻　車庸

栗の實の有にやまかするのこ艸　乙州

腹なりて夜永き秋や狹の聲　恕誰

白銀の目貫やさしや藤ばかま　珍碩

奥山に鳩吹聲やこぬかあめ　之道

一くゝり双紙やしめる木槿垣　素牛

手釣瓶の繩の雫や木槿垣　貝壽

初秋や古き枕のあぶら垢　之道

栗稗の粥喰盡す月見かな　仝

心見のあま干おろす月見哉　車庸

橋桁のしのぶは月の名殘哉　翁

以上三句は、後の名月石山にまふでゝ

人麪の下燒立る夜寒かな　仝

をく露に菊の勢やあぶら糟　車庸

紫の菊や月夜の薄しらけ　荘人

からき世にくらゝ貢也秋のくれ　游刀

凩のまじりて吹か秋の雲　史邦

冬部

雪の日に見たし福嶋太夫殿　珍碩
我雪とおもへばかろし笠の上　其角
鹿子ゆふ音きこゆ也夜の雪　素牛
はつ雪や金柑折て樽のうへ　史邦
冬の海勢一ぱひの入日かな　長崎 卯七
下帯は竿にかけつゝ冬籠　木節

小町畫讃

貴さや雪降ぬ日も蓑と笠　翁

馬上の吟

喧嘩より埒の明たる時雨哉　車庸
鰯やくかざも伏見の時雨哉　臥高
草庵の火燵の下や古狸　丈艸
縫物に主よりゆるす火燵哉　龜翁
押合て火燵にあかせいつもたび　之道
初霜に行や北斗の星の前　百歳
百舌鳥の居る野中の杭よ十月（かみなづき）　嵐蘭

薄雪やから尻寒し齋（とき）坊主　車庸
冬の夜の日の行方や魚戸棚　珍碩
あさ夕は坐具にもしたる頭巾哉　遠水
抓針埒明てをく頭巾かな　之道
莚帆にあられたばしる月夜かな　長崎 暮年
霙降日や魚棚の海老の色　臥高
我聲のすごきもしらず鉢扣　乙州
鉢たゝきうき名忘れそ鉦扣　之道
世の中をとはず語や鉢たゝき　艶子

草庵をとひて

梟の目ざまし時か冬木立　車庸
炭燒の獨ぞあらん竈の際　其角
炭竈のけぶりの橋や雲の浪　之道
こがらしや夜中過たる茶の出ばな　里東
青柴をとけば昨日の時雨哉　妓童 萩水
水仙や土をはなれて箱の中　車庸
たてつけの日影ほそしや水仙花　素牛
はつみぞれ鵯の闇飛小鴨かな　蝉鼠

すゝ鴨や背に雪の一つくね　支幽
虵もせよ木兎もせよ雪の猫　嵐雪
雪の日やどれがむかしの都鳥　桃隣
早砥引音は何とな夜の雪　之道
比良の雪生鱈來べきあした哉　正秀
雪降や調拔子しづむ夜の神　車庸
ことならぬこそ貴けれ里神樂　之道

大津にて

三尺の山も嵐の木の葉哉　翁
塀こぼつ跡の寒さや冬椿　游刀
うつ浪に身をまかせたる海鼠(なまこ)哉　車庸
年忘れ長者獨よ餓飢九人　史邦

旅行

煤掃は杉の木の間の嵐哉　翁
すゝはきや木綿布子のところはげ　安枝
餅つきや臼も柱も松臭し　之道

歳暮

天地(アメツチ)の盗人しれやとしのくれ　曲水

門砂をまきて師走の洗髪　里東
御歳暮に鷹も旅する師走哉　臥高
師走ともしらで秋の長さ哉　桃隣
春來ると猫もいそがし品定　之道
山伏や出立そろはぬ除夜の闇　正秀
一ぬかり酒のもろみや年のくれ　車庸
年(トシ)の夜や引むすびたる繦(サシ)守(リ)　素牛
としのくれ八坂の塔の鈴の音　怒誰
日の入になりぬ師走の上繪書　及肩
節米やみぞれ拍子の筐の音　珍碩
年の夜や鰤や鰯や三の膳　去來

翁、つゝがなく霜月初の日、むさしのゝ舊艸にかへり申さる。めづらしく、うれしく、朝暮敲戸の面〳〵に對して

都出て神も旅寐の日數哉　翁

住捨し幻住庵には、いかなる句をかのこされけん。それにそれ、さて世の中をうけたまはるに

妖ながら狐貧しる師走哉　其角
かくれけり師走の海の鳰　翁

追加

月代や薄こぼるゝ座敷中　車庸
旅した顔のなつかしき秋　珍碩
むしくひの渡と峯の霧過て　素牛
立具の板に挽す杉の木　之道
片庇は干鰯積たる呉服棚　珍碩
みぞれ小降てあたらしき鯛　車庸
踏立て大名通るあとの風　之道
まだ眞銅のさびぬ御魂屋　素牛
かるなみに杉を植たる力竹　車庸
茶碗に盛し松茸の味　珍碩
雷もなりやむ月のあさふかき　素牛
畠の秋をのたる子泥龜木　之道
居間に居て質とる袖の美しき　珍碩
鼻明て來る文の腹立　車庸
花の雨鼬のねぶるあぶら皿　之道
山吹ひらく本陳の晝　素牛
かげろふに小刀うりの美濃詞　車庸
若衆もらひにかゝるあつかひ　珍碩
一代はむげんの鐘のうき分限　素牛
月待床に獺の皮して　之道
馬糞の羽さへよはる秋の風　珍碩
蕎麥の花咲いかるがの寺　車庸
片いじに桶の輪人がはなし口　之道
押出す舟を乘て手つだふ　素牛
夕晴も頼にならぬ節の雨　車庸
給の袖におつる鼻紙　珍碩
見物の多き地道をさしかねて　素牛
宿割ひとり着し乘掛　之道
醬油を干ならべたる日の匂ひ　珍碩
ぬすみおふせし猫の堀出シ　車庸
人あしも十夜の比の村時雨　之道

世をかたらくに木綿の棚　　牛

出次第に鯉の料理を云かすめ　　庸

札を見分てかへす印判　　道

村はみな仕詰過たる花の春　　碩

霞は直に曇る日の中　　牛

京寺町二條上ル町
井筒や庄兵衛板

俳風

弓（ゆみ）

奇なるかな
是俳魂

壺中撰

爰に物あり。其聲は梵天にひゞき、其象は鐵圍にみてり。我友をの〳〵是を射んと、神力の大弓をひいて、忽千萬に變身して蒼天にのぼり、大地をくゞるいきほひを起し、須臾に塵世界を飛行して、これがために無量の箭さきをむかふに、空々然として、奈何ぞ其的のあるところをしらず。奇なるかな。是誹魂。

踏景廬
壺中

伊賀の國花垣の庄は、そのかみ南良の八重櫻の料に附られけるといひつたへ侍れば

一里はみな花守の子孫かや　翁
友猿のともえらびすな花衣　其角
花いまだ日わよし睡たからぬ哉　風水
烟臺を荷なはせて行花見哉　吟徳
酒のんで蝶になりたや花の比　一峯
咲花や立見の衆は心まゝ　一至
恥かしやせんじて飲と散花か　沙門利雲
禪門や花の戻りに先立て　壺中
不二おろし外山の空や雲ちぎれ　芦角
待戀に一しほあかし梅の花　須幸
うぐひすや竹の枯葉を踏おとし　荷兮
うぐひすや中にての下戸間に立　一至
西行の一夜泊りやかへる鴈　壺中
陽炎にうかれ來にけり東山　椿石
苗代や門主の輿をうちひらき　芦角

朋友に逢て、おもひ出る。

菴汁は今よそなたの下屋敷　一し

まよひ子の太鼓きく夜の朧かな　壺中

春雨や戸板に白き餅の跡　酒樂

ふら〱と輕き砲煎うる男哉　荒若

りちぎ也日陰日南のつく〱し　一至

爐ふさぎて寢心しらん草の菴　椿石

桃の酒子供のやうにかしこまる　壺中

精進の物とも見えぬ海雲かな　同

斜九良狩女の足の達者也　芦角

こりもせで今年も萠る芭蕉哉　凡兆

雨の日や門提て行かきつばた　信德

郭公船は追手にはしるなり　壺中

三日月に腹中もよし杜宇　猪名原 宵闇

景清も夏花摘らん淸水寺　一至

いきほひぞ稻荷祭と麥の穗と　同

鯛の味あれて牡丹のさかり哉　壺中

過し年、廓闇いあやめよ部の連さはんと一至のせられしは今に殘りぬ。我言の無は當座の興、寂滅爲樂とひゞく也。

廓闇のあやめも翌日はしほれなん　同

二句のあやめに文思ひよりて

おなじ世にふかれずに濟菖蒲もあり　椿石

さし比正秀の好士に約して石山の螢見に行みちくさ

螢見や夕めしくふて京を出　團水

大津

初鰹くわぬは志賀のうらみ哉　同

石山

斜賀理こぬ螢や秋の小望月　同

あきの日、勢田のある菴にて饗せらる。

鮒鱣ほたるぞあひの取肴　同

火ともしに行違けり夏木立　川嶋 冬里

瀨田

螢見や感陽宮の夜の榮　コ中

鬼百合はこはい物にてなかりけり　一至
口中や草もえ喰ず躶馬　芦角
楞嚴を聞しづまりぬかんこ鳥　（猪名県）蔦石
山伏の痩て出けりかんこ鳥　如山

難波津に行、夜船

船頭に諷おしへん夏の月　壺中
難波江や蚊遣ふすぼる泊り船　芦角
傾城の歩行姿や百合の華　椿石
物思ひ歯かたにしるゝ團かな　（松本）生松
何ひとつ流ても來ず清水影　（松本）湖船

讀二古文一

戀ならで蠅の付さし飲にけり　（清川）蘭風
毎日をけふがあついと中なり　壺中
蜻蛉の藻に日をくらす流かな　凡兆
小車や何菊と名のつくべきを　越人
鳴なくやわづかに黄ばむ柚のあたま　野水
うら枯や水風呂たつる旅の宿　鳥巣

虚鴾をつりて戻るや秋のかぜ　壺中
桐の葉のやぶれもやらで落にけり　芦角
豐國の稲の穂さきや天津風　一至
野中也物をと絶て天の河　壺中
秋の野や何を目的に犬の聲　椿石
にぎはへど酒もりはなし魂まつり　一し
共人を毀事なし靈祭り　コ中
たよりなや大地をふんで秋の晩　丈艸
さまざまの秋の手がらは夕哉　一至

國もさへ、かへりて見ろ。

古郷に又珍しやみなし栗　順幸
なげ入に薄たしてよ今日の菊　コ中
素布子に風入ころや鹿の聲　椿石

傾城のいひけるは

君が手や松茸山のいばらがき　コ中
名月や袷羽織のひつ臭き　ロ角
八月の今日は別して月夜哉　（亡人）賈道
蔭垣のくづれかゝるや秋の月　壺中

名月や村の醫者殿催されれ　椿石

今鉢之月何者見之非其空裏亦非無如何

月と心はなれて後の月見哉　壺中

月と心うごかぬさきを月見哉　一至

月と心はなれぬものは月見哉　一峯

三嘴之口誰決是非解了之畢而
心一句提來

月見哉たゞ月見哉月見哉

枯木にやならん葉守の神無月　徳元

冬なつや人がほすごき水の影　一至

十月やとり亂したる雲のさま　作者不知

時雨るゝや背負つれたる木葉かご　壺中

梟のぬかる氣色や冬の月　椿石

女のもとに忍し夜

早明ぬ氷つきわる杪のをと　芦角

おなじかへさに

雪の道我乞跡の大きさよ　同

野郎呼共夜は雪の降にけり　酒桑

雪ふれやあらあらとまる竹格子　壺中

大雪や足ひきぬいて行男　如山

雪掃や組句旦那のとがり聲　大津 湖至

瓢簞に酒いれて出よ鉢たゝき　芦角

雪ふるか燈うごく夜の宿　凡兆

木のともに立すくむ夜ぞ冬の梅　コ中

節季候の來れば風雅も師走哉　翁

いぬる年の冬、やんごとなくて播磨に行事あり。あまた名所を見るにたゞも過がたくて、所々のいひ捨共、ほごほごのあたら物にしてひたんにしるし侍る。記行はうたゝ書々に見え侍れば、これをかゝずなりにし。

淀船にて

時雨ぬ日肥るでもなし木々の山　一至

尼が崎にて

むら千鳥船頭どのを見知るかや　壺中

寒さうに舟引姿〳〵哉　一至

右領分の内甲山さいふよし

丸形に雪の日見たし甲山　同

兵庫　楠塚

ちるものと楠塚も木の葉哉　壺中

一之谷　判官殿のむかし語、

今のやうにおもひ出られてや。

岩かどに崩すきほひよ玉霰　同

敦盛　石塔

是非もなやいとゞひえたる石の肌　同

仲哀天皇、五色塚のあさ

五色塚今や蛚の冬籠り　同

須磨の浦

須磨なれや今はいか様冬の月　一し

人麿の社に詣でゝ、明石の浦にさしかゝる。

ゆるさしめ頭巾きて見る明石潟　コ中

淡路山を見る。

淡路山つゝほりとして時雨けり　同

網干にしばらくとゞまり、かへるさに書寫山にのぼる。

凩やこがらしの中の三ッの堂　一し

おなじ山路

冬がれを拜む心に成にけり　コ中

あれにさへうらおもてあり散木葉　一し

曾祢の松

幾時雨ぬらしあぐめり曾禰の松　同

我々が貧乏なりや祉うれしけれ　コ中

雪吹ばけしきそねの松陰

おのへの鐘

尾上の鐘石でならすなかじけても　一し

十月や尾上のかねのひゞく也　コ中

旅宿にて硯をかりけるに、いとふるめきたれば

此硯さぞ天筆や書つらん　同

戻り、兵庫の浦

つふ〳〵と鴨や入浪沖の波　一し
海づらやよい汁がとぶ鴨の聲　文助
さぶいとはいかに船人肩ぬいで　コ中

それより大坂に逗留して、京へかへる。

とりあへず風呂敷かくる火燵哉　一し

よし田山即事

人々に露をもてなす山路かな　一至
どんぐりころぶ身は酒の醉　越人
夕ざればば莨宿ねさする軒下に　凡兆
うちつゞきたるこの比の月　烏巣
旅はたゞ二月に出て九月迄　野水
またも手織の布曬ひけり　壺中
葭垣を引崩しては結直し　芦角
清書せよとふるゝ八ッ時　至
蚤の飛ぶ跡をおさゆるどや〳〵と　人
居なをりざまにやるゝ帷子　兆
いひわけをするほど巾ひらかれず　集
鼻かみ捨るきれ〴〵の空　兆
孕よい物もくはれず湯もいまず　人
砂室のかたをみする品〴〵　角
珍しき咄仕出してうち笑ひ　中
ともしつけては又紙燭けす　水
月華のあたり次第に宿取て　集
かゝるめでたき春にご有ける　人

尾州の人々に餞別

秋の夜を輕く受取別かな　一至

おなじく

つれなさよはや捨られし栗のいが　壺中
どなたへもかたじけなさの女郎花　越人

東西をわすれはてけり薄原　壺中
雨にふられて過るひよ鳥　荒若
肌寒く主の供して歸るらん　仝
月の出しほの物しづか也　壺
うぞ〳〵と頻に痒き耳の垢　中
御目見えしたる京の呉服や　荒
立並ぶ松に冬至の風落て　若
淺瀬を渡る靜はらの馬　壺
高聲にわる口いふも戀なれや　中
なるまで門に待明すべき　荒
かたまりて凸雨雲の眞黒に　若
ひとへ羽織をぬひ仕廻けり　壺
吹さする俊成紙のたばこ入　中
野は五色也紫苑刈萱　荒
初嵐拍子得たりし手ぐり船　若
おとした錢をさがす有明　壺
花守が折な〳〵と呼かけて　中
長閑に見えし智恩院かな　荒

うれしげにいくらも鳥の囀りぬ　若
御氣にいりの官者が朝起　壺
ふつゝりと離れ切たるあだ心　中
細語事をしかる也けり　荒
照月に青侍をもてなして　若
前後には早稲の刈置　壺
秋かぜに吹飛されし破れ笠　中
癲癇やみの臥る道の邊　荒
何となく世間しづまる鐘の聲　若
野郎むかひに參りつゝ比　壺
立出してあとを忘て物思ひ　中
所によりてさま〳〵の富士　荒
松杉の葉を誘ひ行鷹の羽　若
しのびに馴し身の兵　壺
むづかしと虫歯拔てぞ捨にける　中
俄まいりの伊勢の旅立　荒
三國に譽有なり花の春　若
身を養はん櫻見るまで　壺

獨吟　　　　　　　　　　　一至

譽られてしまふは一重櫻哉
　犬ほへあるき鶯も啼キ
青雲や日本晴の春風に
　お脉がよしと次へ出にけり
見わたせば幅袋かけたる菓子袋
　皆くち／＼に口叩ク月
秋の哀それおもしろと旅立て
　まだ朝露にのびぬ草共
ウ
菴室やたゞもいられず味噌を摺
　神鳴きくとやがて心經
りちぎなを啞方とばかり覺へしか
　泣しみついて古懸をとる
つき倒すおとこの膝を又枕
　かよふて見せむ大雪の夜さ
寒菊にあかば山茶花水仙花
　まめなといふて掃除さゝるゝ

時行歌聲ありたけやせめられん
　随分にほふあぶら一具
縫琢へ鑓はなけねどふしおがみ
　惡性出すも花心より
我まゝにならぬは月の朧にて
　二十四日のあかつきの御忌
名
いづれもの腹のたしかなこゝ食に
　この船頭も秀句やらふか
武庫山や濡てほどひて時雨梟
　火燵で落葉みし世ゆかしも
かいになる名を裂文のごろ／＼と
　なさけに智慧の底をたゝいて
凉しさよことに虱のなき所
　共泥うけぬ蓮池の華
拂子にて人追まくる善知識
　のみたい時はせんじ茶をのみ
内かたの御世話もしらで泊る月
　なぜに今夜はおどりなき町

嵐ふく國の隅まで早稲長て
　錫一對をはこぶ神前
名　昆布汁の塩吸ふてみる家ごとに
　死ぬるはなしは先きらひ也
丸腰が心やすしと立忍び
　おもひのつもり富士とこたへよ
宵闇や狐おふかみ熊狸
　功者な奴を宿かりにやる
みるや否囉ひかけたき花の香に
　安樂世界やよひ今日

弓

青柳よお身は河邊が似合たり　椿石
　あたまのうへにかゝる蜂の巣　壺中
霞しは大きな家の隣にて　一至
　いつうたふのもいかに盛久　石
しほ買にちよこ〳〵はしり宵の月　中
　案内なしに秋の霜ふる　至
あさがほはいちはなかけて哀也　至
　借金もたぬ身こそ安けれ　石
茶をわかし食喰じまひ茶をわかし　石
　鼠がなければねずみなきする　中
丹波から這ふて出たとて奉公に　同
　すれば說じやの見こし入道　至
戀衣氣をばくはらりと持給へ　石
　うす雪御前物もまいらず　中
綠靑にふどらるゝ身と難かるゝ　至
　虛を商ふまじなひの札　石
けに田舍心もなくて月と花　中
　藪からぐたりうぐひすの糞　至
あら長閑旦那は留守の下屋敷　石
　先祖をほこる儒醫の法眼　中
扇をばひらいたり又すぼめたり　至
　あかしてのけん一向おもひを　石
緣ぐみを勝手つくとは色もなし　中
　屛風こけてもあとしづかなり　至

抑是はかた言いひの幽れんよ　同
不斷に酒が好であつたか　中
ありついて武藏の国へとんだげな　同
月夜に雨の念ははなれて　石
ふり袖の躍子みれば老人なふあれ　同
綴つぶりと〳〵あいたしこ秋　中
どひやうしな御禮に腹をかゝへさす　至
祭の晴とあらむしろしく　石
寐入たら何を仕まいと儘ならん　中
ことさら髭のあつき仙人　至
たちまちに花をちらすは先無用　同
おもひ〳〵な春の雲立　石

物にはじめ終りあり。螢のさかりに一番二番あり。壷中のぬし、後のさかりに、勢田にまかられけるに送行。

二番目の螢見に行羅漢哉　團水

やぶれたいほど破れかたから　壺中
商のはなし致せば御機嫌で　同
手作の根深くはられにけり　團
ふき出る茶釜の音もゆたか也　同
眼も痛む月のかゞやき　壺
椎柴を刈ゞ鎌倉の權五郎　團
やき米こぼすやつは龜谷　壺
赤髮をたばねて曬ふ今年藥　團
行水をする雲隱の脇　壺
郭公内裏近くで鳴もせで　團
ふらり〳〵とふらり煩ひ　壺
朝めしも蕎麥切夕めしも蕎麥切　團
代官殿はあからがほにて　壺
聲高にむつ言壁をつき洩し　團
涙にあくる座頭夜一夜　壺
耳にあてゝ扇をならす花の下　團
なぞとけかねて背かすむ月　同

百韻

雪の日や水鼻すゝる大和尚　壺中
蒲團かさねて椽をひきずる　芦角
雷にのら猫すべり落にけり　同
また髮ゆひが長ばなしゝて　中
縫ものゝ針うしなふて尋かね　同
常の二階に寐いらざる月　角
松の葉のちから程ふく秋の風　角
放し飼なるきり〳〵す啼　中
わがせこは國に召れて笛の役　角
寺請とるもはづかしき袖　中
砂原にあからむ梅のころ〳〵と　角
ないて居る子の顔の黒さよ　中
白川や幕に老馬が爪うちて　角
いざや見つがむ敗軍の君　中
名月の酒のみ散す只中に　角
桶の草花ふみこぼしける　中
幾秋をヤボタ〳〵とはやされて　角
飢饉の年も米の食くふ　中
溝川に陳皮あらふて戻る也　角
雨氣に聲のしめる鳥共　中
小道具の目利くらぶる花心　角
衣裏へさし込あさつきの息　中
かわゆさの意見に更し朧月　同

二

戀におしまぬ銘の正宗　角
木おとこの涙うかべる時の感　中
橋を過行親王の御輿　角
竹藪のさはぎ立たる風の音　中
舛をこかして鼠飛出る　角
百の錢家賃のために除て置　中
たゞやかましきうき世也けり　角
靈昭女孔子楊貴妃韓退之　中
日の行たりとたゝき起され　角
革足袋の紐むすぼれて腹の立　中
お讃談をもうちわすれ侍　角

小麥干す駒野の里の土ほこり　中
茶のにえばなの水に成らん　角
しづかなる產の夜伽におきはつる　中
髮櫛かりてふけあたまかく　角
傾城も買手もなまる詞つき　中
鐺とがめのなさけしらずめ　角
ばら〳〵と踊崩るゝ中の嶋　中
帷子脫でぬの子きる秋　角
月の影大黒講に參ふよ　中
燈心へらす臺所かな　角
段々や嫁の古いがしうとめに　中
けふこそせめて郭公啼　角
海ばたをかりの皇居と定められ　中
どれも法師はしこふつなかほ　角
精出してまたねど花は咲にけり　中
蕨たけたる山のてつぺい　角
三
赤蛙藥に成とひつとらへ　同
さのみ心の死ぬ浪人　中
祇園町うしろの畠時雨行　角
大がゝりなる唐紙の紋　中
七夕にいらぬ烏帽子を貸置て　角
やう〳〵船が日本の月　中
秋寒く久しき鯛の塩加減　角
腰かけてゐるものよみの弟子　中
見にくしともいで捨たる米嚢坊主　角
氣をおさむればかぜかほる也　中
棟上に腹のふくれし大工共　角
おなごの聲を色々の讃　中
思ひ草芋蝎とつて抛付ん　角
蜻蛉とならば通ふ便よ　中
夕月に御簾も几帳もおろしこめ　角
假名に法華を書みつるまで　中
ばた〳〵と鳩の飛おり飛あがり　角
ぐるりは草に常盤井の跡　中
菅みのゝ枕しまふて背たら負　角
精進〳〵にくらい分別　中

丸ながら蜴に譲し酒の株　角
　花のよし野も見ずに一代　中
ねころびてむかし語に寒かへる　角
　年徳棚に消るともし火　中
莚機きれたる縄をゆひつぎて　角
　くつさめひゞく木がらしの空　中
鎗もちのやりを苫にする箱根山　角
　團子見つけてうろしからとる　中

名

さら／＼と浄土双六やぶれたる　中
　長櫃買ふて乳母が身の縁　角
化粧共口のさがなき生得　中
　たび／＼宿をかへらるゝ也　角
石菖ををきならべたるかぶと鉢　中
　月の光に螢やせしも　角
貫之は土佐での事をつく／＼と　中
　壬生の忠岑集をいそがれ　角
かへり笑櫻に春の季を告て　中
　御靈の宮の鶏鳶飢がる　角

面白う皮籠に眠るさらし賣　中
　時々鳴りし稽古鉄炮　角
露散や姫路の町を越過て　中
　若衆をかくす宵の稲妻　角
うき名立九日小袖の紋所　中
　銀持たるを手柄とぞ思ふ　角
味噌部屋に花も丹葉も埋れね　角
　人にきけよとなまなかの禪　中
さればこそ蚊にせがまれて鐘の音　同
　苫おしあけてしばし首出す　角
あぶなしと大事にかくる茶碗ばこ　同
　たゞむち／＼とよき留主居也　筆

元禄六酉九月

井筒や庄兵へ板

桃の實

兀峰撰

桃實集

富花月

艸庵に桃櫻あり

門人にキ角・嵐雪有

雨の手に桃とさくらや草の餅　芭蕉翁

菓子盆に芥子人形や桃花　其角

桃の日や蟹は美人に笑るゝ　嵐雪

かゝる翁の句にあへるは、人々のほまれならずや。おもふに素人の句は、靑からんものをと人はいふらん。思ふらん。

しろしとも靑しともいへひしの餅　兀峯

夏題十五

句合　都鄙万人

卯花

うの花や蠣がら山の道の隈　其角

卯花やせはしく市に出る人　兀峯

若竹

わか竹やきぬ踏洗ふいさゝ水　兀峯

若竹や鞭にわがぬる箱根山　其角

鰹

人のもとにて

人の誠先あたらしき鰹哉　同

上戸に寄下戸

酒よりは鰹に酔うてくるしいか　兀峯

蟬

蟬いづこあみがさの目をもる日陰　同

せみ啼や木のぼりしたる園賣　其角

夏頭巾

晝よりいれて

うたゝねやかぶりつめたる麻頭巾　同

少年達になぶられて
此男みゝづくらしや麻頭巾　兀峯

幟
誰が馬ぞ幟見するも梓弓　同
幟網沖には幾つ帆かけ船　キ角

五月雨
皃拭ふ田子のもすそや五月雨　仝
鬼門射る弓もゆがみぬ五月雨　兀峯

夏艸
河邊
夏草や橋臺見えて川通　其角

化野
居士信女かくす小草の茂哉　兀峯

蚊
旅泊にて、亡人の忌日にあふ。
草枕蚊に施行とて喰せけり　同
蚊遣火に蚊屋つる方ぞ老獨　其角

水鶏
水鶏啼夜半に遊行の勤め哉　同
喪のうちをそろ〳〵たゝく水鶏哉　兀峯

瓜
澁紙の言ものよ瓜つくり　同
ならはしの塩茶のみけり瓜の後　其角

夏川
夏川に蔵より仕出す簀子哉　同
なつ川や裾をかゝげてざんぶ〳〵　兀峯

麥
身にあたれ麥吹分る風の筋　同
秋しらぬ茂も憎しからす麥　キ角

夏書
傾城の夏書やさしや假の宿　同
つく〴〵と夏書の筆の命哉　兀峯

心太
うれやうれわきて糺のところてん　同
順禮のよる木のもとや心太　キ角

雜玉

春

つぶ〳〵と梅咲かゝる霞哉　尙白

野梅を折、大根にさして家に歸。

偶がたき梅の根となれ土おほね　兀峯

初蝶の見ておく芥子の二葉哉　好春

飛ぶ蝶も踏割ぬべし薄氷　文鱗

梅雪亭にて

躑躅咲うしろや闇き石燈籠　桃隣

梅の散所こそあれねぶか畑　風笛

鶯や下駄の齒につく小田の土　凡兆

生て有蕗の塔見る山路哉　郎章

初鮒や水田の小芹薄氷　定排

芹摘や御歩行一はなこねて行　野徑

冷酒にのみつく比かもゝの花　曲水

沖にけふ足跡つくる汐干かな　吉治母 桃女

淺間嶽にて

永き日に遠近人とならふよや　兀峯

五畿内の花落合よみをつくし　雲鹿

暖き日や賤の盤とる玉だすき　峯嵐

山あひや左へよりて朧月　兀峰

花の日も田螺にくるゝ鴉哉　一伴

須磨寺の花の制札に、一枝を切らば一指を切べしと、義經の戲れられし情を感じて

當代も指切事や花ごゝろ　兀峰

世の花や五年以前の女とは　其角

此句をおもふに、玉ふちの笠きたるは、今の世に乞食女ならではなし。然ば小町が世にふる樣もさこそ、かはりておもふらんと、晋子がおもひ付たるなるべし。五もじに世の花と置きたるは、花實のそなはりたるにや。

春雨や我魂の行どころ　芥舟

うれしくも去年の纖穗の木目かな　野蝶

此せまき庭へ來たるか百千鳥　一牛
年寄も皆女夫なり櫻狩　莞笑
竹の葉へ入(ぱり)〳〵に霞かな　峯青
寺子共墨を落して花見哉　何淡
金錢花夕陽につるゝ眠哉　百里
畑打に替えて取たる菜飯哉　嵐雪
菜の花や小屋より出る渡し守　史邦
行雁に櫻一ふさ付てまし　兀峰
立籠て淋しがらせん春の暮　普舩
舞〳〵か暮春になりぬ花莚　才麿

夏

馬士起て馬を尋ぬる麥野哉　其角
うつくしき人猶結ぶ清水哉　晩翠
柚のはなや庭へ下たるついで有　[illegible]棠
飛ぶ蝶やまぐれあたりに白牡丹　桃隣
泥見えぬ程や水ありかきつばた　園風

兒の手の玉にもあまる眞桑哉　嵐雪
湖の壹の果は富士黒し　芥舟
我庵は階(はし)子(ご)もいらぬ菖蒲哉　和風
追付て砂道遠し郭公　可吁
五月雨や一葉貰し物の本　兀峯
骨折や闇の五月を行螢　里東

餞別

帷子を洗はずにやるなごり哉　正秀
母の脊にをく露疏る鹿子哉　知義
常夏にゆかた吹とる風いかに　兀峯
蚊二ツの力をためせ蜘の糸　問隨
竹の子の延て甲斐なき灰屋哉　挑子
白雨や先づ石竹を引起す　樂長
晝宿の白雨かなし馬の聲　峯風
土用干花の塵有袂かな　遲梅
湯あがりや蟬鳴止で夕烏　雖志
僧帶に團さし出る砌(みぎり)かな　一蜂
白雨に蓑虫こそは靜なれ　岸水

大つぶの雨百斗蓮にほし　梅員

さなきだに肌ぬがしませ蟬の聲　其由

涼しさや北よりおこる帆掛船　倘白

隱者の住所をさひて

あまつさへ茂りにけりなしのぶ草　貞直

此句中七より下五までは、作意なきに似たりと大かたに見侍らば、作者もおもひ捨べき句なるを、是此上の五文字にて、發句の正意を顯し侍る。

土用中

きのふをも峠といひしあつさ哉　彫棠

つねに人のいふ事をたゞにいひ出たる句に、かく情出くる句あるもの也。風雅に心をよせん人は、うごくにも、ぬるにも心を付べき事にや。

頓て死ぬけしきに見えず蟬の聲　翁

此句、人上渡世、天道地變にも、かゝれる名句ならんと、世こぞつていひ侍りぬ。なまじゐに詠しては花實をそこなふたぐひなるべし。

綿の花たま〳〵蘭に似たる哉　素堂

例の素堂の感情、蘭よ〳〵との風雅にこそ

秋

家に歸りて

見舞てやなくてほこえし宿の萩　肅山

堀氏の妻の追善

秋の夜や紙燭ともして泣泪　貞直

その樣はうしろ田守らぬ案山子哉　全峯

靈祭母屋の妻戸の音は何　嵐雪

送り火によばるか足の踏ゝ力　兀峯

鬼灯は傾城のふく調子かな　進歩

秋のかぜ貞に蚊帳のかゝりけり　知義

野男も力なく見る薄かな　梅子

耳づくの頭巾吹とる暴風哉　愚口
茸狩や大方買ひて鯖もの　流水
蟷螂の鴫に及向ふ聲かな　兀峰
寐かへれば枕をつたふ礎かな　隨意
草まくら疊の上も落穗かな　龜翁
名月や門へさしくる潮頭　翁
川筋のせき屋はいくつけふの月　其角
名月や先づ盞とつて蕎麥を嗅ぐ　嵐雪
名月や緣とりまはす秬のから　去來
駒迎へ鼻かはされつさねかづら　兀峰
冬瓜の毛ぶかくなるや後の月　曲水

木曾塚にふして

木曾殿と脊あはする夜寒哉　又玄
夜が身に秋風寒し親ふたり　鬼貫
拙さや牛といはれて相撲取　彫棠
夕陽や合羽干たる露の色　兀峰
玉虫の光や死んで後の事　進歩
人〳〵のうそを語らぬ月見哉　一鵬

高祖の臣を探題にして、我韓信を得たり

唐秬にたゝかれてゐる鹿驚哉　兀峰

仁意十七年回忌

おもふ夜の雁がね寒き脊かな　貞直
川つらに梓こふ聲の夜寒哉　仙化

冬

万句興行

見しりあふ人のやどりの時雨哉　荷兮
鷺鳥片日かはりや夕時雨　其角
氷江や中に捨てたる櫂もよし　兀峰
口切やのしめの裏の貧乏さ　酒堂

山中

松寒し蜘ひく烏の沉む聲　路通
初雪に何してゐるぞ隣殿　兀峰

田家

里の屋の見込も深し鷹の糞　晩翠
石地藏一つは握る丸雪かな　尖峰
凩や柴になしたるくづれ橋　摘山
寒垢離よをのれ木間の女方　峰及
石臺の松さへ寒し夜の月　志計
網代守大根盗をとがめけり　キ角
朝霜ややねつたひ行鷄の息　茂門

芭蕉庵に

花鳥や見出せし冬の有所　兀峯
一聲の念佛かはゆし網代守　德之
をのが子に見違られな網代守　知義
寒聲の出ぬを笑ふか川千鳥　知春
淡路まで渡る千鳥よ聲きれな　烏水
先杖をはじめに燒ん冬籠　兀峯
月寒し八百屋が軒の破莚　貫知
武士ならば雪の蘇鐵は誰ならん　三夏
冬の夜や八ツ半時なる犬の聲　勒也
里神樂ちはや仕丁(しちやう)にもらふたか　石龜
煤掃で見れどももとの廐かな　兀隨
鴨飛ば一筋ながき雫かな　氷花

旅行

數百里程多少難

笠の緒に口あけて行吹雪哉　兀峯
鷄や枡燒夜の火の移り　酒堂
陰惜き師走の菊の齡哉　露沾

雜玉終

第三迄

寺中花

新發意(しんぼち)が花折る跡や山颪　嵐雪
　皆願しませ酒の糸遊　兀峯
出してよき棟を節〱霞して　芙蓉

同

うらゝさや野馬ふりむく朝日影　兀峯
　千里の燕水に聲有　琴藏
しほかぜに岬(ミサキ)の櫻しめりきて　沾德

同

梅が枝やより添ふ君が髪の曲　兀峯
東風吹く下に梅の薫　共角
祀春のひかりのやはらぎて　同

同餞別

いとゆふや馬の尾髪の及まで　眞直
聲吹送れ山際の東風　兀峯
さりとては櫻咲きけりとび〳〵に　進歩

同

うたゝねやかぶりつめたる麻頭巾　キ角
何を袪るぞ窓の若竹　兀峯
名月に筆の命毛隱見て　同

同

何となくかはゆき秋の野猫哉　同
我も鹿驚も默る夕暮　一峯
皿の井はうごかず月の缺見えて　山夕

同

わきはとも宇治橋斗霧晴な　不風
酒なき時に秋の夜の明　知義
峯の月松にほの〳〵とかげろひて　兀峯

同

世の事しげき中に、志まがふ事なく、さぶらひ給ひける人に對して

水鳥や氷にすゝむ夜の興　路通
氣もかゝるとも柿葺の雪　兀峯
廻り込澤より奥に家立て　晩翠

○近き比、世に郭公の句に、いさをしある程の句のひとつも聞えぬは、いかなる故にか有けんと人の申されしは、げにさる事ぞかし。東の道の記を人毎にすなるうちに、富士の句は必ず落て見え侍る。これを以是をおもふに、郭公と富士とは、そなはれる風雅の威有物なれば、作者の風雅の富士・郭公に負る故なるべし。洛陽の信德一年、不二に添ふて三月七日八日かな　とたゞにいひ出せるは、富士見るたびにおもひ出ぬといふ事なし。

○予が扇子の端に、春雨に山田の曠を行賤のみの吹みだす暮ざさびしき。と後鳥羽院の御製を書付侍るを、嵐雪とりて見侍りて、尊しや花實、かたじけなしや風雅とうなづき侍ける。有がたき風雅ならずや、キ角が、やりくれて又やさむしろ年の暮 とせしは、とゞめず、惜まず、おのが氣像のまゝなる骨肉、句の上に顯れたるなるべし。路通、艸庵を立いづるに、出るときは氷も消てはしる也 これまたをのがゝたちに句も添て出たり。洛陽の好春は去御方にて、四人して御蚊帳釣らん女房達 と情をうつしてよくいひ出たり。心とすがたと、句とはひとつなる物なれば、世に風雅ほど妙なるはなし。

○尾陽の荷兮を、此ごろ世に凩の荷兮といへるは、木がらしに二日の月の吹ちるか といへる句よりいふ事なるべし。二日の月のぬしになりたる故にや。歌・連歌に物かはの藏人、日比の正廣、あくたれの紙与などいへるたぐひなるべし。

雨・吟

硯する傍にうつくし白かさね　嵐雪
郭公まつ辨の化粧して　兀峰
さし覆ふ手に悍の嚏して　同
身を喰ふ纒いたく謗られ　雪
芝の月起臥すべる革蒲團　同
藥は掘らでくるひくらしつ　峯
沙彌が氣をえやはからせし秋の風　同
うしろは男中草履取　雪
いひたつる名古屋歩キの八文字　峯
戀も初心に返歌幾度　雪
此花よ御狩は丁ど二十年　峯
桃ある家にあそぶ半狆　雪
不細工を笑れけらし紙鳶　峯
都づとめの留守の古妻　雪
氣隨にはあらず晝寢は夢の種　峯
うしとみし世に鞭はゆるさじ　雪
船の火のちらり〳〵と須磨の月　峯

人を力に鵙啼秋　雪

同

夏の日に見る物からの蟬かな　兀峰
這入せばむる母が蚊遣火　嵐雪
行水の跡もこぼさず月すみて　同
露のそこらは皆黄菊也　峯
直垂のひたとつくろふ漸寒　同
ほめ所をもしらぬ舞の手　雪
何事をしろき扇子の拭ひ書　同
まゆみだれたる横貞の色　峯
忍び日にもしも座頭や覗く覽　雪
小便すればふるゝ寒月　峯
盗人の諷ふて歸る古手市　雪
打かまねくか饂飩屋の幣　峯
吉原はわざともほどく茶洗髪　雪
いひ習たる戀のあて言　峯

糸組のいと恥かしき白地　雪
鉢をも乞はで首座歸也　峯
蕺ぬきに來る子もやさし垣の花　雪
茶具取置て炉をふさぐ比　峯

同

水鳥よ汝は誰を恐るゝぞ　兀峰
白頭更に芦静也　翁
中汲の醉も灰に靜提て　酒堂
月の徑に杳拾ふらし　峯
鳩吹ば榎の實こぼるゝさらくと　翁
板の埃に圓座かさぬる　堂
簾戸に袖口赤き日の移り　里東
君はみなく撫子の時　翁
泣出して土器ふるふ身のよはり　峯
御念比にて鎌倉をたつ　東
門くに明日の飾りをくばりをき　堂

蓮踏なとうつす塩鰌　峯
山陰をまれに出でたる牛の尿　翁
梨地露けき兒のさげ鞘　堂
名月に雲井の橋の一またげ　東
今としの米を脊負ふ嬉しさ　翁
花に来て我名は佛德右衛門　堂
春はかはらぬ三輪の人宿　東
二
陽炎の庭に機へる株打て　峯
たゝむ衣に菖蒲折置　堂
さんといふ娘は後のものおもひ　翁
戀のあはれを見よや鳩胸　峯
城代の团はしまらず田は餒て　堂
美濃は伊吹で寒き秋風　翁
夕月に荷鞍をおろす鈴の音　峯
聟なじます質の出し入　堂
麥飯に交らぬ食を取りわけて　翁
德利引摺川船の舳　峯
帷子に風も涼しき中小性　堂

明日御返事を黄昏の文　共角
ウ
うつくしき聲の匂ひを似せて見る　峯
人めにたつとひきなぐる數珠　堂
一息に地主權現の花盛　角
膳に日のさす春ぞきらめく　峯
鶯は此比の間にいとひ啼　堂
歳旦帳を鼻紙の間　角

備の前州の勇士兀峰子は、風雅を抱、滑稽を荷ひて、花月にあそぶ事年有。去年の暮春より東武に勤て、仕官の身のいとまなきひま／＼、此書を集て、予に見せ給ひぬ。我目を悦す而已にては、無下なる事におもひ、梓鏤むるもの也。

元禄六辛酉歳五月　日

水口　芥舟書

京寺町二條上ル町井筒屋
庄兵衛板

藤の實

素牛撰

正秀序

衣にもあらず、羽織にもあらず、荒布の一重を肩にかけたるは、其操にひかれて月にもたゝず、寅丸坊のほとりに、家一つを三つに分て、四疊半の座中に柱さへかど〳〵し。欠たる鍋、煤けたる行燈をしめして、月花のためには朝暮の煙をだにかへり見ず。其よる所一方に落ざれば、專風雲の友を得るとやすし。滑谷小關の捷徑をぬけて、湖水の春に嗽ぎ、淀・樟葉をへて、難波の月に嘯く。たま〳〵山藤の力をたぐりて、頃一つの集思ひ立ぬ。はなは宗祇の昔に匂ふとかや、實は蕉翁の吟に熟して、普く人の翫となれり。しかれども椎・樫の氣ぢかく、栗・柿の興あるたぐひを離れて、ひたすら深山下風にからめきつゝ、塵打拂ふ枝葉は、素牛子が心に任て、はびこり行むもの其限をしらず。

藤實集

秋

關の住、素牛何がし、大垣の旅店を訪はれ侍りしに、彼ふぢしろ・みさかさいひけん、花は宗祇のむかしに匂ひて

藤の實は俳諧にせん花の跡　芭蕉

さぞ砧孫六やしき志津屋敷　其角

化野や蛇の衣ふく秋の風　野童

蛛の圍のたるみ初けり秋の風　女 素𤟠

雲津川にて船よぶ人の多かりければ、むかふにさしさめて見むかず。

秋風に耳の垢とれ渡し守　去來

稻の穗に馬乘掛てはつ嵐　車庸

七夕に出て兎も野をかけれ　洒堂

七夕や先寄あひておどり初　素牛

秋もはや庭に定る藜蘆草　蓑立

かづら子の髪にさゝばやうす艶(もみぢ)　女 何南

霧雨や貴船の神子(みこ)と一咄し　曲翠

七月とおもひ慰むあつさかな　奈良 含粘

かき立る灯うすし玉まつり　大阪 李門

送火は乾かすものを袖の露　巴流

閉關の比

蕣や晝は錠おろす門の垣　芭蕉

芭蕉菴に宿して

蕣や夜は明きりし空の色　史邦

芭蕉葉の破れつゞらむ松の針　女 萬里

一通り猫の牙の跡の薄かな　之道

澁笠や戔で着初むはな薄　丈草

繩ふしの猶氣結りや木槿垣　大阪 芦角

せゝなぎの端とり廻す木槿哉　貝壽

鴇(ひとゝり)に立別れゆく行脚坊　正秀

澄切て鳶舞ふ空や秋うらゝ　京 正己

仲秋翫月雜説

丈艸杜多著

月の大さは、其見る人によりて定れるとなし。氣力の猛に健なると、くだりてたゆめる(撓)とよりぞ、かくは替れるものならし。又おもふに、血氣うすらげる人は萬に心細く、過し四年・五年の秋を忍び、此二夜・三夜のあらそひをあだにせず、情を催す事の大なるは、彼光を見るのたぐひならんや。まして風騒の旅寐をはかなみ、入江の浪に袂をそばだつ。斬人(ざんじん)洒堂(しやだう)は此秋の光をいかゞ見られけるにやと、洛の素牛子を伴ひて、浪花の幽居を敲くに、主(あるじ)、大にうなづき悦て、競ひ集る門下の人〳〵を携へ、一醉一詠心〳〵の佳景を沙汰す。此頃は雨氣の雲一筋をかけず、吹ちぎりたる大虚は、いづこも常ならぬ氣色を梨の梢に見晴して、松の下枝に瓦灯をかゝぐ。待宵は蓑(笠)立子が亭にして八つの鐘を聞たり。望チは猶晴まさりて旭(アサ)日のさし出るより、今宵の月は手に入ておぼゆ。暮を待ず高津の宮居近く、一船に乗こぼれて、末は茨住吉に漕捨ぬ。芦の葉陰に袒(はだぬぎ)て、露は今宵より白しと見あげたれば、月は山の端にあか

み出て、大さいはん方なし。此郷や堀江川橋さま〳〵の名に流て、海原の果なきむかしをとぶらふ。悲歎榮辱まち〳〵にして、中〻づく壽永・元亨の恨を結ぶ。雲は武庫・千釼破の峯にふつくみ、浪は須磨・一谷の荒砂にむせぶ。はつかり金に星白けて、鮫釣船の隣なつかし。今、風雅の世にかしらをさしつどひて、志深き友を得事、誠に興ぜざらんや。諷し盡、醽して東雲すでに近し。十六夜は雲くろみ立、雨そぼふる。殊に曉立旅人さへあれば、此まゝに酌あかすべき勢ひに怖れて、みつればやがてかく月のなんど、打なぐりて夜のものに迯込けるに、しからば此あそびの有增を記せと、あとさきより引起して、灯のもとにつきむけぬ。漫に筆を泚して酔の眸をおしぬぐへば、しらず、いくつの月をか寫しけむとおかし。

蟷螂の小肱とらん今日の月　酒堂
名月や誰忍るゝ琵琶の家　車庸
森下は木の根にあるゝ月見哉　蓑立
名月や水底濁す四つ手網　龜柳

下手のさす船もあぶなやけふの月　宵烏
名月や洲にはね揚る江鮭魚　史庭
名月や埒とる橋の木のひかり　桃英
名月や猫の撥付く床ばしら　志用
盃の開眼せばやけふの月　之道
雫垂る礒の鼠やけふの月　膳所 里東
塩壺の庇のぞかんけふの月　素牛
しら濱や犬吠かゝるけふの月　丈草

蓑立亭即興二韻

待宵の梨や今宵の亭主ぶり　酒堂
まつ宵や招き合たる田打鰷　車庸
名月や何に驚く雉の聲　京 示右
名月や慈照寺殿の濃醇繪　同 景桃
名月や浴衣引さく薄原　同 梅女
橡の實や谷川ほそしけふの月　鳩枝
名月や垣根の内のもぎ茄子　巴流
又人の家に寐に行月見かな　史邦

立待や瘡直さん臼の上　大津尼 智月
居待月起て守らん枕挽　仝
寐待月船も閑に行次第　仝
月代や脊戸の入江は芦の風　京 柯山

東武へ行人に

有明や出立に居る男泣　里東
食櫃に匂ひも移せ蘭の花　伽孝

美濃にて宗祇の藤を尋比

共藤の古根や秋のやどり草　荷兮
松茸の酢和も月の匂ひ哉　臥高
藁焚ば灰によごるゝ竈馬哉　丈草
張残す窓に鳴入るいとゞ哉　素牛
蛩すぐり藁する月夜かな　酒堂

洒落堂にて

露萩もおるゝ斗に轡虫　越人
虫の音や火を消して寐る一重壁　巴流

嵐蘭の幽居を訪

蛩あまりに近し竈もと　酒堂

石原や鮠の腸ぬく萩の花　貝壽

閑居書懐

盗人に見捨られたり軒の萩　梨月

湖上吟

田の肥に藻や刈寄る礒の秋　素牛

堅田眺望

雁ゐるやたつべ乾たる門の前　鞭石
小相撲にしこるや牛の放し飼　大坂 苞扣
まれ〳〵に蝶の動や蕎麥の花　蓑立
朝露のいざり車や草の上　素牛

別長崎卯七

杖〳〵に別るゝ秋や唐辛　酒堂
日の出や鶉水のむ窓あかり　苞扣
こわ高に鹿驚の中の鶉哉　史庭
朝月の柴栗つたふしなゑ哉　京 柴車

訪隱士

刺に世を遁てしるや栗の肌　酒堂
朝夕に引や菴の牛房畑　蓑立

山雀の里に出て鳴荏胡麻哉　車庸
山雀や朝寐して出る竹椽　游刀
葛掘や蹴抜の堂の夕日影　志用
木の本に寐御座直せば鹿の聲　鳩枝
雁啼やから尻つなぐ朝くらみ　加州 巴水
土龜突や岸におり立三ケ月　尾張 素覽
秋の田や刈しほ見舞ふかゝり人　呂房
堅横にはさかけ渡す門田哉　鳩枝
八橋や刈田の水のおち所　能州七尾 探吟
神田も刈揃たる日並かな　大阪 炉柴
たまさかに色付物や柚の落葉　龜柳
物干にのびたつ梨の片枝哉　素牛
稗の穗や埒掛渡す岨畑　野徑

素牛が家に宿して

菊の香や御器も共儘宵の鍋　支考
菊の花咲くや石屋の石の間　芭蕉
菊の香や日待明行椽の先　探芝
乘馬も痩て甲斐なし宿の菊　尾張 左次

稻妻のしまらで秋を果しけり　乙州
外屋敷や野分に殘る柿の蔕　野童

人〱嵯峨の宿なさはれけるに

木の本に圓座取卷け小練年　去來
夜一夜笑ふ名月の晴　野童
駒迎鼻毛ひらずに御供して　素牛
かり物どもをかへす合點　風斤
黑土の壁ぬり廻す片びさし　景桃
ふるふがごとくこぬか雪ふる　鳳仭
束結のどうがめいかき負かさね　野童
裏の無心に晛なるべし　去來
譲勝に船より上る身ごしらへ　斤
寐ぬけし跡のすごき衣〱　牛
立臼といはれて幕すもの思ひ　仭
先に成たる尼や住るゝ　桃
貞赤のちらりと通るかいまがり　來

島にのぼるはつ塩の荒　童
月影や息も縫せぬ素肌責　牛
例のたはけが又すべりけり　斤
うそ〳〵に挑灯つりて花の興　桃
春見え初る筑紫大名　似
おそろしき雛追祭の神嵐　童
くめば汲ほど水のすみ切　來
ゆつくりと日半置たる挾箱　斤
言傳おほき女口上　牛
平押に咳氣のはやる心うき　似
汁あたゝむる饅頭の膳　桃
弓張の角さし出す雲の月　來
稻つみ車夜もとゝろに　童
宗鑑の簸のあたりの秋更て　牛
たまの馳走や雨のふるべく　斤
寐付たる晝寐時分のたはひなき　桃
此衣更着を奉公の初　似
散る花も丹波から來る川流　童
妻よぶ雉の身をほそうする　來
さは〳〵と風のやうなる戀をして　斤
宿に臥夜はすくなかりけり　牛
細引をひつぱり廻す土用干　似
明日も天氣の猶よかれかし　桃

冬

くろみ立沖の時雨や幾所　丈草
一時雨ぬれぬはあらじ淀堤　蓑立
門さきやしぐれにたゝむ酒莚　史庭
有明に成てたび〳〵時雨哉　許六
時雨るゝや古き軒端の唐辛　炉柴
しがみ付岸の根笹の枯葉哉　素牛
蓑笠も世に足る人や冬籠　尾張露川
葭垣や風に木葉の一たまり　蓑立
冬旅や足あたゝむる馬の首　大津譏々
童の聲しるべなり神送り　含粘

口切や尉斗目の裏の貧乏さ　洒堂
ふり賣の雁哀なり夷講　芭蕉

尋二元政法師墓一

竹の葉やひらつく冬の夕日影　素牛
冬の夜や火の影細し綿車　大阪 本好
鞍壺に小坊主乘や大根引　芭蕉
さび土のぬれ色深し冬日和　志用

嵐雪の新宅を訪て

水瓶や塲かたまらぬ冬椿　洒堂
石壇や一汗かきて冬椿　露川
茶の花や哀胡蝶の行たふれ　尾張 舟泉
鵜の糞の白き梢や冬の山　素牛
藪がまへそひよりもなし冬牡丹　志用
ぬひ物の障子に冬の夕日哉　巴流娘 鼺子
朝霜や犨の門の鉢ひらき　丈草

萬句興行のみぎりに

初霜や小笹が下のえびかづら　素牛
置霜やけふ立尼の古葛籠　大阪 園女

朝霜に摺餌摺なり歩長屋　梨月
明星や馬食の上の霜の色　里東
鵯や霜の梢に鳴渡り　素牛
目をむいて木兎住や菴の留主　鳳仭
出屋敷や枝折に枯る楞の實　洒堂
梨の木や結こゝめたる冬の月　鳩枝

詣二因幡堂一

撫房の寒き姿や堂の月　素牛
炭燒の夜食喰ふらん月夜影　車庸
それ鷹の鈴振廻る霙哉　正秀
足どりも乘馬の杲や雪みぞれ　史邦
みぞれふる庇の間や友雀　呂房
眞木部屋の霰拾はん笹交り　能州大野氏 良長
吹落す木葉に包む霰哉　大津女 錦江
初雲鷲尾や蘩蘆の葉のきほひ　鞭石
うかうかと海月に交る海鼠哉　車庸
軒寒き夜半の烟草の葉取哉　柯山
ともどもに摘て味ふ冬菜哉　芦角

一あらし犬のと吠や寒の中　巴水
から鮭や米を洗はゞ二番たれ　大阪 義首
夜を寒みから鮭つだふ鼠哉　乙州
茶をすゝる桶屋の弟子の寒哉　素牛
居風呂や屏風すはらぬ庭の隅　巴流

士爲知己者死
女爲説己者容

河豚汁はよろこぶ人を殺けり　曲翠
河豚汁やあいロさして打並び　大阪 一有
枯芦や朝日に氷る鮠の貞　素牛

欲塡溝壑唯疎放

水草の鳰にまかれん薄氷　同
朝網の氷の下やかいつぶり　柴車
鷦鷯つゝく湯殿の垂氷哉　京 梧朝
初雪や献上鷹の馬蒲團　臥高
雪雲や鬼も肱を出すべう　去來

野徑亭に諷ﾚて

蠟燭のうすき匂ひや窓の雪　素牛

立さかる新風呂臭し雪の暮　游刀
三ケ月や掛戸にあたる雪の音　風斤
ぬぎ捨て夜着も疊ず閨の雪　巴流
唐犬や扶持にはなるゝ雪の中　素牛
はごさしの足跡埋め雪の暮　攝 亀柳
鉢扣夜更て道の廣さかな　智月
水仙や雪の中より古葛籠　大阪 焦桐
水仙や朝寐をしたる乞食小屋　素牛
椽には木練釣けり枇杷の花　加州 ノ松
つまりたる脊戸の日影や枇杷花　野徑
水たごに寒菊ゆゝし篭壁　大阪 荘人
寒菊や赤土壁の鷹の糞　史邦
寒菊や貞も洗はず懷手　京 僧 通達
水仙に錢ふるひ出す年の市　同 休可
夜あらしに餅つく音や西隣　之道

寒き日の寐鳥もつかてなゝかまど　曲翠

柿大根の濤洗ひする　素牛

居屋敷の外も屑屋をふき立て　丈草

目利あてたる月の旱暈　里東

はら〳〵と場踏に並ぶ旅相撲　正秀

切重ては匂ふ新蕎麥　臥高

うたゝ寐に物打着する弟子おとゝ　寒醉

火のもえしさるおもひ也けり　昌房

富士川を前にかゝへて雨宿り　游刀

後谷まで赤兀になる　探芝

かりよする祭の小袖二三百　野徑

けなりがらする酒の追風　怒誰

夕月の狐臭さよ番所　牛

はやく梓の紅葉しかゝる　翠

饗應に髮を代なす袖の露　東

そひ寐にさする脚當の跡　草

帆手輕き津ゝ浦ゝの花の浪　高

歸らん前や瘦るかりがね　秀

春雨に何角も棚へ打揚て　房

物の見事に羽織燒ぬく　醉

とろ〳〵と朝時過たる太ら平寺　芝

風になぎれて雀一むれ　刀

泡ともに池の氷のはりつめて　誰

梨地の火桶まひらする月　徑

はかなげに文見とれたる二度目　翠

至死期〳〵に萠す物の化　牛

かたづかぬ問屋の庭の北あかり　草

黑山だちてかゝる夕立　東

替取の中に泥鼈のはね出され　秀

咄とぎれぬ桶狹間道　高

和中散又ことなしといたゞきて　醉

細き煙のゝこるおが屑　房

不性なる犬は寐ながら鳴合せ　刀

庚申待に持るはき物　芝

坂口は杉より花のもぎあがり　徑

鯉も鯰も長閑なる淵　誰

春

鶯や野は堺越の風呂あがり　史邦
鶯や二升五合の藪年貢　曲翠
鶯や雀よけ行え(枝)た移り　去來
鶯や根笹をつたふ湯立埃　素牛
せつろしや若菜摘手のたばこすき(好)　酒堂
錢百になれとことぶく若菜哉　里東
芹薺や浮世を急ぐ蛭の足　探吟
楠が腹切あとの梅のはな　曾良
盃やおさへて走る梅の花　梅女
梅が香に障子明ればまだ寒し　伽孝
梅咲や米に酒買藪の家　(曾)如圓
梅が香や宵の別のひとつ前　傳女
新壁や裏も返さぬ軒の梅　素牛
梅が香や奥物深き破(つぶれ)簀(す)戸(ご)　通達
朝起の眉ひねらせつ梅の花　史邦
雪ちるや梅の垣根の魚の骨　巴水
紅梅に灸(ヤイト)掛干す垣根哉　琶扣
破鐘や梅の匂ひの浮沉み　露川

宗鑑 陳迹を尋て

梅ちるや觀音草の道の奥　素牛
見たやうに惜む佛の別かな　探芝
東風吹や浮桶並ぶ汐ざかひ　助叁

詣聖廟

二月や松の苗賣る松の下　素牛

芭蕉菴を出る時

故郷へ雁に登(?)歩が錢分ん　酒堂
たばこ吸人の噂や蜆うり　游刀
燕や赤土道のはねあがり　素牛
ほそ〴〵と塵(ちり)焚門の燕哉　丈草
春雨や蛤ふさぐ傘の音　琶扣
三ケ月に孤化さん苗代田　支考
春雨や桐の芽作る代木口　木好
仙蓼や蛙鳴出す手水鉢　風斤
ふり揚る榜(カイ)の雫に楊(やなぎ)哉　鳩枝
雪ふりの明る日ぬくし藪椿　之道

一雨に椿落ち來ん藪の水　莊人
春風や箒目直し掃部寮　含粘
廣き野を只一呑や雉の聲　鳳似
雉子啼や茶屋より見ゆる萱の中　蓑立
雉子啼や菜を引跡のあたりより　鞭石

石藥師にて

行灯に食喰ふ頃や雉の聲　尾張 鼠彈
とりちらす榑(クレ)木の中や雉の聲　素牛
苗代の手たゝき水や雉子の聲　大坂 流砂
溜池に蛙生るゝぬるみかな　智月
雀子や飯臺直す石たゝみ　義首
萱の葉の露はねかへす旭(アサヒ)哉　野童
砂金や流れとゞまる赤躑躅　車庸
菜の花や梭(ヲサ)音高き窓の中　梨月
菜の花の匂ひや鳩の礒畑　素牛
朧夜に鼠やつたふ藤の棚　龜柳
陽炎や吹よせられて草の隅　怒誰
野馬(かげろふ)のゆすり起すや盲蛇　丈草

野馬や壁土いさす水の上　里東
陽炎に麫(ヘタリ)干鰯や宿はづれ　巴流
野馬や石付馬の出る時　昌房
陽炎や折敷の粘の棚洒し　野徑
櫛の齒をひく人足や花の宿　宗外
花に寐ぬ是も類か鼠の巣　芭蕉

津の國多田院にて

炭に燒柞(はゝそ)も花の木陰哉　洒堂
文臺に扇ひらくや花の下　素牛
世の中を見切てちるか山櫻　許六
折花の都の土産(つと)や枝くばり　ミノ亡人 俊興
うかうかと來ては花見の留主居哉　丈草
植木屋の住居も闇し花盛　ゼゝ少年 半朱
花咲や皆丸腰の供つれて　正秀
花散るや水鞠高き礒づたひ　露房
寄合て花にまぶるゝ小僧哉　ゼゝ少年 杏雨
あひさしの傘ゆかし花の雨　同 淀水
舟棹のとゞく岩間や菫草　柯山

染たらで山迄染る菫哉　園女
雲雀鳴野邊や火繩の燃退(モエシリ)　風斤
雲雀鳴春風寒し藪がまへ　蕉桐
雲雀鳴常念佛の藁屋葺　大坂 芭蒼
夕雲雀海に股毛のぬるゝ程　酒堂
椋本やあぶつけおろす夕雲雀　正秀

海棠や虻の眼瞼(マブタ)の重き時　酒堂
夕日は壁に戻る陽炎　車庸
胴桶に春の肥しの水入て　之道
牛屁はるゝ濱出しの米　史庭
降そうで月は天氣にねぢ直り　蓑立
野はちら／＼と咲る當藥　亀柳
灰よせの一つれ歸る良(やゝ)寒み　素牛
小鷹のやうな兒子弟子　堂
高塀に山茶花氷る中屋敷　庸
七つ過れば戀に出て行　道

なまかわの身にも頭をたしなみて　庭
湯田照る頃は仕廻ふ田の草　立
夕月をかけて津嶋の舟祭　柳
頭陀の側羅燒出家友達　牛
碓(からうす)は小き宿の庭の隅　堂
敷居うち越日は高き也　庸
めき／＼と今年の花の峠にて　立
あき乘物のおほき藤の根　庭
椽側の臺子汲ほす寺の春　道
はりかけて置そぎの天井　柳
稲の穗の泥に染なし水の跡　牛
馬に馴たる長池の雁　堂
見集めの老尼かしこき旅の月　庸
海おそろしと夜着に寐ぬ肌　立
翠簾もうき琴は簀子に居り兼　庭
たすけて枝の茂る篠木　道
道端に鍬を並ぶる晝あがり　柳
天目ふきてかぶる手拭　牛

せはしなき出立の膳の蜆汁　堂
津の觀音の夜明長閑き　立
花に着る絹の袴の手の能て　庸
ひらくをうたふ聲の美し　庭
むかしをばくどふ間れて無念さよ　道
薄緣敷て入るゝ水風呂　柳
遊人もともに綱なう臺所　牛
已がつがひを尋ぬ庭鳥　草

夏

卯の花のたへまたゝかん闇の門　去來
卯の花や落米を拾ふ鷄の聲　里東
卯のはなやなげやりざまな人心　園女
卯の花や雀は戀に痩る頃　蓑立
郭公聲横たふや水の上　芭蕉
郭公持あぐみたり袖合羽　鳩枝
芋の芽の出揃ふ露や時鳥　巴流
竹の子に呼れて坊のほとゝぎす　素牛
時鳥聞よし馬子の中なり　尾張 虛白
去年見しは東へ通る郭公　大坂 臾花
麻二寸雀かくれの新樹かな　野徑
灰汁桶の輪入るゝ頃か鳶尾花　否專
青竹の椽を仕出すや鳶尾花　車庸
空蟬のたちはも知らず碁打共　梧胡
桐の葉の裏も表も螢かな　柯山
溜江やむらさき色の水の苔　巴流
藻の花におもひもよらず鯤の針　乙州
藻の花や手繰捨たる一さかり　大津 楚江
かるの子や首指出して浮萍草　素牛
朝草の鎌利立る水雞かな　之道
一むれや夏野かけぬく二歳駒　ノ松
麥の穗の赤きは暮の雲雀網　琶扣
あからみし麥や正木の垣間より　巴流
凌霄花のはなに黑めん鐵壁　史庭
蓴菜や一鎌入るゝ浪の隙　素牛

早苗とる入日や近き土手の下　梨月

雨晴やねやを尋る早松茸　志用

橘や定家机のおき所　杉風

外宮にぬかづきて

御白砂に珠數の音なしかんこ鳥　酒堂

内宮

たのもしや杉の木の間の夏日影　仝

淺熊

吹のぼる山は五月の嵐かな　仝

宵闇の里や青田の水廻り　巴水

竹植て竹の子を見る人は誰　尾張 巴丈

蚊遣火の柴の戸口や棘の花　正己

五月雨や朝行水のたばね髪　洛翠

嵯峨鳳仭子の亭を訪し比、川風涼しき橋板に踞して

涼しさや海老のはね出る日の陰り　素牛

涼しさや野飼の牛の額つき　鳳仭

東武におもむきし頃、木曾塚に各吟會して、離別の情を吐事あり。

別史邦吟士

涼風に蓮の飯喰ふ別哉　史邦

起伏にたばふ紙帳も破ぬべし　素牛

猶名残を惜みて、行〳〵石山のほとりに一夜を明し

行水や戸板の上の涼しさに　仝

木積に蚊屋釣て見ん夏の月　尾張 卍春

月涼し百足の落る枕もと　之道

手枕や月は布目の蚊屋の中　智月

すき立の髪にとまるや夏の虫　昌房

ほろりとも降らで月澄む蚊遣哉　焦桐

素牛を宿して

茶のたてや蚊ふすべによるかり枕　含粘

訪素牛市隠二句

すゞみ出て瓜むく客の國咄し　智月

蚊遣火の隣は暑しつるめさう　史邦

涼しさや窓二つは有ながら　酒堂

素牛にこさゝはれ侍折ふし、我宿のこさしげゝれば、隣寺に伴て

古寺をかりて蚊遣も夜半かな　正秀

客中

くらがりに覆盆子喰けり草枕　史邦

芭蕉庵にて

夕立や風をゆり込軒の芦　曲翠

夕立や降そゝくれて蟬の聲　游刀

夕立や海を涼しく飛いなだ　龜柳

行灯をしいてとらする涼かな　探芝

涼しさは哥機嫌なり月の船　乘雲

涼しさや駕籠に隙やる茶屋の店　正秀

かばやきの匂ひに暑き涼かな　貝壽

きた坂や詠て涼む歩荷持　酒堂

夕にも朝にもつかず瓜の花　芭蕉

つく〴〵と醫者殿を見る暑哉　半朱

芭蕉翁岐阜に行脚の頃、したひ行
侍て

見せばやな茄子をちぎる軒の畑　素牛

子ども等よ晝貞咲ぬ瓜むかん　芭蕉

暑き日や猿若髭をはづしけり　曲翠

遺悶　素牛

鷄鳴や柱踏ゆる紙帳越　素牛

ものわすれたる夕立のあと　鳩枝

月すごく松を麓に伏ふせて　巴流

新酒の間のとをる指さき　柯山

壁にさす鵙の撞木のあやはしき　梨月

とりわけ肥て菊の一畦　貝壽

色紙物女子勝りに縫濟し　枝

云出す迄のつらき年月　牛

玉川の水呑てより世の廣き　山

ぐる〳〵巻にきざむ葉烟草　流

跡もなく雲は陽吹の押まくり　壽

雁のおだしき城の二三里　月

名月を宛にして行草の庵　牛

浴衣の粘のすぐる秋風　枝

取逃す鰻は二度と尾も見せず　流
たゝみ掛たるむら雨の足　山
咲花に合掌揚る・五間梁　壽
引むすぶをも待ぬあさつき　月
永き日を欠して出る山の神　枝
泪にひとつ投るつむぬき　牛
年ゝの明く裡を互のうきちぎり　流
虫の道さへ見ゆる月代　山
盗人に金くれてのく道の露　月
出來十分に戰ぐはなおち　壽
石風呂の柴一燒とだかへこみ　牛
何唱てか拜む庚申　滿
郭公今年も人に聞かちぬ　山
竹杖みがく浪のあら砂　月
里坊の烟横川に立離れ　枝
つきしとみたる栖の雌羽　壽
北風に渦卷出る雪の雲　流
念佛中間に殘る年寄　牛

つれ〴〵に小判の耳を揃立　月
屋根ふみちらす鵄庭鳥　山
敷物の禮いふてやる花の下　枝
何にも角にももゆる陽炎　壽

藤實集後序

夏蚊不可與語寒秋蟬不可與語雪故非君子不可與語至道非逸士不可與語風雅苟非其人非其地而遽語之以其道不但如夏蚊之不信寒秋蟬之不信雪而反得譏罵也必矣豈可不擇其人乎余友素牛兄家本赤貧釜中生魚然以清苦為實而未甞見攢眉蹙額之態也常寓目書囊曲肱自遣專用心於俳諧連歌也而京師豪姓聞風造請然非其人閉戸而不語若得其人則犯霜冒雨爲霏霏之語而自不知倦矣所謂志遂埃霧者也頃一二同志請鏤其集於梓再三而後許之因請後序於余余雖未甞知其道而喜乎兄之志高而且有氷蘗之堅故妄屬鄙言冀學是道者見之知兄志高而造其道於是乎跋

元祿甲戌五月上浣

洛陽西川親長書

□□

京寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

炭俵（すみだはら）

建・順

野坡
孤屋
利牛
撰

炭俵序

此集を撰める孤屋・野坡・利牛らは常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき、心の泉をくみしりて、十あまりなゝの文字の野風をはげみあへる輩也。霜凍り冬とのゝあれませる夜、この二三子庵に侍て、火桶にけし炭をおこす。菴主これに口をほとけ、宋人の手龜らずといへる藥是ならんと、しのゝ折箸に澹のさゝやかなるを竪にをき、横になをしつゝ、金屏の松の古さよ冬籠　と舌よりまろびいづる聲のみたりが耳に入、さとくもうつるうの目鷹のめどもの、是に魂のすはりたる。げにや、これを思ひ立、はるの日のゝつと出しより、秋の月にかしらかたぶけつゝ、やゝ吟終り篇なりて、竟にあめつちの二卷にわかつとなん。是をひらきみるに有聲の繪をあやどり、おさむれば又くぬきの炭の筋みえたり。けだしくも題號をかく付侍事は、詩の正義にいへる五ツのしな、あるはやまとの卷〳〵のたぐひにはあらねど、例の口に任せたるにもあらず。竊により所ありつる事ならし。ひと日、芭蕉旅行の首途に、やつがれが手を携えて、再會の期を契り、かつ此等の集の事に及で、かの冬籠の夜きり火桶のもとにより、くぬぎ炭のふる哥をうちずしつるうつりに、炭だはらといへるは誹也けりと獨ごちたるを、小子聞をりて、よしとおもひうるとや。此しうをえらぶ媒と成にたり。この心もて、宜しう序書てよと云捨てわかれぬ。今此事をかうかべ、其初をおもふに、題號をのづからひゞけり。さらに辨をつくる境にはあらじかしと、くちをつぐむ。

元祿七の年夏閏さつき初三の日　素龍書

俳諧炭俵集 上卷

むめがゝにのつと日の出る山路かな　芭蕉
處〳〵に雉子の啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　仝
上のたよりにあがる米の直　芭蕉
宵の内はら〳〵とせし月の雲　仝
藪越しはなすあきのさびしき　野坡
ウ
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉
奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡
ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋の事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにやくばかりのこる名月　芭蕉
はつ雁に乘懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
町衆のづらりと醉て花の陰　野坡
門で押るゝ壬生の念佛　芭蕉
名
東風〻に糞のいきれを吹まはし　仝
たゞ居るまゝに肱わづらふ　野坡
江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方〳〵に十夜の内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひろうた金で表がへする　野坡
はつ午に女房のおやこ振舞て　芭蕉
又この春も濟ぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下りて靑麥の出來　野坡
ウ
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはまの雜水　芭蕉
千どり啼一夜〳〵に寒うなり　野坡

未進の高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて來て　野坡
屛風の陰にみゆるくわし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂のかたまりて　野坡
外をざまくに圍ふ相撲場　嵐雪
細〳〵と朔日ごろの宵の月　利牛
早稻も晩稻も相生に出る　野坡
ウ
泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
あちこちすれば晝のかねうつ　利牛
隣から節々嫁を呼に來る　野坡
てふ〳〵しくも譽るかいわり　嵐雪
黒谷のくちは岡崎聖護院　利牛
五百のかけを二度に取けり　野坡
綱ぬきのいぼの跡ある雪のうへ　嵐雪
人のさわらぬ松黒む也　利牛
雜役の鞍を下せば日がくれて　野坡
飯の中なる芋をほる月　嵐雪
漸と雨降やみてあきの風　利牛
鷄頭みては又鼾かく　野坡
名
奉公のくるしき顔に墨ぬりて　嵐雪
抱揚る子の小便をする　利牛
くはた〳〵と河内の荷物送り懸　野坡
心みらるゝ箸のせんたく　嵐雪
聟が來て娘の世とは成にけり　利牛
ことしのくれは何も囉はぬ　野坡
金佛の細き御足をさするらん　嵐雪
此かいわいの小鳥皆よる　利牛
黍の穗は殘らず風に吹倒れ　野坡
馬場の喧嘩の跡にすむ月　嵐雪
弟はとう〳〵江戸で人になる　利牛
今に庄やのくちはほどけず　野坡

ウ
賣手からうつてみせたるたゝき鉦　嵐雪
　ひらり〳〵とゆきのふり出し　利牛
鎌倉の便きかせに走らする　野坡
　かした處のしれぬ細引　嵐雪
獨ある母をすゝめて花の陰　利牛
　まだかびのこる正月の餅　野坡

孤屋

ふか川にまかりて

空豆の花さきにけり麥の緣
　晝の水鷄のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨降て　岱水
　そつとのぞけば酒の最中　利牛
寐處に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
　どたりと塀のころぶあきかぜ　孤屋
ウ
きり〳〵す薪の下より鳴出して　利牛
　晩の仕事の工夫するなり　岱水
妹をよい處からもらはるゝ　孤屋
　僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
　家のながれたあとを見に行　利牛
鱠汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
　茶の買置をさげて賣出す　孤屋
この春はどうやら花の靜なる　利牛
　かれし柳を今におしみて　岱水
雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋
　ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉
名
不屆な隣と中のわるうなり　岱水
　はつち坊主を上へあがらす　利牛
泣事のひそかに出來し淺ぢふに　芭蕉
　置わすれたるかねを尋ぬる　孤屋
着のまゝにすくんでねれば汗をかき　利牛
　客を送りて提る燭臺　岱水
今のまに雪の厚さを指てみる　孤屋
　年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水

堪忍ならぬ七夕の照り　利牛
名月のまに合せ度芋畑　芭蕉
すた〳〵いうて荷ふ落鮎　孤屋
ウ　このごろは宿の通りもうすらぎし　利牛
山の根際の鉦かすか也　岱水
よこ雲にそよ〳〵風の吹出す　孤屋
晒の上にひばり囀る　利牛
花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉
余のくさなしに菫たんぽゝ　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛　各九句

百韻

子は裸父はてゞれで早苗舟　利牛
岸のいばら（茨）の眞ッ白に咲　野坡
雨あがり珠數懸鳩の鳴出して　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色の紬（つむぎ）たぐりよせ　野坡
馬が離れてわめく人聲　孤屋
暮の月干葉（ひば）の茹汁わるくさし　利牛
掃ば跡から檀（まゆみ）ちる也　野坡
ウ　ざゝめきの中でより出するりほあか（頬赤）　孤屋
坊主になれどやはり仁平次　利牛
松坂や矢川へはいるうら通り　野坡
吹るゝ胼（ひゞ）もつらき闇の夜　孤屋
十二三辨の衣裳の打そろひ　利牛
本堂はしる音はとろ〳〵　野坡
日のあたる方はあからむ竹の色　孤屋
只奇麗さに口すゝぐ水　利牛
近江路のうらの詞（ことば）を聞初て　野坡
天氣の相（さう）よ三日月の照　孤屋
生（イキ）ながら直に打込むひしこ漬　利牛
椋（むく）の實落る屋ねくさる也　野坡
帶賣の戻り連立花ぐもり　孤屋
御影供ごろの人のそはつく　利牛
ニオ　ほか〳〵と二日灸（ふつかやいと）のいぼひ出　野坡

ほろ〳〵あへの膳にこぼるゝ　孤屋
ない袖を振て見するも物おもひ　利牛
舞羽の糸も手につかず繰　野坡
段〳〵に西國武士の荷のつどひ　孤屋
尙きのふより今日は大寒　利牛
切蜣の喰倒したる植たばこ　野坡
くばり納豆を仕込廣庭　孤屋
瘧日をまぎらかせども待こゝろ　利牛
藤ですげたる下駄の重たき　野坡
つれあひの名をいやしげに呼まわり　孤屋
となりの裏の遠き井の本　利牛
くれの月横に負來る古柱　野坡
ずいきの長のあまるこつてい　孤屋

二ウ
ひつそりと盆は過たる淨土寺　利牛
戸でからくみし居風呂の屋ね　野坡
伐透す椴と檜のすれあひて　孤屋
赤い小宮はあたらしき內　利牛
濱迄は宿の男の荷をかゝえ　野坡
師走比丘尼の諷の寒さよ　孤屋
餅搗の臼を年〳〵買かえて　利牛
天滿の狀を又忘れけり　野坡
廣袖をうへにひつぱる舟の者　孤屋
むく起にして參る觀音　利牛
燃しさる薪を尻手に指くべて　野坡
十四五兩のふりまはしする　孤屋
月花にかきあげ城の跡ばかり　利牛
弦打颪海雲とる桶　孤屋

三オ
機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡
小昼のころの空靜也　利牛
椽端に腫たる足をなげ出して　孤屋
鍋の鑄かけを念入てみる　野坡
麥畑の替地に渡る榜示杭　利牛
賣手もしらす賴政の筆　孤屋
物毎も子持になればだゝくさに　野坡
又御局の古着いたゞく　利牛
妓王寺のうへに上れば二尊院　孤屋

けふはけんかく寂しかりけり　野坡
薄雪のこまかに初手を降出し　利牛
一つくなりに鱈の雲腸　孤屋
銭さしに菰引ちぎる朝の月　野坡
なめすゝきとる裏の塀あはひ　利牛
三ウ
めを縫て無理に鳴する鵙の聲　孤屋
又たのみして美濃たよりきく　野坡
かゝさずに中の巳の日をまつる也　利牛
入來る人に味噌豆を出す　孤屋
すがかひに木綿袷の龍田川　野坡
御茶屋のみゆる宿の取つき　利牛
ほや〳〵とどんどほこらす雲ちぎれ　孤屋
水菜に鯨まじる惣汁　野坡
花の内引越て居る樫原　利牛
尻輕にする返事聞よく　孤屋
おちかゝるうそ〳〵時の雨の音　野坡
入舟つゞく月の六月　利牛
拭立てお上の敷居ひからする　孤屋

名
何言つのる詞からかひ　野坡
大水のあげくに畑の砂のけて　利牛
何年菩提しれぬ栃の木　孤屋
敷金に弓同心のあとを継　野坡
丸九十日濕をわづらふ　利牛
投打もはら立まゝにめつた也　孤屋
己なしん碁盤よう借に來る　野坡
里離れ順禮引のぶらつきて　利牛
やはらかものを嫁の襟もと　孤屋
氣にかゝる朔日しまの精進箸　野坡
うんぢ果たる八專の空　利牛
丁寧に仙臺俵の口かゞり　孤屋
訴訟が濟で土手になる筋　野坡
夕月に醫者の名字を聞はつり　利牛
包で戻る鮭のやきもの　孤屋
名ウ
定免を今年の風に欲ばりて　野坡
もはや仕事もならぬおとろへ　利牛
暑病の殊土用をうるさがり　孤屋

幾月ぶりでこゆる逢坂　野坡
減もせぬ鍛冶屋のみせの店ざらし　利牛
門建直す町の相談　孤屋
彼岸過一重の花の咲立て　野坡
三人ながらおもしろき春　執筆

春之部發句

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　芭蕉
東雲やまいら戸はづすかざり松　濁子
みちのくのけふ關越ん筥の海老　杉風
春や祝ふ丹波の鹿も歸とて　京 去來
刀さす供もつれたし今朝の春　大坂 正秀
いそがしき春を雀のかきばかま　大坂 洒堂
喰つみや木曾のにほひの檜物　岱水
[illegible]　[illegible]

目下にも中の詞や年の時宜　孤屋
初日影我茎立とつまれはや　利牛
長松が親の名で來る御慶哉　野坡

梅

梅一木つれ〳〵草の姿かな　露沾
うめ咲や臼の挽木のよきまがり　曲翠
むめが香の筋に立よるはつ日哉　支考
窓のうちなみこみて
むめちるや糸の光の日の匂ひ　伊賀 土芳
梅さきて湯殿の崩れなをしけり　利牛
赤みその口を明けりむめの花　游刀
みな〳〵に咲そろはねど梅の花　野坡
紅梅は娘すまする妻戸哉　杉風
をなごどもの、七くさはやすを見て
とはしるも顔に匂へる薺哉　其角
七草や粧ひしかけて切刻み　野坡
各より[illegible]文のはしに
うちむれてわかな摘野に脛かゆし　仙杖

大はらや蝶の出てまふ朧月　僧丈草

おぼろ月まだはなされぬ頭巾かな　仙化

深川の會に

長閑さや寒の名殘りも三ヶ一　利牛

十五日立や睦月の古手賣　大坂之道

猫の戀初手から鳴て哀也　野坡

ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うぐひすにほうと息する朝哉　嵐雪

鶯に薬をしへん聲の文(あや)　其角

うぐひすの聲に起行雀かな　桃隣

うぐひすや門はたま〳〵豆麩(とうふ)賣　野坡

鶯の一聲も念を入にけり　利牛

柳

こねりをもへらして植し柳かな　湖春

障子ごし月のなびかす柳かな　素龍

五人ふち(扶持)とりてしだるゝ柳かな　野坡

町なかへしだるゝ宿の柳かな　利牛

傘に押しわけみたる柳かな　芭蕉

椿

土はこぶ籠(ふご)にちり込椿かな　孤屋

枝長く伐らぬ習を椿かな　湖春

念入て冬からつぼむ椿かな　曲翠

鋸にからきめ見せて花つばき　嵐雪

鳥の音も絶ず家陰の赤椿　支考

はき掃除してから椿散にけり　野坡

花

うへのゝ花見にまかり侍しに、人〳〵幕打さわぎ、ものゝ音小うたの聲さま〳〵なりにけろ、かたはらの松かげをたのみて

四ッごき(五器)のそろはぬ花見心哉　芭蕉

めづらしや内で花見のはつめじか　杉風

何がしのかうの殿の花見に侍りて

うか〳〵と來ては花見の留守居哉　丈草

中下もそれ相應の花見かな　素龍
花守や白きかしらを突あはせ　去來
朝めしの湯を片膝や庭の花　孤屋
あすといふ花見の宵のくらさ哉　荊口
だかれてもおのこごいきる花見哉　斜嶺
柿の袈裟ゆすり直すや花の中　北枝
牡丹すく人もや花見とはさくら　洞春
あだなりと花に五戒の櫻かな　其角
花はよも毛虫にならじ家櫻　嵐雪
やまざくらちるや小川の水車　大津あま 智月
老僧も袈裟かつぎたる花見哉　大坂 之道
誰毋ぞ花に珠數くる遲ざくら　斾青
山櫻小川飛こすおなご哉　越前福井 普全
昆布だしや花に氣のつく庫裏坊主　利牛
おちつきは魚屋まかせや櫻がり　仝
折かへる櫻ふゞくや臺所　孤屋
祭まであそぶ日なくて花見哉　野坡
食の時皆あつまるや山ざくら　仝

上巳

帶ほどに川のながるゝ塩干哉　沾德
畫舟に乘るやふしみの桃の花　桃隣
かづらきの神はいづれぞ夜の雛　其角
鬼の子に餅を居るもひゝな哉　みの 如行
日半路をてられて來るや桃の花　野坡
庭の種每年踏る桃の華　利牛
藪垣や馬の貝かくもゝの花　孤屋
青柳の泥にしたるゝ塩干かな　芭蕉

題しらず

瀧つぼに命打こむ小あゆ哉　嵯峨田夫 爲有
春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏　芭蕉
散殘るつゝじの蘂や二三本　子珊
ほそ〴〵とごみ燒門のつばめ哉　怒誰
鳥の行やけのゝ隈や風の末　伊賀 猿雖
氣相よき青葉の麥の嵐かな　仙華

旅行にて

法度場の垣より内はすみれ哉　野坡

此集いまだ半なる比、孤屋、旅立事
ありけるに、品川までみ送りて

雲霞どこまで行もおなじ事　野坡
梅さくらふた月ばかり別れけり　利牛

夏之部發句

首夏

塩うをの裏ほす日也衣かへ　嵐雪
衣かへ十日はやくば花ざかり　野坡
綿をぬく旅ねはせはし衣更　九節
雀よりやすき姿や衣かへ　雪芝
花の跡けさはよほどの茂りかな　子珊
扇屋の暖簾白し衣かへ　利牛

うの花

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉
うの花の絶間たゝかん闇の門　去來

旅行に

うの花に蘆毛の馬の夜明哉　許六
うの花に扣(たゝく)ありくやかつらかけ　支考

題しらず

棹の歌はやうら涼しめじか舟　湖春
鬚宗祇池に蓮ある心かな　素堂
うぐひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

聞までは二階にねたりほとゝぎす　桃隣
時鳥一二の橋の夜明かな　其角
行燈を月の夜にせんほとゝぎす　嵐雪
挑灯の空に詮なしほとゝぎす　杉風
木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす　芭蕉
青雲や舟ながしやる子規　素龍
時鳥啼〱風が雨になる　利牛
子規顔の出されぬ格子哉　野坡

麥

柿寺に麥穂いやしや作どり　荊(みつ)口
麥の穗と共にそよぐや筑波山　千川

麥跡の田植や遲き螢どき　許六

翁の旅行を川さき迄送りて

刈こみし麥の匂ひや宿の内　利牛

おなじ時に

麥畑や出ぬけても猶麥の中　野坡

おなじこゝろを

涌風やむらがる蠅のはなれぎは　岱水

端午

五月雨や傘に付たる小人形　其角

さうぶ懸てみばやさつきの風の色　大坂 洒堂

五日迄水すみかぬるあやめかな　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みをのやは首の骨こそ甲なれ　仙花

帷子のしたぬぎ懸る袷かな　素龍

夏旅

並松を見かけて町のあつさかな　臥高

枯柴に晝皃あつし足のまめ　斜嶺

二三番鷄は鳴どもあつさ哉　長崎 魯町

はげ山の力及ばぬあつさかな　猿雖

するが地や花橘も茶の匂ひ　芭蕉

此句は島田よりの便に

五月雨

さみだれやとなりへかける丸木橋　素龍

五月雨の色やよど川大和川　桃隣

さみだれに小鮒をにぎる子共哉　野坡

五月雨や露の葉にもる蘭蔭　嵐蘭

此句は桃隣より書こしぬ

五月雨や顏も枕もものゝ本　岱水

凉

川中の根木によろこぶすゞみ哉　芭蕉

月影にうごく夏木や葉の光り　女 可南

凉しさよ塀にまたがる竹の枝　長崎 卯七

行燈をしいてとらするすゞみかな　探芝

崎風はすぐれて凉し五位の聲　智月

すゞしさをしれと杓の雫かな　備前 兀峰

すゞしさや浮洲のうへのざこくらべ　去來

夕すゞみあぶなき石にのぼりけり　野坡

三日月の隱にてすゞむ哀かな　素堂

題しらず

橘や定[てい]家[か]机のありどころ　杉風

熨斗むくや磯菜すゞしき島がまへ　正秀

世の中や年貢畠のけしの花　里東

早乙女にかへてとりたる菜飯哉　嵐雪

木曾路にて

やまぶきも巴も出る田うへかな　許六

ひるがほや雨降たらぬ花の皃　智月

はへ山や人もすさめぬ生くるみ　北鯤

曉のめをさまさせよはすの花　乙州

雨乞の雨氣こはがるかり[借]着哉　丈草

螢みし雨の夕や水葵　仙花

一いきれ蝶もうろつくわか葉哉　楚舟

なりかゝる蟬がら落す李かな　殘香[みの]

猪の牙にもげたる茄子かな　爲有[さが]

團賣侍町のあつさかな　怒風

けふときは鶯の栖[すみか]や雲の峰　祐甫

一枝はすげなき竹のわかば哉　仙花

竹の子や兒[ちご]の齒ぐきのうつくしき　嵐雪

さるべき人、僕が酒をたしなむ事を、かたく戒め玉ひて說せしむ。しかるにある會にそれをよく知て、あらきあはもりなど名あるかぎりを取出て、あるじせられければ汗をかきて

改て酒に名のつくあつさ哉　利牛

ある人の別墅にいざなはれ、蒸日打和きて物がたりし其夕つかた、外のかたをながめ出して

行雲をねてゐてみるや夏座敷　野坡

誹諧炭俵　下卷

秋之部

秋のあはれ、いづれか〳〵の中に、月を詠て時候の序をえらばず。

名月

名月や見つめても居ぬ夜一よさ　湖春

名月や椽とりまはす黍の虚　去來

家買てことし見初る月夜哉　荷兮

名月や誰吹起す森の鳩　洒堂

松蔭や生船揚に江の月見　里東

もち汐の橋のひくさよけふの月　利牛

家こほつ木立も寒し後の月　其角

むさしの仲秋の月、はじめて見侍て兩峰ノ不盡・筑波な

名月や不二みゆるかとするが町　素龍

七夕

笹のはに枕付てやほしむかへ　其角

星合にもえ立紅やかやの縁　孤屋

七夕やふりかはりたるあまの川　嵐雪

盂蘭盆

とうきびにかけろふ軒や玉まつり　洒堂

踊るべきほどには醉て盆の月　江州 李由

盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡

朝皃

閉關

朝皃や晝は錠おろす門の垣　芭蕉

朝皃や日備出て行跡の垣　利合

てしかなと朝皃ははす御哉　湖春

秋虫

年よれば聲はかるゝぞきり〴〵す　大津 智月

悔いふ人のとぎれやきり〴〵す　丈申

蟷螂にくんで落たるぬかごかな　爲有

こほろぎや箸で追やる膳の上　孤屋

鹿

友鹿の啼を見かへる小鹿かな　車來

人のもさめによりて

鹿のふむ跡や硯の躬恒形　素龍

旅行のさき

近江路やすがひに立る鹿の長　土芳

草花

宮城野の萩や夏より秋の花　桃隣

花すゝきとらへぢからや村すゞめ　野童

片岡の萩や刈ほす稲の端　猿雖

芦の穂や貞撫揚る夢ごゝろ　丈草

なにはの津にて

芦のほに箸うつかたや客の膳　去來

女中の茸狩なみて

茸狩や鼻のさきなる哥かるた　共角

園菊

菊畑おくある霧のくもり哉　杉風

紺菊も色に呼出す九日かな　桃隣

秋植物

柿のなる本を子どもの寄どころ　利牛

落栗や谷にながるゝ蟹の甲　新甫

秋風や茄子の數のあらはるゝ　木白

箕に干て窓にとちふく綿の桃　孤屋

こうがらしの名を南蠻がらしといへるは、かれが治世南ばんにてひさしかりしゆへにや。未詳。ほうづき・天のぞき・そらみ・八つなり、など、いへるはなりかたちを、このめる人々のもてあそびて付たる成べし。みなやさしからぬ名ー目は、汝がむまれ付のふつゝかなれば、天資自然の理。さら〳〵恨むべからず。かれが愛をうくるや、石臺にのせられて、竹椽のはしのかたにあるは、上々の仕合なり。さもすれば、すりばちのわれ、そこぬけのつるべに土（塙）かはれて、やれのはづれ・二階のつま・物ほしのひかげをたのめるなど、あやうくみえ侍る朝良のはかなきたぐひに

は、たれも／＼おもはず。大かたは、かつら髭・つり鬚のますらおにかしづかれて、びんぼ樽の口をうつす、みさかなさなり、不食無菜のさき、ふさ取出され、おほくはやつこ豆敷の比、紅葉の色をみするを、榮花の頂上させり。かくはいへど、ある人北野まうでの歸さに、みちのほさりの、小童にこがれ一兩くれて、なんぢが青／＼さひさつみのりしを、所望せし事ありさいへば、いやしめらるべきにもあらず。しかしいまはその人／＼も此世をさりつれば、いよ／＼愛をもたのむべからず。からきめも見すべからずさ小序をしかいふ。

石臺を終(つひ)にねこぎや唐がらし　野坡

題しらず

相撲取ならぶや秋のからにしき　嵐雪

居風呂の下や案山子の身の終　丈草

礎ひとりよき染物の匂ひかな　酒堂

秋のくれいよ／＼かるくなる身かな　荷兮

茸狩や黄蕈も兒は嬉し負　利合

夕負の汁は秋しる夜寒かな　支考

くる秋は風ばかりでもなかりけり　北枝

秋風に蝶やあぶなき池の上　僧 依々

庖丁の片袖くらし月の雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落(ヲチ)ずふじ凩　桃隣

冬枯の磯に今朝みるとさか(雞冠菜)哉　芭蕉

櫻木や菰張まはす冬がまへ　支梁

蜘の巣のきれ行冬や小松原　斜嶺

刈蕎麥の跡の霜ふむすゞめ哉　桐奚

凩の藪にとゞまる小家かな　殘香

初霜や猫の毛も立臺所　楚舟

凩や眇(マクタキ)しけき猫の面(ツラ)　八桑

南宮山に詣て

木枯の根にすがり付檜皮(ひはだ)かな　桃隣

箒目に霜の蘇鐵のさむさ哉　游刀

時雨

芋喰の腹へらしけり初時雨　荊口

黒みけり沖の時雨の行どころ　丈艸

芭蕉翁をわが茅屋にまねきて

もらぬほど今日は時雨よ草の庵　斜嶺

有明となれば度〱しぐれかな　許六

旅ねのころ

小夜霎(しぐれ)隣の臼は挽やみぬ　野坡

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乘るや大根引　芭蕉

鉢まきをとれば若衆ぞ大根引　野坡

神送荒たる宵の土大根　酒堂

さむさを下の五文字にすへて

人聲の夜半(よなか)を過る寒さ哉　野坡

この比は先挨拶もさむさ哉　示蜂

蕎麥切に吸物もなき寒さ哉　利牛

足もともしらけて寒し冬の月　我眉

魚店や莚うち上て冬の月　里東

右の二句はふか川の庵へをさづれし比、他國よりの狀のはしに有つるをみて、今爰に出しぬ。

雪

はつ雪にとなりを顔で教けり　野坡

初雪の見事や馬の鼻ばしら　利牛

はつ雪や塀の崩れの蔦の上　買山

雪の日に庵借(カサフ)ぞ鷦鷯(ミソサザイ)　依々

雪の日やうすやうくもるうつし物　猿雖

冬の夜、飯道寺にて

杉のはの雪朧なり夜の鶴　支考

朱の鞍や佐野へわたりの雪の駒　北枝

はつ雪や先馬やから消そむる　許六
炭賣の横町さかる雪吹哉　湖夕
海山の鳥啼立る雪吹かな　乙州
江の舟や曲突にとまる雪の鷺　素龍

題不知

かなしさの胸に折込枯野かな　羽黒亡人 呂丸
寒菊や粉糠のかゝる臼の端　芭蕉
禪門の革足袋おろす十夜哉　許六
御火燒の盛物とるな村がらす　智月
白うをのしろき匂ひや杉の箸　之道
榾の火やあかつき方の五六尺　丈中
庚申やことに火燵のある座敷　殘香
誰と誰が緣組すんでさと神樂　其角
海へ降霰や雲に波の音　仝

すゝはき

煤はきは已が棚つる大工かな　芭蕉
煤拂せうじをはくは手代かな　万乎
餅つきや元服さする草履取　野坡
山臥の見事に出立師走哉　嵐雪
待春や氷にまじるちりあくた　智月

歳暮

このくれも又くり返し同じ事　杉風
はかまきぬ聟入もあり年のくれ　李由
なしよせて鶯一羽としのくれ　智月
鍋ぶたのけば〳〵しさよ年のくれ　孤屋
としの夜は豆はしらかす俵かな　猿雖
年のくれ互にこすき錢つかひ　野坡

芭蕉よりの文に、くれの事いかゞなど有し、其かへり事に

爪取て心やさしや年ごもり　素龍
行年よ京へとならば狀ひとつ　湖春

誹諧秋之部

秋の空尾上の杉に離れたり　其角
おくれて一羽海わたる鷹　孤屋

朝霧に日傭揃る貝吹て　仝
月の隠るゝ四ッ扉の門　共角
祖父が手の火桶も落すばかり也　仝
つたひ道には丸太ころばす　孤屋
下京は宇治の糞船さしつれて　仝
坊主の着たる簑はおかしき　共角
足軽の子守して居る八ッ下り　孤屋
息吹かへす霍乱の針　共角
田の畔に早苗把て捨て置　孤屋
道者のはさむ編笠の節　共角
行燈の引出さがすはした錢　孤屋
顔に物着てうたゝねの月　共角
鈴縄に鮭のさはればひゞく也　孤屋
雁の下たる筏ながるゝ　共角
貫之の梅津桂の花もみぢ　孤屋
むかしの子ありしのばせて置　共角
いざ心跡なき金のつかひ道　仝
宮の縮のあたらしき内　孤屋
夏草のぶとにさゝれてやつれけり　共角
あばたといへば小僧いやがる　孤屋
年の豆蜜柑の核も落ちりて　共角
帯ときながら居風呂をまつ　孤屋
君来ねばこはれ次第の家となり　共角
稗と塩との片荷つる籠　孤屋
辛崎へ雀のこもる秋のくれ　共角
北より冷る月の雲行　孤屋
紙燭して尋て来たり酒の殘　共角
上塗なしに張てをく壁　孤屋
名ウ　小粟讀む片言まぜて哀なり　共角
けふもたらつく浮前のふね　孤屋

孤屋旅立事出来て、洛へのぼりけるゆへに、今四句未満にして吟終りぬ。

共角　孤屋　各十六句

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣

どんとゝ水の落る秋風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　桃隣
銅壺よりなまぬる汲んでつかふ也　野坡
つよう降たる雨のついやむ　利牛
瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣
近くに居れど長谷をまだみぬ　野坡
年よりた者を常住ねめまはし　利牛
いつより寒い十月のそら　桃隣
臺所けふは奇麗にはき立て　野坡
分にならるゝ嫁の仕合　利牛
はんなりと細工に染る紅うこん　桃隣
鑓持ばかりもどる夕月　野坡
時ならず念佛きこゆる盆の內　利牛
鳴まつ黑にきてあそぶ也　桃隣
人の物負ねば樂な花ごゝろ　野坡
もはや彌生も十五日たつ　利牛
より平の機に火桶はとり置て　桃隣

むかひの小言たれも見廻ず　野坡
買込だ米で身躰たゝまるゝ　利牛
歸るけしきか燕ざはつく　桃隣
此度の藥はきゝし秋の露　野坡
杉の木末に月かたぐ也　利牛
同じ事老の咄しのあくどくて　桃隣
だまされてまた薪部屋に待　野坡
よいやうに我手に占を置てみる　利牛
しやうしんこれはあはぬ商ど　桃隣
帷子も肩にかゝらぬ暑さにて　野坡
京は惣別家に念入　利牛
名
燒物に組合たる富田鮒　桃隣
隙を盜んで今日もねてくる　利牛
髮置は雪踏とらする思案にて　野坡
先沖までは見ゆる入舟　桃隣
內でより茶がなうても花の蔭　利牛
ちつとも風のふかぬ長閑さ　野坡

神無月廿日、ふか川にて即興

振賣の雁あはれ也ゑびす講　芭蕉
降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物の餅を絶さぬあきの風　野坡
割木の安き國の露霜　芭蕉
網の者近づき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊軍の大事也　芭蕉
淡氣の雪に雜談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹消して　孤屋
肩癖にはる湯屋の膏藥　利牛
上をきの干葉刻もうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で戀する　芭蕉
絈買の七ッさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此島の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖のうつる青草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帶しの水をあぶながり　野坡
平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ産　野坡
どたくさと大晦日も四ッのかね　孤屋
無筆のたのむ狀の跡さき　利牛
中よくて傍輩合の借りいらる　野坡
壁をたゝきて寐せぬ夕月　芭蕉
風やみて秋の鷗の尻さがり　利牛
鯉の鳴子の綱をひかゆる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉
目黒まいりのつれのねちみやく　野坡

どこもかも花の三月中時分　孤屋
輪炭のちりをはらふ春風　利牛
芭蕉　野坡　孤屋　利牛　各九句
雪の松おれ口みれば尙寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟濱に打明て　芭蕉
あいだとぎるゝ大名の供　子珊
身にあたる風もふは〱薄月夜　桃隣
栗をかられてひろき畠地　利牛
ウ
熊谷の堤きれたる秋の水　岱水
箱こしらえて鰹節賣る　野坡
二三疊寐所もらふ門の脇　子珊
馬の荷物のさはる干もの　沾圃
竹の皮雪踏に替へる夏の來て　石菊
稻に子のさす雨のはら〱　杉風
手前者の一人もみえぬ浦の秋　野坡
めつたに風のはやる盆過　利合
宵〱の月をかこちて旅大工　依々
背中へのぼる兒をかはゆがる　桃隣
茶むしろのきはつく上に花ちりて　子珊
川からすぐに小鮎いらする　石菊
名
朝曇はれて氣味よき雉子の聲　杉風
背戸へ廻れば山へ行みち　岱水
物思ひたゞ欝〱と親がゝり　孤屋
取集めてはおほき精進日　曾良
餅米を搗て俵へはかりこみ　桃隣
わざ〱わせて藥代の禮　依々
雪舟でなくばと自慢こきちらし　沾圃
となりへ行て火をとりて來る　子珊
又けさも佛の食で埒を明　利牛
損ばかりして賢こがほ也　杉風
大阪の人にすれたる冬の月　利合
酒をとまれば祖母の氣に入　野坡
すゝけぬる御前の箔のはげかゝり　子珊

次の小部屋でつにむせる聲　利牛
約束にかゞみて居れば蚊に喰れ　曾良
七ツのかねに籠駕呼に來る　杉風
花の雨あらそふ内に降出して　桃隣
男まじりに蓬(よもぎ)そろへる　岱水

杉風　五　野坡　三　孤屋　二
沾圃　二　芭蕉　一　石菊　二
子珊　五　利合　二　桃隣　四
依々　二　利牛　三　曾良　二
岱水　三

撰者芭蕉門人
志太氏　野坡
小泉氏　孤屋
池田氏　利牛

元祿七歳甲戌六月廿八日

俳諧炭俵下卷之終

京寺町通
井筒屋庄兵衛
江戸白銀丁
本屋藤助

市（いち）の庵（いほり）

洒堂撰

誹諧市の庵

酒堂自序

市中にあそぶものは、家をさだむべからず。家をさだめてあそぶものは、鮑・さゞいの類ならん。去年の夏この難波津に這出て、田螺の蓋の明暮をおもへば、魚うる聲のほとゝぎすにまぎれては、しばしば晝のまくらをおどろかし、みぞれの比の節季ゆに庭をこねらるゝも、餅つかぬ宿のおもひ出にや。されば春秋の風情は、いふにとぼしからず。市にも住み山にも住む。果は大水をのむ下地なるべし。

元祿甲戌の夏

贈酒堂

湖水の磯を這出たる田螺一疋、芦間の蟹のはさみをおそれよ。牛にも馬にも、踏るゝ事なかれ。

難波津や田螺の蓋も冬ごもり　芭蕉

武江　はせを菴にて見るゝ時花生をおくとて

花生を見たしやそちの床柱　滄波

橘や定家つくえの置所　杉風

扶持方をつゝくや市の郭公　嵐蘭

木の喫に落着鳥や秋のかぜ　會良

俵つむ陰に雛子の涼かな　俗水

膳所

疊屋も醉ふて歸し夏座敷　曲翠

鋸屑は移徙の夜の蚊遣哉　正秀

敷つめてすゞし疊の藺の匂　野徑

蹈人もなきや階子の夏の月　臥高

戸の見入かくれてやさし青簾　里東

あちらこちら渡て鷹の鳥屋涼　游刀

蝶もまだ行わたらぬや夏の宿　昌房

上舍も乾や床の夏羽織　探芝
風涼し木のきれ多き椽の下　怒誰

京

門貴も壁白由也夏ざかな　去來
生土の竈も床し夏の月　野童
傘かけて先つぎ〳〵し夕すゞみ　素牛

難波

炟枚は誰が家見ぞ桐の花　之道
柚の剃(へり)の底にも花のにほひ哉　車庸
物たらぬ朝寐の蚊屋や新住居　蓑立
窓に入月おもしろや茶のはな香　キ柳
共〳〵にさゝばや花に傘の日記　敬之
折込て塵壺に咲や菊すゝき　呉華
淋しさや戸口に呼る若菜賣り　委均
涼しさや荷(ことと)の水にうく眞瓜(まくは)　荘蘭
朝がほや出し入やすき音羽燒　宥鳥
一葉ちる柳のうらや鯛の家　桃英
狀共をあつめて暑し糊とはけ(刷毛)　史庭

伊勢

百合咲や艸もゆるがすてつたる日に　宗比
塀株になぐれて蟬を聞日かな　文代

難波の浦もすみよしに近しといへば、かぎりなき是非の中にも、都ならばなど住みうからむ。雲は無心にしてかへり、鳥は逍遙して歸る。さらに頭陀(づだ)の風流のみ、はてしなき物ならん。我もいつ武門にこぢきたゝせんとおもへば、物貴の世を赤紙のかげにまぎらはして、鳥鼠の名を此間にかふむらんとす。誠にあやういかな。

虫喰も桃の數なる月夜かな　支考

殘暑のたへがたき比、夜船よりあがりて、酒堂亭にねぶる。

稻妻や夜あけて後も船ごゝろ　丈艸

一日のあつさをくろしむ　　酒堂

宵の間や芥子のつぼみに入月夜
　障子四方に水樓の夏　　車庸
杉の香の小船にかゝるふ屋形して　　宵鳥
　鐙の紋のひかるはる駒　　呉華
泊りなき宿は口ながき唯中に　　史庭
　門はやよひの土肥をきる　　桃英
笹の根をふるひためたる野の開キ　　キ柳
　時の太鼓を薄曇りきく　　蓑立

ウ

幻住の二字は殘りし額の板　　委均
　人の情をみのでわかるゝ　　荘蘭
ひすうこく浪は二見に打よせて　　執筆
　はじめて山を肝つぶしけり　　酒堂
わり膝で書院にちれる客の數　　車庸
　煮おもしろき銀の風呂釜　　宵鳥
すんこりと檜の茂る川むかひ　　呉花
　羽根ふは〱と遊ぶ鷺の子　　史庭
盂蘭盆の來れば休みて田にも出ズ　　桃英
　膳つきすゆる窓の月影　　キ柳
秋風の暮て宿かる石藥師　　蓑立
　袈裟にかけ添ふ鉦子小サキ　　委均
みつがるゝ伯母御を花の力にて　　キ柳
　節句佗しきへりとりの桃　　車庸
合掌をくみて霞に打クサビ　　荘蘭
　糊薄〱と白木綿はる　　呉花
だまさるゝ戀を大にそやされて　　宵鳥
　顏をもあげず居る掛盤　　桃英
出す迄をしかりまはして葬の供　　酒堂
　有明殘る濱の朝やけ　　蓑立
この比の荒に艫もつれぬやら　　史庭
　つきて日高く見ゆる小田原　　キ柳
次の間に使僧ならべる臺のもの　　車庸
　きんかあたまの似合りゝしさ　　荘蘭
松葉に續し岡の夏の照り　　委均
　地下はこぞりて公事工み也　　史庭
さりこくるつゞら長持五十棹　　桃英

はつきり鼻にうき名時雨るゝ　酒堂
染がらも多き年季の冬の雨　篗立
夜は室町にひらく車戸　宵鳥
宵毎の月に落つく小鮓賣　キ柳
風さら〳〵と實のる梅檀　車庸
あの寺の道かや露を渡り行　莊蘭
豐後しぼりのはやる御家中　呉花
献立になうてかなはぬ近江餅　史庭
そらに椿の寒う咲けり　篗立
牛櫃を葭簾にかこふ市の花　桃英
麻の頭巾のかろき春かぜ　委均
耕作に一息馬も瘦こけて　宵鳥
村も町屋も番手草臥　キ柳
薄堀の見廻うけたる藏普請　酒堂
下駄引づりてかへる宵闇　莊蘭

草鞋は掃ためにすて、頭陀は棹の手にかけて、十日ばかりあそぶ。

夏山や雲井をほそる鷹の影　支考
苗に背中をほせる田の草　キ柳
水濁る池に煙草をさし入て　車庸
風はいなさに日和かたまる　酒堂
月暮て燒付さかす三日雛　篗立
明衣につゝむ紋卷のきぬ　敬之
荷作りて戸口に直す柿一荷　執筆
町は田舎に酒の名所　考
往還の坂より見ゆる黄檗派　柳
土用の入を族りあさ凪　庸
引馬の尾髮もふらぬ草臥て　堂
社家の築地の物ふりにけり　立
翠簾越に覗く化粧のてか〳〵と　之
別れの供に下さるゝ五位　柳
鶏もみだれて月の明かゝり　考
門まで穏のなびく出屋敷　堂
植て置竹も殘暑に赤がれて　庸

江戸船つくる濱の賑ひ　之
殊さらに節句はあそぶ門徒寺　立
四ッに晴ては八ッに降雨　考
關越る眞野や堅田を花に見て　之
かすみと出る戰の中　庸
二
取はなす御堂の疊さえかへり　柳
下戸と上戸のたてわかりのむ　立
道のよき年の暮こそ目出度けれ　堂
星はら〳〵と三俣の潮　之
放参をしまひし宵の杖の音　考
枝折の錠のさびて鶴啼　柳
田一反つくるも牛のはたらきに　庸
石のおもりのくるふ小秤　堂
朝月に苧かせの糊の立かねて　立
身のいたづらに秋なくれいる　考
かき物の上を案ずる盆の前　之
松看をりと涼む白雨　庸
馬士に駄賃の外をきをはする　柳

ぬからぬかほの眉びんとして　立
今はやるかるい咄を聞たがり　堂
縮緬そむる雛形の紋　之
日は照りて梅の香寒き雪の上　考
河行ふねの障子さし籠メ　柳
臨濟を讀るゝ寺の修理半　庸
紅の頭のそろふ朝かけ　堂
水引の田笠にさゝげ摘入て　立
納戸の垣もみへぬ荒麥　考
久しうて登る古鄕の宵の月　之
浪こゝもとに一夜きく秋　立
勉する二人の影のやゝ寒　柳
未うるしのにほひ有床　庸
居ちらす花に廣間の木具の數　立
觜の凝とける黄鳥　堂

閏五月廿二日
落柿舍亂吟

柳小折片荷はすゞし初眞瓜　芭蕉
　間引捨たる道中の稗　酒堂
村雀里より岡に出ありきて　去來
　塀かけ渡す手前石がき　支考
月殘る河水ふくむ船の端　丈艸
　小鰯かれて砂に照り付　素牛
ウ
上を着てそこらを誘ふ墓參　堂
　手桶を入るゝお通のあと　蕉
癰にも食はいつものごとくにて　來
　大工の邪魔に鋸をかる　考
竹樋の水汲かくる庫裏の先　牛
　便をまちて酢徳利をやる　堂
降出しも忘るゝ雨のした〳〵と　艸
　惣〳〵やめにしたる洗足　來
打鰻を焼と鱠と南方に　堂
　黑みてたかき樫の木の森　牛
月花に小き門ッを出ッ入ッ　蕉
　巣おろす兒の登る腰板　堂
二
陽炎に眠氣付たる醫者の供　艸
　新茶のかざのほつとして來る　蕉
片口の溜をそいと指し出して　堂
　迎をたのむ明日の萬端　來
薄雪の一遍庭に降渡り　考
　御前はしんと次の間續　蕉
追込の網を鼠のならす音　堂
　隣の明屋あらし吹也　牛
葬禮のあとで經よむ道心坊　來
　手拭脱ておろす牛の荷　考
川ひとつ渡て寒き有明に　蕉
　岩にのせたる田上の庵　艸
正月もいにやれば淋し廿日過　堂
　種漬に來るとゝの名代　來
咲花の片へら殘スしほ鰹　牛
　彼岸をかけてお隙さゝやく　艸

白粉をぬれども下地くろい顔　考

役者もやうの衣の薫（たきもの）　來

芭蕉　六　酒堂　八　去來　七

支考　五　丈艸　五　素牛　五

京寺町通二條上ル町

井つゝ屋庄兵衛板

誹諧

別座鋪（べつざしき）

子珊撰

庵の生平のひとへに衣打かけ、身がるく成行程、翁ちかく旅行思ひ立給へば別屋に伴ひ、春は歸庵の事を打なげき、扨誹諧談を請けるに、翁今思ふ體は淺き砂川を見るごとく、句の形・付心ともに輕きなり。其所に至りて意味ありと侍る。いづれも感入て、及ずも此流れをしたふ折節、庭の夏草に發句を乞て、咄ながら歌仙終ぬ。是を巻頭として有合たる巻〳〵、夏の句の云捨たるをとり集、門人の餞別をむすびて、伊賀の山家のつれ〳〵に涘侍る。

子珊

紫陽草や藪を小庭の別座鋪　芭蕉
よき雨あひに作る茶俵　子珊
朔に鯛の子賣の聲聞て　杉風
出駕籠の相手誘ふ起〳〵　桃隣
かん〳〵と有明寒き霜柱　八桑
榾堀かけてけふも又來る　蕉
住憂て住持こたへぬ破れ寺　珊
どう〳〵と鳴濱風の音　風
若黨に羽織ぬがせて假枕　隣
ちいさき顏の身嗜よき　桑
商もゆるりと內の納りて　蕉
山のかぶさる下市の里　珊
草臥のつゐては旅の氣むづかし　風
四日の月もまだ細き影　隣
秋來ても畠の土のひゞわれて　桑
雲雀の羽のはえ揃ふ聲　蕉
ぺら〳〵と足のよだるき花盛　珊
ひらたい山に霞立なり　風

名 正月の末より鍛冶の人雇　隣
濡たる俵(へう)をこがす分ヶ取　桑
畫の酒寐てから醉のぼかつきて　蕉
五つがなれば歸ル女房　珊
此際を利上ヶ計に云延し　風
まんまと今朝は鞆(とも)を乘出す　隣
結構な肴を汁に切入て　桑
見世より奥に家はひつこむ　蕉
取分て今年は晴ル盆の月　珊
まだ花もなき蕎麥の遲蒔　風
柴栗の葉もうつすりと染なして　隣
国から來たる人に物いふ　桑
ウ 鬧しう一臼搗て供支度　蕉
糞(コエ)汲にほひ隣さうなり　珊
今の間にしるう成程降時雨　風
日用の五器を籠に取込ム　桑
扈從(こしやう)衆御茶屋の花にざはめきて　隣
小船を廻す池の山吹　筆

取あげてそつと戻すや鶉の巣　桃隣
休む田植の尻に鋪蓑　杉風
高低に崎なる家のしぐろふて　子珊
沖細魚(サンマ)の塩のきかぬ南氣　李里
木綿物預ヶて歸ル昏の月　八桑
脇より爰はあかひ蔦の葉　子祐
ウ 仕舞には漆井(ツツン)へ上ヶたる芋の蔓　太大
一里こちから泊り見にやる　仙水
腹癖にきり〳〵痛ム節ッ替　楚舟
窪ヒ所へ木の葉吹込ム　珊
昔より稲荷の前の挽細工　風
唯着のまゝで娘ほしがる　隣
有明の踊の果は戀になり　里
池田伊丹(いたみ)の秋の出替り　大
冷て來る川に江鮒のとれ盛　祐
てら〳〵として雨のこぼるゝ　桑

宮は花草に成たる古畠　水
綿弓提て春も旅がけ　舟
名
十五日節チが過ればひつそりと　大
てんでに鍬のさき懸にやる　里
城下に横から横へ町ふえて　舟
椽の端タまで汐の満来る　祐
相伴のなくても食は進ムなり　隣
かゝる程成事に利が有ル　風
おだみせぬ師走の雪のだらり鐘　珊
隣の船と物を借り合　水
鹿嶋松枝まで太クつッ込ンで　桑
朝きつかりと冷しき月　大
露霜に裘を轉ス臼の音　祐
一口茄子漬む秋風　舟
ウ
二三日夜着は出しても足もたせ　風
降たうちほど仕事追はるゝ　珊
猫の子の百目になれば盗まれて　里
うそ〳〵暮にはづす衣張　隣
花蓬乳母が男の舟便　桑
ぬるみて今は自山成川　水

若竹の肌見せにけり五月雨　八桑
くさみ付たる片搗の麦　楚舟
燕の三番子迄産連て　桃隣
戸板に鱗をふせる夕影　子珊
有明の船に召れて御寝ンなれ　杉風
どこらの畑か鹿を追ふ聲　龜水
ウ
秋の昏木鉢からげて打轉ス　李里
低ひ出し家は屋根斗也　太大
たつたもの今降雪も元トの上　子祐
持こたへたる詰の穂俵　桑
さし繼はちいさひ時ゟ利口にて　舟
山から里へ住替りけり　隣
六月に一日ふれば雨祝ひ　珊
はなえ立たる新敷網　風

箒とりてにつこりと成表つき　水
　いつもの通リ伊勢よりの狀　里
月の秋とやかくすれば花の春　大
　おろし時分と種かつぎ出ス　祐
名　雉鳴やけふは二つは暑からふ　桑
　祖父の病に小言(こゞと)八百　舟
雨角(すみ)を押廻したる鼠壁　隣
　節句の朝日寛成けり　珊
惣じてが物を苦にせぬ生レつき　風
　客挨拶に內儀汗かく　水
村雨の眞降に成て暮レる迄　里
　葉に葉重ナル麻の膝たけ　大
夏の月衣を提て歸らるゝ　祐
　合點させたる緣の下內キ　桑
世の中を穿鑿すればみんな戀　舟
　寒ひ雪をも待習ひあり　隣
よう乾(カレ)たころ木一はえ坪で買　水
　日の横影に鵐(シトヽ)おりるる　風
言傳を顏知人に旅のさき　大
　鼻紙出せば風の吹とる　里
花白く裏の門迄咲わたり　珊
　苅し跡から杉菜若やぐ　祐

歸去秋芭蕉庵

晩鐘をおもへば秋のばせを哉　子珊
　臼の跡つく庭の露草　杉風
こぢ直す野分の空に月出て　仝
　すくなき鮎を追廻しけり　珊
炭俵背負フて下りる山の峽(カイ)　仝
　潤(うるふ)のあればまだ降ぬ雪　風
ウ　此寺の味噌の仕込を喰切リて　珊
　合かけたる藥捨おく　風
我顏の靑きを戀となぶらるゝ　珊
　二番手代の身持つれなき　風
朝やけに北國米(マイ)を積あけて　珊

毎年秋は配ル御秡　風
月夜影片足はまる渡し船　珊
ならべ立たる桶の土芋　風
西行の錢はなくても旅馴て　珊
冬は潮のあたゝかな濱　風
こんもりと鳥居隠るゝ花の中　珊
醫者の夫婦の長閑成日に　風
名 思ひやる去年は越後の雪つらく　仝
春も田づらは眞鴨がち也　珊
念佛の太鼓の役にさゝれ行　風
しらみ渡ればあくる店の戸　珊
蒜をちいさくはやし水で呑　風
御乳の手ばやくかくる腫がけ　珊
拵て明日の祭をねつて見る　風
降程ふつてあがりきる月　珊
川渡り股に付たる蕎麦の花　風
つきぬくやうに跡の鹿笛　珊
片そぎの末社は横にこけ給ふ　風
木に馬つなぎ沓をすげぬる　珊
ウ 大袖の若衆連たる讃岐衆　珊
うき寝を起す鯛の濱焼　風
底寒ヶ打しほれける神無月　珊
居ながら物をねぎる袴屋　仝
花持て針立殿を尋来る　風
糸の袋に五加木入つゝ　仝

採茶庵月興

有明や袷巻たる老の腰　濤波
薄の露もかはくから風　杉風
賣に出す栗の餘をいけさせて　仝
いつも今頃糀屋をまつ　波
打續き空に根のなき日和雲　仝
外に涼しく糸通ス筬　風
ウ 我夫は宮を作りに下総へ　風
長雨つらく指折て見る　波

塩物や豆腐の料理仕盡て　仝
煎のさむればよらぬ同行　風
いかつくも貝吹つらのにくき也　仝
鎌鍬とらぬ八朔の朝　波
秋の水籮に鱠を引揚て　仝
纔に虹の殘る夕月　風
草庵へ待に音なふ提油　仝
藤で柄まく相口の撥　波
奥山の五器に茶を汲花盛　仝
財布頭ッて布を買ふ春　風
名
口は氷し板で將棊の駒作り　仝
巣立の雀風に落來る　波
餅草に菊の萠葉を摘まがへ　仝
しほり戸たゝきござれ坊樣　風
小束なる枝木斗のはした薪　風
けふもく\と寢たる五月雨　波
鶉は若い時より雄にて　仝
因隣なる伊勢の初秋　風

殻物のあがりさがりは月の頃　仝
すにしりとれて鱠丸焼　渓
どこにても親仁は下駄に杖を指　仝
夏間の所化のほどく澁紙　風
ウ
明暮に竹の屏風の骨を組　仝
貝足櫃をば米の入物　波
公通が廊下も古き宇佐の花　風
干鰯の上をもゆる陽炎　波
月額を剃ッそられつ春の暮　仝
荷物は先へ去年の冬中　風

贈桃隣新宅自畫自讃

寒からぬ露や牡丹の花の蜜　芭蕉
田植迄水茶屋するか角田川　其角
竹の子や兒の齦のうつくしき　嵐雪
鹿の子のあどなひ顔や山畠　桃隣

郭公

挑灯の空に詮なし時鳥　杉風
杜鵑待夜の側や小鯵船　子珊
新田や隣もなくてほとゝぎす　八桑
明方や水買に出て時鳥　濤波
聞迄は二階に寝たり子規　桃隣

卯花

卯の花の内らや庭の茶支度　子珊
卯の花に忘るゝ宵の明衣哉　桃隣
卯の花にあたらしくなるあたり哉　八桑
卯の花や雨のあがりの香のはね　楚舟
卯の花にぱつとまばゆき寐起哉　杉風
卯の花にもてなされたる坊主哉　仝
卯の花のうるみは露の朝日哉　仝

牡丹

牡丹見にうつすりとよき唐茶哉　桃隣
僧正の牡丹動かぬ朝日哉　子珊
寝つ起つ牡丹の蕊ひらく迄　濤波

杜若

埋残せさら地の池の杜若　八桑
降程を花に見せけり杜若　子珊
翡翠のまぎれて住か杜若　桃隣
澤瀉はとり残されしかきつばた　杉風

卯月朔日興行

花の跡今朝は餘程の茂り哉　子珊
散残る躑躅の蘂や二三本　仝
足本にこぼれて知や椎の花　李里
一炎蝶もうろつく青葉哉　楚舟

端午

五月迄水すみ兼るあやめ哉　桃隣
落水や菖蒲にすがる手長鰕　白之
茸茂る菖蒲の露や蝸牛　李里
片折レのあやめは雨に直りけり　子珊

水雞

鳥見ては聲の似合ぬ水雞哉　楚舟

子珊亭

若竹に聲や響かす蛙龜　桃隣

晝顔やともに苅るゝ麥畠　仝
藻の花のとぎれ〱や池の上　仝
鵜繩引水や淡たつ二通り　子珊
紫蘇蓼の中に紛れぬ花菖　八桑
土手芝や岸より續く菱ノ花　仝

五月雨

五月雨に蛙のおよぐ戸口哉　杉風
五月雨や互にとはぬ壁隣　楚舟
五月雨の色や淀川大和川　桃隣
張弓の膠くつろぐや五月雨　岸露
五月雨に股立とりし馬の上　兼程
炉路下駄の浮てありくや五月雨　呂國

筍　藪中より聞ゆ

鶯や竹の子藪に老を鳴　芭蕉

橘　前に同

駿河路や花橘も茶の匂ひ　芭蕉
橘や下に落たる鳥の糞　桃隣
橘やさすがに社家の名ぞ久し　子珊
橘や定家机の有所　杉風

蚊遣

人や住蚊遣ふすほるひしげ屋根　李里
蚊遣火に干唐網のけぶる哉　太大

深川にて

庵の留主藪蚊に覺ゝ晝寢哉　楚舟

白雨

白雨やばらつく中に鬼の聲　只國
夕立の跡見て廻ル山田哉　子祐
夕立や腰迯ぬるゝ寺の門　龜水
白雨に見よ桐の葉の莖強し　楚舟

瞿麥

撫子の株はしつこし草の中　子祐
撫子やちいさき花のけだかさよ　白之

風前螢

すつと來て袖に入たる螢哉　杉風

雨後螢

ひつかりと雨の雫を行螢　仝

遣水の拍子に落ス螢哉　亀水
夜鰹に螢の見度斗也　子珊
立よりて覗けば井戸に螢哉　秉程

蓮

蓮折に帶とかするや草履取　仝

百合

くわん／＼と照日に白し百合ノ露　子珊
朝涼猶目の覺ル百合の花　秉程

蟬

聲斗ぬけていのふぞ木ゝの蟬　八桑
蟬の音やおさへて通ル山颪　杉風

夕顏

夕顏やあたりを見れば灰俵　仝
夕顏や蛇の輪を組蔓の下　呂國
夕良に立寄背戸や道しるき　子祐

夏月

斃たる酒も醒けり夏の月　桃隣

凌英庵夏

月の頃ば寐に行夏の川邊哉　杉風
涼風や月よりおくる黑格子　子珊

山家涼

這ふ子迄皆裸なる木陰哉　太大
畔大豆もともに潤ふ青田哉　楚舟
間を替て裾延し立暑サ哉　子珊
行馬の跡さへ暑きほてり哉　杉風
水無月や木末斗の風ゆるき　仝
東雲に牛や涼鋪吉野川　李里
蝙蝠に顏かゝれなよ橋の上　桃隣

餞別

五月雨や草鞋の緒迄笑繩　濁子
落着の古郷やてうど麥時分　杉風
組笠にもる口を包む夏木立　子珊
ゆく水の跡や片寄菱の花　桃隣
夏山の右に見てゆけ我在所　八桑
寒き程案じぬ夏の別れ哉　野坡

野はづれや扇かざして立どまる　利牛
一頃日は陰（カゲレ）かし夏の坂　岱水
五月雨も一月のひよ（延ヒ）閏月　夕菊
新茶ぞと笈の掛（かけ）子（ご）に一袋　濤波
送らばや一つ蚊屋にて一泊り　利合
片皿に竹の子續く日和哉　太大
靑空に何の氣もなき五月哉　龜水
卯の花に腰押のほす峠哉　子祐
鶯籠につく（付ク）啼の末やかんこ鳥　桃川
一休み樗の花や晝の辻　杏村
見送も夏は日陰や一里塚　李下
幸や桑名をのらで美濃眞桑（まくは）　李里
鳴蟬に汗の入べし箱根山　風弦
名殘哉樅（もミ）の茂りの肱曲り　楚舟

箱根迄送りて

ふつと出て關より歸五月雨　曾良

深川の邊に淨求といへる道心あり。愚智文盲にして正直一徧の者也。常に翁につかへて、ちいさき草の戸を得たり。朝夕芭蕉庵の茶を煮事妙なり。此度門人餞別の句を綴ル。淨求つくづく聞居て、愚も一句せんと云、みなみな腹を抱てさへば（聞）、指折文字を算て、かくといふ。おのおの笑あへる事、少時やまず。されども愚成ものゝ心を量てしるし侍る。

はなむけに粽やさらば柏餅　淨求

贈芭叟餞別辭　素龍齋全故

風曉夢を破て遊士關を越んと、ひしげたる笠・なゝめなるわら鞋にて、立出る旅の衣をひかえ、とみに物もいはず、さくりもよゝと、まなこ乾て、はなをすゝるは吾心の弱さのみならんや。そのゆへ（其上）を舌とにいひつゞけ侍ん。まづはおとゝしの冬、すみだ川を尋しより、水鳥の跡さきに伴

ひ、風雅のみぎりひだりに誘れて、孤館の幽情をのべ、又まめなる所も、花すゝきほに出がたき事迄、立よる木陰のおなじ雫になど、かずまへられ侍を、哀いはぬにまさる詞もがな。次には雨の芭蕉見にまかりし時、簑なし笠もなし下駄なし杖もなしと、こはづくれば、内よりそれに雨降さつきかなと、聞ゆるも庵主也けり。二なくいひかはし、かたみに物あらがひて、又うちうなづき、すみにごりひとしきは、おなじながれをくめば成べし。君子のまことに窮すと宜しみち、あるは、佛のさとりなどはさるものにて、侘數寄面白がるは、やさしき道に入たるかひなりけらしと、あるじの打ほころびていへるぞ、たのもしきとり所なる。かくてしの簾まき上れば、野路の夕ぐれ綠也。やゝ空は墨にくろみ行ほど、折懸垣藪の葉かげより、斑なる蚊の聲はせぬ物から、股のあたりさせり。利觜のたへがたきに、いざ玉へ。夜遊に螢うたんとつれ立て、露分衣しめやかに、すなはち身も涼しくそのよもやどりぬ。夜半鐘聲まぢかく、蚊屋と紙のとばりにさうじを隔て、窓間に臥り。日たけて起侍るに、かゆは煮すぐしたれば、杉のはしかた〳〵づゝにてすゝりぬ。今年猶、後のさつきを郭公知ておこたる夜比にや。初音聞侍ずとかこちて、此比の愚詠を

むら雨やかゝる蓬のまろねにも
たへて待るゝほとゝぎすかな

と吟じつれば、折のよきにや、めでくつがへりて、ぬしも今宵句をさぐり得たりと

木隱て茶つみも聞や時鳥

これなん佳境に遊びて、奇正の間をあゆめる作とはしられにけり。予も

青雲や舟ながしやるほとゝぎす

かうも在べきやなど、誹諧にくらす日も在けり。又

卯の花やくらき柳の及ごし

の佳句は、柳暗花明なりといへる碧巖に似かよひ侍を、夏の小雨をいそぐ澤蟹と、卒爾に脇をさへづる折も有つゝ、いつか十日もとまり侍けるに、今かう旅と〳〵に袖を離れ、遠岸蒼々たる川のほとりにひとりたてり。雲なるや、いしなるや、いひしらず。さぞな驛馬のよる山を過ん、共ね覺に思ひをこせよ。いとゞ戀しき都に、美しき鈴の

音、遠ざかりなば何心地かせん。たゞ泪むね（胸）に沸て、肝を煎るがゆへに、猶ことみじか也。よろしうくみ知給はん事をねがふのみ。

おもふぞよいくせのたびにゆく人も
　　とまるも袖はおなじ雫に

不二な思ひやりて　萬葉をさがす

世の海のこほりや落る夏の月

元祿七の年仲夏初の八日

江戸通油町板木屋
木工兵衛
石町十軒店
西林宇兵衛

其便(そのたより)

上・下

泥足撰

けてやはらげましかば、丁様手せんより又たのしからずや。三笠の山にいでし月かもと詠じて、王維・義満等がこゝろさしをやはらげしも、誹諧におゐては是其便成べし。

元祿七年雁來南洲日　　　　晋子序

其便

肥の前長崎のみなとは、異國交易の大津にして天竺の靈文、唐土の詩、今以こゝにとりつたへ、無價の寶類ともてはやす事、通事家の業として耳にもらさず、こゝろにさとさずといふことなし。亦和國より珍賞のもてあそびをうかゞふ事は、本唐の人の餘情まことに深しと聞えけり。されば春秋いたづらなす月雪わたくしなければ、此市間にはさまりて隱閑を求め、和風の至情にあそぶ人多しとかや。その人は必中華の俳諧にうとくして、むかし宗因・元順などが云捨しあとにかたまりて、一向に古躰といひけをされて、風雅をのづからうすらぎ侍れど、心には駿ざる人ありて、行ふれし予が撰集に眼をひらき、心を寄せよりて、芭蕉翁の門にのぞめる句どもをとりあつめて、そのたよりと名付て、此道を興さんとおもひ侍るよし。泥足が消息數〱なりければ、しらぬ火のつくしまで、行ずして誹風を及ぼしぬべきよろこびを、返狀のはしに云やり侍る。これその便と名付たる編序なるべし。もし心あるから人ありて、わがひのもとのもてあそびぞと、舌頭にか

其便に申送りける

月は幻住庵にて

三井寺の門たゝかばやけふの月　芭蕉

木母寺に哥の會ありけふの月　晋子

けふ長崎の泥足めづらしき顔もて、
日なれぬうつはものをおくり侍る
に

新月の心ばえ也唐煙筒　嵐雪

舟中吟

名月や眠る人さへ酒とらず　泥足

名月や孫を愛して夜もすがら　岩翁

名月や紅梅どのゝ笛の聲　柴雫

内入數心にしめす月み哉　紫紅

百人の客挨拶やけふの月　龜翁

櫓を捨て流るゝ迄の月見哉　雪水

名月や柳もふとき水の影　九才 其携

十六夜や糸くびれし琴の聲　介我

雪は

松の雪蔦に氷柱のさがりけり　晋子

此蔦や紅葉はづれてけさの雪　泥足

雪の日や疊の酒に裾を引　介我

白鳥は初雪よりの油哉　柳玉

あけぼのや井筒の雪に袖の跡　其詞

寐あけども夜着は疊まじけさの雪　紫紅

戸障子の音は雪也松の聲　晋子

花に

花はよも毛虫にならじ家櫻　嵐雪

花見哉琴に合せて肥前ぶし　柴雫

藁くふか句をすくか花に鳥　介我

花盛都は道のたづねよし　紫紅

山守よ暮て花出す挾箱　泥足

東叡山明鏡坊より花送られしに

文は跡に櫻さし出す使哉　晋子

白鳥（はくてう）の酒を吐らん花の山　嵐雪

啖（くらフ）二花影一ヲさある詩を

花は紅に香を追ふ魚は飢ぬべし　泥足

香煎（カシ）ふるさまに櫻のひとへ哉　介我

花守の心にほむる女かな　秋郷

ちる花や足袋をへだつる足のうら　晋子

ほとゝぎすは

郭公大津の車闇にさえへ　介我

時鳥なかば起せとねる夜哉　翠袖

聞からに千人力や時鳥　泥足

林中不レ賣レ薪と文選に

ぜになくや山時鳥町外レ　晋子

両國橋上に水音すこし

物おもふ舟の早さや郭公　轍士

行燈を月の夜にせんほとゝぎす　嵐雪

晋子家にて、一日崎江の物がたりして

唐人が凪いのる也星まつり　泥足

一葉を鉢にすゞぐ觴　紫紅

たが袴座頭に成て跨るらむ　晋子

國侍は國かたの秋　足

月更て十にたらずや籠枕　紅

いつの菓子やら袋戸の内　晋

昨日けふゆるされて賣はつ茄　足

しやぎりを打て乗出す舟　紅

吉原にあだな娘はなかりけり　晋

眠たい鴫も紅にかゞやく　足

冬中は火燵はなれぬ大名氣　紅

使のものをほむる卽點　晋

立ッ迄は旅人尖る秋の空　足

さき芋がらを軒に釣ル比　紅

夜半の月てこなが哥を聞セばや　晋

鼻の先にていとゞこがるゝ　足

花盛戀に暮たり楊枝店　紅

春のこゝろや手のうづく金　晋

蜆とる人を寒しや法の袖　足

十文やりて宮の案内　紅

五六分に葉のつまりたる深緑　晋

酒吹かぬる池の夕闇　足

耄てさへ孫に土産を思ひ出す　紅
曲池に灸を縫ものゝひま　晋
結構な寐日といふたりけふの雨　足
建長寺からもろふ笋　紅
家賃にて二人はくらす草の庵　晋
手なみを咄す琴柱差役　足
背へかくる水に襲ゆる風呂の月　紅
西瓜のしづく瀑きはつく　晋
本堂に蜩ふかくこもる聲　足
林の透てひろふ鴇の羽　紅
さしわたし泊八十あり花の雲　晋
永過た日を乗物に醉　足
被にて尻形かくす春の風　紅
茶屋はいりする蝶の徘　晋

落花狼藉さゝがめられて

糸櫻同枝あたりして散にけり　北溟

打崩しつゝ逃る蜂の巣　泥足
一つゞき井手の土掘比なれや　鞍風
城の太鼓の風にとぎるゝ　溟
月の出は人さま〲の眼ざし　足
實る半の稲あらす猪　風
すき〲に貰ふてうれし種瓢　溟
おみきいたゞく辻のいせ講　足
長生の役に問るゝ大地震　風
撰て置たる耳白の錢　溟
ゆかしさの餘る折節文が來ル　足
案じ出して夢語りつぐ　風
二ッ三ッ吹てなぐさむ烟草の輪　溟
われ小細工の奉行象る　足
精進も朝〱馴て苦にならず　風
さまして捨る小盥の水　溟
花に鳴鳥の寐所月くらし　足
飢て折たるわらび啖みる　風

當題

はり合て動かぬ風の胡蝶哉　鞍風

白雨や帷子につくまつの脂　同

かれ竹や風に引あふからす瓜　北溟

風光苦吟身といひし春のわかれもあるに

葉ざくらに風のつらさを忘けり　一雲
　袷着初て息災になる　泥足
金を持人とて人や呼るらむ　且水
　績目の揃ふ講のきり石　雲
月の暮殘る暑さに水汲て　足
　書すましたる七夕の哥　水
菊の間に召すさへ有に萩の花　雲
　時〳〵動く足の大指　足
さし竿に届かぬ鳥をにらみつめ　水
　雪の曇に連を呼馬士　雲
尼寺に年貢納る隨落さ　足
　瘡の藥譽て貰ひし　水
瓜延て垢の黒みの恥かしき　雲
　砧の相手名ざすのも戀　足
近〳〵と裏道戻る月の夜半　水
　竈馬飛こむ灰汁のたれ桶　雲
花のため立たる札の朽る也　足
　神輿やすめは燒殘す畑　水
野はづれに誰が破魔矢を射捨けん　雲
　額ぬき合ふ中間の隙　足
其時のいはれを隱すうしろ疵　水
　佛かたげてありく町〳〵　雲
夕暮に米搗臼をこかす也　足
　油土器狗にねぶらせ　水
古文の手のけだかさに嗜て　雲
　内侍の髻に早晩の嫐　足
稲妻に飛違ひたる流星　水
　月に馴子の舟の賑ひ　雲

烁風に遠く聞る餘古手(ヨコテ)ぶし　足
　たづぬる骨を拾ふ草むら　水
半分は焼たる藥の一束　雲
　をし掛客の勝手いそがれ　足
赦(ユル)されて心の寛む花の供奉(グブ)　水
　雨を呼やらうその囀り　雲
鐘つきのさびしく下ル春の山　足
　合せたうふの烟り陽炎　水

泥足へうかゞふ獨吟

夷曲(ヒナブリ)のむかしを残す田哥哉　鵜原 山泉
　汗干す牛の角を引出す
雲青く旭のうつり山晴て
　月の細さを寐ながらにみむ
醫の譽れ白木(ヲケラ)の花の比と咲キ
　刈らでも稲を人のすぎはひ
生過て心の善悪(ゼンアク)を残す也
　杖にひかれて山に入笠
此星を算(かぞへ)そこなふ屓澤
　龍にはあらぬ蛇(くちなは)のきぬ
朝髪の思ひみだれて浅ましく
　三とせの留主にやもめとはしる
たれこめてうろ〳〵泪氷る月
　崩れ庵の形(なり)に降雪
瘦て我人の心もなかりけり
　馬士に問行かづらきの橋
色見えぬ花の匂ひにくさめして
　をのれと春はひらく毛の穴

樹下納凉

捨石や人肌になる夕すゞみ　可之
　蚋(ブト)うすらけり雨雲のはれ　泥足
捧る桴(イカダ)を海に押出して　不得
　百里が間酉の領内　市男

月に賣ル酒上中に分ぬらん　近通
　字づくしよみて眠る秋の夜　筆
男子の鬼灯ふくもにげなくて　足
　表華の外はものいまぬ也　之
義理立る戀の限のおかしさよ　男
　髪きる後家の年は二十か　得
片店は格子づくりに成にけり　之
　夢想に得たる目薬の方　通
月の影橋〱迄も照わたり　得
　水冷やかに獺の音　足
牛の尾に螽の付ケば蟷螂も　通
　子の長泣キにあぐむ乳の人　男
華の山一門中の品くらべ　足
　古キまくらはおもき春雨　之
うぐひすに尻目づかひを紛かし　男
　踏返したる茶碗ほめたり　得
念佛のとぎるゝ寺の臺所　之
　人にも馴て魚の逃ざる　通

錐かりにやる童部を待かねて　得
　朝日の間に仕廻ふ煤掃　足
やさがたに猫にかゝれし爪の跡　通
　夫に轉落をいへる石女　男
抱籠に帋屑入る夕間暮　足
　薬おそろしく落る笹百合　之
月すゞし磨の盥の水すみて　男
　舛の餘のをのれ淡だつ　得
あさましや五十四五迄老しらず　之
　聞分られぬ豐後ものいひ　通
それ〱に苔の衣を羅漢石　得
　花にかまはぬ柴刈の鎌　男
いつかへし雉のたまごの置所　通
　雪が降らねば雪消ぬ春　足

野遊の吟

虫の音にむしり捨たり草の花　甲乙

鳩ふく形のこゝろ淋しき　泥足
待月に櫓の掛戸はづす覧　助鶏
茶のよしあしも次第也　乙
中居從お歩行の中に入交り　足
ひしげた鞠を顔に見立る　鶏
こね返す土に印をさし置て　乙
日和占ふ風の吹出し　足
埋まれて朝迄強き樫の榾　鶏
博奕の戻を寐て果けり　乙
仇くらべつゝむ中にも成べきか　足
肌はづかしきすゝぎ洗濯　鶏
初嵐捨る莚の惜からず　乙
座鋪おどりは八朔の宵　足
月もなく池にひら打魚白し　鶏
礫投ればきゆる燐　乙
世話暮て枉着に成花の春　足
長閑なころの藏の棟揚　鶏

當題

いづくより風の吹出す雲の峰　助鶏
砂川やあしかたよくる蜆とり　仝乙
つく跡や蒼によはふ桃の酒　甲乙

しらぬ隅田川、泥足にこさゝはんさて、旅立前の夜即興に

舟の垢葭へかけたり月の暮　言夕
釣つた顔して戻る鯊釣り　泥足
冬近き風の勢の各別に　同
蔀明れば雨の降こむ　夕
雷の鳴納りを落着て　同
悠に咲たる御所柿の花　足
賤の女は蚊をやる事の不性さよ　足
お歯ぐろ壺を猫の割りけり　夕
占聞ていよ〳〵妬む志し　同
表華ばかりの三輪の明神　足

狩人は雪の降にも休ざる　同
枡燒家でたばこ飲付ヶ　夕
殊勝氣に御眞向椽を擧る也　同
角力になりし馬士の集ﾘ　足
朝市に月見る空のおもしろさ　足
音する霜を掌(テノクボ)に受　夕
花に來る翁のこゝろ花やかに　足
藪のあちらを匂ふ梅が枝　夕
深更不滿哥仙巳

餞別

稻妻のわらひ顔見るわかれかな　言夕
刈殘す穂もいつ迄の盒哉　其由
醉ふて明すや後の名月　泥足
勝角力肘のちがひをさすらせて　東山

角家(カドヤ)ながらも淋し錢見世　由
黄昏にすゝとき猫の面がまへ　足
汁あたゝめよ食は冷(ヒエ)ても　山
野に出ればつゐ氣の晴る病起(アガ)り　由
へつらひもなき寺の門前　足
石なごに負たる儘に耳ひかれ　山
眠さこらゆる禿かはゆし　由
衞士篭の跡の匂ひも幽也　足
身過しらねど八丈が島　山
月の朝馴しあふむの行衛みん　由
詩にふし付て秋の閑有　足
掛鉄もかけぬ庇に筧つゆ　山
破れ屏風のつがひ繕ふ　由
花のさく禁は市の一番に　足
簑をかぶればしらぬ春雨　山

當題

入り聟やしらぬ先祖の魂まつり　東山

たがまことよりしぐれそめけんと
吟じて

我戀の力落しや神無月　一介
すがたみ曇る塵の風　泥足
焙じても皺の皮のしぶとくて　廿雨
持て來るほどのさかな喰也　元次
月の舟櫓に叶ひたる重寶さ　一顆
邊の紅葉のさし掛る枝　筆
近よれば黐をはなるゝ鴫の聲　足
一家合點の上の剃髪　介
たれかふる鼻さへかまずもくのさき　次
寵愛過て出る疳のむし　雨
假初に下る受領の留主守らせ　介
拭ひ際なき板敷の埃　顆
酒呑ぬ遊女己をさびしがり　雨
世帯なれねば紅にことかく　足
さき黑を拔揃たる鴨の羽　顆
月にうかるゝ霜の底冷　次
茶屋建て花に奢といはるべし　足
柳に梅の匂ふ翠がね　介
蜴燒畑に霞なびき合　次
岩穴くらく名のしれぬ神　雨
あらけなき追手を金に迷はせて　介
寐起て見れば汗の寒き　顆
落かゝる毛虫の形に腫上り　雨
草履つくるを老の慰み　足
靑〳〵と竹の瓦の目に立て　顆
賓頭盧撫に所せく迄　次
月の暮矢大臣門閉がりぬ　足
鳥は秋の情にうつらす　介
澁柿は澁柿にてぞすます覽　次
卑さ競に行小人じま　雨

見忘るゝ夢の有増思ひ出し　介
　墨のゆがむもしらぬうき戀　顕
我ながら恥しげなる聲替　雨
　かはゆがられにわたる燕　足
咲しほの花にうつろふ朝日影　顕
　山〱の雪解仕廻けり　次

追加面

簑むしや己ひとりが冬構　青翁
　鳥追こめて散らす茶の花　泥足
拾ふても益なき錐や拾らむ　同
　宿の灯吹消て寐る　翁
有明の影に秣を飼置て　同
　胡麻もからしも濡たる雨　足
汗拭なくてもよしや秋の風　同
　輪になる踊その中に犬　翁

其便 下

青嵐定まる時や苗の色　嵐雪
　道も經がたし皆栗の花　泥足
横筋に蛇籠の水を吹上て　柴雫
　鹿飛かたへ棒を投けり　晋子
角力とは耳にて見ゆる月夜さし　神叔
　茹て甘みを付る石梨　薯刀
沓うたぬ跡足ばかり爪の音　湖月
　大名に逢よしはらの封疆　嵐雪
草茎のむすめは路次へ隠けり　泥足
　乞食の中に朝寢する奴　神叔
雪深し落した金を踏分て　晋子
　寐の柚味噌に圍爐裏取巻　柴雫
尺八を嘘かと聞ば意氣一種　薯刀
　徐〱風の冷る麻足袋　湖月
湯あがりの鼻のひかりもけふの月　嵐雪

酔たおどりを後からつく　泥足
一本でそこらあたりを花盛　神叔
母の作りし養父入の眉　晋子
蕪汁にひとりね覺る朝がすみ　柴雫
猫煩ひて膝にすりつく　薹刀
荷莚の小口をかゞる騒がしさ　湖月
雪隠にゐて返荅をうつ　嵐雪
麥を蒔跡から雁にほられける　泥足
水鼻たれて通る侍　柴雫
蜄に髭の折たる籠の海老　晋子
まだ宵の氣に更る名月　泥足
菊の花沼津の宿もうつろひて　薹刀
秋ふる霜を米の粉の袖　嵐雪
盗人の逃て出たる釜の下　柴雫
将棊の駒や碁石散る庭　薹刀
行灯に鳥をつきぬる針の跡　泥足
嚙ほど眞の堅きかき餅　嵐雪
座禪する衾細目に明にけり　薹刀
牡丹に雨のかゝる匂へり　柴雫
筆勢は主馬に極る花の雲　晋子
屠蘇一献のあとの酒盛　泥足

旅行

駕に濡て山路の菊を三嶋哉　晋子
月は硯にかゝる大樋　介我
盥臺の肴は秋の色持て　泥足
をの〳〵酔に足延す也　一謳
植込に分限としるゝ作り竹　紫紅
雪見の亭にさえわたる浦　湖夕
一息に跡なる島の追付て　桃隣
町の戻は輕きから傘　一境

晋子第迄にて旅立けるを、九月六日即興に跡を慕ぬ。

波動く方へ越したる柳かな　介我

雀の跡の竹の鶯　泥足
屋根葺の階子ほしがる春雨に　晋子
行きも戻も同じ物賣　桃隣
水の音分れる音に月更る　足
角を背負て森くゞる鹿　我
擲待に踏あらしたる塀の内　隣
相撲とりとて親子前髪　足
手がゝりのなき丸石は捨て有ん　我
朝日汐につるて入舟　隣
流れとも結び足らざる帯の色　足
初瀬の舞は酒がさせけり　我
雨風も旅をしつけて苦にならず　隣
崩れ次第や宮守の藏　足
忍ばせて夜着の袖より月を見る　我
戀の起りはちつとした事　隣
繕ふは田舎片氣の花の馬場　足
聟が分なり春の緣日　我
四ツ暗に又淡雪の降出して　隣
着物脱んとうしろ向たり　足
貝燒の輪の轉まはる臺所　我
みやこの人も恥る長崎　隣
蚊の喰はぬ樂も有けり舟の内　足
衣は暑しかたびらの上　我
談合もとつゝをいつに濟兼て　隣
松と蘇鉄の間何間　足
落しなの狐に琴を望るゝ　我
見るに心も細る三ヶ月　隣
秋は猶むかしの妻の懐しや　足
文で根を巻水入の菊　我
むづかしきものとや猫の耳の穴　隣
酔た時にはさゝぬ脇ざし　足
川の瀬はあさく柱杖の濡てしる　我
横に雲雀の囀らぬ聲　足
心なく散ける花に目をつけて　隣
机に足を出す永き日　執筆

介我十一句　泥足十二句　桃隣十一句

晋子一句　執筆一句

點化句法

兩國橋上吟

千人が手を欄干や橋すゞみ　晋子

并に舟中の吟

此人數船なればこそ凉み哉　仝

枇杷の葉は市に濡れけり五月雨　沾德

戸障子をくわらとはづして櫻哉　柴雫

女かと手足見らるゝ躍かな　介我

さま〳〵の盃かたびらや橋の上　神叔

田の水にそこら浮たる螢かな　紫紅

草の戸や二荷一瓶に萩の花　專吟

足あけて店一ぱいの凉み哉　一境

わかるゝ戀な

稻遠く傾城凉む夜明かな　泥足

山ざとや茶畑までも出る雉子　笑計

文珠院にて

無造作に小僧ねて居る暑さ哉　鞍風

化折しのつよき燒野の薄かな　甲乙

一時に颶ころせよ酒の蠅　北溟

他國にはなき名所なれば

盡戾る傾城川に秋もなし　助雞

梅が香に若狹の水の勢ひ哉　洞月

引汐に引て去けり雲の峰　柳水

黃覆盆は山吹の實と云つべし　一雲

鶯はいぎたなしさ、昔たる枕草紙にすがりて

鶯よ月にはせめてよさとかな　一介

粥杖や妹背〳〵のかたからめ　一顯

此春も燒で置けり砥石山　元次

山櫻散行すえや墓の水　甘雨

たま〳〵紙帳を離れ

見るほどの夢ぞ凉しき蚊帳の中　泥足

花ちりて垣根の蟆の堆かし　青翁

橋杭に氷はからむ流れかな　可之

法師まで薄有家は物淋し　不得
秋風に吹こかしけり角力草　近通
男より女や多きはなの庭　甫男
朝露におもたくろしや木蓮花　眞志

天神の社にて
青梅の雫いたゞく木かげ哉　夢船
此松にまだ巻足らぬ藤の花　東雞

嵯峨に籠りて
清瀧や浪に塵なき夏の月　芭蕉
せはしなき身は痩にけり作り獨活(うど)　嵐雪
小背魚も其裏白し雛遊び　東潮

秋袷といふ題にて
傾城の晝一時や秋あはせ　岩翁
下葉より蜀秬子黑む嵐哉　横几
一つをば胡座(アグラ)かゝする鹿驚(かゞし)哉　龜翁
鶴下りて笠をぬがするかゞし哉　泥足

送四時友
傘さして抑合もする花見哉　桃隣

江戸に來て酒一つありほとゝぎす　仝
その月も此名月か冠やま　仝
初雪や人の機嫌は朝の中　仝

病氣本復して
松茸も人よりあとに匂ひかな　湖夕
行義なる人は稀也橋すゞみ　（越）字白
明方は月を衾に包むかな　一境
玉川や同心衆の菊の水　專吟
宿の鳥幾度通す下凉み　神叔

四季咲な
杜若色やながるゝ水の秋　紫紅
草がらみ一把になさん花菖(アヤメ)　蚊義
眞夜中やふり替たる天の川　嵐雪

橋本より雨に逢
里の稻山崎傘に分にけり　可之
撰れし虫活殘る枯野哉　東山
節季ゆも頸の動かぬ寒サ哉　其山
椛剝てあはれや秋の山ざくら　且水

鉢の巣の落殘たる木の間哉　市男
氷らぬは廻る勢也水車　一雲
花の比枯枝除ん庭ざくら　如砥
一日の埃あらひけり春の川　如矢
寺めくや酴醾つゞく入やしき　西鋤
青梅の苦みは味の初めかな　三深
白雨や茶を煎る所なを暗し　洞風

遊田家

破壁に蝙蝠の隠れけり　泥足
今朝の秋雲行輕き柳哉　言夕
山畑や高低有て菫艸　泉月
朝霧やひがしの方は色うすき　北溟
秋風に蚊帳の綻び忘れけり　助雞
秋の暮隣へ遠きこゝろかな　鞍風
空蟬を足およびして捕梟　一雲
夏瘦をとがめられけり親の恩　甲乙
秋來ぬと小僧手拍く芭蕉哉　青翁

あるじに離れて

夏の中は樒つゞけよ薪賣　笑計
宿すごし門は寒くて秋の暮　市男
榾焼て虫たゝき出す翁かな　甘雨
蓑むしや冬の柳の居り所　一顯
黑鴨や水の淀みに雌雄づれ　富哉
勿体は人のつけけりさくら守　又笑
雪打や女に勝もわらへらし　風也
若鮎の登る早瀬や晝の四ッ　一介

深川大橋半かゝりける比

初雪やかけかゝりたる橋の上　芭蕉
すゞみ船鶏は喧しと沖へ行　枳風
喰物も皆水臭し玉祭り　嵐雪
山吹に黄無垢着て行後家へ誰レ　柴雫
打水や壁より落る蝸牛　介我
凉み床噺の末は戀になる　紫紅
蝌子の畦に干るゝ田植かな　湖夕
鍬持て花壇に遊ぶ女中哉　柳玉
山櫻見やうによりて化ならん　岸口

木佛の花に輝く朝日哉　泥足

野草の吟

野鼠の是を喰らん土筆　晉子

鶯に藥敎ん聲のあや　仝

愛蓮

唐蓮の華待顔や椽の先　助叟

三ヶ月や足らぬ所をいつまでも　仝

獨身や寐なをる時の村霎(しぐれ)　仝

燕は反橋(そりはし)なりに飛にけり　仝

宵まで判官殿を最屓哉　仝

一日一夜に、百歌仙を勤る追加に

百本の梅匂ふ也神の馬場　泥足

踏石の水をまくらを杜若　言夕

星も逢てこゝにもあぐる玉火哉　青昭

長崎の端午

麻絹も分限(ぶげん)ゞ也けり競ひ舟　一介

夏草や際立道の七まがり　玄醉

生壁や頓て葎に五月雨　近通

沖中に浪の花吸ふ胡蝶哉　如快

三ヶ月のふとる程よき萩野哉　水丸

春雨やはれ間〳〵の茶摘哥　不知

身ひとつは蚊にまかせたる座禪哉　僧一灯

石山にまうでし比

旅人やともに飛込ほたる谷　一吟

人々や草踏付る花の下　少年智之

八百物や末につゞきて櫻鯛　風也

初炊や二人の親の朝機嫌　一介娘くに

此句ならはんゝよりなれよ成へし

散花を梢に運ぶ蟻の智恵　甘雨妻

縫物の日のやすまりや鳳仙花　仝

瀧津瀨に游つかるゝ小鮎かな　一錦

思はずも主の顔うつ團扇かな　如快

此中の癖なをしけり秋の風　連吹

此日醉て

あさつきの匂ひ嗜(たしな)め寺扈從　泥足

壽菊の讀郎座

菊白く苔は後に書れたり　晋子

怨間譏し

傾城の小哥はかなし九月盡　仝

人に似て物おそろしや諫鼓鳥　柴雫

相撲取り見るに暑さや帯の幅　介我

實まで歸ても行め蕎麥の花　紫紅

四十にて杖つく雪の筥根山　泥足

秋風や棚に小冷き水茶碗　湖夕

供舟にせり出されての凉みかな　素石

鋸にからき日見しを花椿　嵐雪

夜やかけて晝の塵立天の川　沾徳

しま原

朝霧や動出たる風の山　山泉

手に取や雲の往來を花の醉　仝

人歸る跡花見る鴉かな　仝

夏中の花屋を問ん夕すゞみ　ラン

此標蟬鳴つゞく旭かな　梅鶯

戰をしらぬ田舍の螢哉　一是

礒炒りて水に濁さん水の月　掩嵐

枝折戸の明立かまふ五加木哉　仝

力なや名殘の霜の櫻草　ラン

初春の比田上寺に詣で

自墮落に摘捨て行薺哉　泥足

鳴蟬やきのふの暮の蟷むし　青翁

竹分て蕾かしこし梅の枝　東山

鴛鴦の巣となれ早乙女の忘笠　甘雨

夏の入に御祓棚の榁かな　朴水

日盛やはりあふて啼蟬の聲　且水

海邊唫

何魚の餌食にならん礒ざくら　鞍風

切株に延かねて咲く躑躅かな　甲乙

白雨に名乘逢けりまた從弟　北溟

七種の拍子眞似るや軒續き　助雞

爐ふさぎて目だつ疊の焦め哉　雪明

片鬢はよしや枕に夕すゞみ　文袖

初雪の日には凝えぬ鞘かな　近通

筍や一日〳〵の衣のかず　洞月
飛落て布瓜機嫌の螽哉　一空

松浦に行人に

手をたれて其鮎汲よ松浦川　不得
山風や木葉よせたる道の石　甫男
誰かねちて庄屋の枝折さくら苗　可之
枝ためて結ゆるもまた茅花哉　富哉
項〳〵の冑かな　其由
空乾の色に舞出し夏の蝶　一顯
雲の峯鷲の舞出る旭かな　廿雨
山の井に雉の羽たゝく枯野哉　林氏 一里

餞別に

跡追ん涼しきかたへ飛ほたる　横瀬氏 元風
打霞む山や礫の投所　坂田氏 一麿
川越てまた汗に成る飛脚哉　里山
冬枯に文字の尊き鳥居哉　仝

淺茅が原にて

刈殘す月は有けり夜田の道　泥足

深川舊渡

烟立湯舟に霜の溜らまし　仝
草の戸の若和布やいつの喰殘り　雪吹
五月雨に辯付られて晝寐哉　鞍風
河虫の生れ替りて飛こてふ　且水
春雨に椿を落す響かな　一燈
河鴉鳴や夜狩の水離れ　一介

東潮が子もてるに申遣す

つき立の餅に赤子や年の暮　嵐雪
雪の松一かい下は雀かな　東潮
一日は猶哀れ也鉢敲　柴雫
鉢扣舅の門は除ぬらめ　泥足
夏座敷筧の竹の青み哉　湖夕
つたなさや佛の多き魂祭り　介我
庭掃の跡は定めぬ櫻かな　柳玉
物數にとらばや秋の初茄子　素石

常陸帶のならはしなど、おもひあはせて

誰と誰緣組すんで里神樂　晉子
牛の子や杭にすり付むらしぐれ　泥足

小關越にて

冬川や筏の居る草のはら　晉子

久留米

蔞ばかり見る水無月の田面哉　西与
松の有所迄こそ枯に梟　仝
鬼ありて鬼なき夜の躍哉　仝
海の上にはる〳〵來ぬる胡蝶哉　仝
龍骨車に汲れてまはる蛙哉　辨翁
一盃にうけてこぼせり蓮の雨　仝
海士の子や松露賣聲まぎれなき　仝
雪に似て寒さの替る綿子哉　仝
行舟の櫓に亂さるゝ海雲哉　与韵
往過て戻りの遠き凉みかな　仝
木の間よりふと出ル交尾蜻蛉哉　仝
手にうけて見る〳〵ほそる雹哉　仝
夕霧に啼は見留る鷗かな　東海

葛の葉に物書我ぞはしたなき　アラレ
灯に蝶のよらぬぞおとなしき　稻朔
山猫の姿見せけり山ざくら　竹童　十一オ
五月雨や水桶の輪の切し音　稻朔
おのが形に作り似せたる鹿驚哉　仝
斛まで火燵に沉む雪夜哉　仝
初雪に足のよごれぬ嬉しさよ　元朔
曲りめは氷柱の下る筧かな　陽朔
枝ながら雀折たし雪の竹　吟朔　十一オ
假寐の魂を籠るはせを哉　紫水
乾田鶴のふみ出す濱の松露哉　青柳
獸の道一筋のかれのかな　仝
袖摺て蜂に追はるゝ柳哉　松木
氣の付ぬ朧月夜の曇り哉　淋水
綿帽子着ずに行のは茶摘也　松吟
顏の皺なでゝ苦になる花見哉　仝
風に行蝶とまり得ぬ茅花哉　禮朔
駕籠舁の見立ておろす櫻哉　一楽

五月雨や晴れば人の氣に成りぬ　仝
裏表風に見えけり帋幟　松木
若竹に窓ふさがれり日の朝　淋水
扇賣り己は色の黒き也　松吟
暮迄は我まゝに寐る鵜舟哉　梅吟
帆に付て嶋に渡し螢哉　夕鳥
寐た形にねてるぬ夏の朝哉　禮朔
夏艸の鎌の跡なき花野哉　淋水
傾城に帽子着せけり宵月夜　夕鳥
卷立る風の形見よ稻柱　梅吟
月の暮寐言おかしや碁疲　松吟
人除は火の色薄き燈籠哉　仝
藥掘り殘す葛葉の山路哉　禮朔
よき人にまじるも夜の躍かな　一葉
寐安くて起すもやすき火燵哉　淋水
鴨の入水田ははらぬ氷かな　夕鳥
凩や鴛鴦の番を吹分る　松吟
年志れ下手の謡を聞べきよ　仝
日の朝に追れて廻る纍かな　禮朔
諸笑ひうたゝねまでの火燵哉　一葉
松風の音ばかり也神送り　梅吟
古木より葉のあたらしき櫻哉　与鷗
もつるゝを解もやすき鵜縄哉　仝
夕降る雨の味しる松露かな　仝
空卯夕の霜のうつは哉　仝
馬の背に蝶さへとまる春の色　西櫻
雨の夜や草のうら葉に蜻むし　仝
綱引網には漏るゝ夕日かな　仝
泉水の石に飛間の霰哉　仝

世に天下老和尚の扇にたゞへ示されしさいふあり。いま其戒に思ひ合侍る。

化也と花に五戒のさくら哉　晋子

折に殺生・偷盗見るに、邪婬・飲酒は本より申さずとも、佛もし大悔

日に入滅し給はゞいかに佛ども貪着すべき。かゝる世話しなき衆生の爲には、往生もふのもの也。

佛とは櫻の花に月夜哉　仝

入間の里に至りて、蒼茫にむかふ。

一夜寐て追出されても春野哉　沾徳

何くはぬ口の甘さも山ざくら　東潮

かまほこや左兊に賴む惠美酒講　柴雫

水際をなをさずゆ哉かきつばた　柳玉

いなづまやこぼれて留る藤の月　泥足

玉まつり憎き佛もなかりけり　仝

小たゝみもむづかしき世や獨住　嵐雪

白露や角に日を持かたつぶり　仝

遊山林

臆の巣に鶯の鳴ク哀さよ　北溟

流れ川足音輕き蛙かな　言夕

春の水簗より下は薄濁り　雪吹

枸杞垣に鵙迯込ム夕部哉　泥足

うかれたる身のさしの始に

夕暮や此里ばかり着衣はじめ　遊女八橋

見る内に風の作るや雪の峰　仝

きぬぎぬにうしろむかするばせを哉　仝

物おもふ比

起て見つ寐て見つ蚊帳の廣サ哉　浮橋

梶の葉に

鵲に我やかはらん天の川　仝

醉のたはむれに

八重霧は船に障のうき名かな　八重霧

きぬぎぬの跡より

紅梅やひらくに色のつめながし　闘船

妹が垣根はあれにけり。又そのさゝ人に事さはん。色々の情に習ひて、武藏に趣く道にて、故郷の人也さむかししられたる物がたりに、さふ事しげき中にも、十人の妃婦九人は出。

五年過榎は散るや禿ども　泥足

御やしろの燈明くらし夏木立　一雲

朝霜のつめたさしらぬ朝寐哉　北溟
塗こめて壁に尻ふる田にし哉　助鶏
聲ばかり落て跡なき雲雀哉　鞍風
枝ぶりは荒次第也山ざくら　甲乙
笠着せたまでが楽山子の姿也　且水
雲に入鳥の行衛や星ひとつ　其由
水車螢とまりてうせにけり　不得
此景に雨は添ぬか春の海　山武
よふ積ッだ所はなきか雪こかし　仝
竹の子や力の月の朝殘り　一顯
むめ散て廿日障有さくら哉　晦朔
夏の夜は片乳のあまるそひね(添寝)哉　仝
白露をつまめば消る姿なり　仝
雪の夜に戸あかぬ庵のひづみ哉　仝
朝の間は大晦日も靜かなり　仝
春の野も舞しや暮の馬一つ　山水
氣ちがひといはれむけふの氷室(ひむろ)守　仝
蒭蕘のもしや知べき秋の果　仝
髪をき(置)や後は法師に成とても　仝
御手洗もにごるかしらん冬至の日　仝
手拭ひの今日は埃はく持佛哉　仝

移徙(わたまし)の祝儀に

とこ夏の家に入たる徳利哉　嵐雪

寺にて

常燈や壁あたゝかにきり〴〵す　仝
片寄せて清水に締ふ菴かな　柴雫

文月の初、船路に赴

七夕の夜よ檣に哥かゝん　泥足
入海や泊離れて高燈籠　仝
我船や鯖もすはらず湯もあびず　仝
躍哥ヤッサ斗や沖の舟　仝
舟の中外に欲なし秋の雲　仝

貴人に召されて

片隅によりたがりけり冬の席　甘雨
懐の手の中しめる寒さかな　言夕
咲花に軒の柳の輕さ哉　青眼

牛に乘る人も聞らん麥鶉　可之
菜の種のたらぬ畑の椀茄子　一顆
默禮の跡見かへるや朧月　長野氏 柳之
無造作を見よや胄の側かけ　同姓 鷹笑
雜鳥は寄付得ぬや桐の花　田川氏 邑木
喰はでは草履造の稷穀　柳之
草刈の荷の際だつや花すゝき　鳥笑
いなづまや雨の時切れの傳ひ道　可頓
寂しさも角透れめや九月晝　小林 一氏
稻妻は晝なき故に音もなし　如快
足さげて行水淸し夕凉み　靑翁

上野にて

小坊主や松に隱れて山櫻　晋子

横江舟中

白雲に鳥の遠さよ數は雁　仝
雁の腹見すかす空や船の上　仝
蹈ッ込や花野ゝ中のわすれ水　柴雫
節季候や揃ふて通る橋の上　仝
老僧や白き蒲團に後の月　東潮
流れ木や一遊りに星の東　仝
手柄せよ鳴立澤の蒲衛　混是
掛鯛やいふ事なくて口と口　仝

江戸な立日餞、別に

見て行ヶや驛〱の草の花　柳玉
乘からは世帯とおもへ秋の舟　紫紅

長崎な立日、人々餞別に

秋風や筥根の關の下り登り　一介
手とらせて行け牛窓の月の暮　甘雨
七夕にどこで逢夜や旅の空　東山
たなばたの夜は船むけよ下の關　鞍風
秋風に背中ふかせよ明石がた　助雞
故鄕にておかしがらせよ菩薩祭り　甲乙
蘭の香を思ひ出し行ヶ船の上　北溟
氣の輕し富士の野分に古頭巾　折水
月陰に別るゝもよし西東　近通
根を分けて互にまねく薄哉　一雲

つき立る杪(あふこ)の先の鷰(つばめ)かな　一介
驛路や晩鐘遠き合歓(ねむ)の花　仝
門過る聲を逃すな初鰹　泥足
蠶飼ふ家の主は癈かも　東鶏
晴がりに釣そこなへる蚊帳哉　且水
築山の見越に高し梨の花　如矢

旅立人に

明方やかゞしも共に暇乞　不知
大空や虹のとまりは雲の峰　東山
鶏の聲も呵欠の霜夜哉　甲乙
手を入て水の色見む秌の空　青眼
華盛手を出して見ん春の雨　連明
秋の夜や弥さす人は居ねぶらず　元次
猿猴の月には付らん栗の花　元丸
客になる雛の餘情のつよかりし　風也
日の色に嘘(こきゅう)こらゆる小春かな　且水

人麿講を結びて

沖の帆も十二十三十や濱千どり　晋子
それよりして夜明鴉や蜀魂(ほとゝぎす)　仝
橋行は長刀貫に似合たり　柴雫
のら猫に鴨の草薹喰れたり　仝

本蓮寺に詣て

小僧等は茶を運ぶ也煤掃　泥足
脇ざしは帯にたばねず涼み舟　久利
網代守涼みの時は亭主哉　仝
鎰(かぎ)の手に畔を殘すや櫻麻　若楓
榾焼て友と也けり夜の蟻　仝
金手鉾も火を打出す氷かな　仝
手を負て虹を吹出鯨哉　柳次
夜着出てうそ恥かしや衣更　仝
稲妻にひようすかさるか流星　甘雨
蟬聞に故郷も旅のこゝろ哉　洞風

巴峡の猿を

聲かれて猿の歯白し峯の月　晋子
曉の氷雨をさそふやほとゝぎす　仝

望帝(ほとゝぎす)我や鼠にひかれけん　仝
蝙打や座頭の傍に妻ひとり　東潮
ひとり居る時通りけり杜宇　泥足
一夜だにゐぬは土産のほたる哉　三深
ふみ付る足より上の雪白し　青翁
大雪もさのみ積らぬ柳かな　如快
炭燒や上戸も下戸も同じ㒵　近通
庭鳥や卵ぬくむる雪の埜　且水
手のとゞく軒を見て行氷柱哉　鞍風

草庵を訪て

朝顏は僧の見るなら色肥よ　泥足
寒菊の枝引起す朝日かな　鞍風
豆まきや床の柱に行當り　北溟
聲つかふ足の寒や戻り道　助雞
節季ゆの形よ親と子見しらざる　仝
せきぞろや年寄聲を紛らかし　鞍風

江戸を立日

後の月淺草川に殘しけり　泥足

遠近におもたき花の土産哉　柏卅
雪ぞらやぬらりとしたる嵐(やま)の形　仝

初て王城の地に出て

夏痩もしほらし氣也京女　仝
ね入ては罪なかるべし破蚊帳　鞍風

難波

鶯もふできに成て山ざくら　元道
町内の新酒ひろめや口ふさぎ　仝
墨吉(すみよし)や今一聲と暮る迄　仝
夏痩の顏さしのぞく清水哉　仝
曉に輿の音の寒さかな　側香
卯の花や頃閼樂ム筒の水　湖壽
白魚や浮ても消るやうに見え　焦桐
一拍子はづんでも啼蛙哉　流沙
居相撲も今宵はやめて河豚汁　芭蒼
名月や廣き濱邊の足の跡　筏艇
指汐に海獺(アシカ)も起よけふの月　琶扣
薄散〳〵菊の飯櫃賤納具　莊人

むづかしの屆もの也けしの花　舍羅
日盛の花やすゞしき石荷(ユキノシタ)　呑舟
雀にもさはらで月の夜明哉　炉柴
雞頭の高ふ成たる時雨哉　仝

天王寺

咲花も亂より後の古び哉　洒堂
肝心の日は時雨けり大根曳　仝

伊勢

山鳥の樵夫(こり)を化す雪間哉　支考
引被(かぶ)る衣の香床し初時雨　支考

伊賀の道中

朝見えて痩たる岸の野菊哉　仝

膳所

鯉鮒も青葉につくか城の陰　正秀
寒夜や棚にこたゆる臼の音　探芝
白壁にまよふてたらぬ胡蝶哉　昌房
綿入に羽織で見たる月見かな　臥房

芭蕉翁を招て

すゞ風も出來した壁の小破哉　游刀
どちら吹風の名利や散薄　仝
談合の溫飩にしまる後の月　曲翠

洛邑

青柳や覆(おほ)ひ重るいと櫻　去來
駒牽の木曾や出らん三ヶの月　仝
近付に成りて別るゝ案山子哉　惟然
ひだるさに馴てよく寐る霜夜哉　惟然

此集を鏤(ちりば)んとする比、芭蕉の翁久く難波に卧數し給へると聞て、直にかのあたりを訪ふに、晴々亭の半哥仙を貪り、畦止亭の七種の戀を吟じて、予が集の始終を調るものならし。

所思

此道や行人なしに秌の暮　はせを
岨の畠の木にかゝる蔦　泥足

月しらむ蕎麦のこぼれに鳥の寐て　支考
小き家を出て水汲む　游刀
天氣相羽織を入て荷拵らへ　之道
酒で痛のとまる腹癖　車庸
片づかぬ節句の座敷立かはり　酒堂
塀の覆にあかき梅ちる　畦止
線香も春の寒さの伽になる　惟然
惠比酒の餅の殘る二月　亀柳
兵(つはもの)の宿する我はねぶられず　足
かぐさき革に交るまつ風　蕉
はら〳〵と山田の稻は立枯れて　庸
地藏の埋る秋は悲しき　考
仕事なき身は茶にかゝる朝の月　道
塩ッ飽(アク)の船のとつと入り込　然
散花に蓙の芝引吹立て　止
お傍日永き醫者の見事さ　堂

畦止亭におゐて卽興

月下逢レ兒

月澄や狐こはがる兒(ちご)の供　芭蕉

寄レ鹿憶レ塀

篠越て來ゝ人床し鹿の歴　酒堂

寄レ薄戀二老女一

花薄嫗が懷(ふところ)寐て行かん　支考

寄二稻妻一妬レ人

いなづまや暗がりにさす酒の論　惟然

深窓荻

雙六の荻の葉越や窓の奥　畦止

寄二紅葉一恨二遊女一

逢ぬ日は禿に見する紅葉哉　泥足

聽レ砧悲二離別一

洗濯の中に別るゝ小夜砧　之道

菜畑に花見顔なる雀かな　芭蕉
皿鉢もほのかに闇の宵涼み　仝
芹燒やすそわの田井の初氷　仝

ぬからずに雪の跡ふる雹哉　泥足

おかしうて腹が立也歳の暮　仝

五月雨や足にも外を通る人　晋子

海へ降霰や空に浪の音　仝

童にもしころ頭巾や煤掃　仝

三と鷺の泥足、うな毛の下の脩をはたけば、種なき萍、花さかぬくはゐ、根堀葉ほり求入てふか川の細流、根白の芹の一本に、その一足を擧ると、嵐雪跋。

京寺町二條上町
ゐづゝや庄兵衛板

續猿蓑

上・下

續猿蓑集　卷之上

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉
春のからすの畠ほる聲　沾圃
初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧
内はどさつく晩のふるまひ　里圃
きのふから日和かたまる月の色　沾
狗脊かれて肌寒うなる　蕉
澁柿もことしは風に吹れたり　里
孫が跡とる祖父の借錢　莧
脇指に替てほしがる旅刀　蕉
煤をしまへばはや餅の段　沾
約束の小鳥一さげ賣にきて　莧
十里ばかりの余所へ出かゝり　里
笹の葉に小路埋ておもしろき　沾
あたまうつなと門の書つけ　蕉
いづくへか後は沙汰なき甥坊主　里
やづと聞出す京の道づれ　莧
有明におくるゝ花のたてあひて　蕉
見事にそろふ籾のはへ口　沾
春無盡まづ落札が作太夫　莧
伊勢の下向にべつたりと逢　里
長持に小挙の仲間そは〳〵と　沾
くハらりと空の晴る青雲　蕉
禪寺に一日あそぶ砂の上　里
槻の角のはてぬ貫穴　莧
濱出しの牛に俵をはこぶ也　蕉
なれぬ娵にはかくす内證　沾
刀持に傍輩衆のうちそろひ　莧
籬の菊の名乘さま〳〵　里
むれて來て栗も榎もむくの聲　沾
伴僧はしる駕のわき　蕉
削やうに長刀坂の冬の風　里
まぶたに星のこぼれかゝれる　莧
引立て無りに舞するたをやかさ　蕉

そつと火入におとす薫物（たきもの）　沾
花ははや殘らぬ春のたゞくれて　莧
瀬がしらのぼるかげろふの水　里

馬莧

鴈（かり）の字や揃ふて渡る鳥の聲　馬莧
てり葉の岸のおもしろき月　沾圃
立家を買てはいれば秋暮て　里圃
ふつ〳〵なるをのぞく甘酒　莧
霜氣たる蕪喰ふ子ども五六人　沾
莚をしいて外の洗足　里
悔しさはけふの一歩（いちぶ）の見そこなひ（損）　莧
請狀すんで奉公ぶりする　沾
よすぎたる茶前の天氣きづかはし　里
有ふりしたる國方の客　莧
何事もなくてめでたき駒迎　沾
風にたすかる早稲の穂の月　里
臺所秋の住居に住かへて　莧
座頭のむすこ女房呼けり　沾
明はつる伊勢の荒洲（あらす）のとし籠り　里
蓑はしらみ（虱）のわかぬ一徳　莧
俵米もしめりて重き花盛　沾
春靜なる竿の染（そめ）綛（かせ）　里
鶯の路には雪を掃殘し　莧
しなぬ（死）合點で煩ふて居る　沾
年〳〵に屋うちの者と中悪く　里
三崎敦賀の荷のかさむ也　莧
汁の實にこまる茄子の出盛て　沾
あからむ麥をまづ刈てとる　里
口〳〵に寺の指圖を書直し　莧
殿のお立のあとは淋しき　沾
錢かりてまだ取つかぬ小商（こあきなひ）　里
卑下（ひげ）して庭によい料理くふ　莧
肌入て秋になしけり暮の月　沾
顔にこぼるゝ玉笹の露　里
此盆は實（まこと）の母のあと問て　莧

有付て行出羽の庄內　沾
直のしれた帷子時のもらひ物　里
聞て氣味よき杉苗の風　莧
花のかけ巣を立雉子の舞かへり　沾
あら田の土のかはくかげろふ　里

いさみ立鷹引すゆる嵐かな　里圃
冬のまさきの霜ながら飛　沾圃
大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉
上下ともに朝茶のむ秋　馬莧
町切に月見の頃の集め錢　沾
荷がちら／＼と通る馬次　里
智恩院の替りの噂極りて　莧
さくらの後は楓わかやぐ　沾
狙の爐に水をかけながし　里
目利て家はよい暮しなり　莧
狀箱を駿河の飛脚請とりて　沾
まだ七つにはならぬ日の影　里
草の葉にくぼみの水の澄ちぎり　莧
伊駒氣づかふ綿とりの雨　沾
うき旅は鴫とつれ立渡り鳥　里
有明高う明はつるそら　莧
柴舟の花の中よりつつと出て　沾
柳の傍へ門をたてけり　里
百姓になりて世間も長閑さよ　莧
ごまめを膳にあらめ片菜　沾
賣物の濃紙つゝみおろし置　里
けふのあつさはそよりともせぬ　莧
砂を這ふ蕀の中の絡線の聲　沾
別を人がいひ出せば泣　里
火燵の火いけて勝手をしづまらせ　莧
一石ふみし碓の米　沾
折／＼は突目の起る天氣相　里
仰に加減のちがふ夜寒さ　莧
月影にことしたばこを吸てみる　沾

おもひのまゝに早稲で屋根ふく　里
手拂に娘をやつて娵のさた　荳
參宮の衆をこちで仕立る　沾
花のあと躑躅のかたがおもしろい　里
寺のひけたる山際の春　荳
冬よりはすくなうなりし池の鴨　沾
一雨降てあたゝかな風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃
日は寒けれど靜なる岡　芭蕉
水かるゝ池の中より道ありて　支考
篠竹まじる柴をいたゞく　惟然
鷄があがるとやがて暮の月　蕉
通りのなさに見世たつる秋　考
盆じまひ一荷で直ぎる鮨の魚　然
晝寐の癖をなをしかねけり　蕉
聟が來てにつともせずに物語　考
中國よりの状の吉左右　然
朔日の日はどこへやら振舞れ　蕉
一重羽織が失てたづぬる　考
きさんじな青葉の比の樅楓　然
山に門ある有明の月　蕉
初あらし畑の人のかけまはり　考
水際光る濱の小鰯　然
見て通る紀三井は花の咲かゝり　蕉
荷持ひとりにいとゞ永き日　考
こち風の又西に成北になり　然
わが手に脈を大事がらるゝ　蕉
後呼の内儀は今度屋敷から　考
喧嘩のさたもむさとせられぬ　然
大せつな日が二日有暮の鐘　蕉
雪かき分し中のどろ道　考
來る程の乘掛は皆出家衆　然
奥の世並は近年の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見して　考

赤鷄頭を庭の正面　然
定らぬ娘のこゝろとりしづめ　蕉
寢汗のとまる今朝がたの夢　考
鳥籠をづらりとおこす松の風　然
大工づかひの奥に聞ゆる　蕉
米搗もけふはよしとて歸る也　考
から身で市の中を押あふ　蕉
此あたり彌生は花のけもなくて　然
鴨の油のまだぬけぬ春　考

今宵賦

野盤子
支考

今宵は六月十六日のそら水にかよひ、月は東方の亂山にかゝげて、衣裳に湖水の秋をふくむ。されば今宵のあそびはじめより、尊卑の席をくばらねど、しば〳〵酌てみだらず。人そこ〳〵に涼みふして、たま〳〵かたりなせる人さへ、さらに人を興ぜしめむとにあらねば、あながちに辭のたくみをもとめず。唯、萍の水にしたがひ、水の魚をすましむるたとへにぞ侍りける。阿叟は深川の草庵に四年の春秋をかされて、ことしは、みな月・さつきのあはいを渡りて、伊賀の山中に父母の古墳をさぶらひ、洛の嵯峨山に旅ねして賀茂・祇園の涼みにもたゞよはず。かくてや此山に秋をまたれけむと思ふに、さすが湖水の納涼もわすれがたくて、また三四里の暑を凌て、爰に草鞋の駕をとゞむ。今宵は菅沼氏をあるじとして僧あり、俗あり。俗にして僧に似たるものあり。その交のあはきものは、

砂川の岸に小松をひたせるがごし。深からればすごからず。かつ味なうして人にあかるゝなし。幾年なつかしかりし人〳〵のさしむきて、わするゝににたれど、おのづからよろこべる色、人の顔にうかびて、おぼへず鷄啼て月もかたぶきける也。まして魂祭る比は、阿叟も古さとの方へと心ざし申されしを、支考は伊勢の方に住どころ求て、時雨の比はむかへむなどもおもふなり。しからば湖の水鳥のやがて、はら〳〵に立わかれて、いつか此あそびにおなじからむ。去年の今宵は夢のごとく、明年はいまだきたらず。今宵の興宴、何ぞあからさまならん。そゞろに醉てねぶるものあらば、罰盃の數に水をのませんと、たはぶれあひぬ。

夏の夜や崩て明し冷し物　芭蕉

露ははらりと蓮の椽先　曲翠

鶯はいつその程に音を入て　臥高

古き革籠に反故おし込　惟然

月影の雪もちかよる雲の色　支考

しまふて錢を分る駕かき　芭蕉

猪を狩場の外へ追にがし　翠

山から石に名を書て出す　高

飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　然

鳶で工夫をしたる照降　考

おれが事哥に讀るゝ橋の番　蕉

持佛のかほに夕日さし込　翠

平畦に菜を蒔立したばこ跡　考

秋風わたる門の居風呂　然

馬引て賑ひ初る月の影　高

尾張でつきしもの名になる　蕉

餅好のことしの花にあらはれて　翠

正月ものゝ襟もよごさず　高

二
春風に普請のつもりいたす也　然
藪から村へぬけるうら道　考
喰かねぬ聟も舅も口きいて　蕉
何ぞの時は山伏になる　翠
笹つとを棒に付たるはさみ箱　高
蕨こはばる卯月野ゝ末　蕉
相宿と跡先にたつ矢木の町　考
際の日和に雪の氣遣　然
呑ごゝろ手をせぬ酒の引はなし　翠
着がえの分を舟へあづくる　高
封付し文箱來たる月の暮　蕉
ぞろ〳〵ありく盆の上臈衆　考
虫籠つる四條の角の河原町　然
高瀬をあぐる表一固　翠
今の間に鑓を見かくす橋の上　高
大キな鐘のどんに聞ゆる　然
盛なる花にも扉おしよせて　考
腰かけつみし藤棚の下　高

續猿蓑集　巻之下

春之部

花　櫻

温石のあかるゝ夜半やはつ櫻　露沾
寢時分に又みむ月か初ざくら　其角
顔に似ぬほつ句も出よはつ櫻　芭蕉
ちか道や木の股くゞる花の山　洞木
角いれし人をかしらや花の友　丈草
花散て竹見る軒のやすさかな　酒堂

富貴なる酒屋にあそびて、文君が爪音も酔のまぎれに、思ひいでらるゝに

酒部屋に琴の音せよ窻の花　惟然
賭にして降出されけりさくら狩　支考
人の氣もかく窺はしはつ櫻　沾徳
くもる日や野中の花の北面　猿雖

七つより花見におこる女中哉　陽和
見る所おもふところやはつ櫻　乙州
咲花をむつかしげなる老木哉　木節
我庭や木ぶり見置すはつ櫻　沾荷
二の膳やさくら吹込む鯛の鼻　子珊
簑虫の出方にひらく櫻かな　卓袋

田家

蒟蒻の名物とはんやま櫻　李里
咲かゝる花や飯米五十石　桃首
山門に花もの〱し木のふとり　一桐
ながれ木の根やあらはるゝ花の瀧　如雪
花笠をきせて似合む人は誰　其角
はれやかに置床なをす花の春　少年 一鷺
ぬり直す壁のしめりや軒の花　卓袋
一日は花見のあてや旦那寺　沾圃
八重櫻京にも移る奈良茶哉　仝

若菜

濡椽や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪
梟の啼やむ岨の若菜かな　曲翠
夕波の船にきこゆるなづな哉　孤屋
一かぶの牡丹は寒き若菜かな　尾頭

梅 附柳

春もやゝ氣色とゝのふ月と梅　芭蕉
きさらぎや大黒棚もむめの花　野水
守梅のあそび業なり野老賣　其角
里坊に碓きくやむめの花　昌房
投入や梅の相手は蕗のたう　良品
病僧の庭はく梅のさかり哉　曾良
あたらしき翠簾また寒し梅花　万乎
薄雪や梅の際まで下駄の跡　魚日
しら梅やたしかな家もなきあたり　千川
寢所や梅のにほひをたて籠ん　大丹

天神のやしろに詣て

身につけと祈るや梅の離ぎは　遊糸
それ〲の朧のなりやむめ柳　千那
時〲は水にかちけり川やなぎ　意元

ちか道を教へぢからや古柳　江東 李由

青柳のしだれくゞれや馬の曲　九節

輪をかけて馬乗通る柳かな　巴丈

鳥 附魚

鶯に長刀かゝる承塵(ナゲシ)かな　共角

うぐひすや野は塀越の風呂あがり　史邦

鶯に手もと休めむながしもと　智月

鶯や柳のうしろ藪のまへ　芭蕉

瀧壺もひしげと雉子のほろゝ哉　去來

春雨や蓑につゝまん雉子の聲　酒堂

駒鳥の目のさやはづす高根哉　傘下

こま鳥の音ぞ似合しき白銀屋　長虹

燕や田をおりかへす馬のあと　野童

巣の中や身を細しておや燕　少 峯嵐

雀子や姉にもらひし雛の櫃　槐市

蝿うちになるゝ雀の子飼哉　河瓢

行鴨や東風につれての礒惜み　釣箒

芳野西河の瀧

鮎の子の心すさまじ瀧の音　土芳

かげろふと共にちらつく小鮎哉　圃水

しら魚の一かたまりや汐たるみ　子珊

白魚のしろき噂もつきぬべし　山蜂

深川にあそびて

しら魚をふるひ寄せたる四手(よつで)哉　共角

春草

なぐりても萠たつ世話や春の草　正秀

若草や松につけたき蟻の道　此筋

春の野やいづれの草にかぶれけん　尼 羽紅

川淀や淡(あわ)をやすむるあしの角　猿雖

宵の雨しるや土筆(つくづくし)の長みじか　闇指

味ひや櫻の花によめがはぎ　車來

茨はら咲添ふものも鬼あざみ　荒雀

堤よりころび落ればすみれ哉　馬莧

踏またぐ土堤の切目や蕗の塔　拙侯

ふみたふす形に花さく土大根　乃龍

早蕨や笠とり山の柱うり　正秀

みそ部屋のにほひに肥る三葉哉　夕可

日の影に猫の抓出す獨活芽哉　一桐

蒲公英や葉にはそぐはぬ花ざかり　圃萡

猫戀附胡蝶

我影や月になを啼猫の戀　探丸

うき戀にたえてや猫の盗喰　支考

おもひかねその里たける野猫哉　ミノ巳百

白日しづか也。

とまりても翅は動く胡蝶かな　柳梅

衣更着のかさねや寒き蝶の羽　惟然

蝶の舞おつる椿にうたるゝな　闇指

風吹に舞の出來たる小蝶かな　出羽重行

晝ねして花にせはしき胡蝶哉　雪窓

春鹿

振おとし行や廣野の鹿の角　澤雉

春耕

妙福のこゝろあて有さくら麻　木節

苗札や笠縫をきの宵月夜　此筋

千刈の田をかへすなり難波人　一鷺

桃附椿

白桃やしづくも落ず水の色　桃隣

金柑はまだ盛なり桃の花　介我

伏見かと菜種の上の桃の花　雪芝

梅さくら中をたるまず桃の花　水鷗

花さそふ桃や哥舞妓の脇躍　其角

江東の李由が祖父の懐舊の法事に、おの〳〵經文題のほつ句に、彌陀の光明といふ事を

小服綿に光をやどせ玉つばき　角上

穂は枯て臺に花咲椿かな　殘香

取あげて見るや椿のほその穴　洞木

ちり椿あまりもろさに續て見る　野坡

欵冬附躑躅　藤

山吹や垣に干たる蓑一重　闇指

田家の人に對して

山吹も散るか祭の鱠なます　酒堂

堀おこすつゝじの株や蟻のより　雪芝

藪疇や穂麥にとゞく藤の花　荊口

春　月

山の端をちから貝なり春の月　長崎 魯町

春雨 附 春雪 蛙

物よはき草の座とりや春の雨　荊口

咄さへ調子合けり春のあめ　乃龍

春雨や唐丸あがる臺どころ　游刀

なにがし主馬が、武江の旅店をたづねける時

春雨や枕くづるゝうたひ本　支考

春雨や光りうつろふ鍛冶が鎚　桃首

淡雪や雨に追るゝはるの笠　風麥

行つくや蛙の居る石の直(ロク)　風睡

汐　干

のぼり帆の淡路はなれぬ汐干哉　去來

品川に富士の影なきしほひ哉　閣指

雜　春

出かはりやあはれ勸る奉加帳　許六

若草やまたぎ越たる桐の苗　風睡

黒ぼこの松のそだちやわが緑　土芳

かげろふや巖に腰の掛ちから　配力

小米花奈良のはづれや鍛冶が家　万乎

聲毎に獨活や野老(ところ)や市の中　苔蘇

木の芽たつ雀かくれやぬけ參　ミノ 均水

春の日や茶の木の中の小室節　正秀

三尺の鯉はぬる見ゆ春の池　仙化

引鳥の中に交るや田螺とり　支浪

三月盡

朧夜を白酒賣の名殘かな　支考

歳　旦

若水や手にうつくしき薄氷　少年 武仙

莚道は年のかすみの立所(たちど)哉　百歲

鶯や雜煮過ての里つゞき　尚白

蓬萊の具につかひたし螺(にし)の貝　圃滄

母方の紋めづらしやきそ始　山蜂

詩にいへる衣裳を顚倒すといふ事

なゝ老ての文に書越し侍れば

元日や夜ふかき衣のうら表　千川
人もみぬ春や鏡のうらの梅　芭蕉
明る夜のほのかに嬉しよめが君　其角
楪の世阿彌まつりや靑かつら　嵐雪
萬歳や左右にひらひて松の陰　去來
鶯に橘見する羽ぶきかな　土芳
はつ春やよく仕て過る無調法　風睡

冬年、孫をまうけて

元日やまだ片なりの梅の花　猿雖
子共にはまづ惣領や藏びらき　蔦雫
背たらおふ物を見せばや花の春　野童
齒朶の葉に見よ包尾の鯛のそり　耕雪
鮭の簀の寒氣をほどく初日哉　左柳
はつ春や年は若狹の白比丘尼　前川
枇杷の葉のなを慥也初霞　斜嶺
世の業や髮はあれども若夷　山峰
濡いろや大かはらけの初日影　任行
元日や置どころなき猫の五器　竹戸
我宿はかつらに鏡すえにけり　是樂
搗栗や餅にやはらぐそのしめり　沾圃
虫ほしのその日に似たり藏びらき　團角

夏之部

郭公

曉の雹をさそふやほとゝぎす　其角
ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁　丈草
しら濱や何を木陰にほとゝぎす　曾良
蜀魄啼ぬ夜しろし朝熊山　支考
鳴瀧の名にやせりあふほとゝぎす　如雪
燕の居なじむそらやほとゝぎす　芦本
淀よりも勢田になけかし子規

此句は石山の麓にて、順禮の吟じて通りけるさ也。

郭公かさいの森や中やどり　沾圃

木 附草花

橙や日にこがれたる夏木立　闇指
里〳〵の姿かはりぬなつ木だち　野荻

園中二句

此中の古木はいづれ柿の花　此筋
年切の老木も柿の若葉哉　千川
姫百合や上よりさがる蛛の糸　素龍

題山家之百合

しら雲やかきねを渡る百合花　支考
山もえにのがれて咲やかきつばた　尾頭
冷汁はひへすましたり杜若　沾圃
手のとゞく水際うれし杜若　イガ 宇多都
夏菊や茄子の花は先へさく　拙候

はせを庵の即興

晝がほや日はくもれども花盛　沾圃
夕顔や醉てかほ出す窻の穴　芭蕉
夕がほや裸でおきて夜半過　亡人 嵐蘭
藻の花をちゞみ寄たる入江哉　殘香

蘭の花にひた〳〵水の濁り哉　此筋
蓮の葉や心もとなき水離れ　白雪
客あるじ共に蓮の蝿おはん　良品

瓜

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉
姫ふりや袖に入ても重からず　至曉

ぼたん

麁相なる膝は出されぬ牡丹哉　風弦

早苗

京入や鳥羽の田植の歸る中　長崎 卯七
早乙女に結んでやらん笠の紐　闇指
ふとる身の植おくれたる早苗哉　魚白
田植哥まてなる顔に諷ひ出し　重行
一田づゝ行めぐりてや水の音　北枝
里の子が燕握る早苗かな　支考

螢

蚊遣火の烟そるゝほたるかな　許六
三日月に草の螢は明にけり　野荻

納涼

涼しさや竹握り行藪づたひ　半残
無花果や廣葉にむかふ夕涼　惟然

深川の庵に宿して

ばせを葉や風なきうちの朝涼　史邦
涼しさや駕籠を出ての縄手みち　望翠
石ぶしや裏門明て夕涼み　長崎 牡年
涼しさよ牛の尾振て川の中　万乎

漫興 三句

腰かけて中に涼しき階子哉　洒堂
涼しさや椽より足をぶらさける　支考
生酔をねぢすくめたる涼かな　雪芝

はせを翁を茅屋にまねきて

涼風も出來した壁のこはれ哉　游刀
いそがしき中をぬけたる涼かな　仝
立ありく人にまぎれてすゞみかな　去來
黙禮にこまる涼みや石の上　正秀
職人の帷子きたる夕すゞみ　土芳
涼しさや一重羽織の風たまり　我眉
夜涼やむかひの見世は月がさす　里圃

盛夏

かたばみや照りかたまりし庭の隅　野荻
李盛る見世のほこりの暑哉　万乎

藪醫者といひさめ申されしに答へ侍る

實にもとは請て寐冷の暑かな　正秀
取葺の内のあつさや棒つかひ　乙州
煤さがる日盛あつし臺所　怒風
茨ゆふ垣もしまらぬ暑かな　素覽
草の戸や暑を月に取かへす　我峯
あつき日や扇をかざす手のほそり　印苔
積あげて暑さいやます疊かな　卓袋
粘になる蚫も夜のあつさかな　里東
立寄ればむつとかぢやの暑かな　沾圃

竹の子

荀にぬはるゝ岸の崩かな　可誠
若竹や畑のいづる庫裏の窓　曲翠

五月雨 附 夕立

しら鷺や青くもならず黴の中　出羽 不玉
さみだれや蠶煩ふ桑の畑　芭蕉
五月雨や踵よごれぬ磯づたひ　沾圃
夕立にさし合けり日傘　拙侯
白雨や蓮の葉たゝく池の芦　苔蘇
夕だちやちらしかけたる竹の皮　曉鳥
ゆふ立に傘かる家やま一町　圃水

蟬

白雨や中戻りして蟬の聲　正秀
きつと來て啼て去りけり蟬のこゑ　胡故
森の蟬涼しき聲やあつき聲　乙州
蟬啼やぬの織る窓の暮時分　曉鳥

かつを

籠の目や潮こぼるゝはつ鰹　葉拾

雜夏

晝寐して手の動やむ團かな　杉風
虫の喰ふ夏菜とぼしや寺の畑　荊口

夏痩もねがひの中のひとつなり　イセ 如眞

川狩にいでゝ

しか燒や麥からくべて柳鮠　文鳥
異草に我かちがほや園の紫蘇　蔦雫
夕闇はほたるもしるや酒ばやし　水鷗

せばきこころに、老母をやしなひて

魚あぶる幸もあれ澁うちは　馬莧
梅むきや笊かたぶく日の面　重翠
澤瀉や道付かゆる雨のあと　野童
蝸牛つの引藤のそよぎかな　水鷗

晉の淵明をうらやむ。

窓形に晝寐の臺や簟　芭蕉
粘こはな帷子かぶるひるねかな　惟然

貧僧のくるしみ、冬の寒さはふせぐよすがなきに、夏日の納凉は、扇一本にして世上に交る。

帷子のねがひはやすし錢五百　支考

穐之部

名月

名月に麓の霧や田のくもり　はせを

名月の花かと見えて棉畠

こゝしは伊賀の山中にして、名月の夜この二句をなし出して、いづれか是、いづれか非ならんと侍しに、此間わかつべからず。月なまい高根の雲ははれにけりこゝろあるべき初時雨かな　と圓位法師のたどり申されし蹟は、霧横り水ながれて、平田渺々と曇りたるは、老杜が唯雲水のみなりといへるにもかな(叶)へるなるべし。その次の棉ばたけは、言葉麁にして心はなやかなり。いはゞ今のこのむ所の一筋に便あらん。月のかつらのみやはなるひかりを花とちらす斗にと、おもひやりたれば、花に清香あり月に陰ありて、是も詩哥の間をもれず。しからば前は寂寞をむねとし、後は風興をもつぱらにす。吾こゝろ何ぞ是非をにかゝる事をなさむ。たゞ後の人なほあるべし。

支考評

名月の海より冷る田簔かな　酒堂

名月や西にかゝれば蚊屋のつき　如行

もの／＼の心根とはん月見哉　露沾

ふたつあらばいさかひやせむけふの月　智月

名月や長屋の陰を人の行　闇指

明月や更科よりのとまり客　涼葉

明月や灰吹捨る陰もなし　不玉

中切の梨に氣のつく月み哉　配力

名月や草のくらみに白き花　左柳

明月や遠見の松に人もなし　圃水

おがむ氣もなくてたふとやけふの月　山蜂

明月や寢ぬ處には門しめず　風國

名月や四五人乘し艜ぶね　需笑

老の身は今宵の月も内でみむ　重友

明月にかくれし星の哀なり　泥芹

伊勢の山田にありて、かりの庵をおもひ立けるに

二見まで庵地たづぬる月見哉　支考

芥子蒔と畑まで行む月見哉　空牙

柿の名の五助と共に月みかな　如眞

山鳥のちつとも寐ぬや峯の月　宗比

名月や里のにほひの青手柴　木枝

場に居て月見ながらや莚機　利合

明月や聲かしましき女中方　丹楓

明月や何もひろはぬ夜の道　野荻

飛入の客に手をうつ月見哉　正秀

淀川のほとりに日をくらして

舟引の道かたよけて月見哉　丈草

待宵の月に床しや定飛脚　景桃

家に三老女といふ事あり。亡父將監が祕してつたへ侍しを、おもひ出て

姨捨を闇にのぼるやけふの月　沾圃

露おきて月入あとや塀のやね　馬莧

蔦かづら月まだたらぬ梢哉　里東

月影や海の音聞長廊下　牧童

深川の末、五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友　芭蕉

十六夜はわづかに闇の初哉　仝

いざよひは闇の間もなしそばの花　猿雖

七夕

更行や水田の上のあまの河　惟然

星合を見置て語れ朝がらす　凉葉

船形の雲しばらくやほしの影　東湖

たなばたをいかなる神にいはふべき　沾圃

朝風や薫姫の團もち　乙州

立秋

粟ぬかや庭に片よる今朝の秋　露川

秋たつや中に吹るゝ雲の峯　左次

穐草

朝露の花透通す桔梗かな　柳梅

細工にもならぬ桔梗のつぼみ哉　随友
女郎花ねびぬ馬骨の姿哉　濁子
をみなへし鵜坂の杖にたゝかれな　馬莧
一筋は花野にちかし畑道　烏栗
弓固とる比なれや藤ばかま　支浪

贈芭蕉庵

百合は過芙蓉を語る命かな　風麥
さよ姫のなまりも床しつまね花　鳳仙 史邦
枯のぼる葉は物うしや鷄頭花　万乎
鷄頭や鴈の來る時なをあかし　芭蕉
鷄頭の散る事しらぬ日數哉　至曉
折〱や雨戸にさはる荻のこゑ　雪芝
蔦の葉や殘らず動く秋の風　荷兮
山人の晝寐をしばれ蔦かづら　加賀山中 桃妖
風每に長くらべけり蔦かづら　杉下

朝がほ

朝顏の莟かぞへむ薄月夜　田上尼
あさがほの這ふてしだるゝ柳かな　闇指
水も有あさがほたもて錫の舟　風麥
朝良にしほれし人や鬢帽子　其角

虫 附鳥

ぎぼうしの傍に經よむいとゞかな　畫讃 女 可南
竈馬や顏に飛つくふくろ棚　北枝
火の消て胴にまよふか虫の聲　正秀
秋の夜や夢と鮮ときり〲す　水鷗
みの虫や形に似合し月の影　杜若
蜻蛉や何の味ある竿の先　探丸
蟷螂や腹をひやすか石の上　蔦雫
蓮の實に輕さくらべん蟬の空　示峯
ぬけがらにならびて死る秋のせみ　丈草
鴈がねにゆらつく浦の笘屋哉　馬莧
鶺鴒や走り失たる白川原　氷固
栗の穗を見あぐる時や啼鶉　支考
老の名の有ともしらで四十雀　芭蕉

颱風

秋かぜや二番たばこのねさせ時　游刀

雀子の髭も黑むや秋の風　式之
何なりとからめかし行秋の風　支考
松の葉や細きにも似ず秋の聲　風國
をのづから草のしなへを野分哉　闌燕
ふんばるや野分にむかふはしら賣　九節
あれ／＼て末は海行野分かな　猿雖

稲妻

獨居いて留守ものすごし稲の殿との　少年 一東
稲妻や雲にへりとる海の上　宗比
明ぼのや稲づま戻る雲の端　土芳
いなづまや闇の方行五位の聲　芭蕉

木實 附菌

園栗の落て飛けり石ほとけ　爲有
炭燒に澁柿たのむ便かな　玄虎
秋空や日和くるはす柿のいろ　酒堂
つぶ／＼と箒をもるゝ榎み哉　重翠
はつ茸や塩にも漬ず一盛　沾圃

伊賀の山中に、阿叟の閑居を訪ひて

松茸や都にちかき山の形なり　惟然

（墨消）いせの斗從に山家をとはれて

まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

楓

後屋の塀にすれたり村紅葉　北鯤

鹿

尻すほに夜明の鹿や風の音　風睡
寐がへりに鹿おどろかす鳴子哉　一酌

農業

起しせし人は迯けり蕎麥の花　車庸
木の下に狸出むかふ穗懸かな　買山
さまたげる道もにくまじ嚋の稲　如雪

伊勢の斗從とじゆうに、山家をとはれて

蕎麥はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉
早稲刈て落つきがほや小百姓　乃龍
山雀のどこやらに啼霜の稲　斗從
居りよさに河原鶸來る小菜畠　支考
一霜の寒や芋のずんど寸胴刈　仝

肌寒き始にあかし蕎麥のくき　惟然

百なりていくらが物ぞ唐がらし　木節

大師河原にあそびて、楫次といふもの丶孫に逢ひて

そのつるや西瓜上戸の花の種　沾圃

菊

翁草二百十日も恙なし　蔦雫

惠ほし子やなど白菊の玉牡丹　濁子

煮木綿の雫に寒し菊の花　支考

題畫屛

むかばきやかゝる山路の菊の露　兀峯

借りかけし庵の噂やけふの菊　丈草

暮秋

廣澤や背負ふて歸る秋の暮　野水

行秋を皷弓の糸の恨かな　乙州

行あきや手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雜秋

五六十海老つゐやして鯊一ッ　之道

栗がらの小家作らむ松の中　園女

あら鷹の壁にちかづく夜寒かな　哇止

殘る蚊や忘れ時出る秋の雨　四友

身ぶるひに露のこぼるゝ馬哉　狭子

更る夜や稻こく家の笑聲　万乎

柿の葉に燒みそ盛らん薄箸　桑門 宗波

本馬圭馬が宅に髑髏ども笛・皷をかまへて、能する處を畫て、舞臺の壁にかけたり。まことに生前のたはぶれなどは、このあそびに殊ならんや。かの髑髏を枕として、終に夢うつゝをわかたざるも、只この生前をしめさるゝものなり。

稻づまやかほのところが薄の穗　はせを

冬之部

時雨附霜

この比の垣の結目やはつ時雨　野坡

しぐれねば又松風の只をかず　北枝
けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉
一時雨またくづをるゝ日影哉　露沾
初しぐれ小鍋の芋の煮加減　馬莧
平押(ひらおし)に五反田くもる時雨かな　野明
柴賣やいでゝしぐれの幾廻り　闇指
椀賣も出よ芳野の初時雨　空牙
穴熊の出ては引込時雨かな　爲有
更る夜や鏡にうつる一しぐれ　鷄口
石に置て香炉をぬらす時雨哉　野荻
柿包む日和もなしやむら時雨　露川
高みよりしぐれて里は寐時分　里圃

浮雲をそなたの空になきにしの
日影よりこそあめになりけれ

沖西(おきにし)の朝日くり出す時雨かな　沾圃
はつ霜や犬の土かく爪の跡　北鯤
ひとつば(一葉)や一葉〳〵の今朝の霜　支考

元祿辛酉之初冬九日素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る事は、その比は花いまだめぐみもやらず。菊花ひらく時則重陽といへるこゝろにより、かつは展重陽のためしなきにしもあらねば、なを秋菊を詠じて、人〳〵をすゝめられける事になりぬ。

菊の香や庭に切たる履の底　芭蕉
柚の色や起あがりたる菊の露　其角
菊の氣味ふかき境や藪の中　桃隣
八專の雨やあつまる菊の露　沾圃
何魚のかざしに置ん菊の枝　曾良
菊畠客も圓座をにじりけり　馬莧

柴桑の隱士無絃の琴を翫しをおもふに、菊も輪の大ならん事をむさぼり、造化もうばふに及ばし。今その菊をまなびて、をのづからなるを愛すといへ共、家に菊ありて琴なし。かけたるにあらずやとて、

人見竹洞老人、素琴を送られしより、是を夕にし是を朝にして、あるは聲なきに聽き、あるは風にしらべあはせて、自（ミヅカラ）ほこりぬ。

うるしせぬ琴や作らぬ菊の友　素堂

草附木

水仙や練塀われし日の透間　曲翠

なを清く咲や葉がちの水仙花　氷固

水仙の花のみだれや藪屋しき　惟然

范蠡が趙甫のこゝろをいへる、山家集の題に習ふ。

一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉

山茶花は元より開く歸り花　車庸

冬梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳

山茶花も落てや雪の散椿　露笠

木葉附冬枯凩

おもひなし木の葉ちる夜や星の數　沾德

星さえて江の鮒ひらむ葉下落上哉　露沾

冬川や木の葉は黑き岩の間　惟然

麓より足ざはりよき木の葉哉　槐風

卜柳坊宗比の庵をたづねて

遣はいる入より先取てみる落葉哉　イセ 一道

枯はてゝ霜にはぢ恥ずやをみなへし　杉風

牛の行道は枯野のはじめかな　桃醉

冬枯に去年きて見たる友もなし　乃龍

草枯に手うつてたゝぬ鴫もあり　利牛

野は枯てのばす物なし鶴の首　支考

木がらしや色にも見えず散もせず　智月

凩や背中吹るゝ牛の聲　風斤

こがらしや刈田の畔の鐵氣（カナケ）水　惟然

こがらしや藁まきちらす牛の角　塵生

夷講

ゑびす講酢賣に袴着せにけり　芭蕉

恵比須講鴦も鴨に成にけり　利合

鳥附いな

能登のさの海をみて

塵濱にたゝぬ日もなし浦衛　句空

追かけて雹にころぶ千鳥かな　蔦雫

小夜ちどり庚申まちの舟屋形　丈草

入海や碇の筌に啼千鳥　闇指

氅につゝみてぬくし鴨の足　芭蕉

たつ鴨を犬追かくるつゝみかな　乍木

抄汐にころび入べき生海鼠かな　亡人 利雪

うかうかと海月に交るなまこ哉　車庸

見え透や子持ひらめのうす氷　岱水

一塩にはつ白魚や雪の前　杉風

かくぶつや腹をならべて降霰　拙候

杜夫魚は河豚の大さにて水上に浮ぶ、越の川にのみあるうをなり。

冬月　附衾

喰ものや門賣ありく冬の月　里圃

あら猫のかけ出す軒や冬の月　丈草

何事も寐入るまでなり紙ぶすま　小春

水仙や門を出れば江の月夜　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉

侘しさは夜着を懸たる火燵かな　少年 桃先

自由さや月を追行置火燵　洞木

雪

初雪や門に橋あり夕間暮　其角

朝こみや月雪うすき酒の味　仝

雪あられ心のかはる寒さ哉　夕菊

鷦鷯家はとぎるゝはたれ雪　祐甫

雪垣やしらぬ人には霜のたて　蔦雫

ふたつ子も草鞋を出すやけふの雪　支考

片壁や雪降かゝるすさ俵　圃吟

思はずの雪見や日枝の前後　丈草

髪剃は降來る雪か比良のたけ　陽和

伊賀大和かさなる山や雪の花　配力

神楽

夜神楽に歯も喰しめぬ寒哉　史邦

鉢たゝき

食時やかならず下手の鉢扣　路草

鉢たゝき干鮭賣をすゝめけり　馬莧
聟入の門も過けり鉢たゝき　許六
狼を送りかへすか鉢たゝき　沾圃

煤掃附餅つき

煤はきや鼠追込黄楊の中　殘香
煤掃やあたまにかぶるみなと紙　米黄鸞過
才覺な隣のかゝや煤見舞　馬莧
煤はきやわすれて出る鉢ひらき　ミノ闇如
煤掃や折敷一枚踏くだく　惟然
餅つきや火をかいて行男部屋　呇水
餅つきやあがりかねたる鷄のとや　嵐蘭
もち搗の手傳ひするや小山伏　馬佛

歳暮附節季候衣配

こねかへす道も師走の市のさま　曾良
門砂やまきてしはすの洗ひ髪　里東
賣石やとつてもいなず年の暮　草士
猿も木にのぼりすますやとしの暮　車來
大年や親子たはらの指荷ひ　万乎
袴きぬ聟入もありとしの昏　李由
年の市誰を呼らん羽織との　其角
打こぼす小豆も市の師走哉　正秀
引結ぶ一つぶ銀やとしの暮　荻子
桶の輪のひとつあたらし年のくれ　猿雖
天鵝毛のさいふさがして年の暮　惟然
濱荻に筆を結せてとしの暮

此句は圖司呂丸が、羽ぐろより京にのぼるとて、伊勢にもまうで侍りければ、そのとしの暮かゝる事もいひ殘して、今はなき人とはなりし。

盜人にあふた夜もあり年の暮　芭蕉
余所に寐てどんすの夜着のとし忘　支考
漸に寐所出來ぬ年の中　土芳
節季候や弱りて歸る藪の中　尙白
節季候の拍子をぬかす明屋哉　少年桃後
裁屑は末の子がもつきぬ配　山蜂
一しきり啼て靜けし除夜の鷄　利合

雜冬

小屛風に茶を挽かるゝ寒さ哉　斜嶺
植竹に河風さむし道の端　土芳
井の水のあたゝかになる寒哉　李下
寒聲や山伏村の長つゞみ　仙杖
霜ばしらをのがあけしや土龍(うごろもち)　圃仙
火燵より寢に行時は夜半哉　雪芝
山陰や猿が尻抓(か)く冬日向　コ谷
爼板に人參の根の寒さ哉　沾圃
菊刈や冬たく薪の置所　杉風

釋教之部 附 追善 哀傷

涅槃

涅槃像あかき表具も目にたゝず　沾圃
ねはん會や皺手合る珠數の音　芭蕉
山寺や猫守り居るねはむ像　不撒
貧福のまことをしるや涅槃像　山蜂

灌佛

灌佛やつゝじならぶる井戸のやね　曲翠
散花や佛うまれて二三日　不玉
灌佛や釋迦と提婆は從弟どし　之道

魂祭

喰物もみな水くさし魂まつり　嵐雪
寐道具のかた〳〵やうき魂祭　去來
やま伏や坊主をやとふ玉祭　沾圃

甲戌の夏大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ、舊里に歸りて、盆會をいとなむとて

家はみな杖にしら髮の墓參　芭蕉

悼少年 二句

かなしさや麻木(をがら)の箸もおとなみ　惟然
その親をしりぬその子は秋の風　支考

かまくらの瀧口寺に詣て

首の座は稻妻のするその時か　木節
はか原や稻妻やどる桶の水　支梁

御影講

柚も柿もおがまれにけり御影講　沾圃

臘八

腸をさぐりて見れば納豆汁　許六

何のあれかのあれけふは大師講　如行

雜題

洛東の眞如堂にして、
善光寺如來開帳の時

涼しくも野山にみつる念佛哉　去來

有ると無きと二本さしけりけしの花　智月

けし畑や散しづまりて佛在世　乙州

ものゝふの川越問ふや富士まうで　重翠

手まはしに朝の間涼し夏念佛　野坡

食堂に雀啼なり夕時雨　支考

旅之部

送別

元祿七年の夏、はせを翁の別を見
送りて

麥ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

別るゝや柿喰ひながら坂の上　惟然

許六が木曾路におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より古鄕に歸る時

鼠ども出立の芋をこかしけり　丈草

鮎の子のしら魚送る別哉　芭蕉

甲斐のみのぶに詣ける時、宇都の
山邊にかゝりて

年よりて牛に乘りけり蔦の路　木節

稻づまや浮世をめぐる鈴鹿山　越人

にべもなくつるたつ蟬や旅の宿　野徑

出羽の國におもむく時、
みちのくのさかひを過て

そのかみは谷地なりけらし小夜碪　公羽

十團子も小つぶになりぬ秋の風　許六

大名の寐間にもねたる夜寒哉　仝

くま野路

くるしさも茶にはかつへぬ盆の旅　曾良

つばくらは土で家する木曾路哉　猿雖

明ぼのはたちばなくらし旅姿　我峯

煎りつけて砂路あつし原の馬　史邦

同國の心ざしも、漸〳〵伊勢のくにゝいたりて

文臺の扇ひらけば秋凉し　亡人 呂丸

我蒲團いたゞく旅の寒かな　沾圃

常陸の國あしあらひといふ所に行暮て、やどり求んとせしに、その夜はさる事ありとて、宿なかさゞりければ、一夜別ぼりの軒の下にかゞまりふして

椽に寐る情や梅に小豆粥　支考

はつ爪(瓜)や道にわづらふ枕もと　仝

元祿三年の冬、粟津の草庵より武江におもむくとて、嶋田の驛、塚本が家にいたりて

宿かりて名をなのらするしぐれかな　はせを

續猿蓑は芭蕉翁の一派の書也。何人の撰といふ事をしらず。翁遷化の後伊賀上野、翁の兄松尾なにがしの許にあり。某、懇望年を經て、漸今歳の春、本書をあたえ、世に廣むる事をゆるし給へり。書中或は墨けし、あるひは書入等のおほく侍るは、草稿の書なればなり。一字をかえず、一行をあらためず、その書、其手跡を以て直に板行をなす物也。

元祿十一寅
五月吉日　ゐづゝ屋
庄兵衛書 重勝

枯尾花（かれをばな）

其角撰

芭蕉翁終焉記

枯尾花 上巻

芭蕉翁終焉記

はなやかなる春は、かしら重く、まなこ濁りて心うし。泉石冷ゝたる納涼の地は、ことに濕氣をうけて、夜もねられず朝むつけたり。秋はたゞ、かなしびを添る腸をつかむばかり也。ともかくもならでや雪のかれ尾花と、無常閉關の折〳〵は、とぶらふ人も便なく立歸て、今年就中老衰なりと歎あへり。抑此翁、孤獨貧窮にして、德業にとめること無量なり。二千餘人の門葉、邊遠ひとつに合信する因と緣との不可思議、いかにとも勘破しがたし。天和三年の冬、深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり、笘をかつぎて、煙のうちに生のびけん。是ぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の變を悟り、無所住の心を發して、其次の年、夏の半に甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなければと、それより三更月下入無我といひけん、昔の跡に立歸りおはしければ、人々うれしくて、燒原の舊艸に庵をむすび、しばしも心とゞまる詠にもとて、一かぶの芭蕉を植たり。雨中吟、芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉、と佗られしに堪閑の友しげくかよひて、をのづから芭蕉翁とよぶことになむ成ぬ。その比、圓覺寺大顚和尚と申が、易にくはしくおはしけるによりて、うかゞひ侍るに、或時、翁が本卦のやうみんとて、年月時日を古曆に合せて、筮考せられけるに、萃といふ卦にあたる也。是は一もとの薄の風に吹れ、雨にしほれて、うき事の數々しげく成ぬれども、命つれなく、からうじて世にあるさまに斷たり。さればあつまるとよみて、その身は滑ならんとすれども、かなたこなたより事つどひて、心ざしをやすんずる事なしとかや。信に聖典の瑞を感じけるさのごとく、艸庵に入來る人々の道をしたへるあまり、とにもかくにも慰むれば、所得たる哉。橋あり、舟有、林アリ、塔アリ、花の雲鐘は上野か淺草かと、眼前の奇景も捨がたく、をの〳〵がせめておもふも、むつまじく侍れど、古鄕に聊忍ばるゝ事ありとて、貞享初のとしの秋、知利をともなひ、大和路やよし野の奥も心のこさず、露とく〳〵こゝろみにうき世すゝ

がばや。是より人の見ふれたる茶の羽織、ひの木笠になん、いかめしき音やあられと風狂して、こなた・かなたのしるべ多く、蹤の長路をいたはる人く、名を乞、句を忍ぶと安からず聞えしかば、隱れかなたる身を竹齋に似たる哉と風の吟行に、猶ゝ德化して正風の師と仰ぎ侍る也。近在隣鄕より馬をはせて、來りむかふるもせんかたなし。心をのどめてと思ふ一日もなかりければ、心氣いつしかに衰減して、病ゝ鳫のかた田におりて旅ね哉とくるしみけん其年より、大津・膳所の人ゝいたはり深く、幻住庵・(猿蓑に記あり)義仲寺、ゆく所、至る處の風景を心の物にして、遊べること年あり。元來、混本寺佛頂和尙に嗣法して、ひとり開禪の法師といはれ、一氣鐵鑄生いきほひなりけれども、老身くづほるゝまゝに、句毎のからびたる姿までも、自然に山家集の骨髓を得られたる有がたくや。さればこそ此道の杜子美也ともてはやして、貧交人に厚く、喫茶の會盟に於ては、宗鑑が洒落も敎のひとかたに成て、自由・躰・放狂・躰、世ゝ皈ッて口うつしせしも現力也。凡、篤實のたなみ、風雅の妙、花に匂ひ月にかゞやき、柳に流れ、雪にひるがへる。須磨・明石の夜泊、淡路島の明ぼの、枝を引はてしもなく、こゝがたに讃國、木曾路に兼好、二見に西行、高野に寂蓮、越後の鄕は宗祇・宗長、白川に兼載の草庵、いづれもく故人ながら、芭蕉翁についてまぼろしにみえ、いざやくとさそはれけん、行衛の空もたのもしくや。(奥のほそ道といふ記あり) 十餘年がうち、杖と笠とをはなさず、十日とも止まる所にては、又こそ我胸の中を、道祖神のさはがし給ふ也と語られしなり。住つかぬ旅の心や置火燵、是は慈鎭和尙の、たびの世にまた旅寝してくさ枕ゆめの中にもゆめをみる哉と、よませ給ひしに思ひ合せて侍る也。遊子が一生を旅にくらしてはつと、聞得し生涯をかろんじ、四たびむすびつる深川の庵を、又立出るとて、鶯や笋藪に老を鳴 人も泣るゝわかれなりしが、心待するかたくとにかくかしがましとて、ふたゝび伊賀の古鄕に庵をかまへ、(三か月の記有)爰にてしばしの閑素をうかゞひ給ふに、心あらん人にみせばやと、津の國なる人にまねかれて、爰にも冬籠する便ありとて、思ひ立給ふも道祖神のすゝめ成べし。九月廿五日、膳所の曲翠子より、いたはり迎

へられし返事に、此道を行人なしに秋の昏と聞えけるも、終のしをりをしられたる也。伊賀山の嵐、紙帳にしめり、有ふれし菌の塊積にさはる也と覺えしかど、苦しげなれば例の藥といふより水あたりして、長月晦の夜より床にたふれ、泄痢、度しげくて、物いふ力もなく、手足氷りぬれば、あはやとてあつまる人ゝの中にも、去來、京より馳くるに、膳所より正秀、大津より木節・乙州・丈艸、平田の李由つき添て、支考・惟然と共に、かゝる歎きをつぶやき侍る。もとよりも心神の散亂なかりければ、不淨をはゞかりて、人ゝ近くも招かれず、折ゝの詞につかへ侍りける。たゞ壁をへだてゝ、命運を祈る聲の耳に入けるにや。心弱きゆめのさめたるはとて、

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

また枯野を廻るゆめ心ともせばやと申されしが、是さへ妄執ながら、風雅の上に死ん身の道を切に思ふ也、と悔まれし八日の夜の吟也。各はかなく覺えて、

賀會祈禱の句

落つきやから手水して神集め　木節

凩の空見なをすや鶴の聲　去來

足がろに竹の林やみそさゞい　惟然

初雪にやがて手引ん佐太の宮　正秀

神のるす賴み力や松のかぜ　之道

居上ていさみつきけり鷹の皃　伽香

起さるゝ聲も嬉しき湯婆哉　支考

水仙や使につれて床離れ　呑舟

峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈艸

日にまして見ます顔也霜の菊　乙州

是ぞ生前の笑納め也。木節が藥を死迄もと、たのみ申されけるも實也。人ゝにかゝる汚れを耻給へば、坐臥のたすけとなるもの呑舟と舍羅也。これは之道が貧しくて有ながら、切に心ざしをはこべるにめでゝ、彼が門人ならば他ならずとて、めして介抱の便とし給ふ。そもかれらも緣にふれて、師につかふまつるとは悦びながらも、今はのきはのたすけとなれば、心よはきもことはりにや。各がはからひに、麻の衣の垢つきたるを恨みて、よききぬに脱かはし、夜の衣の薄ければとて、錦繡のめでたきをとゝのへ

たるぞ、門葉のものどもが面目なり。九日・十日はとにくるしげ成に、其角、和泉の府淡の輪といふわたりへ、まいりたるたよりを乙州に尋られけるに、なつかしと思ひ出られたるにこそとて、やがて文したゝめてむかひ参りし道たがひぬ。予は、岩翁・龜翁ひとつ船に、ふけるの浦心よく詠めて堺にとまり、十一日の夕べ大阪に着て、何心なくおきなの行衛、覺束なしとばかりに尋ければ、かくなやみおはすといふに胸さはぎ、とくかけつけて病床にうかゞひより、いはんかたなき懷をのべ、力なき聲の詞をかはしたり。是年ごろの深志に通じて、住吉の神の引立給ふにやと歡喜す。わかのうらにても祈つる事は、かく有べしとも思ひよらず。蟻通の明神の物とがめなきも有がたく覺侍るに、いとゞ泪せきあげて、うづくまり居るを、去來・支考がかたはらにまねくゆへに、退いて妄昧の心をやすめけり。膝をゆるめて病顏をみるに、いよ〳〵たのみなくて、知死期も定めなくしぐるゝに

吹井より鶴を招かん時雨かな　晋子

と祈誓してなぐさめ申けり。先頼む椎の木もあり、と聞えし幻住菴はうき世に遠し。木曾殿と塚をならべて、と有したはぶれも、後のかたり句に成ぬるぞ。其きさらぎの望月の比、と願へるにたがはず。常にはかなき句どものあるを前表と思へば、今さらに臨終の聞えもなしとしられ侍り。露しるしなき藥をあたゝむるに、伽のものども寢もやらで、灰書に

うづくまる藥の下の寒さ哉　丈艸
病中のあまりすゝるや冬ごもり　去來
引張てふとんぞ寒き笑ひ聲　惟然
しかられて次の間へ出る寒さ哉　支考
おもひ寄夜伽もしたし冬ごもり　正秀
鬮とりて茶飯たかする夜伽哉　木節
皆子也みのむし寒く鳴盡す　乙州

十二日の申の刻ばかりに、死顏うるはしく睡れるを期として、物打かけ、夜ひそかに長櫃に入て、あき人の用意のやうにこしらへ、川舟にかきのせ、去來・乙州・丈艸・支考・惟然・正秀・木節・呑舟・壽貞が子次郎兵衞・予ともに十人、笘もる雫、袖寒き旅ねこそあれ。たびねこそあれとため

しなき奇縁をつぶやき、坐禪・稱名ひとり〳〵に、年ごろ日比のたのもしき詞、むつまじき教をかたみにして、誹諧の光をうしなひつるに、思ひしのぶる人の名のみ慕へる昔語りを今さらにしつ。東南西北に招かれて、つゐの栖を定めざる身の、もしや奥松島・越の白山、しらぬはてしにてかくもあらば、聞て驚くばかりの歎ならんに、一夜もそひてかばねの風をいとふこと本意也。此期にあはぬ門人の思いくばくぞや、と鳥にさめ鐘をかぞへて、伏見につく。ふしみより義仲寺にうつして、葬禮、義信を盡し、京・大坂・大津・膳所の連衆、披官從者迄も、此翁の情を慕へるにこそ、まねかざるに馳來るもの三百餘人也。淨衣その外、智月と乙州が妻ぬひたてゝ着せまいらす。則、義仲寺の直愚上人をみちびきにして、門前の少、引入たる所に、かたのごく木曾塚の右にならべて、土かいおさめたり。をのづからふりたる柳もあり。かねての墓のちぎりならんと、そのまゝに卵塔をまねび、あら垣をしめ、冬枯のばせをを植て名のかたみとす。常に風景をこのめる癖あり。げにも所は、ながら山・田上山をかまへて、さゞ波も寺前によせ、漕出る舟も觀念の跡をのこし、樵路の鹿・田家の雁、遺骨を湖上の月にてらすと、かりそめならぬ翁なり。人々七日が程こもりて、かくまでに追善の興行、幸にあへるは予也けりと、人々のなげきの合感して、愚かに終焉の記を殘し侍る也。程もはるけき風のつてに、我翁をしのばん輩は、是をもて回向のたよりとすべし。

於粟津義仲寺牌位下　晋子書

元祿七年十月十八日、於義仲寺

追善之誹諧

なきがらを笠に隱すや枯尾花　晋子

温石さめて皆氷る聲　支考

行灯の外よりしらむ海山に　丈艸

やとはぬ馬士の緣に來て居る　惟然

つみ捨し市の古木の長短　木節

洗ふたやうな夕立の顏　李由

森の名をほのめかしたる月の影　之道
　野かげの茶の湯鶉待也　去来
ウ 水の霧田中の舟をすべり行　曲翠
　旅から旅へ片便宜して　正秀
暖簾にさし出ぬ眉の物思ひ　臥高
　風のくすりを惣〳〵がのむ　泥足
こがすなと齋の豆腐を世話にする　乙州
　木戸迄人を添るあやつり　芝柏
葺わたす菖蒲に匂ふ天氣合　昌房
　車の供ははだし也けり　探芝
澄月の横に流れぬよこた川　胡故
　負〳〵下て鴈安堵する　牝玄
菴の客寒いめに逢秋の雨　游刀
　ぬす人ふたり相談の聲　蘇葉
世の花に集の發句の惜まるゝ　智月
　多羅の芽立をとりて育つる　呑舟
二 此春も折〳〵みゆる筑紫僧　土芳
　打出したる刀荷作る　卓袋
四十迄前髪置も郷ならひ　靈椿
　苦になる娘たれしのぶらん　野童
一夜とて末つむ花を寐せにけり　素顰
　祭の留守に殘したる酒　万里
河風の思の外に吹しめり　我〻
　藪にあまりて雀よる家　道革
塩賣のとづかりぬる油筒　許六
　月の明りにかけしまふ給　回鳧
秋も此彼岸過せば草臥て　荒雀
　くされた込に立し鷄頭　楚江
小屏風の内より筆を取亂し　野明
　四ッになる迄起さねば寢る　風國
二ウ ねんごろに草鞋すげてくるゝ也　木枝
　女人堂にて泣もことはり　晋子
ひだるさも侍氣にはおもしろく　角上
　ふるか〳〵と雪またれけり　之道
あれ是と逢夜の小袖目利して　去来
　梳そろへたる蔵のくらがり　土芳

呑かゝるきせる明よとせがまるゝ　芝柏
ふとんを巻て出す乗物　臥高
弟子にとて狩人の子をまいらする　尙白
月さしかゝる門の井の垢離　呂房
軒の露莚敷たるかたたがへ　丹野
野分の朝しまりなき空　丈艸
花にとて手廻し早き旅道具　惟然
煮た粥くはぬ春の引馬　靈椿

三

小機嫌につばめ近よる塀の上　正秀
洗濯に出る川べりの石　回鳬
口によりて柴の直段もちがふ也　朴吹
袋の猫のもらはれて鳴　角上
里迄はやとひ人遠き峯の寺　泥足
聞やみやこに爪刻む音　尙白
七ツからのれども出さぬ舟手形　卓袋
二季ばらひにて國〱の掛　芝柏
内に居る弟むす子のかしこげに　探芝
うしろ山迄刈寄る萱　游刀

此牛を三歩にうれば月見して　楚江
すまふの地取かねて名を付　魚光
社さえ五郎十郎立ならび　晋子
所がらとて代官を殿　風國

三ウ

打鎰に水上帳を引かけて　支考
乳母と隣へ送る啼兒　正秀
獅子舞の拍子ぬけする晝下り　丈艸
雨氣の雲に瓦やく也　呂房
在所から醫師の普請を取持て　臥高
片町出かす畠新田　之道
鳥さしの仕合わろき昏の空　去來
木像かとて倚子をゆるがす　泥足
三重がさねむかつく斗句はせて　尙白
座敷のもやうかふる名月　卓袋
漣や我ものにして秋の天　角上
經よむうちもしのぶ聖靈　牝玄
かろ〱と花見る人に負れ來て　土芳
村よりおろす伊勢講の種　芝柏

名オ
暖になれば小鮓のなれ加減　這萃
軍ばなしを祖父が手の物　臥高
淵は瀬に薩埵の上を通る也　晋子
朝日にむきて念珠押もむ　正秀
幾人の着汚つらん夜着寒し　支考
わすれて替ぬ大小の額　魚光
味噌つきは沙彌に力をあらせばや　楚江
かな聾の何か可笑き　游刀
ばら〳〵と恨之助をとりさがし　風國
顏赤うするみりん酒の醉　之道
白鳥の鎗を葛屋に持せかけ　探芝
三河なまりは天下一番　去來
飯しるに内義も出るけふの月　倚白
功者に機をみてもらふ秋　回鳬
ウ
うそ寒き堺格子の窓明り　芝柏
文庫をおろす獨山伏　土芳
浮雲も晴て五月の日の長さ　惟然
海へも近き武庫川の水　丈艸
寮にゐる外より鎖をかけさせて　牝玄
思はぬ狀の奥に戒名　支考
靑天にちりうく花のかうばしく　去來
巣に生たちて千里鶯　正秀

右四十三人滿座興行。大津・膳所・京・嵯峨・攝津・伊賀之連衆也。各感愁。而不求巧言也。

傷亡師終焉作句　初七日迄

忘れ得ぬ空も十夜の泪かな　京　去來
啼うちの狂氣をさませ濱衛　僧　李山
無跡や鼠も寒きともぢから　大津　木節
つゐに行宗祇も寸白夜の霜　同　乙州
いふ事も泪に成や塚の霜　膳所　昌房
曉の墓もゆるぐや千鳥數奇　僧　丈艸
一たびの醫師ものとはん歸花　彥根　許六
凩よやみなる跡の舟よばひ　同　汶村

墓もどり十方なき世のしぐれ哉　ぜゞ　探芝

拜席に溜るなみだや朝の霜　大津　楚江

かさね着の老の姿や苔の霜　堅田　成秀

木曾柿や木葉かつぎし塚の上　大つ　誐々

日影さす塚にしぐれや湖水迄　同　露玉

月雪に長き休みや笈の脚　僧　千那

しけ絹に紙子取あふ御影哉　大つ　尙白

一とせ翁の踏分られし奥羽塞をめぐりて、人々よりの呈書をことづかり、道すがらをもかたりておもひわたりたるに、古人に成給ふ遺懐のあまり、むなしき塚をうごかして泣。

きさがたを問ず語や草の霜　京　轍士

ばせをばの寒しと荅ふ聲もなし　僧　角上

澁張の笠かけてみん墓の霜　京　野童

一夜來て泣友にせん鴉の床　同　風國

耳にある聲のはづれや夕時雨　伊賀　土芳

悲しさも云ちらしたる時雨哉　同　卓袋

我眞似を泣か小春の雉の聲　大坂　之道

石たてゝ墓も落つく霜夜哉　同　芝柏

鹿のねも入て悲しき野山哉　僧　支考

入月や日比の數奇の朝朗　京　春澄

十六日晋子を幻住菴にともなひて、翁のかくれ所といへる椎の木をみせて、いますごとくに俤をしたへる愁吟

木がらしや何を力にふく事ぞ　曲翠

腰折て木葉をつかむ別れ哉　正秀

うろ〳〵とひざまづきたる木葉哉　臥高

ねぢてみる別の岩よ冬木立　泥足

見送りし庵の姿や袖の霜　靈椿

まぼろしも住ぬ嵐の木葉哉　晋子

取つかん便もかなし枯柳　嵯峨　野明

線香の煙覆ふや枯芭蕉　同　荒雀

初めての千鳥も啼や礒の塚　大坂　呑舟

冬芭蕉衣にさけて泪かな　ぜゞ　魚光

立かねて袖もしくる(時雨)や墓の前　同　回鳬
悔まれて夜着かぶりけり冬ごもり　同　游刀
霜消て此道廣し西の山　同　朴吹
木曾寺のゆめになしたる時雨哉　大つ　木枝
今朝獨(ひとり)泪をこぼす火鉢哉　ゼゞ　這萃
さゞ波の時雨を聞か土の窓　大津　土龍
ちり際はもろき櫻の紅葉哉　ゼゞ　遲望
むかし人といひて見廻る塚の霜　同　伴左
待うけて泪みあはす時雨哉　かや女

二七日廟参之悼句　所々文通

雪はれて徳の光やかゞみ山　岩翁
小野炭やあとに匂ひの殘りけり　尺草
冬の日や師に奉公の間もなくて　大坂　如柿
今ははや悲しさかるゝ柳哉　ゼゞ　牝玄
間違ふてあはぬ命や村時雨　同　吾我
松の霜見ぬ世の形(なり)やひの木笠　同　松泉
此かた見行來(ゆき)に見せん丸頭巾　同　朔巫
菊櫁曉起の馳走かな　堅田　猪睡
朝日うけて霜もまばゆし塚の前　同　重氏
打こけて指(さ)ぬき氷る泪かな　女　素蟬
なぐさめし琴も名殘や冬の月　女　万里
花鳥よせがまれ盡す冬木立　桑門　惟然
花桶の鳴(なる)音(おと)悲し夜半の霜　女　可南
冬の月襟にうけたる泪哉　ゼゞ　徹房
手をつけば霜も湯と成泪哉　同　麻三
木兎の目にも涙のしぐれ哉　同　砂上
力なく墓にかけよる時雨哉　同　蚤鳥
冬柳かれて名ばかり殘りけり　向震軒
枝折て鳥の歎きや竹の霜　さが　來儿
國郷へつたへてけふのしぐれ哉　小倉　閑夕
幻にみるは枯野の櫁哉　さが　爲有
力なき獅のあがきや冬牡丹　彦根　木導
朝霜や夜着にちゞみしそれもみず　みの　如行
主もなき時雨の庵に讃ばかり　堅田　小作

くらつぼに小坊のるやさゝ、
聞えし作意佛になん。

大根引あとはうづまぬ名殘哉　京　夏木

三七日伊賀連衆追悼句

時雨ゝやおくへもゆかず筆なやみ　いが　玄虎

鶯の子鳴にくゝる榺かな　山岸車來

聞て泣聲もとゞかぬ枯野哉　淺井風睡

寒菊やすゝぐ佛の膳の端　山田雪芝

夢みたか啼て飛ゆく浮ね鴨　杉野配力

六疊に見殘されたり冬の月　岡本苔蘇

塵塚や泪の帚に霜の華　神部や　祐甫

火煙(燈カ)から床のかけ繪を泪かな　京や　一鷺

なき跡や時雨てたつる古障子　佐治洞木

手向には何をかれたる菊畠　西澤魚日

俤や足もさゝれぬ置火燵　明覺寺　尾頭

冬桃のなき人しらぬ歎かな　山岸陽和

山茶花の散頃はぬうき世哉　木や　我峯

借(シ)着つる夜半もありけり丸頭巾　大坂や　万乎

かろき身の果や木葉の吹とまり　猿雖

芭蕉〳〵枯葉に袖のしぐれ哉　小川風麥

帋衣の小しぼに浮むなみだ哉　植田示蜂

一生を旅の仕舞の時雨かな　井つゝや　爲醉

茶のからの霜や泪のその一ッ　濱式之

何事もなみだに成ぬ冬の菴　中尾槐市

菊かれて側に小松も凋れけり　小菴　長年

たよりなや風もかく迄枯柳　津子荻子

枯草に顔入て鳴男鹿かな　原川乍木

笠を泣時雨なつかし北南　井つゝや　望翠

そのまゝに降を手向るしぐれ哉　宇多都

聞とりて鳥も嘆くか山寒し　大久保　仙杖

歎く手の香もふるふや水仙花　松本氷固

水鳥の遠きわかれや湖の果　内神九節

なにはへの飛脚、粟津よりかへりて
亡師の遺書まいれり。

夢なれや活たる文字の村衛　いが　半殘

手向せん茶の木花咲袖の下　西嶋百歲

限あるうわさばかりや散紅葉　溝　水

はら〳〵と泪かれ野の薄かな　來川烏栗

四七日なかけて普一音文通之句

猿みのの袖のしぐれや行嵐　伊せ　路艸
夢のあとたが疊みしぞ夜着ふとん　同　團友
待〳〵ておもはぬ文に時雨哉　同　空芽
便なう霜にきえ行月夜哉　同　宗比
みて泣や蓑笠の像に雪霓　同　斗從
玉しるを世に分置て木葉哉　同　芦本
語り合てともに悲しき霜夜哉　いせ　拔不
せめてその笠みて行んあられ笠　同　盧牧
耳の底に水鷄鳴也冬の雨　尾州　露川
枝川や一羽はなれて鳴千鳥　同　素覽
霜にちりて光身にしむ牡丹哉　同　左次
手づからに木葉はく也塚の脇　冬鶯
明て啼冬の日影やかし座敷　大坂　伽香
鵜飼見し川邊も氷る泪哉　みの　低耳
文臺に去ぬ影也古頭巾　伊豫　黃山

枯尾花　下卷

十月廿五日、共二桃隣一出二武江一
而赴二義仲寺一望二芭蕉翁之墓一歎唱

いつの冬か、風のうしろむきそめ、葛のはのおもてみし、秋より春にわたり、杖にさゝめ笠に眠り、小蓑に病つるの浮世をなにはになして、枯野にあそぶと聞え給ひし一句を、今さらのうつゝになしぬ。其角はさる契ありてや、生前のたいめ、後の事迄とりおさめつかへけり。遠き境の人はいまだしり及さずや。江都に心ざしを盡せるたれかれ、ところ〳〵に席をかまへて、追善興行のくさ〳〵袖に袂にひろひかさねて、往〻に歩みを忘れ、富士もみず、大井もしらぬ寒ぞらかけて、霜月七日のゆふづくよの程に、義仲寺の冢上にひざまづく。空華散じ水月うちこぼす時、心鏡一塵をひかざれば、万象よくうつる。此師、この道におゐて、みづからを利し他を利して、終に其神不レ竭、今も見給へ、今も聞給へとて、

此下にかくねむるらん雪佛　嵐雪拜

十月廿二日夜興行

十月をゆめかとばかりさくら花　嵐雪
しぐれの中に一筋の香　氷花
鎰の手の二間は五疊〳〵にて　百里
立居は見ゆる沖の船頭　神叔
有明のはつかに白き山の裾　東潮
眞鶸さそひて豆まはし鳴　浮生
蜀黍の實をばそがれて畑中　卜宅
木舞あらはに手で土をぬる　舟竹
新川にまだ名もつかぬ橋のうへ　桐雨
雨のふる見て照〳〵といふ　月下
存在に物をおしゆる田植ども　風洗
膳にばらりと明る干鰕　楸下
約束の茶の湯延してさびしがり　咸宇

赤い菊より黄な菊を嗅　牧人
上氣して吹れに出る秋の風　當歌
客とならべて床をとる月　銀鉤
ちる花も翁について廻るらん　東潮
山吹もらふ顔ぞわすれね　嵐雪妻
春雨に咄のやうな戀をして　浮生
氣相のわろき時は文見る　百里
只あそぶ四十の内の樂坊主　氷花
水享いとて夏冬もなし　嵐雪
くたびれて勝手の鼾聞えけり　神叔
位牌の前の火影靜まる　東潮
眞實に蕎麥切打て送る也　百里
城の近くに旅ごもりする　神叔
傘の外にまぎるゝ傘はなき　嵐雪
夜半夜あるき母の氣遣　氷花
あたゝかに風呂吹煮ル冬の月　東潮
先度の雪に師走落つく　百里
來春を今から工む大工寄せ　神叔

中山道は加賀で持けり　嵐雪
一升を米の價のとうがらし　百里
さる代もありと語る老　氷花
此たびはまいりあはづの墓の花　專跡
無常の鐘のかすむさゞ波　絲子

満座追善各燒香

なき人の詠めも四季の終哉　百里
見おさめの顔はいつ比雪の比　氷花

悔前非

身をつめる悲しさをしれ冬の月　神叔
芳しき人の香もあれ塚の雪　浮生
風の外にあそぶや墓の月　舟竹
尋行てかれ野の草の根に語レ　成宇
俤や二度三度よむ月時雨　專跡
かれ芦や名をかき寄る潮頭　東潮
時雨にもさめぬ別れや夢咄シ　素イ

芭蕉翁みまかりぬるに、跡をだにとて、たびだつ人に、とりて待ける。

秋風にたへてしばしは殘りしも
霜の芭蕉のあはれ世中　安適

十月廿二日興行

故人も多く旅にはつと、逆旅過客のことはりをおもひよせて

俤やなにはを霜のふみおさめ　桃隣
淡くかげろふ冬の日の影　子珊
一面に起ふす小松風やみて　杉風
よごれし馬を引出す也　岱水
名月は夕飯早く過しけり　曾良
どこやら輕き秋の帷子　序志
皂莢に枝を分たる鵙の聲　太大
細工に入ル古桶の底　龜水
心よき今の住持を悔みたて　孤屋

三里がうちは景の塩濱　子祐
此寒さあられか雪のふる曇　利牛
木綿の重み手にのせて見る　白之
脊戸傳ひ來ては常〳〵長咄　蚊足
折角とれば蜩のから　李里
やす〳〵と平泉より木曾の月　野坡
丈幅せばき布の薄綿　太洛
眞白な陰は流るゝ岸の花　八桑
俵のうへに燕あつまる　桃川
そろ〳〵と子をあゆませて春の空　利合
晝にさがりて葺のこす屋根　野〻
酒道具平ならべたる笠置川　支梁
風呂敷といて鉦皷取出す　湖松
鳴ぬ間人をうかゞふほとゝぎす　桐奚
家のふるきを小利口に住　嵐戎
丁寧に又挑灯で送らるゝ　石菊
風なき雪の柳地につく　ちり
樋の口に苦鮒ばかりかたまりて　嵐竹
臼に手杵のせはしなき音　此筋
あかまへていふ程奢る月の宿　素龍
行脚がへりに更る秋風　千川
よは〳〵と葉ばかり多き菊の露　楚舟
流れに添て雨あがる也　角蕉
居間ながら六疊敷に爐を構へ　杏村
髭に白髮のほのかなる年　川鷗
見開ばをのづからなる花微笑　濁子
香をむすんで朝がすみたつ　滄波

哥仙滿座普音之吟

うらむべき便もなしや神無月　杉風
枯芝や聲も力もなきあらし　八桑
是非わかぬ枯野に草の種もなし　子珊
見るやうに頭巾をかけん庵の松　太大
聲たてぬ歎きや霜のきり〳〵す　湖松
菊かれて匂を惜む居士衣哉　子祐

山茶花を塚の額みに植もせん　太洛
うき便堂絶たり霜ばしら　序志
茶の花は匂ひ手向んばかり也　龜水
見送りも夢に成けり今朝の霜　李里
骨肉にこたゆるけふのしぐれ哉　楚舟
霜消て蓬を庵のちなみ哉　風弦
悲しびを包みかねたる木葉哉　桃川
寺の花直にたむけん冬牡丹　野〻
はかなしや火燵咄も苔の下　愚好
初雪を思ひよらずの手向哉　川陽
かたみ哉粟津がはらの枯柳　杏村
その骸もかくやは雪の水仙花　石人
むせぶとも芦の枯葉の燃しさり　會良
ならべたる繩床さびし冬籠　滄波
袖時雨南無あみだ佛趣向哉　角蕉

義仲寺へ送る悼

氷るらん足もぬらさで渡川　法眼 季吟
告て來て死顏ゆかし冬の山　露沾

花紅葉夢と小春に成にけり　山夕
錫杖にふみたがはざる木葉哉　直方
泣〻と日に吹當る木のは哉　琴風
紅葉ちり橘は青し塚の前　濁子
手向たる水もや朝氷面鏡　壺蛙
時雨ふる白い卒都婆よ夕嵐　山蓬
野ざらしの句や十余年〻の霜　京葉
小蓮や火にはなれたる身の凍〻　大舟
行人の德や十夜の道ひろき　左柳
繪をみるや袖の雫の初氷　此筋
立されば心に消る塚の霜　千川
力艸引切られたるなみだ哉　淵泉
雪や霜尋ねん笠の有所　支老
枯蔦の哀や殘る壁の系　卜子
寒菊の咲後れたる名殘哉　遊糸
哀しれ菊は戸口にかれて居る　其井
こや形見苍の爐蓋に指の跡　海動
何のかの便りの風や枯薄　蓬山

五十二年ゆめ一時のしぐれ哉　ちゑ
頭陀袋重きも袖のしぐれ哉　虚谷
その塚はさぞな枯野の土の色　艶子
心澄て頬に凝つく泪かな　馬莧
凩の聲に檜原もむせびけり　素龍

十月廿三日追善

亦たそやあゝ此道の木葉掻　湖春
一羽さびしき霜の朝鳥　素龍
碇綱縮なる月に浪ゆりて　露沾
野分の音のかはる兀山　萍水
秋中に殘らずつけし藏の壁　桃隣
靑苧の長を引上にけり　岱水
内かたは物やはらかな人づかひ　野坡
ほろ〱雨の末は四五町　孤屋
その形に紙で卷たる百合の花　利牛
竈の火けして庵たて寄せ　杉風
雲水の身はいづちをか死所　素堂
帆をもつ舟は疊也けり　筆
山陰にもらひあつめし竹植て　利合
盃を待ずに急な法躰　野坡
膳所の月片隅もなく照り渡り　岱水
二年つゞいてあたゝかな秋　桃隣
花紅葉老かゞまりて押灸　杉風
酒といはれて少やはらぐ　利牛
聞ば見ばお下屋敷の奥座敷　孤屋
立くづれたる雨の蚊柱　岱水
成あいにありけば旅も苦にならず　桃隣
子共の勢のたらぬ柿園　利合
長〻の籾借り返す力得て　野坡
露霜ふかき大名の寺　杉風
約束の皆ちがふたる後の月　利牛
財布でぬぐふ泪わりなき　孤屋
のし餅の上にかさぬる配り餅　岱水
旦那が出れば賑やかになる　桃隣

山〳〵を信濃の者に語らせて　杉風
本の通りに鼠算用　野坡
高い木の並びし下が猶涼し　孤屋
小あげをかけてゆらぬ駕籠かき　利牛
二三人伊勢上るりの物もらひ　野坡
節句の禮におそなはり來る　岱水
袖に今師の好れたる花の枝　桃隣
雲優美なる春の夕昏　利合

十月廿三日
晋子亭にて興行

今はくも雪のばせをの光哉　仙化
かへらぬ水に寐て並ぶ鴨　是吉
冬の月黒き衣類は影鈍で　介我
拭ひのこせる階のくま　柴雫
一もとの柏檀廻れば二十足　湖月
疊の鼠の穴をわするゝ　神叔

どの向も世ゝの隣の日をうけて　揚水
力もよはく鉦しめる音　枳風
供人を近く召るゝ駕籠の内　由之
雀の枝を鷲のあらそふ　全峯
日に添て宮木の屑は泥に朽　沾徳
むかしもこゝが橋本の宿　李下
合羽なき馬より敷く雨曇　神叔
小僧になりていさみつく顔　揚水
扇から湯錢さし出す月の昏　柴雫
側のたばこの匂ひ望まれ　仙化
花の雲行徳迄と舟よばひ　揚水
ちいさき松のかすむ洲の入　李下
ナ
青貝の卓もふるびて春の色　湖月
日光椀に似あふ芳飯　柴雫
かしこまる事を忘れし年の程　介我
手帋のおくは名やら判やら　神叔
唐物と見すえし茶入袋して　枳風
あらき踵に羽二重の裾　湖月

墓のごと雪を並べて惜みけり　介我
　馬を土戸にはさむ口取　沾徳
かねごとの所〳〵を聞はつり　仙化
　生たる身をぞ戀の入物　揚水
午の月に烏帽子の影の直也　李下
　二行に持て並ぶ虫籠　全峯
聲もなく朝の鹿の小草喰　神叔
　つかみて鍋にはかり込米　由之
肩癖の外に跡なきうしろ見よ　仙化
　はしりながらに牛除る聲　介我
常にえむ連衆拈花の花に寄　沾徳
　垣せぬ桃を人の敬まひ　湖月

深草のおきな、宗祇居士を讃して
いはずや、友二風月一家二旅泊一と。
芭蕉翁のおもむきに似たり。

旅の旅つゐに宗祇の時雨哉　素堂

落葉見し人や落葉の底の人　沾徳
爐開になき人來ませ影ぼうし　枳風
風におもひ泣かせよ猿の面　介我
月雪の近江の土や三世の緣　専吟
檜笠いづれ冬野の面がくれ　湖月
風のなにはや夢のさめどころ　柴雫
初しぐれ笠より外のかたみなし　蓍子
かみな月根ざしは殘るばせを哉　拙侯
歸花菊をむかしの翁かな　闇指
力艸とりはなしたり朝嵐　山蜂
果は霜夢に逢にし芭蕉哉　寒玉
十德の袖はなみだの氷かな　秋色女
霜ふかき菴ぬしなきうつゝ哉　和水
句の神や此十月の世のくやみ　芝莚
さゞんくはや難波へ向てつかみざし　一雀
驚きて霜の蜜柑を手向哉　是吉
殘る名の手向にむせぶしぐれ哉　林也
雪の夜をおもひ忍ぶや名付親　李下

窓の雪はらひ果たる拂子哉　亀翁
青石の陰もあはれや木葉搔　横几
終の野に捨すましけり霜の杖　景桃
又も來ぬ跡に立けり霜柱　萍水
ちからなや膝をかゝえて冬籠　野坡
竹の繪を掛て悲しき時雨哉　孤屋
油火の消て悔むや冬籠　利牛
すがりつく枝も枯たる柳哉　踈雨
泣籠る冬や今年の廻り合　岱水
深川にとりわけ鳴や友千鳥　石菊
月のさきにまだちら〳〵と木葉哉　利合

義仲寺に參り、亡師の塚のもとに舊來を語らんとす。そも隱逸の志につかへ、一たびは笈のたすけともなりぬ。今更に遠里を隔て、かゝる所の苫の下に、むなしき名のみ聞へけるを。

月雪に假の菴や七所　桃隣

十一月十二日初月忌
丸山量阿彌亭　興行

泣中に寒菊ひとり耐へたり　嵐雪
向上船を雪の明ほの　桃隣
濡壁のひる間を遲く屋がせて　岩翁
車にはこぶ藪の疊ナリ　晋子
簾賣聲に告たるほとゝぎす　亀翁
かし傘としれて大文字　横几
名月に持參の一種おもひ付ケ　尺艸
折かへすほど廣き桐の葉　松翁
白粉の鏡にかゝる秋の霜　去來
火燵ぶとんの引たらぬ中　正秀
長谷越の山にあいたる昨日けふ　曲翠
櫃の木の間の海をたまさか　筆
吹たをす屛風を膝に押直し　轍士
皷かゝへし犬がゝりなり　心圭
のまぬかと盃みする人遠し　暮四

岸をすらせて舟や行らん　巨海
蜻蜓(えんばう)の衣紋つくろふやどりやう　荷兮
湯あがりの身の冷かに成　野童
弓はりのひかゆる雲を窺はれ　風國
山家の世帶氣散じな事　集加
獅子の座にみつる心や花の陰　晋子
杖に用なき我老の春　重勝
うらゝ成和爾(わに)や堅田の浦傳ひ　遅望
塩辛(しほから)桶になれし釣(ツリバリ)　轍士
雨の日は大工もあそびたがる也　桃隣
さてはちんば(跛)と見ゆる後ロ月　嵐雪
のり物は音羽の瀧の下に置ク　横几
あたゝめさせよその藥鍋　荷兮
かけ乞の金をかへすも至極成　去來
上座の聟を覗く透合ト　尺艸
風の香もいとゞ扇のきしる音　嵐雪
水もすみたる飛彈曲(もく)の月　岩翁
かしこまる受戒(じゆかい)の兒の白素絹(ソケン)　轍士
能(のう)はじめよと使かさなる　晋子
あだ腹の起り出たる夜の月　集加
櫺子(れんじ)明れば朝がほの蔓　桃隣
衣桁(いかう)の小袖落る音する　風國

二ウ

秋風や看坊持のまゝならぬ　巨海
生かはる歯をゆるがして物おもひ　晋子
たのまぬ神はほめも詈(シカ)リも　尺中
長旅に持あぐみたるつるべ鮓　暮四
一日鍬をふり上る數　心圭
たじろがぬ松を都に見直して　桃隣
夜の寐覺やぬす人もなし　岩翁
よごれても禿(ちび)たる柱杖(しゆぢやう)哀也　横几
たねや乞れて殘す鷄頭　巨海
牛祭晝からしての女子客　尺中
身なけて醉のさむる月影　遅望
折ためて荷ひながらにちらす花　轍士
年越すます坂の櫛挽　荷兮
肥肉(こえにく)なものは春からじゆつながり　集加

梵天寒く立し川小屋　暮四
灯も闇を添て光るらん　嵐雪
不思儀に娵をちそうせらるゝ　去來
白粥のさむる間しばし思ひ佗　岩翁
書そこなひももろふ短尺　晋子
三里四里機嫌まかせの旅の空　野童
焼(たき)ながら干すぬれ木也けり　轍士
此あたり此家ばかりこけら葺　風國
をのが法華を獨たうとき　集加
湖を簗(イケス)にみたる山の景　尺艸
夢といふ字を夢の世の額　嵐雪
宵の月脚半もとかず膳待て　桃隣
どこともなしに蜜柑焦るゝ　巨海
三ウ　かし鳥の樫はくはずに梅もどき　暮四
こしもとが尻たゝく飼猿　岩翁
おもはゆき乘燭(ツケ)の立かねて　轍士
遊行(ゆぎやう)の前にならぶ十念　集加
産るゝや聲もたしかに男の子　晋子

とりちらしたる朝夕の酒　風國
萠季ゆの年ほどありて柏(拍)子ぬけ　横几
憐み四方(よも)に施藥合する　尺中
形よりこびたる佐渡の人心　桃隣
薄の中に得たる著(メドハギ)　暮四
鬼が手に明さして置月の洞　心圭
うは着に君をかこふ露霜　嵐雪
戀せずも花に若やぐ老だうな　荷兮
うら門付る垣の山吹　去來
ナ　米かすもかまはで通る蜆舟　集加
地藏を建し夢の浮橋　晋子
笄の制札うすき冬枯て　岩翁
ようはづれずに寐たる木枕　轍士
天井をけはなして置座敷鞠　尺中
みな刈込や里の夏物　荷兮
秋の蚊のばら／＼出し八ッ下リ　横几
あつさは殘る馬の腹掛　心圭
錢形の竹つるしたる軒の月　嵐雪

きるもの着よと母のせわやく　野童
打れたる瘤は付屬の證據なり　岩翁
さながら風を薄墨の竹　風國
手分して赤飯くばる大井殿　集加
おかしくあたる百姓の弓　晋子
口の色に心さだまる鐘樓守　轍士
行脚の笠に袋して置　尺中
河風にわろき諷(うたひ)をはりあげて　心圭
新大橋の富士もよく成　去來
なつかしや切干下す尾張宿　荷兮
むしろに書た賤の手質(ウクギ)　重勝
外しらぬ琴を悲しむ花の前　桃隣
艸芳しき信の交り　横几

此一帖者於落柿舍書校合決

井づゝや
寺町二條　重勝　判

追加

於義仲寺六七日

花鳥にせがまれ盡す冬木立　惟然
藥の紙の霜にしぼるゝ　正秀
隅〳〵に火鉢の炭をかた寄せて　臥高
明日の天氣を亭主請(うけ)とる　探芝
月影に綿抱(かゝ)へこむ柿ぶくろ　昌房
かしらにつれて揃ふむしの音　游刀
茸狩りはこそり〳〵と道かへて　丈艸
庄屋の觸にたのむ代判　執筆
角鍔は今にかゝさぬ家中風　胡故
なまり詞に國の名物　直愚上人
もや柴でひつしと構ふ雪さくみ　尼智月
老ぬるねこの痩はてゝなく　惟然
惠(ゑ)心(しん)佛(ぶつ)守て出たつ秋の旅　正秀
前に當たは鹿兒島の月　臥高
朝霧に繪の具の箱の蓋あけて　昌房
茶を精出してはこぶ弟　游刀

とつくりと花に夕日の入すまし　丈艸
　つゝじの株にひかる山どり　胡故
鍬打に隣つれ立はるの風　直愚上人
　芝居太鼓の拍子ぬけする　魚光
むづかしき思案を無理に書破り　探芝
　物見あつめてはいる寐どころ　微房
塀うらに波のよせくる家づたひ　川支
　若衆の髪に氣を付てやる　丈艸
照月を海老名の陣に参る也　乙州
　秋の小草にまじる隈ざゝ　曲翠
うれしがる障子の下のにごり酒　臥高
　砂鉢の鮨は双六のかけ　蘇葉
相合の鑓を持せる道奉行　牝玄
　奇麗にはるゝ雨の卯の花　關阿
立ならぶ蛤ふみのものおもひ　胡故
　きのふの事を三味線にひく　惟然
いりロのめつたに多き門徒でら　這萃
　なじまぬうちはつなぐ庭鳥　朴吹

こつそりと散て仕廻し花の跡　曲翠
　むく〳〵あくる芝のかげろふ　昌房

歌仙滿座訃音之吟

肩うちし手ごゝろに泣こたつ哉　美濃大垣 竹戸
此悔や臍の緒切てけさの霜　荊口
冬の蝶存きられぬわかれかな　斜嶺
寒牡丹櫞に添るなげき哉　文鳥
燭消て闇に成けり冬ごもり　怒風
蓑むしも木に離れたる落葉哉　殘香
あら土の墓もはかなや霜ばしら　胡風
草鞋の跡なつかしや勢田の霜　黄逸
冬ごもり飯にうへたるたうとさよ　朱迪
文あけて氷る涙や人の透　里東
泣入て加減の逢ふ寒さかな　野徑
雫霙いつをなみだのとめどころ　蘇葉
蓮の葉の枯れて甲斐なき泪哉　支幽

請る手に俤見へよ墓の霜　竹官

木がらしに便りも遠き手むけ哉　裾道

切石をなでゝ泣けり今朝の雪　尼教清

十方なき泪や枯るゝ柳かげ　柯山

月代をそらでも寒し塚の前　及肩

今朝はゝや霜や置そふ頭陀袋　鳩枝

霜月十六日芭蕉翁三十五日
於義仲寺興行

墓近く蓮の香を持ッ氷かな　桃隣

たてゝはあくる冬の柴の戸　智月

跡先に寐に来る鳩の待つれて　正秀

四句目より略之

書林
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛
板行

通説

芭蕉時代の俳者の殷盛であつた事は、作家として芭蕉が擢んでゝゐたといふのみでなく、有爲の俳士が濟々として綺羅星の如く列つてゐた事にある。しかも、其群星は、てん〴〵ばら〳〵に進行するものではなくて、芭蕉といふ恒星の一系の中にあつて輝いてゐたのである。芭蕉は又、群星の夫々を運動せしめながら、之を引率して亂れしめぬ力をもつた所に其大いさがあつたのである。だから、芭蕉一人の作のみを研究したのでは、芭蕉時代の俳諧文學は解らない、從て又、芭蕉一人の事も解らない。『芭蕉一代集』の次に、『蕉門俳諧』の前後二集を以て、同系の星譜を知るに便した所以である。

『芭蕉一代集』に、芭蕉の「我」が出てゐるとしたならば、其の「小さな我」を沒したる上の「大きな我」の出てゐるものが、此の『蕉門俳諧前後兩集』だとも云へる。芭蕉は、生前に自分一人の集を作るといふことをしなかつた、それは名聞に類する事として好まなかつたらしくもある。その芭蕉が同門の集を出すといふ事に於ては、實に努めてゐる。其新風の黎明期をなしたる「虚栗」の跋には、「芭蕉洞桃青鼓舞書」と書いてゐる、此言葉には一種の興奮さへ感じられるではないか。所謂、集は單なる寄せ集めではない、一個々々の集積としての量を誇るものであつてはならない。其集を通して、其を一貫する所の精神、即ち一種の氣稟、趣味、又は主唱が出てゐなければならない。是等の集を見ると、其中にある作家がお互に研鑽し、攻究しつゝ、向上を期しあつた其心持にすばらしい熱量の籠つてゐる事が解る。其熱量からこそ、一つの時代を作る程の藝術精神が産れて來たのである。其意味で、芭蕉の俳諧藝術は一つ

の道だといふ事が出來る。

道は一人のものではない、萬人のものである。芭蕉の藝術が芭蕉の一代に終らずして、其當時、又其後に幾萬の俳家を歩ましめてゐる其妙味は、之が道だからこそである。而して之が道であるとしたらば、俳諧の地上に唯一つしかないものではあるまい。然しながら、正しい道が幾本もある譯はない。歩むものは先づ正しい道を擇ばねばならぬ。若し、そこに正しい道がないならば、荊棘を切拓いても之を作らなければならない。芭蕉及び其一門の人々の努力は、此の新しい道の開鑿にあつた。彼等が新しい道、其故に正しい道といふ強い自信を抱いてゐた事は當然だと思ふ。芭蕉自身が「正風」と稱したものではないとしても、さういふべき氣持があつた事は想像されると思ふ。芭蕉が集を以て、その俳風を宣揚するに意を用ひた事、其故に、集を作る事を猥りにせずして、一集出づる毎に、一風起るといふ觀をなさしめた事、いや、しぜんに一風の釀される所あるが故に、一集の出でざるを得ないといふ事は充分に察せられるのである。

すべて、内に醱酵する所あつて自由なる發想を求むる時には、外に堅く固着せる形式に對して表現の苦惱を感じざるを得ない。その苦惱が言葉にあらはれては自ら拮屈なる調子とならざるを得ない。「武藏曲」に、又「虚栗」に於て味はれる氣持が其である。然しながら、其苦惱が或る突破をなしえたといふ快感に代つて、其快感のまゝに一種の反動的なる放縱に遊ぶといふ事は危險である。それは在來の形式を越えたといふ新奇の感じ、即ち、やはり外的意識を喜んで、内在的な心を忘れる事になりがちだからである。其點から、「虚栗」の新しがる句風が一變して、「冬の日」の自然の氣持に歸つた事は、實に正しい道を得たものだといふべきである。「冬の日」は新奇を衒はないでゐて、その中に新鮮なる味が籠つてゐる。「平常心是道」といふ。道は平常自然の心の中にある。道は歩みである、歩みであるが故に

自然に移らざるを得ない、此移りが新しみでもある。「冬の日」は決して一日にして出來たものではなく、そこに達する迄に幾段の黎明期を經たのではあるが、兎も角、「冬の日」に到つて、芭蕉の俳諧藝術が正しい第一歩を踏しめたとは云へる。此「冬の日」を以て、所謂「芭蕉七部集」の第一集とする所以もうなづかれる。第二集としては「春の日」、此中に普く傳唱されてゐる

古池や蛙飛び込む水の音　　芭蕉

の句がある。池の中に蛙が飛込む音、實にありふれた尋常の光景であつて、しかも、たゞごとでないといふ此の微妙なる消息こそ、芭蕉が新しく看取したる詩の心なのである。第三集「曠野」は、作家を廣い範圍に求め、敢て芭蕉一門に限らない、勿論、選者の批評眼から見て可とするものを採つたので、之も亦芭蕉一派の俳風を宣揚する目的ではあらうけれども、其選抄の標準は高嚴とは云ひ難い。若し、甚しく秕稗を交へたものを以て其風と見らるゝならば、道の聖さを濆すものと云はれない事もない。芭蕉は此集に對して稍不滿足であつたらしくもある。第四集「ひさご」を經て、第五集「猿蓑」に至つて、芭蕉等の藝術は一つの高原に達し、其道は實に廣く、又、平らなものになつて來てゐる。「猿蓑」は去來、凡兆兩人の選となつてゐるが、芭蕉は監修者として指導をしてゐる。其角は此集に序して、「俳諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起すべき時なれや」といふてゐる。凡ての集の出版は、勿論其意氣込でなければはならないが、殊に「猿蓑」の選は愼重であつたと見える。此中にある其角の

此木戸や鎖のさされて冬の月

といふ句の「此木戸」といふ文字が版下にはつまつて書かれた爲め「柴戸」と讀まれたので、芭蕉は去來の許に急使を立てゝ「柴戸ではない、此木戸である、斯樣な佳い句に書寫の誤があつてはならない、開板したとても急いで改めねばならぬ」と注意したといふ事である。芭蕉の斯うした細心さも、道の爲といふ事を思へばこそである。

第六集「炭俵」は、猿蓑の重厚なる味とは違つて、輕快なる味に別趣の新しみを見出して來てゐる。「猿蓑」には大成の感じがあると共に、或行詰りもあるので、さらりと一轉化することも亦、しぜんの勢と云ふべきである。第七集「續猿蓑」は、芭蕉の沒後に出た。此七部の代表的の選集を以て、芭蕉の道が如何に開展しつゝ、眞實を深くして來たかといふ其經路がうかゞはれる譯である。芭蕉が土芳に語つた言葉として傳へる所に

翁曰く、萬代不易あり、一時の變化あり、其二に究る其本一なり、其一といふは風雅の誠なり、不易を知らざれば實に知るにあらず、不易といふは新古によらず、變化流行にもかゝはらず、まことによく立ちたる姿なり、代々の歌人の歌を見るに、代々其變化あり、又、新古にもわたらず、今見る所昔見しにかはらず、あはれなる歌多し、是先づ不易と心得べし、又、千變萬化するものは自然の理なり、變化にうつらざれば風あらたまらず、是に押うつらずといふは、一端流行に口質時をえたるばかりにて、其誠をせめざる故なり、せめず、心をこらさざるものの誠の變化を知ることなし、只人にあやかつて行くのみなり、せむるものは其地に足を据ゑがたく、一歩自然にすゝむ理なり、行末いく千變萬化するとも、假にも古人の涎をなむることなし、四時の押移るごとく物あらたまる、みな斯くのごとし

とある。所謂、流行不易の說も此言葉に盡きてゐる。それが自然の大本と通じたる不易の生命をもつてゐるが故に道である。しかも、自然の移るが如く流れ行きて澱まぬ所に、道の道たる所以がある。芭蕉以前の俳諧には、たゞ「掟」があつた、其「掟」から逸出したる異端者があつた、而して道はなかつたのである。俳諧文學は芭蕉に於て正しい出發點を得たのだと、私が前卷に云ふたのは此意味である。その中に、私は又、「連衆に於ける親和力」といふ事を述べ「連句は和するもの、己を忘れるもの、自と他との隔てを去つて一つの俳諧世界に共生するもの」だと云つた。其心持

は、俳句の場合に於ても、それが自分達の道の爲にといふ意識を以て、やはり出て來る。かういふ話がある。善光寺如來が京の眞如堂に遷座された時、去來が　ひいやりと野山にみつる念佛かな　といふ句を作つた。其を芭蕉は「かういふ句は全體おとなしく仕立てるものだ」と云つて、上五「ひいやりと」を「風かをる」と改めた。所が「猿蓑」選の時、それでもまだいけないと云つて　すゞしさの野山にみつる念佛かな　として集に加へしめた。又、「猿蓑」に載つてゐる　田のへりの豆つたひゆく螢かな　萬乎　といふ句は、最初、凡兆の着想であつたが、「猿蓑」の選者たる凡兆自身が「此句見る所なし」と云つて捨てたのを、芭蕉が「それならば自分が拾はう、さひはひ萬乎の句に是に似たのがあるから自分が直して其としよう」と云つて、入選せしめたと云ふ事である。斯樣に、芭蕉の心が門下の人々の心の中にはいつてゐる。門下の人々の心が芭蕉に依つて正しく生かされたといつても好い。同じ道を行くものは其心までが一つになる。而して、一つの新しい正しい道を立てる爲に、彼等は心を一つに協せてゆく。或點まで、彼等が各自の「個」を沒してゆくといふ氣持には、小さな「我」を捨てゝ、更に大きな「我」に生きようとする意志があるからである。

芭蕉の藝術は芭蕉の人だ、といふ事を私は前卷に語つた。それは芭蕉一人の事ではない。すべて、俳諧文學の向ふ所は、製作其物よりも、寧ろ其心境を尙ぶ、佳作を成すよりも佳秀を產むべき心を作る事が大切である。さうした各人の希求がしぜんに合して、相共に精進をしようとはげむ所に、一つの道が開かれる譯である。「修行」といふ言葉は彼等の間に好く用ひられた所である。之は佛教に於て云ふ所の「聖道門」の修行にも似てゐる。けれども、向ふに理想を置いて、そこに達しようと修練をするのではなくて、內に自から發する所のものを正しく生長さして行かうとする、そこが、宗教とは違つて、やはり藝術たる所以である。理智や抽象や觀念ではない、どこまでも、感情であり其

體であり生活であつて、卽ち、各自の人であつて、其人として生きる喜びを自然の心の中に求める所に、俳諧の道は存するのである。

さて、其の俳諧の道が如何に開拓され、如何に護持せられたか。それは、私がこゝに解說するよりも、此集に目をさらさるゝ諸君が看取せらるゝまゝに任さう。芭蕉が臨終の數日前に、「所思」と題して

此道や行く人なしに秋の暮

と詠じた。その「此道」とは、たゞ眼前の秋景を指したものであるか、或は彼が一生の心血をそゝいだ所の俳諧の道を指したものであるか、それも諸君の判斷に任して置かう。いづれは、此の次々に出る卷が其解釋に當るものともなるのである。（荻原井泉水）

日本俳書大系　第二卷　終

大正十五年七月五日印刷
大正十五年七月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（2）

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社内
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手 二一二四 二二二四

